

平成24年度文化庁委託事業

諸外国のアーティスト・イン・レジデンスについての調査研究事業
報告書

平成25年3月
株式会社ニッセイ基礎研究所

◎ はじめに

この報告書は、株式会社ニッセイ基礎研究所が文化庁の委託を受けて実施した「諸外国のアーティスト・イン・レジデンスについての調査研究事業」の成果をとりまとめたものである。

アーティストやキュレーター等が一定期間滞在し、創作活動やリサーチ、地域交流プログラムなどに取り組むアーティスト・イン・レジデンスは、日本では1990年代初頭に始まった。しかし、その多くは依然として発展途上にあり、文化庁では2011年度から、それらを支援する「文化芸術の海外発信拠点形成事業」を開始した。本調査研究は、そうした背景を踏まえ、諸外国の代表的なアーティスト・イン・レジデンスの事業や運営の実態、それらを支えるファンドやグラント、ネットワーク機構を調査し、日本のアーティスト・イン・レジデンスの方向性や望ましい在り方を検討することを目的に実施されたものである。

調査の結果、諸外国の代表的なアーティスト・イン・レジデンスは、アーティストの創作活動やキャリアアップの専門的な施設・機関として、国内外から多くのアーティストやクリエイターを受け入れ、ビエンナーレやアートフェア、美術館やギャラリー、舞台芸術フェスティバルなどでの作品発表に結びつける拠点的な機能を果たしていることが明らかとなった。またそれらを支えるため、国や地方公共団体などの公的な機関が積極的な支援を行い、国際的なネットワーク組織は、アーティストのみならずアーティスト・イン・レジデンスを運営する機関にとっても、重要な役割を担っている。

ともすると、アーティスト個人の活動を支えることは地味で、短期的な成果を望むことは難しいが、アーティスト・イン・レジデンスは、あらゆる芸術活動、芸術作品の創造の原点を支えるばかりか、国際的な文化発信と相互理解の促進、地域の活力創出、日本の国際的プレゼンスの向上など、文化政策の面でも多様な成果が期待できることも、本調査研究によって明確となった。

そうした意味で、来年度3年目を迎える文化庁の「文化芸術の海外発信拠点形成事業」は日本の文化政策にとって重要な試金石となるもので、アーティスト・イン・レジデンスの定着とさらなる発展に向けて、関係者のより積極的な取り組みが期待される。

末筆ではあるが、今回、本調査研究の貴重な機会を与えられた文化庁、調査の実施やとりまとめについて多大なるご助言をいただいたアドバイザー会議の委員の方々、そして忙しい中、調査研究に快く応じてくださった国内外のアーティスト・イン・レジデンスやアーティストの方々に心より感謝申し上げますとともに、本報告書が、今後の日本の文化政策の進展や国内外のアーティストの芸術活動の拡充に有効に活用されることを切に願うものである。

2013年3月

株式会社ニッセイ基礎研究所

目次

序章 調査研究の目的と内容、報告書の構成等

第1部 日本のアーティスト・イン・レジデンスの今後の在り方に係る方向性

[A. 調査研究の総括的まとめ]

1. アーティスト・イン・レジデンスは多様で普遍的な価値に通じている…………… 3
2. アーティスト・イン・レジデンスは芸術の生態系を支える重要なインフラである…………… 4
3. アーティスト・イン・レジデンスは多面的、多元的な効果・成果をもたらす…………… 6
4. アーティスト・イン・レジデンスは中長期的な時間軸の中でより大きなインパクトを生み出していく…………… 8
5. アーティスト・イン・レジデンスの多様なモデル～AIR 設立背景やミッションから…………… 10
6. アーティスト・イン・レジデンスが提供するものと期待される成果～時代による変遷…………… 12
7. 文化政策におけるアーティスト・イン・レジデンスのポテンシャル…………… 13

[A. General Summary]

1. Artist-in-residence programs are diverse, but they all embrace values that are universal and fundamental. …………… E-3
2. Artist-in-residence programs play an important role in supporting the eco-system of arts and culture. …………… E-4
3. Artist-in-residence programs have multilateral and multifaceted impact. …………… E-6
4. Artist-in-residence programs have greater impact in the mid- to long- term. …………… E-8
5. Artist-in-residence programs come in different shapes and forms; different founding principles and missions generate a diverse range of models. …………… E-10
6. The effects of artist-in-residence programs evolve with the times. …………… E-12
7. Artist-in-residence programs have the potential to play an important role in cultural policy. …………… E-13

[B. アーティスト・イン・レジデンスのさらなる充実と発展に向けて]

1. アーティスト・イン・レジデンスの社会的意義と役割…………… 20
 - (1) 文化芸術の振興…………… 20
 - (2) 文化芸術による相互理解と国際交流…………… 23
 - (3) 地域活力の創出と産業振興…………… 25
2. 望ましいプログラムや運営、施設の内容と方向性…………… 29

(1) レジデンス事業の方向性と施設の内容	29
(2) アーティストの選考や支援の内容・方法	31
(3) プログラムの多様性や展開の可能性	34
3. アーティスト・イン・レジデンスを支える仕組み	38
(1) 運営基盤(運営組織、運営財源)の拡充	38
(2) アーティスト・イン・レジデンスを支えるファンド、グラント	41
(3) ネットワークの構築による支援と底上げ	44
(4) アーティスト・イン・レジデンスのプレゼンスの向上	47

第2部 諸外国の代表的なアーティスト・イン・レジデンス等に係る調査

1. 調査対象の選定方法	53
2. 調査対象の概要	53
[A. 英国]	
(1) デルフィナ財団	71
(2) ガスワークス	78
[B. ドイツ]	
(1) アカデミー・シュロス・ソリテュード	85
(2) キュンストラーハウス・ベターニエン	92
(3) パクト・ツォルフライン	100
(4) ノード・センター・フォー・キュラトリアル・スタディーズ	106
[C. フランス]	
(1) シテ・アンテルナショナル・デ・ザール	113
(2) レコレ・国際受入・交流センター	122
(3) レ・シュブジスタンス	128
(4) リヨン・ビエンナーレ	135
[D. オランダ]	
(1) ライクスアカデミー(国立美術アカデミー)	145
(2) デ・アペル・アーツセンター	152
(3) サンデーモーニング・アット・イーケーダブリューシー	157

[E. ベルギー]

- (1) カーイシアター 165
- (2) ワークスペースブリュッセル 171
- (3) ウィールズ 179

[F. 米国]

- (1) インターナショナル・スタジオ&キュラトリアル・プログラム 185
- (2) エイペックスアート..... 195

[G. カナダ]

- (1) プリム..... 205
- (2) パンプセンター 210

[H. 中国]

- (1) レッドゲート・ギャラリー / レッドゲート・レジデンスプログラム..... 229
- (2) 三影堂 撮影芸術中心 232
- (3) プラットフォーム・チャイナ/北京インターナショナル・アーティスト・プラットフォーム 236
- (4) アローファクトリー 箭厂空间 239
- (5) ビタミン・クリエイティブ・スペース / パビリオン 242

[I. 韓国]

- (1) ソウル芸術文化財団 / ソウル市創作空間 247
- (2) 創作空間事業団 衿川(クンチョン)芸術工場..... 254
- (3) 創作空間事業団 文來(ムンレ)芸術工場..... 260
- (4) 仁川アートプラットフォーム 267

[J. シンガポール]

- (1) サブステーション 277
- (2) シアターワークス 286
- (3) シンガポール・タイラー・プリント・インスティテュート..... 294
- (4) オブジェクティブス..... 299

[K. オーストラリア]

- (1) ガートロード・コンテンポラリー 307
- (2) アートスペース..... 312

(3) パフォーマンス・スペース.....	319
(4) アジアリンク・アーツ.....	324

第3部 アーティスト・イン・レジデンスの国際ネットワークに係る調査

1. 国際ネットワーク組織の現状と傾向	331
2. 日本のネットワーク組織の現状と課題.....	333
3. 日本におけるネットワークの必要性和設立に向けた課題	335
4. 諸外国及び日本の主要な国際ネットワーク組織の一覧表	337

[国際ネットワークの事例]

(1) レズ・アルティス.....	343
(2) トランス・アーティスト.....	348

第4部 各国のアーティストの海外派遣・研修に係るファンド・グラントに係る調査

1. 諸外国の主要なファンド・グラントの現状と傾向	357
2. 諸外国の主要なファンド・グラントの一覧.....	361

[ファンド・グラントの事例]

(1) モンドリアン・フォonz	376
(2) アジアン・カルチュラル・カウnzシル	383
(3) ケベック・アーツカウnzシル	388

第5部 日本のアーティスト・イン・レジデンスに関する調査

1. 現状や課題に関する整理・分析.....	399
------------------------	-----

序章 調査研究の目的と内容、報告書の構成等

1. 調査研究の目的

文化庁では、2011年にアーティスト・研究者等が滞在型創作・研究活動を行うアーティスト・イン・レジデンスを対象に、「文化芸術の海外発信拠点形成事業」を開始した。この事業では、アーティスト等の創作・交流の拠点となるアーティスト・イン・レジデンスへの支援を通して、我が国に文化芸術の国際的な創造・発信の拠点形成を図ることを目的としている。

我が国でアーティスト・イン・レジデンスが始まったのは1990年代と言われており、それから約20年が経過したが、その名称が国民にはほとんど認知されておらず、芸術関係者の間においても必ずしも高い認知を得ているとは言えないのが現状である。

また、国内のアーティスト・イン・レジデンス実施機関の多くは、その規模、内容、運営の在り方等について、依然として発展途上の段階にあり、各機関が国際的拠点形成に向けてどのような方向を目指すべきか、また、その支援の在り方について検討を行う必要がある。

そこで、欧米をはじめとしたアーティスト・イン・レジデンスの先進的な事例、並びにそれらを支えるファンドやグラント、ネットワーク機構を調査し、各国の特徴的かつ参考となる取り組みを把握するとともに、日本の現状との比較を通して、アーティスト・イン・レジデンスの望ましい在り方について検討し、当事業の今後の改善や充実を図ることを目的として、本調査研究を実施した。

あわせて、本調査研究では、諸外国のアーティスト・イン・レジデンスに関する情報を収集することにより、我が国のアーティスト・研究者等が海外における活動を行うための参照情報の提供も行うこととした。

2. 調査研究の内容

◎ 本調査研究で対象とするアーティスト・イン・レジデンスについて

本調査研究の対象とするアーティスト・イン・レジデンスは原則として次の要件を満たすものとした。

アーティストや研究者、キュレーター（以下、アーティスト等）が滞在し、創作活動や研究活動ができるスタジオ

オ、アトリエ、宿泊・滞在施設等を備えた機関や施設で、自ら国内外のアーティスト等を公募や推薦、指名などの方法で選考・招へいし、日常的な環境から開放して創作活動や研究活動に専念するための環境や機会を提供し、スペースや資金、物資、情報提供など、専門的な支援を行う機関や施設。

なお、芸術の分野は限定せず、アーティスト等の創作活動や研究活動の支援に加え、オープン・スタジオやワーク・イン・プロGRESS（舞台芸術作品の創作過程で行われる試演）、公演や展覧会、ワークショップやレクチャーなどの活動を行うアーティスト・イン・レジデンスを積極的に取り扱うこととした。

(1) 諸外国の代表的なアーティスト・イン・レジデンス等に係る調査（海外AIR調査）

① 調査対象の選定

諸外国の代表的なアーティスト・イン・レジデンスに関する情報収集と、現地訪問調査の対象機関の選定は、以下の3つのステップによって実施した。なお、調査対象国は次の11ヶ国とした。

- ヨーロッパ（英国、フランス、ドイツ、オランダ、ベルギー）
- 北米（米国、カナダ）
- アジア（中国、韓国、シンガポール）
- オセアニア（オーストラリア）

○ STEP1: 調査候補一次リストの作成

国際的なネットワーク組織など、ウェブサイト上でアーティスト・イン・レジデンスの情報の収集・提供を行っている信頼性の高いポータルサイト、並びに既存文献・資料の掲載情報に基づいて、調査対象国のアーティスト・イン・レジデンスの調査候補一次リスト（263件）を作成した。

一次リストは、海外のアーティスト・イン・レジデンスへの参加を検討するアーティスト等の参考となるよう、対象分野、支援内容がわかるよう整理し、報告書[資料編]に掲載した。

参照したポータルサイト、文献資料は次のとおりである。

[ポータルサイト]

- レズ・アルティス
<http://www.resartis.org/en/>
- カルチャー360°
<http://culture360.org/>
- オン・ザ・ムーブ
<http://on-the-move.org/>

[文献資料]

- 美術出版社『美術手帳』2005年9月／1998年3月
- サムワーズガーデン『世界の、アーティスト・イン・レジデンスから』2009年12月
- BankART1929『アートイニシアティブ〜リレーする構造〜』2010年3月
- 国際交流基金『オルタナティブスーアジアのアートスペースガイド』2004年11月

○ STEP2: 調査候補二次リストの作成

一次リストから、本調査研究の対象としたアーティスト・イン・レジデンス事業に該当しないもの(施設提供のみを行うタイプ)を除外し、調査候補129件からなる二次リストを作成した。二次リストで選定されたアーティスト・イン・レジデンスを対象に、「②諸外国の主要なアーティスト・イン・レジデンスに関するデータ集の作成」を行った。

○ STEP3: 現地訪問調査候補の選定

調査候補二次リストをベースに、後述のアドバイザー会議において、調査対象とすべきアーティスト・イン・レジデンスに関する助言を得た上で、文化庁国際課と協議を行い、対象とする芸術分野、注目すべき特性、地域バランスなどを考慮して、現地訪問とインタビュー調査を行うアーティスト・イン・レジデンスを選定した。

調査行程を設定した際に、訪問都市で調査に加える方が望ましいと思われるアーティスト・イン・レジデンスも日程の許す範囲で加えた結果、現地訪問調査を実施したアーティスト・イン・レジデンスは37件となった。

なお、調査対象の選定に際しては、舞台芸術分野のアーティスト・イン・レジデンス、フェスティバルやビエンナーレの一環として開催されているものも考慮した。

② 諸外国の主要なアーティスト・イン・レジデンスに関

するデータ集の作成(資料編「第3部」に掲載)

「①調査対象の選定」過程で作成した二次リストのアーティスト・イン・レジデンスについて、各機関のインターネット掲載情報や既存資料から、次の基礎情報を調査・把握し、諸外国の主要なアーティスト・イン・レジデンスのデータ集を作成した。ただし、二次リストに掲載されたものでも、インターネットで十分な情報が得られなかった一部の事例については、データ集の作成を見送ったものがあるため、掲載件数は96件となった。

- レジデンス事業の概要(主な対象分野、招へい人数、受入期間、レジデンス事業の内容、受入条件)
- 募集方法(公募／その他)
- 支援内容(渡航費助成、滞在費助成、成果発表・オープン・スタジオ、制作費助成、人的サポート、記録集、その他の支援)
- 施設構成・内容(制作スタジオ、展示スペース、宿泊施設、その他、周辺環境)
- 運営機関概要(URL、事業開始年、組織の目的・ミッション、事業実績／成果、所在地、電話、FAX、Email)

③ 現地訪問調査

「①調査対象の選定」で選定した37件の諸外国の代表的なアーティスト・イン・レジデンスを対象に、現地訪問調査を実施し、運営者責任者及び可能な範囲内で滞在アーティストへのインタビュー調査を実施した。調査対象とインタビュー調査項目は以下のとおりである。

[現地訪問調査をしたアーティスト・イン・レジデンス]

* 報告書の文中では原則として日本語名で記載することとし、略称を使用したものについては括弧内に記載した。また、国名を略する場合は括弧内の表記を用いた。

◎英国(英)

- デルフィナ財団 | Delfina Foundation
- ガスワークス | Gasworks

◎ドイツ(独)

- アカデミー・シュロス・ソリチュード(アカデミー・ソリチュード) | Akademie Schloss Solitude
- キュンストラウハウス・ベターニエン(ベターニエン) | Künstlerhaus Bethanien

- パクト・ツォルフライン (PACT) | PACT Zollverein
- ノード・センター・フォー・キュラトリアル・スタディーズ (ノード・センター) | Node Center For Curatorial Studies

◎フランス(仏)

- シテ・アンテルナショナル・デ・ザール(シテ・デ・ザール) | Cité internationale des Art
- レコレ国際受入・交流センター(レコレ) | Centre international d'accueil et d'échanges des Récollets
- レ・シュブジスタンス(シュブジスタンス) | Les Substances
- リヨン・ビエンナーレ | La Biennale de Lyon

◎オランダ(蘭)

- ライクスアカデミー(国立美術アカデミー) | Rijksakademie van Bleedende Kunsten
- デ・アペル・アーツセンター(デ・アペル) | De Appel Arts Centre
- サンデーモーニング・アット・イーケーダブリュシー(サンデーモーニング) | sundaymorning@ekwc

◎ベルギー(ベ)

- カーイシアター | Kaaitheater
- ワークスペースブリュッセル | workspacebrussels
- ウィールズ | WIELS

◎米国(米)

- インターナショナル・スタジオ&キュラトリアル・プログラム (ISCP) | International Studio & Curatorial Program
- エイペックスアート | apexart

◎カナダ(加)

- プリム (PRIM) | PRIM: Productions Réalisations Indépendantes de Montréal
- バンフセンター | The Banff Centre

◎中国(中)

- レッドゲート・ギャラリー/レッドゲート・レジデンス | Red Gate Gallery / Red Gate Residency
- 三影堂 撮影芸術中心 | Three Shadows Photography Art Centre
- プラットフォーム・チャイナ/北京インターナショナル・アーティスト・プラットフォーム | Platform China / Beijing International Artist Platform

- アローファクトリー 箭厂空间 | Arrow Factory
- ビタミン・クリエイティブ・スペース/パビリオン | Vitamin Creative Space / The Pavilion

◎韓国(韓)

- ソウル芸術文化財団 / ソウル市創作空間 | Seoul Foundation for Arts and Culture / Seoul Art Space
- 創作空間事業団 衿川(クンチョン)芸術工場(クンチョン芸術工場) | Seoul Art Space_Geumcheon
- 創作空間事業団 文来(ムンレ)芸術工場(ムンレ芸術工場) | Seoul Art Space_Mullae
- 仁川アートプラットホーム | Incheon Art Platform

◎シンガポール(シ)

- サブステーション | The Substation
- シアターワークス | TheatreWorks
- シンガポール・タイラー・プリント・インスティテュート (STPI) | Singapore Tyler Print Institute
- オブジェクティフス | Objectifs

◎オーストラリア(豪)

- ガートルード・コンテンポラリー (ガートルード) | Gertrude Contemporary
- アートスペース | Artspace
- パフォーマンス・スペース | Performance Space
- アジアリンク・アーツ (アジアリンク) | Asialink Arts

[運営者に対するインタビュー調査項目]

- 運営機関の概要(設立趣旨・経緯、アーティスト・イン・レジデンス以外の事業・施設の概要)
- アーティスト・イン・レジデンスのプログラム内容(趣旨・目的、アーティストの募集・選考方法、アーティストの条件、対象とする芸術分野、受入時期・期間、支援内容、オープン・スタジオや成果発表の有無、ワークショップ、レクチャーの有無等)
- アーティスト・イン・レジデンスの実績(これまでの応募者数、滞在者数、出身国、芸術分野、過去に滞在したアーティスト、キュレーター等)
- 施設の構成と内容(スタジオ等の創作スペース、宿泊・滞在施設、施設の所有形態、施設構成、各施設の特徴・設備、規模等)
- 運営体制(運営主体の法人形態、スタッフの数・体制・雇用形態、ディレクター・コーディネーターの略

歴、他の芸術関係機関等との連携状況、国際ネットワーク組織への加盟状況)

- 事業収支(収入の内訳・財源、支出の内訳、運営団体やアーティストに資金提供しているファンドやグラント)
- 事業評価の実施状況(事業評価実施の有無、評価方法、過去に滞在したアーティストのフォローアップの実施状況)
- 現在の課題と今後の方向性(現在の問題点、課題、今後の戦略や方向性)
- 日本のアーティスト・イン・レジデンスについて(連携の可能性、日本のアーティストの海外派遣や国際交流活動を促進するための助言)

[滞在アーティスト等に対するインタビュー調査項目]

- 滞在中のアーティストの略歴、受賞歴、過去の展覧会や公演などの活動実績
- 当該アーティスト・イン・レジデンスに参加した動機、選定理由、事前の情報収集の方法
- これまでのアーティスト・イン・レジデンスへの参加経験、望ましい支援の内容など
- 日本のアーティスト・イン・レジデンスについて(参加経験の有無、参加の意向など)

(2) アーティスト・イン・レジデンスの国際ネットワークに係る調査(国際ネットワーク調査)

アーティスト・イン・レジデンスの国際ネットワーク15件(内6件は日本国内のネットワーク)について、インターネット掲載情報に基づいて情報の収集・整理を行った。その内、レズ・アルティスについては会長のマリオ・カロ氏への書面インタビューを、トランス・アーティストについては「(1) 諸外国の代表的なアーティスト・イン・レジデンス等に係る調査」でアムステルダムを訪問した際にインタビュー調査をそれぞれ実施し、調査レポートを作成した。

また、アジアリンク・アーツとアーツ・ネットワーク・アジアについては、「(1) 諸外国の代表的なアーティスト・イン・レジデンス等に係る調査」の一環としてインタビュー調査を実施し(アーツ・ネットワーク・アジアについてはシアターワークスへのインタビュー調査の一環として実

施)、報告書「第2部」に調査レポートを掲載した。

国際ネットワークの調査対象、調査項目は次のとおりで、調査結果から、アーティスト・イン・レジデンスの国際ネットワーク組織に関する現状と傾向を分析・整理した。

① 調査対象

*印はインタビュー調査を行ったネットワーク組織

- レズ・アルティス | Res Artis(蘭) *
- トランス・アーティスト | Trans Artists(蘭) *
- オン・ザ・ムーブ | On the Move(ベルギー)
- アーティスト・モビリティ | Artist Mobility(オーストリア)
- アーティスト・コミュニティ協会 | Alliance of Artists Communities(米)
- アジアリンク・アーツ | Asialink Arts(豪) *
- トライアングル・ネットワーク | Triangle Network(英)
- アーツ・ネットワーク・アジア | Arts Network Asia(シンガポール) *
- レジデンスias・エム・レッド | residencias_em_red(ブラジル)
- J-AIRネットワーク会議(日)
- AIR-J(日)
- マイクロレジデンスのネットワーク形成に向けた調査研究(MICRORESIDENCE! 2012)(日)
- Move arts Japan(日)
- 舞台制作者オープンネットワーク(ON-PAM)(日)
- アートNPOリンク(日)

② 調査項目

- 設立年／事務局所在都市／URL
- 会員制(会員数、会費等)
- 概要・特徴
- 日本の加盟団体名
- 運営組織
- 年間予算・財源

(3) 各国のアーティストの海外派遣・研修に係るファンド・グラントに係る調査(海外ファンド調査)

諸外国の代表的なアーティストの海外派遣・研修に係るファンド、グラントについて、インターネット検索や

既存資料に基づいて代表例を抽出し、それらのインターネット掲載情報から19件の概要を一覧表に整理した。さらに、それらの中からタイプの異なる3事例、モンドリアン・フォonz、アジア・カルチュラル・カウンシル、ケベック・アーツカウンシル、ソウル芸術文化財団、アーツ・ネットワーク・アジアについて、「(1) 諸外国の代表的なアーティスト・イン・レジデンス等に係る調査」とあわせ、現地訪問調査を実施して詳細を把握した。

なお、ソウル芸術文化財団は、クンチョン芸術工場、ムンレ芸術工場との関係が深いことから、また、アーツ・ネットワーク・アジアは事務局のシアターワークスがアーティスト・イン・レジデンスを運営していることから、「(1) 諸外国の代表的なアーティスト・イン・レジデンス等に係る調査」の中で調査レポートをとりまとめた。

調査対象機関、調査項目は次のとおりで、調査結果から、諸外国の主要なファンド、グラントの現状と傾向を分析・整理した。

① 調査対象

*印は現地訪問調査を行ったファンド・グラント

- アーツカウンシル・イングランド | Art Council England (英)
- ゲーテ・インスティトゥート | Goethe-Institut (独)
- アンスティチュ・フランス | Institut Française (仏)
- モンドリアン・フォonz | Mondriaan Fonds (蘭) *
- 国際ワロン・ブリュッセル | Wallonie-Bruxelles International (ベルギー)
- フランダース政府 | Flemish Government (ベルギー)
- プロ・ヘルヴェティア文化財団 | Pro Helvetia (スイス)
- イアスピス | IASPIS (スウェーデン)
- フィンランド芸術交流基金 | FRAME (フィンランド)
- アジアン・カルチュラル・カウンシル | Asian Cultural Council (米) *
- カナダ・アーツカウンシル | Canada Council for the Arts (加)
- ケベック・アーツカウンシル | Conseil des arts et des lettres du Québec (加) *
- 韓国アーツカウンシル | Arts Council Korea (韓)

- ソウル芸術文化財団 | Seoul Foundation Arts and Culture (韓) *
- シンガポール・アーツカウンシル | National Arts Council Singapore (シンガポール)
- アーツ・ネットワーク・アジア (シアターワークス) | Arts Network Asia (TheatreWorks) (シンガポール) *
- オーストラリア・アーツカウンシル | Australia Council for the Arts (豪)
- ユネスコ・アッシュェバーク奨学金 | The UNESCO-Aschberg Bursaries for Artists Programme (仏)
- ヨーロピアン・ペピニエール | European Pépinières (仏)

② 調査項目

*印は現地訪問調査を行ったファンド・グラントのみ

- 機関名
- 所在都市
- 機関属性／機関概要
- 主なグラント(名称、概要、提携機関)
- 所在地／連絡先／URL
- プログラムの内容と実績 *
- 運営体制と事業収支 *
- 事業評価の実施方法 *
- 現在の課題、今後の方向性 *

(4) 日本のアーティスト・イン・レジデンスに関する調査(国内AIR調査)

国際交流基金の協力を得て、まず、同基金が運営する日本のアーティスト・イン・レジデンスのポータルサイト「AIR-J」の掲載情報をダウンロードし、資料編1ページ以降に掲載されたデータ集の形式に整理した。その資料を各団体に送付し、内容を確認いただくとともに画像データの提供を依頼した。

その際に、各アーティスト・イン・レジデンスの現状や課題、今後の方向性等に関するアンケート調査を行い、「(5) 日本のアーティスト・イン・レジデンスの今後の在り方に係る方向性について」で実施した意見交換会(後述)の結果も参考にして、国内のアーティスト・イン・レジデンスの現状や課題を把握、整理した。

分析結果は報告書「第5部」に、日本のアーティスト・

イン・レジデンスのデータ集は資料編「第1部」に、アンケート調査及び意見交換会の意見集は資料編「第2部」にそれぞれ掲載した。

調査対象、データ集掲載項目、アンケート調査項目は以下のとおりである。

① 調査対象

調査は、文化庁「文化芸術の海外発信拠点形成事業」の採択事業、及び国際交流基金のアーティスト・イン・レジデンスのポータルサイトAIR-Jの掲載事業の65団体を対象に実施し、データ確認とアンケート調査に回答のあった次の49団体を最終的な調査対象とした。

◎北海道

- ICC+S-AIR 創造拠点交流事業

◎青森県

- 青森公立大学国際芸術センター青森
- 八戸ポータルミュージアム

◎茨城県

- アーカスプロジェクト2012いばらき
- 石彫千年の交感 アーティスト・イン・レジデンス 桜川

◎群馬県

- 中之条ビエンナーレ

◎東京都

- 3331 Open Residence
- レジデンス・イン・森下スタジオ ヴィジティング・フェロー
- 大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ「オーストラリア・ハウス」(開催地:新潟県)
- オーストラリア・カウンスル VACB東京スタジオ
- AAS Grow up!! Artist Project
- AITレジデンスプログラム
- トーキョーワンダーサイト青山:クリエイター・イン・レジデンス
- 遊工房アートスペース
- read (東アジア・ダイアログ・レジデンス)
- アートスタジオ五日市レジデンス事業

◎神奈川県

- 横浜市・成都市 アーティスト・イン・レジデンス交流事業

- BankART Studio NYK アーティスト・イン・スタジオ
- 「黄金バザール」国際アーティスト・イン・レジデンス
- 2013(平成25)年度川崎市市民ミュージアム・スタジオプログラムによる滞在制作

◎石川県

- CAAK & Kapo Creator in Residence
- トヨタ コレオグラフィアワード・受賞者のための金沢21世紀美術館レジデンシープログラム
- 公演のためのレジデンシープログラム

◎山梨県

- ARTIST IN RESIDENCE YAMANASHI [AIRY]
- CsSHE/木版画ラボ アーティスト・イン・レジデンス事業 水性木版画制作プログラム

◎岐阜県

- 美濃・紙の芸術村

◎静岡県

- 静岡市クリエイターズビレッジモデル事業「体験移住」
- クロード・レジ『室内』クリエイション

◎愛知県

- 瀬戸国際セラミック&ガラスアート交流プログラム(アーティスト・イン・レジデンス in 瀬戸)

◎三重県

- 生活体験レジデンス ゆうがく邸

◎滋賀県

- 滋賀県立陶芸の森 アーティスト・イン・レジデンス事業

◎京都府

- 京都芸術センター アーティスト・イン・レジデンスプログラム
- JCDN 国際ダンス・イン・レジデンス・エクスチェンジ・プロジェクト
- AIR南山城村

◎大阪府

- 近代化産業遺産を活用したアートスペースによる国際連携プログラム
- Artist In Residence OSAKA(アーティストインレジデンス大阪/AIR大阪)

◎兵庫県

- DANCE BOX

◎奈良県

- 飛鳥 Art Village

◎岡山県

- ARKO (Artist in Residence Kurashiki, Ohara)

◎山口県

- 秋吉台国際芸術村

◎徳島県

- 神山アーティスト・イン・レジデンス (KAIR)

◎香川県

- アート・ビオトープ小豆島公募プログラム

◎高知県

- 舞台芸術レジデンス・プログラム from高知 and 横浜2012

◎福岡県

- 現代美術センターCCA北九州 (リサーチ・プログラム事業)
- 福岡アジア美術館 美術作家・研究者・学芸員等招聘事業
- 紺屋2023
- Artist in Residence Studio Kura

◎大分県

- KASHIMA 2013 vol.1/2 BEPPU ARTIST IN RESIDENCE

◎その他(移動型AIR)

- ART11号

② データ集掲載項目

- レジデンス事業の概要(対象分野、招へい人数、招へい期間、募集期間、受入条件)
- 応募方法、選考方法
- 支援内容(渡航費助成、滞在費助成、制作費助成、成果発表・オープンスタジオ、人的サポート、記録集、その他)
- 運営組織概要(団体名、URL、事業開始年、所在地、電話、FAX、Email、事業目的、事業内容、事業実績／成果、招へいアーティスト)
- 施設構成・内容(制作スタジオ、展示スペース、宿泊施設、その他、交通アクセス、周辺環境)
- 画像

③ アンケート調査項目

- 事業の成果、評価の視点
- AIR運営上の現在の問題点や課題
- 今後、AIRの一環として取り組みたい事業や活動
- 日本やアジア地域のネットワーク構築や連携
- 日本におけるAIRの社会的意義
- 日本のAIRを活発化するために必要だと思われること

(5) 日本のアーティスト・イン・レジデンスの今後の在り方に係る方向性について

(1)から(4)までの調査結果を踏まえた上で、日本のアーティスト・イン・レジデンスの今後の方向性を検討するため、日本の主要なアーティスト・イン・レジデンスの運営責任者による意見交換会(参加者は後述)、本調査研究のアドバイザー会議(委員は後述)のブレインストーミングを実施した。

その結果、並びに(1)から(4)までの調査結果や具体例を参照しながら、「B. アーティスト・イン・レジデンスのさらなる充実と発展に向けて」では、①から③の3つの視点に基づいて、今後の日本のアーティスト・イン・レジデンスのあるべき姿や方向性、それを実現するための課題などを分析・整理した。

その上で、図解を活用しながら「A. 調査研究の総括的まとめ」を行った。

なお、「B. アーティスト・イン・レジデンスのさらなる充実と発展に向けて」については、要点を枠内に整理し、調査結果に基づいた解説を行った上で、海外AIR調査、国際ネットワーク調査、海外ファンド調査の中から、当該項目に参考となる事例を抽出、掲載した。

A. 調査研究の総括的まとめ

- アーティスト・イン・レジデンスは多様で普遍的な価値に通じている
- アーティスト・イン・レジデンスは芸術の生態系を支える重要なインフラである
- アーティスト・イン・レジデンスは多面的、多元的な効果・成果をもたらす
- アーティスト・イン・レジデンスは中長期的な時間軸の中でより大きなインパクトを生み出していく
- アーティスト・イン・レジデンスの多様なモデル～AIR設立背景やミッションから

- アーティスト・イン・レジデンスが提供するものと期待される成果～時代による変遷
- 文化政策におけるアーティスト・イン・レジデンスのポテンシャル

B. アーティスト・イン・レジデンスのさらなる充実と発展に向けて

① アーティスト・イン・レジデンスの社会的意義と役割

日本のアーティスト・イン・レジデンスの社会的な意義、果たすべき役割や目的等について、次の3項目に沿って検討・整理した。

- 文化芸術の振興
- 文化芸術による相互理解と国際交流
- 地域活力の創出と産業振興

② 望ましいプログラムや施設の内容と方向性

上記の社会的意義、果たすべき役割や目的を達成するために望まれるプログラムの内容、新たなプログラムの方向性について、次の3項目に沿って検討・整理した。

- レジデンス事業の方向性と施設の内容
- アーティストの選考や支援の内容・方法
- プログラムの多様性や展開の可能性

③ アーティスト・イン・レジデンスを支える仕組み

日本のアーティスト・イン・レジデンスの運営基盤を拡充したり、社会的な存在価値を高めるためにどのような取り組みが必要か、次の4項目に沿って検討・整理した。

- 運営基盤(運営組織、運営財源)の拡充
- アーティスト・イン・レジデンスを支えるファンド、グラント
- ネットワークの構築による支援と底上げ
- アーティスト・イン・レジデンスのプレゼンスの向上

3. 調査研究の実施体制と協力者

本調査研究の実施に際しては、アーティスト・イン・レジデンスの国内外の専門家からなるアドバイザー会議を設置するとともに、海外AIR調査については現地調査協力者の協力を得て実施した。

① アドバイザー会議

次のメンバーからなるアドバイザー会議を設置し、調査研究の進め方へのアドバイス、調査対象機関に関する情報提供や面会者の紹介、調査結果の分析・整理、報告書のとりまとめ等に対する助言などをいただいた。

アドバイザー会議は調査期間中に2回開催した。海外在住のマリオ・カロ氏には書面インタビューを、ジュディス・ステインズ氏には、海外AIR調査で英国訪問時に面会し、インタビュー調査を、それぞれ行った。

[アドバイザー会議委員](順不同、敬称略)

池田修 NPO法人BankART1929代表
今村有策 トーキョーワンダーサイト館長
マリオ・カロ レズ・アルティス会長

(Mario Caro President of the Board, Res Artis)
菅野幸子 (独法)国際交流基金 情報センター
プログラム・コーディネーター
ジュディス・ステインズ アジア欧州財団 culture
360° エディター

(Judith Staines Editor, Culture 360°)
相馬千秋 NPO法人アートネットワーク・ジャパン、
フェスティバル／トーキョー プログラム・ディレクター

久野敦子 (公財)セゾン文化財団 プログラム・ディレクター

② 海外AIR調査協力者

海外AIR調査に際しては、現地での調査コーディネーター、調査レポートのとりまとめなどについて、次の方々に協力いただいた(順不同、敬称略)。

ドイツ: 山下秋子(翻訳・通訳家、在ベルリン)
フランス: 野口沢子(美術史家、在パリ)
オランダ: 三橋紀子(美術家、在ロッテルダム)
小田井真美(Move Arts Japanディレクター)*

ベルギー: 倉本祐(美術家、在ロッテルダム)
米国: 山崎梨真(ドキュメンタリー映像作家、在ニューヨーク)

カナダ(モントリオール):ケベック州政府在日事務所、

ケベック州政府文化・コミュニケーション省＊
 カナダ(カルガリー):原万希子(キュレーター、在バンクーバー)
 中国: 金島隆弘(FEC代表／アートフェア東京エグゼクティブディレクター)＊
 映里(三影堂創設者、写真家)＊
 韓国: 木村典子(舞台芸術コーディネーター・翻訳者、在ソウル)
 シンガポール:斎藤理津子(在シンガポール)
 オーストラリア:味岡千晶(豪日交流基金 理事会役員、在キングス・ポイント)
 ※英国は現地調査協力者を依頼せず。＊印は調査機関の選定と各機関への協力依頼、現地コーディネートのサポートのみの協力(調査レポートの作成は含まず)。

③ 意見交換会出席者

意見交換会は4回に分けて開催し、次の方々に出席いただいた(順不同、敬称略)。

柴田尚 NPO法人S-AIR
 服部浩之 青森公立大学国際芸術センター青森
 杉山豪介 アーカスプロジェクト実行委員会
 朝重龍太 アーカスプロジェクト実行委員会
 石井瑞穂 アーカスプロジェクト実行委員会
 増記多佳子 アーカスプロジェクト実行委員会
 内田美保 アーカスプロジェクト実行委員会
 門田けい子 一般社団法人産業人文学研究所
 穴戸遊美 3331 Arts Chiyoda
 久野敦子 公益財団法人セゾン文化財団
 林泰子 NPO法人越後妻有里山協働機構
 塩見有子 NPO法人アーツイニシアティヴトウキョウ
 堀内奈穂子 NPO法人アーツイニシアティヴトウキョウ
 村田達彦 遊工房アートスペース
 小島寛大 NPO法人アートネットワーク・ジャパン
 山野真悟 NPO法人黄金町エリアマネジメントセンター
 平野真弓 NPO法人黄金町エリアマネジメントセンター
 近藤恭代 金沢21世紀美術館
 成島洋子 財団法人静岡県舞台芸術センター

佐東範一 NPO法人ジャパンコンテンポラリーダンスネットワーク
 山本麻友美 京都芸術センター
 横堀ふみ NPO法人ダンスボックス
 松平万里佳 公益財団法人瀬戸市文化振興財団
 山浦日紗子 高知県立美術館
 松浦仁 福岡アジア美術館
 山出淳也 NPO法人BEPPU PROJECT
 古原彩乃 NPO法人BEPPU PROJECT

④ ニッセイ基礎研究所

吉本光宏 主席研究員・芸術文化プロジェクト室長
 大澤寅雄 芸術文化プロジェクト室 准主任研究員
 稲村太郎 芸術文化プロジェクト室 研究員
 吉田妙子 芸術文化プロジェクト室 研究アシスタント
 帆足亜紀 客員研究員 | 横浜トリエンナーレ事務局
 日沼禎子 客員研究員 | 女子美大学准教授
 高橋麻衣 客員研究アシスタント | 東京藝術大学大学院

4. 報告書の構成

報告書は、それぞれ次の内容で構成された本編(本冊子)と資料編(別冊)の2冊にとりまとめた。調査研究のフローと報告書の構成は、xページに掲載したとおりである。

(1) 報告書(本冊子)

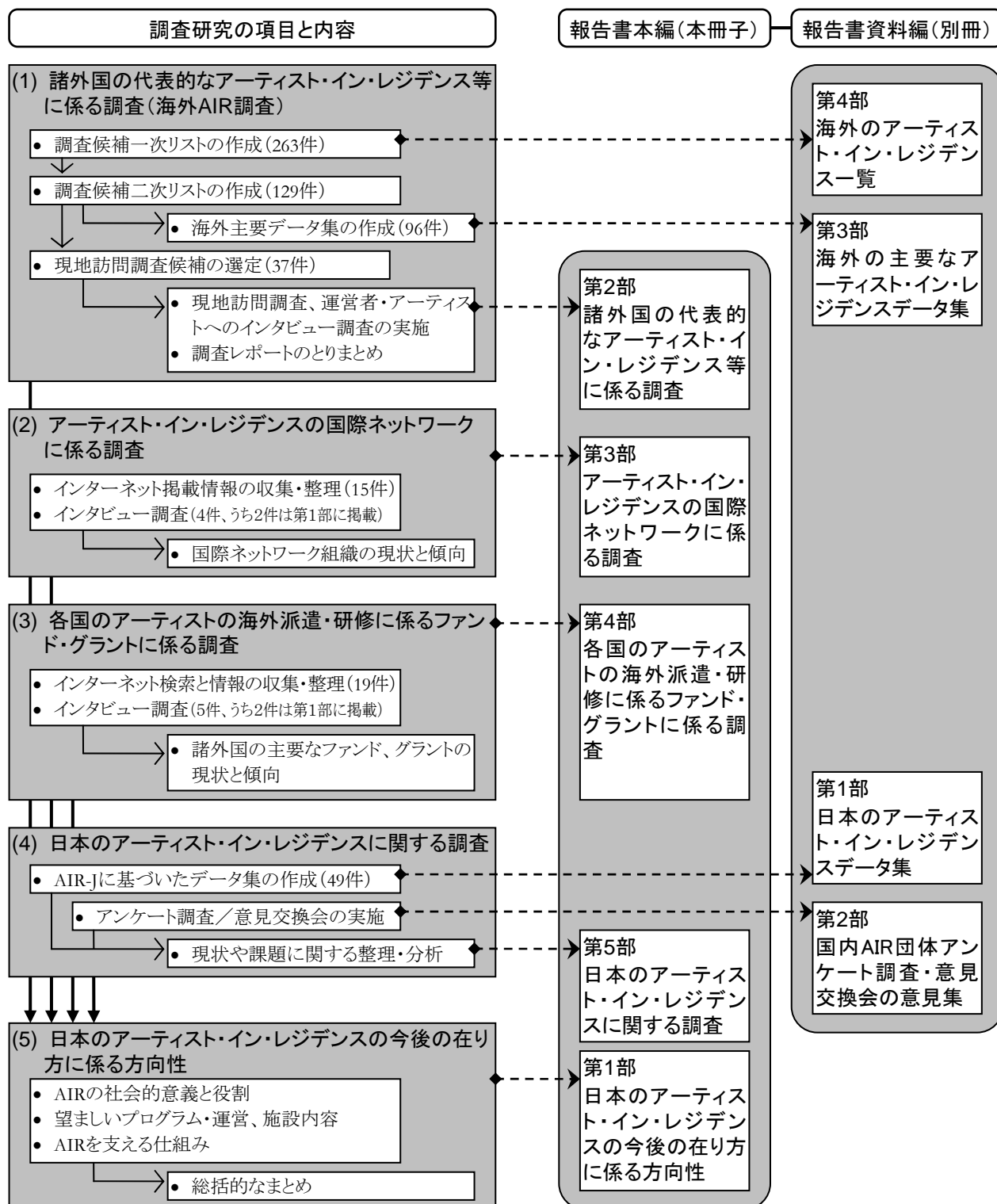
第1部 日本のアーティスト・イン・レジデンスの今後の在り方に係る方向性

本調査研究の総合的なまとめに相当する「(5) 日本のアーティスト・イン・レジデンスの今後の在り方に係る方向性について」の結果を報告書の冒頭に掲載した。内容はvii～viii頁に記載のとおりである。

第2部 諸外国の代表的なアーティスト・イン・レジデンス等に係る調査

調査対象の選定方法を再整理し、諸外国の代表的なアーティスト・イン・レジデンス37件の概要(創設年、所在都市、対象分野、プログラムの概要・特徴、運営組織、年間予算・財源)を一覧表に整理した。

◎ 調査研究のフローと報告書の構成



その後、運営者やアーティストに対するインタビュー調査、各機関の提供資料、インターネット掲載情報などに基づいて、国別に各調査対象の詳細な調査レポートを掲載した。

第3部 アーティスト・イン・レジデンスの国際ネットワークに係る調査

まず、調査結果に基づいた国際ネットワーク組織の現状と傾向の分析結果を掲載した。その後12件のネットワーク組織の概要(創設年、事務局所在都市、URL、会員制、ネットワークの概要・特徴、日本の参加団体、運営組織、年間予算・財源)を一覧表にまとめ、インタビュー調査を行ったレズ・アルティスとトランス・アーティストの詳細な調査レポートを掲載した。

第4部 各国のアーティストの海外派遣・研修に係るファンド・グラントに係る調査

まず、調査結果に基づいた諸外国の主要なファンド・グラントの現状と傾向の分析結果を掲載した。その後19件のファンド、グラントの概要(機関名、所在都市、機関属性/機関概要、主なグラントの名称・概要・提携機関、所在地/連絡先/URL)を一覧表にまとめ、インタビュー調査を行ったモンドリアン・フォonz(蘭)、アジア・カルチュラル・カウンスル(米)、ケベック・アーツカウンスル(加)の詳細な調査レポートを掲載した。

第5部 日本のアーティスト・イン・レジデンスに関する調査

国内のアーティスト・イン・レジデンスのアンケート調査、意見交換会で得られた意見について、現状、成果、課題の3項目に分けて、要点を抽出・整理した。

(2) 資料編(別冊)

第1部 日本のアーティスト・イン・レジデンスのデータ集

国際交流基金の運営するAIR-Jの掲載情報と、各団体から提供いただいた画像に基づいて、次の項目からなる日本のアーティスト・イン・レジデンス49団体のデータ集を作成・掲載した。

- レジデンス事業の概要
- 応募方法、選考方法
- 支援内容

- 運営組織概要
- 施設構成・内容
- 画像

第2部 国内AIR団体へのアンケート調査、意見交換会の意見集

日本のアーティスト・イン・レジデンス40団体から回答のあったアンケート調査の自由記述、21団体29名に参加いただいた意見交換会で得られた意見から、参考になるとと思われる記述、意見を次の調査項目別に整理・掲載した。

- 事業の成果・評価の視点
- AIR運営上の現在の問題点や課題
- 今後、AIRの一環として取り組みたい事業や活動
- 日本やアジア地域のネットワーク構築や連携
- 日本におけるAIRの社会的意義
- 日本のAIRを活発化するために必要だと思われること

第3部 海外の主要なアーティスト・イン・レジデンスデータ集

海外のアーティスト・イン・レジデンスでの滞在を検討しているアーティストや研究者の参照情報として、海外AIR調査の調査対象の選定過程で作成した二次リストから、96件のアーティスト・イン・レジデンスについて、各機関のインターネット掲載情報や既存資料に基づいて、次の項目からなる諸外国の主要なアーティスト・イン・レジデンスのデータ集を作成・掲載した。

- レジデンス事業の概要
- 募集方法
- 支援内容
- 施設構成・内容
- 運営機関概要

第4部 海外のアーティスト・イン・レジデンス一覧

海外のアーティスト・イン・レジデンスでの滞在を検討しているアーティストや研究者の参照情報として、海外AIR調査の調査対象の選定過程で作成した一次リストのアーティスト・イン・レジデンス263件について、国別に所在都市、機関名、対象分野、支援内容などを一覧表に整理した。

③ 報告書の用語統一について

報告書の作成に際しては、本編、資料編をとおして可能な範囲内で用語、和訳の統一(一部は英語のカタカナ表記を採用)を行った。主なものは次のとおりである。

[統一した主な用語・表記(順不同)]

- アーティスト・イン・レジデンス: 基本的に「アーティスト・イン・レジデンス」で統一。前後の文脈によって「レジデンス事業」「レジデンスプログラム」を使用(包括的な取り組みは「事業」、複数の個別的な取り組みは「プログラム」)
- 海外のアーティスト・イン・レジデンスの機関名、インタビュー面会者の氏名: 初出でカタカナ表記に続けて括弧内に原語を併記。以降、氏名はカタカナ表記、機関名は略称表記。
- アーティスト、芸術家、作家: 基本的に「アーティスト」に統一(原則として芸術家、作家は使用しない)。文筆の専門家を指す場合は「文筆家」に統一(原則として小説家は使用しない)
- レジデント・アーティスト、レジデンス・アーティスト、滞在アーティスト: 「滞在アーティスト」に統一
- アーティストの選考、選出、選定: 「選考」に統一。
- アーティスト・イン・レジデンスへの参加、入居、滞在: 原則として「滞在」に統一
- アトリエ兼住居、レジデンス・スタジオ等: スタジオと住居が併設される場合は「スタジオ兼住居(以下「スタジオ」)」として、以降はスタジオに統一。住居の併設されていないスタジオがある場合は「スタジオ」で統一し、適宜「スタジオ兼住居」と使い分け。
- スタジオ数: ○○部屋とカウント(「室」は使わない)
- 補助金、助成金、協賛金: 政府機関(国、地方政府含む)からの支援は「補助金」、政府外郭団体(アーツカウンシル、財団)、民間財団等からの支援は「助成金」、企業のスポンサー、広告宣伝費は「協賛金」。
- 為替レート換算: 1米ドル=100円、1ユーロ=130円、1ポンド=150円、その他のレートは該当箇所に適宜記載。

[統一した主な和訳(順不同)]

- Visual arts: 美術
- Performing arts: 舞台芸術
- Media arts: メディアアート
- Emerging artist: 新進アーティスト
- Middle career artist: 中堅アーティスト
- Established artist: 実績のあるアーティスト、著名なアーティスト
- Discussion: ディスカッション
- Public program: パブリックプログラム
- Resident artist: 滞在アーティスト
- Resident curator: 滞在キュレーター
- International artist exchange program: アーティスト交換事業(もしくは交換事業)
- Studio visit: スタジオビジット
- Mentorship: メンターシップ(指導)
- Area/size: 広さ(「面積」は使わない、単位は㎡)
- Professional development: キャリア育成
- Fellowship, Scholarship: 奨学金(動詞は「支給」)
- Stipend: 日当(〃)
- Travel, Airfare: 渡航費(〃)

第1部

日本のアーティスト・イン・レジデンスの
今後の在り方に係る方向性

第1部で紹介する海外調査事例の国名については、次のとおり漢字もしくはカタカナ一文字で表記することとした。
英:英国、独:ドイツ、仏:フランス、蘭:オランダ、ベ:ベルギー、米:米国、加:カナダ、中:中国、韓:韓国、シ:シンガポ
ール、豪:オーストラリア

A. 調査研究の総括的まとめ

1. アーティスト・イン・レジデンスは多様で普遍的な価値に通じている。

アーティスト・イン・レジデンスとは

- あらゆる芸術活動、芸術作品の創造の原点を支えるインフラであり、アーティストの創造力を培養するためになくてはならない環境である。
- アーティストに未知の経験と出会いを提供する場所である。それらはアーティストの発想の源となり、ある時は作品に結実し、ある時は新たなアイデアや表現を生み出していく。
- アーティストに国境を越えた移動と滞在を促し、各国、各都市の文化的な「価値」や「事情」が人と人を介してグローバルにリレーしていく仕掛けである。
- 多文化共生社会、地域の寛容性や絆の醸成、文化資源の再発見、創造的人材の交流と定住など、地域に豊穡な恵みをもたらす活動である。
- 国境を越えたネットワークや多様なパートナーシップを育むプラットフォームとして、政治や経済の枠組みを越えた国際的な対話と相互理解を促進する仕組みである。
- これまで欧米諸国を中心に発達し、日本を代表する多くのアーティストの育成やキャリア形成、海外における日本文化の理解促進に寄与してきた取り組みである。
- 芸術を介した海外との相互交流、文化の受発信の拠点である。同時に地域のアーティストや芸術関係者、文化施設や芸術機関との国際的な結節点でもある。
- アートマネジメントの高度なノウハウが集積した専門機関である。アーティストの創作支援、展示や公演の企画、専門家のネットワーク構築、国際的な情報発信など、その内容は多様である。
- 日本の文化政策や国際社会における文化的プレゼンスの向上にとって重要なエレメントである。諸外国同様、国や行政機関の積極的な支援が望まれる。

2. アーティスト・イン・レジデンスは芸術の生態系を支える重要なインフラである。

アーティスト・イン・レジデンスは、美術館やビエンナーレ、劇場、フェスティバルなどと比べれば社会から見えにくい存在である。しかし、そうした芸術の発表、鑑賞の場で活躍できるアーティストを発掘、育成し、また、そこで求められる新たな表現や作品を生み出し、供給する基盤として重要な役割を担っている。

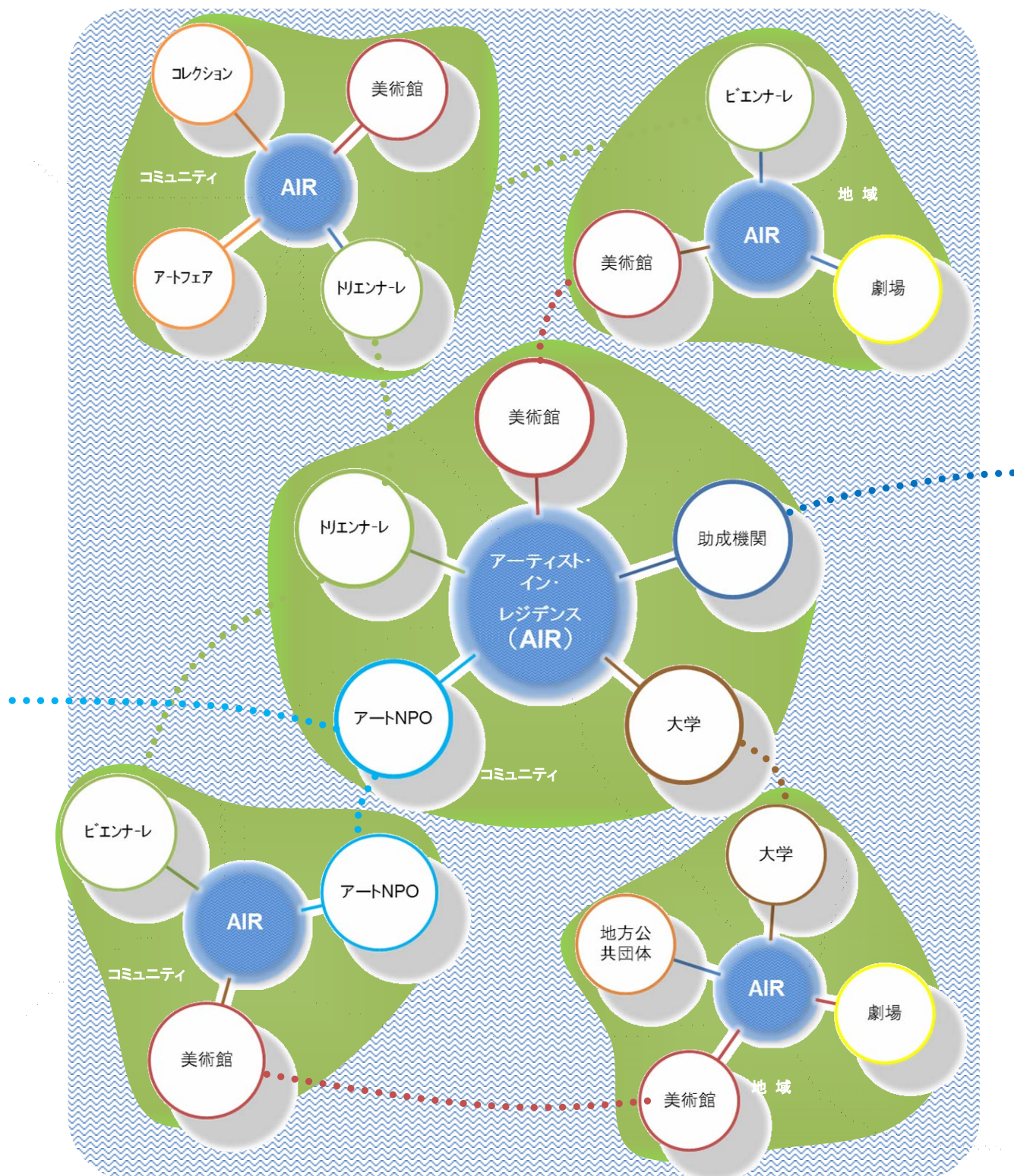
すなわちアーティスト・イン・レジデンスは、美術館やビエンナーレなどにとってなくてはならない存在である。芸術の創造活動を支えることが主目的のアーティスト・イン・レジデンスは、それ自体が不特定多数の市民に開かれたものでなくても、美術館や劇場といった別の文化的インフラを経由して、地域や市民とつながり、広く社会に開かれた存在となっていく。

アーティスト・イン・レジデンスは、特定の地域、コミュニティに深く根を下ろし、その場所でなければ得られない環境、空間や時間、文化的・社会的体験、専門的・技術的サポート、市民やアート・コミュニティとの交流、人的ネットワークなど、幅広い恩恵をアーティストにもたらす。それはまた、地域における様々なセクターをつなぎながら、有機的な連携を生み出していく。

その成果は、アーティストとともに、地域や国境を越えて移動し、他の美術館やビエンナーレ、劇場、フェスティバルなどに伝搬され、広がっていく。地域やコミュニティに根ざしながら、グローバルかつ長期的なインパクトを期待できるのが、アーティスト・イン・レジデンスの大きな特徴である。

アーティスト・イン・レジデンスは、国内外の人や情報とのネットワーク形成の拠点であると同時に、地域における文化機関のハブ（結節点）でもある。海外からのアーティストを受け入れ、国内のアーティストを海外に送り出すことで、アーティスト・イン・レジデンスは国境を越えたネットワークの形成の一翼を担っている。

アーティスト・イン・レジデンスは、個人の活動を支援するよう見えながら、芸術の生態系（作品が生まれ、流通し、市民に提供される芸術活動全体の有機的な体系）を支える、極めて重要な存在である。



3. アーティスト・イン・レジデンスは多面的、多元的な効果・成果をもたらす。

アーティスト・イン・レジデンスの効果や成果は一元的に集約されるものではなく、多面的、多元的に顕在化する。それは3つのベクトルに整理できる。

第一は、アーティストへの効果や成果である。しかもそれ自体が多様な側面を有している。

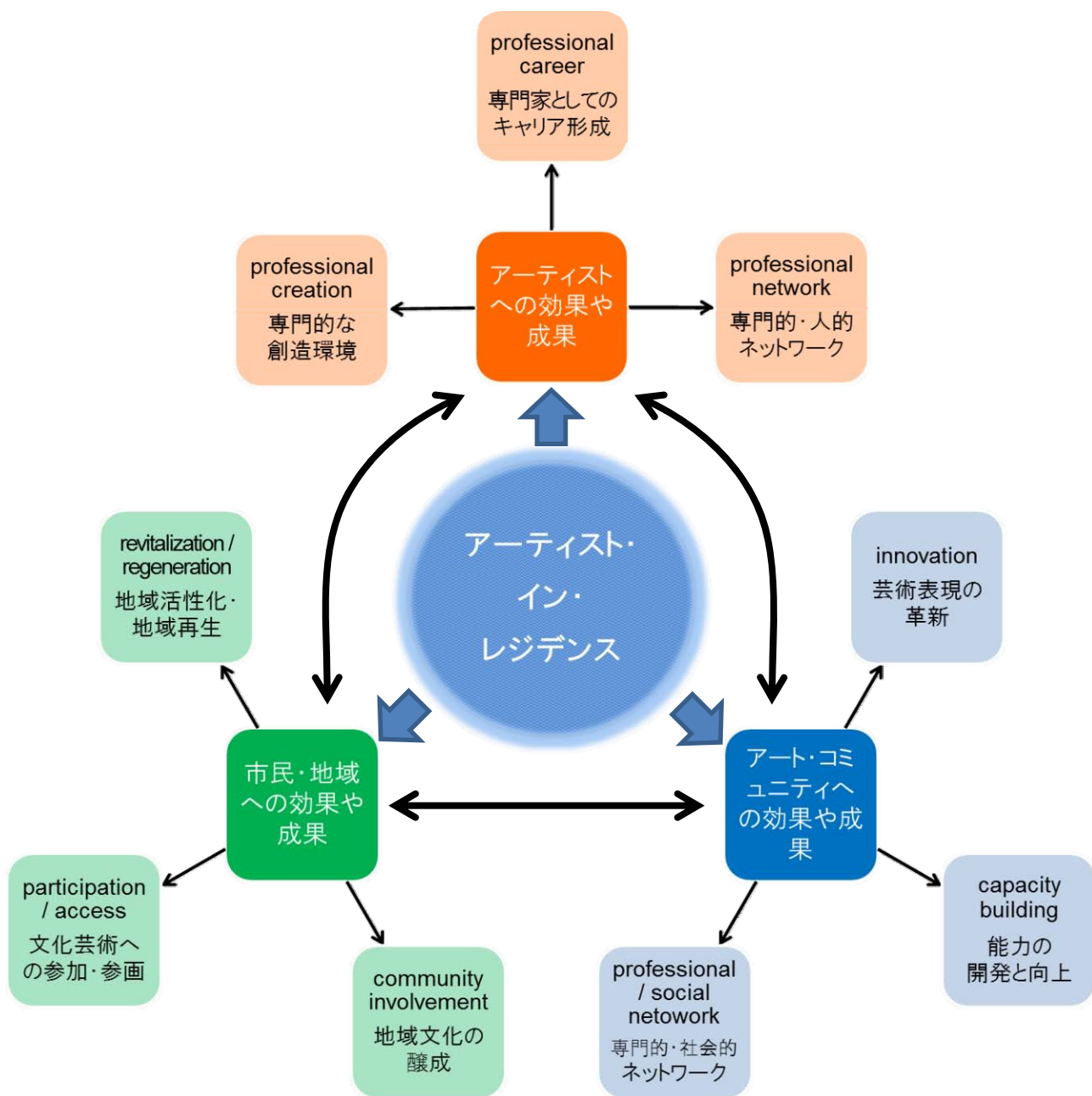
何よりも、アーティスト一人ひとりに対して、作品や創作のヒント、技術的サポートなど、「新たな創造に向けた専門的環境」を提供することがアーティスト・イン・レジデンスの根幹である。普段は出会うことのないアーティスト、キュレーターやギャラリスト、美術評論家など、今後の活動を支える「専門的・人的ネットワーク」の構築も、アーティストが得られる大きな成果である。そしてそれらの積み重ねによって、アーティストは「プロフェッショナルとして活動できるキャリア」を形成していく。

第二は、アーティストやアート関係者、文化施設、芸術機関等からなるアート・コミュニティへの効果や成果である。

アーティスト・イン・レジデンスは、アーティストとその活動を介して、アート・コミュニティの内外に「専門的、社会的なネットワーク」を生み出していく。アーティスト個々人の実験的な取り組みや、新たな作品創造へのチャレンジは、同時代の「芸術表現の革新」の原動力である。それらは、結果的にアート・コミュニティ全体としての「能力やポテンシャルの開発と向上」を促すものである。

そして第三が、アーティスト・イン・レジデンスが立地する地域とそこに暮らす市民に対する効果や成果である。

アーティスト・イン・レジデンスは、地域住民に対してオープンスタジオ等でのアーティストとの交流や作品鑑賞を通じた「文化芸術活動への参加や参画」の機会を提供する。そうした活動は「地域全体の文化的ポテンシャルの醸成」や市民の地域活動への参画を促し、アーティスト・イン・レジデンスによって実現した創造的人材の滞在や市民との交流が、「地域の活力創出や地域再生」の一助となっていく。



4 アーティスト・イン・レジデンスは、中長期的な時間軸の中でより大きなインパクトを生み出していく。

前ページで示したようにアーティスト・イン・レジデンスの効果や成果は多面的・多面的である。特に当初はアーティストの個人的なレベルにとどまっているようにみえる効果や成果が、中長期的な時間軸で俯瞰すると、専門的コミュニティ、市民や地域を巻き込んだコミュニティレベルに波及し、やがて国レベルばかりか、国境を越えて広がっていくことがわかる。

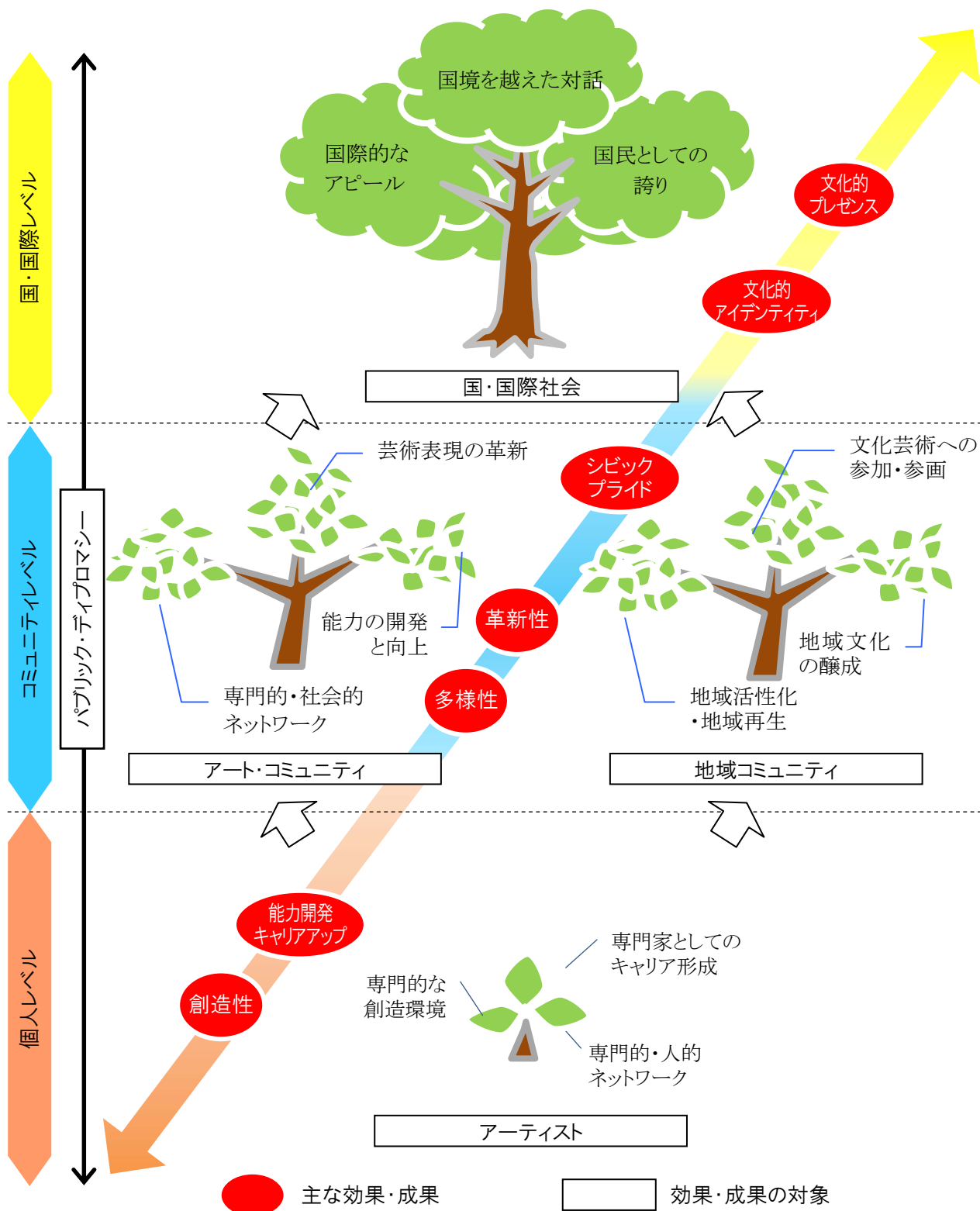
アーティスト・イン・レジデンスの効果や成果は、まずアーティストという個人の中で結実する。この段階では、アーティストの創造的能力や創作活動を人々と共有することは難しいものの、やがては国境を越えた効果や成果を生み出す原点がここにある。

アーティスト個人の効果や成果は、アート・コミュニティに波及する。アーティストの生み出したものが、アート関係者や芸術機関、文化施設などで共有され、社会的な価値を持ったものへと発展していく。その過程で、芸術や文化の多様性が育まれ、様々な価値観が社会に提示される。

アーティスト個人の効果や成果は、アートの専門分野だけではなく、市民に開かれた地域コミュニティにも波及する。アーティスト・イン・レジデンスは、地域の寛容性や活力を生み出しながら、地域に対する誇り、シビックプライドを醸成する。

アート・コミュニティ、地域コミュニティに波及した効果、成果は、やがて、国の文化力や文化的プレゼンスの向上、国境を越えた対話や国際的な文化交流へと波及し、その国の文化的なアイデンティティの形成や国際的なアピールにつながっていく。

こうしてみると、アーティスト・イン・レジデンスは、個人レベル、コミュニティレベル、国レベルで一貫して、パブリック・ディプロマシー（広報文化交流）面でも、極めて重要な役割を担っていることがわかる。



5 アーティスト・イン・レジデンスの多様なモデル～AIR 設立背景やミッションから

ここでは、本調査研究で実施した諸外国の代表的なアーティスト・イン・レジデンス等に係る調査から、実際に訪問した施設、事業の設立背景、ミッションに基づき、アーティスト・イン・レジデンスのモデル像を探るために、下記のように大きく7つに分類した。個々の施設、事業のミッション、活動は多岐にわたっているため、厳密に1つの分類に限定することはできないが、主とした特徴を捉えたものとして参照できるようにした。

① アーティスト、研究者などのキャリア育成、ネットワーク形成を重視

- デルフィナ財団(英 | p.71)
- ガスワークス(英 | p.78)→写真左上
- アカデミー・ソリテュード(独 | p.85)
- ベターニエン(独 | p.92)
- ノード・センター(独 | p.106)
- シテ・デ・ザール(仏 | p.113)
- レコレ(仏 | p.122)
- ライクスアカデミー(蘭 | p.145)→写真左下
- デ・アペル(蘭 | p.152)
- ウィールズ(ベ | p.179)
- ISCP(米 | p.185)→写真右上
- エイペックスアート(米 | p.195)
- レッドゲート・ギャラリー(中 | p.229)→写真右下
- プラットフォーム・チャイナ(中 | p.236)

- ビタミン・クリエイティブ・スペース(中 | p.242)
- ガートルード(豪 | p.307)
- アジアリンク・アーツ(豪 | p.324)



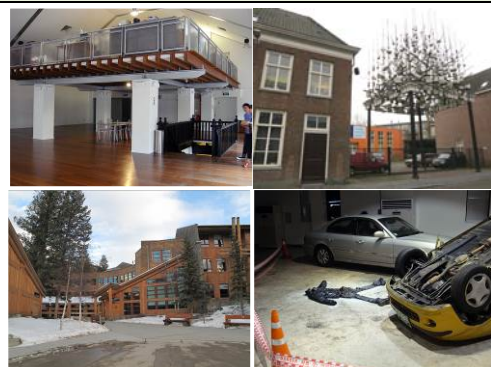
② アーティストが主体となり設立、運営するプログラム、スタジオ、アートスペース(*)

- 三影堂 撮影芸術中心(中 | p.232)→写真左
- アローファクトリー(中 | p.239)
- 仁川アートプラットフォーム(韓 | p.267)
- サブステーション(シ | p.277)→写真右



③ 異なる表現、技術、思考を横断しながら行う共同制作を重視し、新たな表現の創造を目指す

- サンデーモーニング(蘭 | p.157)→写真右上
- バンフセンター(加 | p.210)→写真左下
- シアターワークス(シ | p.286)→写真左上
- STPI(シ | p.294)
- ムンレ芸術工場(韓 | p.260)→写真右下



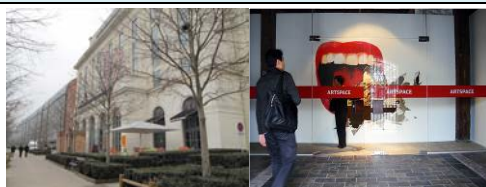
④ 文化政策、都市政策、地域・産業振興の施策、成果を目指す

- ソウル芸術文化財団(韓 | p.247)
- クンチョン芸術工場(韓 | p.254)→写真左右とも



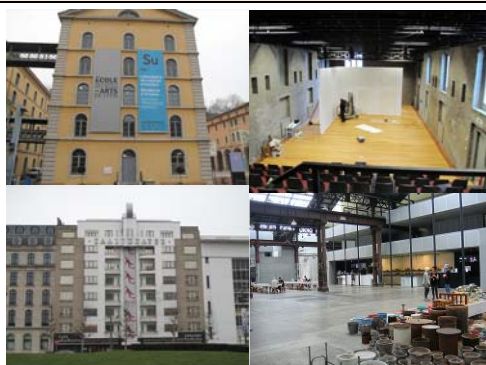
⑤ 国際展、フェスティバルと連携したアート・コミュニティのプラットフォーム

- リヨン・ビエンナーレ(仏 | p.135)→写真左
- アートスペース(豪 | p.312)→写真右



⑥ 舞台芸術におけるクリエイションを支援し、新たな表現や横断的な協同プログラムを振興

- PACT(独 | p.100)
- シュブジスタンス(仏 | p.128)→写真左上
- カーイシアター(ベ | p.165)→写真左下
- ワークスペースブリュッセル(ベ | p.171)→写真右上
- パフォーマンス・スペース(豪 | p.319)→写真右下



⑦ 映像、メディアアートの表現者、技術者の指導、交流による人材育成

- プリム(加 | p.205)→写真左
- オブジェクティブス(シ | p.299)→写真右



*アーティストが主体となり設立、運営するプログラム、スタジオ、アートスペースは、「アーティスト・イニシアチブ」、「アーティスト・ラン」等と称される。

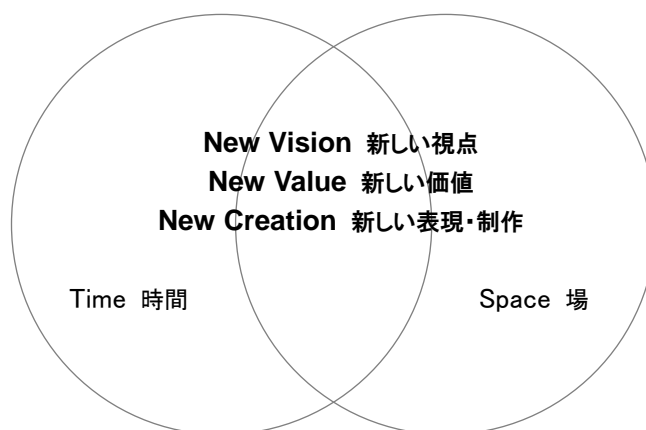
※()内は所在する国名と現地調査レポートの掲載ページ。アーティスト・イン・レジデンスの名称、国名とも略称を用いた(序章 ii—iii ページ参照)。

6. アーティスト・イン・レジデンスが提供するものと期待される成果～時代による変遷

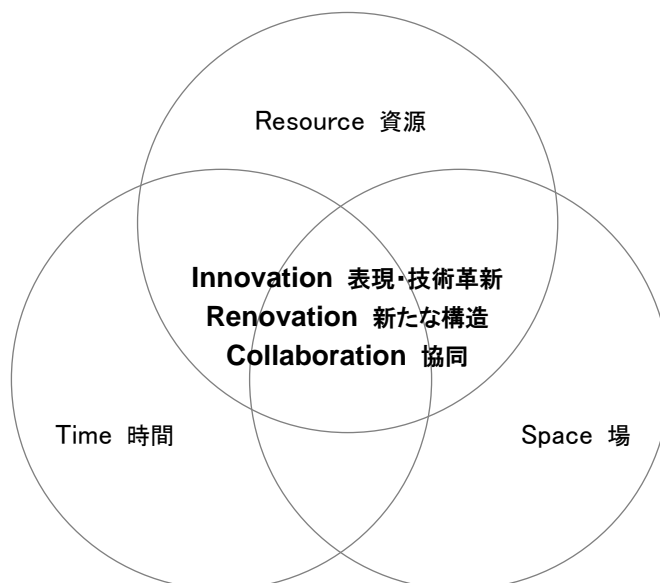
アーティスト・イン・レジデンスを成立させる基本的な要素は、「時間」と「場」である。そこでの経験と出会いがアーティストの創造の源となり、新たな作品へと結実し、あるいは新たなアイデアや表現、視点を生み出すこととなる。世界各国でアーティスト・イン・レジデンスが設立され、顕在化し始めた1970 - 90年代の黎明期には、何よりもアーティストのための「時間」と「場」を獲得することが最優先されてきた。

2000年代以降に設立された、あるいはプログラムの転換期を迎えたアーティスト・イン・レジデンスは、時代の要請に沿った新たなモデルの模索、また、持続的な運営を行うためのより戦略的なプログラム設計が見られるようになった。特に各地域における人・物・出来事などを含む「資源」を意識的に取り込むことにより、表現や技術の革新、新たな構造、領域を横断する協同作業などが生まれている。このことは、芸術振興という視点だけではなく、産業振興、地域振興の役割を担い、さらには新たな公的資金が投資されることへもつながり、アーティスト・イン・レジデンスの社会的意義を広げ始めている。

■第1ステージ(1970 - 90年代)



■第2ステージ(2000年以降)



7. 文化政策におけるアーティスト・イン・レジデンスのポテンシャル

ここまで、本調査研究の結果を総括的に整理してきた。

次節「B. アーティスト・イン・レジデンスのさらなる充実と発展に向けて」では、本調査研究で実施した①諸外国の代表的なアーティスト・イン・レジデンス等に係る調査(以下、海外 AIR 調査)、②アーティスト・イン・レジデンスの国際ネットワークに係る調査(以下、国際ネットワーク調査)、③各国のアーティストの海外派遣・研修に係るファンド・グラントに係る調査(以下、海外ファンド調査)、④日本のアーティスト・イン・レジデンスに関する調査(以下、国内 AIR 調査)の4種類の調査結果に基づき、

- アーティスト・イン・レジデンスの社会的意義と役割
- 望ましいプログラムや運営、施設の内容と方向性
- アーティスト・イン・レジデンスを支える仕組み

の3つに分けて日本のアーティスト・イン・レジデンスの今後の在り方に係る方向性を、検討・整理した。

その結果、アーティスト・イン・レジデンスを文化政策の視点から捉えると、実に幅広いポテンシャルを有していることが明らかとなった。そこで次ページの図表では、次の6つの文化政策の視点から捉えたとき、この次節で整理した各項目が、どの政策に対応するものであるかを、マトリックスとして整理することとした。

- 文化創造:アーティストの芸術作品、日本の文化芸術の創造を推進する政策
- 人材育成:アーティスト、キュレーター、プロデューサー、研究者等の人材を育成する政策
- 文化発信:日本の文化芸術やアーティストの活動を国内外に広く発信する政策
- 国際交流:文化芸術やアーティスト等の国際交流を促進する政策
- 地域活性:アーティストの滞在や住民との交流などを通して地域の活性化に寄与する政策
- 文化外交:アーティストや文化芸術を介した国際的な信頼関係の構築に資する政策
- 国際貢献:新たな芸術表現の追求や海外アーティストの育成など、国際的な文化芸術の振興において日本が果たしうる国際貢献政策
- プレゼンス:上記の活動を通じて、日本の文化的、国際的プレゼンスを高める政策

ただし、各項目は一義的に整理することが難しく、多角的な視点から意義や役割を捉えることができる。次ページの図表では、20ページ以降に記述する項目ごとに、関連する複数の文化政策について対応を整理し、関連性の高いものに◎、関連性のあるものに○を付す形とした。

なお、次節「B. アーティスト・イン・レジデンスのさらなる充実と発展に向けて」では、第1部が本調査研究の総合的な分析結果となるよう各項目にその根拠となる調査結果や参考事例を掲載し、各調査結果の詳細を参照できるよう掲載ページを記載した¹。

¹ 報告書本編(本冊子)は「海外 AIR 調査 p.○」、報告書資料編は「国内 AIR 調査 | 資 p.○」と記載した。

図表：調査結果のまとめと文化政策上の位置づけ

1. アーティスト・イン・レジデンスの社会的意義と役割

(1) 文化芸術の振興

- ① 文化芸術のエコシステム（生態系）を連鎖させる、創造力の培養環境としての AIR
- ② アーティスト、クリエイター等の人材の発掘・育成やキャリアアップと新たなプロジェクトへの展開
- ③ キュレーター、プロデューサー等の国際的な人的ネットワークの拡大と文化芸術の国境を超えた流通
- ④ 異文化や異分野との出会いから生まれる芸術表現の革新や共同制作の環境整備

(2) 文化芸術による相互理解と国際交流

- ① 個人対個人の信頼関係をベースにしたパブリック・ディプロマシー（広報文化交流）の促進
- ② アーティストによる国境を越えた文化の伝播とモビリティ（移動）の活性化
- ③ 世界的視野での文化芸術の振興に対する日本の国際貢献

(3) 地域活力の創出と産業振興

- ① 地域における文化多様性や異文化交流による寛容性の育成
- ② 創造的人材の定住・交流、創造的な「磁場」の形成
- ③ 都市や地域の文化資源に対する新しい視点の獲得、国際的プレゼンスの向上
- ④ 地域資源としての歴史的建造物、遊休施設の有効活用、地域産業の再生と再構築

文化政策上の位置づけ

文化創造	人材育成	文化発信	国際交流	地域活性	文化外交	国際貢献	プレゼンス
◎	○	○	○	○			
○	◎	○	○			○	
○	○	◎	○				○
◎	○	○	○				○
		○	○		◎	○	○
		○	◎	○	○	○	
		○	○		○	◎	○
	○	○	○	◎		○	
○	○	○	○	◎			
○		○	○	○			◎
○	○	○		◎			○

2. 望ましいプログラムや運営、施設の内容と方向性

(1) レジデンス事業の方向性と施設の内容

- ① アーティスト・イン・レジデンスの目的の明確化と、相応しい運営手法の構築
- ② アーティストの成長段階に応じた、適切な時期での必要なプログラムの提供
- ③ 目的や内容に応じた施設・設備の整備、あるいは限られた施設・設備で最大化する事業成果

(2) アーティストの選考や支援の内容・方法

- ① 指名、推薦、公募が考えられるアーティストの選考方法と海外機関との事業提携
- ② プログラムの目的や内容に応じた公募の回数や審査期間などの柔軟な設定
- ③ アーティストの行動様式や交流の在り方を左右するレジデンスの空間と時間
- ④ アーティストに対する支援対象経費の考え方

(3) プログラムの多様性や展開の可能性

- ① コミュニティへの成果還元（展示・公演、オープンスタジオ、ワークショップ、レクチャー等）の在り方
- ② 実演集団の実験、個人の創作に焦点を当てた舞台芸術分野のレジデンス
- ③ 異分野とのコラボレーションを促進するレジデンス

文化政策上の位置づけ

文化創造

人材育成

文化発信

国際交流

地域活性

文化外交

国際貢献

プレゼンス



3. アーティスト・イン・レジデンスを支える仕組み

(1) 運営基盤(運営組織、運営財源)の拡充

- ① 運営スタッフや組織に求められる資質や経験、専門的人材の育成
- ② 安定的で持続可能な財政基盤、自立可能な経営モデルの模索
- ③ 地域内の文化施設や機関、人材のネットワーク構築に基づいた相互支援

(2) アーティスト・イン・レジデンスを支えるファンド、グラント

- ① 支援すべき双方向の「往来」の仕組み
- ② 未来への投資につながるリサーチや未知の体験、キャリアアップなどアーティスト個人への支援
- ③ ファンドやグラントに求められるアーティスト個人への支援
- ④ 交流の少ない地域、世界に点在するマイクロレジデンスへの支援

(3) ネットワークの構築による支援と底上げ

- ① 機能や役割を明確にしたネットワークの構築と運用
- ② 海外の主要なアーティスト・イン・レジデンスと連携した日本の在外レジデンスの整備
- ③ 地域限定、個別プロジェクトを目的としたネットワークの形成

(4) アーティスト・イン・レジデンスのプレゼンスの向上

- ① 国際的な芸術シーンにおける日本の理解促進とプレゼンスの向上(評価とフォローアップの重要性)
- ② 行政や一般市民へのアドボカシー、情報提供を行う中間支援組織
- ③ アーティスト・イン・レジデンスを持続可能にするための国や地方公共団体等に求められる役割

文化政策上の位置づけ

文化創造

人材育成

文化発信

国際交流

地域活性

文化外交

国際貢献

プレゼンス

○

◎

○

○

○

◎

○

○

○

○

◎

○

○

○

○

◎

○

◎

○

○

○

○

○

○

◎

○

○

○

○

○

◎

○

◎

○

○

○

○

○

○

◎

○

○

◎

○

○

○

○

○

○

○

◎

○

◎

○

○

○

○

○

◎

○

○

A. General Summary

1. Artist-in-residence programs are diverse, but they all embrace values that are universal and fundamental.

Artist-in-residence programs:

- are a fundamental part of the infrastructure that supports all arts and cultural activities. They provide foundations for cultivation of artists' creativity and imagination.
- give artists opportunities to experience the unfamiliar and encounter the unknown. The residency experience provides artists with sources of inspiration, which sometimes culminate as works of art, and at other times generate new and original ideas and interpretations.
- encourage global mobility and migration. They facilitate the transmission of cities' and states' diverse cultural values and contexts through face-to-face, person-to-person interaction.
- are initiatives that endow communities with fertile resources, such as platforms for a multicultural and symbiotic society, social tolerance and community bonding, rediscovery of cultural resources, and migration and resettling of creative people.
- act as platforms for building networks and partnerships that transcend national borders and hierarchies. They provide a system for international dialogue and mutual understanding that supersedes political and economic frameworks. Programs that were first established in Europe and the United States have provided many prominent Japanese artists with opportunities to develop their capacities and advance their careers. They have also contributed to better understanding of Japanese culture abroad.
- serve as sites for mutual exchange and cultural dissemination of the arts in a global context. They function as nodes of a global network consisting of artists, cultural workers, arts and cultural institutions, agents, and organizers. As professional institutions that integrate complex art management skills and knowledge, their management capabilities are extensive, from supporting artists' creative output and organizing exhibitions and performances, to building professional networks and disseminating information to artists and communities internationally.
- are indispensable for Japanese cultural policy and reinforcement of Japanese cultural presence in a global context. The Japanese government, local governments and other public institutions need to match the levels of support provided by governments and institutions in other countries that also promote artist-in-residence programs.

2. Artist-in-residence programs play an important role in supporting the eco-system of arts and culture.

Artist-in-residence programs have lower visibility compared to other arts and cultural entities, such as museums, theaters, biennales, and festivals. However, they play an important role in procuring and providing artists and artworks to these players. Their role is to discover and nurture artists, and support production of new artworks and creative projects that other entities can present to the public for appreciation.

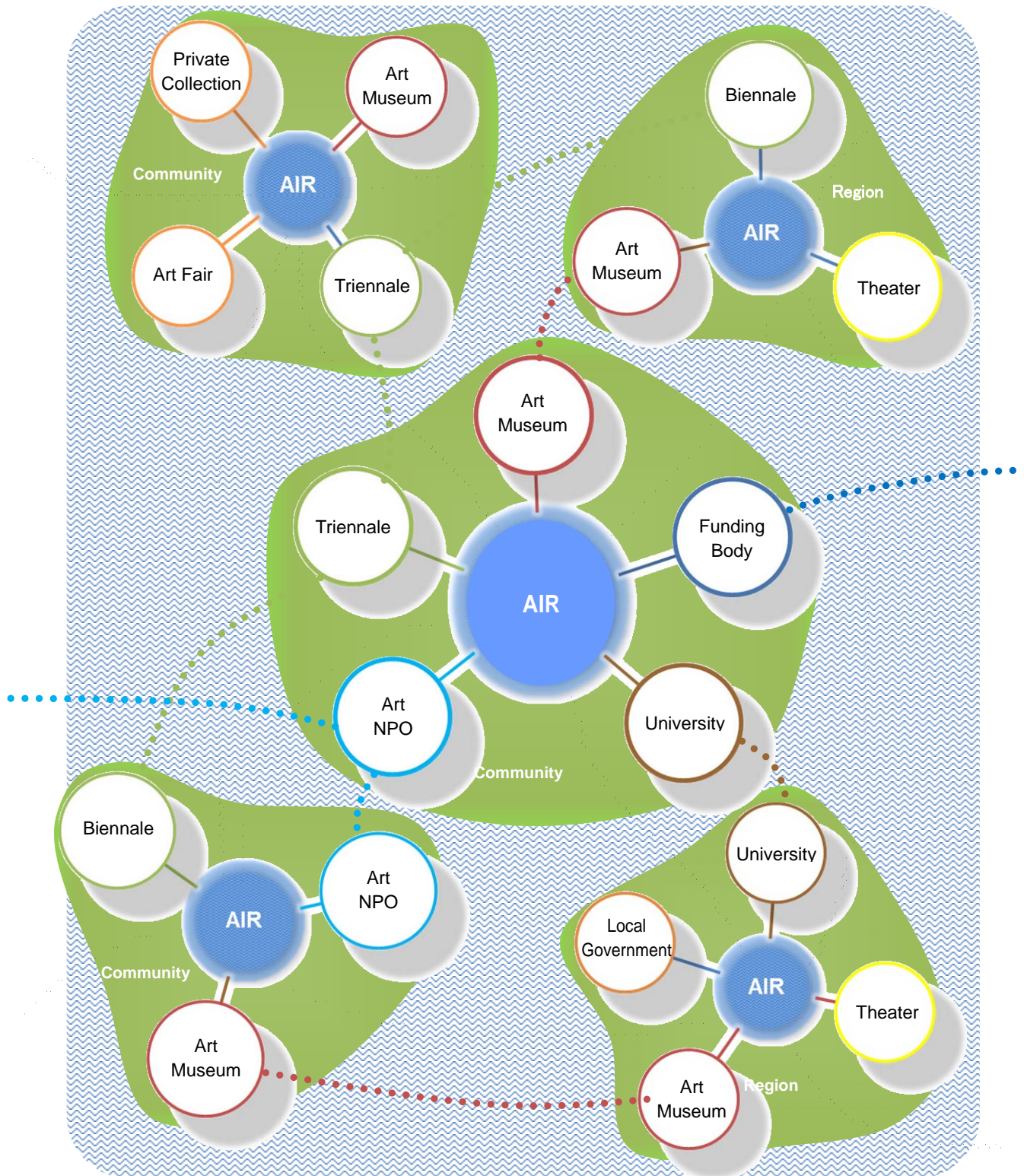
In other words, artist-in-residence programs are indispensable to other arts and cultural institutions, such as museums and theaters, one of whose primary objectives is to present new artists and new talents. As the primary role of artist-in-residence programs is to support the production of new creative endeavors and artworks, it may not immediately meet the demand for public access. Yet the achievements and output will reach a wider public when they are delivered to communities and local residents through other arts and cultural entities.

Artist-in-residence programs provide artists with a diverse range of valuable resources: environments, space, and time that are defined by and rooted in the local community; cultural and social resources that culminate in specific experiences; professional technical support; interaction and exchange with local residents and arts communities; and a network of people. These resources that serve the artists also spawn an organic system by engaging with other sectors in the community.

The outcomes of artist-in-residence programs transcend national and geographical boundaries, and are transmitted through museums, biennales, theaters, and festivals to reach a larger, global sphere of arts and cultural activities. Hence, the unique quality of artist-in-residence programs lies in their ability to be deeply rooted in their locality, while enabling their outcomes to have a global impact in the longer term.

Artist-in-residence programs are hubs that bring together and shape networks of people both locally and globally. While they function as nexuses for local arts and cultural organizations, they also help to build a transnational network of artists, by receiving foreign artists from abroad and sending local artists abroad.

Artist-in-residence programs often appear to play the narrow role of supporting individual artists. But, in fact, their role is broader in scope, as they are sources of production or initiators of creation that feeds into the arts and cultural eco-system (an organic system in which artworks are produced, distributed, and presented/provided to the general public).



3. Artist-in-residence programs have multilateral and multifaceted impact.

The impact of artist-in-residence programs cannot be reduced to a single phenomenon. It is manifested in multilateral and multifaceted ways, with particular impact on three groups, as follows:

First of all, they have an impact on artists in multiple ways.

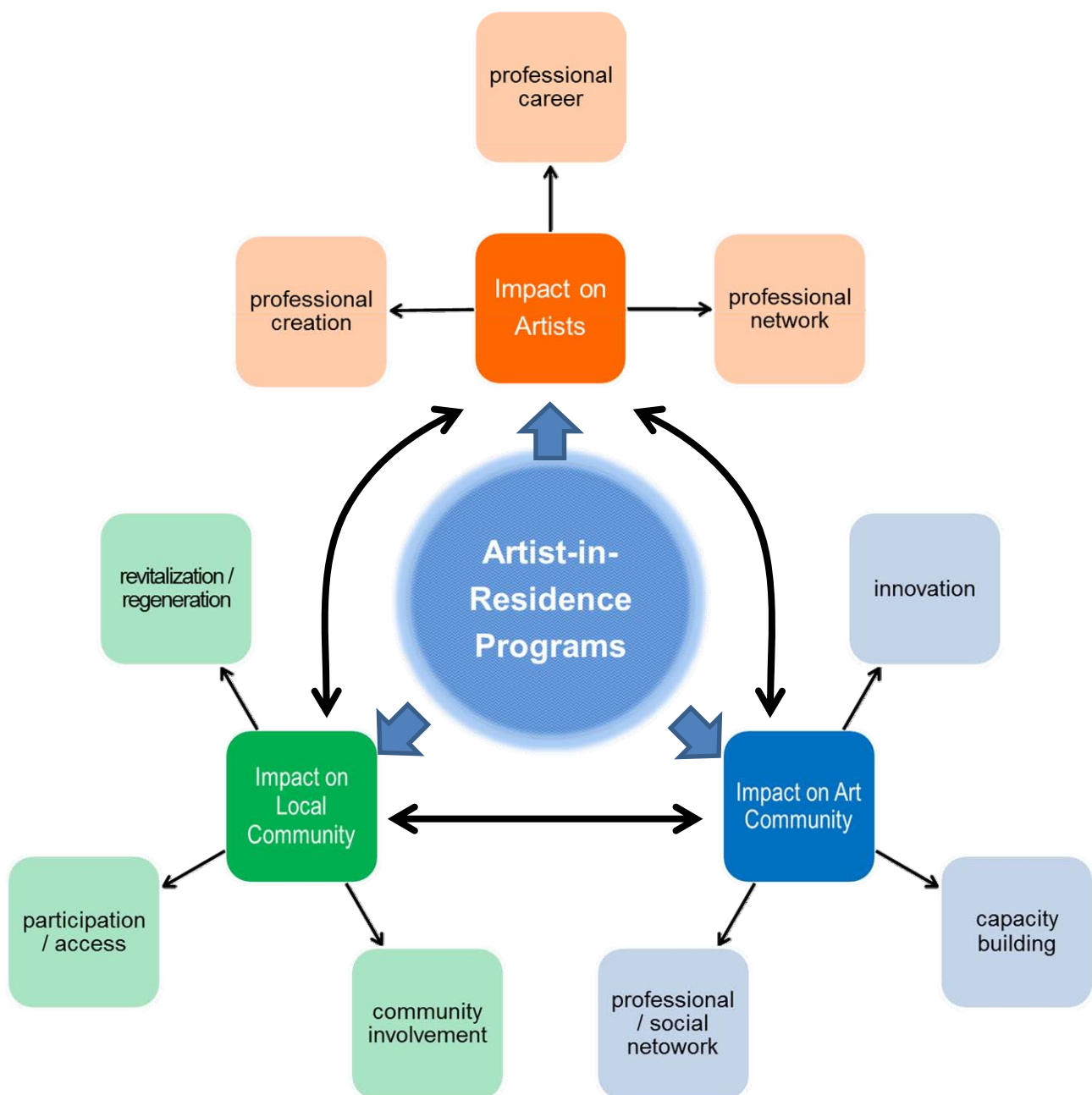
The core function of artist-in-residence programs is to provide artists with inspiration and technical support—in short, with **environments that specifically enable the pursuit of new creative endeavors**. Opportunities to meet other artists, curators, gallerists, art critics, and others in **professional arts circles** are essential to the artists, enabling them to open doors to **professional careers**.

Second, they have an impact on the arts community, which includes artists, arts professionals, cultural facilities, and arts institutions.

Artist-in-residence programs, by working with artists, can generate **professional and social networks** inside and outside the arts community. Through their support for individual artists, their experiments, and their creation of new artworks, artist-in-residence programs become engines for contemporary artistic expression. As a result, members of the arts community at large are prompted to **develop and enhance their capabilities and potential**.

Third, artist-in-residence programs impact local residents and communities.

Through open studios and other public programs that engage the community with artists and artworks, artists-in-residence programs provide local residents and communities with opportunities to **participate in and access arts and cultural activities**. These opportunities, in turn, stimulate the community to **nurture cultural potential using local resources**, and the local residents to access activities in their own local communities. Thus, artist-in-residence programs that bring creative people into the community and engage local residents with them contribute to **the revitalization and regeneration of local communities**.



4. Artist-in-residence programs have greater impact in the mid- to long- term.

As outlined in the previous pages, artist-in-residence programs have multilateral and multifaceted impact. This impact, which may initially appear to be limited to individual artists, becomes broader in context when examined from a mid- to long-term perspective. They first impact the professional art community, then the local community, and then, in due course, the national and transnational communities.

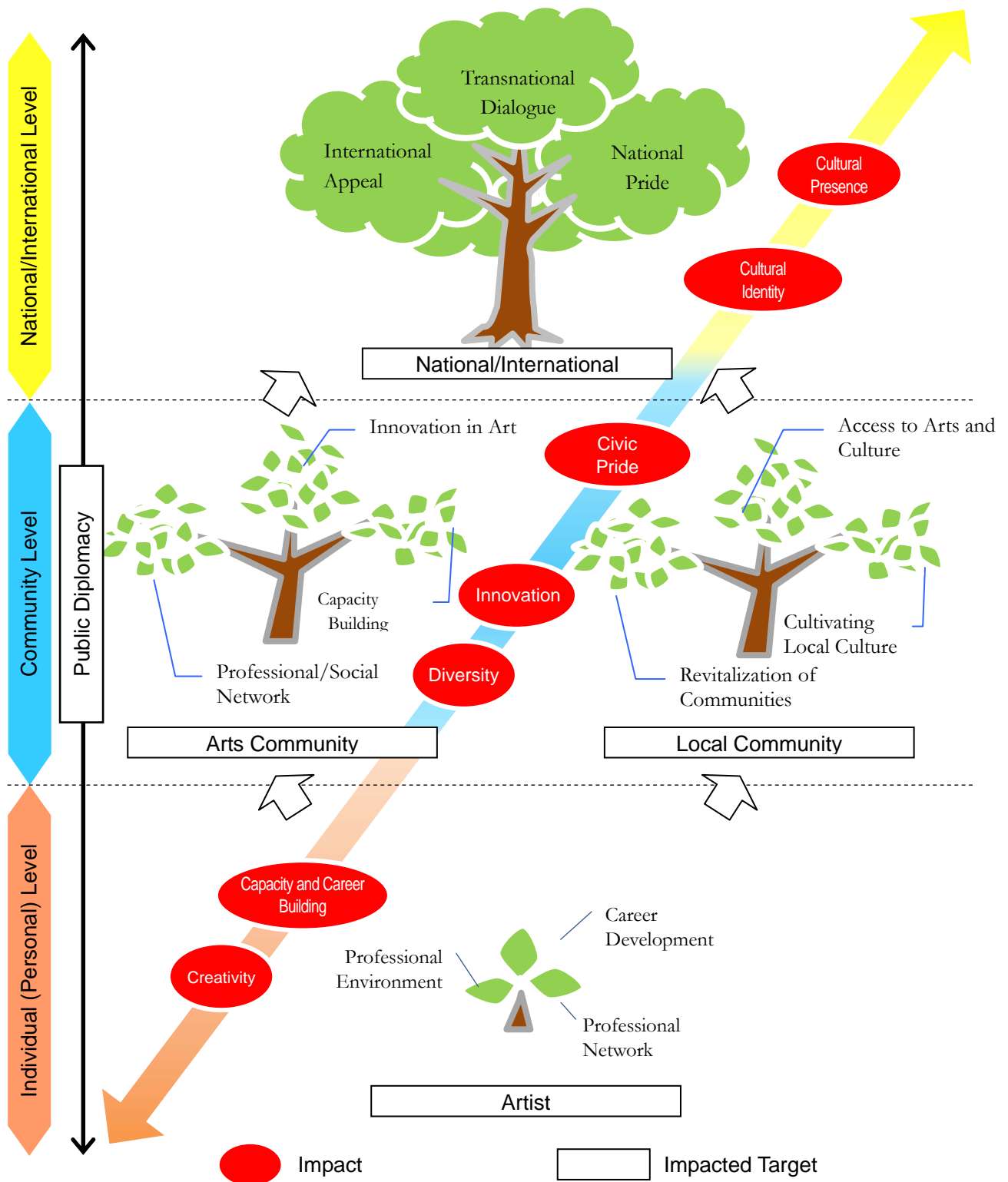
The immediate impact of artist-in-residence programs is on individual artists. Although the creative capabilities and activities of the artists cannot readily be shared with a wider public, the seeds are planted at this stage, and the outcome will eventually surface at a transnational level.

The impact of individual artists' residency experiences spreads to the arts community. The individual artists' creations are first shared with arts professionals, cultural workers, and arts and cultural institutions, and subsequently gain social significance. Through this process, the arts and culture are enriched and diversified, and as a result society becomes aware of multiple value systems.

The impact of artist-in-residence programs is not limited to the community of arts professionals and appreciators. These programs impart vitality and a spirit of tolerance to the community in general, enabling it to build confidence and civic pride.

The effects of artist-in-residence programs on both the arts community and the wider local community eventually enhance cultural strength and presence at the national level. Consequently, they have a spillover effect on the volume of transnational dialogue and international cultural exchange, ultimately shaping cultural identity and augmenting the international appeal of the country in a global context.

As described above, artist-in-residence programs play a consistent role in contributing to public diplomacy at the individual, community, and national levels.



5. Artist-in-residence programs come in different shapes and forms; different founding principles and missions generate a diverse range of models.

In this section, artist-in-residence programs that we have visited during this study are grouped into seven categories according to their founding principles and mission. The missions and activities of individual facilities and projects come in many different forms, but the following categories are based on particularly distinct qualities of specific programs.

① Programs that prioritize career enhancement of artists and researchers and professional network-building

- Delfina Foundation (UK | p.71)
- Gasworks (UK | p.78)
- Akademie Schloss Solitude (Germany | p.85)
- Künstlerhaus Bethanien (Germany | p.92)
- Node|Center for Curatorial Studies (Germany | p.106)
- Cité Internationale des Arts (France | p.113)
- Centre international d'accueil et d'Échanges des récollets (France | p.122)
- Rijksakademie van Beeldende Kunsten Amsterdam (The Netherlands | p.145)
- De Appel (The Netherlands | p.152)
- WIELS Contemporary Art Center (Belgium | p.179)
- International Studio & Curatorial Program (ISCP) (USA | p.185)
- Apexart (USA | p.195)
- Red Gate Gallery (China | p.229)
- Platform China (China | p.236)
- Vitamin Creative Space (China | p.242)
- Gertrude Contemporary (Australia | p.307)
- Asialink (Australia | p.324)

② Programs, studios and art spaces that are founded and managed by artists(*)

- Three Shadows Photography Art Centre (China | p.232)
- Arrow Factory (China | p.239)
- Incheon Art Platform (Korea | p.267)
- The Substation (Singapore | p.277)

③ Programs emphasize collaboration, with modes of expression, skills, and concepts spanning multiple disciplines, in order to generate innovative creative endeavors

- sundaymorning @ ekwc (The Netherlands | p.157)
- The Banff Centre (Canada | p.210)
- TheatreWorks (Singapore | p.286)
- Singapore Tyler Print Institute (STPI) (Singapore | p.294)
- Seoul Art Space_Mullae (Korea | p.260)

④ Programs that aim to contribute to cultural policies, urban planning, and promotion of local industries
<ul style="list-style-type: none"> • Seoul Foundation for Arts and Culture (Korea p.247) • Seoul Art Space_Geumcheon (Korea p.254)
⑤ Programs that form a platform for art communities in coordination with international exhibitions and festivals
<ul style="list-style-type: none"> • Biennale de la danse de Lyon (France p.135) • Artspace Visual Arts Centre (Australia p.312)
⑥ Programs that support creativity in the performing arts and promote interdisciplinary and intercultural collaboration
<ul style="list-style-type: none"> • PACT Zollverein (Germany p.100) • Les Substances (France p.128) • Kaaithheater (Belgium p.165) • Workspacebrussels (Belgium p.171) • Performance Space (Australia p.319)
⑦ Programs that provide opportunities for building skills, through technical workshops on film, video, and other media arts for artists and technicians, and also provide sites for communication and mutual learning
<ul style="list-style-type: none"> • PRIM: Productions Réalisations Indépendantes de Montréal (Canada p.205) • Objectifs – Centre for Photography and Filmmaking (Singapore p.299)

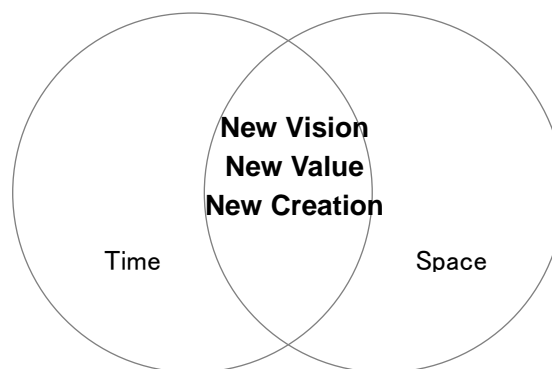
* Programs, studios and art spaces that are founded and managed by artists are commonly called “artist initiatives” or “artist-run spaces.”

6. The effects of artist-in-residence programs evolve with the times.

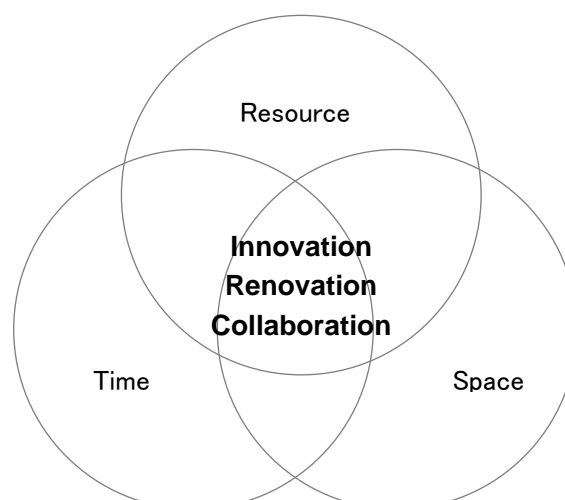
The essential elements that define artist-in-residence programs are “time” and “space.” The experiences and the encounters of the artists during their residencies become sources of future creativity, and eventually culminate in a body of new works, ideas and interpretations, as well as new perspectives. During the nascent period of artist-in-residence programs from the 1970s to the 1990s, when these programs were being established around the world and starting to gain ground, the priority was placed on securing “time” and “space” for artists.

Since the 2000s, artist-in-residence programs have entered a new stage. There has been a search for a new model that responds to the needs of the time, as well as a call for strategic planning to keep the programs sustainable. In particular, the new trend has been to make a conscious effort to incorporate “resources,” such as people, objects, and events that are locally specific, to encourage innovation in expression and technique, form new structures, and facilitate interdisciplinary collaborations. This new effort has enabled artist-in-residence programs to become agents that promote not only the arts, but also local industries and communities, attracting new investment using public funds, and broadening the social significance of their role.

■ Stage 1 (1970s to 1990s)



■ Stage 2 (2000 and after)



7. Artist-in-residence programs have the potential to play an important role in cultural policy.

We have so far summarized our research by highlighting the distinct qualities of artist-in-residence programs.

In the following chapter, “B. For the Enhancement and Further Development of Artist-in-Residence Programs,” there will be a list of 1) major artist-in-residence programs outside of Japan (AIR abroad), 2) international networks that support artist-in-residence programs (international network), 3) funds and grants that support artist-in-residence programs (international funds), and 4) major artist-in-residence programs in Japan (AIR in Japan). Through researching these topics, we have been able to identify future directions in which artist-in-residence programs in Japan could develop, from three different perspectives:

- The social role and significance of artist-in-residence programs
- Optimal facilities, management, and content for artist-in-residence programs
- Systems underpinning artist-in-residence programs

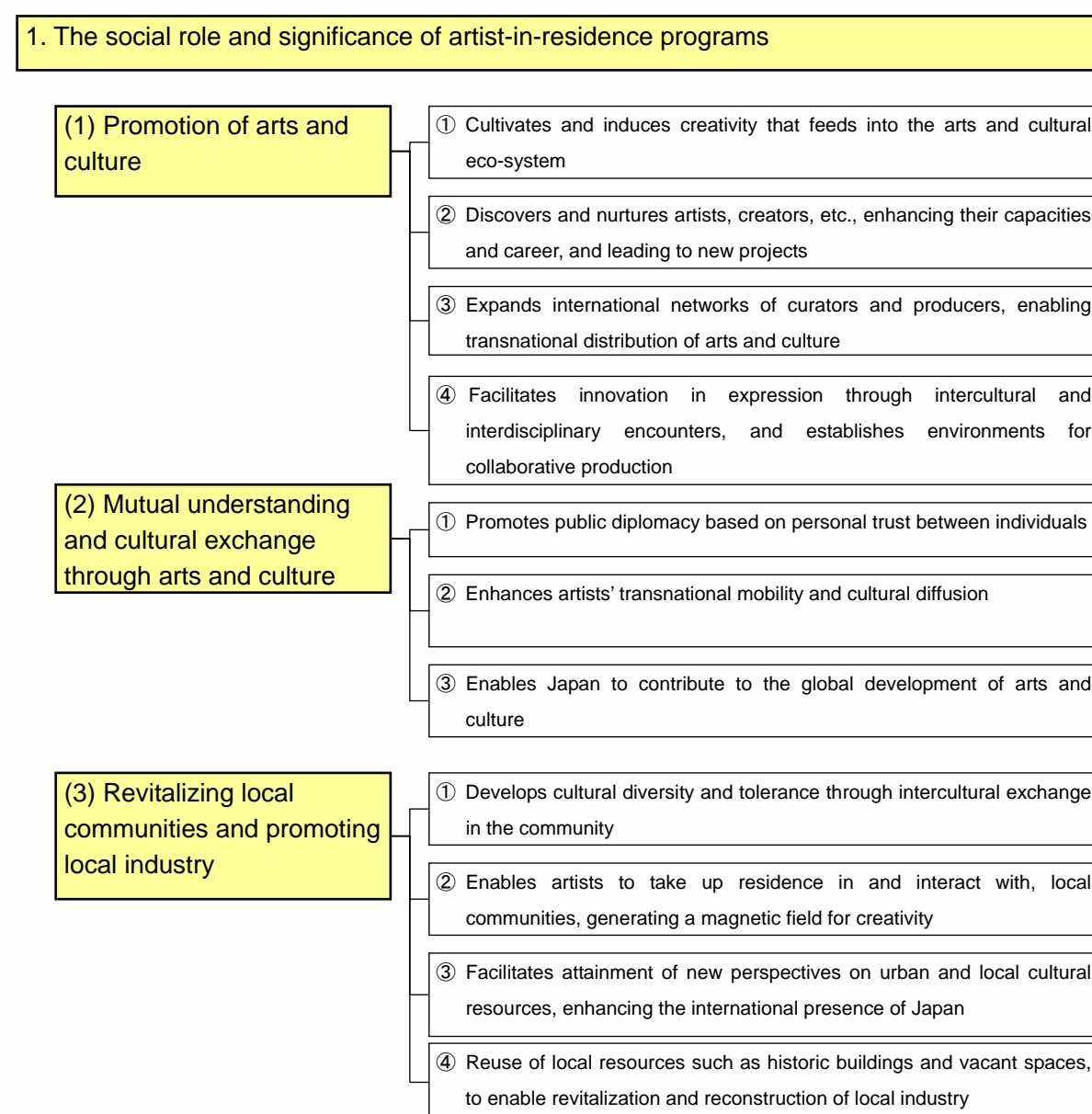
From a cultural policy standpoint, it is apparent that artist-in-residence programs have extremely wide-ranging potential. In the following diagrams, the distinct elements that make up artist-in-residence programs are mapped to the six perspectives that support cultural policy:

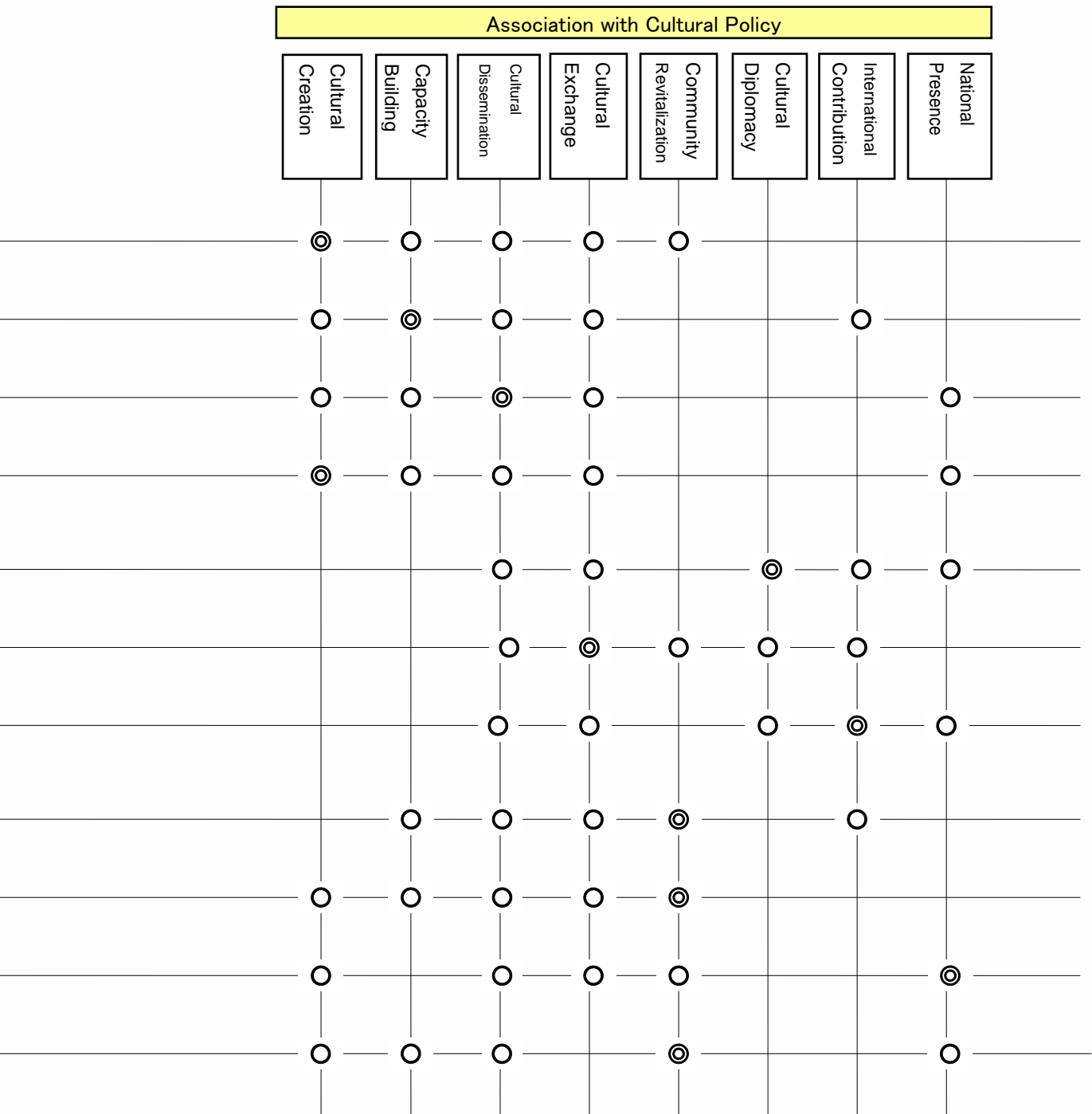
- Cultural creation: Policy that promotes the creation of artworks as well as Japanese arts and culture
- Professional capacity-building: Policy that aims to develop the professional capacities of artists, curators, producers, researchers, and others
- Cultural dissemination: Policy that disseminates the arts and culture of Japan as well as the activities of Japanese artists both in Japan and abroad
- International exchange: Policy that promotes international exchange through the arts and culture as well as the activities of artists
- Revitalization of local communities: Policy that positions artists taking residence in communities and interacting with the locals as a contribution to the revitalization of local communities
- Cultural diplomacy: Policy that positions artists and arts and culture as important agents in building international trust among different countries
- International contribution: Policy that positions Japan as one of the players in promoting arts and culture at the international level, exploring new modes of expression, and supporting non-Japanese artists
- National presence: Policy that enhances the cultural presence of Japan at the international level

As the elements that define artist-in-residence programs do not have single clear-cut meanings, instead entailing multiple perspectives and roles, in the following diagram the relationships are marked with © for close association, and ○ for loose association.

In the next chapter, “B. For the Enhancement and Further Development of Artist-in-Residence Programs,” the details of the research are listed with references to pages containing detailed information, so that the comprehensive analysis in Section One can be cross-referenced with other information in this report.

Diagram: Research Findings and their Association with the Cultural Policy





2. Optimal facilities, management, and content for artist-in-residence programs

(1) Policies and facilities of residencies

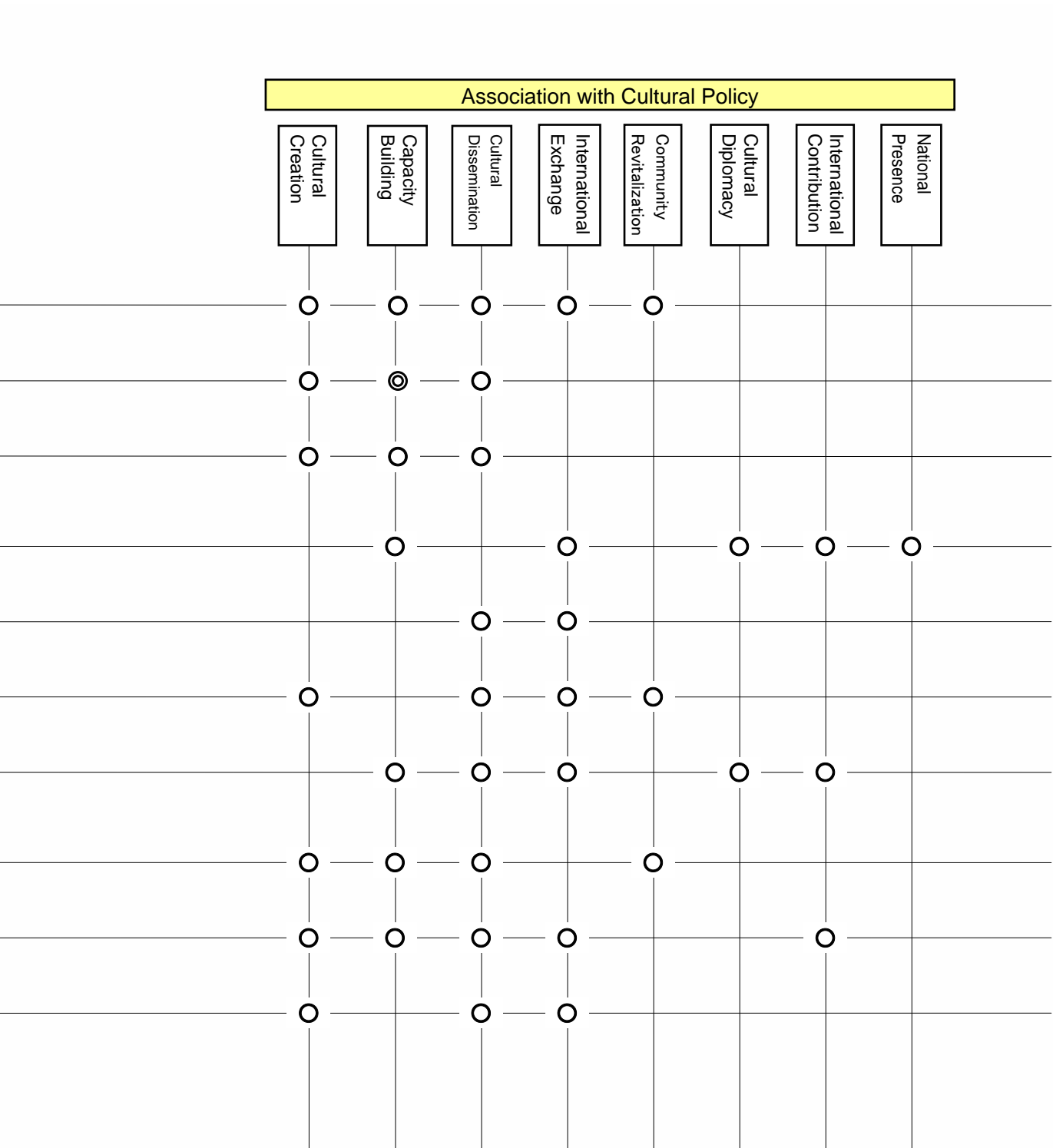
- ① Establishment of well-defined objectives, and management that enables the achievement of these objectives
- ② Provision of programs that match the needs of artists at different stages of their careers
- ③ Provision of facilities that match the objectives, or programs that make optimal use of the capabilities of limited facilities

(2) Methods and policies for selecting and supporting artists

- ① Selecting artists through appointment, recommendation, and open call, as well as working in conjunction with foreign institutions
- ② Setting flexible dates for accepting and examining applications in alignment with the objectives of the program
- ③ Providing space and time that define artists' activities and interactions with their environment
- ④ Determining levels of financial support to be provided to artists

(3) Diverse programs and potential for expansion

- ① Devising ways (exhibitions, performance, open studios, workshops, lectures, etc.) to share output with the community
- ② Programs for the performing arts that focus on experimentation by performing groups and individual performers
- ③ Programs that encourage collaboration with other disciplines



3. The system to support artist-in-residence programs

(1) Management infrastructure (organization, financial sources, etc.)

- ① Cultivating professionals with experience and qualifications that meet the needs of the organization
- ② Exploring management models that enable organizations to be financially sustainable and autonomous
- ③ Expanding networks of mutual support with arts and cultural institutions as well as human resources in the local community

(2) Funds and grants that support artist-in-residence programs

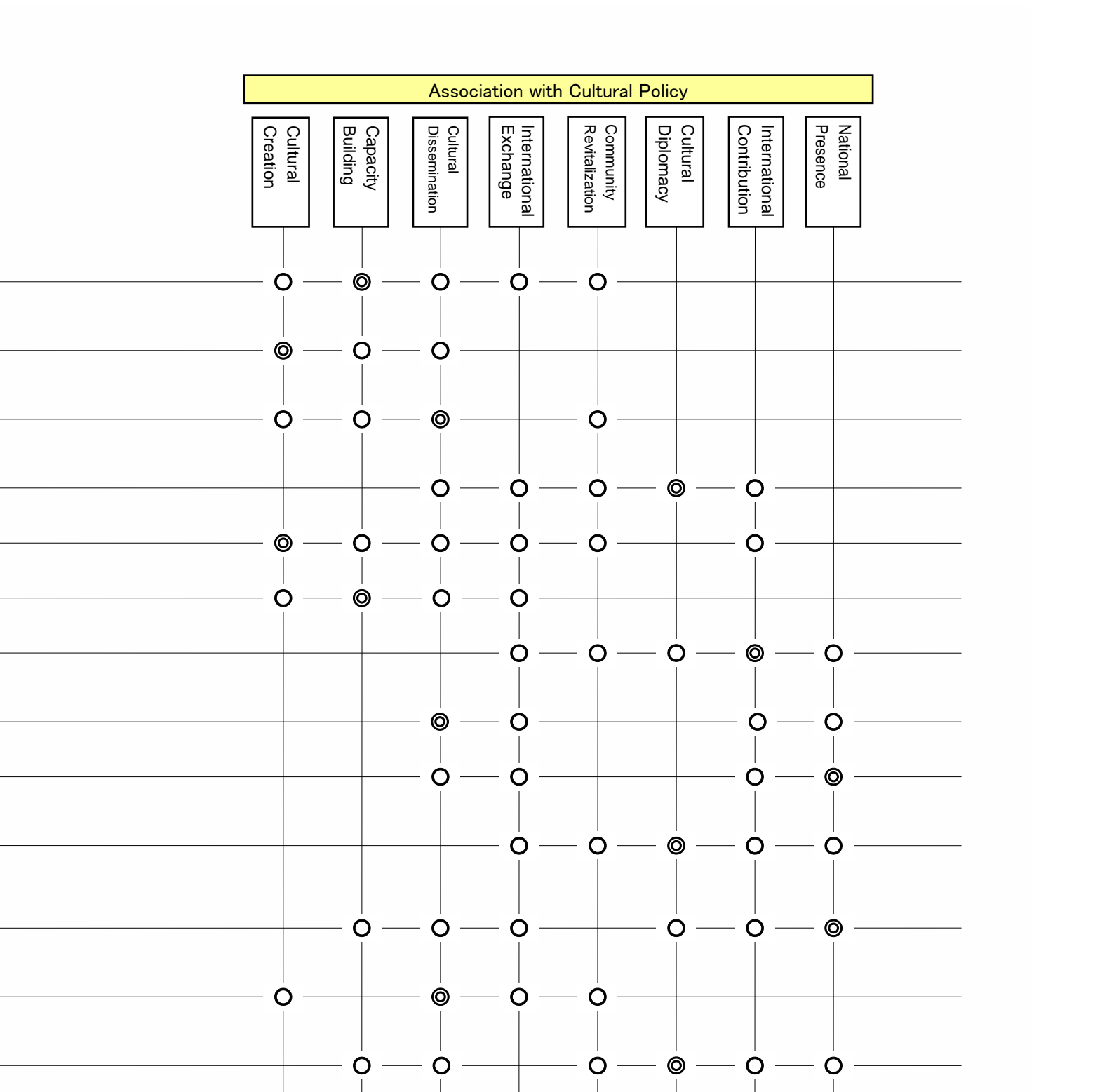
- ① Putting in place systems that support mutual exchange
- ② Investing in individual artists' research for the future, testing of unknown environments, and development of careers
- ③ Support for individual artists
- ④ Support for artists in isolated areas/regions and micro-residencies that are interspersed around the world

(3) Support and improvement through network building

- ① Building and running networks with well-defined functions and roles
- ② Establishing residencies abroad for Japanese artists in collaboration with foreign institutions
- ③ Building networks that are regional/community-based and project-specific

(4) Enhancing the visibility of artist-in-residence programs

- ① Enhancing Japan's presence and improving understanding of Japanese arts and culture in the global arts and cultural scene
- ② Developing mediating agencies that advocate for artist-in-residence programs and provide information to the government and the public
- ③ Defining the roles of national and local governments in making artist-in-residence programs sustainable



B. アーティスト・イン・レジデンスの さらなる充実と発展に向けて

1. アーティスト・イン・レジデンスの社会的意義と役割

アーティスト・イン・レジデンスは、その事業の基本的性格から、例えば劇場や音楽堂、美術館などの各種事業、あるいは音楽、演劇、舞踊等の芸術団体の公演活動などと比較した場合、社会的な意義や重要性が理解しにくいという側面を有している。

諸外国のアーティスト・イン・レジデンスにおいても、個人のアーティスト、しかも自国以外のアーティストの活動を公的な資金で支援することに疑問が投げかけられることがある、というコメントは複数の事例で聞かれた。しかし同時に、アーティスト・イン・レジデンスの意義をアピールするために、様々な取り組みが行われている。今回の調査結果から、アーティスト・イン・レジデンスは次のような幅広い意義を有するものであり、文化芸術の振興や国際的な相互理解の推進などによって、大きな役割を果たすものであることが明らかとなった。

(1) 文化芸術の振興

① 文化芸術のエコシステム(生態系)を連鎖させる、創造力の培養環境としての AIR

アーティスト・イン・レジデンスは、未知の環境や土地での経験、リサーチや思索のための時間、創作活動のための空間や設備、異なるバックグラウンドを持つアーティストたちとの出会いなどを提供している。それはアーティストの創造力を培養するための環境であり、文化芸術のエコシステムの起点、いわば創造の原点を支える営みである。

- 日本を含む世界各国のアーティスト・イン・レジデンスは、アーティストに芸術作品を生産するための環境を提供している。生産された作品は、流通したのちに蓄積され、文化芸術の一翼を形成している。
- これらの生産、流通、蓄積の流れを文化芸術のエコシステム(生態系)として捉えると、アーティスト・イン・レジデンスが置かれている位置は、アーティストの創造力のための培養環境といえることができる。
- 具体的にはアーティスト・イン・レジデンスは、日常とは異なる未知の環境や土地での経験、新しい刺激や視点を獲得するためのリサーチや実験、思索やアイデアのための時間、創作のために自由に使える空間や各種設備、異なる芸術分野や文化的背景を持つアーティスト相互の交流の機会などを提供している。
- また、レジデンス事業のための施設やノウハウを持たない芸術団体や文化施設が、アーティスト・イン・レジデンスを通じて、国際交流プログラムに取り組む開かれた機会を提供しているケースもある。
- それらが「触媒」となることで、アーティスト・イン・レジデンスに滞在するアーティストは、相互に創造力を刺激し合うことができる。またアーティストだけではなく、キュレーター、批評家、地域住民など、多種多様な人々が、アーティストの創造力に感化されて、文化芸術のエコシステムを連鎖させている。

◎ 調査結果から

- ガスワークス(英)¹では、英国の現代アートのインキュベーション的な役割をする団体と評価され、アーツカウンシル・イングランドから定期的な補助金を受けて事業を展開している。(海外 AIR 調査 p.78)
- バンフセンター(加)では、過去の滞在アーティストと講師陣の多くは様々な賞を受賞しており、センターのクオリティを証明していると同時に、プログラムにも多大な変革をもたらし、世界最大のアート・インキュベーターに発展させた原動力となっている。(海外 AIR 調査 p.221)
- サブステーション(シ)は、シンガポール初の非営利のインディペンデント・アート・センターとして、様々なジ

¹ 海外 AIR 調査からの事例引用はアーティスト・イン・レジデンスの名称、国名とも略称を用いた(序章 ii—iii ページ参照)。

左:ベターニエン(独)
右:ベターニエンのスタジオ兼住居



ジャンルを対象としたレジデンスプログラムのほか、公演、展覧会、シンポジウムなどを行う複合芸術拠点として重要な役割を担っている。特に80年代後半からの新しい芸術表現の振興に大きく貢献している。(海外 AIR 調査 p.277)

- アートスペース(豪)は、シドニー・ビエンナーレ開催場所でもあることから、国際展のリサーチで訪れる関係者との交流も期待され、豪州芸術の文化発信拠点、国際的なネットワークの結節点として機能している。(海外 AIR 調査 p.312)
- アジア欧州財団の運営するポータルサイト「culture 360°」のエディターであるジュディス・ステインズ(Judith STAINS)²⁾は、アーティスト・イン・レジデンスを“インキュベーター”(incubator、培養器)として捉えている。
- 国際的なアーティスト・イン・レジデンスのネットワーク組織、レズ・アルティスの会長マリオ・カロ(Mario CARO)³⁾は、アーティスト・イン・レジデンスの意義や偶然の出会いがもたらす価値は、「時には、レジデンスプログラムが終わり、長い時間を経てから認識されることも多い」と指摘する。
- 国内 AIR 調査の意見交換会では「全体的な生態系で言うと、アーティストという存在自体が、他の文化を運んできてその土地に何か新しいことを起こすくらいの、ある種大きなことなのではないかと思う」という意見が聞かれた。(国内 AIR 調査 | 資 p.114)

② アーティスト、クリエイター等の人材の発掘・育成やキャリアアップと新たなプロジェクトへの展開

アーティスト・イン・レジデンスは、国内外のアーティストやクリエイターたちに創造の場や機会を提供するとともに、異なる土地のアーティスト、キュレーター、プロデューサー、研究者等との交流を促すによって、新たな人材を発掘し、その才能の育成やステップアップ、キャリアアップを図っている。そこででの出会いが、国際共同制作など新たなプロジェクトに結びつくことも少なくない。

- 美術家、振付家、作曲家、戯曲家など、個人での活動がベースとなるアーティストやクリエイターは、オーケストラや劇団など集団で活動する実演芸術家と比較して、スペースや人的ネットワーク、情報やノウハウなど、創造活動に対する支援を得にくい状況に置かれている。
- アーティスト・イン・レジデンスは、滞在アーティストの選考過程で将来有望なアーティストを発掘し、創造活動のスペースを提供するだけでなく、滞在中の技術的なサポート、ノウハウや人的ネットワークの提供、専門機関や専門家と出会う機会を用意している。
- また、通常活動している地域や国とは異なる土地のアーティスト、キュレーター、研究者、批評家等との交流機会を提供し、それを契機として新たな人材の発掘や才能の育成が図られている。また、異なるバックグラウンドからアーティストの資質や作品が再評価されることで、滞在アーティストのステップアップやキャリアアップに寄与している。

◎ 調査結果から

- ベターニエン(独)では、各国の公的な芸術機関の協力によって、その国を代表する伸び盛りのアーティストを選考し、1年間の滞在期間中に、専門家のスタジオ訪問などを積極的にアレンジし、個展の機会を提供することによって、アーティストの発掘とキャリアアップに大きな成果を残している。(海外 AIR 調査 p.94)
- ISCP(米)では、アーティストやキュレーターのキャリア育成に重点を置いて活動している。アーティストやキュレーター間のネットワークを築くこと、新しい作品を生み出すためのサポートを行うことに努め、多様な価値観に基づいて国際的な視点に立った橋渡し役として活動している。(海外 AIR 調査 p.185)

²⁾ 本調査研究のアドバイザー会議委員の一人として、ロンドンでインタビューを実施した。

³⁾ 本調査研究のアドバイザー会議委員の一人として、書面インタビューを実施した。



左:デ・アペル(蘭)
右:デ・アペルのキュラトリアル・プログラムのためのプロジェクト・ルーム

- プラットフォーム・チャイナ(中)では、2005年のオープン以来、中国の若手アーティストを中心に企画展を開催し、また海外の主要なアートフェアに参加してきた。滞在アーティスト等へのキャリア形成に対するフォローアップとして、アートディレクターやキュレーターを紹介することもある。(海外 AIR 調査 p.236)
- STPI(シ)では、現代美術界を代表するアーティストが版画及び紙を媒体にした作品制作の技術とアイデアを磨くためのプログラムを実施。そこでの作品がアートフェアへ出品されることによるアート市場への貢献度も高い。(海外 AIR 調査 p.294)
- 三影堂撮影芸術中心(中)、オブジェクティブス(シ)では、写真と映像にジャンルを特化し、スキルアップを目指すアーティストや観客層への教育を大きな目的としており、同分野のアート・コミュニティの創出、そこからの優れたアーティストの輩出、鑑賞者の裾野の拡大を目指している。(海外 AIR 調査 p.232、p.299)

③ キュレーター、プロデューサー等の国際的な人的ネットワークの拡大と国境を越えた文化芸術の流通

キュレーター、プロデューサー、研究者、批評家等にとって、アーティスト・イン・レジデンス滞在中のアーティストと出会いは、直接的な対話や交流により、国際的なネットワークの拡大のために貴重な機会を提供する。それは、自国や訪問国のアーティストや文化芸術を、国境を越えて流通させるきっかけともなる。

- 近年、キュレーターやプロデューサー等の職域では、いわゆるインディペンデント・キュレーターやフリーランス・プロデューサーといった、美術館や劇場等に所属せずに国際的に活動する人材が増加している。
- こうしたキュレーター、プロデューサーに加えて、文化芸術関連の研究者や批評家等にとって、アーティスト・イン・レジデンス滞在中のアーティストとの出会いは、直接的な対話や交流ができる貴重な機会となっており、国際展やプロジェクト実施のためのリソースともなっている。
- キュレーターやプロデューサー等を支援するレジデンスでは、その国の美術館やギャラリー、劇場、アーティスト・イン・レジデンス等と連携し、国際的な活躍が期待されるキュレーター等と国内のアーティスト等とのネットワークが形成されている。
- また、諸外国ではキュレーターやプロデューサーを育成する学部や学科が大学に設置されている。アーティスト・イン・レジデンスが大学と連携することで、アーティストの創造現場における実践的なプロジェクトの実務経験の機会を、国際的な活躍が期待されるキュレーターやプロデューサー等に提供している。

◎ 調査結果から

- デ・アペル(蘭)は、教育事業の一環として、滞在型のキュラトリアル・プログラムとギャラリスト・プログラムを推進している。今では、このカリキュラムを修了したことがキャリアとして認められるようになっており、現在、第一線で活躍するキュレーターを多く輩出している。(海外 AIR 調査 p.152)
- バンフセンター(加)では、美術分野のプログラムで、大学を卒業したばかりの若いキュレーターが現場でアシスタントとして働きながら展覧会の企画、実施・運営を学べるプログラム「キュラトリアル・ワーク・スタディ」を継続的に実施している。(海外 AIR 調査 p.214)
- 三影堂撮影芸術中心(中)は、中国における非営利のアートセンターとして先駆的な活動を行ってきた。レジデンスプログラムやその他の戦略的な事業を通した海外とのネットワーク構築は、プログラムの先鋭性の確保、組織の持続のために非常に重要な意味を持っている。(海外 AIR 調査 p.233)
- ガートルード(豪)では、政府からの資金援助を受けたキュレーターの滞在プログラムを用意し、メルボルン及び国内のアート・コミュニティとの交流、ネットワーク形成を重視している。(海外 AIR 調査 p.305)

左:サンデーモーニング(蘭)
右:サンデーモーニングの工房



④ 異文化や異分野との出会いから生まれる芸術表現の革新や共同制作の環境整備

アーティスト・イン・レジデンスでの異文化や異分野との出会いや知見、経験や思索は、滞在アーティストの新たな作品制作だけでなく、後に広く影響を及ぼすような芸術表現の革新や、国境やジャンルを越えたコラボレーションへとつながる可能性を秘めている。

- アーティスト・イン・レジデンスでは、異なる文化的、社会的環境の中での生活や人と出会いによって、様々な知見、経験、思索の機会がアーティストに与えられる。
- そうした機会を得たアーティストは、滞在中に、単に新しい作品を制作するだけでなく、自己の芸術表現の幅を広げ、それまでと異なる表現スタイルを獲得していく。また、アーティスト個人の芸術表現の変化が連鎖することで、個人を越えて芸術表現の革新に広く影響を及ぼす可能性がある。
- さらに、異文化や異分野のアーティスト同士、あるいはアーティストとキュレーター等との出会いは、国境やジャンルを越えて、新たな作品のコラボレーションや、多分野間の共同制作による新領域のプロジェクト開発のきっかけにも結びついていく。

◎ 調査結果から

- サンデーモーニング(蘭)は、陶芸を専門とするアーティスト・イン・レジデンスだが、アーティスト、デザイナー、建築家を積極的に受け入れ、陶芸を用いた作品制作を支援している。芸術分野の垣根を越えた支援によって、新たな陶芸表現の追求と技術革新に力を注いでいる。(海外 AIR 調査 p.157)
- バンプセンター(加)では、芸術活動のための施設以外に、異分野の研究ステーションが整備されており、数学者や科学者が世界中から集まって共同研究に取り組んでいる。アート・プログラムとの連携も徐々に始まっており、例えば最近では、科学者、数学者が文学者と一緒に詩作をするという文学のレジデンスとの提携プログラムを実験的に行われた。(海外 AIR 調査 p.219)
- 国内調査によると、従来対象としてきたジャンルにとらわれず、異なるジャンルとの分野を越えたコラボレーションや共同作業に関心を持つアーティスト・イン・レジデンス団体が多い。「制作プロセスを重要視する滞在プログラムの実施により、新たな対話やコラボレーションを生み出し、新しい実験的な創造の場となっている」といった意見が聞かれた。(国内 AIR 調査 | 資 p.110)

(2) 文化芸術による相互理解と国際交流

① 個人対個人の信頼関係をベースにしたパブリック・ディプロマシー(広報文化交流)の促進

アーティスト・イン・レジデンスでは、一定期間、未知の場所に滞在し、ともに創作活動に取り組むことで、アーティストの間には親密な人間関係が生まれる。それは国対国、自治体対自治体といった枠組みや、政治や経済などの文脈に依拠しない広報文化交流、いわゆる「パブリック・ディプロマシー」の実践でもある。

- アーティスト・イン・レジデンスでアーティストは、数週間から数ヶ月間という一定期間、日常生活の場を離れて未知の場所に滞在する。そこでは数々の人間関係(例えば、異国のアーティスト、現地のレジデンス運営者、地元アーティスト、ボランティア、地域住民等との関係)が生まれている。
- 言語、慣習、文化的背景の異なる人間の間には、アーティストと鑑賞者、あるいはアーティストと企画者といった関係を越え、個人対個人の信頼を基盤とした親密な人間関係が形成される。
- こうした人間関係は、国家間や自治体間での国際交流の枠組み、政治情勢や経済状況などの変化に影響を受けにくい。



左: ISCP(米)
右: ISCP のスタジオ

- こうした個人同士の信頼関係をベースとしたアーティスト・イン・レジデンスは、政府主導の外交ではない、政府と民間が連携した広報文化交流、いわゆる「パブリック・ディプロマシー」の実践でもある。

◎ 調査結果から

- アローファクトリー(中)のように、運営者自身がアーティストで、小規模でインディペンデントな活動では、アーティスト同士のネットワークの中で、自発的、偶発的にプロジェクトが行われるケースが多く、個人の信頼関係をベースにした文化交流が世界のアート・コミュニティを可視化につながることもある。(海外 AIR 調査 p.241)
- ステインズ氏のインタビューによると、アーティスト・イン・レジデンスは、滞在した国の文化や芸術の理解を向上させることで、その国との感情的な結びつきを生み、その後の活動を通して、滞在した国の文化や芸術の国際的な普及に貢献している。
- カロ氏は、アーティスト・イン・レジデンスにおけるアーティストの役割は、「作品を制作するアーティストであり、文化大使であり、社会批評家でもある」と説明する。
- 国内 AIR 団体へのアンケート調査によると、「アーティスト・イン・レジデンスは、異国の芸術家と日本の人々が触れ合い、語り合うことでお互いの芸術・文化を学ぶ国際交流の場になっている」、「国際交流の趣旨は、日常的な友好関係の中で異文化を排除することなく強く意識することだろう。ここにアーティスト・イン・レジデンスの価値がある」、「海外からのアーティストが数ヶ月快適に生活できるということは、地域のパブリック・ディプロマシーのセンスがないとできないことだ」といった意見が聞かれた。(国内 AIR 調査 | 資 p.136、137)

② アーティストによる国境を越えた文化の伝播とモビリティ(移動)の活性化

古来より、文化の発展には文化芸術(芸能)に携わる人々の移動が必要不可欠だった。情報通信技術が高度に発達した現代だからこそ、メディアを介するのではなく、国境を越えて生身の人間が文化を伝播させるモビリティ(移動)を活性化させるアーティスト・イン・レジデンスは、大きな意義を有している。

- 日本の伝統文化がアジアのシルクロードを抜きにして考えられないように、古来より、世界各国の文明や文化の発展には、異国の文化や芸術(芸能)の生産や流通に携わる人々の移動を抜きにしては成立し得なかった。
- 世界各国で、文化芸術に携わる人々の移動が活性化することによって貿易や国交が発展し、貿易や国交の発展が文化の伝播を活性化させてきた循環は、現代社会においても大きな意義を持っている。
- 地球規模での情報通信技術の発達によって、今や世界中のニュースをリアルタイムで知ることができる。その一方で、国境を越えて、生身の人間が直接的に対話しコミュニケーションができる国や地域には、その国の政治・経済の事情によって大きな偏りが存在することも事実である。
- そうした中でアーティストは、政治や経済の文脈から離れ、文化芸術への興味と関心を動機として国境を越えて移動できる存在である。古来より受け継がれてきた、文化を伝播させる生身の人間としてのアーティストの役割を再認識し、そのモビリティ(移動)を活性化させることは、国際的な相互理解に大きく寄与するものである。

◎ 調査結果から

- デルフィナ財団(英)は、中東諸国という特定の地域、国との間でアーティストの相互交流を促進することで、英国とそれらの国や地域との間に独自のネットワークを構築している。(海外 AIR 調査 p.71)
- ISCP(米)では、創設以来18年間で米国を含む58ヶ国、1,700名以上のアーティストとキュレーターを受け入

左:レッドゲート・レジデンシー
(中)
右:レッドゲート・レジデンシーの
スタジオ兼住居



れてきたが、南アフリカを除くサハラ以南のアフリカや、ブラジル以外の中南米からの滞在アーティストは今までに滞在したことがない。そのため、これまで十分な支援を提供していない国・地域からアーティストを招へいすることも今後の目標としている。(海外 AIR 調査 p.188)

- 国内 AIR 団体の意見交換会では「アーティストだけが政治、経済と関係なく国境を越えられる存在ではないだろうか。国際化と言っても国と国との利害関係の付き合いではなくて、他の国、他の地域で生まれた人とうまく付き合うかということが、国際化の原点ではないか」との意見が聞かれた。(国内 AIR 調査 | 資 p.137)

③ 世界的視野での文化芸術の振興に対する日本の国際貢献

こうしたアーティスト・イン・レジデンスを日本が積極的に展開し、国内外のアーティストの新たな才能の発掘や育成、作品の創造過程の支援などを行うことは、文化芸術の振興に対する国際貢献につながる。とりわけアジアにおける文化芸術の振興に対する日本の国際貢献の社会的な意義は大きいと考えられる。

- 文化芸術のエコシステム(生態系)において、アーティスト・イン・レジデンスが果たす創造力の培養環境としての役割を、世界的な文化芸術の振興という側面からも、各国の政府機関は重要な取り組みに位置づけている。
- 現在の日本のトップレベルのアーティストの中には、過去に海外のアーティスト・イン・レジデンスに参加し、才能の発掘や育成、作品の創作支援による恩恵を受けた人材も多く、それによって日本の文化芸術の国際的な評価が確立されていると言っても過言ではない。
- その一方、世界的視野での文化芸術の振興に対する日本の国際貢献の度合いは、日本が欧米諸国を中心とした海外のアーティスト・イン・レジデンスから受けた恩恵と比較すると十分とは言えない状況である。
- とりわけアジアにおける文化芸術の振興に対する国際貢献は、近代以降の東洋と西洋の結節点として果たしてきた日本の立場や役割を考えると、極めて意義が大きいと考えられる。

◎ 調査結果から

- バンフセンター(加)では、国際的なパートナーシップで参加したアーティスト全員に、滞後、自国に戻ってから、センターでの体験や成果の報告、広報に協力することが義務づけられている。参加したアーティストの体験談が、それぞれのコミュニティに広がることによって、各国でセンターの評価が高まり、広がることは大きな意味がある。(海外 AIR 調査 p.221)
- レッドゲート・レジデンシー(中)では、2012年度の実績で20ヶ国、75名のアーティストが滞在したが、日本人のアーティストは、2002年の事業開始以来、3名しか実績がない。その理由として、ひとつには言語、そしてアーティスト・イン・レジデンスそのものが知られていないことが課題となっている。(海外 AIR 調査 p.231)
- 国内調査によると、「アーティスト・イン・レジデンスは、経費を負担したり、制作場所や宿泊先を提供して、異国の芸術家を招へいし、活動させることで、ひいては被招へい国の芸術・文化を発展させることになり、国際貢献している」という意見が聞かれた。また、複数の国内団体では、韓国、中国、東南アジア諸国などのアジアとの交流を重視したプログラムを展開している。(国内 AIR 調査 | 資 p.136)
- また、同じく国内調査では、とりわけ東南アジアとの交流の場合、日本と現地との貨幣価値の差が大きく、ほとんどのアジア諸国には自国の予算がないため、(日本以外の)アジア諸国がアーティストを招へいするという形がとりにくいという課題が指摘されている。(国内 AIR 調査 | 資 p.127)



左:カーイシアター(ベ)
右:カーイシアターのエントランス
のカフェ © Kaaitheater

(3) 地域活力の創出と産業振興

① 地域における文化多様性や異文化交流による寛容性の育成

アーティスト・イン・レジデンスの立地する地域に、アーティストや外国人といういわば「異分子」が一定期間滞在し、地域の住民と出会い、交流することで、当該地域における文化の多様性に気づきをもたらし、異文化との交流によって、考え方や価値観の違いを受け入れる寛容性が育まれる。

- アーティスト・イン・レジデンスの立地する地域にとって、そこを訪れ、滞在し、帰っていくアーティストや外国人は、地域の住民から見れば、いわば「異分子」としての存在である。
- その異分子が、一定期間滞在し、リサーチ、ワークショップ、アウトリーチ、オープンアトリエ等の機会に住民と出会い、交流することで、異なる文化に対する理解や親近感が生まれ、文化多様性への気づきをもたらす。
- そうした活動と文化多様性への気づきは、当該地域の様々な場面で、人々が地域と溶け込むきっかけを提供することにつながる。
- また、異文化との交流では、考え方や価値観の違いが顕在化する。滞在アーティストが毎年変わり続けることで、地域の住民は、多様な考え方や価値観を常に受け入れることが必要となる。アーティスト・イン・レジデンスは、地域の寛容性を育み、強化することに寄与しているのである。

◎ 調査結果から

- アーティストや芸術団体は国際化する一方で、地域や観客との接点を希薄にしてしまう傾向がある。カーイシアター(ベ)では、地域、観客、アーティストの対話を活性化し、関係を再び深めていくことを目的としてレジデンス事業に取り組んでいる。(海外 AIR 調査 p.165)
- バンフセンター(加)の参加者は国際的で、カナダ全土や世界各国からアーティストが含まれている。カナダの先住民系のアーティストも数多く参加しており、モンゴル、ニュージーランド、マオリ族など他国の先住民系のアーティストも積極的に招へいし、国際交流を促している。(海外 AIR 調査 p.214)
- パフォーマンス・スペース(豪)では、プロジェクトの約20%が先住民(アボリジニ)対象としたもので、地域固有の文化の多様性を確保している。(海外 AIR 調査 p.319)
- 国内 AIR 団体の意見交換会では、「毎年のこととして受け入れて行くということは、やっぱり地域の寛容性が上がっていくことでもあるし、いろんな気づきというものが生まれてくる」、「地域に変わった人がいるというか、変な人がいるということで地域の人が多様性を担保することにつながる。それを、自分の地域に自分がいてもいい、変わった人でも地方で生きていけるということに結びつけていきたい」といった意見が聞かれた。(国内 AIR 調査 | 資 p.133)

② 創造的人材の定住・交流、創造的な「磁場」の形成

アーティスト・イン・レジデンスは、アーティストなどの国境や地域を越えた交流を促すことで、そうした創造的人材の定住に結びつく可能性がある。そのことがまた、新たな創造的人材を呼び寄せるような「磁場」を形成する可能性も大きい。

- アーティストやクリエイター等が訪れ、一定期間を滞在していくアーティスト・イン・レジデンスでは、創造的な営みを専門とする人材の、国境や地域を越えた出会いと交流を促している。
- とりわけ、人口規模の小さい地方の市町村にとって、地域外から創造的人材が到来するインパクトは大きい。若者の都市部への流出が課題となっている地域等では、身近な場所に創造的人材が存在することで、

左:バンフセンター(加)
右:バンフセンターのペントレー
室内楽スタジオ



アーティスト・イン・レジデンスは世界に開かれた窓としての役割を担うことになる。

- また、アーティストやクリエイター等の創造的人材の出会いと交流は、「創造的な磁場」とも言える環境を生み出し、新たな創造的人材を呼び寄せることにつながる。そこには文化芸術に限らず、新たな創造産業や社会起業などの可能性が生まれる。

◎ 調査結果から

- バンフセンター(加)では、「創造性を刺激すること(inspiring creativity)」というミッションと、「芸術・文化を通じてカナダの創造性や知識の向上に貢献すること」というビジョンを掲げており、芸術、科学、ビジネス、環境分野における創造的な活動の発展と振興の牽引役として、国際的な名声を獲得している。(海外 AIR 調査 p.210)
- 国内調査では、人口規模の小さな地方の市町村にも数多くのアーティスト・イン・レジデンスの事例があり、それらの中には、アーティスト・イン・レジデンスが「世界への開口部」、「世界への窓口」といった意味合いを有しているところも少なくない。(国内 AIR 調査 | 資 p.113)
- 国内 AIR 団体の意見交換会では、「アーティストの創造的な価値観は、レジデンスをする地域、スペース、劇場を通して、滞在する地域の人々にダイレクトに影響を与えることができる」、「アーティストは、その未知数さを含めて特殊な能力を持つ存在。その何か不可解な人を、周りの人が理解するためにザワザワし始めるといことが決定的なこと」といった意見が聞かれた。(国内 AIR 調査 | 資 p.132、134)

③ 都市や地域の文化資源に対する新しい視点の獲得、国際的プレゼンスの向上

一定期間、同じ場所にアーティストが滞在することで、アーティスト・イン・レジデンスの立地する都市や地域が保有する文化資源を再発見し、新しい視点を獲得できる。また、その都市や地域をハブ(結節点)としたネットワークが形成され、当該都市・地域の国際的なプレゼンスの向上に大きく寄与できる。

- アーティスト・イン・レジデンスには、様々な国や地域のアーティストが一定期間、同じ場所に滞在する。異なる文化的背景を持ち、複数の土地に滞在した経験のあるアーティストには、滞在する都市・地域が保有する、他にはない文化資源を再発見することができる。
- アーティストによる文化資源の再発見によって、その都市・地域の文化を読み替える新しい視点を獲得できる。例えば、かつて近代産業を支えた遊休施設が経済的には負のイメージを持つ場合でも、アーティストが文化資源として読み替え、活用することで、創造的なイメージに転身させることが可能である。
- また、そうした都市や地域から、各国のアーティスト・イン・レジデンスをハブとする国境を越えたネットワークが形成されることで、従来の自治体提携による友好都市や姉妹都市提携のように特定の都市とは異なる形で、当該都市や地域の国際的なプレゼンスを高めることに寄与できる。

◎ 調査結果から

- アカデミー・ソリテュード(独)は、これまでに滞在した1,100名のアーティストの80%と何らかの形でコンタクトを継続している。それは、地域や世代、文化的な背景を超え、シュトゥットガルト市を起点にした独自の世界的ネットワークを形成しており、そのことが市からも高く評価されている。(海外 AIR 調査 p.87)
- 国内 AIR 団体のアンケート調査では、「事業を通じてコミュニティ内における芸術の振興、国際交流の場の普及などにより、新しい発見、価値観、交流が生まれ、内部の住民の意識の変化や地域資源の再発見による魅力の形成等を促し、交流人口の増加にも結び付くと思われる」、「レジデンス事業の実施を通じて『日本の文化的魅力とプレゼンスの向上』という社会的なインパクトにつながっている」などの回答があった。(国内 AIR 調査 | 資 p.132、133)



左:STPI(シ)の倉庫を改装した建物
右:STPIの版画スタジオ

- カロ氏は、アーティスト・イン・レジデンスが、アーティストの創造的活動のために時間と場を提供することに主眼を置いていることに加えて、アーティストの制作が、異なる文化、背景に対して大きな意義をもたらしてきたと説明する。その上で、「滞在アーティストと地域コミュニティとの間の有益な関係性をもたらすために、いかに主催組織が運営を行っているかが、優れたレジデンス経験になるかどうかに関係する」と指摘する。

④ 地域資源としての歴史的建造物、遊休施設の有効活用、地域産業の再生と再構築

地域における歴史的建造物や、遊休施設を活用したアーティスト・イン・レジデンスは国内外に多数の事例がある。そうした不動産資源を有効活用しながら、文化芸術の振興に大きな役割を果たすアーティスト・イン・レジデンスには、地域に多様かつ固有の価値を与え、「グローカル」な地域産業や文化観光への可能性が開かれている。

- アーティスト・イン・レジデンスの国内事例には、地域の空き店舗、空き倉庫、廃校などの活用例が数多くあり、海外事例では、工場や港湾施設など産業遺産、古城や修道院などを活用する事例が多数ある。
- そのような地域の遊休施設などの不動産資源を創造的な視点から有効活用し、地場産業や観光との連携を視野に入れたアーティスト・イン・レジデンスも見られる。
- アーティスト・イン・レジデンスは元来、グローバルな存在として世界に開かれていながら、立地する都市や地域のローカルな多様性が重要な存在意義となっている。そうした観点から、アーティスト・イン・レジデンスには「グローカル」な文化観光の可能性が開かれている。

◎ 調査結果から

- 国内 AIR 団体のアンケート調査では、「当該レジデンスが推進する水性版画は、薬品処理を必要としないため環境に優しい版画技法として海外から関心が寄せられていることから、今後、当該プログラムの更なる普及活動により、国内の素材、道具のメーカーや、伝統木版画の高度な職人の活性化に貢献できればと考えている」との回答があるほか、地域特有の伝統技法である地場産業の活性化のためにも、アーティスト・イン・レジデンスに期待が寄せられている意見があった。(国内 AIR 調査 | 資 p.136)
- 同じく国内 AIR 団体のアンケート調査では、「アーティストが制作した作品や、そのアプローチが新しい地域コミュニティを形成したり、観光と結びつき新たな観光商品(サービス)が組成されたり、地域に何らかの形でアーティストの痕跡が残って行くこと」を成果としている意見が見られた。(国内 AIR 調査 | 資 p.112)

左:ライクスアカデミー(蘭)
右:ライクスアカデミーのグラフィックワークショップ



2. 望ましいプログラムや運営、施設の内容と方向性

このようにアーティスト・イン・レジデンスには幅広い意義や社会的役割が認められる。それらを踏まえた上で、これからのアーティスト・イン・レジデンスに求められる望ましいプログラムや運営の方向性、施設の内容などについて、今回の調査結果から次のとおり整理した。

(1) レジデンス事業の方向性と施設の内容

① アーティスト・イン・レジデンスの目的の明確化と、相応しい運営手法の構築

アーティスト・イン・レジデンスは設立の経緯や目的、プログラムの内容や運営などの点で、実に多様なタイプが存在している。まずは目的を明確に設定し、それに相応しいプログラムや運営を戦略的に構築していくことが肝要だと思われる。

- 今回の調査事例を俯瞰すると、アーティスト・イン・レジデンスには大きく3つの目的とそれに対応したプログラムを見出すことができる。
 - 創造と思索のための空間・時間の提供
 - キャリアアップの多面的な支援
 - アートやアーティストを介したコミュニティの活性化
- また、プログラムの運営手法を整理すると、大きく3つのタイプに整理することができる。
 - プログラムの内容が固定され、滞在スケジュールもほぼ固定されているタイプ (structured)
 - プログラムの方向性はあるが、アーティストが自由にスケジュールを管理できるタイプ (semi-structured)
 - アーティストは自由にスケジュールを管理できるタイプ (unstructured)
- 実際には複数の目的とそれを達成するための運営手法を組み合わせたものが多いが、限られたリソースで成果を達成するためには何をを目指すのか、目的を明確にすることが重要である。
- その目的に相応しいプログラムや運営の在り方を、限られたリソースの強みを生かしながら戦略的に構築し、レジデンス事業の当事者や関係者と目的を共有することが肝要だと思われる。

◎ 調査結果から

- ベターニエン(独)は、プロジェクト活動(技術スタッフからの作品制作に関する専門的支援、キュレーター、批評家、ジャーナリスト等との交流の機会の提供)、プレゼンテーション(展覧会の開催、カタログ作成など)によって、滞在アーティストの「エージェント」的な役割を担っている。(海外 AIR 調査 p.93)
- ライクスアカデミー(蘭)は、アーティストや美術史家、キュレーターなどからなるアドバイザーとの意見交換、テクニカル・アドバイザーによる技術指導や新たな制作技術の開発、といった具合に、作品の構想段階と制作段階のそれぞれに専門的な支援を受けられるようになっている。(海外 AIR 調査 p.146)
- アローファクトリー(中)は、大規模な施設やインスティテューションとは異なり、拠点の立地条件、ネットワーク構築及び活動のすべてがヒューマンスケールである。そのため、地域社会への日常的なコミットにおける参加アーティストの当事者意識、ポテンシャルが高い。(海外 AIR 調査 p.240)
- ムンレ芸術工場(韓)の事業は、オルタナティブな空間を運営する人たちが集まって結成された「ムンレ・オルタナティブ・ネットワーク」が中心になって運営されている。近隣の工場労働者、中小企業の経営者、地域住民とのコミュニケーションプログラムが増えており、地域の特性を生かしたコミュニティ活動を支援している。(海外 AIR 調査 p.260)



左:アカデミー・ソリテュード(独)
右:アカデミー・ソリテュードの食堂

- ステインズ氏は、アーティスト・イン・レジデンスは「Artistic infrastructure または Business という視点から、求められる機能が分かれることになる」と言う。

② アーティストの成長段階に応じた、適切な時期での必要なプログラムの提供

レジデンス事業は、アーティストのステップアップやキャリアアップにおいて、貴重な機会を提供するものである。そのため、参加するアーティストの成長段階に応じた適切なタイミングで、中長期的な成長を視野に入れながら必要なプログラムを提供することが重要である。

- アーティストに対して、思索や創作のための時間と空間が与えられるアーティスト・イン・レジデンスは、アーティストが従来とは異なる環境の中で経験や実績を蓄積し、さらなるステップアップやキャリアアップを目指す貴重な機会を提供するものである。
- 受け入れるアーティストの基本的な要件として、例えば大学卒業後3年以上は芸術活動を実践してきたことなど、一定の経験年数がありプロを目指していることが求められる事例が多い。
- その上で、アーティストの経験や実績、人的ネットワーク、社会的な評価、創作活動の考え方、生活状況などを考慮し、成長段階に応じた適切なタイミングで、レジデンスの機会を提供することが求められる。
- また、レジデンスプログラムを短期的な視野で捉えることなく、アーティストが将来にわたって創作活動を継続していくために、中長期的な成長を視野に入れた必要な経験を与えられるものとなっているのか、を検討する必要がある。

◎ 調査結果から

- アカデミー・ソリテュード(独)は、アーティストたちがアート市場の動向などに目を奪われることなく、何をやりたいのかを追い求める時間と空間を与えることが最大の目的で、滞在期間の3分の2を施設内で過ごすこと、月に一度の全員での食事会に参加すること以外に、一切の義務や拘束がない。(海外 AIR 調査 p.86)
- ISCP(米)は、アーティストやキュレーターのキャリア育成に重点を置いて活動し、世界中の若手から中堅アーティスト及びキュレーターにスタジオや新しいチャンスを与えることを通して、プロとしての資質を養成している。滞在アーティスト自身もキャリアアップの機会を強く意識している。(海外 AIR 調査 p.185)
- エイペックスアート(米)は、芸術活動において最も必要なことは考える時間だと認識しており、アーティスト・イン・レジデンスに参加している期間を、創作活動から一旦距離を置くための時間とみなしている。レジデンスを終えた後、内面を豊かにし、質の高い作品を創ることによって、自然と次のチャンスが訪れてくると考えている。(海外 AIR 調査 p.195)
- バンフセンター(加)では、すでにキャリアを築き始めている中堅レベルのアーティストやクリエイターたちが、さらなるキャリアアップ、ステップアップをするためにサポートすることを事業の目的としている。(海外 AIR 調査 p.210)

③ 目的や内容に応じた施設・設備の整備、限られた施設・設備で最大化する事業成果

アーティスト・イン・レジデンスに必要な施設は、基本的に、創作、滞在、発表のためのスペースや設備である。しかし、レジデンス事業の目的やプログラムの内容によって必要とされる施設や設備の考え方は大きく異なる。また、保有する施設や設備で最大限の成果を得るための事業やプログラムの工夫が肝要である。

- 国内、海外の調査事例を俯瞰すると、アーティスト・イン・レジデンスには創作スペース(スタジオ、アトリエ、技術工房等)、滞在スペース(ゲストハウス、ゲストルーム等)、展示・発表スペース(ギャラリー、ホール等)、その他共用スペース(食堂、キッチン等)の施設や設備が設けられている。

左:ガスワークス(英)のスタジオ
右:ガスワークスのギャラリー



創作スペース:対象となるジャンルの創作活動のための基本的な広さ(間口、奥行き、高さ)を備えた空間に、専門的な設備や備品が整備されている。個別のジャンルに応じた専門的な設備や技術者をスタジオとは別に備えた事例もあるが、必要とされる技術が多様化、高度化していることから、アーティストの要望に合わせて地域の外部機関に発注するケースも増えている。

滞在スペース:滞在のみのゲストハウス、ゲストルーム形式を保有する施設の場合、多くは単身者用のシングルルームとなっている。またリビングルームを付帯するなど、グループやパートナーや家族を伴う滞在が可能な施設もあり、滞在期間や招へい目的によって設備が整えられている。一方、スタジオと滞在スペースが一体となったスタジオ兼住居を、個人のアーティストが占有する例も多い。

発表スペース:ギャラリーやホールなど、滞在制作の成果を展示・発表する場や、レクチャーやワークショップなどを行うスペースが整備されている場合もある。レジデンス事業と連動した企画を行う場合もあるが、ギャラリーやホールとして独立して企画展示や公演を行う場合も珍しくない。

その他共用スペース等:食堂、キッチン、バスルームなどが個室の滞在スペースと一体となっている場合もあるが、滞在アーティスト同士の交流を促す目的や管理の利便上から、共用スペースを持つ施設もある。特に食堂については、滞在アーティスト相互の重要なコミュニケーションの場となっているところが多い。

- いずれのスペースも、レジデンス事業の目的やプログラムの内容によって、あるいは施設の立地や条件(市街地か郊外か、あるいは新築か旧建築利用かなど)によって、必要とされる(あるいは必要としない)施設や設備の考え方、仕様は大きく異なっている。
- また、施設や設備が必ずしも十分でないことが、事業の制約となる場合もあるが、その中で最大限の成果を得るために、様々な外部機関との協力や連携といった運営の努力も行われている。

◎ 調査結果から

- ガスワークス(英)には、スタジオ11部屋とギャラリー1部屋があるが、建物の中に宿泊施設はないため、滞在アーティストが共同生活できるアパートを別の場所に借りている。滞在アーティストは他の複数のアーティストと共同生活をするため、孤独になることはないという。(海外 AIR 調査 p.81)
- サンデーモーニング(蘭)は、生活施設と作業施設で構成される。12部屋のバストイレ付のゲストルームと共同キッチンのある生活施設には、滞中に最低限必要なものが備えられている。作業施設には、プライベートスタジオと作陶の各工程に対応した設備や材料がすべて整っている。そのため、滞在者は施設の外に出ることなく制作に集中することができるという。(海外 AIR 調査 p.160)
- プラットフォーム・チャイナ(中)は、オープン当初は5部屋のスタジオ兼住居を保有していたが、現在はプログラムを再考するため1部屋に限定して運営を行っている。その理由を「多くの滞在者を受け入れることは実績となるが、一方で十分な対応ができないことに疑問を持った。目的を持って滞在する人たちのために最適な環境をつくりたい」とレジデンス運営者は言う。(海外 AIR 調査 p.238)
- シアターワークス(シ)では、アーティスト・イン・レジデンスの専用施設はないが、もともと米穀倉庫だった建物を改装した拠点施設を柔軟に活用して事業を展開している。施設の2階部分にはミーティングスペースとしても使えるギャラリーがあり、ロフト部分にシアターワークスの事務所がある。イベントの形態によっては事務所スペースを移動させることもあるという。(海外 AIR 調査 p.291)

(2) アーティストの選考や支援の内容・方法

① 指名、推薦、公募が考えられるアーティストの選考方法と海外機関との提携



左:シテ・デザール(仏)
右:シテ・デザールのスタジオの表札。サブスクリイパー「英国のロイヤル・カレッジ・オブ・アート」の名称を掲示

レジデンスプログラムにおけるアーティストの選考方法は、大きく指名、推薦、公募という3つのタイプがある。それぞれのタイプでアーティスト・イン・レジデンスの運営組織が独自に選考を行う場合と、海外の専門機関と提携し、パートナー関係を結んで選考する場合がある。後者の場合、相互交流となるよう派遣と受け入れの両面で事業提携を行うことが望ましい。

- レジデンスプログラムは、アーティストなら誰でも自由に参加できるわけではない。アーティストは一定の要件に基づいて選考される。選考方法には、指名、推薦、公募という大きく3つのタイプが考えられる。
指名:アーティスト・イン・レジデンスの運営者が滞在アーティストを指名する。主催者自身が単独で指名する場合もあれば、例えば提携している海外の専門機関や、現地の事情に精通した専門家や有識者といった個人による指名のケースもある。
推薦型:レジデンス事業の目的や趣旨を理解する個人や団体、事業のパートナーとなる海外の専門機関等に推薦を依頼する。推薦者のリストからレジデンス運営者が最終的に選考する場合と、海外の専門機関との協議によって選考する場合とがある。
公募型:滞在アーティストに求められる要件などを明記した上で国内外から広く公募し、応募者の中から最適な人材を選考する。主催者が独自に公募・選考する事例だけでなく、海外の機関等の協力を得て公募を行い、レジデンス運営者が最終選考するケースもある。
- 指名、推薦、公募のいずれの場合でも、アーティストが活動する現地の事情やアーティストの評価に詳しい海外の専門機関と提携して選考する場合がある。そうした場合には、相互交流となるよう派遣と受け入れの両面でパートナーシップ関係を結ぶことが望ましい。

◎ 調査結果から

- シテ・デ・ザール(仏)は、318部屋のスタジオ兼住居の約8割はサブスクリイパーと呼ばれるフランス及び海外の政府機関、公立や私立の文化機関、大学などの教育機関が所有しており、各機関が推薦したアーティストをシテ・デ・ザールが承認して入居する仕組みになっている。(海外 AIR 調査 p.114)
- ベターニエン(独)では、将来の成長が期待できるアーティストを、諸外国の公的機関と連携して選考している。(海外 AIR 調査 p.94)
- エイペックスアート(米)は、公募は行わず推薦のみでアーティストを選考している。プログラムに参加することがその人物にとってプラスとなると思われる候補者を推薦者から推薦してもらう。プログラム参加者の条件は、30歳以上であること、これまでにニューヨークにきたことがないことである。(海外 AIR 調査 p.197)
- プラットフォーム・チャイナ(中)では、駐北京ノルウェー大使館とノルウェー現代美術財団が共同するレジデンスプログラムと提携し、年に2名程度の滞在者を受け入れている。希望者はノルウェー現代美術財団が公開する申請書に従って応募し、選考される。(海外 AIR 調査 p.236)

② プログラムの目的や内容に応じた公募回数や審査期間などの柔軟な設定

公募する場合は、レジデンスプログラムの目的や内容に応じて、公募の随時受付、年間複数回の公募、短期間で選考結果が通知できる審査期間など、柔軟な運営が望まれる。

- 海外派遣・研修に係るファンド・グラントには、次の3つのタイプのプログラムがあり、年間の公募回数や、審査期間について、それぞれ次のような傾向が見られる。

プログラムの目的・内容のタイプ	公募回数	審査期間
スーツケースグラント型:海外のフェスティバルやアートフェア等に参加するための旅費を支援するタイプのプログラム	随時	1-3ヶ月

左:アローファクトリー(中)
右:アローファクトリー周囲の胡同
(フートン)と呼ばれる路地



トラベル・グラント型:長期滞在よりも、アーティストの移動による交流を促進するための旅費を支援するタイプのプログラム	年2-3回	1-3ヶ月
アーティスト・イン・レジデンス提携型:海外の機関とのパートナーシップによる長期滞在を支援するタイプのプログラム	年1回	3-6ヶ月

- このように、海外のファンド・グラントのプログラムの目的や運用方法を参考に、公募の随時受付や年間複数回の公募など、柔軟な運営によって、より多くのアーティストに門戸を開くことができると考えられる。

◎ 調査結果から

- アーツカウンシル・イングランド(英)では、年3回公募し、応募締切日から6週間以内で結果を通知している。ただし、同一個人または同一団体からの申請は、年1回に限られている。(ファンド・グラント調査 p.361)
- ケベック・アーツカウンシル(加)のレジデンス提携プログラムは、ケベック・アーツカウンシルが一次審査を、パートナーが最終審査をするため、応募締切日から結果の通知までに最大で8ヶ月を要している。(ファンド・グラント調査 p.391)

③ アーティストの行動様式や交流の在り方を左右するレジデンスの空間と時間

アーティスト・イン・レジデンスの目的や内容が多様であると同時に、そのプログラムで提供する空間(施設や設備の規模と内容)や時間(滞在期間の長さや期間中のプログラム)も、多様である。提供する空間や時間によって、参加するアーティストの行動様式や交流の在り方は左右される。

- 今回の海外調査事例を俯瞰すると、レジデンスプログラムが提供する空間(施設や設備の規模と内容)には、同じアーティスト・イン・レジデンスとして比較が困難なほど多様であった。例えば、広大な敷地に高度なスタジオ施設や宿泊設備の整った複合施設から、小さな空き家や空き店舗を活用したものまで、極めて幅広い。
- また、提供する時間(滞在期間の長さや期間中のプログラム)も、アーティスト・イン・レジデンスの目的や内容によって大きく異なっている。例えば、必ずしも作品制作や作品発表を求めないレジデンスでは、アーティストに思索や実験のために自由な時間を与えることが多く、ステップアップやキャリアアップを明確な目的とするレジデンスでは、作品の創作や発表のための支援プログラムを優先させる傾向がある。
- それぞれのプログラムが提供する空間や時間によって、参加するアーティストの行動様式や交流の在り方は左右されるため、アーティスト・イン・レジデンスの目的や内容と、提供する空間や時間がマッチングしているかどうかは、事業の成果に大きな影響を与えられられる。

◎ 調査結果から

- アカデミー・ソリテュード(独)は、シュトゥットガルトの市内を望む小高い丘の広大な敷地を有する、まさに「ソリテュード(孤独)城(Schloss Solitude)」を拠点としている。アーティストにとって、日常の慌ただしい生活から距離を置き、自分自身と向き合い、制作に向けて集中できる場所にふさわしいという発想から、アーティスト・イン・レジデンス施設の構想が生まれた。(海外 AIR 調査 p.85)
- アローファクトリー(中)は、賑やかな表通りを裏手に入り、下町風情の民家や小さな商店が連なる路地の一角の青果店だった場所を活用している。テンポラリーな形での発表を行い、展示期間中は通りに面したウィンドウギャラリーを通して、24時間いつでも誰でも作品を観ることができる。(海外 AIR 調査 p.239)

④ アーティストに対する資金的支援の考え方

海外の主要なアーティスト・イン・レジデンスでは、渡航費を含めた経費全額を支援する例は少ない。一



左:デルフィナ財団(英)のプロジェクトスペース
右:デルフィナ財団のスタジオ兼住居

方、過去に交流の実績が少ないことや、経済的もしくは政治的な事情を考慮して諸外国のアーティストを支援する海外のアーティスト・イン・レジデンスではフルサポートで活動資金を提供する場合が多い。

- 今回の海外調査事例を俯瞰すると、主要なアーティスト・イン・レジデンスでは、参加アーティストの渡航費を含めた経費全額を支援する例は少なく、出身国の公的機関などで自ら調達することが条件となっている例が少なくない。
- その一方で、歴史的・社会的な経緯から、過去に交流の実績が少ない国や地域や、経済的な格差が大きいためレジデンスに参加することが困難な国や地域で活動するアーティストには、渡航費を含めた経費を支援する事例も見られる。
- アーティストの国や地域によって支援対象経費の考え方を区別している事例では、レジデンスの運営者の意思だけではなく、アーティストの派遣を助成する当該国の機関の目的や意向に沿って条件を設定している場合もある。

◎ 調査結果から

- デルフィナ財団(英)は、中東と北アフリカの国や地域との国際的な共同事業を軸とした文化交流の促進、創造的な試みの推進をミッションとしている。国内外の文化機関との数々のパートナーシップをネットワーク化することで、資金調達に取り組んでいる。(海外 AIR 調査 p.75)
- ガスワークス(英)では、アーティストを招へいしてプログラムを運営するためには、一人当たり約7,000ポンド(105万円)の費用が必要で、その全ての費用をパートナーに負担してもらおう場合と一部を負担してもらおう場合がある。費用の一部しか負担してもらえない場合でも、海外にパートナーがいることでブリティッシュ・カウンシル等から残りの費用を助成してもらいやすくなるという。(海外 AIR 調査 p.81)
- サンデーモーニング(蘭)のインディビデュアル・レジデンシーは、スタジオ代、ゲストルーム代、技術指導とその他のサービスを含む滞在費と税金(21%)を前払いで支払う必要がある。それは、サービスを提供する立場を明確にし、全員が同じ条件でコストを負担することを重要だと考えているため、その公平さが滞在者の結びつきを強める効果もあるという。(海外 AIR 調査 p.158)

(3) プログラムの多様性や展開の可能性

① コミュニティへの成果還元(展示・公演、オープンスタジオ、ワークショップ、レクチャー等)の在り方

国内と海外のアーティスト・イン・レジデンスでは、成果を還元するべき「コミュニティ」の捉え方が異なっている。国内では地域住民(納税者)に対して、海外ではアート・コミュニティ(アーティスト、芸術分野の専門家や関係者、芸術機関、文化施設、学生等)に対して、成果の還元を重視する傾向がある。

- 日本の多くのアーティスト・イン・レジデンスでは、「コミュニティ=地域住民(納税者)」と捉えた上でその成果の還元先として地域との交流を重視している場合が多い。一方海外では、主として、主催者あるいは芸術機関を中心としたアーティスト、芸術分野の専門家や関係者、芸術機関、文化施設、学生などの「アート・コミュニティ」に対する成果の還元が重視されている。
- 海外事例での「コミュニティ」の捉え方は、展示や公演などの作品発表、オープンスタジオ、ワークショップやレクチャーといったプログラムにおいて、以下のような傾向に表れている。

作品の発表(展示・公演):海外のレジデンスの多くは、滞在条件として展示、公演などを義務づけておらず、新たなクリエイションや制作のプロセスを重視しており、成果発表や交流についてはアーティスト個人の判断あるいは主催者との協議によって実施される場合が多い。

左:PACT(独)
右:PACT のスタジオ



オープンスタジオ:オープンスタジオによる地域のアート・コミュニティとの交流は積極的に行われており、パブリックプログラムとしての条件に位置づけられているケースが多い。

ワークショップ・レクチャー:各施設、活動団体、組織を中心としたネットワークであるアート・コミュニティへの教育プログラムとして位置づけられているケースが多くみられ、条件として義務づけられている場合や、アーティスト個人の活動に委ねられる場合もある。

- 上記のようなコミュニティへの成果還元以外にも、レジデンスで創作された作品を収蔵する活動もいくつかの事例で見られる。

◎ 調査結果から

- ISCP(米)では、施設内にあるギャラリーやイベントスペースで展覧会を開催している。ISCP のスタッフやレジデント・キュレーター、そして外部のキュレーターなど、年間平均9名のキュレーターによって展示を企画している。(海外 AIR 調査 p.188)
- エイペックスアート(米)では、滞在期間の最後にアーティストがニューヨークでの滞在を振り返って体験したことや考えたことについて語るインタビュー形式の一般公開トークが開かれる。(海外 AIR 調査 p.196)
- 国内 AIR へのアンケート調査によると、アーティストと市民による共同創作やワークショップなどの交流プログラムは、地域住民の芸術文化活動に対する理解度の向上のために重要だと多くの団体が考えている。(国内 AIR 調査 | 資 p.111)
- アートスペース(豪)の滞在アーティストへのインタビューによると、プログラムの成果をわかりやすく示すために、コミュニティ活動などを条件に課す場合があるが、自分の成長にもコミュニティにも必ずしも有益とは限らない。教育プログラムをレジデンスの条件として組み込む場合は、アーティストの活動とマッチし、またコミュニティにも有益かつ知的なプログラムを組む必要があり、企画担当者には、戦略的な思考能力、アーティストやキュレーター、そしてコミュニティとも協議する能力が必要である。(海外 AIR 調査 p.317)

② 実演集団の実験、個人の創作に焦点を当てた舞台芸術分野のレジデンス事業

舞台芸術分野のレジデンス事業では、最適な創作環境を提供し、実験的な取り組みを支援することが重要である。一定人数の実演家に対し、公演とは切り離して実験的な振り付けや演出の機会を提供し、専門家との意見交換の場を設けたり、逆に、劇作家、作曲家、振付家など、個人の創作に焦点を当てたレジデンス事業では、それを契機に公演につながるケースもある。

- 今回の海外調査の事例のうち、舞台芸術分野のアーティスト・イン・レジデンスでは、主に公演活動を目的とするものよりも、創作の過程や実験的な取り組みを支援するプログラムが多く見られた。
- 公演を目的とすると、実演家(俳優、演奏家、ダンサー等)やスタッフ(舞台監督や照明・音響のオペレーター等)が必要となり、その移動や滞在には大きな経済的負担が発生する。そのため、初めてのレジデンスでは公演を目的とせず、劇作家、作曲家、振付家等、個人の創作に焦点を当てることが多い。
- そこでの創作にレジデンス運営者が興味や関心を持つ場合、次のレジデンスの機会が与えられて、小規模なショーイングや公演に向けた滞在を行う場合もある。よって、舞台芸術では一度だけでなく継続的に支援をする場合が多く、リピーターが多い。
- 将来的には、劇場やフェスティバルとの共同製作を視野に入れている団体も多いが、必ずしも滞在期間中に作品を完成することや発表することを義務づけていない。

◎ 調査結果から

- PACT(独)は、ドイツ国内外のダンスやパフォーマンスのアーティストに創作環境を提供している。公演事



左:シュブジスタンス(仏)
右:シュブジスタンスのスタジオ

業も行うが、レジデンス事業では成果発表は全く視野に入っていない。若いアーティストたちが滞在期間中自由に創造力を発揮できる環境を整えることを最も重視している。作品発表が前提となると目的が変わってしまう、というのがPACTの考え方である。ただし、アーティストが希望すれば滞在期間の最後に非公開のプレゼンテーションを行うことが可能で、ディレクターやドラマトゥルク、滞在中のアーティストなどがコメントを述べ合う仕組みとなっている。(海外 AIR 調査 p.101)

- シュブジスタンス(仏)はフランス国内外のアーティストに創作環境を提供している。フェスティバルを運営しており、滞在制作をするアーティストもいる。招へいアーティストは欧州中心。(海外 AIR 調査 p.129)
- カーイシアター(ベ)は、劇場の共同製作の一環として4年間の創作活動の支援を行う。公演に至るまでのプロセスを重視しているため、アーティスト・トークやワークショップを企画する。ワークスペースブリュッセル(ベ)も、若手アーティストに実験的な創作の場を与えている。将来的に共同製作を視野に入れるが、公演を目的としたプログラムではなく、作品の発表を義務づけていない。(海外 AIR 調査 p.165、p.171)
- シアターワークス(シ)は、劇場やギャラリー等を備えた「72-13」を拠点に、アジアとその他の地域のアーティストの交流促進や、アートと創造産業の出会いと発展を目指すというコンセプトのもとに、様々なアーティスト・イン・レジデンス事業を展開している。また、創造活動を通じたハイブリッドな現代アジアのアイデンティティを確立するために、アートと社会との関係に注視した活動を支援するための仕組み「アーツ・ネットワーク・アジア」を運営。ネットワーク構築及びプロジェクトや渡航に対する助成事業を行っている。(海外 AIR 調査 p.286)
- ステインズ氏によると、多くの人が関わる舞台芸術のプロダクションは、物理的な意味で移動の距離が制限されるため、劇作家、振付家などに焦点を置いたプログラムやジャンル横断的なプロジェクトなどに焦点を置いたものが増える傾向にあると言う。

③ 異分野とのコラボレーションを促進するレジデンス

現状の日本のアーティスト・イン・レジデンスでは、アーティスト自身が専門とするジャンルを越境して異分野とコラボレーションを促すようなプログラムは少ないものの、そうした意欲を持つ運営団体は多い。また海外では、芸術の領域をも拡大するような異分野とのコラボレーションを促進するプログラムも見られる。

- アーティスト・イン・レジデンスの国内の事例には、それぞれの運営団体が専門とするジャンルを明確にしている場合が多い。その一方で、同じ場所に異分野のアーティストが滞在・交流しながら、ジャンルを越境してコラボレーションをするようなプログラムは現状では少ないように見受けられる。
- しかし国内 AIR 団体のアンケート調査や意見交換会によると、今後、取り組んでみたい活動として異分野のアーティストがコラボレーションをするようなプログラムに意欲を持つ団体は多い。
- 海外では、異なるジャンルを横断した共同制作やコラボレーションを促すプログラムだけでなく、音楽、演劇、ダンス、美術といった従来の芸術領域をも越えて、科学やビジネスなどの領域の人材とアーティストとの対話や交流の機会を提供する事例もある。

◎ 調査結果から

- アカデミー・ソリテュード(独)は、2002年から「art, science & business」というプログラムを開始し、レジデンスの対象を科学やビジネスの分野にも広げた。芸術だけではなく、科学とビジネスの分野から参加した若手の研究者や経営者が芸術家と出会い、交流する中から今までにない発想や取り組みが生まれるというコンセプトとなっている。(海外 AIR 調査 p.86)
- ムンレ芸術工場(韓)では、個人アーティストに対するスタジオ提供を行わず、大型プロジェクトや共同プロ

左:パフォーマンス・スペース(豪)
右:パフォーマンス・スペースの劇場
場ベイ17



ジェクト、稽古など、アーティストが共同で利用できる空間と設備を運営し、そうした活動に参加するアーティストなどが滞在できるゲストルームを提供している。(海外 AIR 調査 p.260)

- パフォーマンス・スペース(豪)では、ジャンルを横断した共同制作を支援することで、実験的で多様な表現を推進するのみならず、新たな観客層の発掘を戦略的に行っている。さらには、舞台作品のプロダクションから初演、国内外のツアーにいたるまでの可能性も視野に入れたレジデンスプログラムを運営している。(海外 AIR 調査 p.319)



左:三影堂撮影芸術中心(中)
右:三影堂撮影芸術中心のライブラリー

3. アーティスト・イン・レジデンスを支える仕組み

ここまで、アーティスト・イン・レジデンスの社会的な意義と役割、望ましいプログラムや運営の方向性、施設の内容などについて検討してきた。では、日本のアーティスト・イン・レジデンスの運営基盤を拡充し、社会的な存在価値を高めるためにどのような取り組みが必要だろうか。ここでは調査結果を参考にしながら、運営基盤、ネットワーク、ファンド・グラント、プレゼンスの向上の4つに分けて検討を行った。

(1) 運営基盤(運営組織、運営財源)の拡充

① 運営スタッフや組織に求められる資質や経験、専門的人材の育成

アーティスト・イン・レジデンスの運営スタッフには、個々のアーティストや研究者のニーズに沿って、創造活動やリサーチを支える資質や高度なノウハウ、豊富な経験が求められる。そうした人材をどのように育成し、限られた人員体制の中で専門性の高い組織をいかに構築するかが大きな課題と言える。

- 海外の主要なアーティスト・イン・レジデンスでも、一部の例外を除いて限られた人員体制で運営されている例が多い。インタビューに応じてくれた中核スタッフは、多様な業務をこなすモチベーションが極めて高いのが印象的だった。それは国内のアーティスト・イン・レジデンスにも通じている。
- スタッフや運営組織に求められる具体的な役割、機能は、
 - ① アーティストに対するメンターもしくはメンターを紹介できる専門的ネットワーク
 - ② 作品制作に関する技術的サポートもしくはそれが可能な専門技術者や企業の紹介
 - ③ 地域のコミュニティ(アート及びそれ以外の分野も含む)のチャネル、ネットワーク
 - ④ アーティストのキャリアアップ、プロモーション
 - ⑤ アーティストのニーズに合わせたリサーチ等のコーディネート
 - ⑥ コミュニケーション能力、語学力
 などである。

◎ 調査結果から

- アーティスト・イン・レジデンスの運営スタッフは、美術館、フェスティバル、トリエンナーレなどのキュレーターやスタッフとしての経験豊富な人材が多い。今回の海外 AIR 調査で特に印象に残った面会者は次のとおりである。

ガスワークス(英)のディレクター(トライアングル・ネットワークの事務局を兼務)

アカデミー・ソリテュード(独)のディレクター

シュブジスタンス(仏)のコ・ディレクター

ライクスアカデミー(蘭)のテクニカル・アドバイザー

サンデーモーニング(蘭)のディレクター

カーイシアター(ベ)のアーティスティック・ディレクター

ISCP(米)のファウンディング・ディレクター

エイペックスアート(米)のエグゼクティブ・ディレクター

バンフセンター(加)のカスタム・サービス・ディレクター

三影堂撮影芸術中心(中)の創設者

ムンレ芸術工場(韓)のリーダー

左:サブステーション(シ)
右:サブステーションの劇場



サブステーション(シ)のディレクター、プログラム・マネージャー
シアターワークス(シ)のマネージング・ディレクター
パフォーマンス・スペース(豪)のディレクター 等々

② 安定的で持続可能な財政基盤、自立可能な経営モデルの模索

レジデンス事業の基盤を支える政府や公的機関からの補助金や助成金に加え、国内外の各種機関、ファンドやグラントとパートナー関係を結んでアーティストの派遣や滞在に要する費用を賄ったり、アーティスト本人に資金調達の努力を促したり、スタジオ使用料を徴収したりするなど、プログラムの趣旨やねらいに沿った多様な運営財源の確保を目指すことが肝要だと考えられる。

- アーティスト・イン・レジデンスは元来収入の見込める事業ではないため、海外の代表的な事例では政府や公的機関の支援を得ているケースが多い。
- それらを含めたアーティスト・イン・レジデンスの運営財源は概ね、
 - ①政府や公的機関からの補助金、助成金
 - ②国内外のパートナー機関、スポンサーからの財政支援、交換プログラムによる相互負担
 - ③アーティスト等のモビリティを支えるファンド、グラントからの助成金
 - ④アーティスト等の自己負担
 の4種類に整理できる。
- 関連機関とのパートナーシップを形成することは、財政的な支援を得られるだけではなく、アーティスト・イン・レジデンスの国内外におけるプレゼンスの向上、より適切なアーティストの選考に結びつく可能性が高い。
- 日本のアーティスト・イン・レジデンスは「招へい」という観点から、その多くが渡航費、滞在費、制作費などをアーティストに支給する方式をとっているため、支出面での負担が大きく、それが今後の事業継続への課題となっているケースが多い。海外とのパートナーシップ提携、各種ファンドやグラントの積極的活用などによって、相互負担、経費節減、外部資金獲得の可能性を検討することが望まれる。
- スタジオ費用など一部経費をアーティストに負担してもらうことも検討の余地があるが、アーティストに滞在費や制作費を支給する場合には、制作に没頭できる程度の支援金、目的達成に必要な最低限の資金などを見極めるスタンスが重要だと思われる。

◎ 調査結果から

- ドイツ、フランス、オランダ、ベルギー、カナダ、韓国、オーストラリアのアーティスト・イン・レジデンスは政府機関(外郭団体、地方公共団体を含む)の支援が手厚い。
- 海外のアーティストの受け入れに際して、派遣元の公的機関、民間機関等がスポンサーとなっているアーティスト・イン・レジデンスには、ガスワークス(英)、ベターニエン(独)、シテ・デ・ザール(仏)、ライクスアカデミー(蘭)、ISCP(米)、アーツスペース(豪)、アジアリンク・アーツ(豪)などがある。
- スポンサーの役割を果たす政府系の機関には、アーツカウンシル(英国、カナダ、カナダケベック州、韓国、シンガポール、オーストラリア等)、ゲーテ・インスティテュート(独)、アンスティチュ・フランセ(仏)、モンドリアン・フォンス(蘭)、国際ワロン・ブリュッセル(ベルギー)、フランダース政府(ベルギー)、IASPIS(スウェーデン)、フィンランド芸術交流基金などがあり、民間(財団)ではアジア・カルチュラル・カウンシル(米)、アーツ・ネットワーク・アジア(シンガポール、米フォード財団が支援)などがある。
- 海外に滞在している日本人アーティストの中には、文化庁の在外研修制度を活用している例があった。



左:ムンレ芸術工場(韓)のカフェ
兼コミュニティスペース
右:クンチョン芸術工場スタジオ

- 海外のパートナー機関と連携して相互交流をしている例には、デルフィナ財団(英)、ベターニエン(独)、シテ・デ・ザール(仏、受け入れのみ)、ISCP(米)、プリム(加、受け入れのみ)、ムンレ芸術工場(韓)、サブステーション(シ)、アジアリンク・アーツ(豪)などがあり、日本の提携先としてトーキョーワンダーサイト、BankART 1929の名前があげられた。
- 今回調査した海外事例では、スタジオや住居の使用料、滞在費、制作費等の経費をアーティスト自身が負担する例は少なくない。ただし、その場合は海外スポンサーの支援金を財源とするケース(ベターニエン(独)、ライクスアカデミー(蘭)など)が主流だった。海外アーティストの渡航費を負担する事例は、アカデミー・ソリテュード(独)、エイペックスアート(米)、クンチョン芸術工場(韓)、仁川アートプラットフォーム(韓)などである。
- カロ氏は、2008年以降の世界的な経済破綻が多くの課題を生んだ一方で、新しいアプローチや協働の形を生むことにもなったと説明する。例えば、非営利組織と営利組織間のパートナーシップ、財源獲得のための創造的な手法、スタジオスペースや宿泊先を提供できる組織間の創造的な協働、大使館やアーツカウンシルなど政府機関が推奨する文化交流事業との協働などである。

③ 地域内の文化施設や機関、人材のネットワーク構築に基づいた相互支援

アーティストの多様なニーズに対応した適切な支援を行うためには、地域の関係機関や団体、専門人材とのネットワークを形成する必要がある。一方で滞在中のアーティストは、地域の文化施設や、アートを活用した地域プログラムに対して、作品や公演、ワークショップなどを提供できる専門的人材と言える。アーティスト・イン・レジデンスと地域が相互に支援し合えるようなネットワークを構築することで、アーティスト・イン・レジデンスは地域に根付き、支えられる存在となることが期待できる。

- 前述のとおり、滞在中のアーティストに対する支援には、創造と思索のための空間・時間の提供、キャリアアップの多面的な支援、アートやアーティストを介した地域社会へのコミット、の3つの方向性がある。
- これらすべてをアーティスト・イン・レジデンスが単独で提供することは現実的ではなく、必要な人材やスキルをアウトソーシングする観点からも、作品の、①構想、②制作、③発表それぞれの段階に応じた支援を得られるよう、関係分野の専門機関や NPO、企業、専門家等との連携やネットワークを構築する必要がある。
- ①構想段階ではアーティストのメンターを務められる批評家やアーティストなどの人材、あるいはリサーチを受け入れてくれる機関など、②作品の制作段階では、必要な材料の提供、技術的なアドバイスや設備の提供、新たな技術開発を支援してくれる企業や専門家など、そして③作品発表、キャリア形成の段階では、美術館やギャラリー、劇場や音楽堂等の文化施設、キュレーターや批評家、メディアなどの支援が必要である。
- 滞在中のアーティストは、文化施設や学校などにおけるワークショップやレクチャー、展覧会への作品の出品、作曲や脚本などの作品委嘱への対応、地元アーティストの指導などを提供することで、地域に貢献できる。
- さらに、良質なオーディエンスとして、あるいは創作の源となるインスピレーションを与えられる地域力は、アーティスト・イン・レジデンスを支える大きな要素だと考えられる。

◎ 調査結果から

- ガスワークス(英)では、英国最大アートフェアのフリーズ財団、自然科学博物館、テート・モダン、ロンドン芸術大学チェルシー・カレッジ等との共同プログラムを通じて、アーティストに作品のインスタレーション、リ

左: 仁川アートプラットフォーム
(韓)
右: 仁川アートプラットフォームの
展示スペース



サーチ、パブリック・トークや展覧会などの機会を提供している。(海外 AIR 調査 p.79)

- ベターニエン(独)は、ベルリンのキュレーター、展覧会企画者、哲学者、学術研究者、批評家、ジャーナリストなどだけではなく世界の展覧会企画者を招き、滞在アーティストとの対話と交流の場を提供している。(海外 AIR 調査 p.93)
- シテ・デ・ザール(仏)では、滞在中のアーティストに顔写真付きのミュージアム・カードが支給され、美術館が無料もしくは割引で利用できるサービスを提供している。(海外 AIR 調査 p.116)
- リヨン・現代美術ビエンナーレ(仏)では、周辺の市町村と連携して招へい作家にレジデンス事業への参加を促し、インスタレーションやワークショップの機会を提供している。(海外 AIR 調査 p.138)
- ライクスアカデミー(蘭)では、経験豊富なアーティスト、美術史家、キュレーター、教育専門家などでアドバイザーチームを編成し、アーティストは通年で彼らの訪問(スタジオビジット)を受けられる。アドバイザーチームに属さないゲストが招へいされることもある。(海外 AIR 調査 p.146)
- 仁川アートプラットフォーム(韓)では、北朝鮮に近いことに関心を持って参加するアーティストが少なくない。2012年には、市内から4時間、北朝鮮に近い白翎島(ペンリョンド)にアーティストが滞在できる施設を作り、「白翎島平和芸術レジデンス」プログラムを実施している。(海外 AIR 調査 p.272)
- ムンレ芸術工場(韓)では、周辺の鉄工所や資材販売店の空きスペースにアーティストが入居して、スタジオやアトリエとして活用している「ムンレ芸術村」のアーティストや地域住民と連携して「ムンレ芸術工場運営委員会」を設置し、地域のアーティストや住民が直接運営に参加している。(海外 AIR 調査 p.261)
- STPI(シ)では、アーティストが必要とする技術や機材をすべて STPI で用意することが難しいため、随時、国内の企業や文化施設と連携している。例えば、3D プリンターやインクジェットプリンターを使った作品づくりについては、地元企業と連携して取り組んでいる。(海外 AIR 調査 p.297)

(2) アーティスト・イン・レジデンスを支えるファンド、グラント

① 支援すべき双方向の「往来」の仕組み

海外からアーティストを受け入れるだけではなく、双方向の往来、モビリティを促進することが、アーティスト・イン・レジデンスの成果をより高めることにつながる。国や公的機関自らがそうした支援を行うだけでなく、拠点的功能を有する機関がそうした役割を担えるような支援制度の構築も視野に入れたい。

- 国や公的機関の支援策としては、国境を挟んだインバウンド、アウトバウンドという双方向のアプローチが重要である。具体的には、国内のレジデンス事業の振興(インバウンド)、海外のレジデンス機関と連携した日本のアーティストの派遣(アウトバウンド)、アーティストのモビリティを促進するファンド、グラントの創設(双方向)といった多角的な支援が求められる。
- 国内のアーティスト・イン・レジデンスは、受け入れを主体とするところが主流であるが、レジデンス自体が受け入れと派遣の双方向の機能を持つことで、活動の幅が広がり、海外のレジデンス機関とのネットワーク形成にも結びつくと思われる。

◎ 調査結果から

- 政府系のグラント機関のうち、自国アーティスト等の海外派遣だけではなく、海外のアーティストやキュレーターの招へいに対しても助成を行っている機関には、モンドリアン・ファンド、韓国アーツカウンシル、スウェーデンの IASPS、フィンランド芸術交流基金、カナダ・アーツカウンシルなどがある。また、ケベック・アーツカウンシルは資金的な援助はないものの、海外の芸術機関との交換プログラムとしてアーティストを海外か



左:プリム(加)
右:プリムの編集スタジオ

ら受け入れている。(海外ファンド調査 p.357)

- アジアン・カルチュラル・カウンシル(米)は、アジア人が米国もしくは他のアジア諸国を訪問する場合、もしくは、米国人がアジア諸国を訪問する場合、すなわち3方向の交流に対して助成を行っている。(海外ファンド調査 p.383)
- デルフィナ財団(英)は、中東や北アフリカの文化機関や財団と提携関係を結び、アーティストの招へい、アーティストとキュレーターとの派遣事業を実施している。(海外 AIR 調査 p.46)
- ガスワークス(英)は、インターナショナル・レジデンスとして海外からアーティストを招へいするだけでなく、アーツカウンシルなどの助成を得て、トライアングル・ネットワーク(ガスワークスが事務局)のパートナー機関に5人程度のアーティストを派遣している。(海外 AIR 調査 p.80)
- エイペックスアート(米)では、海外のアーティストやキュレーターを招へいする「インバウンド・レジデンス(年間10名)」に加え、「アウトバウンド・レジデンス(年間4名)」を実施している。両方のプログラムとも、渡航費、滞在費はエイペックスアートが負担する仕組みで、財団や政府組織から資金調達したエイペックスアート自身が、中間支援的なファンド機能を果たしている。(海外 AIR 調査 p.197)

② 未来への投資につながるリサーチや未知の体験、キャリアアップなどアーティスト個人への支援

アーティスト個人のリサーチや作品の構想段階を支援し、キャリア形成を促進することは、質の高い作品を生み出すプロセスの一部であり、将来の文化的な資産の形成や拡充、すなわち未来への投資につながっている。

- 作品の構想に結びつくリサーチや未知の環境での体験などは、質の高い作品を生み出すプロセスの一部であり、具体的な作品の創作活動の一手手前、言い換えれば新たな着想を得るアーティスト活動の原点と言える。
- それは美術に限らず、演劇(脚本)、音楽(作曲)、舞踊(振付)、映像、文学など、芸術のあらゆる分野に共通している。
- これらは基本的に個人的な営みであるため、公共、民間を問わず支援の得られにくいものであるが、アーティスト・イン・レジデンスはまさしくそれを支える仕組みであり、芸術という知的財産の原点を形成する上でそれが欠かせないものであることを十分に理解する必要がある。

◎ 調査結果から

- 今回調査した海外のアーティスト・イン・レジデンスは、創作活動に加え、アーティストのリサーチを支援する事例が多かった。デルフィナ財団(英)、ガスワークス(英)、ライクスアカデミー(蘭)、カーイシアター(ベ)、ISCP(米)、プリム(加、今後の計画)、レッドゲート・ギャラリー(中)、プラットフォーム・チャイナ(中)、ビタミン・クリエイティブ・スペース(中)、クンチョン芸術工場(韓)、サブステーション(シ)、ガートルード(豪)、アートスペース(豪)などである。
- アカデミー・ソリテュード(独)は、アーティストたちがアート市場の動向などに目を奪われることなく、何をやりたいのかを追い求める時間と空間を与えることが最大の目的で、2002年からは異分野の専門家との出会いを創出するため、レジデンスの対象を科学、ビジネスの分野に拡大した。(海外 AIR 調査 p.86)
- エイペックスアート(米)は、住み慣れた環境とは異なるニューヨークで新しい体験・刺激を得てもらうことを目的にしている。そのため、滞在中にアーティストが制作活動を行うことを求めず、キャリアアップのためのプロモーションも行っていない。(海外 AIR 調査 p.95)

③ ファンドやグラントに求められるアーティスト個人への支援

左:エイペックスアート(米)のギャラリー
 右:エイペックスアートのスタッフ



アーティストの創作やリサーチ活動を支援するため、ファンドやグラントにはアーティスト・イン・レジデンスの実施団体だけではなく、アーティスト個人を対象にした支援制度が望まれる。

- 個人を対象とした支援制度としては、文化庁の在外研修などのフェローシップが用意されているが、助成制度全体で見ると、個人が申請可能なものは非常に限られているのが現状である。
- アーティスト・イン・レジデンスでの滞在に必要な経費すべてを賄うようなものでなくても、例えば海外で見られるような渡航費等を支援する「トラベル・グラント」、目的を絞った短期のリサーチを支援する助成プログラムなど、アーティストのニーズに沿った柔軟な制度を検討するべきである。
- また前述のとおり、受け入れ先のアーティスト・イン・レジデンスの公募に採択された場合、アーティスト自身が滞在に必要な資金調達を求められるケース(ライクスアカデミー(蘭)、ベターニエン(独)、ISCP(米)など)があることから、アーティスト個人が申請可能な助成の仕組みを整える必要性は高い。

◎ 調査結果から

- アーティスト個人に渡航費を支援する「トラベル・グラント」は、英国のアーツカウンシル・イングランド、ベルギーのフランダース政府、フィンランド芸術基金、カナダ・アーツカウンシル、ケベック・アーツカウンシル(加)、韓国アーツカウンシル、シンガポール・アーツカウンシル、アーツ・ネットワーク・アジア(シ)などで実施されている。(海外ファンド調査 p.358)
- トラベル・グラントの多くは滞在期間が1-3ヶ月程度、英国やフィンランド、シンガポールの事例では年3回の公募が行われるなど、アーティストが気軽に申請できる仕組みとなっている。(海外ファンド調査 p.361)
- 英国のアーツカウンシル・イングランドは、海外に拠点を持つブリティッシュ・カウンシルと共同で、アーティスト個人が海外への渡航費と現地での滞在費、活動費を申請できる「アーティスト・インターナショナル・ディベロップメント・ファンド」を2012年に創設した。(海外ファンド調査 p.361)
- アジアン・カルチュラル・カウンシル(米)は、アジア人が米国もしくは他のアジア諸国を、もしくは、米国人がアジア諸国を訪問して、非商業的創作・芸術活動やリサーチ、研究などを行うのに必要な支援をアーティスト個人に対して行っている。(海外ファンド調査 p.383)

④ 交流の少ない地域、世界中に点在するマイクロレジデンスへの支援

アーティスト・イン・レジデンス全体の活動を活性化させ、アーティストの国際的なモビリティを高めるためには、レジデンス事業の取り組みが未成熟な地域、規模の小さなマイクロレジデンスに対して、受け入れ及び派遣の両面から支援を行うことが重要である。

- 政治的、経済的背景も含め、様々な理由で交流の機会の少ない地域、あるいは、戦略的に交流を促進したい地域を対象にしたアーティスト・イン・レジデンス事業を組み立てていくことも検討に値する。
- 例えば、日中韓で推進している「東アジア文化都市」の政策の一環として、日中韓3ヶ国間のアーティストやクリエイターなどを互いに交流、滞在させるのも一案である。
- 今回調査した中国のレジデンス施設はコマーシャル・ギャラリーが運営するケースが多く、公益や非営利という概念が十分には定着していない中国との間で、アーティスト・イン・レジデンスを軸にした交流をどのように組み立てていくかは政策課題の一つと言える。
- 本調査研究で取り上げたアーティスト・イン・レジデンスは、欧米で誕生、発展してきた仕組みをモデルとしているが、歴史を振り返れば、文化人の国境を越えた交流や滞在は様々な形で、しかも国や地域独自の方法で行われてきた。
- そうした観点から考えると、今回の調査対象に含まれなかったが、各国、各地域に数多く存在するマイクロ



シアターワークス(シ)のスタジオ

レジデンス(個人の発意などによって営まれる小規模なアーティスト・イン・レジデンス)は重要な役割を担っている。

- 現在の国の支援は公的な組織やそれに順ずる組織への大口での助成のみであり、アーティスト・イン・レジデンスを振興するためには、マイクロレジデンスも対象にした小口の支援も必要だと考えられる。その場合、国が直接支援を行うことが困難であれば、アーツカウンシル(日本芸術文化振興会)や民間財団、あるいは拠点的な役割を担うアーティスト・イン・レジデンスなど、中間支援組織を経由する方法も含めて検討したい。

◎ 調査結果から

- デルフィナ財団(英)は、政治的な背景もあって英国と交流の少なかった中東、北アフリカを対象にアーティストの招へい、派遣事業を展開している。(海外 AIR 調査 p.71)
- プロ・ヘルヴェティア文化財団(スイス)は、エジプト、南アフリカ、インド、中国の4ヶ国を対象にしたスタジオ・レジデンシー、リサーチ・レジデンシーを実施している。(海外ファンド調査 p.364)
- アジアン・カルチュラル・カウンシル(米)は、アジア(西はアフガニスタンから東は日本までの、ロシアより南の地域)を対象に、アジアと米国のアーティストなどの交流を支援している。(海外ファンド調査 p.383)
- バーモントスタジオ(米)は世界中の多様な機関と連携し、東欧、中東、中南米、アジア、中央アジア、アフリカなどの各国のアーティストを受け入れている。(海外 AIR データ集 | 資 p.216)
- シアターワークス(シ)の運営するアーツ・ネットワーク・アジアは、アジア地域内における分野横断的な共同制作や異文化を理解するためのコミュニティ・プロジェクトなどに対する事業助成、アジア域内へ渡航するアジアのアーティストへのトラベル・グラント、アジアと欧州間の国際共同制作やネットワーク事業への助成などを行っている。(海外 AIR 調査 p.289)
- 日本の遊工房アーツスペース(東京)では、マイクロレジデンス(国や地方自治体から独立し、私設の独自の考えで自律的な創作活動を行うアーティストのための創作と滞在の館⁴)に対するアンケート調査(レズ・アルティスの会員164件)を実施。それらをデータベース化したり、2012年10月のレズ・アルティス総会東京大会において、「マイクロレジデンス、アーティストの経営によるレジデンス」というセッションを開催するなど、マイクロレジデンスのプレゼンスの向上と共同プログラム実施の可能性について検討を進めている。
- 特定の国や地域におけるアーティストの交流や滞在を促進するためには、それらを活性化するファンドやグラントを活用することが有効である。また、アジア間の交流を促すアーツ・ネットワーク・アジアや欧州間の交流を促すヨーロッパ・ペピニエールなどの非政府組織、あるいはユネスコや欧州委員会などの国際機関のファンド・グラントには、政治的もしくは経済的理由から海外に芸術家や芸術関係者を派遣する仕組みの少ない国や地域との国際交流を活性化しているケースもあった。(海外ファンド調査 p.358)

(3) ネットワークの構築による支援と底上げ

① 機能や役割を明確にしたネットワークの構築と運用

アーティスト・イン・レジデンスのネットワークには幅広い可能性がある。データベース構築、アーティスト公募の窓口機能、情報発信やノウハウの提供と交換、ファンドやグラントとの連携、アドボカシー活動への取り組み、プロジェクト・コーディネートなど、機能や役割を明確にした上で、ネットワークを構築、運用すること

⁴ 遊工房アーツスペース「アーティスト・イン・レジデンス、マイクロレジデンスからの視点」2013年2月
(URL: <http://www.youkobo.co.jp/microresidence/>)

左:アーツスペース(豪)
右:アーツスペースのギャラリー

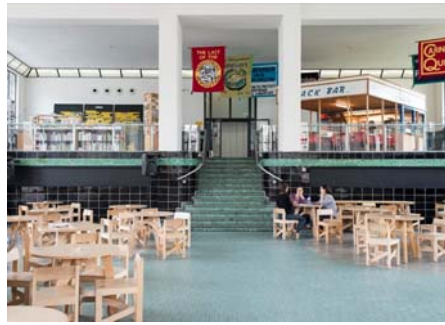


は、アーティスト・イン・レジデンスの事業や運営を下支えし、プレゼンスを向上させる可能性が高い。

- 日本にもアーティスト・イン・レジデンスのネットワークは存在するが、上記の一部の機能のみを担っているのが実情であり、ネットワークが日本のアーティスト・イン・レジデンスの振興と発展にどのような役割を果たしうるか、求められる機能は何か、運営や財政基盤をどのように整備すべきかなど、関係者間で十分な検討を行うことが望まれる。
- 特に、アーティスト・イン・レジデンスの利用者であるアーティストのニーズをリサーチし、持続的活動を支援するためのネットワークの在り方、機能などを重視すべきである。
- ネットワークの運営には、小規模でも独立した事務局が求められる。日本の個々のアーティスト・イン・レジデンスの運営基盤が未だ脆弱であることを考えると、特定の団体が事務局を担ったり、会員制度に支えられた事務局運営は現実的ではないだろう。
- 国立もしくは公立の文化施設や文化機関、大学等の教育機関、アート NPO など中間支援組織に事務局を設置し、それを国や国の外郭団体等が支援する方法も考えられる。日本のアーティスト・イン・レジデンスの海外に対する窓口機能は、国際交流基金の AIR-J が重要な役割を果たしているが、個別の問い合わせや対面形式での相談への対応は困難な状況だと思われる。
- ワンストップでより丁寧な対応が可能なネットワーク組織の構築は、日本のアーティスト・イン・レジデンスの国際的なプレゼンスの向上、海外アーティストの応募者数の増加やスムーズな選考、アーティスト・イン・レジデンス同士や海外アーティストの相互交流の促進などの効果が期待できる。
- 昨年のレズ・アルティス総会2012年東京大会では、アジア各国でアーティスト・イン・レジデンスの新たな動きが台頭していることが確認された。欧米諸国とは異なる歴史的背景、文化的背景を持ったアジアの取り組みは、今後アジア以外の地域から注目される可能性が高い。
- 国際社会における日本の文化的プレゼンスを高めるためにも、そうしたアジアを俯瞰したアーティスト・イン・レジデンスのネットワーク構築に対して、日本がリーダーシップを発揮する意義は小さくない。前述したアーティスト・イン・レジデンスの社会的意義や役割を十分に考慮した上で、文化庁や国際交流基金などの機関がアジアのネットワーク構築を牽引することが望まれる。

◎ 調査結果から

- 現在の2大国際ネットワークは、レズ・アルティス(米)とトランス・アーティスト(蘭)である。前者は欧州を中心とした組織間交流から世界的組織へ発展し、2年に1回の総会を各国の持ち回りで実施している。後者は徹底した情報提供でアーティストのモビリティを確保するとともに、オランダ語圏、近隣国、特定の国々など、目的やねらいを絞ったネットワーク構築にも取り組んでいる。(国際ネットワーク調査 p.331)
- 特定地域を対象に具体的なプロジェクトやアーティスト交流を視野に入れたネットワークには、アーツ・ネットワーク・アジア(シンガポールを拠点に9つの国と地域が参加)、アジアリンク・アーツ(オーストラリアとアジアの文化交流を促進)、アジア・カルチュラル・カウンシル(アジア各国のアーティストの米国滞在を支援)などがある。(国際ネットワーク調査 p.332)
- 他にもアーティスト・コミュニティ協会(米)のような自国内のネットワーク、オン・ザ・ムーブ(ベ)のような舞台芸術のモビリティを促進するネットワークなども認められた。(国際ネットワーク調査 p.330)
- 日本ではJ-AIR ネットワーク会議、AIR-J(国際交流基金のWEB データベース)があるが、昨年トーキョーワンダーサイトが事務局となって開催されたレズ・アルティス総会2012東京大会、BankART1929が国内外の団体に呼びかけて行った「集まれ！アートイニシアティブ」なども、ネットワーク形成に向けた取り組みといえる。(国際ネットワーク調査 p.333)



左:ウィールズ(ベ)
右:ウィールズのエントランス

- アートスペース(豪)滞在アーティスト、ロッシェル・ヘイリーのインタビューによると、モバイルアーティストは、レジデンス検索にトランス・アーティストを最も頻繁に利用しており、その理由として、「アーティストの視点」からのサイト情報であるため、どこにどのような機会があるかが調べやすいとしている。(海外 AIR 調査 p. 317)
- また、日本の遊工房アートスペース(東京)が中心となって進めているマイクロレジデンスのネットワークについては、今後、新たな展開が期待される。また2012年には、舞台芸術の制作実務者が中心になって、舞台制作者オープンネットワーク(ON-PAM)が設立された。(国際ネットワーク調査 p.334)
- カロ氏が代表を務めるアーティスト・イン・レジデンスの世界的なネットワーク組織、レズ・アルティスでは、世界中に存在するレジデンスプログラムや運営組織の個々を顕在化させ、様々な文化的背景、分野を越えた同盟や共同を行うために必要不可欠な情報を提供するために、アーティスト・イン・レジデンスを包括に網羅するマッピングの作成に注力している。

② 海外の主要なアーティスト・イン・レジデンスと連携した日本の在外レジデンスの整備

ネットワークに関連した取り組みとして、日本の政府機関や公的団体、民間財団などが、海外の主要なアーティスト・イン・レジデンスと連携し、実質的な日本の在外レジデンスを整備する方法も検討したい。

- 前述のとおり、海外の主要なアーティスト・イン・レジデンスには、招へい国の政府機関等と連携し、アーティストの渡航や滞在に必要な経費を賄っているケースが少なくない。また、自国のアーティストを派遣、滞在させるために海外に独自のレジデンス施設を展開する国もある。
- アーティスト・イン・レジデンスは受け入れと派遣という双方向で検討すべきであり、日本も自らのイニシアティブで海外にアーティストを派遣、滞在できる仕組みを検討するべきだと考えられる。
- しかし、施設や組織を独自に海外に展開するのは、経費負担も大きく、リスクを伴う。それを回避するためにも、日本の政府機関や公的団体、民間財団などが、海外の主要なアーティスト・イン・レジデンスとパートナー関係を結び、渡航費や滞在費を日本側が負担することで、実質的に日本の在外レジデンスを整備する方法は極めて有効だと考えられる。
- その場合のアーティストの選考は、海外の主要事例がそうであるように、当該レジデンスプログラムへのアーティストの公募を日本国内で実施、候補者を絞り込んで滞在先との協議によって最終選考を行う方法が、対等なパートナーシップの構築や将来的な発展のためにも望ましいと考えられる。
- アーティストの海外派遣、研修制度では、文化庁の在外研修制度が運用されているが、採択の決定時期と滞在したい海外のアーティスト・イン・レジデンスの公募時期がずれているために、不具合が生じている例も見られる。そうした課題を解決するためにも有効な方法だと考えられる。
- 国が直接行うだけでなく、アーツカウンシル(日本芸術文化振興会)や国際交流基金などの中間支援的な組織を経由する方法とあわせて検討したい。

◎ 調査結果から

- 海外で独自のレジデンス施設を展開する国の機関には、ゲーテ・インスティテュート(独)、アンスティチュ・フランス(仏)、ケベック・アーツカウンシル(加)、オーストラリア・アーツカウンシルなどがある。(海外ファン ド調査 p.359)
- 海外の主要なアーティスト・イン・レジデンスとパートナー関係を結び、スポンサーの役割を担う政府系機関には、アーツカウンシル(カナダ、カナダケベック州、韓国、シンガポール、オーストラリア等)、ゲーテ・インスティテュート(独)、アンスティチュ・フランス(仏)、モンドリアン・フォنز(蘭)、フランダース政府(ベルギ

左:クンチョン芸術工場(韓)
右:クンチョン芸術工場スタジオ



一)、IASPIS(スウェーデン)などがある。(海外ファンド調査 p.359)

③ 地域限定、個別プロジェクトを目的としたネットワークの形成

不特定多数を対象に参加希望を募ってネットワークを構築するだけではなく、地域を限定し、目的を共有する機関同士が、個別のプロジェクトを共同で立ち上げるために連携することも、アーティスト・イン・レジデンスの事業にとって有効だと考えられる。

- 海外 AIR 調査では、目的を定め、個別のプロジェクトを実施したり、相互のアーティスト交流を行うために、異なる国、地域のアーティスト・イン・レジデンス同士で連携したり、共同プロジェクトを立ち上げたりするケースが複数見られた。
- データベースの構築、アーティスト公募の窓口機能、情報発信やノウハウの提供と交換、ファンドやグラントとの連携、アドボカシー活動といった包括的な活動を行うためには、相応のスタッフや資金が必要となるが、目的や参加機関を絞ったネットワークは、容易に立ち上げることが可能で、成果も見えやすい。

◎ 調査結果から

- ガスワークス(英)が事務局を務めるトライアングル・ネットワークは、1982年に設立され、現代美術分野のワークショップやレジデンス、展覧会、アウトリーチなどの活動を通じて、アーティスト同士の学びや専門的能力の開発、国際的な芸術活動の普及を行っている。(国際ネットワーク調査 p.339)
- アジアン・カルチュラル・カウンシル(米)は、ニューヨークを拠点に、東京、香港、台湾、マニラにオフィスを置き、米国とアジアの芸術家、キュレーター等の交流を促すグラントを提供することで、アジアと米国との親密なネットワークを形成している。グラントを受けたアーティストは、ニューヨークのアーティスト・イン・レジデンスに滞在することが多い。(海外ファンド調査 p.383)
- クンチョン芸術工場(韓)は、横浜、ニューヨーク、バルセロナ、メルボルンのアーティスト・イン・レジデンス機関と協力して交換プログラムや国際共同プログラムを実施している。(海外 AIR 調査 p.254)
- シアターワークス(シ)が1996年に立ち上げたフライング・サーカス・プロジェクトは、アジア域内のアーティストの交流と芸術表現を追求するユニークなネットワーク型のレジデンス事業である。参加者は2-3週間の間に異なる二つの都市に滞在し、共同で創作活動に取り組む。(海外 AIR 調査 p.289)
- シアターワークス(シ)は、1999年にアーツ・ネットワーク・アジアを立ち上げ、アジア域内のアーティストやプロジェクトのネットワークづくりを推進している。分野横断的な共同制作や異分野を理解するためのコミュニティ・プロジェクトを対象とした助成事業、渡航費助成、アジアと欧州の交流を目的にしたクリエイティブ・エンカウンターなどを運営している。(海外 AIR 調査 p.289)
- サブステーション(シ)とムンレ芸術工場(韓)は、交流協定を結び、毎年それぞれがサイトスペシフィックな作品づくりに取り組むアーティスト2名を選んで、共同創作ワークショップを実施している。(海外 AIR 調査 p.282)
- アジアリンク・アーツ(豪)の「ユートピア@アジアリンク」は、メルボルン、東京、シンガポール、ソウル、ニューデリーなどの都市間ネットワークを形成し、異文化間の発想を生み出すインキュベーター、プラットフォームとして機能している。2年に1回地域間交流プログラムが開催され、東京のパートナーはトーキョーワンダーサイトである。(海外 AIR 調査 p.324)

(4) アーティスト・イン・レジデンスのプレゼンスの向上

① 国際的な芸術シーンにおける日本の理解促進とプレゼンスの向上(評価とフォローアップの重要性)



左:ガートルード(豪)
右:ガートルードのスタジオ

アーティスト・イン・レジデンスは、展覧会や公演などの文化イベントとは異なるアプローチによって、日本文化の理解促進や国際的プレゼンスの向上に大いに貢献するものであることを、広くアピールする必要がある。そのためには定量的な評価ではなく、アーティストの滞在中の成果はもちろん、滞在後の活動状況やキャリアアップのフォローアップを含め、エピソードやエビデンスを丁寧に集める作業が重要である。

- 個人の交流をベースとするアーティスト・イン・レジデンスは、地味で地道な活動で、海外公演や大規模な巡回展のように一度に大勢の観客にアピールすることはない。しかし、人が移動、滞在することで各国の「事情」(文化芸術の状況やそれを取り巻く社会情勢など)が流通する意味は大きい。
- 日本人アーティストが海外に滞在する場合は滞在先で日本への関心が高まり、海外アーティストを日本に受け入れる場合はそのアーティストを通じて日本の文化芸術やアーティストに関する情報が国境を超えて流通し、日本の国際的な理解が促進される。
- アーティスト・イン・レジデンスは、①作品や成果の発表ではなく、アーティストの創造活動の原点に深く関与するものであること、②個人のアーティストの活動がベースとなっていること、③複数の国や地域の互いに未知のアーティストたちが出会い、交流が生まれること、④アーティストが一ヶ所に長期間滞在すること、など、他の国際文化交流事業にはない特性を備えている。
- これら4つの特性から、アーティスト・イン・レジデンスは、日本文化の国際的な理解を促進する上で、展覧会や公演などの文化事業と比較して、より深く持続的な成果が期待できる。
- アーティスト個人をベースにした「事情」の流通を、国をはじめとした公的機関や中間支援的なファンドやグラントが仲介、支援することで、個人レベルの情報が広いコンテキストの中で精査され、より正確あるいは適切な情報として流通、蓄積されるようになる。

◎ 調査結果から

- デルフィナ財団(英)は、アーティストやキュレーターの滞滞後のキャリアアップを事業の成果と考え、滞滞後の活動や展開について情報収集し、フェイスブックなどで公開している。2007-11年の事業全体を振り返り、今後はアジアや南米を対象地域に加える意向である。(海外 AIR 調査 p.75)
- ガスワークス(英)は、アーツカウンシルに対して各種の定量データ、定性データを提出しているが、アーティスト・イン・レジデンスの成果が形になるには時間が必要で、その見えない成果を提示することは難しいとしている。ただし、テートモダンや自然史博物館などの規模の大きな芸術機関との提携プログラムが成立していることが、存在価値を示す一助となっている。(海外 AIR 調査 p.82)
- PACT(独)は、州政府に対し定量的な成果に加えて、レジデンス活動の内容と成果を詳細に報告している。地道な報告活動が実って、2006年に2万ユーロ(260万円)であった州政府の補助金は、現在5倍の10万ユーロ(1,300万円)に引き上げられている。(海外 AIR 調査 p.103)
- これまでライクスアカデミー(蘭)に滞在したアーティストには、世界のトップレベルで活躍しているアーティストが多い。ビエンナーレやアートフェアでは、2011年のヴェネチア・ビエンナーレ(20名)、イスタンブール・ビエンナーレ2011(19名)、ロンドン・フリーズ(80名)、ニューヨーク・アーモリーショー(40名)。コレクションでは仏ポンピドゥーセンター(30名)、英テートギャラリー(19名)、米ニューヨーク近代美術館(22名)の実績がある。(海外 AIR 調査 p.147)
- エイペックスアート(米)では、レジデンス終了から1ヶ月後と6ヶ月後にアンケートを行っている。しばらく経ってからプログラムのことを考えてもらうことで、長期的な影響、目に見えない成果を把握しようとしている。(海外 AIR 調査 p.200)
- レズ・アルティス会長のカロ氏によると、現在、アーティスト・イン・レジデンスの評価方法の確立を世界的に

発展させることを最も重視していると言う。その理由は、現在の助成をめぐる状況が大きく変化しているためである。政府、企業、私設財団をはじめとする助成機関が、評価基準の明確化を求めている一方で、アーティスト・イン・レジデンスの運営者自身が評価方法を確立し、自己弁護していく必要があると力説している。

② 行政や一般市民へのアドボカシー、情報提供を行う中間支援組織

アーティスト・イン・レジデンスの意義や役割、成果などをアピールするためには、個々の事業主体の取り組みだけではなく、行政や一般市民へのアドボカシー活動や、情報提供を行う中間支援的な第三者機関の役割が重要だと考えられる。

- 今回の調査研究では、アーティスト・イン・レジデンスのネットワーク組織、ファンドやグラントを提供する機関を調査したが、こうした組織はアドボカシーや情報提供の面でも重要な役割を果たしている。
- そのためには、文化芸術そのものの社会的意義、必要性についてアドボカシー活動の強化が必要と思われるが、アーティスト・イン・レジデンスの運営主体が単独で行うのではなく、批評家やジャーナリズムと手を結び、レジデンスプログラムから生まれた事象や成果を社会的な情報に置き換えていく作業も重要である。
- その際、レズ・アルティス、トランス・アーティスト、On the Move、Culture 360°などが発行する、アーティスト・イン・レジデンスをフォーカスしたニュースレターやジャーナルが参考になる。
- さらに、美術館やアートセンター等の文化施設、芸術大学や総合大学をはじめとした教育機関と連携の可能性を模索することで、アーティスト・イン・レジデンスのポテンシャルを適切に把握し、その意義をより広くアピールできる可能性もある。

◎ 調査結果から

- レズ・アルティスは、異なる国・地域のレジデンス施設や様々な組織とのパートナーシップによって2年に1回の総会を開催するほか、地域会議、主題会議などを開催することで、会員同士が互いの活動や課題を共有している。ウェブサイト上では各施設、プログラムをマッピングして国際ネットワークを可視化したり、今後はアーティスト・イン・レジデンスの評価方法の開発にも取り組む予定である。（国際ネットワーク調査 p.343）
- トランス・アーティスト（蘭）は、ウェブサイト、ニュースレターによる情報配信のほか、リサーチ、ワークショップなどを通して、アーティスト・イン・レジデンスの活動を広く普及している。（国際ネットワーク調査 p.348）
- アーティストの国際的な交流・滞在を支援する海外の主要なファンド・グラントの中には、政策評価を実施している機関もあり、また、それらのファンド・グラントを活用したアーティストが、その後どんな活動をしているかを把握することで、アーティスト・イン・レジデンスの意義や役割を社会的にアピールできる可能性がある。（海外ファンド調査 p.378）

③ アーティスト・イン・レジデンスを持続可能にするための国や地方公共団体等に求められる役割

国や地方公共団体は、アーティスト・イン・レジデンスの意義や役割を認識し、長期的な視点に立って、国内の実施団体に対する支援、アーティスト等の招へいや派遣を支える仕組みづくり（グラントや情報提供等）を継続していくことが求められる。

- 国においては、アーティスト等の国境を超えた移動や滞在が、日本文化の国際的理解の促進、国際的なプレゼンスの向上に資することを認識した上で、戦略的な施策を実施することが求められる。その際、文化庁の「文化芸術の海外発信拠点形成事業」を軸に、在外研修制度を活用した派遣支援、日本芸術文化振



アカデミー・ソリテュード(独)のウェブサイト。これまでの滞在アーティストとのネットワークをビジュアル化する。
© Akademie Schloss Solitude and Zwonimir Marcic

興会、国際交流基金などを含めた、組織横断的な検討が望まれる。

- 地方公共団体においては、アーティスト・イン・レジデンスが文化多様性や異文化交流によって地域の寛容性を促進すること、創造的人材の定住・交流などにつながることを、すなわち、海外、地域外のアーティストの創作活動への支援が、長期的には地域に還元されるということを、認識することが肝要である。

◎ 調査結果から

- アカデミー・ソリテュード(独)は、これまでに滞在したアーティスト約800名とのコンタクトを維持し、滞在アーティスト同士の交流がアカデミー・ソリテュードを起点に国境を超えてどのように世界に広がっているかをウェブサイト上でビジュアルに示すことで、シュトゥットガルトの国際的なプレゼンスの向上にいかに関与しているかを政府や関係者、市民にアピールしている。(海外 AIR 調査 p.87)
- ベターニエン(独)は、ベルリン州政府にとって二つの重要な役割を果たしているため、37年間財政的な支援が継続しているという。ひとつは、ベルリンの「外交的施設」という政治的な役割であり、もうひとつは世界中からやってくるアーティストたちがベルリンの芸術市場を刺激し、創造的な都市としての魅力を高めるというクリエイティブ・エコノミー上の役割である。(海外 AIR 調査 p.96)
- ライクスアカデミー(蘭)では次のような指摘があった。科学者の研究と同様にアーティストの創造活動には時間が必要だということが認識されなければならない。時間はかかるが、海外の美術館にコレクションされるなど、小さな資金で大きな成果が期待できる。それを国にとって有益なことだと捉え、政府や社会がそのことを認識して投資する必要がある。(海外 AIR 調査 p.150)
- プリム(加)では、カナダの中でもケベック州は、文化芸術を外交の大使と理解しており、レジデンス事業の重要性を認識しているため、レジデンス事業を正当化する必要がない、というコメントがあった。(海外 AIR 調査 p.208)
- サブステーション(シ)では、次のようなコメントがあった。アーツカウンシルはここ数年持続可能なプロセスを支援する重要性に気づき始めたが、今度は財務省をいかに納得させ、予算を確保するかが課題になっている。(海外 AIR 調査 p.283)
- カロ氏は、アーティスト・イン・レジデンスによる交流の受益者は助成組織でもあると指摘し、「資金提供者は、レジデンスにおける経験のすべてを通し、長期にわたる関係性が育まれ、強固なものとなったときにこそ豊かな利益を得ることができる」と主張している。

第2部

諸外国の代表的なアーティスト・イン・レジデンス等に係る調査

本調査研究では、欧州(英国、フランス、ドイツ、オランダ、ベルギー)、北米(米国、カナダ)、アジア(中国、韓国、シンガポール)、オセアニア(オーストラリア)の計11ヶ国の主要なアーティスト・イン・レジデンス37件の現地訪問調査を行った。個々の調査結果はこの第2部の71ページ以降に国別にそれぞれ整理したとおりであるが、ここでは、調査対象の選定方法と、各調査事例の概要を整理しておきたい。

1. 調査対象の選定方法

現地訪問調査先の選定は、次の3つのステップに分けて実施した。

(1) STEP1: 調査候補一次リストの作成

国際的なネットワーク組織など、アーティスト・イン・レジデンスの情報を収集し、ウェブサイト上で情報提供を行っている信頼性の高いポータルサイトや、既存文献・資料に基づいて、調査対象国のアーティスト・イン・レジデンスの調査候補一次リスト(263件)を作成した。参照したポータルサイト、文献資料は次のとおりである。

① ポータルサイト

- レズ・アルティス
- カルチャー360°
- オン・ザ・ムーブ

② 文献資料

- 美術出版社『美術手帳』2005年9月／1998年3月
- サムワズガーデン『世界の、アーティスト・イン・レジデンスから』2009年12月
- BankART1929『アートイニシアティブ〜リレーする構造〜』2010年3月
- 国際交流基金『オルタナティブスーアジアのアートスペースガイド』2004年11月

(2) STEP2: 調査候補二次リストの作成

一次リストから、本調査研究が対象とするアーティスト・イン・レジデンス事業を行っていないもの(施設提供のみを行うタイプ)を除外し、調査候補二次リスト(129件)を作成した。なお、この二次リストに基づいて、資料編第3部の海外の主要なアーティスト・イン・レジデンスのデータ集を作成した。

(3) STEP3: 現地訪問調査候補の選定

調査候補二次リストをベースに、アドバイザー会議において調査対象とすべきアーティスト・イン・レジデンスの助言を得た上で、文化庁国際課と協議を行い、対象とする芸術分野、注目すべき特性、地域バランスなどを踏まえて、現地訪問調査を行うアーティスト・イン・レジデンスを選定した。

なお、調査対象の選定に際しては、舞台芸術分野のアーティスト・イン・レジデンス、フェスティバルやトリエンナーレの一環として開催されているもの、欧州文化首都に関連したものも考慮した。

2. 調査対象の概要

上記のプロセスを経て現地訪問調査を実施した11ヶ国37件のアーティスト・イン・レジデンスについて、次ページ以降に、創設年、所在都市、対象分野、概要・特徴、運営組織、年間予算、財源等を一覧表に整理した。

国	各国の主要なアーティスト・イン・レジデンスの概要	
英国	デルフィナ財団 Delfina Foundation (p.71)	
	創設年 所在都市	● 2007年 ロンドン市(中東・北アフリカとの連携が強い)
	対象分野	● 美術 キュレーター等を含む
	概要・特徴	<ul style="list-style-type: none"> ● 創設者のエント・カレナス氏は1998年から2006年までデルフィナ・スタジオを運営し、英国の若手アーティストを支援。その後、中東の現代アートが紹介されることが少なかったことから、英国と中東や北アフリカの国や地域との交流を促進することを目的にデルフィナ財団を設立。 ● アーティストやキュレーターを対象に、中東・北アフリカからの招へい(年間15人)、英国・その他の欧州から同地域への派遣を実施。 ● 英国での滞在期間は3ヶ月程度で、複数回に分けることも可能。英国のアーティストと中東や北アフリカのアーティストがパートナーを組んでリサーチを行う「Artist-to-Artist」というプログラムも実施している。
	運営組織	● 非営利民間団体、3名フルタイム
	年間予算・財源	● 44万ポンド(6,600万円)、レジデンスの事業費は英国のアーツカウンシル・イングランド等の公的機関・民間財団からの支援
	ガスワークス Gasworks (p.78)	
	創設年 所在都市	● 1994年 ロンドン市
	対象分野	● 美術 キュレーター等を含む
	概要・特徴	<ul style="list-style-type: none"> ● ガスワークスは、名称のとおりガス工場に隣接する現代アートの複合施設で、レジデンス事業と展覧会を開催。 ● 英国を代表する彫刻家アンソニー・カロなどによって創設されたトライアングル・ネットワーク(アーティストの滞在型のワークショップから始まった事業で、現在では世界中の30のパートナーで構成されている)から誕生したレジデンス事業で、現在ガスワークスはそのネットワークの事務局も運営している。 ● インターナショナル・レジデンスでは、4つのスタジオに年間16人のアーティストを海外から招へい。滞在期間は3ヶ月で、これまでに50ヶ国から170名のアーティストが参加。海外の公的機関(ゲーテ・インスティテュート、IASPS、韓国アーツカウンシル等)やロンドン市内の文化機関(フリーズ財団、自然科学博物館、テート・モダン等)をパートナーとしてプログラムを展開。作品制作よりも創作のためのアイデアを膨らませるリサーチを支援している。
	運営組織	● 非営利民間団体、フルタイム7名(うち3名がレジデンス事業担当)
	年間予算・財源	● 60万ポンド(約9,000万円)、うち40%がアーツカウンシル・イングランドの助成金
ドイツ	アカデミー・シュロス・ソリテュード Akademie Schloss Solitude (p.85)	
	創設年 所在都市	● 1990年 シュトゥットガルト市
	対象分野	● 美術、映像、ニューメディア、デザイン、建築、音楽、舞台芸術、文学、科学、ビジネス
	概要・特徴	<ul style="list-style-type: none"> ● シュトゥットガルトの市内を望む小高い丘に18世紀半ばに建てられた「ソリテュード(孤独)城」を改修してレジデンス事業を展開。 ● 45のスタジオ兼アパートに3ヶ月から1年間滞在。アーティストに義務はなく、アート市場の動きに目を奪われず、何をやりたいのかを追い求める時間と空間を与えることが最大の目的。2002年からレジデンスの対象を科学、ビジネスの分野に広げ、異分野の専門家との出会いを創出している。

国	各国の主要なアーティスト・イン・レジデンスの概要	
		<ul style="list-style-type: none"> アーティストにはスタジオ兼住居、月額1,100ユーロ(約14万円)の奨学金、シュトゥットガルトまでの往復旅費(1往復のみ)が与えられる。 募集は2年に1回で毎回の応募件数は1,600－1,700件。これまでに滞在した1,100名のアーティストの80%とコンタクトを維持し、ウェブサイトで芸術分野別、国別、滞在年別などでネットワークの広がりをビジュアルにアピールしている。
	運営組織	<ul style="list-style-type: none"> 公益法人アカデミー・ソリチュード財団(施設は州の所有)、11名
	年間予算・財源	<ul style="list-style-type: none"> 195万ユーロ(約2億5,000万円)、170万ユーロが州政府から(宝くじが財源)
	キュンストラーハウス・ベターニエン Künstlerhaus Bethanien (p.92)	
	創設年 所在都市	<ul style="list-style-type: none"> 1975年 ベルリン市
	対象分野	<ul style="list-style-type: none"> 美術
	概要・特徴	<ul style="list-style-type: none"> 当初は旧病院跡を活用して創設されたが、2010年に現在の建物(照明器具工場跡)に移転、25のスタジオ、展示スペース、工房スペースなどを設置。 世界各国の文化省やアーツカウンシル、民間財団等とパートナーを組んで、各国を代表する若手アーティストを選考。パートナー機関が一次選考を行い、10人程度のアーティストの中からベターニエンと協議をして最終決定される。アーティストの滞中に必要な経費は基本的にパートナー機関の負担。 作品の制作や展覧会に必要な支援(技術スタッフ、運営スタッフ等)、キュレーターや批評家等の専門家との対話・交流の場の設定、展覧会の開催とキャリア形成などを通じて、いわば「エージェント」としてアーティストを積極的にプロモートしている。滞在期間は原則1年。 これまでに滞在したアーティストは約1,000名で、その多くが国際的なアーティストとして活躍している。
	運営組織	<ul style="list-style-type: none"> 公益目的の有限責任会社、常勤スタッフ7名
	年間予算・財源	<ul style="list-style-type: none"> 年間予算は非公開。40%がベルリン州政府、60%がパートナー機関からの収入
	パクト・ツォルフライン PACT Zollverein (p.100)	
	創設年 所在都市	<ul style="list-style-type: none"> 2002年 エッセン市(ツォルフライン炭鉱跡)
	対象分野	<ul style="list-style-type: none"> ダンス、パフォーマンス、メディアアート、サウンドアート
	概要・特徴	<ul style="list-style-type: none"> 欧州でも最大規模の炭鉱ツォルフラインの産業遺構群のうち、元炭鉱夫の更衣室として使われていた建物を改修し、劇場、スタジオとして再利用。プラットフォーム、舞台(公演)、アーティスト・センターの3本柱の事業を実施。アーティスト・センターの中心がレジデンス事業。 半年ごとの公募で15件、年間約30件のレジデンス・プロジェクトを採択。原則6名までのグループを受け入れ、滞在期間は2週間－4ヶ月。アーティストが自由に創造力を発揮できる環境を提供することが最大の目的で、滞在中の成果の公開や公演は義務づけられておらず、ほとんど行われることはない。 ただしアーティストたちが望めば、滞在期間の最後に非公開のプレゼンテーションを行い、ディレクターやスタッフがコメントやフィードバックを行う。
	運営組織	<ul style="list-style-type: none"> PACT(有限責任会社兼財団法人)、14名(3本の事業全体)
	年間予算・財源	<ul style="list-style-type: none"> 200万ユーロ(2億6,000万円)、すべて州政府・市等の公的機関の補助金。レジデンス事業のアーティスト滞在費等の10万ユーロは州政府の家族・児童・青少年・文化・スポーツ省からの補助金

国	各国の主要なアーティスト・イン・レジデンスの概要	
	ノード・センター・フォー・キュラトリアル・スタディズ Node Center For Curatorial Studies (p.106)	
	創設年 所在都市	● 2010年 ベルリン市
	対象分野	● 美術 キュレーターを対象
	概要・特徴	<ul style="list-style-type: none"> ● ベルリンに滞在するアーティストとの出会いをつくるキュレーターのためのレジデンスプログラム。キュンストラーハウス・ベターニエンなどのアーティスト・イン・レジデンスとパートナーシップを形成し、定期的にスタジオビジットを行う。 ● 春、夏、秋の年3回、約12週間のプログラムを実施。参加者は公募で募集。各プログラムで平均して約60人の応募があり、10名前後を選ぶ。 ● 特定のテーマに特化したオンラインプログラムを試験的に開始。
	運営組織	● 合名会社、フルタイム3名
	年間予算・財源	● ー、主な事業収入はプログラムの参加費(月770ユーロ/人)
フランス	シテ・アンテルナショナル・デ・ザール Cité internationale des arts (p.113)	
	創設年 所在都市	● 1965年 パリ市中心部セーヌ河畔(280戸)、モンマルトル地区(30戸)
	対象分野	● 美術系(絵画、デッサン、彫刻、ビデオ、写真、マルチメディア、パフォーマンス、文学、シナリオ等)、音楽系(作曲、楽器演奏、声楽)
	概要・特徴	<ul style="list-style-type: none"> ● 約310戸のスタジオ兼住居、展覧会スペース、コンサートホールなどを有する世界最大規模のアーティスト・イン・レジデンスで、年間1,100人、これまでに1万5,000名以上が滞在した。そのうち日本人は120名強。 ● アトリエの8割は仏及び海外の政府機関、公民文化機関、大学など(サブスクライバーと呼ばれる)が保有し、その推薦を受けたアーティストをシテ・デ・ザールが承認して入居する仕組み。サブスクライバー保有分の空きも含め、全体の3割程度は公募枠。 ● 極めて安価な家賃でパリの一等地のスタジオ兼住居を提供することが最大の支援。ミュージアム・カード支給。希望によってオープン・スタジオ、展覧会、コンサートを開催するほか、作品制作に必要な支援も提供。
	運営組織	● 公益財団シテ・デ・ザール、45名
	年間予算・財源	● 400万ユーロ(5億2,000万円)、スタジオの家賃収入142万ユーロ、その他テナント料66万ユーロ、パリ市の補助金70万ユーロ等
	レコレ国際受入・交流センター Centre international d'accueil et d'Échanges des Récollets (p.122)	
	創設年 所在都市	● 2003年 パリ市(北東部)
	対象分野	● 美術、舞台芸術、文学 研究者等を含む
	概要・特徴	<ul style="list-style-type: none"> ● 17世紀初頭に建てられた修道院を改修し、81戸の住居・アトリエを整備。フランス内外の文化・学術機関や大学との交流、結びつき、相乗効果を生み出し、発展させるため、世界中のアーティストと研究者を受け入れている。アーティストの選考はレコレとパートナー関係にあるパリ市や国立科学研究所、フランス国立図書館、大学など35の機関によって行われる。 ● パリ市とアンスティチュ・フランセの共同プログラムでは毎年20人前後を海外から受け入れ。滞在期間は3ヶ月で、パリ及び近郊の芸術機関等との連携が望まれる。スタジオ兼住居(家賃はパリ市の負担)、月額1,500ユーロ(19万5,000円)の生活費を支給、コミュニティ活動の義務はない。
	運営組織	● リシュモン社(パリ市の第三セクター「パリ市不動産公団」の子会社)
	年間予算・財源	● ー、収入源はレジデンスの家賃(パリ市の負担)

国	各国の主要なアーティスト・イン・レジデンスの概要	
	レ・シュブジスタンス Les Subsistances (p.128)	
	創設年 所在都市	● 2001年 リヨン市(ソーヌ河岸、世界遺産に登録された歴史地区)
	対象分野	● 舞台芸術(ダンス、演劇、サーカス等)
	概要・特徴	<ul style="list-style-type: none"> ● 修道院と軍用施設9,000㎡を改修し、宿泊施設やキッチン、パフォーマンス・スペース、リハーサル室、展示スペースなどを整備。舞台芸術の新しい表現を対象にした芸術創造の国際的な実験場、そして一般の人々との分野を超えた協働・創造と対話のための場として機能している。事業の柱はレジデンス、クリエーション(作品創作)、市民との分かち合いの3本。 ● 年間70カンパニーが2週間から1ヶ月滞在し(複数回に分けるケースもある)、宿泊場所、稽古場、共同制作費が支給される。作品はレジデンス期間中もしくは年3回のフェスティバルで初演されるが、公開しない場合もある。 ● 滞在アーティストの4分の3は、二人のディレクターとスタッフの情報収集に基づいて選考、残りはアーティストからの提案。「今日の新しい芸術表現を持っているかどうか、アーティストがどのように“世界の見方”を変えてくれるか」が選考のポイントで、滞在中の活動について十分な話し合いが行われる。
	運営組織	● シュブジスタンス(アソシエーション・非営利組織)、19名
	年間予算・財源	● 230万ユーロ(約3億円)、70%がリヨン市(協定書を締結)の補助金、その他は地域圏、文化省、EU 等の公的資金。チケット収入は30万ユーロ。
	リヨン・ビエンナーレ La Biennale de Lyon (p.135)	
	創設年 所在都市	● ダンス(偶数年)1984年、現代美術(奇数年)1991年。レジデンスは2012年(ダンス)、2009年(現代美術) リヨン市
	対象分野	● 美術、ダンス
	概要・特徴	<ul style="list-style-type: none"> ● ダンス、現代美術とも、通常のアーティスト・イン・レジデンスとは異なり、ビエンナーレと連携する形でレジデンス事業を展開している。 ● ダンスビエンナーレを単なる発表の場ではなく国際的な創造の場にするため、2012年に19の新作をプログラム、8団体をレジデンス・カンパニーとして共同制作を実施。2週間前にリヨン入りし、本公演の会場で作品の完成度を高める。 ● 現代美術ビエンナーレではソーシャル・プログラムの一環としてレジデンス事業を実施。アーティストはリヨン及びその近郊に滞在し、住民と共に作品を制作。ビエンナーレの招待作家が市町村の希望に基づいて、各地で滞在制作、住民との交流を行う(2009年:9市町村、3名、11年:7市町村、6名)。
	運営組織	● ラ・ビエンナーレ・ド・リヨン(アソシエーション・非営利組織)、30名(ダンス、現代美術を含むビエンナーレ全体)
	年間予算・財源	● ダンス:828万ユーロ(10.8億円、2012年)、55%がリヨン市や国の公的補助金。現代美術:762万ユーロ(9.9億円、2009年)、67%が公的補助金。
オランダ	ライクスアカデミー(国立美術アカデミー) Rijksakademie van Beeldende Kunsten (p.145)	
	創設年 所在都市	● 1870年(1980年代に現在の形に転換) アムステルダム市
	対象分野	● 美術 主に25-35歳のアーティストが対象
	概要・特徴	<ul style="list-style-type: none"> ● 才能ある国際的な若手アーティストを育成するため、スタジオ、制作費、奨学金、アドバイザー(アーティスト、美術史家、キュレーター、教育専門家等)との対話や技術者による作品制作のサポートが最長で2年間与えられる。滞在アーティストは50人、レクチャー、エクスカージョンなどの機会も提供される。

国	各国の主要なアーティスト・イン・レジデンスの概要	
		<ul style="list-style-type: none"> 1,500－2,000人の応募者の中から毎年25人を選考。アーティストとしての「伸びしろ」を重視。アーティストには1万2,500ユーロ(約160万円、1,500ユーロの材料費含む)が支給されるが、年間2,750ユーロの負担金を支払うとともに、出身国の政府機関などから1万5,000ユーロの助成金を調達することが求められる。 施設内には、映像・音響、グラフィック・版画、ケミカル素材、鉄工・木工の4種類の工房があり、テクニカル・アドバイザーのアドバイスを受けられるほか、アーティストの構想を実現するため、まったく新しい技術が開発されることもある。 これまでの滞在者は約900名。国際的なビエンナーレや美術館での展示などで広く活躍するほか、各地のコレクションにもなっている。2日間のオープン・スタジオには専門家や市民7,000人が来場。
	運営組織	<ul style="list-style-type: none"> 約20名(予算削減で工房の技術スタッフ4名以外はすべて非常勤)。2014年からアムステルダム市内の別のレジデンス「デ・アトリエ」と共同運営される予定。
	年間予算・財源	<ul style="list-style-type: none"> 630万ユーロ(約8億2,000万円)、530万ユーロが教育文化科学省からの補助金。
デ・アペル・アーツセンター De Appel Arts Centre (p.152)		
	創設年 所在都市	<ul style="list-style-type: none"> 1975年(キュレーターのレジデンスは1994年開始) アムステルダム市
	対象分野	<ul style="list-style-type: none"> 美術 キュレーター、ギャラリストを対象
	概要・特徴	<ul style="list-style-type: none"> キュラトリアル・プログラムの滞在期間は約10ヶ月で、最終的に参加者全員で一つの展覧会を企画・制作し、ギャラリーで展示。プログラムは、チュートリアル(アムステルダム市立美術館ディレクター等の専門家アドバイス)、レクチャー、フィールド・リサーチの3要素で構成されている。 展覧会オープニングへの参加、アーティストや美術関係者の訪問、国内外の国際展やアートフェア等を視察するフィールド・リサーチなども行われる。 参加者は公募で募集。世界各国から毎年50－80人の応募、6－8人を選考。
	運営組織	<ul style="list-style-type: none"> デ・アペル(非営利団体)、16名(14名は非常勤、レジデンス担当の2名も週3日の非常勤)
	年間予算・財源	<ul style="list-style-type: none"> 金額は不明。ほとんどが教育文化科学省とアムステルダム市からの補助金
サンデーモーニング・アット・イーケーダブリュシー sundaymorning@ekwc (p.157)		
	創設年 所在都市	<ul style="list-style-type: none"> 1992年(前身のセラミック・ワークセンターは69年) デン・ボス市(南オランダ)
	対象分野	<ul style="list-style-type: none"> 陶芸 主にアーティスト、デザイナー、建築家を対象
	概要・特徴	<ul style="list-style-type: none"> 国内外のアーティスト、デザイナー、建築家が陶芸の技術的・芸術的可能性を探索するため、インディビジュアル・レジデンシー、プロジェクト・レジデンシーの2種類のレジデンス事業を運営。 インディビジュアル・レジデンシーの滞在期間は3ヶ月、年間40人を受入(最大12人の同時滞在が可能)、陶芸施設・設備は24時間使用可能。90%は陶芸が専門外で経験のないアーティストがほとんど(陶芸家は年間4名)。制作プランに基づいてミーティングを行い、技術指導を受けながら作品を制作する。3ヶ月の滞在費は1万8,000ユーロ(230万円)だが、同額の支援金が支給される。 プロジェクト・レジデンシーでは、展覧会やコミッションワークなど特定のプロジェクトのために、週単位で滞在・制作が可能。年間4－8人が利用。 アニュッシュ・カプーア、トニー・クラッグなど著名アーティストが滞在したことから陶芸以外のアーティストにも広く知られるようになり、応募者は年間数百人。

国	各国の主要なアーティスト・イン・レジデンスの概要	
ベルギー	運営組織	<ul style="list-style-type: none"> 22名(うちレジデンス担当は12名)、レジデンスの他に展覧会、出版等を実施。
	年間予算・財源	<ul style="list-style-type: none"> 130万ユーロ(約1億7,000万円、2012年度、政府補助金75%→13年度廃止)
	カーイシアター Kaaitheatre (p.165)	
	創設年 所在都市	<ul style="list-style-type: none"> 1977年(93年に現在のルナシアターを拠点に活動スタート) ブリュッセル市
	対象分野	<ul style="list-style-type: none"> 演劇、ダンス 演劇の劇作家や演出家、ダンスの振付家を対象
	概要・特徴	<ul style="list-style-type: none"> 実験的で斬新な舞台作品の劇場として知られる。新作をアーティストとともに共同製作するプラットフォームとしてレジデンス事業を実施。 4年という長期の共同製作プログラムで、常時4名のアーティストにスタジオ、リハーサルスペース、オフィスを提供。経理事務の委託も可能。作品の仕上げ段階では劇場スペース、照明・音響の技術支援も受けられる。滞在中に他の劇場の仕事をすることも可能で、初演も他の劇場で行っても問題ないなど、アーティストはレジデンスによってカーイシアターに束縛されることはない。 独自のリサーチに基づいて実験的な表現に挑戦するアーティストを招待。制作コーディネーターが他の劇場やフェスティバルとの契約調整も行う。 他にも、特定のレジデンス期間のないアソシエイト・アーティスト、特定のプロジェクトに対して2-5週間のレジデンスを提供する短期レジデンス、さらに、別団体のワークスペースブリュッセルと連携して、若手アーティストにスタジオ・スペースを提供するレジデンス、研究目的のレジデンス支援、などもある。
	運営組織	<ul style="list-style-type: none"> カーイシアター(非営利団体)、22名
	年間予算・財源	<ul style="list-style-type: none"> —
	ワークスペースブリュッセル workspacebrussels (p.171)	
	創設年 所在都市	<ul style="list-style-type: none"> 2008年 ブリュッセル市
	対象分野	<ul style="list-style-type: none"> ダンス、パフォーマンスアート等
	概要・特徴	<ul style="list-style-type: none"> 市内の4つの劇場やダンスカンパニーと提携してレジデンス事業を展開。ローザス(ベルギーを代表する現代舞踊団)の所有するスタジオの一つ(通年)、カーイシアターの所有するカーイスタジオ(利用予定のない日程)、ウルティマ・ベス(舞踊団)のスタジオ(利用日予定のない日程)をワークスペースブリュッセルがレジデント施設として利用。レ・ブリジティ(現代舞踊劇場)は、ワークスペースブリュッセルにレジデンス事業の運営を全面委託。 アーティストの選考は公募と指名の2種類。支援内容はアーティストによって異なるが、通常はスタジオと宿泊施設を2週間提供。終了後にミーティングを行い継続する場合もある。その滞在期間は多様で、年間50人程度のアーティストのうち、3分の2に4,000-7,000ユーロ(約50~90万円)の制作補助費を支給。
	運営組織	<ul style="list-style-type: none"> 2名
	年間予算・財源	<ul style="list-style-type: none"> 35万ユーロ(約4,500万円)、31.5万ユーロがベルギー・フランダース政府から、残りはブリュッセル市、欧州委員会からの補助金、助成金。
	ウィールズ WIELS (p.179)	
	創設年 所在都市	<ul style="list-style-type: none"> 2007年 ブリュッセル市
	対象分野	<ul style="list-style-type: none"> 美術
	概要・特徴	<ul style="list-style-type: none"> ブリュッセル初の現代美術センターで、展覧会事業、教育プログラムに加え、若手アーティストを対象としたレジデンス事業を実施。創作や研究に専念できる環境(45㎡のスタジオ)、技術的サポート、専属アーティストによるアドバイス

国	各国の主要なアーティスト・イン・レジデンスの概要	
		(週1回)、キュレーターや評論家等のスタジオビジットなどに加え、レジデンス終了後はウィールズ内外で作品プレゼンテーションの機会を提供。 <ul style="list-style-type: none"> アーティストは公募で選考、滞在期間は国内アーティストが6ヶ月、海外アーティストが1年。これまでに61名が滞在。
	運営組織	<ul style="list-style-type: none"> ウィールズ(民間非営利団体)、14名(レジデンスはキュレーター1名が対応)
	年間予算・財源	<ul style="list-style-type: none"> ー
米国	インターナショナル・スタジオ & キュラトリアル・プログラム The International Studio & Curatorial Program (p.185)	
	創設年 所在都市	<ul style="list-style-type: none"> 1994年 ニューヨーク市(マンハッタン南西部トライベッカで設立、2001年にミッドタウンに、08年に現在のブルックリン東ウィリアムズバーグに移転)
	対象分野	<ul style="list-style-type: none"> 美術 キュレーターを含む
	概要・特徴	<ul style="list-style-type: none"> 個室スタジオを提供し、①客員批評家(美術館やギャラリーの専門家を招いた一対一の作品講評)、②フィールド・トリップ(美術館、ギャラリー訪問、学芸員による解説)、③サロン(月2回の公開プレゼンテーション)、④オープン・スタジオ(5月と11月の年2回、各4日間、2,000人以上が来場)を実施。 パートナー・スポンサー(現在32、多くは欧州、カナダ、オセアニアの政府機関)の経済的支援(プログラム費、旅費、住居費、生活費、材料費等を含む)を得て参加する場合(PSが公募・決定もしくは候補を絞ってISCPが決定)と、個人で直接応募する場合(審査は2ヶ月に1回)がある。後者でも決定から2年以内にスポンサーを確保するか参加費を自己負担する必要がある。 参加費は年間200ー230万円もしくは月17ー19万円。毎年100人以上、これまでに1,700名以上が滞在。中山ダイスケ、会田誠、開発好明、名和晃平、澤田知子などの日本人アーティストを含め、著名アーティストが多数含まれている。
	運営組織	<ul style="list-style-type: none"> ISCP(非営利組織)、6名(うちフルタイム3名)
	年間予算・財源	<ul style="list-style-type: none"> 約90万ドル(9,000万円)、海外の政府系機関からの収入が最大の財源
	エイペックスアート apexart (p.195)	
	創設年 所在都市	<ul style="list-style-type: none"> 1994年 ニューヨーク市(マンハッタン、トライベッカ地区)
	対象分野	<ul style="list-style-type: none"> 美術等 アーティスト、キュレーター、文筆家、批評家、詩人、建築家、ジャーナリスト、俳優、哲学者、政治家な等を対象(30歳以上、ニューヨーク未経験者)
	概要・特徴	<ul style="list-style-type: none"> エイペックスアートはレジデンスの他に展覧会、出版も実施する非営利団体。 レジデンスに参加している期間は、創作活動から一旦距離を置くための時間と認識し、アーティストに制作活動を行うことは求めず、キャリアアップのためのプロモーション活動も行わない。 ①インバウンド・レジデンシー(諸外国からニューヨークへアーティスト等を受け入れる。1ヶ月滞在、年間10人まで、渡航費・部屋代・携帯電話支給)と、②アウトバウンド・レジデンシー(ニューヨークから海外に送り出す。1ヶ月滞在、年間4人まで、渡航費・部屋代支給)の二つを運営。アーティストの選考は推薦。 ①ではアーティストは綿密に計画された旅程(1日4件まで)に沿って行動する。芸術鑑賞、専門外の授業やレクチャー、各分野の専門家との面会など、多様なプログラムが含まれている。
	運営組織	<ul style="list-style-type: none"> 非営利団体、5名

国	各国の主要なアーティスト・イン・レジデンスの概要	
	年間予算・財源	● 48万8,053ドル(約4,900万円)、財団、政府等
カナダ	プリム PRIM: Productions Réalisations Indépendantes de Montréal (p.205)	
	創設年 所在都市	● 1981年 モントリオール市(北部住宅地)
	対象分野	● 映像・映画、デジタルメディア
	概要・特徴	<ul style="list-style-type: none"> ● プリムは、アーティストやインディペンデント系の映画・映像の制作者が集まるメディア・ラボとして、デジタルメディア技術を活用した創作活動を支援している。 ● モントリオール周辺のアーティストやクリエイターを対象に1年を上限にスタジオ設備の提供、技術サポートを実施。100時間を上限に PRIM のスタッフに作品の編集を依頼することも可能。市内の文化施設(メディアセンター、現代音楽センター等)とのジョイント・レジデンスもある。 ● ケベック・アーツカウンシルのエクステンジ・プログラムでグラスゴー現代美術センターから1人を受け入れ、3ヶ月間滞在。渡航費・滞在費はクリエイティブ・スコットランド(旧スコティッシュ・アーツカウンシル)が支給。また、ヨーロッパ・ペピニエールと提携し、欧州及びカナダから3年毎に2人を受け入れている。
	運営組織	● アーティストランの非営利組織、フルタイム6名
	年間予算・財源	● ー、主な収入源はケベック・アーツカウンシル(4年毎に更新される継続助成)
	バンフセンター The Banff Centre (p.210)	
	創設年 所在都市	● 1970年(バンフ生涯教育センター) カルガリー市(バンフ国立公園内)
	対象分野	● 美術、映画、メディア、舞台芸術、音楽、ダンス、文学、先住民の芸術
	概要・特徴	<ul style="list-style-type: none"> ● 1933年に演劇を学ぶ夏のワークショップとしてスタート。35年にバンフ芸術学校となり、48年に当時のディレクターが現在の敷地を獲得し基盤を形成。78年にバンフ生涯教育センター(略称バンフセンター)となった。 ● 世界最大の「創造性を育む」施設として、「創造性を刺激すること」というミッションに基づき、中堅レベルのアーティストやクリエイターのキャリアアップ、ステップアップを支援するため、膨大な数のプログラムが用意され、年間約4,000人のアーティストが参加している。 ● アーティスト・コロニーというプログラムでは、森の中の大小9つのキッチン付きスタジオに滞在して集中的な創作活動を行う。滞在中は、センター内のすべての施設や制作工房が使用でき、舞台芸術公演も鑑賞できる。各国の政府機関や教育機関等を通じた紹介が必要で、使用料は約6,000円/日から。 ● テマティック・レジデンスは美術部門のプログラムのひとつで、アーティストやキュレーターが持ち寄った研究テーマに基づいて活動を行う。 ● 17万6,000㎡(東京ドーム約3.7個分)の広大な敷地に、音楽、陶芸、彫刻、紙漉き、写真、オーディオ・ビジュアル等のスタジオ、舞台芸術のリハーサル室、劇場、リサイタルホール等が設置されている。
	運営組織	● バンフセンター(非営利の高等教育機関)、正規職員490名+客員講師
	年間予算・財源	● 1,900万カナダドル(約19億円)、カナダ連邦政府、カナダ・アーツカウンシル等
中国	レッドゲート・ギャラリー / レッドゲート・レジデンス Red Gate Gallery / Red Gate Residency (p.229)	
	創設年 所在都市	● 1991年(ギャラリー)、2002年(レジデンス) 北京市(旧城下樓門公園内)
	対象分野	● 美術 キュレーター、研究者等を含む

国	各国の主要なアーティスト・イン・レジデンスの概要	
	概要・特徴	<ul style="list-style-type: none"> 海外の多様な人材の中国滞在を促進し、美術館、ギャラリー、アーティストなど北京・中国のアートコミュニティとの交流を促し、国際的なフィールドで活躍する人材を中国で育成することを目的にレジデンスを実施している。 作品制作は必須ではなく、リサーチのみも可。毎年、世界各国から約70人のアーティストが滞在。アパート及びスタジオの賃借費、生活費、制作費、渡航費等は自国の芸術機関から支援を得るなどしてアーティスト自身が調達する仕組み。
	運営組織	<ul style="list-style-type: none"> コマーシャルギャラリーだが、レジデンスは非営利で実施。3名
	年間予算・財源	<ul style="list-style-type: none"> ー
	三影堂 撮影芸術中心 Three Shadows Photography Art Centre (p.232)	
	創設年 所在都市	<ul style="list-style-type: none"> 2007年 北京市(芸術区域として発展する草場地)
	対象分野	<ul style="list-style-type: none"> 写真、映像 キュレーター、研究者等を含む
	概要・特徴	<ul style="list-style-type: none"> 4,600㎡の敷地内にギャラリー、図書館、暗室、レジデンス、カフェ等のある中国初の写真専門の大規模な現代アートセンター。中国に立脚して現代写真芸術を深く発掘、開拓、発展させることなどをミッションに、3週間から5ヶ月間の滞在プログラムを実施している。 滞在アーティストは新たな作品制作や、他のアーティストやコミュニティとの共同制作、ワークショップや講座など、独自のプログラムを計画して実施できる。三影堂は素材探しや制作に必要な情報提供等のサポート、中国向けプロモーションを行う。
	運営組織	<ul style="list-style-type: none"> 三影堂(営利・非営利が共存する組織)、7名
	年間予算・財源	<ul style="list-style-type: none"> ー
	プラットフォーム・チャイナ / 北京インターナショナル・アーティスト・プラットフォーム Platform China / Beijing International Artist Platform (p.236)	
	創設年 所在都市	<ul style="list-style-type: none"> 2005年 北京市(草場地)
	対象分野	<ul style="list-style-type: none"> 美術、舞台芸術 キュレーター、批評家等を含む
	概要・特徴	<ul style="list-style-type: none"> 二つのギャラリー兼プロジェクトスペース(元倉庫を改修、1,500㎡)とレジデンス・スタジオを保有する多機能ギャラリー。 国内外のアーティスト間の交流と対話を生み出す場として、北京インターナショナル・アーティスト・プラットフォームというレジデンス事業を運営。アーティストの要望に沿った北京での滞在制作、リサーチの場を提供している。 駐北京ノルウェー大使館とノルウェー現代美術財団(OCA)が提携したプログラム(年間2人程度、OCAから旅費、生活費を支給)と、公募プログラム(8-12週間、旅費、生活費、月14万円のスタジオ使用料はアーティストの負担)がある。
	運営組織	<ul style="list-style-type: none"> ギャラリー・スタッフ(フルタイム10名)がレジデンスも兼務
	年間予算・財源	<ul style="list-style-type: none"> ギャラリー部門は作品販売が収入源で、レジデンスは非営利事業として運営
	アローファクトリー 箭厂空间 Arrow Factory (p.239)	
	創設年 所在都市	<ul style="list-style-type: none"> 2008年 北京市(国子監街に近い下町風情のある裏通り、住宅・商店街)
	対象分野	<ul style="list-style-type: none"> 美術、舞台芸術等
	概要・特徴	<ul style="list-style-type: none"> 青果店として使われていた15㎡のスペースをリノベーション。商業化するアートの動きと一線を画し、新しく実験的な制作を中心に、インスタレーション、サイト

国	各国の主要なアーティスト・イン・レジデンスの概要	
		スペシフィックな表現にフォーカスするオルタナティブ・スペースである。 ・ 正式なレジデンス事業は運営していないが、展覧会やプロジェクトによって海外から招へいたアーティストが滞在制作を行う。 ・ アーティストランの特性を活かし、独自のネットワークで北京滞在中のアーティストにレジデンスをオファーしている。
	運営組織	・ 3名(すべてボランティア)
	年間予算・財源	・ ー、レジデンスはプロジェクト毎に異なり、助成金を得ることもある。
	ビタミン・クリエイティブ・スペース / パビリオン Vitamin Creative Space / The Pavilion (p.242)	
	創設年 所在都市	・ 2007年、北京のパビリオンは2009年 広州、北京(ビジネス街の建国門外)
	対象分野	・ 美術
	概要・特徴	・ 広州と北京に拠点を置くコマーシャルギャラリーで、アジア、欧州の契約アーティスト12名を有し、中国におけるリサーチ型のアートプロジェクトを展開している。北京のスペース「パビリオン」は北京初の市立美術館「今日美術館」に隣接する高層ビルの23階に設置されている。 ・ レジデンスの制度はないが、北京におけるアーティストの滞在制作を支援するため、プロジェクトベースの活動の支援やプロモーション、リサーチに必要な様々なロケーションや情報を提供し、メディアアート等の技術的なサポートを行うなど、アーティストの条件によって柔軟に対応している。
	運営組織	・ 2名
	年間予算・財源	・ ー
韓国	ソウル芸術文化財団 / ソウル創作空間 Seoul Foundation for Arts and Culture / Seoul Art Space (p.247)	
	創設年 所在都市	・ 2003年(財団)、2007ー11年(創作空間) ソウル市内各所(9箇所)
	対象分野	・ 美術、工芸、写真、映像、メディア、演劇、ダンス、文学等 キュレーターを含む
	概要・特徴	・ オ・セフン前市長が、文化(カルチャー)と経済(エコノミクス)を融合させる「カルチャーノミクス(Culturenomics)」政策の一環としてスタート。文化で地域を再生させ、産業に付加価値を生み出すことを目的としている。 ・ 現在ソウル市内に9ヶ所あり、ムンレ以外は既存の建物を再利用した施設。そのうちの7ヶ所で多様なレジデンス事業を展開している。
	運営組織	・ ソウル芸術文化財団(ソウル市の委託から財団の直営に移管)、各創作空間は統括マネージャーをトップにした自主裁量による独自運営
	年間予算・財源	・ 57.5億ウォン(約5億600万円、2012年度9施設)、財団全体予算は約23億円
	創作空間事業団 衿川(クンチョン)芸術工場 Seoul Art Space_Geumcheon (p.254)	
	創設年 所在都市	・ 2009年 ソウル市(クンチョン区、ソウルの代表的な工場地帯)
	対象分野	・ 美術、写真、映像 キュレーターを含む
	概要・特徴	・ アーティストに安定した創作空間と国際交流の機会を提供することを基本に、アートと産業の協働を指向。地域住民や1,100余りの製造業団地の勤労者とのコミュニケーションを試み「都市を再生産する夢の工場」としての機能を追及している。 ・ ①海外芸術家交換プログラム(横浜、ニューヨーク、バルセロナ、メルボルンのAIR との交換プログラム)、②国際共同プロジェクト(ソウルの都市問題等を対象にした国内外のアーティスト、キュレーターの作品や共同リサーチ)、③レジ

国	各国の主要なアーティスト・イン・レジデンスの概要	
		<p>デンスプログラム(毎年1回、公募で選考)の3種類のレジデンス事業を実施。</p> <ul style="list-style-type: none"> 元印刷工場を改修した施設に19のスタジオ、共同作業場などを整備。 AIR とは別プロジェクトだが、アートと企業を連携させて産業化、ビジネス化の可能なアイデアを公募する「ダビンチ・アイデア・コンテスト」も実施している。
	運営組織	<ul style="list-style-type: none"> ソウル芸術文化財団、創作空間本部に属する11名
	年間予算・財源	<ul style="list-style-type: none"> 約11億ウォン(約9,700万円、2012年度)、ソウル芸術文化財団
	創作空間事業団 文来(ムンレ)芸術工場 Seoul Art Space_Mullae (p.260)	
	創設年 所在都市	<ul style="list-style-type: none"> 2010年 ソウル市(ムンレ洞、鉄工所や資材販売店が密集する工業地域。2007年頃から、空き家になった建物をアーティストたちがアトリエとして利用するようになり、現在は200名余りが活動する「ムンレ芸術村」が形成されている)
	対象分野	<ul style="list-style-type: none"> 美術、舞台芸術、メディアアート、サウンドアート、ジャンルを越えたクロスオーバー的な多元芸術
	概要・特徴	<ul style="list-style-type: none"> 「ムンレ芸術村」をはじめとする国内外のアーティストの創作支援、文化芸術を通じた都市再生への寄与、若い有能なアーティストのインキュベーターといったビジョンに基づき、大型プロジェクトや共同プロジェクト、稽古などに共同利用できる空間と設備を運営し、個々の様々なプロジェクトを支援している。 個人アーティストへのスタジオの提供は行わず、9部屋のゲストルームを運営。韓国アーティストとの交流・共同プロジェクトの実施を条件に年2回公募。 プログラムは、①創造空間の提供(アーティストの創造活動、作品公開のために施設や設備を提供)、②アーティスト支援“MAP”(制作費、施設・設備、メンタリングや批評を提供)、③ムンレ芸術村周辺の文化活動の支援“MEET”(地域住民や工場労働者を対象にしたコミュニティプログラム)、④国際交流プログラム(オーストラリア、シンガポール等との交流)の4種類。
	運営組織	<ul style="list-style-type: none"> ソウル芸術文化財団、創作空間本部に属する5名
	年間予算・財源	<ul style="list-style-type: none"> 10.5億ウォン(約9,500万円)、ソウル芸術文化財団。ただし、その内の2.5億ウォン(約2,200万円)はソウル芸術文化財団の助成制度を活用した事業費
	仁川アートプラットホーム Incheon Art Platfrom (p.267)	
	創設年 所在都市	<ul style="list-style-type: none"> 2009年 仁川市(旧市街、中(チュン)区海岸(ヘアン)洞)
	対象分野	<ul style="list-style-type: none"> 美術、舞台芸術、メディアアート、文学 文化研究者等を含む
	概要・特徴	<ul style="list-style-type: none"> 開港期の13棟の建物を改修して整備された複合文化施設で、アーティスト・イン・レジデンスを中心に、公演や展示、教育など幅広い活動を行う。 ジャンルや国籍、出身など、多様な文化的背景をもつアーティストや研究者が相互交流を行うことで、学際間、ジャンル間の協働を促進し、新たな芸術的エネルギーを生み出すことを目標に、スタジオ提供だけではなく、広報やプロジェクト実施の支援など、ソフト面のサポートも行っている。 毎年11月に公募、30-40人のアーティストが滞在する。これまでの応募者総数は2,000人、入居アーティストは200名を超えた。2012年には市内から4時間、北朝鮮に近い白翎島(ペンリョンド)にアーティストが滞在できる施設を作り、「白翎島平和芸術レジデンス」プログラムを実施している。
	運営組織	<ul style="list-style-type: none"> 財団法人仁川文化財団、8名(他に学芸チーム7名、インターン4名)
	年間予算・財源	<ul style="list-style-type: none"> 13億ウォン(約1億1,000万円)、3-5%の企業協賛金を除き仁川市の補助金

国	各国の主要なアーティスト・イン・レジデンスの概要	
シンガポール	サブステーション The Substation (p.277)	
	創設年 所在都市	● 1990年 シンガポール
	対象分野	● 美術、舞台芸術、音楽等
	概要・特徴	<ul style="list-style-type: none"> ● 変電所を改修したシンガポール初の非営利のアートセンター。アーティスト・イン・レジデンスのほか、公演、展覧会、シンポジウム、文化講座などを実施。 ● 2011年からアソシエイト・アーティスト・リサーチ・プログラムというレジデンス事業を実施。招へいアーティストには2年間、リサーチ費用として1万シンガポールドル(約80万円)を支給し、分野を横断するリサーチや実験的な活動を支援。 ● シンガポールでは偏見が根強い HIV 感染者へのインタビューを行い、「我々はなぜ動くのか」といった本質的な問いを突き詰めるダンサー、海外のブランド品に比べて評価の低いシンガポールのファッションデザインに疑問を抱き、アート、建築、数学理論を超えたデザインの研究に取り組むアーティストなど、社会的問題にコミットするような活動を支援している。 ● その他に、美術、舞台芸術、音楽の企画公募を行って制作費等を支援する「オープン・コール」、シンガポールの若手舞台芸術関係者を対象に、18ヶ月間にわたって新作の制作を支援する「ディレクターズ・ラボ」なども実施。
	運営組織	● サブステーション(有限責任保障会社形式の非営利団体)、14名
	年間予算・財源	● 97万シンガポールドル(約7,800万円)、アーツカウンシルの助成金20%
	シアターワークス TheatreWorks (p.286)	
	創設年 所在都市	● 1985年 シンガポール
	対象分野	● 美術、デザイン、舞台芸術、音楽、映画等
	概要・特徴	<ul style="list-style-type: none"> ● オン・ケンセンが芸術監督を務めるシンガポールを代表する劇団。斬新な解釈と批評精神に満ちた作品を制作し、これまでに国内外で2,500回以上の公演を実施してきた。 ● ①クリエイティブス・イン・レジデンス(新進気鋭のシンガポールのアーティスト、クリエイターを支援。2万シンガポールドル(160万円)の制作費とスペースの無料利用が可)、②アソシエイト・ディレクター・プログラム(シンガポールを拠点とするアーティストを支援)、③海外アーティストを対象としたレジデンス事業(毎年海外から2名程度を招へいし、制作過程、作品完成、国際交流などを支援)、④公募プログラム(非営利の企画を募集、施設を無償で提供)がある。 ● その他に、移動型レジデンス事業と言える「フライング・サーカス・プロジェクト(国籍や専門分野の異なるアーティスト30名程度が、2-3週間で2都市に滞在し、共同作業を行う)」、「アーツ・ネットワーク・アジア(ANA)」というネットワーク型の助成事業も展開しており、ともにレジデンス的な要素を含んでいる。
	運営組織	● シアターワークス(有限責任保障会社形式の非営利組織)、7名(他にパートタイム4名とボランティア)
	年間予算・財源	● 支出ベースで99万2,530シンガポールドル(約8,000万円、2011年度)、164万9,863シンガポールドル(約1億3,200万円、2010年度)と年度でばらつきあり。財源は、アーツカウンシル、フォード財団からの助成金、会場使用料収入など。
	シンガポール・タイラー・プリント・インスティテュート Singapore Tyler Print Institute (p.294)	
	創設年 所在都市	● 2002年 シンガポール

国	各国の主要なアーティスト・イン・レジデンスの概要	
	対象分野	<ul style="list-style-type: none"> 現代版画、ペーパーワークス
	概要・特徴	<ul style="list-style-type: none"> 米国版画工房の発展を支えたプリンター、ケネス・タイラーがシンガポール政府と協力し、倉庫を改修して設立した版画工房兼ギャラリー。 毎年6－8人のアーティストを招待し、渡航費、滞在費（専用アパート）、日当を支給。工房を無償で貸し出し、材料の調達や職人の費用を STPI が負担する形で、実質的に作品の制作費を支援している。公募は行わず、国際的に活動し、一定の評価を得ているアーティストを指名するが、いわゆる版画家ではなく、コンセプチュアル・アートや彫刻など版画界に革新的なアイデアと技術をもたらすアーティストが選ばれる。 アーティストと個別に契約を結び、展覧会の開催、カタログ発行、作品のプロモーション・販売も STPI が行う。
	運営組織	<ul style="list-style-type: none"> STPI（非営利組織）、24名（うちフルタイム20名、プリンター7名、ペーパーメーカー3名など）
	年間予算・財源	<ul style="list-style-type: none"> 約400万シンガポールドル（3億2,000万円）、作品の販売収入がメインだがアーツカウンシルや民間財団の助成もあり。
	オブジェクティブス Objectifs (p.299)	
	創設年 所在都市	<ul style="list-style-type: none"> 2003年 シンガポール（モスクや絨毯販売店などが立ち並ぶ観光地）
	対象分野	<ul style="list-style-type: none"> 写真、映像
	概要・特徴	<ul style="list-style-type: none"> 写真と映像に特化した民間のアートスペースで、写真・映像の制作講座、展覧会や上映会、アーティスト・イン・レジデンスなどを実施している。 教育プログラムの一環として「オブジェクティブス・レジデンス・アンド・ラボ（Objectifs Residency & Lab）」というレジデンス事業を実施。スキルアップを目指すアーティストに制作場所を提供し、新しい作品づくりを支援している。 海外アーティストを年1回の公募で選考。40－50件の応募から2、3件を選定。奨学金と制作費（合計16万円）が支給され、オブジェクティブスの施設、設備が利用可。6週間の滞在中にコミュニティを対象にしたワークショップ等を実施することが条件となっている。
	運営組織	<ul style="list-style-type: none"> オブジェクティブス（民間の有限会社）、メンバーは6名（うち4名が常勤）
	年間予算・財源	<ul style="list-style-type: none"> 年間予算は不明。レジデンス1人当たりの費用は4,000シンガポールドル（32万円）、アーツカウンシルから助成あり。
オーストラリア	ガートルード・コンテンポラリー Gertrude Contemporary (p.307)	
	創設年 所在都市	<ul style="list-style-type: none"> 1985年 メルボルン（フィッツロイ、危険な地域からおしゃれな地域に変貌）
	対象分野	<ul style="list-style-type: none"> 美術、メディアアート等 キュレーターを含む
	概要・特徴	<ul style="list-style-type: none"> 展覧会、スタジオプログラム（メルボルン在住のアーティストに2年契約で賃貸）、国際交流、教育プログラム、出版を通し、アーティストの育成、現代芸術の実践と理論の連結を目指している。 ガートルードを拠点とした滞在制作、ネットワーキング、リサーチなどを行う海外のアーティスト及びキュレーターを対象にスタジオ兼住居（1部屋）を使ってレジデンス事業を実施。アーティストは公募制で、スタジオ兼住居以外に必要な渡航費・滞在費は自己負担。キュレーターは推薦制で、政府系助成機関から資金援助がある。 年間の応募数は約50件、「リスク・協働・批判的精神」で現代美術の最先端を開拓するアーティストとキュレーター数名が2週間－3ヶ月滞在する。ガートル

国	各国の主要なアーティスト・イン・レジデンスの概要	
		ードが形成したアートコミュニティとの交流が強みで、海外キュレーターはオーストラリアのアーティスト、キュレーターを紹介することが成果として望まれる。
	運営組織	<ul style="list-style-type: none"> ガートルード・コンテンポラリー（非営利組織）、フルタイム4名、パートタイム1名
	年間予算・財源	<ul style="list-style-type: none"> 約70万豪ドル（7,000万円、2011年度支出ベース）。約50%はオーストラリア・アーツカウンシル、アーツ・ヴィクトリアからの助成金。
	アーツスペース Artspace (p.312)	
	創設年 所在都市	<ul style="list-style-type: none"> 1983年 シドニー
	対象分野	<ul style="list-style-type: none"> 美術、メディアアート等
	概要・特徴	<ul style="list-style-type: none"> 現代芸術に取り組むあらゆる成長段階のアーティストに対し、展覧会開催の機会、制作スペース、人的資源を提供している。シドニー・ビエンナーレと連携し、アーティスト・イニシアティヴ組織の先例としても内外で注目されている。 公募のレジデンス・プログラムの場合、スタジオ（定員6人）は週75豪ドル（7,500円）、レジデンス・スタジオ（スタジオ兼住居、定員4人）は週250豪ドル（2万5,000円）の家賃をアーティストが負担する。応募者はともに年間30～40人。滞在期間は前者が2～6ヶ月、後者が1～3ヶ月。 アジアリンクやアートソース、モントリオールのダーリン・ファウンドリーなどと連携したレジデンシーでは滞在経費はホスト機関が負担する仕組み。
	運営組織	<ul style="list-style-type: none"> ビジュアル・アーツ・センターLtd.（Visual Arts Centre Ltd.）という会社組織の非営利団体。フルタイム6名、パートタイム1名
	年間予算・財源	<ul style="list-style-type: none"> 約100万豪ドル（1億円）、オーストラリア・アーツカウンシルとアーツ NSW からの助成金82万豪ドル（8,200万円）。
	パフォーマンス・スペース Performance Space (p.319)	
	創設年 所在都市	<ul style="list-style-type: none"> 1983年 シドニー（巨大な鉄道車両工場を改修したキャリジワークス内）
	対象分野	<ul style="list-style-type: none"> 美術、舞台芸術、メディアアート等
	概要・特徴	<ul style="list-style-type: none"> セントラル駅近くのレッドファーンで、実験的なパフォーマンスを安価に演じることのできる非営利の施設として設立。パフォーマーと観客の原点を追求する活動が国内外で知られるようになり、2007年にキャリジワークスに移転。 新たな表現、ジャンルを横断した共同制作、劇場以外（オフサイト）での実験的で多様な表現を追求。レジデンシーはそうしたプロジェクトの萌芽からプロダクション（作品制作）、国内外巡回への発展を視野に入れて実施されている。 ①インデジスペース・レジデンシー（経験のある原住民アーティストのための公募プログラム）、②スティーブン・カミンズ遺贈レジデンシー（90年代にエイズで亡くなったアーティストの遺贈金で運営される公募プログラム。キャバレー等で演じているアーティストのレベルアップ）、③オープン・レジデンシー（シドニー大学、NSW 大学等が受け入れパートナーとなる招待プログラム、の3種類。 PS が実現したいと考えるプロジェクトであることが選考の基準。最も重要なのは新しいアイデアで、レジデンシーはそれを実現するための過程のひとつ。
	運営組織	<ul style="list-style-type: none"> パフォーマンス・スペース（非営利組織）、フルタイム10名、パートタイム2名
	年間予算・財源	<ul style="list-style-type: none"> 173万豪ドル（1億7,300万円）、70～80%が連邦政府・州政府の補助金
	アジアリンク・アーツ Asialink Arts (p.324)	
	創設年 所在都市	<ul style="list-style-type: none"> 1990年 メルボルン

国	各国の主要なアーティスト・イン・レジデンスの概要	
	対象分野	<ul style="list-style-type: none"> 美術、舞台芸術、文芸
	概要・特徴	<ul style="list-style-type: none"> オーストラリアをアジア地域における文化パートナーとして位置づけること等をミッションに、レジデンスプログラム、文芸交流プログラム、舞台芸術交換プログラム、巡回展覧会、美術分野の地域間交流プログラムを実施している。日本ではトーキョーワンダーサイト、瀬戸内国際芸術祭との連携事業も実施。 独自の施設を持ったレジデンスではなく、国内外のパートナー機関と連携して幅広い分野の芸術関係者の交流をサポートすることが特徴で、レジデンスプログラムとしてはオーストラリア最古の歴史(22年)を有する。 ①海外のパートナー機関の施設に滞在するレジデンシー、②日本、韓国、台湾との交換レジデンシー、③新しいレジデンシーのモデルを追求する実験レジデンシー、④自身で滞在先を決める自主レジデンシーの4種類がある。 派遣アーティストには最長3ヶ月で1万2,000豪ドル(120万円)をアーティストに、受け入れの場合はスタジオ費用3,000豪ドル(30万円)を受入機関に支払う。
	運営組織	<ul style="list-style-type: none"> メルボルン大学関連機関(affiliate)、24名(アーツ部門は6名)
	年間予算・財源	<ul style="list-style-type: none"> レジデンス関係の予算は31万豪ドル(3,100万円)。メルボルン大学、マイヤー基金、オーストラリア・アーツカウンシルの他、豪韓交流基金、豪日協会、豪州インドネシア協会など政府系・国際交流系の公的機関から出資を受けている。



A. 英国

1. デルフィナ財団 | Delfina Foundation
2. ガスワークス | Gasworks

写真:ガスワークス
1英ポンド=150円で換算

1. デルフィナ財団 | Delfina Foundation

面会日: 2013年2月21日(木) 11:00-13:00

面会者: Laura CARDERERA (Projects and Partnerships Manager)

URL: <http://www.delfinafoundation.com>

1. 運営機関の概要

デルフィナ財団は英国と中東や北アフリカとの文化交流を促進することを目的に、アーティスト・イン・レジデンス事業に取り組む民間財団である。ロンドン市中心部、ヴィクトリア駅から徒歩10分のアクセスの良い場所にスタジオ兼住居(以下、「スタジオ」と事務所がある。

(1) 設立趣旨・経緯

2007年、デルフィナ財団はフィランソピストのデルフィナ・エントレカナレス(Delfina Entrecanales CBE)により設立された。エントレカナレス氏はデルフィナ財団の前身であるデルフィナ・スタジオ(Delfina Studio)を1998年から2006年まで運営していたが、2006年に個人的な理由でデルフィナ・スタジオを閉鎖した。

デルフィナ・スタジオは英国の現代アートで最も権威のある賞の一つ、ターナー賞を受賞したマーティン・クリードやマーク・ウォリンジャーなど、当時の新鋭のアーティストが制作していたスタジオとして広く知られている。

90年代の英国では、ヤング・ブリティッシュ・アーティスト(Young British Artists)が台頭し、それまでは名声を確立したアーティストの作品ばかりを注目していた美術収集家が若手アーティストに関心を抱くようになる。しかし、ロンドン市内には若手アーティストのためのスタジオが十分になかったため、美術収集家でもあるエントレカナレス氏は若手アーティストの支援の一環としてスタジオを安価で提供する事業を始めた。これがデルフィナ・スタジオの始まりで、ロンドン市東部のストラットフォード地区のジーンズ工場を改装したスタジオと、ロンドン市南部のバーモンジー地区のチョコレート工場を改装したスタジオを運営していた。また、海外の若手アーティストを招へいしてスタジオを提供するレジデンス事業に先駆的に取り組んでいた。

デルフィナ・スタジオ閉鎖後、エントレカナレス氏はレジデンス事業で過去に招へいたアーティストから招かれ、中東の現代アートの状況を視察した。そして、その視察を通じて才能溢れる新鋭のアーティストと出会い、その多くのアーティストが中東以外では紹介されて

いないことを知る。特に、英国では政治的な理由のために、中東の現代アートが公立美術館で発表される機会が少なく、また、商業ギャラリーでは国際的に知名度の高い作家でない限りは取り扱われることがなかった。そこで、エントレカナレス氏は英国と中東や北アフリカの国や地域との文化交流を促進することを目的に、それらの国や地域からアーティストを招へいし、また、英国のアーティストやキュレーターをそれらの国や地域に派遣するレジデンス事業を推進するデルフィナ財団を設立した。

エントレカナレス氏は現代アートを支援するフィランソピストとしてその功績が認められ、2012年にエリザベス女王から大英帝国勲章の一つであるCBE(司令官)を授与された。

(2) ミッション

デルフィナ財団は中東と北アフリカの国や地域との国際的な共同事業を軸に文化交流を促進すること、また、創造的な試みを推進することをミッションとして、レジデンス事業、パートナーシップの形成、パブリック・プログラムに取り組んでいる。

また、上記のミッションを達成するために具体的な目標を以下のように設定している。

- アーティスト、芸術団体や芸術関係者のモビリティを向上すること
- 芸術活動や交流を通じて相互理解を促すこと
- 国際的な共同プログラムやパートナーシップを強化すること
- 社会とつながりある行動を促し、観客との交流や対話の機会をつくること
- 中東と北アフリカの国や地域の現代アートを普及し、中東と北アフリカの国や地域へと西洋の視野を広げること、また、レジデンス事業を通じて国際的な対話の機会をつくること

2. プログラムの内容と実績

デルフィナ財団の活動は主に中東や北アフリカの国や地域からアーティストやキュレーターを招へいする事業と、英国やその他の欧州の国からアーティストやキ

キュレーターを派遣する事業の2つで構成されている。各事業は国際的な文化交流の促進、アーティストやキュレーターの育成、ネットワークの拡大を目的とする。

デルフィナ財団の事業の特徴は、国内外の文化機関との数々のパートナーシップをネットワーク化し、その独自のネットワークの下で招へい事業と派遣事業をセットにして推進していることである。そのため、本来は招へいと派遣を兼ねた事業であるが、本レポートでは便宜的に招へいと派遣に分けて整理した。

(1) アーティストやキュレーターを招へいする事業

この事業では、主に中東や北アフリカの国や地域のアーティストやキュレーターを対象に約3ヶ月の滞在機会を提供し、年間約15人を招へいしている。

英国の芸術団体や文化機関との共同プログラムや海外の芸術団体や文化機関とのパートナーシップ・プログラムなど、様々なプログラムがある。デルフィナ財団は各プログラムに特定のテーマや条件を設定し、その内容に応じて公募または推薦でアーティスト等を選考している。

滞在アーティスト等は主にリサーチやプロジェクトを目的に活動し、滞在成果をアーティストトークやオープンスタジオでプレゼンテーションする。滞在中に作品の制作や発表を義務付けられていない。

若手のアーティスト等は英国のアートシーンのリサーチや創作のアイデアの試作を目的に滞在を希望するケースが多く、実績のあるアーティストは実践的なプロジェクトを実現することを目的に滞在を希望するケースが多い。そのため、アーティスト等の要望に応じて様々な支援を行う。

例えば、若手のアーティストには、美術館のキュレーターや商業ギャラリーのギャラリストと面会することを促している。アーティストは創作のアイデアをプレゼンテーションし、キュレーターやギャラリストからフィードバックをもらってスタジオで作品を試作する。「デルフィナ財団は創作のアイデアを構想し、実験的な試みをするための空間で、また、それらのアイデアを失敗するための空間でもあります。アーティストは滞在成果として作品を発表しなければいけないというプレッシャーがないか

らこそ、自由に創作のアイデアを実践できるのです」とローラ・カルデレーラ(Laura CALDERERA)は説明する。

また、実績のあるアーティストの例では、トルコ人のアーティストがフリーズ・アートフェアとの共同企画のプロジェクトに参加した。そのアーティストはアートフェアでパフォーマンスをするアイデアを構想し、そのアイデアを実現するために、デルフィナ財団は出演者のオーディションやリハーサルのための準備をサポートした。

各プログラムの滞在期間は3ヶ月間だが、滞在アーティスト等の滞在の目的や活動内容に応じ、リサーチのために2週間、創作のために2ヶ月、展覧会のために2週間というように滞在期間を3回に分けることも可能である。

以下、具体的なプログラムの事例を整理した。

① Magic of Persia

Magic of Persiaはイランの現代アートの若手アーティストを顕彰する賞、マジック・オブ・ペルシャ・コンテンポラリー・アート・プライズ(Magic of Persia Contemporary Art Prize)とのパートナーシップ・プログラムで、この賞を受賞もしくはノミネートされたアーティストはデルフィナ財団のレジデンスに滞在することができる。

2011年度には、ロンドン市内のヴィクトリア・アンド・アルバート博物館(V&A: Victoria and Albert Museum)と共同プログラムを実施した。この共同プログラムで、デルフィナ財団はV&Aのイベントのために委嘱作品を制作するアーティストの選考や制作の支援を依頼された。そして、マジック・オブ・ペルシャ・コンテンポラリー・アート・プライズがイランでアーティストの公募を行い、デルフィナ財団は選考されたアーティストに滞在制作の機会を提供した。

② Artist-to-Artist

Artist-to Artistは英国のアーティストと中東や北アフリカの国や地域のアーティストとの対話を促すプログラムで、英国の文化機関、ヴィジティング・アーツ(Visiting Arts)との共同プログラムで推進されている。

このプログラムは英国のアーティストが中東や北アフリカのアーティストをパートナーに、英国での共同のリ

デルフィナ財団の外観。青色の木製の扉のある建物が現在の拠点。緑色の木製の扉のある建物を新しく購入した。

サーチ・プロジェクトを申請するという仕組みで運営されており、パートナーのアーティストは最大3週間のレジデンスの機会を与えられる。

リサーチと対話の場を提供することを目的としているため、滞在成果として作品を制作する必要はない。滞在中、デルフィナ財団は観客との対話を持つ機会として、アーティスト・トークやスクリーニングなどのパブリック・イベントを開催している。

2010年度のプログラムでは、エジプト、レバノン、トルコから3組のアーティストが同じ時期に招へいされ、英国で2-3週間のリサーチを実施し、デルフィナ財団の企画するパブリック・イベントに参加した。パブリック・イベントでは、エジプト、レバノン、トルコから3組のアーティストが映像作品を紹介するイベントと、創作環境に関連するモビリティ、共同制作やサイトスペシフィックについての意見交換をするラウンドテーブルが行われた。

2010年度の滞在アーティストは以下のとおり。

- Robin DEACON (英国) と Ali CHERRI (レバノン)
- Delta Arts (英国)、Doa ALY (エジプト)
- Rebecca WEEKS & Steven PEIGE (英国)、Volkan ASLAN & Iz OZTAT (トルコ)

③ Delfina-FICA Research Fellowship

Delfina-FICA Research Fellowshipは、毎年、中東または北アフリカから1名、インドから1名のキュレーターや研究者を対象にデルフィナ財団のレジデンスの滞在機会を提供するプログラムで、インド現代美術財団 (FICA: Foundation for Indian Contemporary Art)、Iniva (Institute of International Visual Arts) とゴールドスミス・カレッジの視覚文化学部とのパートナーシップで推進されている。

招へいを受けたキュレーターや研究者は、ゴールドスミス・カレッジの視覚文化学部や、中東、北アフリカやアジアと欧州の文化の関係を研究する文化機関、Inivaでメンタリングやチュートリアルを受け、自己の研究を実践することができる。

- 2011年度招へい者 Sarah RIFKY (エジプト)、Nida GHOUSE (インド)
- 2012年度招へい者 Nadia CHRISTIDI (シリア/レ



バノン)、Ananny MEHTTA (インド)

④ Accented Network

Accented Networkは、海外でのリサーチの機会をアーティストに提供するモビリティプログラムで、英国、ルーマニア、レバノン、トルコ、エジプトの5ヶ国で6つの文化施設や民間財団がパートナーシップを組織し、各機関でアーティストの受け入れを行っている。カルデレーラ氏は、「英国のアーティストがレバノンに行くための助成はありますが、エジプトのアーティストがレバノンに行くための助成はありません。そのため、このモビリティプログラムでは、いくつかの国や地域の文化施設や民間財団がパートナーシップを組むことで、そのようなモビリティの課題の解決策を考えました」と、プログラムの経緯を説明する。このプログラムはブリティッシュ・カウンシルの支援を受けて実現したという。

各文化機関が公募を行ってアーティストを募集し、各文化機関の代表が審査員として集まってアーティストの選考をしている。

Accented Networkの提携機関と2009年度の滞在アーティストは以下のとおり。

- Delfina Foundation (英国、ロンドン)、Ala YOUNIS (ヨルダン)
- Spike Island (英国、ブリストル): Gordana NIKOLIC (セルビア)
- Townhouse Gallery (エジプト、カイロ): Sislej XHAFA (コンボ) & Rosalind NASHASHIBI (英国)



プロジェクトスペース。滞在アーティストの展示やアーティストトークなどを行う。

- Platform Garanti CAC (トルコ、イスタンブール): Maha MAAMOUN (エジプト) & Vangelis VLAHOS (ギリシャ)
- Ashkal ALWANI (レバノン、ベイルート): Ashkan SEPAHVAND (イラン) & Burak DELIER (トルコ)
- Vector Association (ルーマニア、イアシ): Lina MOUNZER (レバノン)

(2) アーティストやキュレーターを派遣する事業

この事業では、中東や北アフリカの国や地域の芸術団体や文化機関とのパートナーシップを組み、英国やその他の欧州の国のアーティストやキュレーターを対象に、3ヶ月の滞在機会を提供している。主にアーティスト・イン・レジデンスや国際展、アートフェアなどに参加するプログラムが多い。近年では中東や北アフリカだけでなく、南アジアや南米の国や地域との共同事業もスタートした。

① A.I.R. Dubai

A.I.R. Dubaiは英国とアラブ首長国連邦のアーティストやキュレーターとの文化交流を活性化させることを目的に、デルフィナ財団、ドバイ文化芸術庁 (Dubai Culture and Arts Authority)、アート・ドバイ (Art Dubai)、タシュキール (Tashkeel) が共同で推進するプログラムである。

2012年のプログラムでは、3名のアラブ首長国連邦のアーティストと3名の欧州のアーティスト、1名の英国のキュレーターがドバイのアルファヒディ歴史保護区にあるアーティスト・イン・レジデンス、タシュキールに9週間滞在した。参加者はそれぞれのアイデアを議論し、最終的に一つのコンセプトの下で作品を制作してオープンスタジオを実施した。また、アート・ドバイでサイトスペシフィックな作品を制作して展示した。

(3) アーティストの募集・選考方法

デルフィナ財団のレジデンス事業は国内外の芸術団体や文化機関とのパートナーシップで推進されており、個々のプログラムに応じて、様々なアーティストの募集・選考方法がある。

アーティスト等を招へいする事業では、海外の芸術団体や文化機関が主体となって公募を実施し、デルフ

ィナ財団のディレクターが最終選考をすることが多い。また、アーティスト等を派遣する事業では、デルフィナ財団が主体となって公募を実施し、海外のパートナーが最終選考をすることが多い。

いずれのプログラムでも、レジデンスを機会に今後の活躍が期待できるかどうかということを重視して選考している。また、特定のテーマについて議論ができるかどうかということも重要だという。そのため、書類選考だけでなく、スカイプなどのインターネット電話サービスを利用して面談を行っている。また、英国との関係が低い国や地域のアーティストを戦略的に選ぶこともある。

(4) プログラムの実績・過去の滞在者

2007年のデルフィナ財団の創設から現在までの6年間で、110名以上のアーティストとキュレーターが参加した実績がある。そのうち、主に中東や北アフリカから69名のアーティストとキュレーターを招へいし、英国から41名のアーティストやキュレーターを中東や北アフリカの国や地域に派遣した。

なお、デルフィナ財団として日本からのアーティストの受け入れを行った実績はないが、デルフィナ・スタジオでレジデンス事業を実施していたときに、大岩オスカーや高橋知子が滞在した実績がある。

3. 施設の構成と内容

デルフィナ財団は5階建ての建物にスタジオ兼住居を4部屋、展示やトークのためのプロジェクトスペースと事務所を持つ。

また、昨年、デルフィナ財団は事業を拡大するために隣接する建物を購入した。スタジオとプロジェクトスペースを増築し、新たにアーカイブスペースを拡充する計画で、2014年の完成に向けて改装工事中である。

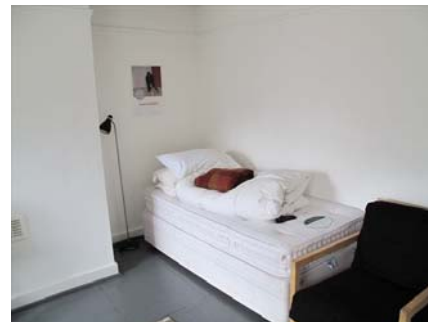
4. 運営体制と事業収支

(1) 運営組織

デルフィナ財団は非営利の民間財団で、3名のスタッフがフルタイムで働いている。

- Director

スタジオ兼住居。スタジオで作品制作するアーティストもいるが、主に活動拠点にするアーティストが多い。



- Administrative and Projects Coordinator
- Projects and Partnership Manager

ディレクターはレジデンス事業に関わる全ての業務に従事しており、アドミニストレーティブ・プロジェクト・マネジャーは主に滞在アーティストやキュレーターの滞在中の活動の支援をしている。また、プロジェクト・パートナーシップ・マネジャーは主に海外とのパートナーシップ・プログラムのプロジェクト・マネジメントや、ファンドレイジングを担当している。

アーツカウンシル・イングランドからの定期的な補助金を獲得するために、PR会社に業務委託をしてメディアへの露出の機会を増やす取り組みをしている。

(2) パートナーシップ

デルフィナ財団は、前述のように海外でレジデンス事業を運営する非営利の芸術団体やアーティストのモビリティを支援する文化機関とのパートナーシップを形成してレジデンス事業を推進している。例えば、インドからキュレーターを招へいするレジデンスプログラムでは、インド現代美術財団とパートナーシップを形成してインド在住のキュレーターを招へいするために必要な資金面での支援を受けたと言う。「海外のパートナーは、パートナーシップを通じてアーティストや芸術団体、文化施設とのネットワークを持つ組織に自国のアーティストやキュレーターを派遣するできることにメリットを感じているようです」とカルデレーラ氏はパートナーシップの意義を説明する。

なお、デルフィナ財団はレズ・アルティスに加盟していたが、現在は加盟していない。その理由は、独自のネットワークの拡大を優先的に考えるようになったためだと言う。

(3) 事業収支

デルフィナ財団の事業収支は約44万ポンド(約6,600万円)で、全体の約15%を事業費に約85%を運営費に割り当てている。スタッフの人件費や施設維持費などの運営費は自己財源で賄われ、レジデンス事業の招へいや派遣に関わる事業費は国内外の公的機関や民間財団からの助成で賄われている。英国ではアーツカウンシル・イングランドやブリティッシュ・カウンシルな

どから、海外ではモンドリアンフォonzやインド現代美術財団などの公的機関や民間財団から補助金や助成金を受けている。

5. 事業評価の実施状況

デルフィナ財団は滞在アーティストやキュレーターの滞在後のキャリアアップを事業の成果と考えている。そのため、滞在アーティストやキュレーターに事業評価を目的としたレポートや報告書の提出を義務づけるのではなく、滞在後の活動や展開について情報収集をし、それらの情報をフェイスブックなどで公開することが重要だと言う。

また、英国ではアーツカウンシル・イングランドやブリティッシュ・カウンシルなどの政府系の機関にレジデンス事業の意義の説明する必要がないと言う。カルデレーラ氏は、「創設者のデルフィナ・エントレカナレスが1998年にデルフィナ・スタジオを始めたとき、英国ではレジデンス事業に取り組む芸術団体はほとんどなく、その意義も認められていませんでした。しかし、現在では少なくとも英国の文化セクターの中では、アーティストには実験的な試みを実現できる場が必要で、アーティスト・イン・レジデンスはアーティストの育成のために重要とその価値が認められています」と説明する。

昨年、デルフィナ財団では2007年の創立から2011年までの過去5年間の活動を振り返り、事業全体の見直しを行った。その結果、中東や北アフリカの国や地域だけでなく、今後はアジアや南米の国や地域にも事業を拡大する方針である。カルデレーラ氏は、「これまでに中東や北アフリカの国や地域から招へいしてきたアーティストと同じ課題に直面している他の国や地域のアーティストとの出会いの場をつくりたいと考えています」と説明する。

6. 現在の課題と今後の方向性

昨年、デルフィナ財団の創設者のエントレカナレス氏は85歳の誕生日を迎えた。現在、主にエントレカナレス氏の自己資金で運営されているが、今後の持続可能性を考える上で、アーツカウンシル・イングランドからの定期的な助成金を獲得する必要があると考えている。

そのために、PR会社に業務委託をしてメディアへの露出の機会を増やす取り組みを始めたと言う。

また、前述したように、今後はアジアや南米の国や地域とのレジデンスプログラムを推進する方針がある。そのため、それらの国や地域の新鋭のアーティストの情報提供者とそのプログラムを支援する資金提供者を確保することを課題と考えている。

一方で、デルフィナ財団では、特定のテーマを設定してプログラムを推進しているため、海外の文化機関から定期的にアーティスト受け入れるようなパートナーシップを形成することができないという問題がある。例えば、オランダから毎年3人のアーティストを受け入れる条件でオランダの助成機関から資金提供を受けることを望んでいない。

今後、日本のアーティストの受け入れに非常に興味があり、若くて才能のあるアーティストの情報を提供してくれる芸術団体や資金面で支援してくれる文化機関を探したいと考えている。

滞在アーティストへのインタビュー

面会者: ビサン・アブ・エイシェ (Bisan ABU EISHE、以下「BA」)、アレクサンドラ・マクギルプ (Alexandra McGILP、以下「AM」)

1. 略歴、活動実績

BA: 1985年エルサレム生まれ、現代美術家。政治と社会構造の変化をテーマに、写真やビデオ、インスタレーションを制作。現在、エルサレムとロンドンを拠点に活動をしている。主なグループ展に、第12回イスタンブール・ビエンナーレ (2011年、イスタンブール)、世界社会フォーラム写真展 (2010年、エルサレム) がある。

デルフィナ財団のレジデンスプログラムでは、2012年7月から約3ヶ月、ロンドンに滞在。

AM: 1978年ロンドン生まれ、キュレーター。ロイヤル・カレッジ・オブ・アート、現代美術キュレーション修士課程修了。レディング大学にて、テート・コレクションの歴史をテーマに博士号を取得。現在、主に映画、ビデオやパフォーマンスを専門領域にインディペンデント・キュレーター、美術評論家としてロンドンで活動する。

デルフィナ財団のレジデンスプログラムでは、2012年1月から約3ヶ月、ドバイに滞在。ドバイでは、欧州で活動する3名のアーティストとアラブ首長国連邦で活動する3名のアーティストと共同でプロジェクトに取り組む。

2. アーティスト・イン・レジデンスに参加した動機

BA: 北アイルランドのベルファスト大学に交換留学をした経験はあるが、デルフィナ財団のレジデンスプログラムが初めてのレジデンスの体験であった。

政治や社会構造をテーマに作品を制作しているため、自国とは異なる環境に身を置くことで新しい創作の視点を見つけないかと考えていた。特に、英国はアーカイブが充実しており、パレスチナに関係するアーカイブも数多くあることが魅力の一つであった。また、デルフィナ財団はパレスチナの実業界で非常に有名で、パレスチナでデルフィナ財

団のディレクターと知り合い、アーティスト・イン・レジデンスは留学とは異なる場で、自分のプロジェクトに専念でき、様々なテーマについて議論のできる場と聞いて、応募することにした。

AM: 過去にフィンランドのアーティスト・イン・レジデンス、HIAP (Helsinki International Artist Programme) のキュラトリアル・プログラムに滞在した経験があり、デルフィナ財団のレジデンスが2回目のレジデンスの体験であった。

レディング大学で博士号を取得し、新しいプロジェクトに参加することに興味があったときに、デルフィナ財団のレジデンスプログラムの公募の情報をツイッター (Twitter) で知った。中東の現代美術に興味を持っていたので、応募することにした。

3. 創作活動の支援、レジデンスの経験

BA: デルフィナ財団は渡航費、滞在費や活動費を支給し、宿泊施設を提供してくれた。滞在中、英国のキュレーターやアーティストを紹介してくれ、また、パブリック・イベントでは、多くの観客との対話の機会を提供してくれた。

デルフィナ財団のスタッフはアーティストのアドバイザーでもあり、将来のアーティストとしての活動や作品についても相談に乗ってくれ、新しいプロジェクトを実現するためのサポートを受けている。

画家や彫刻家のようにスタジオで作品制作に専念するアーティストではないので、スタジオから出て、リサーチをし、アーティストや美術関係者と対話をする機会があることが重要であった。

AM: デルフィナ財団では、A.I.R. Dubaiというプログラムに参加した。私以外には3名のアラブ首長国連邦のアーティストと3名の欧州のアーティストが参加し、参加者全員でそれぞれの創作アイデアについて議論し、最終的にオープンスタジオを開催した。

フィンランドのHIAPでは、自分のリサーチに専念し、数多くのアーティストのスタジオビジットをしたが、A.I.R. Dubaiでは、オープンスタジオの企画のために、プロジェクトのマネジメントをしたり、参加

アーティストにアドバイスをするなど、国際的な環境でキュレーターとしての実践的な活動をする良い機会であった。また、参加アーティストと生活とともにし、美術館やギャラリーと一緒に視察するなど、孤独に感じることはなかった。

アーティスト・イン・レジデンスでは、財政的な支援とともに、その国の美術界とコンタクトをとるための橋渡しをしてくれる支援が重要で、どこの美術館やギャラリーに行くべきか、また、誰に会うべきかをアドバイスしてくれることで、充実した滞在成果を得ることができる。

4. 日本のアーティスト・イン・レジデンスについて

BA: 日本のアーティスト・イン・レジデンスには参加したことがないが非常に興味がある。父がパレスチナで活躍する劇団アルカサバ・シアターの俳優で、日本にツアーで滞在したことがあるので、詳しい話を聞いた。

パレスチナはある意味で敗戦したという過去があるので、第二次世界大戦で敗戦した日本がその後に復興と経済成長を遂げた経緯について興味がある。日本の社会がどのように発展したのかという視点で歴史や文化について研究したいと考えている。

AM: 2001年に来日した経験があり、日本のレジデンスプログラムにも非常に興味がある。その一方で、英語を話す人が多くはないというイメージがあるので、充実したリサーチをするためには通訳を兼ねた案内役が必要だと思う。

また、英国と同様に日本は物価が高いというイメージがあるので、渡航費、滞在費や活動費などの支援があるかないかが日本のレジデンスプログラムに参加する決め手になると思う。

2. ガスワークス | Gasworks

面会日: 2013年2月22日(金) 15:00-17:00

面会者: Alessio ANTONIOLLI (Director)

URL: <http://www.gasworks.org.uk>

1. 運営機関の概要

ガスワークスは、その名称にあるようにロンドンの南部のガス製造工場の隣にある現代美術の複合施設で、主に展覧会事業とレジデンス事業に取り組んでいる。また、現代美術の領域で活動するアーティストと芸術団体の国際ネットワークとして知られるトライアングル・ネットワーク(Triangle Network)の事務局を運営しており、ガスワークスのディレクターのアレッシオ・アントニオリ(Alessio ANTONIOLLI)はトライアングル・ネットワークのディレクターを兼任する。

(1) 設立趣旨・経緯

ガスワークスはトライアングル・ネットワークから生まれたイニシアティブで、1994年に設立された。

トライアングル・ネットワークは、英国のアーティストのアンソニー・カロ卿(Sir Anthony Caro)とフィランソロピストのロバート・ロダー(The Hon Robert Loder)が1982年に設立したトライアングル・アーツ・トラスト(Triangle Arts Trust)の活動から生まれたネットワークで、創作のアイデアやスキルを交換するアーティストの対話の場をつくることを目的に、創設者の一人のカロ卿が同年の夏に米国のニューヨーク州で様々な国や地域からアーティストを集めた滞在型のワークショップを計画したことが始まりである。そして、そのワークショップに参加したアーティストが同様のワークショップやレジデンスを自国で立ち上げ、現在では、世界に約30のパートナーを持つネットワークになった。特に、経済的な問題や政治的な問題のために現代美術の領域で活動するアーティストを支援するインフラが整備されていない国々からアーティストを招へいし、これまでに中国、インド、パキスタン、バングラディッシュ、キューバ、ケニヤ、ヨルダン、南アフリカとの交流が生まれたという。

ロンドンに居住するカロ卿とロダー氏は、ロンドンにもそのネットワークのハブをつくりたいと考え、ガスワークスを設立した。設立当初のガスワークスはアーティストが運営するスペースであったが、1998年にキュレーション、プログラミング、アドミニストレーションに従事する専門スタッフを雇用して組織化し、本格的に事業を始める。

以来、英国の現代アートのインキュベーション的な役割をする団体と評価され、アーツカウンシル・イングランドから定期的な助成金を受けて事業を展開する。

(2) ミッション

ガスワークスは、以下の目的を達成することをミッションとしている。

- 創作のアイデアを発展させ、議論し、実験する場をアーティストに提供すること
- キュレーションのリサーチやアーティストへのコミッションを通じて、現代アートのメインストリームでは語られていないアイデアや議論を活性化すること
- 展覧会事業、レジデンス事業、教育普及事業の相乗効果を発揮し、野心的で革新的なプロジェクトを広く普及すること

2. プログラムの内容と実績

ガスワークスでは、アーティスト・イン・レジデンスに関連する事業として海外からアーティストを招へいする「インターナショナル・レジデンシー」と英国のアーティストを海外に派遣する「インターナショナル・フェローシップ」の2つのプログラムがある。

(1) インターナショナル・レジデンシー

インターナショナル・レジデンシーは、若手のアーティストの育成を目的としたプログラムで、ガスワークスの4つのスタジオを活用して、年間約16人のアーティストを海外から招へいしている。インターナショナル・レジデンシーには、海外の公的機関や民間財団をパートナーとするプログラムと、ロンドン市内の文化施設や教育機関との共同プログラムがある。共同プログラムは、ガスワークスがこれまでに培ってきたアーティスト・イン・レジデンスのノウハウとネットワークを応用し、より具体的なテーマを設定したプログラムである。

① 海外の公的機関や民間財団をパートナーとするプログラム

このプログラムでは、海外の公的機関や民間財団をパートナーとしてアーティストに約3ヶ月の滞在機会を提供し、創作のアイデアを発展させるためのリサーチを支援している。

ガスワークス外観。隣にガス製造工場がある。



滞在アーティストに英国のキュレーターやアーティストと面会する機会を与え、対話を促すことを重視している。「このプログラムでは、アーティスト・イン・レジデンスを作品制作のための時間ではなく、実験のための時間と考えています。英国のキュレーターやアーティストに出会い、ロンドンの街で起きている出来事を体験することが重要なのです」とアントニオーリ氏は説明する。アーティストは新しい環境で新しい人と出会い、対話することで、創作のアイデアを発展させ、スタジオでそのアイデアを実験することができる。なお、滞在中に作品を制作することを義務付けていない。

海外の公的機関や民間財団のパートナーとは3年契約でプログラムを推進しており、現在、以下の団体からアーティストの情報や資金面での支援を受けている。

- ドイツ: ゲーテ・インスティトゥート
- ポルトガル: カルースト・グルベンキアン財団 (Calouste Gulbenkian Foundation)
- スウェーデン: イアスピス (IASPIS: International Artist Studio Program in Stockholm)
- 韓国: 韓国アーツカウンシル
- ブラジル: PIPA (Prêmio Investidor Profissional de Arte)
- インド: インラクス・シヴダサニ財団 (Inlaks Shivdasani Foundation)

ガスワークスはアーツカウンシル・イングランドから助成を受けているが、その助成は人件費、賃貸料や光熱費などの運営費を補助するため、レジデンスの事業費を対象としていない。そのため、海外の公的機関や民間財団などから資金面での支援が必要である。また、海外のパートナーはガスワークスにアーティストを派遣することを得策と考えている。「例えば、ゲーテ・インスティトゥートはロンドンにアーティストを派遣するためのスタジオを所有しています。それでも、ガスワークにアーティストを派遣したいと依頼をしてくれます。それは、ガスワークスが英国のアーティストやキュレーターとのネットワークを広く持っているからです」とアントニオーリ氏は説明する。

アーティストを招へいしてプログラムを運営するためには、一人当たり約7,000ポンド(約105万円)の費用を

想定している。海外のパートナーに全ての費用を負担してもらえる場合と一部を負担してもらえる場合があるが、費用の一部しか負担してもらえない場合でも、海外にパートナーがいることでブリティッシュ・カウンシルやヴィジティング・アーツから残りの費用を助成してもらいやすくなるという。

また、これまでに交流の少ない国や地域を対象に新しいプログラムを始める場合、トライアングル・ネットワークに属する団体がアドバイザーとして、その国の資金提供者を探す役割をしている。

② ロンドン市内の芸術団体や教育機関をパートナーとするプログラム

ロンドン市内の芸術団体や教育機関をパートナーとして、アーティストやキュレーターにリサーチの機会を提供するプログラムや作品制作を委嘱するプログラムがある。いずれのプログラムも滞在アーティストやキュレーターにガスワークスのスタジオと宿泊施設を提供することが共通している。

以下、主なプログラムの事例を整理した。

- 英国の最大のアートフェア、フリーズ財団との共同プログラム: 35歳以下の海外のアーティストを対象にアートフェアのためのインスタレーションを制作する機会を提供。滞在アーティストは、ガスワークスのスタジオを利用してサイトスペシフィックな作品の制作に取り組む
- 自然科学博物館との共同プログラム: 海外のアーティストを対象に博物館のコレクションのリサーチの機会を提供。滞在アーティストはリサーチで得たアイデアを発展させ、ガスワークスのスタジオで小作品を制作。自然科学博物館にて展覧会を行う
- テート・モダンとの共同プログラム: 海外のキュレーターを対象にテート・モダンのキュレーターとともに共同リサーチを行う機会を提供。滞在キュレーターはテート・モダンでパブリック・トークを行い、また、リサーチを通じて展覧会を企画する
- ロンドン芸術大学のチェルシー・カレッジとの共同プログラム: 海外のアーティストを対象に大学との共同リサーチの機会を提供。滞在アーティストはリサーチのほか、大学内でパブリック・トークなどを行う



展覧会スペース。年4回の企画展が開催されている。

(2) インターナショナル・フェローシップ

インターナショナル・フェローシップは、英国に在住するアーティストやキュレーターを対象にトライアングル・ネットワークのパートナーのアーティスト・イン・レジデンスに派遣するプログラムで、毎年約5人のアーティスト等を派遣している。

アーツカウンシル・イングランドからアーティスト等が必要とする費用の補助を受けている。一方、海外のパートナーで発生する経費については、ブリティッシュ・カウンシル、海外の文化機関や民間財団などの資金提供者に交渉をして賄っている。

アーティストの募集方法は海外のパートナーの要望に応じて、ガスワークスからいくつかのアーティストを推薦する場合と公募を行う場合がある。最終選考は海外のパートナーが行う。

(3) アーティストの募集・選考方法

インターナショナル・レジデンスでは、海外のパートナーが公募を行う場合と、海外のパートナーが10名程度のアーティストを推薦する場合がある。いずれの場合も、ガスワークスは選考委員会を組織して委員会のメンバーとの議論の上、最終決定をする。

選考では、以下の3つの点を重視している。

- 実験的な作品をつくるアーティストであること
- ロンドンに滞在することで新しい創作の成果が生まれることが期待できること
- 作品の芸術性について対話ができること

アントニオーリ氏は「どんなに才能のあるアーティストでも、ガスワークスのプログラムには適さない場合があります。例えば、展覧会に出品するだけでレジデンスに参加する必要がない場合、ロンドンでの滞在による成果が期待できない場合などです」と説明する。また、「時には、アーティストの選考に失敗する場合があります。展覧会のキュレーションでは出来上がった作品を見て出展アーティストを決めることができますが、レジデンス・プログラムではまだ実現されていないアイデアをもとに滞在アーティストを決めなければいけません。そのため、レジデンスプログラムにはリスクはつきものなのです。」と話す。

また、インターナショナル・フェローシップでも同様に、海外のパートナーの要望に応じてガスワークスが公募を行う場合とガスワークスがいくつかのアーティストを推薦する場合がある。いずれの場合も海外のパートナーが最終決定をする。

(4) プログラムの実績・過去の滞在者

ガスワークスは創設以来の約18年間で世界約70カ国から約200人以上のアーティストを招へいた実績がある。2012年度はスウェーデン、ポルトガル、アイルランド、米国、ブラジル、コロンビア、チリ、韓国、インド、ニュージーランドの10カ国から合計14名を招へいた。

過去に日本人のアーティストが滞在したケースもあるが、現在は海外のパートナーとの共同事業を基本としているため、パートナーがいない日本から招へいされる機会はないという。

(5) その他の事業

① 展覧会事業

展覧会事業はレジデンス事業と独立している。個々の展覧会はキュレーターの独自のリサーチをもとに企画され、年間4回開催されている。一方で、海外のアーティストの企画展の場合、レジデンスプログラムと同様に3ヶ月間の滞在機会を提供して最終的に展覧会をする場合がある。しかし、この場合は作品の発表を主目的としているため、レジデンス事業の一環ではない。

② 教育普及事業

教育普及事業では、ロンドンに在住するアーティストと共同プロジェクトを立ち上げ、子どもや家族向けのワークショップを実施している。また、インターナショナル・レジデンスで滞在するアーティストの要望により、子どもや家族、地域向けのワークショップを実施することもある。

③ スタジオ事業

スタジオ事業では、英国に在住するアーティストを対象に7部屋を賃貸している。アーツカウンシル・イングランドから助成金を受けて建物の賃料の一部としているため、アーティストは他のスタジオ施設に比べて手頃な料金で借りることができる。

インド出身の滞在アーティスト、Sahaj RAHALのスタジオ。ロンドンの都市伝説から触発された彫刻作品を制作する。



3. 施設の構成と内容

ガスワークスには、スタジオ11部屋とギャラリー1部屋がある。海外から招へいするアーティストのためのスタジオが4部屋で、ロンドンに在住するアーティストのためのスタジオが7部屋である。

また、ガスワークスの建物の中に宿泊施設はないため、滞在アーティストが共同生活できる家を別の場所に借りている。滞在アーティストは他の複数のアーティストと共同生活をするため、孤独になることはない。

4. 運営体制と事業収支

(1) 運営組織

ガスワークスは非営利団体で、7名のフルタイムのスタッフが働いている。レジデンス事業に関わるスタッフはディレクターと副ディレクター、レジデンス・プログラム・コーディネーターの3名である。

ディレクターと副ディレクターは、ガスワークスの全ての活動を監修するほか、海外との共同プロジェクトの取り組み、海外のパートナーとの連携を担当する。また、レジデンス・プログラム・コーディネーターは、主に滞在アーティストのプロジェクトのサポートやパブリック・トークやオープンスタジオの制作業務を遂行している。滞在前からアーティストと連絡を取り合い、ガスワークスのレジデンスプログラムはどのようなものなのかを説明したり、また、来英の準備の相談を受けている。

ガスワークスのポストは以下のとおり。

- Director, Gasworks & Triangle Network
- Deputy Director, Gasworks & Triangle Network
- Communications Coordinator, Gasworks & Triangle Network
- Administrator & Projects Coordinator, Gasworks & Triangle Network
- Residencies Programmer, Gasworks
- Exhibitions Curator, Gasworks
- Participation Programme Coordinator, Gasworks

また、上記のフルタイムのスタッフのほかに、ボランティアを受け入れている。英国では、ボランティアやイ

ンターンなどからキャリアをスタートする場合が多く、近い将来に現代美術に関わる仕事に就きたいと考えている学生や卒業生が対象である。ボランティアの期間は約3ヶ月で常時10ー15名のボランティアスタッフがいる。ボランティアスタッフはアーティストとともに働く経験を積むことができるだけでなく、英国の芸術団体がどのような運営をしているのかを知ることができる。

(2) パートナーシップ

ガスワークスは、前述のように海外の公的機関や民間財団をパートナーにアーティストを招へいする事業、ロンドン市内の文化施設や教育機関をパートナーにアーティストを招へいする事業、トライアングル・ネットワークのパートナーのレジデンス・プログラムに派遣する事業を推進している。特に、これまでに交流の少ない国や地域を対象に新しいプログラムを始める場合に、トライアングル・ネットワークに属する団体がアドバイザーとしてその国の資金提供者を探す役割があることが特徴的である。

(3) 事業収支

ガスワークスの年間予算は約60万ポンド(約9,000万円)である。この予算にはトライアングル・ネットワークの活動に関する費用も含まれている。年間の事業収入に占めるアーツカウンシル・イングランドの助成金の割合は約40%で、建物の賃料と人件費に割り当てられている。そのため、展覧会事業、レジデンス事業、教育普及事業などの事業費は、他の公的機関や民間財団からの助成金、また、海外のパートナーから提供される資金によって賄っている。

アーティストの招へいに必要な費用は一人当たり約7,000ポンド(約105万円)で、以下の項目が含まれる。

- 渡航費、国内交通費
- スタジオ賃料、宿泊施設賃料、
- 日当
- リサーチ活動費や創作活動費 *アーティストに700ポンド(約10万5千円)を支給
- パブリック・トークやオープンスタジオに関わる制作費と広報宣伝費
- ガスワークスのスタッフ人件費



ガスワークスから見た隣接するガス製造工場

5. 事業評価の実施状況

アーツカウンシル・イングランドのガイドラインに沿って事業評価を実施している。展覧会事業、レジデンス事業、教育普及事業などの全ての事業を対象に、展覧会やワークショップの実施回数、観客の動員数、アーティストの招へい数、事業収支などの定量データと、実施計画をどのように達成したのかという定性データを収集し、報告書を作成している。

アーツカウンシル・イングランドはアーツカウンシル・イングランド以外の助成機関からどのくらい助成金を獲得しているかということに関心がある。今後の政治状況と芸術団体や文化施設の持続性を考慮した場合、アーツカウンシル・イングランドからの助成金に依存することなく、他の公的機関や民間財団からも十分に助成金を獲得することを評価しているからである。

一方で、アントニオ・リ氏は「アーツカウンシル・イングランドの事業評価のシステムは画一的だ」と指摘する。例えば、年間500万人以上の来場者を動員するテート・モダンとガスワークスを同じ評価基準で評価しているからである。

ガスワークスは、テート・モダンで将来的に作品を発表するアーティストを育成することを成果と考えている。しかし、その成果がかたちになるのには時間が必要で、滞在中に目に見える成果が少ない。例えば、レジデンスで得た知識やネットワークは、アーティストのキャリアには非常に重要であるが、それは目に見えない成果の一つで、それを提示することは非常に困難である。また、アーティストにはアイデアは実験する場が必要であるが、それは試行錯誤の繰り返しだと考えている。

しかし、最終的には、アーツカウンシル・イングランドはガスワークスには別の役割があることを理解してくれている。それはインキュベーターとしての役割である。例えば、テート・モダンや自然歴史博物館のような規模の大きい文化施設とのパートナーシップ・プログラムが成立していることも成果の一つで、アーツカウンシル・イングランドからも評価されている。

また、アーツカウンシル・イングランド以外では、海外のパートナーにも、滞在アーティストの活動や支援に

関する報告書を提出している。

6. 現在の課題と今後の方向性

ガスワークスはオーナーと賃貸契約をして建物を使用しているが、オーナーは2017年までに建物を売却したいと考えている。もしも、ガスワークスがその建物の所有権を購入するのであれば、オーナーは110万ポンド(約1億6,500万円)でその権利を譲渡してくれると言われている。現在、年間5万ポンド(約750万円)の賃料を支払っているため、ガスワークスとしては建物を購入し、さらにスタジオを増設し、ギャラリーの改修工事をすることを希望している。そのためには、予算180万ポンド(約2億7,000万円)が必要である。

現在、アーツカウンシル・イングランドから100万ポンド(約1億5,000万円)の助成の約束をもらっているが、これから残りの80万ポンド(約1億2,000万円)を支援してくれる公的機関や民間財団と交渉をしていかなければならない。なお、アーツカウンシル・イングランドは今後も不安定な政治状況が続くと予想される中で、財政的に独立した運営を芸術団体や文化施設に望んでいるため、このような資金提供をする場合がある。

また、これまで交流の少なかった国や地域からもアーティストを招へいしたいとも考えている。特に、東欧やアフリカとの交流は少ないため、非常に関心が高い。一方で、それらの国や地域で財政的な支援をしてくれるパートナーを探すことは非常にハードルの高い課題である。

今後、日本とは長期的なパートナーシップの可能性を探りたいと考えている。しかし、実際にアーティストを招へいしたり派遣したりするためには様々な費用がかかるために、どのようなパートナーシップを構築できる可能性があるのかを考えていきたいと、アントニオ・リ氏は話す。



B. ドイツ

1. アカデミー・シュロス・ソリテュード | Akademie Schloss Solitude
2. キュンストラーハウス・ベターニエン | Künstlerhaus Bethanien
3. パクト・ツォルフェライン | PACT Zollverein
4. ノード・センター・キュラトリアル・スタディーズ | Node Center Curatorial Studies

写真:アカデミー・シュロス・ソリテュード(左側の建物がレジデンス棟)

現地調査協力:山下秋子(翻訳・通訳家、在ベルリン)

1ユーロ=130円で換算

1. アカデミー・シュロス・ソリテュード | Akademie Schloss Solitude

面会日：2013年2月18日（月）10:00－12:00

面会者：Jean-Baptiste JOLY (Director)

URL: <http://www.akademie-solitude.de/en>

1. 運営機関の概要

アカデミー・シュロス・ソリテュード（以下、「アカデミー・ソリテュード」）は18世紀半ばに建造された城跡をレジデンス施設に改修したアーティスト・イン・レジデンスである。アーティストに時間と空間を与えるために手厚い支援を行い、2年に1回行われる公募の応募者数1,600－1,700人、これまでの滞在アーティストは1,000人を超える世界を代表するレジデンスのひとつである。

(1) 設立の経緯

① アカデミー・ソリテュードの歴史とアーティスト・イン・レジデンスの創設

「ソリテュード（孤独）城（Schloss Solitude）」は、シュトゥットガルトの市内を望む小高い丘の広大な敷地に、18世紀半ば、狩猟及び夏の離宮として建てられたものである。元々は現在の敷地の3倍の広さがあったと言われるこの離宮、実は粗悪な建物で、基礎工事みなされておらず、売却しようとしても使われている建材の質が悪く、だれも買い手がつかないまま放置されていた。

19世紀後半になって欧州では古い建築物の歴史的意義が認められるようになり、歴史の証人として建物を残すことが重要となった。歴史的建造物が文化遺産として認識されるようになったのである。アカデミー・ソリテュードも19世紀後半以降、改修と再生が繰り返し行われてきた。この間、城は野戦病院、刑務所、学生寮と様々な目的のために利用されてきた。

学生たちの自主管理による学生寮となっていたアカデミー・ソリテュードは、1987年、バーデン・ヴュルテンベルク州政府の文化大臣の発案と同州首相の強力な後押しによって、アーティスト・イン・レジデンス施設として再生することが決定された。当時の金額で4,000万ドイツ・マルク（約32億円）をかけ、3年の歳月を経て改修工事が完了し、1990年7月に最初のアーティストが滞在を始め、アカデミー・ソリテュードは同年11月に正式オープンした。歴史的建造物を史跡として見せるための改修が主流であった時代に、古い建物に新たな目的と使命を吹き込み、再利用するというこのアカデミー・ソリテュードの改修コンセプトは、1980年代後半では先駆的なものであったという。

アカデミー・ソリテュードの立地するシュトゥットガルトは比較的起伏に富んだ町で、アカデミー・ソリテュードは中心部から西に車で20分ぐらいの小高い丘にあり、はるかにシュトゥットガルトを見おろすことができる。大都市の喧騒から離れた「孤独」城こそがアーティストにとって、日常の慌ただしい生活から距離を置き、自分自身と向き合い、制作に向けて集中できる場所にふさわしいという発想から、アーティスト・イン・レジデンス施設の構想が生まれた。

ただ、改修が始まった時点でレジデンスの内容が具体的に決まっていたわけではなく、基本的理念として、「若い才能、豊かなアーティストを奨学金によって支援し、このレジデンスを通してアーティストが世界に働きかける」ことが寄付行為に記されていただけである。実際には、準備段階からディレクターに起用されたジャン＝バプティスト・ジョリ（Jean-Baptiste JOLY）が、その構想を具体化させ、20年以上にわたってプログラムを開発、発展させてきた。

② シュトゥットガルトについて

シュトゥットガルト市はバーデン・ヴュルテンベルグ州の州都であり、現在の人口は61万人強、ドイツで6番目に大きな都市である。またボルシェ、ダイムラー、ボッシュといった大企業の本社が立地しているだけでなく、ジーメンス、コダック、レノボなどの拠点ともなっており、ドイツ経済の中心地の一つである。バーデン・ヴュルテンベルグ州は、ドイツ16州の中でもバイエルン州と並んで最も豊かな州である。

2. プログラムの内容と実績

(1) プログラムの内容

① レジデンスプログラムの目的

1990年の創立以来、アカデミー・ソリテュードのレジデンスはシュトゥットガルト近郊やドイツ国内だけではなく、世界の有能な若手アーティストの育成を目的としてきた。現在、45のスタジオ兼住居が用意されている。滞在期間は3ヶ月から12ヶ月となっているが、この期間中、滞在アーティストには一切の義務や拘束はない。ただ、滞在期間の3分の2をアカデミー・ソリテュードで過ごす



シュトゥットガルト市街を一望する高台に18世紀半ばに建造された城跡を改修してアーティスト・イン・レジデンスを運営している。

こと、月に一度の全員での食事会に参加することだけが求められる。アーティストたちがアート市場の動きに目を奪われず、何をやりたいのかを追い求める時間と空間を与えることがレジデンスプログラムの最大の目的である。

ディレクターのジョリ氏は、アカデミー・ソリテュードに来ることは日常の生活から抜け出す「作戦タイム」のような時間だという。ドイツ文学者でもあるジョリ氏はトーマス・マンの「魔の山」になぞらえて、レジデンスでの滞在は結核患者のサナトリウム滞在のようなものだ、とも言う。若いアーティストが作品の制作と展示、ギャラリーとの交渉、生活の糧を得るために体と心のエネルギーを使う日々の生活や煩雑な用事から離れ、都会の喧騒にも距離を置き、ゆったりした時間の中で制作への意欲を高めてほしいというのがディレクターの願いである。

ただ、もし審査員が本当に優れたアーティストを選んでいるなら、これだけの恵まれた条件と他のアーティストとの接触の中で、アーティストとしての創造力に火がつかないわけではないとジョリ氏は確信している。実際、世界中からやってきたアーティスト同士の交流は彼らにとって大きな刺激となり、創作意欲をかきたてられたアーティストは新たな制作に取り組むことになり、そこから世界中に広がるアーティストのネットワークが築かれていく。

② 対象となる芸術分野

レジデンスプログラムの対象となる芸術分野は、建築（設計、環境計画、都市計画）、美術（パフォーマンスアートを含む）、舞台芸術（舞台美術、戯曲、ドラマツルギー、音楽劇、パフォーマンス、演出、俳優、ダンス）、デザイン（ファッション、衣装、プロダクト、家具、ビジュアル・デザイン）、文学（エッセイ、批評、詩、散文、翻訳）、音楽/音響（演奏、サウンド・インスタレーション、サウンド・パフォーマンス、作曲）、ビデオ/映像/ニュー・メディア（ビデオ・インスタレーション、劇映画、ドキュメンタリー）である。

2002年からは「art, science & business」というプログラムが開始され、レジデンスの対象は科学、ビジネスの分野にも広がられている。芸術だけではなく、科学とビジネスの分野から若手の研究者や経営者がアーツ

と出会い、交流するというコンセプトは画期的である。

③ 移住を余儀なくされたアーティストへの支援

アカデミー・ソリテュードのもう一つの特徴的プログラムが、何らかの理由で自分の居場所で活動ができなくなったアーティストに対する支援である。ディレクターのジョリ氏がドイツ文学者として関心を持ったのが、ドイツから亡命したドイツの作家やアーティストであった。人間はなぜ移動するのか、あるいは意に反して移住を余儀なくされるのかを学者として研究してきた同氏ならではのプログラムである。このプログラムは、ある企業のメセナ活動によって支えられている。ジョリ氏がスポンサーではなくあえてメセナという言葉を使うのは、その企業名を公表せず、いわばパトロンとしてアーティストの活動を支援しているためである。

④ アーティストの募集と選考

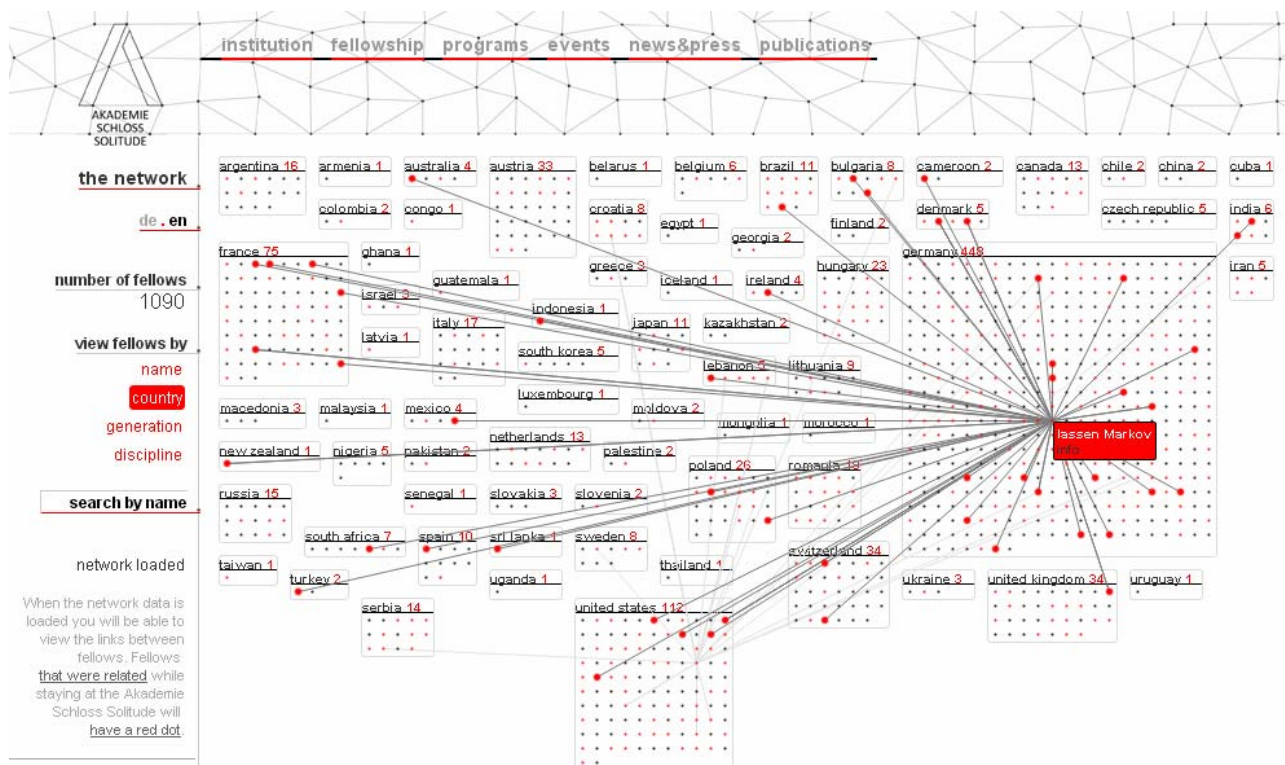
募集は2年ごとに行われ、2013年2月には2013年秋から2015年夏にかけて滞在するアーティストの募集が終了したところで、次回2015年から2017年にかけてレジデンスを希望する者は、2014年6月1日から8月31日の間に応募することになっている。応募の条件は35歳以下、大学に在籍中の者は応募できない。応募者が35歳を超えている場合でも、大学卒業から5年以内の場合は応募が可能である。

募集は前述の芸術分野以外に、「art, science & business」では人文科学（社会科学も含む）、自然科学、経済・経営学に加えてチェスの専門家も募集の対象となっている。奨学金の支給期間は3ヶ月から12ヶ月、ドイツ語、英語、フランス語のどれかひとつの言語能力を有していることが前提となっている。また採用されなかった応募者には、最高2回まで応募のチャンスが与えられている。

審査員は通常1名の議長と11名の審査員で構成されているが、対象となる分野の専門審査員1名が応募者の選考とその滞在期間を決定する。審査員は2年ごとに新しく任命される。

⑤ 支援内容

滞在期間中、滞在アーティストには家具つきのスタ



これまでのアーティストが氏名、国別、滞在年別、芸術分野別にドットで表示され、一つのドットをクリックするとそのアーティストが誰と交流があるかが瞬時に図示されるようになっている。© Akademie Schloss Solitude

ジオ兼住居(電気、水道、暖房費はアカデミー・ソリテュードが負担、以下、「スタジオ」、月額1,100ユーロ(約14万円)の奨学金、シュトゥットガルトまでの往復旅費が与えられる(1往復分のみ。滞在期間中に2回以上往復する場合は自己負担)。また、アーティストの母国の自宅あるいはアトリエの維持の費用にも援助が出される。

さらに、アカデミー・ソリテュードのスタジオ内での制作ができない場合、作業場の使用が認められている。また工具や楽器などの輸送が必要な場合は、シュトゥットガルトまでの輸送費用についても援助が出る。EU諸国以外の国からの滞在者に対しては、期間中の疾病保険も付与される。滞在期間中に事業を行う場合は、その費用についても支援の対象となっている。

アカデミー・ソリテュードの滞在期間、恐らくドイツのどのレジデンスよりも資金的にも人的にも手厚い支援が行われていると思われる。しかし、すでに述べたように滞在アーティストには何の義務もない。成果を発表する必要もないし、近隣住民や子どもたちのためにワークショップや講演をする必要もない。アカデミー・ソリテュードの滞在期間中に保障されている自由こそが、アーティストの創作意欲をかきたてるものであってほしいというのがディレクターのジョリ氏の考えである。

(2) プログラムの実績

① 応募者数、参加者数

1990年のレジデンス開始当初、応募者数約400人で、4分の3がドイツ国内からの応募であった。それ以降、アカデミー・ソリテュードの滞在アーティスト等による口コミ、世界中のゲーテ・インスティテュートを通じての広報活動などを通じて応募者の数は年を追うごとに徐々に増えていった。中でも、2000年代初頭のインターネットの普及が応募者の増加に弾みをつけた。

またレズ・アルティスはアーティスト募集に関しては、非常に重要な役割を果たしているとジョリ氏は評価している。2年ごとに行われるようになった募集は様々なルートで情報発信され、2000年代半ば以降は、毎回1,600から1,700件の応募がある。応募は世界中から寄せられ、創立から現在まで70を超える国々のアーティスト約1,100名がアカデミー・ソリテュードに滞在している。

② 過去の滞在アーティストとのネットワーク

しかも、かつての滞在アーティスト等の約80%が何らかの形でアカデミー・ソリテュードとのコンタクトを保っているという。アカデミー・ソリテュードでの滞在期間を終え、自分たちの活動の場所に帰って行ったアーティストたちが、それぞれの活動についての情報を提供し、アーティストとのネットワークを保っているのもアカデミー・ソリテュードのレジデンスプログラムの成果として特筆すべきことである。

つい最近になって、過去の滞在者のネットワークは、アカデミー・ソリテュードのウェブサイトでもアーティスト、



スタジオ兼住居と
共用の作業場のひとつ

国、年代別に図示化されるプログラムが完成した。それを見ると、アカデミー・ソリテュードの滞在アーティスト等のネットワークが、地域や世代、芸術分野を超えていかに世界に広がっているかが一目瞭然である。

日本ではまだそれほど名前が知られていないが、旧東ドイツ出身の画家ネオ・ラウフは、東西ドイツが統一されたとき、アカデミー・ソリテュードの奨学金を得てイタリアに滞在したことがある。彼は、その時にジョットとの出会いがあったことが今の創作活動と深く結び付いているため、アカデミー・ソリテュードに感謝しているそう。ジョリ氏にとっては大切な作家との出会いとなっている。また日本人では塩田千春もソリテュードに滞在した経験を持つアーティストである。

3. 施設の構成と内容

アカデミー・ソリテュードは、敷地内にある2棟の建物に45のスタジオが設置されている。スタジオの広さはまちまちだが、どの部屋にも台所(冷蔵庫、食器なども完備)、シャワー(バスstubの場合もある)とトイレが完備され、ベッド、ダンス、机、椅子といった家具も備え付けられている。これらのスタジオ以外に、共用の作業場、コンピューター室、図書室、食堂があり、展示や講演が行われるホールもある。

一回の公募で選ばれるアーティストの数は50人から70人にのぼり、審査員が滞在期間も決定する。アーティストの状況も考慮しながら、秋からアーティストの入居が始まる。スペースはフル稼働である。

4. 運営体制と事業収支

(1) 運営体制

施設はバーデン・ヴュルテンベルグ州の所有で、公益法人であるアカデミー・シュロス・ソリテュード財団が運営に当たっている。財団の職員は11名(そのうちの一人は50%雇用)で常勤。ディレクター、秘書、滞在者担当、プロジェクト担当、「art, science & business」担当、広報担当、経理・総務担当、技術担当、建物管理担当、食堂担当、資料室担当(50%)が11名の内訳である。

その他、2年に一度の公募の時期には、応募者から

の書類を整理し、審査員に渡るまでの作業及び選考後に応募者への書類返却を行う際には、その業務を担当する2名の職員以外に、常勤ではなく時間単位あるいは一定の期間だけ働く約20名のスタッフがいます。

ディレクターのジョリ氏は、フランスでドイツ語・ドイツ文学を学んだあと、シュトゥットガルトにあるフランス文化センターのディレクターを務めており、その時期にフランス政府がシュトゥットガルトで始めた世界で最初のレジデンス施設の立ち上げに関わっていた。その経験から、1988年からアカデミー・ソリテュードのレジデンスプログラムの仕事をするようになり、1990年のオープニング以来ディレクターを務めている。ディレクターとしての契約は5年であるが、その契約の更新を重ね、現在の契約更新は6回目である。

アカデミー・ソリテュード内にホールや展覧会場があるので、その場所を利用しているが、シュトゥットガルト市内大学、ギャラリー、文学館、劇場、イベント会場などといった様々な施設で滞在アーティストによる催しを開催している。同時に、州内や市内の人々がアカデミー・ソリテュードを訪問して、滞在アーティストとの交流を図っている。必要に応じて関係機関との連携も行っているが、とくに東欧諸国の文化機関とは密接なパートナーシップを築いている。

ジョリ氏自身、レズ・アルティス創設メンバーの一人であり、アーティスト・イン・レジデンスの国際ネットワークに参加している。アーティスト募集に当たって、レズ・アルティスの果たす役割は大きいという。

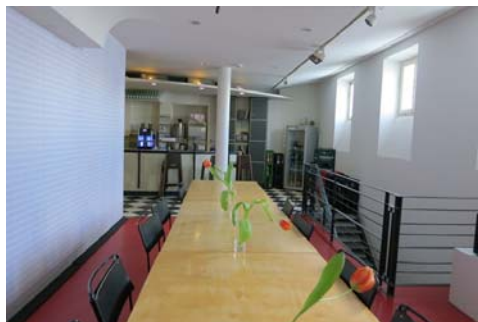
(2) 事業収支

年間予算は195万ユーロ(約2億5,000万円)で、そのうち170万ユーロがバーデン・ヴュルテンベルグ州からの補助である。その財源は税金ではなく、バーデン・ヴュルテンベルグ州の宝くじ協会の売上によって賄われている。残りは公的あるいは私的財団からの寄付である。

5. 事業評価の実施状況

毎年、すべてのスタッフによって年次報告書が作成される。この報告書では、前年に設定された目標が実

食堂(左、アーティストは、月に一度の全員での食事会への参加が求められる)とライブラリー。



現されたか、どのような変化があったか、アカデミー・ソリテュードにとって将来どのような課題が重要になるか、広報活動はうまく機能したかといったことに加えて、行われた催し物の一覧表、アーティストのリスト、出版物のリスト、訪問者のリスト、パートナー組織のリストなども付記される。この報告書は、アカデミー・ソリテュードの運営に関わるすべての関係者に送付される。

過去に滞在したアーティストとの関係を維持することが、レジデンスプログラムの成否を決定するというディレクターの考えに基づき、フォローアップはアカデミー・ソリテュードの活動の重要な要素となっている。かつてアカデミー・ソリテュードに滞在したアーティストは全世界に1,100名近くおり、このうちの約80%とのコンタクトが維持できているという。

アーティストが滞を終え、アカデミー・ソリテュードを去るときに、彼らにはいつでもまた来てほしいことを伝える、滞在アーティスト等からのメールには受信した職員が個人的に必ず返信する、ウェブサイトを最大限に利用する、アカデミー・ソリテュードが開催する周年事業には必ずかつての滞在アーティスト等にも参加を呼び掛ける、滞在者の出身国で行われるフェスティバルなどの事業で要請があればかつての滞在者の参加をオーガナイズするなど、様々な手法によって関係を維持する努力を怠らない。

とくについ最近に完成したソフト(これもかつての滞在者が開発したものという)は、アーティスト自身がサイトにアクセスして、自分たちの活動を表示できるようなインタラクティブなものとなっており、今後のネットワークの充実がさらに期待できる。

6. 現在の課題と今後の方向性

現在のアカデミー・ソリテュードの活動とその成果についてディレクターはほぼ満足しているが、今後の重要な方向として、いかに「脱欧州化」を実現するか、できるかについての戦略を練る必要があると考えている。「今、西洋(欧州と米国)の文化はまだ健全さを保っているが、今後20年のうちにアジアが経済の中心となり、文化についても今まで以上に強い存在感を持つことが予想される。今からこの状況に対して手を打つことが必

要だ」とジョリ氏は言う。

シンガポール、ベトナム、中国、オーストラリアといった国々のレジデンス施設は、アジア中心のコンセプトによって運営されている。現在、世界に門戸を開いている欧州のアーティスト・イン・レジデンスがアジア諸国との関係を深めることこそ、今後の欧州の文化や芸術が生き延びる道だというのがジョリ氏の考えである。

ジョリ氏は東京で開催された「レズ・アルティス」総会2012東京大会に参加して、日本の関係機関とのネットワーク形成にも大きな関心を持っている。日本のアーティスト・イン・レジデンスが認知されるためには、レジデンスがその地域においていかに必要であるかを説得する言語を習得すべきではないかという。レジデンスの存在によって、レジデンスが置かれている場所の日常やイメージが変わる。例えば、滞在するアーティストをメディアが取り上げ、繰り返し報道することによって、今までとは違った場所になるというのがジョリ氏の主張である。バーデン・ヴュルテンベルグ州の行政や政治家に対して、アカデミー・ソリテュードの存在によって、同州が世界の芸術のネットワークの起点となっていることが人々の意識の中に根付くように働きかけることが重要だというのである。

「脱欧州化」はこれから避けることができないが、しかし欧州連合の存在によって非欧州連合圏の外国人に対するビザの壁はますます高くなっている。この矛盾した状況の中で、アカデミー・ソリテュードが滞在する外国人に対して、ビザの取得や保険の加入に問題が生じないように対応できる能力を身につける必要性は高まっている。

日本のアーティスト・イン・レジデンスにおいても、外国人滞在アーティスト等のビザ取得や保険加入に対する支援が、レジデンスの質を高める要素になってくだろうとジョリ氏は述べている。

滞在アーティストへのインタビュー

面会者: シリン・サバヒー (Shirin SABAHI、以下、「SS」)、
ビル・ディーツ (Bill DIETZ、以下、「BD」)、レイナード・
ヒューム (Reynard HULME、以下、「RH」)

1. 略歴、活動実績

SS: 1986年テヘラン生まれ、現代美術家。テヘランの
イラン科学技術大学で産業デザイン、スウェーデンの
ルンド大学で美術を学ぶ。言葉やイメージの
解釈と認識をテーマに、写真や映像作品を制作
する。2011年、イランの現代美術の若手アーティスト
を顕彰する賞、マジック・オブ・ペルシャ・コンテ
ンポラリー・アート・プライズを受賞し、2012年にデ
ルフィナ財団のレジデンスプログラムに参加。

BD: 1983年米国生まれ、作曲家。ボストンのニューイン
グランド音楽院卒業。2004年、ドイツに渡り、ピー
ター・アブリンガーに師事し、ベルリンを活動拠点
にEnsemble Zwischentöneの芸術監督を務める。
また、建物と空間をテーマとしたサウンド・インス
タレーションを発表している。

RH: 1985年南アフリカ生まれ、法律家。ケープタウン近
郊にあるステレンボッシュ大学で法律を学ぶ。労
働法を専門とし、2009年、南アフリカ労働法協会
賞を受賞する。また、ケープタウン大学で修士号
を取得し、現在、ステレンボッシュ大学の法律学部
で論文指導を行うほか、フリーランスのリサーチャー
として活動する。

2. アーティスト・イン・レジデンスに参加した動機

SS: 2012年にデルフィナ財団のレジデンスプログラム
で3ヶ月間ロンドンに滞在した。そして、スウェー
デンのルンド大学の指導教授から勧められて、アカ
デミー・ソリテュードのレジデンスプログラムに応募
した。若手アーティストとして、アーティストを生業
に活動するのは容易ではなく、作品制作に十分
な時間を費やすために、その時間と資金を提供し
てくれるアーティスト・イン・レジデンスを探してい
た。

BD: これまでの活動を振り返り、今後、どのような活動

をするのかを考える時間が必要と思い、アーティ
スト・イン・レジデンスに滞在したいと考えていた。
昨年は、ドイツのアーレンショープ音楽堂のレジ
デンスプログラムに参加した。アカデミー・ソリテ
ュードに滞在した友人に勧められ、昨年の8月から
アカデミー・ソリテュードのレジデンスに参加してい
る。

RH: アカデミー・ソリテュードの「art, science and
business」というプログラムの審査員に勧められて、
レジデンスプログラムに応募した。労働法を専門
分野としてストライキに関する労働者の権利につ
いて研究しており、労働者の正当な発言権を考え
る上で、アーティストの表現の自由について調査
をしたいと考えていた。そのため、アカデミー・ソリ
テュードでは様々な分野のアーティストに出会い、
新しいアイデアを見つけたいと考えている。

3. 創作活動の支援、レジデンスの経験

SS: アカデミー・ソリテュードでは映像作品の制作に取
り組んでいる。そのために必要な映画用カメラや
映像機材を借りるための手配をアカデミー・ソリ
テュードのスタッフがしてくれた。また、美術館のディ
レクターやキュレーターにも紹介してくれた。

アカデミー・ソリテュードでは滞在アーティストが企
画する様々なイベントが定期的実施されていて、
例えば、コンテンポラリー・ダンスのダンサーが企
画するヨガ教室や、映像作家による映画のワーク
ショップなどがある。また、映画鑑賞会、ゲームナ
イト、ポーカールイトなどのイベントもあるので、孤
独に感じることがない。

また、美術だけでなく、様々な芸術分野を専門と
するアーティストが滞在していることも魅力の一つ
で、現在、滞在アーティストとのコラボレーションを
考えている。

BD: アカデミー・ソリテュードは作品制作に集中するこ
とができる環境と活動資金を提供してくれる。

現在、シュトゥットガルト市立美術館で発表予定の
プロジェクトに取り組んでいるが、このプロジェクト
のアイデアを具体化するために様々なサポートを

してくれた。例えば、美術館を紹介してくれ、プロジェクトに必要な機材を入手するための手配をしてくれた。アカデミー・ソリテュードはドイツ国内の幅広いネットワークを介して様々なサポートを提供してくれるプロフェッショナルな機関だと思う。

また、多彩な専門分野の滞在アーティストとの出会いも非常に重要で、シュトゥットガルト市立美術館のプロジェクトでは野外展示をするために、滞在アーティストの一人の建築家に展示プランを設計してもらっている。また、オーストリア人の作曲家とも共同制作について意見交換をしている。

RH: 私は法律を一種の哲学と考えている。法律は社会の価値判断を暗示するものだが、その判断基準を統合する側面があるため、新しいアイデアに対しての許容範囲が狭い分野でもある。特に、大学の法律学部では、それぞれの法律の専門性を追求しすぎた結果、外部からの干渉を排除しようという排他的な傾向があるため、議論をする場が少ない。しかし、アカデミー・ソリテュードにはオープンな議論の場がある。特に、滞在中の活動内容が自由であることが魅力である。

ディレクターとの最初のミーディングでは、滞在中にどのような活動を希望するのかを丁寧にヒアリングしてくれ、ドイツでの法律に関する文献へのアクセスや大学の教授との面会のアレンジなどの様々な支援をしてくれている。

私は法律家で、また、チェスのプレイヤーでもあるが、法律での言語とチェスの駒とに共通性があるように、音楽、デザインや建築にも、構成要素の機能や相関関係から意味を見出すことができると考えている。現在、アカデミー・ソリテュードで出会った作曲家と声楽家とともに新しい楽曲を創作するプロジェクトに取り組んでいる。

法律とは異なる分野で活動するアーティストとともに過ごすことで、弁護士としてのキャリアについて深く考えさせられた。例えば、なぜ法律を勉強したいと思ったのかという一見簡単そうな質問を滞在アーティストからされることがあるが、法律の原理が芸術や他の分野の原理と、どのように違うの

かという問題意識を高めることができ、また、共通点も見出すことができたと思う。

私は4ヶ月の滞在予定だが、滞在期間を延長できないかディレクターに相談するつもりである。私の活動には資材が必要ではないが、有意義に過ごせる時間が素材となるからである。

4. 日本のアーティスト・イン・レジデンスについて

SS: 昨年、スウェーデンのイアスピス (IASPIS) を通じてトーキョーワンダーサイトのレジデンスプログラムに応募し、また、他のレジデンスの情報を調べるためにウェブサイト「AIR_」を利用した。

子どもの頃に日本のマンガやアニメが好きだったので、日本の文化に非常に興味がある。もしも、日本のレジデンスに滞在する機会があれば、子どもと家族の関係についてリサーチしたいと考えている。そのために3ヶ月ぐらいの滞在期間があると理想的だ。

BD: 名前をよく覚えていないが、日本のレジデンスプログラムに参加した友人から話を聞いたことがある。日本に滞在したことがないので、関心がある。

2. キュンストラーハウス・ベターニエン | Künstlerhaus Bethanien

面会日：2013年3月20日（水）11:00－13:00

面会者：Christoph TANNERT (Director)

URL: <http://www.bethanien.de>

1. 運営機関の概要

(1) 設立趣旨と経緯

1970年、19世紀半ばに教会の社会奉仕活動の場として建設されたベターニエン病院は、老朽化のため閉鎖が決まり、解体が計画された。しかし、多くの人々が解体に抵抗し、文化財保護活動家たちとの話し合いを重ね、1974年、キュンストラーハウス（アーティストの家）として再利用することが決定された。

現代芸術のための作品制作と公開の場がベルリンには必要であり、病院跡にその場を作るというコンセプトを作成し、発展させたのが、キュンストラーハウス・ベターニエン（以下、「ベターニエン」）の創立者であるミハエル・ヘルター（Michael HAERDTER）であった。この背景には、当時の西ベルリンは現代芸術への関心が低く、作品の制作や発表の場が他の西ドイツの都市に比べて少ないという事情があった。解体される運命にあった古い病院に、現代芸術を通じて新しい命を吹き込むというコンセプトが、文化財保護をめぐる意見の対立に終止符を打ち、1975年、ベターニエンが設立された。

同氏は2000年に引退するまで、ベターニエンをドイツだけではなく、世界的に知られるアーティストの交流の場として確立させた。この時期、ダンス、演劇、美術、文学、音楽、サウンドアート、パフォーマンス、建築とすべての芸術分野を網羅した奨学金プログラムが実施されていた。とくに2001年まで行われていた映画と演劇のための国際演出セミナーは、ベターニエンのプログラムに重要な活気を与え、文化交流を促す推進力となった。

1989年、ベルリンの壁が崩壊し、ベルリンの芸術状況は大きく変化した。東への窓が大きく開いたのである。西欧から東欧、さらには東アジアへと空間が広がった。さらに、東西ベルリンが一つになったことで、壁崩壊まで東にも西にもあった文化施設の統合、廃止、民間への委譲などを含めた再編成が必要になった。こうした状況の中で、ベターニエンの創立者であり、ディレクターを務めてきたヘルター氏が2000年に定年を迎えて引退した。東西統一の波紋の中で、東にも西にもあっ

た同じような文化施設が、いかに特徴を打ち出しながら生き延びるかという決断を迫られていた。

ヘルター氏の後任となった現在のディレクターであるクリストフ・タナート（Christoph TANNERT）は、拡大から縮小と集中の道を選んだ。ヘルター氏がすべての芸術分野をカバーしてきたのに対して、後任のタナート氏は演劇、ダンス、演出セミナー、映画の部門を廃止し、中核となる分野として美術に焦点を当てることを基本方針とした。「ベターニエンには二つの大きな転機があった」とディレクターのタナート氏は言う。その一つが、多岐に広がった分野の縮小と集中であった。

もう一つの転機は2010年に訪れた。それは旧病院の建物から現在の場所への移転である。タナート氏はこの件については多くを語らなかったが、ベターニエンのサイトや当時のニュースを見ると、左翼オートノミストたちによってベターニエンの一部が2005年に占拠され、その結果アーティストのためのセンターとしての活動を維持しにくくなった状況が記されている。2010年の移転によって、スタジオの数は旧病院跡の17から25に増加した。

東西ベルリンを隔てていた壁の崩壊の結果、施設運営の合理化を迫られる中、初代ディレクターが引退した時点で分野を絞るという英断によって、ベターニエンの経営は大きく効率化が図られる結果となった。建物の一部占拠という事態を受けて、新たな移転先として照明器具機製造工場跡が決まった。ベルリン州政府が、ベターニエンの新しい路線の経済的合理性を評価し、改修された工場跡の利用を決定したのである。ちなみにその建物は旧病院跡と至近距離に立地している。

こうして、「キュンストラーハウス・ベターニエン」という“トレードマーク”が守られると同時に、アーティストの制作とプレゼンテーションの場を確立し、現在に至る。

2. プログラムの内容と実績

(1) プログラムの目的と特徴

タナート氏は「アーティスト・イン・レジデンスには、その施設が置かれている場所の状況、条件などによって

1912年に建てられた照明器具製造工場の建物を改修し、25のスタジオ兼住居を開設。



いろいろな可能性やバリエーションがあり、運営の在り方も多様であるのが当然だ。だから理想的なアーティスト・イン・レジデンスというのは理想でしかあり得ない」と言う。しかし同氏は、アーティスト・イン・レジデンスのディレクターは「ホテルの経営者なのか、プログラムの実施者なのかを決意しなければならない」とも述べている。そして、ベターニエンの指導者として、タナート氏は後者を選んだのである。アーティストに居住と活動の場を提供するだけではなく、外に向かって扉を開けたプログラムを実施することによって、施設が存在が多彩な色を持つ(多様な価値を持つ)ことになるというのが同氏の考えである。

ベターニエンのプログラムは3本の柱によって構成されている。居住、プロジェクト活動、プレゼンテーションの3つである。これらの活動は有機的に連携しているが、中でもプロジェクト活動がベターニエンを特徴づけている。これはいわば「コーチング」と言えるもので、滞在アーティストが常に交流のプロセスに組み込まれることである。このプロジェクト活動には、以下のような活動が含まれている。

① 専門的スタッフからの支援

アーティストは滞在期間中、ベターニエンのスタッフと交流する。生活上の問題の解決だけではなく、アーティストはスタッフとの交流を通して、様々な支援を受ける。その中には、ベターニエンに常勤している3名の技術者との対話も含まれている。彼らは、アーティストの意向を確認しながら、オブジェの作成、展示空間の構成など、作品の制作や展覧会に必要な援助をしている。

② 専門家との交流・対話

ベターニエンが招待するキュレーター、展覧会企画者、哲学者、学術研究者、批評家、ジャーナリストなどとの対話を通じて、多様な交流の場が与えられている。ベターニエンでは、ベルリンだけではなくドイツ国内や世界的な国際展のキュレーターや世界の展覧会企画者を招き、アーティストのスタジオを訪問させるプログラムも実施している。25のスタジオを訪問するため、アーティストはもう少し時間をとって見てほしいという希望が

あるものの、ベターニエンがアーティストを積極的にプロモーションしている。

他にも、だれもが参加できるオープンスタジオは年に数回行われるなど、アーティストには、常に美術界の専門家との対話や交流のプロセスに参加できる仕組みが用意されている。いわば「エージェント」としての働きをしっかりと意識している。

③ 展覧会の開催とキャリア形成

アーティストには、滞在期間中にベターニエンの展示スペースで展覧会を開催するチャンスが与えられる。その他にも様々な形で、ベターニエンはアーティストのキャリア形成に尽力している。カタログなどの出版物の作成に当たっての支援、出来上がった出版物をベターニエンが持っているネットワークを通じて配布するなど、ドイツではまだ知られていないアーティストが認知度を高められるような支援体制が整えられている。

また、ベターニエンは毎年「be」という冊子を発行しているが、これは滞在アーティストとベルリン在住の作家による共同作業によって発行されている。ドイツ人あるいはベルリンで作家活動をしているドイツ人以外の作家が、滞在アーティストのスタジオを訪ね、対話を重ねる。その結果をエッセイとしてまとめたものが「be」である。ベターニエンは滞在アーティストをベルリン在住の作家との共同作業を通じてプロモーションしている。

このようにベターニエンのレジデンスプログラムの重要な特徴は、滞在するアーティストをプロモーションすることである。上記の活動に加え、広報資料やウェブサイトの作成に際して、アーティストが持っているコンセプトやアイデアをテキスト化する作業を支援するスタッフ、滞在アーティストの日々の活動をフェイスブックで公開するスタッフも揃えている。ベターニエンが発信者となってアーティストの存在と活動を広くアピールしているのである。

タナート氏は、「我々はアーティストに対する社会福

祉活動ではなく、アーティストのエリートを主体的に育てるという目的を持っている」と語り、そのための可能な手段を着々と実行している。

(2) 海外パートナーとアーティストの選考

① パートナー機関

ベターニエンには世界各国にパートナーとなる組織が存在している。あるいはベターニエンに滞在を希望するアーティストがパートナーを見つけてくれば、ベターニエンがそのパートナーに対して、正式なパートナーとなってくれるように協力を要請することもある。

これらのパートナー機関は、アーティストがベターニエンで生活し、安定的な制作環境を維持できるように、奨学金を支給する。アーティストの公募、選考は、これらパートナー機関とベターニエンとの密接な協力のもとで行われる。

ベターニエンは様々なパートナーと異なった協定を結んでいる。例えば、ポルトガルの民間財団であるグルベンキアン財団とは5年間の包括的な協定を結び、5年間にわたって毎年1名のポルトガルのアーティストがベターニエンに滞在し、制作できるようになっている。このような長期的協定を結ぶことによって、ベターニエン側はグルベンキアン財団が送るアーティストのために継続的にスタジオを確保することができる。

25のスタジオを保有しているということは、ベターニエンには25のパートナー機関がいることになる。これらのパートナー機関のうちおよそ3分の2の機関とベターニエンの間に、長期にわたる包括的な協定が結ばれている。またパートナー機関には次の4つのカテゴリーがある。

- 民間財団：グルベンキアン財団、ドイツ・ポーランド協会
- 政府機関あるいはアーツカウンシルなどの政府系機関：モンドリアン・フォンズ（オランダ）、ケベック・アーツカウンシル（カナダ）、カナダ・アーツカウンシル / 在ベルリンカナダ大使館、ハンガリー国立文化基金、オーストラリア・アーツカウンシル、韓国アーツカウンシル、シンガポール・アーツカウンシル
- 民間企業：メルセデス・ベンツ社やベック社（ドイツ

のビール会社）、銀行、保険会社等

- アーティスト・イン・レジデンス関連機関：International Studio & Curatorial Program (ISCP、ニューヨーク)、International Artists' Studio Program Sweden (IASPIS、スウェーデン)

ベターニエンの年間報告書を見ると、それぞれのアーティストの下に、だれがパートナーとなって財政的支援をしたかが明記されている。

② アーティストの選考

アーティストを決定する審査は、各パートナー機関とベターニエンの対話と協議によって行われる。各パートナー機関には、年間約40－60人の応募がある。それらの応募者の中からパートナー機関が第一次審査を行い、応募者を約10人に絞り込む。この10名のアーティストに関する情報や資料はすべてデジタル化され、ベターニエンに送られてくる。この資料をもとに、ベターニエンがパートナーとの対話を重ね、審査をしたうえで最終的に滞在アーティストを決定している。

ベターニエンにとって、外国の文化省あるいはそれらの附属機関との協力だけではなく、スポンサーとなる企業との協力も重要である。なぜなら、国の文化省はその国のアーティストを送るという視点しかないが、企業は国際的な公募を行う。このことによって、一つの国のアーティストではなく、より広い国際的なアーティストのネットワークが構築できるためである。またベターニエンと協定を結んでいない国のアーティストも、スポンサー企業の支援によってベターニエンに滞在することが可能となるケースもある。

ベターニエンに応募するアーティストには、とくに年齢制限はない。これもパートナー機関の判断に委ねられている。アーティストがいつキャリアを開花させるかわからないし、年齢による差別を避けるという意味合いもある。しかし、アーティストは大体25歳から55歳で、少なくとも5年から7年の実践経験を持ち、選考過程ではアーティストとしてのキャリアを発展させていく潜在能力があるかどうかことが重要視される。

ベターニエンは、アーティストが滞在中にどのようなプロジェクトを実施しようとしているのかに基づいてパートナー機関と協議し、審査している。アーティストが



「芸術市場の動きに左右されず、静かで守られた環境の中で作業し、ベターニエンがそれに応じた支援をするには一年の滞在が必要だ」とタナート氏は言う。ただし、例外的に半年の滞在も実際にはある。

(3) プログラムの実績

1975年の創設から現在までベターニエンに滞在し、制作活動を行ったアーティストは約1,000名に達している。その中の10%に当たる100名のアーティストを取り上げた「回顧－キュンストラーハウス・ベターニエンの32年（Review - 32 Jahre Künstlerhaus Bethanien）」というカタログが発行されている。これら100名のアーティストは、ドクメンタをはじめ、世界中の名だたるビエンナーレなどの芸術祭に招待されている作家である。

マリナ・アブラモビッチ、ヤン・ファール、カースティン・ヘラー、トーマス・ヒルシュホルンなどが、このカタログに登場している。日本人アーティストでは、宮本隆治が100名に含まれているほか、ベターニエンに舞台芸術のプログラムがあった時代に開催された大野一雄ら舞踏のパフォーマンスの写真も掲載されている。宮本隆治は、滞在アーティストではなかったが、1999年、当時のディレクターであったヘルター氏から招待を受け、ベターニエンで個展を開催した。

カタログに掲載されているアーティスト以外でも、それぞれの国や地域、あるいは国際的な場で活躍しているアーティストは多い。例えば宮島達男も、1990－91年、ドイツ文化省芸術家留学基金（DAAD）留学生としてベターニエンに滞在したアーティストの一人である。

4. 施設の構成と内容

ベターニエンの現在の建物は、1912年に建てられた照明器具製造会社を改修した建物で、事務室や図書室のある階の上に、25のスタジオ（広さは45－75㎡）が設けられている。スタジオは調理スペース、洗面スペース、制作スペースが一つになっている。無線LANも備えられている。

表通りに面した展示スペース（約730㎡）では、滞在アーティストによる展覧会が開催される。また木材、メタル、プラスチック類の加工ができる工房スペースのほか

に、映像やサウンドの編集ができる場所も用意されている。

5. 運営体制と事業収支

(1) 運営体制

ベターニエンは公益的目的を実現するための有限責任会社であり、公的な組織ではないが、財政的にはベルリン州政府の補助を受けている。

ベターニエンがすべての芸術分野をカバーしていたころの職員数は約18名であったが、現在は常勤スタッフが7名である。ディレクター、経営担当責任者、スタジオ責任者、広報担当者、経理担当者が各1名、技術担当者が2名である。それ以外に契約職員が3名勤務しており、必要に応じてフリーの非常勤スタッフが働いている。

ディレクターのタナート氏は、ドイツ民主共和国（東ドイツ）美術家連盟で若手アーティスト育成に関わる仕事に就いたあと、フリーのキュレーター、美術批評家、美術関連の出版に携わり、1991年からベターニエンのプロジェクト部門を率いている。初代ディレクターのヘルター氏の引退後、2000年にディレクターに就任した。

初代ディレクターのヘルター氏はレズ・アルティス創立者の一人であり、ベターニエンはレズ・アルティスに加盟している。

(2) 事業収支

組織の性格上、詳しい数値は公表できないとのことであったが、ベターニエンの財源は世界中のパートナー機関とベルリン州政府によって支えられている。州政府からの補助で、建物の維持費、人件費、作品制作のための工房に関わる費用が賄われている。ベターニエンまでの往復旅費、ベターニエンの家賃、生活に必要な奨学金、プロジェクト実施に関わる費用など、アーティストがベターニエンに滞在するために必要な費用はパートナー機関が負担している。全体経費の40%がベルリン州政府の補助、60%がパートナー機関からの支援となっている。

2000年にベターニエンが分野縮小に方針転換をしてから、スタッフの人数は大きく削減された。しかし、ス

タジオ数は逆に25に増えた。この合理化は、ベルリン政府から高く評価されている。

タナート氏は、常にパートナーとしてベターニエンでの滞在・制作をサポートする機関（政府機関などの公的機関、国際的なネットワークに関心を持つ企業など）の新規獲得に努力している。

5. 評価と課題

「ベルリン州政府がベターニエンの活動を37年間にわたって財政的に支援してきたことが、我々に対する評価を示している」とタナート氏は言う。州政府にとって、ベターニエンは2つの重要な役割を果たしている。一つはベルリンのいわば「外交的施設」という政治的な役割、もう一つは世界中からやってくるアーティストが、ベルリンの芸術市場を刺激し、創造的な都市としての魅力を高めるというクリエイティブ・エコノミー上の役割である。

アーティストを支援するパートナーの拡充は、重要な課題である。長期的な概括協定を結ぶパートナーがいれば、スタジオの使用について長期的な計画が立てられるが、送り出す国を固定してしまうと、その国の関心しか反映されなくなる。長期的な計画に基づいた運営と多彩なパートナーの確保とをどのようにバランスさせるかが、検討課題となっている。

6. 日本との連携について

グルベンキアン財団のように、ベターニエンと長期間にわたる包括的協定を結ぶ機関が日本には存在していない。そのため、ベターニエンでの滞在・制作を希望する日本人は、直接ベターニエンに自分のポートフォリオを提出しなければならない。もしベターニエンがこのアーティストに関心を持ったとしても、スタジオが確保されていないので、時期的に調整ができずに断らなければならないこともある。うまく調整ができて滞在が可能となった場合、ベターニエンからの招へい状が送られる。この招へい状を持ってアーティスト自身は奨学金を出してくれそうな機関に当たらなければならない。ベターニエンは、日本からのアーティストを受け入れる枠組みを構築したいという希望は持っており、「パート

ナーとなってくれる日本の公的文化機関あるいは企業を獲得したい」とタナート氏は強調する。

現在、とくにベルリンではシェンゲン協定に加入していない国のアーティストにとって、ビザ取得のハードルが非常に高くなっている。しかし、ベターニエンに滞在するアーティストは、ビザを容易に取得できる。現在ベターニエンに滞在中の日本人アーティストの話では、「ベターニエンでの滞在期間は1年であるのに、2年間のビザが下りた」とのことであった。ベターニエンに滞在することは、ベルリン当局にとっても信頼が高いということの証左である。

滞在アーティストへのインタビュー

面会者:手塚愛子(以下、「AT」)、松井えり菜(以下、「EM」、マイケル・リー(Michael LEE、以下、「ML」)

1. 略歴、活動実績

AT: 東京生まれ、現代美術家。京都市立芸術大学大学院美術研究科博士(後期)課程油画領域修了。刺繍の表裏を露呈させる作品や、既に織られた織物を解体、或いはその縦糸だけを取り出して見せるといった作品で広く知られる。主な個展として、アサヒビール大山崎山荘美術館や第一生命ギャラリー、主なグループ展として、東京都現代美術館、熊本現代美術館、豊田市美術館等に出展した実績を持つ。また、国際芸術センター青森のレジデンスプログラムに参加した経歴を持つ。

EM: 岡山生まれ、現代美術家。東京藝術大学大学院美術研究科油画専攻修了。個性的な自画像や、ウーパールーパーをモチーフとした作品で広く知られる。主な個展として、ジョアン・ミロ美術館(バルセロナ)や大原美術館、主なグループ展として、モスクワ・ビエンナーレ(2009年)等に出展した実績を持つ。また、カルティエ現代美術財団や大原美術館等のコレクションに作品が収蔵されている。

ML: 1972年シンガポール生まれ、現代美術家。シンガポールの南洋理工大学で情報コミュニケーションを学ぶ。都市の記憶やフィクションをテーマに、都市の生成、発展、消失の仕組みを、オブジェや図式、インスタレーションとして発表する。過去に、シンガポール・ビエンナーレ(2011年)、上海ビエンナーレ(2010年)、広州トリエンナーレ(2008年)等に出展した実績を持つ。

2. アーティスト・イン・レジデンスに参加した動機

AT: 将来、海外を拠点に活動をしたいと考え、五島記念文化財団の奨学金を受けてロンドンに語学留学をした。英国の美術大学は学費が高く、自分のキャリアから考えても大学に入学することを考えていなかったが、西欧の美術界と接点をつくるのが非常に難しいと感じた。そこで、海外経験が豊富

なアーティストの増山士郎氏に相談したところ、ベターニエンを勧められた。増山氏は海外の著名なアーティスト・イン・レジデンスを渡り歩きながら世界各地で活動しているアーティストで、これまでに滞在したアーティスト・イン・レジデンスの中で、ベターニエンの支援は質が高く、オープンスタジオやスタジオビジットなどで美術関係者に出会えるチャンスが多いという増山氏の体験談を聞いて、ベターニエンに応募することにした。

EM: 主に自画像を制作しているため、新しい体験や経験をすることで、自身の描く自画像にも変化があるのではないかと考え、海外に滞在したいと考えていた。アーティストの増山氏に相談したところ、ベターニエンを勧められた。

ML: アーティスト・イン・レジデンスに参加したのはベターニエンが初めてだが、過去に香港やロンドンに短期滞在した経験がある。

レジデンスに参加した動機の一つは、才能のあるアーティストが数多く集まるベルリンという都市に魅力を感じたためである。また、数多くの一流のアーティストを輩出してきたベターニエンのレジデンスプログラムに参加できることはとても名誉なことでもある。現在、ベターニエンに滞在しているアーティストで、今年のヴェネチア・ビエンナーレに出展するアーティストは、私の知る限りでは二人いる。

3. 創作活動の支援

AT: ベターニエンでは、美術館のディレクターやキュレーター、ギャラリストのスタジオビジットをアレンジしてくれる。昨年はドクメンタが開催された年であったので、数多くの美術関係者がベルリンを訪れた。アジア、アフリカ、南米など、地域別に美術関係者をコーディネートしたゲーテ・インスティテュートが企画するスタジオビジットもあった。一方で、スタジオビジットをする美術関係者に十分な時間がない場合は、面会を希望するアーティストが予約をする仕組みになっているので、チャンスは待っていても来ない。また、8月、11月、1月の年3回、ベターニエンが企画するオープンスタジオでは、数多

くの美術関係者との出会いのチャンスがある。

ベターニエンで個展を開催し、図録を制作したときに、ベターニエンからロゴとISBNを提供してもらった。献本が条件であったが、献本した本をベターニエンのライブラリーで販売してもらえる。また、その図録を美術関係者に配布したいと相談したところ、美術関係者のリストを提供してくれた。

ベターニエンは海外で生活をスタートするために十分なサポート体制があると思う。海外で生活するためにはビザを取得する必要があるが、ベターニエンはビザを申請するために必要なレターを準備してくれた。ベターニエンはドイツ国内でも信用のある芸術団体のため、すぐにビザを取得することができ、また、銀行口座も簡単に開設することができた。

EM: ベルリンは物価が安いのでアーティストが多く、アーティスト・イン・レジデンスも数多くあるが、ベターニエンは地元の人にも知っている信頼できるレジデンスとして安心して生活ができる。

ML: ベターニエンは立地条件も良く、創作環境も非常によく整っている。また、年3回のオープンスタジオやスタジオビジットでは、キュレーターや批評家との出会いがある。ベターニエンの工房で働く技術者は知識や経験が豊富で、ベターニエンでの個展のコンセプトを考えるとときには、的確なアドバイスをくれ、助けになった。

4. アーティスト・イン・レジデンスの経験

AT: ベターニエンでは各国の政府機関や政府系機関から選ばれたアーティストが多く滞在するため、非常にレベルが高いと感じる。創作上の刺激もあるが、プロのアーティストとしての姿勢を学ぶことがある。例えば、制作のスケジュールをよく管理していて、展覧会の直前でも慌てることがない。ベルリンはアーティストが非常に多く、毎晩のようにアーティストが集まるパーティがあるが、十分に自己管理をしないと制作に取り組む時間がなくなってしまう。また、ベターニエンの滞在アーティストはそれなりのキャリアがある大人で、生活でのトラブルも

ない。キッチンが別々で、一人一人の時間を大切にすることができる環境がある。ベターニエンでレジデンスをスタートすることができて本当に良かったと思う。

ベターニエンに滞在するためには英語を話すことができればいけない。また、事務手続きなど、基本的には自分で全て対応しなければいけないが、海外でアーティストとして生きていくための術を身に付けることができたと思う。

ベターニエンで数多くの美術関係者に会ったことで、多くのチャンスを手にした。今年だけで、欧州の3つの美術館と3つのコマーシャルギャラリーと仕事を進めている。また、グループ展では、ベルリン、フランクフルト、ハンブルグ、ロットヴァイル、ビーレフェルド(ドイツ)、チューリッヒ、ポーランド、シンガポールで作品を発表予定だ。

今後は、アムステルダムライクスアカデミーやニューヨークのISCPに滞在してみたい。

EM: ベターニエンに滞在するアーティストが、大学の先生の友人であったり、友人の友人であったりするなど、人間の交差点になっていると感じた。

国内で発表していると、海外のギャラリーと関係をつくる機会が少ないので、美術館のディレクターやキュレーターとの出会いが個人的には重要である。一方で、ベルリンは美術の市場という視点から考えると十分な需要がないので、今後は、ニューヨークに滞在したいと考えている。

ML: 私は一年間滞在する予定で、帰国の3ヶ月前に個展をすることになっているが、残りの3ヶ月間が貴重な時間になると思った。当初は作品制作に十分に時間を費やして、帰国の直前に作品を発表したいと考えていたが、ベターニエンでは様々な出会いがあるので、残りの3ヶ月でキュレーターや批評家、アーティストなどと作品について議論をしたいと考えている。

5. 自国の支援について

AT: 自国の助成機関から支援を受けているが、いくつかの滞在条件の制約があるために、海外での滞

在を有効に活用できないと感ずることがある。例えば、原則として一つの研修地に滞在していなければならないというルールがあるが、様々な国や地域に短期滞在することで経験できることもあると思う。また、研修中は自国に帰国することもハードルが高く、プロのアーティストとしての活動を狭められる気持ちになる。

また、日本のアーティストは思考や技術、芸術性が世界と比べて劣っているわけではないのに、英語を話すことができないために十分な研修の成果を得ることができずに帰国する場合もある。ロレックス社の奨学金制度では、英語に自信がないアーティストにロンドンでの語学研修の機会を提供すると聞く。奨学金とともに、語学研修の機会を提供してくれると良いと思う。

EM: 申請の締め切り日から審査の結果が通知されるまで6ヶ月間と非常に長い間待たなければいけないので、滞在先とのスケジュールの調整が大変であった。

ML: 私はシンガポール・アーツカウンシル(以下、「NAC」)から支援を受けて滞在中に、NACはベターニエンと提携して毎年アーティストを派遣しているため、ベターニエンとNACに別々の申請書を提出する必要はない。NACは美術分野ではパリのレジデンスとも提携している。ベターニエンに滞在中のアーティストは、1年間の滞在中の支援として約5万シンガポールドル(約400万円)を支給してもらえる。ベターニエンと提携する助成プログラムに応募するアーティストは毎年20人ぐらいいて、応募者の中からNACがショートリストを作成し、ベターニエンが最終選考をするという仕組みである。

6. 日本のアーティスト・イン・レジデンスについて

ML: 日本のアーティスト・イン・レジデンスには詳しくないが、森美術館の「メタボリズムの未来都市展」を観るために、日帰りで日本に行ったこともあるぐらい日本の文化や芸術に興味があるので、是非、日本のアーティスト・イン・レジデンスに滞在してみたいと思う。

3. パクト・ツォルフェアライン | PACT Zollverein

面会日: 2013年2月19日(火) 11:00-13:00

面会者: Katharina CHARPEY (Projectleitung)

URL: <http://www.pact-zollverein.de/en>

1. 運営機関の概要

(1) 設立趣旨・経緯

PACT Zollvereinの正式名称は、Performing Arts Choreographisches Zentrum NRW Tanzlandschaft Ruhrであり、PACTという通称は頭文字4つを組み合わせたものである。PACTの立地する旧ツォルフェアライン炭鉱はルール地方が巨大な炭鉱資源を有する鉄鋼業の中心であったことを示す産業遺跡である。

石炭から石油にエネルギー源が転換する時代の流れの中で、ツォルフェアライン炭鉱は1986年に閉鎖された。その時には跡地の売却も考えられたが、最終的にノルトライン・ヴェストファーレン州が買い上げるようになった。2001年にはユネスコの世界遺産に指定され、敷地内の建物はデザインミュージアムや博物館として再利用されている。

その敷地内に、炭鉱夫たちの更衣室として使われていた建物を改修して舞台芸術のスタジオや劇場スペースとして再利用しているのが、パクト・ツォルフェアライン(以下、「PACT」)である。この施設は、元々、坑内での労働が終わったあと、3,000人を超える鉱山労働者たちがシャワーを浴び、服を着替えた2階建ての建物で、今でもその名残が残されている。

1990年代初頭に、地元のアーティストたちがこの建物を公演会場として使うようになり、やがてダンス関係のアーティストたちが合法的に占拠してしまった。当時、窓もなく、舞台となるべきスペースにはパワーショベルが置かれたままの状態であったという。

ルール地方の文化行政を実践する組織として生まれた「ルール文化有限会社(Ruhr Kultur GmbH)」が、1998年にこの地域のダンスを促進する目的で、「ルール・ダンス地区(Tanzlandschaft Ruhr)」と呼ばれるプロジェクトをスタートさせた。また1999年から、上記の占拠されていた建物がノルトライン・ヴェストファーレン州の資金で改修され、2000年には同州の組織として、NRW振付センターがそこで活動を開始した。

NRW振付センターは、同州のダンス関係のアーティストたちの作品制作を支援する場所として構想されたものである。2002年、「ルール・ダンス地区」と「NRW振

付センター」の二つの組織の名前を引き継ぐ形で、シュテファン・ヒルターハウス(Stefan HILTERHAUS)をディレクターとしてPACTが誕生した。

(2) PACTの事業

PACTは3つの重点事業を行っている。「プラットフォーム(Platform)」、「舞台(Stage)」、「アーティスト・センター(Artists' Centre)」という名称でくられた3つの事業である。これら事業の3本の柱がそれぞれ独立しているのではなく、有機的に結びついているのが、PACTの大きな特徴である。

PACTが持つインフラの多様な利用の可能性を活かそうとする「プラットフォーム」は、学生、アーティスト、研究者たちの学びと交流、さらには実験の場を提供する事業である。外国の芸術大学をパートナーとして、PACTが主催する国際的な学生交流プログラムの「フェルトシュテルケ」や、著名なアーティストと学生・研究者・ジャーナリストなど40名の参加者が3日間にわたって集中的に議論しあう「イムパクト(IMPACT)」などの事業がある。また「プラットフォーム」の事業の中で、ドイツのパフォーミングアーツのキュレーター、ジャーナリスト、またこれらの職業を目指す学生や研修生とのネットワーク構築を目指している。

「舞台」とは公演事業であり、PACTがプロデュースあるいは共同製作した作品の上演、外部カンパニーの客演、ルール・トリエンナーレの公演、他のレジデンスプログラムで制作された作品の上演などが行われる。

「アーティスト・センター」の中にもいくつかの事業があるが、中心となっているのが年間を通じて実施されるアーティスト・イン・レジデンスのプログラムである。

2. プログラムの内容と実績

(1) プログラムの内容と特徴

2000年に誕生したNRW振付センターもレジデンスプログラムを行っていたが、システムとして完成していなかった。PACTはレジデンスプログラムを始めるに当たって、パフォーミング・アーツとメディアアートの分野で、アーティストの創造活動にとってより良い条件や場所を提供することを目的とした。



ツォルフェライン炭鉱はバウハウス様式の世界で最も美しい炭鉱施設として、世界遺産に指定され、広大な敷地に残された産業遺構群はアートとデザインの拠点として再利用されている。

シンボリックな存在の縦杭上屋とPACT

滞在中に作品を制作する、あるいは滞在の最後に何らかの成果を発表するということは全く目的には入っていない。ただひたすらアーティストの創作に良い作業環境を提供することが目的である。レジデンスプログラム担当のカタリーナ・シャルパイ (Katharina CHARPEY) は、「滞在アーティストが何をしているのか全くわからないこともある」という。滞在の成果を一つの作品として公開するケースはほとんどない。割合としては、すべての滞在アーティストの10%ほどである。

PACTとして重要視しているのは、若いアーティストたちが滞在期間中自由に創造力を発揮できる環境を整えることである。もし作品を作って発表しなければならないという拘束があると、滞在する目的が変わってしまうというのが、PACTの考えである。

しかし、滞在期間の最後に、アーティストにプレゼンテーションしたいという希望があれば、PACTのディレクターであるヒルターハウス氏、レジデンスプログラム担当のシャルパイ氏やその他のスタッフがそれを観て、コメントや意見を述べてフィードバックを与えるということはある。それが公開のプレゼンテーションになることもあるが、それは決して義務ではない。公開を義務付けると、アーティストは作品としての完成度を気にするあまり、間違いを恐れ、今までとは違ったやり方を試そうとしなくなるからである。

この非公開のプレゼンテーションは70-80%の滞在アーティストが行っている。この非公開のプレゼンテーションには、PACTのディレクター、ドラマトウルクでもあるレジデンスプログラム担当者、チームスタッフ以外に、同時期に滞在している他のアーティストも参加して、それぞれがコメントなどを述べあい交流する場となっている。まさにこの交流やフィードバックが、PACTのレジデンスに参加するアーティストの動機となっている。

① 芸術分野

公募されるアーティストの芸術分野はダンス、パフォーマンス、メディアアート、サウンドアートである。その中で、ダンスとパフォーマンスの占める割合が最も高い。現代ではダンスとパフォーマンスの境界はほとんど曖昧であり、それは、例えば岡田利規がPACTに滞在していたことからわかるとシャルパイ氏は言う。スタジオの

性質上、上記の分野以外の芸術は公募の対象とはなっていない。

② 募集とアーティストの選考

募集は半年ごとに行われ、それぞれ約15件のプロジェクトが選ばれる。1件当たり、最大6人までのグループが認められている。ただし、10人の滞在が必要なプロジェクトが優れたものであれば、例外的に10人の滞在を受け入れることもある。応募に当たって、特別な条件は何もない。国籍・年齢・性別は不問であるが、応募者は応募の動機、滞在中に実施するプロジェクトについての企画書、プロジェクトに参加するアーティスト全員の略歴、ビデオなどの視覚資料を提出しなければならない。

滞在期間はプロジェクトによって異なるが、2週間から4ヶ月である。受入時期は毎年1月から6月、7月から12月の半年単位、募集期間はそれぞれ受入時期の半年前である。

アーティストの選考は提出された書類・資料をもとに審査委員会が決定するが、その判断基準は「良い企画であるかという一点に尽きる」とシャルパイ氏は言う。現代社会に対してアーティストがどのように考えているのか、アートを通して社会とどのように向き合うのかという発想があるかどうか、そしてその発想がPACTにとって関心が持てるものかどうか、それが選考の重要な要素である。

③ 支援内容

アーティストはPACTが提供するエッセン市内のアパートに住み、PACT内のスタジオを利用して活動する。PACT内の本番用のステージで、実際の舞台技術を用いたリハーサルもできるようになっている。しかし、前述のとおり活動の成果を発表する必要はない。エッセンまでの往復旅費(海外からの場合は渡航費)、滞在中は一人当たり週200ユーロが支給される。滞在中、PACTが抱えている技術スタッフだけではなく、ドラマトウルク、制作スタッフによって、財政支援、マネジメント、宣伝などに関する助言を受けることができる。

PACTのプログラムの特徴はアーティストに対して最大限の自由と、進行中の作業について評価を行わず、



2階の劇場ロビー。炭鉱夫のシャワー室を転用した壁面には石鹸置きがそのまま残されている。

アーティストにプレッシャーをかけないことを保障することである。いつでもスタジオを使えるという時間的な自由、滞在期間中は何をしてもよいという自由が、アーティストにとって貴重な体験となっている。

滞在期間中、アーティストはPACTの他の活動にも自由に参加できる。「舞台」と「プラットフォーム」の事業に参加することで、アーティストはさらなる刺激を受け、出会いのチャンスを与えられている。最近では、PACTがかつての滞在アーティストと作品を共同製作するというケースが増えている。

(2) プログラムの実績

手元にある2008年から2012年の資料によると、33ヶ国から137名のアーティストが滞在した。欧州連合の諸国をはじめ、イスラエル、トルコ、ロシア、ブラジル、日本、オーストラリア、チリ、ニュージーランドなど世界の多くの国のアーティストにとって、PACTは重要な拠点となっている。

ラッセル・マリファント、ヤン・ファールをはじめ、多くの著名なアーティストやグループが滞在している。日本からは岡田利規が2回滞在しているのをはじめ、梅田宏明も滞在したことがある。しかし、PACTにとって重要なことは、アーティストの著名度ではなく、アーティス

トが芸術を通して現代社会とどのように対峙しようとしているのか、ということである。

3. 施設の構成と内容

広大なツォルフフェアライン炭鉱の跡地及び建物群は、2001年12月にユネスコの世界文化遺産として指定された。その一画に炭鉱労働者たちの更衣室・シャワー室を改修、再利用しているPACTがある。建物の中には、63ー173㎡の大きさのスタジオが4つ、劇場として利用可能なスペースが大小2つある。宿泊施設はそこにはなく、エッセン市内のアパートを利用している。

PACTの建物に入ると、1階は廊下を挟んで事務室とスタジオがあり、2階部分に大小の劇場スペースとスタジオがある。また1階には、ステージで公演が行われるときに飲み物や軽い食事が食べられるスペースがある。公演がないときは、打ち合わせや会議などにも使えるようになっている。スタジオ、劇場スペースとも、ほぼフル稼働の状況である。

4. 運営体制と事業収支

(1) 運営体制

PACTはもともと二つの組織が一つになったという歴



劇場と
レジデンスの行われるスタジオ

史があるが、それが現在の組織形態にも現れている。つまりPACTの運営母体は、有限責任会社(GmbH)でもあり、財団法人でもある。PACT財団法人が、ツォルフエアライン炭鉱全体を管理している財団法人から建物を徐々に買い取って、現在ではPACTの施設はPACT財団の所有となっている。

スタッフは14名である。事務局長、アーティスティック・ディレクター、アシスタント、プロジェクト・マネジャーが4名、広報担当とマーケティング担当と経理担当が各1名、技術者3名、建物管理者である。全員が常勤雇用である。

PACTは、できるかぎりアーティストに対して自由を保障するというコンセプトから、規則で縛らないことを前提としているため、アーティスト・イン・レジデンスのネットワークには参加していない。ただ、ベルギーのP.A.R.T.S.(コンテポラリー・ダンスの研修センター)が在校生や卒業生のために欧州内のレジデンスプログラムを紹介しており、それには協力している。

(2) 事業収支

PACTの活動予算は総額で200万ユーロ(約2億6,000万円)である。建物の維持管理、人件費、光熱費などPACTを維持するための費用が100万ユーロ(約1億3,000万円)で、これはエッセン市、ノルトライン・ヴェストファーレン州、欧州文化首都基金、ルール文化有限会社からの資金によって賄われている。それ以外に前述の3本の活動の柱となる事業のための予算が90万ユーロ(約1億1,700万円)である。これは、同じくノルトライン・ヴェストファーレン州政府と同州政府の芸術財団が負担している。

また、アーティスト・イン・レジデンスプログラムには、ノルトライン・ヴェストファーレン州の家族・児童・青少年・文化・スポーツ省から10万ユーロ(約1,300万円)の補助金を受けている。この10万ユーロで、アーティストの滞在費、生活支援費、審査員の費用などが賄われるが、使途についてはPACTの裁量に任されている。

5. 事業評価の実施状況

州政府からの公的資金がPACTの運営財源の一部

になっているため、PACTは毎年、事業報告書を作成・提出している。報告書にどのような内容を盛り込むかは州政府の指示によるのではなく、州政府が関心を持つと思われる事柄を勘案して作成している。アーティスト・イン・レジデンスプログラムについては、アーティストの数、出身国、公演数、滞在アーティストとの共同製作作品が上演された場所と回数といった量的な評価に加えて、レジデンス活動の内容とその効果について詳述している。

アーティスト・イン・レジデンスは、とくにPACTの場合、アーティストには何の義務がないため、外部からは何をしているのかがわかりにくい。だからこそ運営資金を提供してくれる州政府に対しては、地道な報告活動が重要だというのがシャルパイ氏の考えである。同氏がPACTで仕事を始めたのが2006年で、その時点では州政府からの補助金は2万ユーロ(約260万円)であったが、レジデンス活動が持つ意味や効果、成果を地道に説明し、信頼関係を築きあげていくことによって、現在では補助金は5倍の10万ユーロ(約1,300万円)に引き上げられている。

滞在経験者がPACTで練ったアイデアや試みが、滞在后どのように発展しているかについては、PACTも大きな関心を寄せている。機会があるごとに、かつての滞在アーティストと連絡を取り、作品を見ながら、共同製作の可能性を探っている。ここから、実際に共同製作の作品が生まれ、この作品がそれぞれのアーティストの出身国あるいはネットワークを通して、ドイツ以外での上演が実現していく。これが、PACTの成果として報告書に挙げられる。

6. 日本のアーティストのレジデンスについて

PACTではこれまで他のレジデンス施設に比べてかなり多くの日本人を受け入れている。例えば、岡田利規氏がPACTを高く評価していることが、多くの日本人を引きつけているのかもしれない。PACTにとって、日本のように距離的な遠い国には、このような口コミが重要だと考えている。また、ヒルターハウス氏は積極的に日本の関係者とコンタクトを取っている。

滞在アーティストへのインタビュー

面会者：エレノア・パウアー (Eleanor BAUER、以下、「EB」)、ムウイー・クオ (Mu-Yi KUO、以下、「MK」)

1. 略歴、活動実績

EB: 米国生まれ、振付家。ニューヨーク大学芸術学部卒業。2004年、ベルギーへ渡り、ローザと王立モネ劇場の設立したブリュッセルのコンテンポラリー・ダンスの専門学校P.A.R.T.Sに参加。ソロ作品『ELENOR!』で若手振付家として注目され、現在、ブリュッセルを拠点に欧州の第一線で活躍する。最新作『Tentative Assembly』はクンステン・デザール・フェスティバルでプレミア公演、また、2012年のベッシー賞 (ニューヨーク・ダンス&パフォーマンス賞) にノミネートされた。現在、ブリュッセルのカーイシアターのレジデンス・アーティストとして2013年から2016年までの4年間の支援を受ける。

MK: 台湾生まれ、振付家、ダンサー。台湾の中国文化大学舞踊学部を卒業後、台湾でダンサーとして活動を始める。1998年、ドイツへ渡り、 Folkvanguard 芸術大学でコンテンポラリー・ダンスを学ぶ。ヘンリエッタ・ホルン、ロドルフォ・レオーニ、ライナー・ベアーなどの振付作品、また、ピナ・バウシュ率いるグッパタール舞踊団の作品に出演した実績がある。

2. アーティスト・イン・レジデンスに参加した動機

EB: ブリュッセルのP.A.R.T.SでPACTについての話を聞いていた。P.A.R.T.Sを卒業後、最初に参加したプロジェクトがPACTで滞在制作をするということで、初めてPACTを訪れ、そこで、ディレクターのヒルターハウス氏と出会い、彼が私の創作方法に興味を持ってくれたことで交流が生まれた。

現在、舞台芸術の一つの傾向として、一つのカンパニーに所属するのではなく、プロジェクト毎に活動することが主流なので、レジデンスは様々な国や地域で活動する振付家やダンサーが集合し、一つのプロジェクトに取り組む機会を与えてくれる重要な場所である。PACTでは、一つのアパートを

他のプロジェクトメンバーと共有して滞在制作をしている。一緒に料理をして食事をするなど、制作だけでなく生活を共有することで、お互いのことを良く知ることができ、また、創作のアイデアについて気軽に議論をすることができる。

MK: PACTのオープニング・イベントで発表された作品に出演して以来、PACTとは様々な関係性を築いてきた。ダンサーとして、ピナ・バウシュ率いるグッパタール舞踊団の作品に出演したり、ワークショップのゲスト講師としてワークショップに参加したり、また、振付家として自らの作品を制作している。

PACTではコンテンポラリー・ダンス以外にも様々な分野のアーティストが活動していることが魅力で、それらのアーティストと交流することで、自らの振付作品の質を高めることができると思う。

PACT以外には、ダンサーとして様々なレジデンスに参加し、また、振付家としてスイスのルツェルンの劇場Südpolのレジデンスプログラムに参加した経験がある。アーティスト・イン・レジデンスを調べるときには、「Tanzplan Deutschland」というウェブサイトを活用している。このウェブサイトではレジデンスの情報以外にも、グラントの情報も掲載されている。Südpolでは、創作、リハーサル、公演というように3回の滞在機会が与えられ、作品を十分に再考することができた。そのため、2-4週間ぐらいの滞在期間で3回ぐらいの滞在機会を提供してくれるレジデンスプログラムが理想的だと思う。

3. 創作活動の支援、レジデンスの経験

EB: プレミア公演ができる環境があるというのは、PACTの重要な支援の一つだと思う。例えば、著名なフェスティバルでプレミア公演をするのは様々なプレッシャーを感じるもので、昨年、クンステン・デザール・フェスティバルでプレミア公演をしたのだが、なぜ多くのアーティストがPACTでプレミア公演をしたいのかがよく理解できた。PACTの公演スケジュールには余裕があるので、リハーサルに十分な時間を費やすことができる。そして、PACTの観客は構えたところがなく寛容なため、安心できる。また、ディレクターやスタッフは作品の

創作過程をよく知っているので、適切なアドバイスやフィードバックをくれ、作品を再検討するときに役立つ。

MK: PACTの支援は非常に充実している。多くのレジデンスでは、スタジオと宿泊施設を提供してくれるだけだが、PACTでは最低限の生活を保障する滞在費も支給してくれる。

今回の滞在では、PACTの企画するシンポジウム「イムパクト(IMPACT)」で出会った英国の劇作家と共同制作をしているが、コンテンポラリー・ダンス以外のアーティストと活動することは、振付家として何ができるのかを振り返る機会となった。

4. 日本のアーティスト・イン・レジデンスについて

EB: 陶芸家の母が若い頃に日本に旅行に行き、そこで多くの影響を受けたと話してくれたことがあるので、日本にとっても興味がある。私は日本に行ったことがないが、特に十代の頃は日本のアニメや音楽が好きだったので、ポップカルチャーに関心がある。ポップカルチャーの先駆者は米国だと考える米国人が多いが、日本のポップカルチャーは独創的で時代を先取りしていると思う。もしも日本に行く機会があれば、日本の観客にパフォーマンスを観てもらいたい。また、日本のアーティストの作品も観たい。昨年、リオデジャネイロのダンス・フェスティバル「パノラマ」で日本とブラジルのアーティストの共同制作作品を観たのだが、非常に興味深いものだった。全く異なる文化背景を持つアーティストが、何を共有することができるのかということに興味があるからだ。

MK: 英国の振付家、ショーネッド・ヒューズが国際芸術センター青森で素晴らしいレジデンス体験をしたという話を聞いたので、日本のレジデンスにとっても興味がある。もしも、日本でレジデンスする機会があれば、能などの伝統芸能のレッスンを受けたい。また、日本のアーティストと共同制作作品をつくりたいと思う。

4. ノード・センター・フォー・キュラトリアル・スタディズ | Node Center For Curatorial Studies

面会日：2013年2月20日（木）16:00－17:30

面会者：Perla MONTELONGO (Director)

URL: <http://www.nodecenter.org/>

1. 運営機関の概要

(1) 設立の経緯

ノード・センター・フォー・キュラトリアル・スタディズ (Node Center For Curatorial Studies、以下、「ノード・センター」) は、2010年、ディレクターのペルラ・モンテロンゴ (Perla MONTELONGO) とイグナシオ・ガルシア (Ignacio GARCIA) が設立した組織で、2011年からキュラトリアル・プログラムを開始した。

モンテロンゴ氏はアーティスト、キュレーターで、メキシコの大学で非常勤講師をしていた経歴を持ち、アーティストとしてアーティスト・イン・レジデンスに滞在した経験がある。そして、アーティスト・イン・レジデンスに滞在中、キュレーターのためのアーティスト・イン・レジデンスが不足していることを実感する。特に、ベルリンではアーティスト・イン・レジデンスの数が多く、近年、アーティストの数が増加する傾向にあるが、それらのアーティストを支援するキュレーターを育成する環境が十分に整備されていなかった。そこで、友人のガルシア氏に声をかけ、若手のキュレーターがアーティストや同世代のキュレーターと出会うことのできるアーティスト・イン・レジデンス、ノード・センターを設立した。

ノード・センターでは各プログラムで複数のキュレーターを受け入れ、滞在キュレーターの共同作業を重視しているが、これはモンテロンゴ氏がキュレーターとしてヴェネチアのペギー・グッゲンハイム・コレクションでインターンをしていたときに、共同作業の重要性を学び、同期のインターンとは、研修後も継続的な関係を維持することができているためだという。

(2) ミッション

ノード・センターは、アーティストとキュレーター、美術関係者が出会うネットワークの場として、実験的で、協働的で、領域横断的なアプローチで活動することをミッションとする。

2. プログラムの内容と実績

(1) プログラムの内容

ノード・センターのキュラトリアル・プログラムは、春、

夏、秋の年3回、若手のキュレーターを対象に約3ヶ月の滞在機会を提供するプログラムで、各プログラムで約10人のキュレーターを受け入れている。

ベルリンに滞在するアーティストとの出会いをつくり、ファイナルプロジェクトとしてそれらのアーティストと共同で展覧会や出版物を制作することを促す。また、通常業務でキュレーターは他のキュレーターと共同作業をする機会が少ないため、ノード・センターでは、他の滞在キュレーターと共同作業をすることを重視している。そのために、滞在キュレーターが気軽にディスカッションやミーティングをできる環境を提供し、滞在キュレーターはノード・センターのオフィスにあるプロジェクト・スペースを拠点に活動する。

キュラトリアル・プログラムは12週間（週30時間）で、①オリエンテーション、②ベルリンのアート・シーンのリサーチ、③展覧会や出版物の企画・制作、④展覧会や出版物の発表の4つのワークプランで構成されている。

第1週はノード・センターの活動、滞在スケジュール、過去の事例を説明する「オリエンテーション」を行い、第2週から第4週の「ベルリンのアート・シーンのリサーチ」では、美術館やギャラリー、アートスペースの視察、アーティスト・イン・レジデンスのスタジオビジットを行う。ベルリンのキュンストラウハウス・ベターニエンとは、パートナーシップを形成し、定期的にスタジオビジットを行うほか、アーティストと滞在キュレーターの交流を促すイベントなども企画している。また、ファイナルプロジェクトの展覧会の出展アーティストを選考するために、ベルリンに在住もしくは滞在するアーティストの情報を収集し、滞在キュレーターとともに批評を行う「アーティスト・ポートフォリオ・レビュー」を実施している。

第5週から第9週の「展覧会や出版物の企画・制作」では、ファイナルプロジェクトの展覧会の企画・制作、出展アーティストの選考、出版物の企画・制作を中心に、展覧会や出版物の制作に必要なスキルを学ぶためのワークショップを実施している。展覧会の企画では、約2週間かけてブレインストーミングを行い、そこで出たアイデアを分析して一つのテーマにまとめる。また、そのテーマを掘り下げるためにリサーチを行い、例え

ノード・センターのオフィスのあるビル



ば、美術史家や科学者などに依頼して、出版物に寄稿してもらうこともある。

第10週から第12週の「展覧会や出版物の発表」では、展覧会や出版物の発表のための最終作業を行う。出版物は約500部印刷して、展覧会のオープニングで配布できるようにしている。展覧会会期中は、アーティスト・トークや、展覧会のテーマに関連するトーク・イベントを開催することもある。また、展覧会終了後には、滞在の成果のレビューやプログラムのフィードバックを行うミーティングをし、次のプログラムの改善に役立てている。

ノード・センターがレポート等の課題を滞在キュレーターに求めることはないが、滞在キュレーターがディスカッションのために自主的に課題をつくることもあるという。例えば、毎週3人の滞在キュレーターが特定のテーマについてリサーチし、その内容を翌週のミーティングでプレゼンテーションするというものである。

キュラトリアル・プログラムのワークプラン

日程	内容
第1週	① オリエンテーション <ul style="list-style-type: none"> ● ウェルカム・ミーティング ● ワークプラン・プレゼンテーション ● 過去の滞在キュレーターの活動事例のプレゼンテーション ● キュラトリアル・チャレンジ
第2～4週	② ベルリンのアート・シーンのリサーチ <ul style="list-style-type: none"> ● スタジオビジット ● アートスペース視察 ● 美術以外の文化施設の視察 ● アーティストとのランチ ● 滞在キュレーターの活動のプレゼンテーション ● アーティスト・ポートフォリオ・レビュー ● キュラトリアル・テキスト・レビュー ● ワークショップ: ファンドレイジング
第5～9週	③ 展覧会や出版物の企画・制作 <ul style="list-style-type: none"> ● 展覧会: 概要の考察 ● 展覧会: 出展アーティストの選考 ● 展覧会: 制作、予算管理

	<ul style="list-style-type: none"> ● 出版: 概要の考察 ● 美術関係者とのランチ ● ワークショップ: 展覧会の企画 ● ワークショップ: 出版物のデザイン ● ワークショップ: プロジェクト・マネジメント ● 展覧会や出版物のプロジェクト・レビュー
第10～12週	④ 展覧会や出版物の発表 <ul style="list-style-type: none"> ● 展覧会: 会場構成(空間デザイン) ● 展覧会: 作品輸送、展示作業 ● 展覧会: プレスリリースの作成、発送 ● 出版: 編集、印刷 ● 出版: プレゼンテーション ● 滞在のレビューとフィードバック

資料)「ノード・センター ウェブサイト」より抜粋

(2) キュレーターの募集・選考方法

ノード・センターは公募で滞在キュレーターを募集している。ノード・センターのウェブサイトで告知するほか、レズ・アルティスやコール・フォー・キュレーター (Call for Curators)、ウールー・ドット・オーアールジー (wooloo.org) などのウェブサイトの公募ガイドで告知している。また、ノード・センターの所有する約5,000件のメーリングリストや、フェイスブックも活用している。特に、フェイスブックでの告知が一番効果的だという。

年3回の春、夏、秋のプログラムでは秋のプログラムへの応募者が一番多く、これまでの公募では各プログラムで平均して約60人の応募があった。また、応募者の年齢は25歳から35歳が中心で、ベルリンのアート・シーンに魅力を感じ、そこで活動するアーティストや美術関係者とのネットワークを広げたいと考えている応募者が多く、将来、ベルリンを活動拠点にするためにベルリンのアート・シーンとのファーストコンタクトをつくりたいと希望する応募者も少なくない。

滞在キュレーターの条件は、美術、美術学、美術史学、キュラトリアル学、アーツ・マネジメント学、建築、デザイン、映画等を高等教育機関で専攻したか、これまでの活動で実践してきたかが求められる。高等教育機関を卒業したばかりの場合は、在学中にキュレーターとして美術館やギャラリーで研修した経験や、展覧会等の企画・制作をした実地経験が必要である。



ノード・センターのオフィスに隣接するプロジェクトスペース。ディスカッションやワークショップが行われる。

選考では、書類審査として一次選考を行う。書類選考では、高等教育機関での専攻や研究内容、キュレーターとしての活動実績を重視している。また、二次選考はインターネットでの通話サービスを提供するスカイプ(Skype)を通じて面接を行っている。面接では、ノード・センターで他の滞在キュレーターと共同作業をする意思があるかどうか、実験的な表現に関心があるのかなどを選考の参考にしている。例えば、キュレーターとしての活動実績が優れている応募者でも、プログラムで共同作業を希望しない場合は、採択しないという。

(3) プログラムの実績・過去の滞在者

ノード・センターは創設以来の約2年間で世界28ヶ国から56名のキュレーターを受け入れた実績がある。

ノード・センターに滞在したキュレーターの多くは、プログラム終了後も同期の滞在キュレーターやプログラムで出会ったアーティストと親密な関係を維持し、展覧会やプロジェクトを共同で実施するケースが多いという。そして、ノード・センターはそれらの活動をフェイスブック等でフォローアップするようにしている。

(4) オンラインプログラム

ノード・センターは滞在型のキュラトリアル・プログラムを応用し、特定のテーマに特化した4週間のオンラインプログラムを試験的に実施している。

オンラインプログラムでは、毎週、特定のテーマに関連するテキストと課題が配布され、ノード・センターのスタッフは受講者から提出されたレポートにフィードバックを行う。また、受講者はオンラインのレクチャーとインターネット上のビデオ会議(週2時間)に参加することが求められている。

過去に実施された「展覧会デザイン」は、空間と観客とのインタラクションをテーマに、展覧会の空間デザイン、プランニング、マネジメントを4週間で学習するコースで、参加費は145ユーロ(約18,850円)であった。

(5) その他の事業

ノード・センターはキュラトリアル・プログラムのスタジオオブジェクトや展覧会のために、ベルリンに在住もしくは滞在するアーティストの情報を収集し、滞在キュレータ

ーとともに批評を行う「アーティスト・ポートフォリオ・レビュー」を実施している。このレビューは各プログラムの2週目に実施し、この結果をもとにしてスタジオビジットの計画を立てている。

アーティストはノード・センターのホームページから個人の情報、活動実績、作品のコンセプトやイメージをアップロードすることができる。現在、毎月30程度のポートフォリオのアップロードがあるという。

3. 施設の構成と内容

ノード・センターはオフィスのあるビルにプロジェクト・スペースを有する。プロジェクト・スペースは10-15名がテーブルを囲むことができるスペースと、ワークショップや小作品を展示できるスペースで構成されている。

ノード・センターには宿泊施設がないため、滞在キュレーターはベルリン市内のアパート等を借りる必要がある。ベルリンに初めて滞在するキュレーターも多いため、ノード・センターではアパート等に関する情報提供を行っている。

4. 運営体制と事業収支

(1) 運営体制

ノード・センターはディレクターと2名のコーディネーターがフルタイムで働いている。その他に、1名のインターンと1名のアート・ディレクターがパートタイムで働いている。

- Perla MONTELONGO, Director
- Lauren REID, Coordinator
- Iohanna NICENBOIM, Coordinator
- Signe TVESKOV, Intern
- David MATOS, Director of Graphic Image

ディレクターのモンテロンゴ氏はメキシコ出身のアーティストで、キュレーターでもある。コーディネーターのローレン・リード(Lauren REID)はオーストラリア出身のインディペンデント・キュレーターで、オーストラリアのグラントピリエ・ギャラリーでコーディネーターをしていた経歴を持つ。また、もう一人のコーディネーターのガルシア氏はイスラエル出身のデザイナーで、イスラエル

ノード・センターのオフィスと、会議や展示が行われるプロジェクト・スペース。



美術館等で展覧会の空間デザインを担当していた。

そのほかに、展覧会の企画に関する専門家、展覧会の展示に関する専門家、著作権や知的所有権に関する専門家、ファンドレイジングに関する専門家の4名が非常勤の講師として定期的にプログラムで滞在キュレーターの指導を行う。

(2) パートナースhip

ノード・センターはキュンストラーハウス・ベターニエンとパートナーシップを形成し、定期的にスタジオビジットを行う。また、キュンストラーハウス・ベターニエン以外にもベルリンのいくつかのアーティスト・イン・レジデンスと積極的に交流し、滞在キュレーターのためのスタジオビジットをコーディネートする。さらに、ベルリン市内を拠点に活動するアーティストを支援する中間組織とパートナーシップを形成し、若手のアーティストやキュレーターに関する情報交換をしている。

ネットワーク組織、レズ・アルティスのメンバーシップにも加盟し、主にレズ・アルティスのメンバーシップ専用のフェイスブックを通じて、アーティスト・イン・レジデンスの運営に関する情報交換を活用している。レズ・アルティスのホームページでプログラムの募集の告知を行うが、レズ・アルティスに掲載されている情報を見て応募するキュレーターは少ないという。

(3) 事業収支

ノード・センターは法人格を有しないが法的主体性を有する合名会社(offene Handelsgesellschaft; OHG)の一つの民法組合(GbR)で、事業収支は公開していない。なお、ノード・センターは民法組合のため、公的機関から補助金や助成金を受けることができないという。

滞在キュレーターは12週間のプログラムの参加費として月770ユーロ(約10万円)を支払う必要がある。この参加費には、展覧会の制作費や出版物の印刷費も含まれている。「滞在キュレーターから徴収する費用の大部分はプログラムの事業費とオフィスの賃貸料です」と、モンテロンゴ氏は説明する。

5. 事業評価の実施状況

ノード・センターでは公式な事業評価は実施していないが、滞在キュレーターからフィードバックをもらうためのミーティングの場を持ち、滞在キュレーターの傾向やニーズに合わせ、プログラムの内容を再検討している。例えば、設立当初は、アカデミックな内容のカリキュラムであったが、アーティストとの出会いを希望する滞在キュレーターが多くいたため、スタジオビジットの機会を増やしたという。

また、過去に滞在キュレーター同士でのコミュニケーションの問題もあった。滞在キュレーターの中には自尊心や競争心が高く、グループで行動することや共同で作業することを受け入れないケースもあるため、現在はインターネットでの通話サービスを提供するスカイプを通じて応募者との面接を導入し、ノード・センターで共同作業ができるかどうかを見極めている。

6. 現在の課題と今後の方向性

ノード・センターの主な課題は経営面での持続性で、ノード・センターは民法組合のため、公的機関から補助金や助成金を受けることができないという課題がある。そのため、NPOに相当する民間の非営利団体、公益有限会社の法人格を取得したいと考えている。

また、2011年にキュラトリアル・プログラムをスタートし、現在3年目であるが、海外の国や地域に十分に広報ができていないという課題がある。例えば、過去に日本からの応募は一人もなく、応募者の国や地域に偏りがある。

現在のプログラムは滞在期間の3ヶ月でアーティストと出会い、展覧会の準備からオープニングまで完結しなければいけないため、展覧会に参加するアーティストの負担が大きいことも課題である。ノード・センターでは、滞在キュレーターの一般的なビザの有効期限を考慮して3ヶ月と設定しているが、将来的には6ヶ月のプログラムも実施したいと考えている。そのために、ビザの取得を支援できるような組織にしたいと考えている。



C. フランス

1. シテ・アンテルナショナル・デ・ザール | Cité internationale des Arts
2. レコレ・国際受入・交流センター | Centre international d'accueil et d'échange des Récollets
3. レ・シュブジスタンス | Les Subsistances
4. リヨン・ビエンナーレ | La Biennale de Lyon

写真: レ・シュブジスタンス | Les Subsistances (元修道院と軍施設を舞台芸術の創造拠点に改修)
現地調査協力: 野口沢子 (美術史家、在パリ)
1ユーロ=130円で換算

1. シテ・アンテルナショナル・デ・ザール | Cité internationale des Arts

面会日 : 2013年2月28日 (木) 17:00-18:30

面会者 : Jean-Yves LANGLAIS (Directeur Général)

URL: <http://www.citedesartsparis.net/>

1. 運営機関の概要

シテ・アンテルナショナル・デ・ザール (以下「シテ・デ・ザール」) は約310戸のスタジオ兼住居 (以下「スタジオ」と略)、展示スペース、コンサートホールを有し、世界一の規模のアーティスト・イン・レジデンスとみなされている。そのうち約280のスタジオはパリの中心サン＝ルイ島を見張らせるセーヌ河畔に建つ11棟に、30余りはモンマルトル地区のノヴリン通りの広い庭園内に位置し、どちらも落ち着いた環境にある。

(1) 設立趣旨・経緯

シテ・デ・ザールの運営財団の設立は1957年。レジデンスの開始は1965年で、すでに半世紀近い歴史がある。構想はさらに1938年にさかのぼる。フィンランドの篤志家が同胞のアーティストがパリで活動できるスタジオを提供したいと考えたのが始まりだとされる。

戦争で一旦埋もれてしまったそのアイデアは戦後に復活する。その背景には、フランスに誇りを取り戻させたいというドゴール将軍の思いや、レジスタンと共にフランスを開放に導いたフランス共産党が若者と文化に関心を持っていたことがあった。そんな中、1947年に戦災国の仏大使館の状況を調査するために世界各国に派遣されていた建築家フェリックス・ブリュノー (Félix BRUNAU) が、ヘルシンキでパリにスタジオを提供したいと考えていたグループの一人と巡り会ったことで、構想が具体化に向けて動き出すことになった。

「ブリュノーは各国の多くのアーティストがフランスを求める気持ち、フランスへの希求を持っていることを知ってパリに戻ってきました。それは、また、かつての敵国との和解が文化を仲立ちとして始まる、という時期でもあったのです」とエグゼクティブ・ディレクターのジャン＝イヴ・ラングレ (Jean-Yves LANGLAIS) は説明する。

フィンランドのアーティスト、スネルマン (Snellman) や国の美術局長だったポール・レオン (Paul LEON) の協力を得て、ブリュノーは「パリの中心部で外国人アーティストが最良の条件で芸術活動ができる」レジデンスの設立を目指し、パリ市や国の支援を得た。こうして1950年に構想が具体化し始めるが、戦争で疲弊した状況の中、事業の開始には長い時間が必要だった。

パリ市はマレ地区の一等地16,000㎡を2060年までの貸与という形で提供し、フランス政府は200万フランの特別予算を提供した。しかし両者には建築資金を提供する余裕がなかったため、財団形式にすることが決まり、国家評議会は1957年にシテ・デ・ザールの運営母体を公益財団と認め、1960年には財務省が通常の財団に課す税金を免除した。

最初のスタジオ建設の建築家が選考される過程で、フランスや諸外国がサブスクリバラー (当時は設立者とよばれていた) として参加しやすい法的形態が検討された。その結果、シテ・デ・ザール財団は建築資金の58%をサブスクリバラーから調達することが可能となった。借入金もあったが、3件の遺贈と補助金によって資金が揃い、1962年に工事が始まった。3年後の1965年7月、待ちかねていた5名の画家と2名の音楽家が完成前の建物を訪れたという。1966年1月、シテ・デ・ザールは136のスタジオに37ヶ国からのアーティストを迎え入れ、正式にスタートした。

それ以降もシテ・デ・ザールは次のように拡大を続けている。

- 1969-1970年: オーディトリウム、展覧会場、版画の共同スタジオ
- 1971年: 15のスタジオ (パリ市から新たに提供された敷地内の古い建物を改修)
- 1972年: モンマルトルへの拡張、30のスタジオ (パリ市からの提供)
- 1973年: リトグラフ・シルクスクリーン工房、音楽練習室、写真ラボ等
- 1987-1989年: 60のスタジオ、ダンス室など (2棟の竣工)

1995年までにさらに一棟の建物が新設された。オープン50周年を2年後に控えたシテ・デ・ザールは、既に1万5,000名以上のアーティストを受け入れている。

(2) ミッション

シテ・デ・ザールは二つの使命を掲げている。アーティストの才能の発現を助け、フランスのアートシーンにおける創造活動の交流を促進するという条件のもとで、あらゆる分野の世界中のアーティストを受け入れる



シテ・デ・ザールの本館の外観
(マレ地区)

こと。そしてその活動によって、パリ市の芸術活動を活性化・多様化させ、多様な文化間の対話に参加すること、である。アーティストと受入地のパリの両方に対して、有益な成果をもたらすことを目指している。

2. プログラムの内容と実績

シテ・デ・ザールは年間1,100人ものアーティストを受け入れているが、大部分の入居者の選考は2つの方法で行なわれている。ひとつはスタジオを保有するサブスライバー(出資者・寄贈者)経由、もうひとつはシテ・デ・ザールへの直接の応募である。

(1) サブスライバーによるプログラム

約310のスタジオの約8割はサブスライバーと呼ばれるフランス及び海外の政府機関、公立や私立の文化機関、大学などの教育機関が所有しており、各機関が推薦したアーティストをシテ・デ・ザールが承認して入居する仕組みになっている。サブスライバーは、国別では、フランスが最多で、外務省や文化省、パリ、リヨン、ニース、トゥールーズなどの自治体、財団、学術機関、出版社など27機関が107のスタジオを保有している。これは全体の3分の1強にあたる。

3部屋以上のスタジオを保有する国々は次のとおりで、日本はスタジオの数では4番目。

- 欧州:ドイツ20、スイス17、フィンランド9、スウェーデン／ノルウェー5、ブルガリア3
- 北米:米国5、カナダ4
- アジア・オセアニア:中国16、日本13、韓国5、オーストラリア8
- アフリカ・中東:モロッコ4、南アフリカ／チュニジア3、イラン4

これらのスタジオへの入居は、各サブスライバーが候補者を選考し、シテ・デ・ザールの財団理事会に推薦する。入居は財団の審査委員会の承認を得て決定するが、財団は推薦が不適当な場合、拒否する権利がある。

① 日本のサブスライバーの概要、プログラムの例

日本の13のスタジオを保有するのは、大学や音楽学校(武蔵野美術大学、横浜フェリス学園、創形美術大学、名古屋芸術大学、名古屋音楽学校、女子美術大学)、フランス語検定などを実施しているAPEF(フランス語教育振興協会)の、合わせて7機関である。大学や音楽学校の場合、対象は教員や学生、卒業生で、学内選考が行なわれるが、条件はそれぞれ異なり、期間も6ヶ月、1年などまちまちである。

例えば武蔵野美術大学は研究費を支給しており、名古屋音楽学校はパリ市内にあるエコール・ノルマル音楽院への留学のための宿舍という位置づけで4部屋を確保している。一方2つのスタジオを有するAPEFは、1年間(9月1日ー翌年8月末日)に2人(音楽1、美術1)を公募で選び、シテ・デ・ザールの理事会に推薦している。資金的な援助はなく、1人用月額410ユーロ(約5万3,000円)、2人用月額525ユーロ(約6万8,000円)の維持費、その他ピアノレンタル料金などは入居者本人がシテ・デ・ザールに支払う。

② アンスティチュ・フランセの公募プログラム

フランスのサブスライバーの中で公募をしている例としては、アンスティチュ・フランセ¹がある。10のスタジオを保有し、年間40人を受け入れている。具体的なプロジェクトのためにフランス滞在を希望する外国人向けのプログラムである。

対象分野は美術(写真、メディアアート、デザイン、展覧会コミッショナー(キュレーター)、研究、グラフィックアート等を含む)、舞台芸術(演劇、ダンス、サーカス、大道芸、演出、現代音楽&実験音楽、ポップス、一般的な現在の音楽等)のほか、文学、映画、クロスオーバープロジェクト(舞台美術・研究などのクロスオーバーされた分野)、その他の分野(建築、都市景観、デジタルアート、美術工芸、モード等)と幅広い。応募者の条件は、プロとして活動をしていること、フランス語か英語を

¹ フランスの国際交流基金に相当する AFAA が数年前に CULTURES FRANCEとなり、一昨年から法人化しInstitut français (アンスティチュ・フランセ)という名称になった。フランス大使館文化部との統合により海外との文化交流に取り組むほか、各国でフランス語教室や文化講座を展開している。在日施設としては、長らく日仏学院として親しまれてきた東京・横浜・関西・九州の日仏学院(日本名も現在はアンスティチュ・フランセ)、大阪のアリアンス・フランセーズがある。

シテ・デ・ザールの分館
(マレ地区)



話せること、それまでの活動実績を証明すること、レジデンス内でのマネージメントを自立して行えること、滞在期間にプロ活動に束縛されないことで、年齢制限はない。

外国のアーティストが、パリで創作活動や研究などのプロジェクトを発展させることを目的としているため、選考のポイントは候補者の活動歴に加え、プロジェクトそのものの質の高さ、パリに滞在する必要性、プロジェクトの進め方であり、フランスでの活動に対する協力機関がすでに決まっていることが特に重視される。アンスティチュ・フランセのディレクターが主宰する諮問委員会によって、応募書類が審査される。滞在期間は3ヶ月。約40㎡のスタジオ(キッチン、バスルーム付き)の維持費は、アンスティチュ・フランセの負担で、その他の費用や支出は、滞在アーティストが支払う。

応募書類の送付先は現地のフランス大使館やアンスティチュ・フランセ、アリアンス・フランセーズである。そこでプロジェクトが承認された後、書類はパリのアンスティチュ・フランセへ送られる。

2013年の最初の四半期を例にとると、ブラジル1、アイルランド1、スペイン2、スウェーデン2、パラグアイ1、ウラグワイ1、ウクライナ1、フィリピン1の10名のアーティストが受け入れられた。分野はダンス、ストリートアート、美術、建築、写真、演劇、映画など多彩である。

(2) 直接応募によるプログラム

滞在アーティストの2-3割程度がこの方法で入居する。サブスクライバーの保有するスタジオ(全体の8割)には多少の空きがあるため、実際には全体の3割程度のスタジオが公募で選考されたアーティストに提供されている。毎回受け入れ数の約10倍の応募があり、分野ごとに年2回、春と秋に審査委員会が開かれる。

① 募集・選考方法、応募アーティストの条件

シテ・デ・ザールに直接応募できるのは、美術部門と音楽部門の二分野だが、前者には文筆、シナリオ、デザイン、絵画、彫刻、ビデオ、写真、マルチメディア及びパフォーマンスも含まれ、後者は作曲、楽器演奏、声楽で、多岐にわたる。プロのアーティストであることが条件であるが、例外的に修士2年以上の学生を迎える

こともある。その場合、応募者は学籍簿のほか、何通かの推薦状を提出しなければならない。滞在期間は2ヶ月から1年である。

審査委員会は二部門別々に設けられ、パリ市、文化省、外務省の担当者に加え、国立美術学校、FRAC(地方現代美術基金)、展覧会コミッショナー、国立音楽院、IRCAM(フランス国立音響音楽研究所)などの専門家によって構成されている。常に新しい視線が送り込めるよう、審査委員の3分の1は毎回交代するが、それはシテ・デ・ザールをひとりでも多くの専門家に知ってもらうためでもある。選考で最も重視されるポイントは芸術的プロジェクトの内容と動機である。プロジェクトの内容が同程度の場合は、遠い国のアーティストが優先されるとのことであった。

応募条件に国籍や年齢の制限はない。フランス人の滞在アーティストも必要だ、とラングレ氏は考えている。パリへ着いたばかりの外国人アーティストにパリのアートシーンの情報を伝え、外国人同士が固まってしまうことを避けるためである。一方、フランス人アーティストは外国の情報を得ることができ、双方向の交流に繋がっている。また年齢に関しても柔軟に対応している。例えば、50歳代の米国の女性アーティストを受け入れることによって、彼女は若い世代に北米のアートシーンの動向やキャリアの積み方を伝え、彼女も世代の違う人からの刺激を受けることができた、という。

(3) その他の入居方法

実は、アーティストの入居は、サブスクライバーと直接応募の2つだけには限らない。ラングレ氏によれば、現在、イランのアーティストには4つの方法があるという。上記の2つに加え政治的亡命者の枠があり、さらにテヘランの画廊とパリの画廊2軒、在イランのフランス大使館の3者が共同で取り組むレジデンスプログラムの話がまとまりつつあるそう。ラングレ氏はこのような「扉」を今後もどんどん増やす意向である。

他にも、パリ市と東京が2007年から2010年に共同で行ったデジタルアートのレジデンスプログラムもある。トーキョーワンダーサイトとシテ・デ・ザール(パリ市の保有するスタジオの内5つを使用)の共同プロジェクトとし



本館のスタジオの入口。各スタジオにはサブスクライバーの表札がある。写真右は、英国のロイヤル・カレッジ・オブ・アート。

て、日仏それぞれ3、4名のアーティストが双方の国でレジデンスと制作を行った。さらにパリでは、パリ郊外のデジタルアート専門のアートセンター「ル・キューブ (Le Cube)」とパリ市のアートセンター「サン・キャトル (Cent quatre / 104)」が制作と発表の場を提供した。

300を超えるスタジオを持つシテ・デ・ザールには、他にも数多くのプログラムがあり、多彩な可能性がある。

(4) 支援内容

シテ・デ・ザールでは、スタジオの大きさに応じて、滞在アーティストが毎月一定の費用を支払うが、フランスの一般的なスタジオや住居の家賃とは比べものにならないほど廉価であり、そのことがシテ・デ・ザールの最大の支援となっている。また入居者には、顔写真付きのミュージアム・カードが支給され、美術館が無料もしくは割引で入館できる。

それ以外の支援には、決まった形はない。ラングレ氏は「すべての人に、同じように支援する、という民主的な方法はアーティストへの対応方法としては適切とは言えません。一人一人の要望とプロジェクトを考えて、パリだけでなく、フランス中で活動できるように支援したい」と語る。

最近では、フランス語を話せないオーストラリアの写真家に対し、ブルターニュ地方での撮影がスムーズに進むように、シテ・デ・ザールが間に入って行政担当や電力会社に連絡して事前に撮影許可を取った、という例がある。また、1年間の滞在を終えたアーティストがパリ市で継続的に制作活動をするためにスタジオやアパートを借りる際には、シテ・デ・ザールと繋がり深いアート・コレクター協会が契約保証人になる、という支援策も検討している。一定の収入があることを示すことができないアーティストには、賃貸契約を結ぶのは容易ではないためである。しかしこれも一律にすべてのアーティストを対象としているわけではない。

子ども連れのアーティストには就学の手助けもしている。シテ・デ・ザールでは大人は月120ユーロ(約15,600円)、3-7歳の子どもは100ユーロ(約13,000円、3歳未満は無料)の追加費用を支払うことで、大人一人、幼い子ども1人の同伴滞在が可能である。なお、あらかじめ

受け付けに届け出れば短期滞在も可能で、1週間までは150ユーロ(約19,500円)、1ヶ月200ユーロ(約26,000円)である。

(5) プログラムの実績・過去の滞在者

前述の通り、これまでの滞在者数は1万5,000名を超える。著名なアーティストとしては、美術部門では米国の写真家ジョエル＝ピーター・ウィトキン、アルジェリア出身のアデル・アブデスメッドなどが、音楽では米国出身で古楽器アンサンブルを創設したウィリアム・クリステイ、中堅の弦楽器奏者のルノー・カピュソンとゴティエ・カピュソンなどがいる。セルジュ・ゲンズブールも滞在アーティストの一人である。

過去の日本の滞在者は、2010年までに120名を超えている。38名が音楽部門(ピアニストが過半数を占める)、82名が美術部門(画家36名、写真家10名、マルチメディアやビデオ6名など)だった。

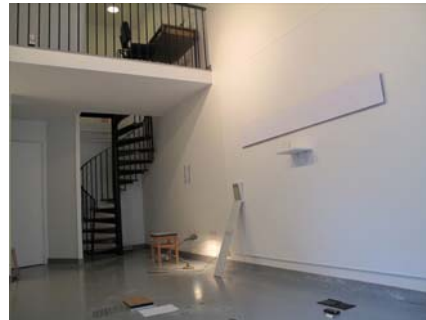
2013年3月時点の滞在者数は305名。68%が美術部門、24%が音楽部門のアーティストである。その他ダンス、パフォーマンス、美術史・音楽史、作家、展覧会コミッショナーなどがそれぞれ3-5名ずつ含まれる。日本人の滞在者数は14名。半数が音楽(ピアノ6、ホルン1)、半数が美術部門(絵画3、インスタレーション1、デザイン2、写真1)である。

(6) その他のプログラム

滞在中に、アーティストが義務として行う必要のある活動は一切ないが、アーティストが望めば、オープンスタジオ、展覧会やコンサートの開催も可能である。オープンスタジオは個人的に行う場合と20名前後が共同で同時に実施する場合があり、ほぼ毎日どこかのスタジオが公開されている。

施設内の地下1階の展覧スペースは、滞在アーティストが予約し有料で借りることができる。オーディトリウム(128席)では毎週火曜日にシテ・デ・ザール主催の公演が行われており、音楽家やパフォーマー、ダンサーは、希望すれば参加できるほか、PP(プレザンエプロジェ)と名付けられた成果発表や他の滞在アーティストや一般の観客との交流プログラムを滞在アーティストが企画することもできる。

シテ・デ・ザールのスタジオ兼住居。1Fに作品制作のためのスペースがあり、2Fにベッドルームがある。



また、外部の文化施設の展覧会やコンサートに滞在中のアーティストが参加する場合もある。例えば、2013年3月にパレ・ド・トーキョーで開催されるパリ国立装飾美術学校出身者8人のグループ展には、レジデンス中の2名のアーティストが参加する。

これらの開催スケジュールは、シテ・デ・ザールのウェブサイト に 詳細な情報が随時掲載され、滞在アーティストにも外部の人にも公表されている。また、かつての滞在アーティストだった若いアーティストの展覧会やフェスティバルへの参加などの情報も、このウェブサイト に 掲載され、情報発信が行われている。

3. 施設の構成と内容

(1) スタジオ

すべてのスタジオは住居を兼ね、広い仕事スペースと、キッチンコーナー（電気コンロと冷蔵庫、食器類付き）、バスルームを備え、ベッドの寝具やシーツも完備されている。シーツは2週間に1回交換されるが、タオルや食器用の布巾、洗剤などは滞在者が用意し、清掃も本人が行う。施設内にコインランドリー（有料）がある。

① マレ地区のスタジオの特長と負担金

広さは20－40㎡で、負担金は月額415－475ユーロ（約5万4,000円－6万2,000円）。同伴者が滞在する場合は120ユーロが加算される。インターネットも接続可能。見学したスタジオは、彫刻家用で、一階がスタジオ、中二階に寝室があった。床や壁に取り付けられたパネルは制作用で、傷つけたり汚したりしても問題ない。

② モンマルトル地区のスタジオ

マレ地区よりも広く、負担金もそれに比例して490－622ユーロ（約6万4,000円－8万円）と、高めである。同伴者の加算は同額。電話とインターネット設備はないが、3ヶ月以上の滞在の場合は契約できる場合がある。

(2) スタジオ以外の設備

共同スタジオや講堂、リハーサルルームなどはすべてマレ地区の敷地内にある。

① 共同スタジオ

共同スタジオの使用は、プロ活動をしているアーティストに限られ、活動歴を記した履歴書と、10点程度の作品の写真を提出し、承認を得た上で予約をする。安価だが使用料（月80ユーロ）が必要。プレス機や、現像機、窯、バットなどの器具、用具を備えている。版画工房、リトグラフ工房、シルクスクリーン工房には、エッチング用のプレス機、紫外線照射装置など必要な備品が揃っており、3ヶ月ごとに予約を受け付けている。セラミックの共同スタジオには、最高980度になる230リットルの窯が設置され、1日単位で予約が可能（1回の焼成につき30ユーロ）。写真工房には、白黒の引き延ばし機、カラーの引き延ばし機や備品があり、こちらも1日単位（朝9時－夜10時まで、30ユーロ）で予約できる。

② 講堂

エドモン・ミシュレと名付けられたこのホールは大変音響がよく、滞在アーティストが出演する無料のコンサートが頻繁に開かれ、一般の人々との出会いの場として機能している。また、パートナー機関と連携した講演会やブックフェアに関連した書籍や出版イベントも開かれる。

講堂は討議会、集会、講演会やプライベートコンサートにも適した広さで、一般の人々も借りることが可能。床面積300㎡、舞台30㎡、128席で、ピアノ1台（ベーゼンドルファー社のセミ・グランドピアノ）とパイプオルガン（A.マシエ社、手鍵盤2段56音、足鍵盤30音、16ストップ）1台が備えられている。

③ リハーサルスタジオ、練習室

グランドピアノやアップライトピアノを備えた練習用のスタジオが9部屋設けられている。いずれも大人のプロ奏者、及び音楽院の第3課程（大学院後期）以降の生徒、音楽学校の生徒を対象としている。毎日9時から24時まで利用可能。利用には予約が必要で有料である。

公演も可能なリハーサルスタジオは2つあり、100㎡（定員49人）と70㎡（定員38人）で、いずれもシンメルの小型グランドピアノが備えられている。その他、35㎡のスタジオ3部屋と12㎡のスタジオ4部屋にはアップライトピアノが設置されている。

4. 運営体制と事業収入

(1) 運営組織

運営は、公益財団シテ・アンテルナショナル・デ・ザールが行なっている。会長はアンドレ・ラルキエ。理事会には、内務省、外務省、文化省、パリ市議会、県議会、美術学術院、その他の代表もメンバーとして加わっている。

運営スタッフは、ラングレ氏以下約45名で主なポストは次のとおり(2010年時点のもので、現在は若干の変更あり)。その他に、清掃スタッフ、電気工、配管工、ペンキ職人がおり、すべてこの財団の正規職員である。

- エグゼクティブ・ディレクター
- 管理・財政 担当ディレクター
- 技術・安全管理 ディレクター
- サブスクライバー担当責任者
- 受入審査委員会担当者
- 文化と広報担当者
- 文化イベント担当者
- リハーサルスタジオ予約担当者
- ウェブマスター
- メンテナンス、工事責任者
- 受付責任者
- 会計

(2) パートナースhip

シテ・デ・ザール財団のパートナー機関は、パリ市、フランス文化省、フランス外務省、美術アカデミーなど設立の経緯から関係の深い公的機関である。

(3) 事業収支

シテ・デ・ザールの年間予算は約400万ユーロ(約5億2,000万円)。収入は、アーティストが毎月支払う維持費と、本館の地下駐車場、1階の銀行や額縁商などのテナント料、及び助成金や寄付金であり、2008-2009年の自己収入は、208万1,492ユーロ(約2億7,000万円)で予算全体の6割強を占めた。自己収入の内訳はスタジオ(ビジター料を含む)が142万1,381ユーロ(約1億8,500万円)、テナント料が66万111ユーロ(約8,000万円)、アソシエーション4万ユーロ/駐車場を含む店舗62万

111ユーロ)で、パリ市からの補助金は70万ユーロ(約9,100万円)であった(その他の財源は不明)。

収支差額の赤字は、パリ市の監査によれば2009年以前には毎年64万ユーロ(約8,320万円)程度にのぼっていた。2010年に現職についたラングレ氏は、人件費の効率化などで「今は健全財政に建て直した」と話す。

なお、シテ・デ・ザール全体としての事業評価は、特に行なわれていない。

5. 現在の課題と今後の方向性

アーティスト・イン・レジデンスにとって何よりも大切なのはアーティストとそのプロジェクトだとラングレ氏は考えている。全体の方向性も、アーティストとそのプロジェクトを中心に据えて検討したいという。選考に関して、現在いくつか設けられた受け入れの扉は今後も増やしていく方針である。「アーティストは他者と違うということ、独自性が特に求められる人々です。そうした人々の受け入れにも多様性があるべきです。均一な方法を目指すのは間違った方向だと思います。受け入れにしても支援にしても、アーティストと話し合う中で、各人に最適な方法を考えていきたい」とラングレ氏は強調する。

世代のギャップを埋めることも課題の一つだという。「現在のアーティストは、このレジデンス施設が建設された時、そしてサブスクライバー達がスタジオを寄贈してくれた時のアーティストの概念とは、違ってきています。例えば、彫刻家という、以前は石や金属を素材として使う美術家を考えましたが、今はそれだけではありません。支援機関にもそこをわかってもらう必要があります。通常はゲームのように思えばいいけれども、闘わなければならない時もあります。このゲームは絶えず続けていかなければならなりません」とラングレ氏は語る。

2010年にエグゼクティブ・ディレクターとなったラングレ氏は、現在までの2年間を収支を立て直すために努めた。「かつて世界の多くのアーティストがフランスを必要とし、それを希求したことが、シテ・デ・ザールの始まりでした。今はシテ・デ・ザールが世界を希求している、と私は考えています」と彼は語る。



滞在アーティストへのインタビュー

面会者：シャルベル＝ジョゼフ・H・ボトゥロス (Charbel-Joseph H. BOUTROS、以下「CB」)、日本人写真家(以下「JP」)、ジョフロワ・ドゥルーアン (Geoffroy DROUIN、以下「GD」)

1. 略歴、活動実績

CB: 1981年レバノン生まれ、インスタレーション(コンセプチュアル・アート)作家。シテ・デ・ザールの滞在期間は2013年1月3日－3月27日。

コンセプチュアル・アートを専門とするが、本人の言葉では、「一種ロマチックな、もっと個人的な問題、エモーション、弱さを含んだ作品で、中心的な観念は『不在』。つまりなくなったものとか、欠落したものとか…」をテーマとしている。

JP: 北海道生まれ、写真家。シテ・デ・ザールの滞在期間は 2011年9月2日－2013年8月27日。
自然を題材にして、白黒の写真作品を制作している。制作の技法として銀塩写真を用いており、撮影のほかにフィルム現像や暗室でのプリント作業も行う。

GD: 1970年パリ生まれ、作曲家。パリ国立高等音楽院を卒業の後、IRCAMでも作曲やコンピュータ音楽を学ぶ。社会科学高等研究院の博士号を取得。
シテ・デ・ザールの滞在期間は2012年10月15日－2013年9月27日。

2. アーティスト・イン・レジデンスの経験、参加の動機

CB: パリでのプロジェクト(『フランスの都市の夜』)を行うため、パリに滞在することが不可欠だった。シテ・デ・ザールの他にはあまり思いつかなかった。
他にはブラジル、サンパウロの FAAP artistic residence に滞在した経験がある。このあとオランダの Jan Van Eyck Academie(マーストリヒト)に滞在の予定。それぞれのアーティスト・イン・レジデンスにはそれぞれの良さがあると思う。

JP: 撮影のために海外を旅行したことはあったが、海外で生活をしたことはなく、自分の視野と活動の場を広げるために海外に拠点を置きたいと思って

いた。以前パリで個展を開催したことをきっかけに滞在したいと思っていたが、アーティスト活動だけで生活していくのは難しい。住宅のことを調べていたときに、このレジデンスの存在を知った。広いスタジオを安く借りられるし、施設も整っていて立地条件も良い。何よりも私の制作に不可欠な暗室施設があったので、作品をつくるにはとても都合が良く、パリに来てすぐに制作を開始することができと思った。

最初は日本から直接応募してパリ市のスタジオに滞在していた。1年が過ぎるときに、もう少しパリで経験を積みたいと思ったので、日本のAPEF(フランス語教育振興協会)に応募し採択され、部屋を変わって今のスタジオに来た。両方ともマレ地区のスタジオ。

シテ・デ・ザールのことは、東京在住中にインターネットで調べたり、パリの友人からいくつかレジデンスの情報をもらったりした。その中でここに住み海外活動をスタートさせたいと思い応募した。
パリ市内ではあと2件くらい調べた。ブラジル人の友人が住んでいたのでレコレにも行ったが、期間が3ヶ月で制作をするには少し短いと思った。あとはサン・キャトル。他にもフランス全国にあるようだが、詳しくはまだ調べていない。

RD: ここは3度目のレジデンス。最初は、ロワイヨモンという大修道院での滞在だった。パリから近いが交通が不便なせいで静かでよいところだった。そこは、世界中から15名の若い作曲家を集めて2名の大作曲家と一緒にレジデントし、最後にコンサートを行う、という作曲家向けの3週間のレジデンスプログラムがある。食事すべて用意され、自分の個室もあって快適だった。

2つ目はローマのヴィラ・メディチで、一昨年从去年まで18ヶ月間滞在した。そもそものはルイ14世が作った歴史の古い制度で、音楽家、文学者、美術家、映像作家、美術史家など多くの分野の人が集まっていて、素晴らしい経験だった。

ヴィラ・メディチはローマで最も素晴らしい建物のひとつだろう。私にとって、静謐で美しい場所とい

うのはとても重要なこと。また街も重要な要素だ。教会や美術館に行くことや道を歩くことなど、芸術的な環境から多くのものが得られる。ローマ・バロックを再発見した。

3. 創作活動の支援

CB: 私のように、アイデアから創作を発展させるアーティストの場合、例えば大理石を初めて扱う時には方法がわからないため、技術的サポート、技術者の助けが必要なことがある。そういう支援をしてくれるアーティスト・イン・レジデンスがいい。

シテ・デ・ザールは、スタジオが素晴らしい。今までの経験でも一番素晴らしいスタジオだと思う。スタジオは、単なる制作の場でなく、もっと本質的なもの。

作品には展示待ちをしてストックされている状態と、展覧会場で展示されている状態の2つの状態があると思うが、スタジオにあるときにはそのどちらでもない3つ目の状態。

いわば、スタジオは作品と暮らしている場所だから私にとってこのスペースは非常に大事。そういう意味で、シテ・デ・ザールは素晴らしいスペースを与えてくれている。ここにある作品はすべてこのスタジオで作ったもので、展示はバイルートやリヨン、サンパウロで予定している。もっともこの作品全てを展示するわけではない。先ほどの‘中間の場所’、というところと言いたかったのは、作品の中には、展示予定がなくても、作らないではいられないものもある、ということ。

(「仕事場というより、ギャラリーのように美しくディスプレイされていますね」という問いを受けて)物をどうオーガナイズするか、ということだと思う。私にとっては、見せるスペースと生きるスペースの境界がないのかもしれない。

JP: パリまでの渡航費・生活費等は自己負担だが、シテ・デ・ザールはよいところばかり(笑)。まず立地も治安も良いので活動しやすい。パリで一人暮らしをしている友だちに聞くと、日本とは違いこちらの生活は不自由も多く大変そうだが、ここは管理がしっかりしているので不便を感じない。受付の方

もいるし、部屋でのトラブルや水漏れなどにもすぐに対処してもらえる。

嬉しいのはシテ・デ・ザールが作ってくれるカード。それがあればオルセーなどの美術館に無料や割引料金で入れる。アーティストの身分証明書のようなものだ。欧州独自の芸術文化を感じるためにも、このようなシステムは外国人アーティストにとってとてもありがたい。

(ビザについて)シテ・デ・ザールへの応募とビザ申請は同時並行で進め、3年間のコンペタンス・エ・タランのビザを取得することができた。それがあれば、労働許可もついているのでフランスのギャラリーとも仕事ができる。そして、シテ・デ・ザールに受かり、それなら生活できるかなと思いパリに滞在することにした。

外部のアーティストやギャラリー、美術館の人たちと交流できると嬉しい。毎月一回パーティーがあって滞在アーティストとは交流できるが、外部の人たちとは中々交流のチャンスがない。オープンスタジオなどの機会もあり、全体で呼びかけて有志が20名くらい参加したり、個人でもできるが、自分の知り合いだけでは限界がある。

キャリアアップに対するサポートは、難しいと思う。私の場合、今のパリのギャラリーには日本に居た頃からお世話になっていた。シテ・デ・ザールの中のギャラリーの企画展示や、アーティスト自身がやる仕組みのコンサートホール前の廊下での展示は、外部とつながるのは難しく思う。その点をサポートしてくれたらと思う。

他の滞在者と交流を望むか、作品制作だけに集中するかはアーティストによってまちまち。私は集中するほうだ。シテ・デ・ザールで出会って、一緒に制作する人もいる。私も一度、ニューヨークから来た日本人アーティストと作品を作ったことがある。残念ながらフランス人との交流は今のところあまりない。

GD: ヴィラ・メディチ滞在中には、ローマ市内のファルネーゼ宮にあるフランス大使館の文化アタッシュェが、イタリアのいろいろな都市への訪問に便宜を

はかってくださり、フィレンツェ、ヴェネチアなどで多くのイタリア人の音楽家に会うことができた。自分一人ではとてもできなかったと思う。その後も彼らとは連絡を取り合って演奏会などの仕事を一緒にしている。滞在アーティストに専門的なネットワークを与えることはとても大切。外国に着いたばかりの人には知り合いもいないし、作品の制作を始めると、自分からは積極的なネットワーク作りができない。

もうひとつ、ヴィラ・メディチでよかったのはフェローシップ(研究奨学金)がもらえること。大きな金額ではないが十分な額だった。生まれて初めて財政的な心配から開放され、住居と仕事場が一緒になった場所で創作に集中できた。また、義務も束縛もないので好きな仕事だけをしていればよい。そこでは今までになく多くの作曲をすることが可能だった。

そして、様々な分野の人が滞在しているので、他の分野の人々との交流もあり、自分の書いた音楽をもとに、美術家が女優とパフォーマンスをするというような経験もした。

ローマのヴィラ・メディチの素晴らしい経験のあと、パリへ戻ってくるのは大変心配だった。静かで集中できる環境が得られるだろうか、と。今、私のスタジオのあるモンマルトルは、パリでもはずれにあり、静かで、ヴィラ・メディチと同じくらいよい環境だ。部屋は快適な広いスペースでピアノもあり、コンピュータもあり、仕事もはかどる。期待したとおりの完璧な環境だ。ただひとつの違うのは、金銭的な面。現在は少し前までここに滞在していたドイツの音楽家とプロジェクトを進行中。彼女はフランスのラジオ局から委嘱を受けていて、声とエレクトロニックの作品を共同で作っている。結構忙しいが、快調だ。

一般的に、レジデンスで課題があるとすると、子どもの同伴ではないかと思う。アーティストの年齢制限は変化しており、昔よりも年齢は高くなっている。家族がいる場合もある。ヴィラ・メディチでも滞在アーティストの平均年齢は38とか39歳で、子どもがたくさんいた。家族がいると、例えば6ヶ月

間米国や日本に行くとなったら、子どもはどうしようか、という問題になる。スペース、教育、学校、などの対応が課題になるだろう。

4. 日本のアーティスト・イン・レジデンスについて

CB: 詳細は知らないが、トーキョーワンダーサイトというのを聞いたことがある。

JP: 日本のレジデンスに関して調べたことはないが、ここに入居したことで、興味はある。日本でも他の国でも同様のチャンスを見つけられたらいいと思う。海外での日本人アーティストに対する支援にはとても興味がある。海外に滞在する日本人を対象とした日本のレジデンスがあったら、とてもいいと思う。

GD: 作曲家や音楽家のためのレジデンスは、世界的にどんどん減ってきている。例えば、日本のヴィラ九条山も今は閉じているし、米国やドイツにもあるが数は少ない。また、年齢制限の問題もある。例えば35歳以下とかに設定されて、それ以上だともう応募できない。

日本のアーティスト・イン・レジデンスのことはあまり知らない。作曲家のためのレジデンスプログラムがあれば、とても興味がある。

2. レコレ・国際受入・交流センター | Centre international d'accueil et d'échange des Récollets

面会日：2013年2月28日（木）16:00－17:30

面会者：Chrystel DOZIAS (Directrice de la Résidence les Récollets)

URL: <http://www.centre-les-recollets.com/>

面会日：2013年3月13日（水）10:00－11:30（パリ市文化事業局、国際関係主任及びパリ市のレコレ・プログラム担当者）

面会者：Claire BERGER-VACHON (Responsable des Relations Internationales, Direction des Affaires Culturelles)

Emmanuelle LAVAUD (Chargée de Mission – Relations Internationales, Direction des Affaires Culturelles)

1. 運営機関の概要

パリ市の北東部、東駅とサンマルタン運河の間に位置するレコレ・国際受入・交流センター（以下、レコレ）は17世紀初頭に建てられた修道院を改修した建物に、世界中のアーティストと研究者を受け入れる場として2003年に誕生した。

(1) 設立趣旨・経緯

東駅に隣接し、現在81のスタジオ兼住居（以下「スタジオ」）を持つこの建物は4世紀の長い歴史を持ち、様々な用途に使われてきた。レコレの建物は、17世紀初頭に国王アンリ4世の保護の下に建てられた修道院で、18世紀には200人の僧が暮らしていた。革命で閉鎖された修道院はその後火薬倉庫、紡績工場などを経て、ホスピスとなり、1860年には軍の病院になった。1931年には東駅の拡張のために敷地が鉄道会社に譲渡されたり、庭園がサン＝ルイ病院と大学やパリ市の公園になった時代もあれば、残りの建物に建築学校が20年ほど仮住まいしてこともある。その後、遊休施設となった建物は1991－92年にかけてアーティスト集団に不法占拠されていたが、火災が起きて建物が半壊し、アーティストはこの場を去った。そして、1992年末にこの地の再利用の検討がスタートした。

まっさきに「文化的な利用を」との声をあげたのは、このレコレが位置するパリ10区の住民達だった。この場所の所有者は国の設備省であるため、国が跡地利用のプロジェクトを公募することになったが、その際に3つの条件が付与された。1つ目は、この建物の歴史的な特性を尊重したものであること、2つ目は、欧州と世界に開かれた文化的な分野での利用を促進すること、そして3つ目はこの場所の保存に関わっているアソシエーションの期待に沿ったものであることに加え、礼拝堂部分を含んだ少なくとも1,000㎡を一般市民の立ち入れる場所にするのであった。

ホテル・レストラン、会議場、などの用途に使うアイデアも出される中、「ローマにあるヴィラ・メディチのようなアーティスト・イン・レジデンスにする」、というRIVP（第三セクターパリ市不動産公団）のプランを採用することが決定され、設備省の管轄のまま、RIVPによって再建

築・改装工事が行われた。建築家は、F. VincendonとReichen & Robertである。

パリ市も10区や周辺住民の希望を後押しする形で協力した。建物の一部は歴史的建築物の指定を受けているため、歴史をとどめる面影を損なわない形で工事が行われた。2003年の1月、竣工を待たずにパリ市は最初のアーティストを送り込んだ。「これはアーティストのための施設となったレコレを全面的に応援するという表明でした」と、パリ市の文化事業局で、レコレ・プロジェクトを担当するエマニュエル・ラヴオー（Emmanuelle LAVAUD）は言う。

建物の一部は歴史的建築物の指定を受けているため、歴史をとどめる面影を損なわない形で工事が進められた。レコレは2003年7月にオープンし、正式な開会式は2004年2月に当時の文化大臣がパリ市長臨席の下で行なった。オープン当時のパートナー機関はパリ市のほか、フランス国立図書館、フランス美術館連合、パリ高等音楽院、コレージュ・ド・フランス、キュリー研究所、パスツール研究所、などだった。

こうして、レコレはアーティスト・イン・レジデンスとなり、その運営は、RIVPの子会社リシュモン社に任された。レコレのディレクターのクリステル・ドズィアス（Chrystel DOZIAS）はこの会社に属している。彼女はオープン当時からこの職に就いており、現在のレジデンスとこの土地の持つ長く豊かな歴史のつながりを重視している。「最初にここに住んだ修道士達が属していた托鉢修道会のモットーは、人生を楽しく生きること、彼らにはヒエラルキーがなく平等な関係で共同生活をしていました。また、19世紀の軍の病院時代には、その後ゴッホの友人・医師として名を残すガシェ医師が院長をしていたこともわかっています。そしてアーティストがフリッシュとして利用していたことなど、この『場所の記憶』が今のアーティスト・イン・レジデンスに与えている影響は大きいと思います」と彼女は語る。

(2) ミッション

フランス、欧州、他の大陸の文化・学術施設や大学との交流や連携によって、相互に刺激しながら相乗効果を生み出し、それを発展させること。それを達成する



レコレの建物全体の模型

ため、スタジオは研究や創造を続けることを目的としたフランス内外のアーティストや研究者を受け入れることである。

2. プログラムの内容と実績

(1) 全体の概要

レコレを運営するリシュモン社には、アーティストや研究者を選考する使命はない。まず、官選知事が管轄する割当委員会によって、公立または私立の文化機関、学術機関か大学などのパートナー機関が決定され、RIVPから運営管理を委託されたリシュモン社はその機関と協定書を結ぶ。つまり、アーティストの選考はそれらのパートナー機関に任されている。ただし候補者のプロフィールや滞在の目的は前述のミッションに沿ったものでなければならない。対象はアーティストと研究者で、期間は開始時には1ヶ月から2年までとしていたが、現在では1週間からの受け入れもしている。「当初は、長期受け入れのみを考えていましたが、特にアーティストは長く滞在する時間的な余裕もお金もない。それで短期も受け入れるようになりました」とドズィアス氏は語る。

個室は81部屋あり、一部屋の広さは25－125㎡で形状はすべて異なるが、いずれも家具付きのワンルームである。部屋にはサイズに応じて1週間、2週間、1ヶ月の家賃が決まっている。例えば、31㎡のものは週535.5ユーロ（約7万円）、月952ユーロ（約12万4,000円）。55㎡のものは週725.46ユーロ（約9万4,000円）、月1,289.7ユーロ（約16万8,000円）である。

(2) 協定書を結んだパートナー機関

現在レコレと協定書を交わしているパートナー機関は、パリ市、CNRS（国立科学研究所）、フランス国立図書館、大学など35にのぼる。1番多くのスタジオを持つCNRSは、12のスタジオの「レゼルバテール（予約者）」である。これは、スタジオを柔軟に活用するための工夫で、「35のパートナー機関が、常に『予約』スタジオをすべて使用するとは限らないため、空きがあれば、別のパートナー機関がそのスタジオを使えるようにしています」とドズィアス氏は説明する。協定書は18ヶ月ご

とに更新され、そのたびに該当期間の使用状況がチェックされる。まったく使用されていなければ更新されない場合もある。なお、この協定書は国にも提出されている。

(3) パリ市とアンスティチュ・フランスの共同プログラム

レコレの全体が、パリ市とアンスティチュ・フランスのレジデンスと考えられがちだが、実際にはこのプログラムの対象は81あるスタジオのうちの5つにすぎない。しかし、パリ市は、単に「パートナー機関のひとつ」というわけではない。「協定書の第一号がパリ市、そしてレジデンスを最初に行なったアーティストはパリ市のアーティストです。また、運営をしているリシュモンの母体はパリ市とつながりの深いRIVPですから」と、ラヴォー氏説明する。

① プログラムの趣旨と目的

パリ市とアンスティチュ・フランスの共同プログラムは、2003年に始まり、毎年20人前後の外国人アーティストを迎えている。パリ市の担当部局は文化事業局で、このプログラムは芸術や文学の分野で、パリで実施したい具体的なプロジェクトのある外国人のアーティストと文筆家を受け入れることである。「アーティストには熟考とクリエイションのまたとない機会を与え、同時にパリのアートシーンの国際的な発信や露出に貢献する目的で始められました。分野は文学とアートで、基本的に、フランスに居住していない外国人が対象です」と、パリ市文化事業部の国際関係責任者であるクレール・ベルジェ＝ヴァション（Claire BERGER-VACHON）は話す。

美術と舞台芸術の両方を含むアート部門では、プロジェクトの実施について、できる限り、パリやその近郊の他のアーティスト、カンパニー、芸術機関とすでに関係が築かれていることが望まれる。文学に関しては、滞在プロジェクトが研究の一環であることと、受入地であるパリの街やその文化環境に関連したプロジェクトであることが条件である。

滞在期間は応募年の翌年1月から12月の間の3ヶ月間で、滞在期間にはできる限りレコレに宿泊し、外国へ



レコレのエントランス

の旅行は避けることが望ましい。「当初はもっと長い期間を設定していましたが、3ヶ月で満足できる結果が出る場合が多かったので、2006年からはこの期間になりました」とラヴォー氏は語る。

(4) パリ市とアンスティチュ・フランセの募集: 選考方法と応募アーティストの条件

募集対象者は、前述のようにアーティストと文筆家で、個人を対象としたものである。応募の条件は次の4点。
①少なくとも5年の活動歴があること、②すでに重要な制作をしており相当な活動歴があることを証明できること、③フランス語または英語を話せること、④滞在期間に職業的活動から離れられること。また、過去に同じプログラムに応募して滞在したアーティストは、3年を経過しなければ再応募はできない。

応募書類は、インターネットからダウンロードできる所定の応募用紙、証明写真、パスポートのコピー、履歴書、推薦状2通が2分野に共通する提出書類で、それに加えて美術分野では、プロジェクトのフランス側のパートナー（共同プロジェクトの機関またはアーティスト）からの同意書、芸術書類の中の作品が自作である

ことを自署で宣誓した書類を提出しなければならない。そして芸術書類としてプロジェクトの説明資料（3から5ページ）、作品資料（タイトル、作家名、制作年、材質、サイズの明記、テキスト（10ページ以内）、プレス記事）、10分以内のビデオや10分以内3点以内のサウンド資料が必要とされる。文筆家は英語かフランス語のプロジェクト説明資料のほか、著作物のひとつを郵送で送ることが求められる。

ラヴォー氏は「応募書類はすべて、インターネット経由としました。毎年、全分野合わせて500から600件の応募があります」と語る。それぞれの分野の専門家がそれらを40から50程度に絞り、選考委員会にかける仕組みとなっている。一次審査をする専門家は美術が2名、その他は1名ずつである。美術への応募数が例年一番多く、約半数を占める。選考のポイントは、プロジェクトの芸術的な価値の高さ、パリ滞在の必要性である。一次審査の専門家は無償で選考にあたるが、「様々な国の実力のあるアーティストや作家を見出すことができるので、非常にレベルの高い専門家が集ってくれる」と、ベルジェ＝ヴァンション氏は話す。



レコレの共有スペース

① 支援内容

アンスティチュ・フランセは、生活費として月額1,500ユーロ(19万5,000円)を支給する。この金額は、食費、生活費、パリ市内の交通費などをカバーするものである。パリ市は約50㎡の大型のスタジオの家賃を負担する。渡航費は往復とも本人の負担である。芸術的な情報提供やプロジェクトのサポートはパリ市のルヴォー氏が個別に対応している。

② 実績

レジデンス施設のオープンとともにプログラムを開始し、10年間で80ヶ国から180名のアーティストと文筆家を招いている。日本人のアーティストは、滞在期間が6ヶ月だった2004年に遠藤拓己、2012年に恩田晃が参加している。

2012年を例にとると滞在者20名の内訳は、美術が8名、舞台芸術と文学がそれぞれ6名ずつで、出身国は、トルコ、ノルウェー、インド、チリ、アルゼンチン、ドイツ2、英国、カナダ2、ルーマニア、オーストリア、ブラジル2、日本、スイス、米国2、不明1だった。2013年は美術が9名、舞台芸術が3名、文学が6名の計18名が選ばれた。出身国は、米国3、デンマーク2、イタリア・英国、ポルトガル、アルバニア、ギリシャ2、ケニア・英国、コスタリカで、年によって出身国は大きく異なっている。

③ 作品制作以外のアーティストの活動内容 オープンスタジオ

滞在アーティストには、コミュニティプログラム、ワークショップのような義務はまったくない。滞在者同士の交流に関してはパリ市のラヴォー氏がパーティーを開いて滞在アーティスト同士が知り合える機会を提供している。「四半期ごとに入居者がそろって交代するので、理想を言えば、入居時と退去時に一度ずつ、簡単なカクテルパーティーを開きたいところ」と話す。ドズィアス氏やアンスティチュ・フランセの主催でも滞在者の集いが催されることがあるが、いずれも不定期開催、自由参加である。

④ 成果発表、フォローアップ

定期的な成果発表はないが、パリ市は、2007年に2003-07年の滞在アーティストの作品の一部を紹介す

る展覧会を市内のアートスペースEDFで行った。取り上げられた36名のアーティストの一部はシテ・デ・ザール滞在者だったが、ほとんどはレコレの過去の滞在アーティストで、展覧会は作品のほか、レジデンスに関するQ&Aで構成され、カタログも出版された。その中には日本人アーティストの遠藤拓己も含まれている。

3. 施設の構成と内容

敷地内の建物には、他の機関、イル＝ド＝フランス建築家団体やカフェも入居している。これは再利用計画当初の条件のひとつ「保存に関わっているアソシエーションの期待に沿い、礼拝堂部分を含んだ少なくとも1,000㎡を一般市民の立ち入れる場所とする」に従ったものである。レコレの滞在アーティスト用の施設は、スタジオと共同のダイニングルームである。

(1) アーティストレジデンス専用施設

スタジオは、本館と別館の一階から4階部分が使われており、1階に20部屋、2階に19部屋、3階に21部屋、4階に26部屋、計86部屋である。スタジオ兼住居はすべてワンルームだが、仕様は3つに大別され、住居スペースのみの25-29㎡のものが14部屋、住居専用にもスタジオ兼住居にも使える30-40㎡のものが55部屋、50-125㎡の大きなスタジオ兼住居は12室である。パリ市とアンスティチュ・フランセのプログラムのスタジオはこのタイプのものである。

① 設備

ワンルームの住居は、キッチンコーナー(流し、冷蔵庫、電気コンロ)、整理戸棚、ベッドまたはソファベッド、ベッドサイドテーブル、机と椅子あるいはテーブルと椅子(両方の場合もある)引き出し付きのチェスト、食器類が含まれる。スタジオ兼住居の場合は、さらにベッド及びサイドテーブルが1つ、ソファが1つ、机、チェストが1つ加わる。

② その他のサービス

毎週、シーツの交換、ベッドメイキング、床及びトイレ・バスの清掃のサービスがある。これに関してドズィアス氏は、居住者とレジデンスの両方にとって大きなメリットがあると強調する。「定期的に部屋に入ること、メ

レコレのスタジオ兼住居



メンテナンスもできます。ローマのヴィラ・ド・メディチを見学しましたが、そこでは清掃はアーティストにまかされているので、長期利用の間、全く部屋の様子がわからず、アーティストの退去時に驚かされることが多いと聞きました。痛んでしまうと壁の塗り替えから始めなければならない。その点、ここでは清掃スタッフが何か異常があれば知らせてくれるので、すぐに対応できます」と彼女は話す。

(2) 施設の所有形態

土地建物は、国の設備省の管轄。50年間、国に代わって使用できる、という形態である。

設備省が50年間の用益権をあたえたRIVP(パリ市の第三セクター会社であるRIVPパリ不動産公社)によって改修が行なわれ、その子会社リシュモン社によって管理・運営が行われている。

4. 運営体制と事業収支

(1) 運営組織

運営は、第三セクターのRIVP(パリ市不動産公社)の99.9%子会社であるリシュモン社が行っている。RIVPはパリ市からの出資がほぼ80%で、パリ市及び郊外の社会的弱者向けの住宅を建築管理する使命をもっており、会長はパリ市の顧問でパリ3区の区長でもある。

リシュモン社は、主に、公的社会住宅を運営する会社であり、文化の専門性はまったくない。前述のようにアーティストの選考もすべてパレナージュ協定を結んだ学術・文化機関が行っているため、スタッフの数は少なく、常勤のスタッフはディレクターとアシスタントの計2名である。

ディレクターのドズィアス氏は、高級4つ星ホテルでの仕事に就いていた。その経験が非常に役立っていると語る。予約を巧みに処理し、滞在アーティストの要求を即座に理解すること、サービス精神などである。「その中でも隣人を愛する心を持って接する、というのは大事です。相手も必ずそれに答えてくれる、がっかりしたことはありません。私はアートのバックグラウンドはありませんが、情熱があること、好奇心があることが大切です」と彼女は話してくれた。

(2) パートナリシップ

パレナージュ協定を結んだ機関がパートナーである。また、レジデンスの国際的なネットワーク組織などには属していない。滞在者の選考を協定締結機関にまかせていることに加えて、「稼働率がほぼ100パーセントなので、レジデンスのネットワークに入る必要がない」とドズィアス氏は説明する。

(3) 事業収支

収入はレジデンスの家賃である。それはスタッフの給料にもあてられている。ドズィアス氏は「オープン前に行われた大規模な改修工事と設備購入費はすべてRIVPの銀行借り入れで賄いました。そのためにレジデンスが満員でも、昨年までは赤字でしたが、2013年中に赤字から黒字へ転換する予定です」と語る。国やパリ市からの助成はない。

5. 事業評価の実施状況

レコレ全体としての事業評価は実施していない。パリ市のプログラムの事業評価は、前述のとおり、滞在アーティストからのレポートによって行われている。

滞在アーティストには、退去前にレポートの提出を求めている。「以前からレポートをお願いしていましたが全員からの回収には至りませんでした。最近はその提出と引き換えに、アンスティチュ・フランセから支援される滞在費の総額の最後10パーセントを支給しています。それがモチベーションになっているかもしれませんね」とラヴォー氏は言う。「形式は自由なので、1ページに良かった点や反省点を書くアーティストもいれば、10ページの大作を残していくアーティストもいます」。滞在中に直接アーティストと会うので、彼らの要望を聞く機会もあるが、レポートからは得るものがある、というのがラヴォー氏の意見だ。

6. 現在の課題と今後の方向性

(1) レジデンス側からの課題

ディレクターのドズィアス氏は、「管理運営以外に自分のできる貢献は滞在アーティストに『自分の家』のように感じてもらうこと。もちろん、他のアーティストに迷惑

をかけないよう規則を守ったうえで、ということですが、そのバランスが一番難しいですね」と語る。また、残念な点と思えるのは、大規模工事に莫大な費用を投じたために、各部屋の調度などは一番ベーシックなもので行わざるを得なかったこと、そして、部屋数を優先させたために、共同スペースを最小限にとどめたことだと言う。滞在者同士の交流は共同スペースで自然に行われる場合が多いからだ。しかし今のところ改装などの予定はない。

稼働率を高める秘訣は、枠にとらわれないしなやかさを持つこと、とドズィアス氏は考える。「それぞれのパートナー機関の特性に応じた受け入れをよう心がけています。ここは研究者の滞在が多いのですが、研究者がよく利用するのは学会・研究会のある5、6、10月です。研究者関連のパレナージュ機関には、この時期に集中して部屋が使えるように配慮しています。その他の機関、例えば国立図書館などには、別の時期に部屋を提供するようにし、みんなが満足できるように考えています。利用者の波がおさまるのは、7、8月ですが、この期間はかつての滞在アーティストにも門戸を開いています。例えばパートナー機関を経由して以前に1年間滞在した作家が、夏に1ヶ月滞在したい、というような場合です。いったんレコレに來た人たちは、研究者やアーティストであることが証明されているわけですから、直接の問い合わせにも応じています。空いている部屋はフルに活用する方がよいのですから」。

今後の方向性としては、協定を結ぶパートナー機関をフランスだけでなく、もっと外国の機関との間でも進めたい、とドズィアス氏は考えている。「フランスの機関よりも、外国の機関の方が、話し合いがスムーズに、そして速く進むのです」。

現在のところ国やパリ市などからの公的援助はない。「もちろん助成金をもらえるならばそれにこしたことはありませんが、自由で自立しているという強みはあります。ここは長年文化と交流の場であった歴史によって守られた場所です。情熱を持って働いており、私は10年間毎朝この扉をくぐるとき、幸せを感じています」と、ドズィアス氏は話す。

(2) パリ市のプログラムの課題

ラヴォー氏は、最近の傾向として、滞在アーティストが、レジデンスに集中できていないように感じている。「特に美術のアーティストにその傾向が強いようです。彼らは世界中を飛び回り、様々なプロジェクトを平行して行っていて、パリでの滞在と制作だけに没頭できないのです。一方でパリでの時間を十二分に生かして、コンタクトを広げ、美術館や図書館、劇場公演などを見る時間をとっているアーティストもいるのですが」と彼女は語る。また、家族同伴も最近の傾向で、課題となっている。ラヴォー氏はできれば単身が望ましいと考えている。「滞在アーティストにはそのためのスペースはない、と応募時には警告していますが、候補者の選考はプロジェクト次第なので、同伴者が来るからといって受け入れを拒否するわけではありません」と彼女は説明する。

また、全体的には非常に順調なプログラムだが、「経費がかかっても是非プログラムの評価を実施して、例えば出版の形などで残して行きたい」という希望も持っている。

2003年の発足当時は、6つだったこのレジデンスプログラム用のスタジオが今は5つになっている。「それはおそらくアンスティチュ・フランセ側の予算の問題だった、と思います。しかし外国人のアーティストをパリに招待し、国際文化都市であることを表明し続けることは、パリ市にとっても必要不可欠なこと、このレジデンスはその点でも非常に重要なプログラムです」とベルジェ＝ヴァンション氏は強調した。

3. レ・シュブジスタンス | Les Subsistances

面会日：2013年2月27日（水）14:00－16:00

面会者：Cathy BOUVARD (Executive Director)

Carolin SACKMANN (Executive Assistant & Private Partnership)

URL: <http://www.les-subs.com>

1. 運営機関の概要

レ・シュブジスタンス（以下「シュブジスタンス」）はリヨン市のソーヌ河岸、世界遺産に登録された歴史地区に立地している。かつての修道院と軍の倉庫や工房が共存する敷地は全体で22,000㎡。その中の9,000㎡がシュブジスタンスの「国際的な創造のラボラトリー」として使われ、アーティストに創造の場、稽古場、宿舎を提供している。

アーティストと一般の人々との対話・交流もプログラムの重要な柱になっており、レジデンス・カンパニーは公演はもちろん、ワークショップ、フェスティバルなど、1年を通じて行われる多様なプログラムにも参加している。

(1) 設立趣旨・経緯

17世紀に建てられたシェーヌの聖母修道院の土地と建物は、フランス革命を経て19世紀には軍隊省に移管された。それから1世紀半の間、主に食糧倉庫やパン工場、コーヒー焙煎所、粉引き所、ワインの製造所として使われ、第一次大戦時には18もの釜でパンを焼いていた。現在のレ・シュブジスタンスの名は、第二次世界大戦中の1941年にこの場所につけられた名称、『シュブジスタンス・ミリテール』（「軍隊の食糧供給と保守に必要なすべてのもの」という意）を引き継いだものである。

1991年に軍が退去した後、1996年にリヨン市が用益権と残存権を取得し、この地を芸術と文化の場とすることを決定した。「当初リyon市は、プロジェクトに取り組むアーティストのための‘フリッシュ’のような場にしようと考えていました。つまり、アーティストが自由に使える場所です。その頃、フリッシュは文化の刷新と再生に大変重要なものだ、というレポートが話題になっていたのですが、リyonにはまだフリッシュがありませんでした。それで当時のリyon市の文化助役が、それを強く望んだのです」とエグゼクティブ・ディレクターのカティール・ブヴァール (Cathy BOUVARD) は説明する。

1998年にはその方針に基づき、ポール・グレムレがディレクターとして開設準備を開始。しかし、2000年に彼は完成を見ずに亡くなり、クラウド・エルシュが後を

継いだ。この時代に第1期の大規模な工事が行なわれ、建物の1階部分が改修された。こうしてシュブジスタンスは2001年1月にオープンするが、2年後に現在のディレクター2人が舵取りを始めるまでは、方向性が確定せず順風漫步とはいかない時期が続き、この場所を民間に売却するという案もあった。

「改修工事に莫大なお金を投じたリyon市と初代のディレクターの間に、シュブジスタンスの目的や用途の考え方に溝があったのです。ディレクターは一般の人々に公演を見せる場所ではなく、アーティストが自由に使えるオープンスペースと考えていたのですが、リyon市は当初の構想とは違う役割を与えたいと考えるようになりました」と、ブヴァール氏は説明する。

シュブジスタンスのオープンの2ヶ月後、2001年3月に行なわれたリyon市長選で現職のレイモン・パール市長が社会党のジェラルド・コロンプ氏に破れ、市の文化政策も大きな方向転換が行われた。当時の金額で7,000万フラン以上という大きな予算をかけて8,000㎡部分の工事を行ったリyon市は、当初考えられていた単なるフリッシュ（アーティストの自由な活動の場）ではなく、レジデンスをしたアーティストと一般の人々との繋がりのある場所、創作作品の公演の場所としての利用を希望し、初代ディレクターは解雇された。

2003年には、それまでリyon市の直轄だったシュブジスタンスをアソシエーション（日本のNPOや財団に近い非営利組織）の形式に変更することがリyon市議会で決定された。新しいディレクターには、リyon市内の別の文化機関を指揮していたギ・ヴァルテール (Guy WALTER) とブヴァール氏の2人が就任した。滞在アーティストが施設内で創造活動を行い、それを一般に開かれたイベントの枠内で発表する、という大きな方針が示され、具体的なプログラムは彼らに任された。

「私たち2人でその当時リyon市になかったものを考えました。演劇、ダンス、ヌーヴォーシルク（現代サーカス）、またはいろいろな分野をクロスオーバーしたような、すべての先端的な舞台芸術や音楽に関わるアーティストのためのワークスペースがありませんでした。そして一般の人々がそれと触れ合える場が欠如していることも明らかでした」とブヴァール氏は話す。リyon市はこの



左側の建物がリヨン国立美術学校で、右側の建物にシュブジスタンスのオフィスがある。

提案を受け入れた。「現代の舞台芸術・音楽に関する私たちの考え方は明確なものでしたし、リヨンは信頼して任せてくれました。しかし、アートの中でも一般受けするのが難しい、最先端の現代舞台芸術という分野にゴーサインを出し、芸術的選択をすべて任せてくれたリヨンは本当に勇気があったと思います」とブヴァール氏は振り返る。

2005年には、建物全体の約9,000㎡を対象に第2期の改修工事が行われた。2007年には、敷地内にリヨンの国立美術学校が移転してきた。しかし2003年以降10年間、ヴァルテール、ブヴァールの2氏のディレクター体制、基本方針は変わっていない。リヨンの意志によって作られたレジデンスだが、市が芸術面で介入することはない。プログラミングは、ブヴァール氏らに全面的に任されている。それは、一般市民の参加者も多く、運営が軌道に乗っていることに加え、市との信頼関係が構築できているためだという。

(2) ミッション

シュブジスタンスの目的は、「舞台芸術・音楽(演劇、ダンス、サーカス、音楽)の新しい表現を対象にした芸術創造の国際的な実験場、そして一般の人々との分野を超えた協働・創造と対話のための場」と規定されている。

このミッションに沿う形で、①アーティスト・イン・レジデンス、②クリエーション、③一般の人々との分かち合いという3つの活動の柱が設定されている。

アーティストには、レジデンスの場所と時間を提供し、それぞれのプロジェクトに即した知的、運営管理的、技術的、財政的支援を与えている。施設内での発表だけでなくとどまらず、アーティストや招へいカンパニーの作品が各地で公演されるよう支援している。また、変化し続ける現代社会にアーティストならではのメッセージを発信するため、独自のフェスティバルを開催している。

一般の人々には、アートやアーティストと芸術的な体験を分かち合える場を提供している。作品創造の過程がわかるよう、オープン・レジデンス、対話、ウィークエンド・フェスティバル、ワークショップなどのプログラムを組み合わせ、アートとの対峙、考察、対話、実践を後押しし、新しい形の出会いを作り出している。

2. プログラムの内容と実績

(1) アーティスト・イン・レジデンス

シュブジスタンスのレジデンスプログラムは舞台芸術(演劇、ダンス、サーカス、パフォーマンス)を対象とする。滞在アーティストは具体的なアート・プロジェクトに



パフォーマンススペース「ブーラン
ジュリー」とそのパウダールーム。

取り組み、滞在期間は主に作品創造に充てられ、初演は基本的にシュブジスタンスで行なわれる。レジデンス期間中に単独で公演される場合、年3回のフェスティバルの枠内で発表される場合、と様々なケースがある。

「ただし、若いカンパニーの中には、創造活動がすぐに公開に結びつかないこともあります。それは私がリハーサルの様子を見て判断します。こうしたレジデンスのことを、‘様子を見る’レジデンスとよび、公開するレジデンスを‘見るための’レジデンスと呼んでいます」とブヴァール氏は説明する。また、‘様子を見る’レジデンスの中にも、滞在の最後には公開に値する作品が生み出される場合もある。

レジデンスは7月を除いて通年で行われ、期間は基本的に2週間から1ヶ月である。プロジェクトごとに話し合いで決めるため、それ以上の期間になることもあり、アーティストによっては、創造のステップに従ってレジデンス期間を2回、3回に分けることもあるという。

(2) アーティストの選考方法、応募アーティストの条件

① 選考方法

アーティストの選考は、2人のディレクターとスタッフが収集した情報に基づいて行われる。「この場所に相応しいカンパニーやアーティストを探すため、常にアンテナを張っています。2名のディレクターそれぞれが国内外のフェスティバルへ頻繁に出かけますし、スタッフも情報を持ち寄ります。また、シュブジスタンスをよく知るディレクターから情報が寄せられたり、DVDが送られてくることもあります」と、ブヴァール氏は話す。

彼女は、そうして見当をつけたアーティストと話し合いながら、招へいすべきかどうかを見極める。この方法で選ばれるのが全体のほぼ4分の3。残りはアーティストから働きかけてくるケースである。この場合もアーティストと話し合うことで、滞在アーティストに相応しいかどうかを判断する。「民主的な選び方、というのではないですね」とブヴァール氏は言う。「ここでは、実にいろいろなレベルのアーティストを受け入れています。国際的に活躍するアーティストもいれば、まだ若いアーティストも

います。私たちの目的は、ヒエラルキーに捕われずに滞在アーティストとして受け入れ、それぞれのアーティストのプロジェクトを軸にした創造活動に協力することです」。

アーティストを選ぶ際のポイントは、今日の新しい芸術表現を持ったアーティストかどうかだ、とブヴァール氏は言う。ディレクターの重要な仕事は、アーティストたちとプロジェクトについて話し合い、それを協力して実行できるかどうかを見極めることである。シュブジスタンスの年間プログラムの中には、社会性の強い、現代の世界との関わりの深いテーマを扱うものがある。また、そうしたテーマに沿った作品を創造できるアーティストを選ぶこともある。

逆に、アーティストのプロジェクトから、フェスティバルのテーマが膨らむという場合もある。「しかし、一番重要なのは、どの分野であっても、アーティストがどのように‘世界の見方’を変えてくれるか、なのです。現代社会やアートを別の視点で見せてくれるアーティスト、それが唯一のクライテリア(基準)ですね」とブヴァール氏は語る。その例として、彼女は3月のフェスティバルに参加した、7名のジャグラーからなるプティトラヴェール(Collectif Petit Travers)というサーカスのカンパニーをあげた。現代音楽と組み合わせることによって、ジャグリングというパフォーマンスを進化させると同時に、現代音楽の聞き方を変えてくれる、というのがその理由である。

② 支援内容

すべてのレジデンス・カンパニーには、宿泊場所、稽古場のほか、共同制作費が支給される。また、必要に応じて音響や照明スタッフなど技術的支援が提供される。「技術的サポートをどこまで行うかは、アーティストやプロジェクトによって異なるので、話し合いながら決めていきます。私にはとても楽しい時間でもあります」とブヴァール氏は語る。

交通費はアーティストの負担。外国から来る場合には、大使館やアンスティチュ・フランセ(「1. シテ・デ・ザール」に記載した脚注参照)や各種財団などに支援を依頼することもあるが、シュブジスタンスが交通費を支払うことはない。米国からの滞在アーティストが多い

屋外のパフォーマンススペース「ヴェリエール」(ガラス屋根付きの中庭)と屋内のパフォーマンススペース「アンガー・ジャルダン」



が、それは米国では稽古場の使用料が高いことが背景になっているという。渡航費を負担しても稽古場とプロの技術スタッフが提供されるということが魅力となっている。

制作費はプロジェクトの規模やカンパニーの人員に応じて支給される。使途を限定していないので、一部を食費や移動費に充てるカンパニーもある。決して潤沢な予算ではないため、カンパニーによっては、レジデンスが決まってから、他の劇場にも制作費の支援を依頼することもある。支給額は1,000－150,000ユーロ(約13－2,000万円)と大きな幅がある。最高額は、リヨン・ダンス・ビエンナーレの世界初演作品を制作したカンパニーのケース、最低額はレジデンスで創造活動をして公開には至らない、若いカンパニーのケースである。

③ ワークショップやオープンスタジオなどについて

ワークショップや公開リハーサルなど、作品創造以外の活動に関して滞在アーティストに課している義務はない。「最初の頃はそれを条件にしていました。公開リハーサルも必ず行っていたのですが失敗もありました。舞台の上で1時間ずっと仲間に小声でささやいているだけ、というアーティストがいて、観客が途中で全員帰ってしまったのです。一般の人々とのコミュニケーションが不得手なアーティストもいるので、同意が得られた場合だけ行っています」とブヴァール氏は話す。

彼女のアシスタントで、民間パートナー担当者でもあるカロリン・サックマン(Carolin SACKMANN)は、「そうは言っても、触れ合いを求めているアーティストも多いので、ほぼ90%は何らかの交流プログラムを実施してくれます。ワークショップの数は最近どんどん増えてきました」と付け加えた。心を開き、好奇心を持って何でも受け入れようという姿勢の観客に対しては、アーティストの側から新しいアプローチの実験が提案されることもある。

(3) プログラムの実績・過去の滞在者

シュブジスタンスには、月平均7カンパニー、年間ではおよそ70カンパニーが滞在している。国外のアーティストの割合は3分の1、またフランス人の半分は地元リ

ヨンのアーティストである。外国人の内訳は前述のように米国が多く、ドイツ、ベルギー、スイス、イスラエル、スペイン、イタリア、ポルトガル、コンゴなど。フランス在住の日本人アーティストが来ることは多いが、日本を拠点に活動するカンパニーがレジデンスをしたことはない。ただし舞台美術の制作のために川俣正が滞在したことはある。

(4) その他のプログラム

多くのフェスティバルや公演が企画され、公演数は年間120に及ぶ。これらの公演、ワークショップなどすべてのプログラムが、レジデンスを核にして密接に絡みあっている。しかし、事業の中心はあくまでもレジデンスとワークスペースである。

フェスティバルは、できるだけ多くの人々に滞在アーティストと触れ合う機会を提供するために開催されている。その他にも、公開リハーサルやワークショップ、様々なレッスンなどが定期的に行われ、一般の人々と滞在アーティストが気軽に交流できる環境が用意されている。「多くの人々にとって、現代アートは近づきやすいものではなく、拒否の気持ちが先に立ってしまいます。公演を見る前にアーティストと交流することで、彼らの仕事の内容を知り、親しみを持つと、現代アートとの関わり方が変わってくるのです」と、ブヴァール氏はその意義を強調する。

① フェスティバル

年間3つのフェスティバルが企画されている。フェスティバルに参加しているカンパニーのほとんどは、フェスティバル期間中にレジデンスしているか、もしくは過去にレジデンス経験がある。また、フェスティバル後に滞在し、次のフェスティバルのための創造活動を行うカンパニーもある。

2012－2013年のシーズンには、11月にモード・ダンプロワ(Mode d'Emploi / 使用方法)があり、1月にはエール・ド・ジュ(Aire de jeu / 遊び場)、3月にはウィークエンド・ド・クリエーション(Week_End de création)と名付けられたフェスティバルが開催される。内容はかなり多様だが、すべてに滞在アーティストがシュブジスタンスで創作した作品が含まれる。モード・ダンプロワは、講



リハーサルスタジオ「アトリエ7」

演とスペクタクルを組み合わせた人文科学系のフェスティバルで、アーティストに「ファイナンス」、「地球環境変化」など、具体的なテーマで作品づくりが依頼された。

また3月の復活祭の週末4日間に開催されるウィークエンド・ド・クリエーション・フェスティバルは、展覧会、サーカス、ダンス、音楽、演劇、パフォーマンスなど多彩なプログラムで構成されている。フランス内外の40人の参加アーティストの中には、Olivier NORAND(ダンス、音楽、パフォーマンス)、Denis MARIOTTE(パフォーマンス)、Collectif Petit Travvers(サーカス)等、滞在中のアーティストが含まれている。

フェスティバルはパフォーマンス・スペースだけでなく、シュブジスタンスの敷地全体を使って行なわれ、30を超える公演に加え、ワークショップ・ランチ、子供用のプログラム、ガストロノミック・バンケットと名付けたユニークな昼食付きチケットも用意され、現代芸術に関心のない一般の人々が気軽に参加できるような工夫が行われている。ワークショップ・ランチはフェスティバルの一環で行われるもので、アーティストによる一般向けのワークショップや作品解説、指導のあと、全員で一緒にランチをとるというものである。

② ワークショップ、通年のレッスン

大人と対象としたもの、子どもを対象としたもの、学期内に四半期単位で行なわれるもの、休暇中に数日間行なわれるものなど、ワークショップやレッスンも充実している。ダンス・音楽・美術を組み合わせたクリエーション・アトリエと呼ばれるワークショップは、春休みや夏休みに開催され、5-7歳、8-10歳のグループに分かれて5日間朝から夕方まで続けられる。

学期内に行なわれる子ども向けサーカス・レッスンは、小学校から中学校までが対象で年齢別に3つに分かれ、毎週水曜日の午後(学校の授業はない)に行なわれている。水曜日は5つくらいのレッスンが同時開催される。大人を対象としたものは、ダンス(毎週火曜)と演劇(同月曜)の2種類。いずれも通年、週1回(計23回)で夜7時半から10時まで2時間半のレッスンが行なわれている。レッスン代は400ユーロだが、2回の公演の招待状がもらえる。

③ 施設の見学プログラム

予約制だが無料で施設(1時間)とレジデンス(1時間)の見学プログラムがあり、また児童・生徒を対象としたクラス単位や団体のプログラムも用意され、カスタマイズも可能である。最近、シュブジスタンスの11のポイントを解説するスマートフォンやタブレット用アプリが開発され、個人がヴァーチャルで見学できるようになった。このアプリには多くのアクセスがある。

3. 施設の構成と内容

(1) 施設の所有形態

施設はリヨン市が用益権と残存権を有しており、2007年には敷地内にリヨン市国立美術学校が移転してきた。

(2) 施設構成

シュブジスタンスが使える施設の広さは9,000㎡で、次のような施設が設置されている(括弧内は施設数)。修道院時代の建物はピンクで、軍隊時代の建物は黄色で、それぞれ塗装され、どの時代の建物かがわかるようになっている。

- 宿泊施設、共同キッチン
- 屋内のパフォーマンス・スペース(3)
- ガラス屋根付きの中庭(大規模なスペクタクルに使用可能)
- リハーサルスタジオ(2)
- ワークスペース(3)
- 展示スペース(美術学校と共同利用)
- レストラン

① 宿泊施設、共同キッチン

宿泊施設は修道院の建物の中に位置し、天井の高い廊下の両側に個室が並んでいる。施設の改修は、修道院時代に使われていた色、地元の素材を尊重して行われた。14つの個室(ベッドルーム)と、3つのキッチン付きワンルームスタジオがあり、後者は家族同伴のアーティストに利用されている。

共同キッチンとダイニングルームは、修道院時代にも食堂だったスペースに設けられている。単に調理や

宿泊施設のエントランスに掲示されていた宿泊者のリストと、宿泊施設の廊下。かつての修道院時代の宿泊施設をそのまま利用している。



食事をする場ではなく、アーティスト同士スタッフとの親睦や交流の貴重なスペースになっている。そこでの出会いが、新たな共同のプロジェクトの構想に結びつくケースもある。共同キッチンの隣はランドリーコーナーとなっている。

② 屋内パフォーマンス・スペース

施設内には、次の3つのパフォーマンス・スペースが設けられている。初めから劇場として作られたわけではないことから、天井高や音響、耐荷重などで様々な制約があるため、それぞれの特徴を知って、スペースにふさわしい使い方が工夫されている。

- ブーランジュリー (Boulangerie / パン工房) : 軍の施設だった時代にパンを焼いていた工房を改修したブラックボックス型の劇場。床面積は205㎡、舞台は面積90㎡ (幅8m×奥行11.3m)、高さ4.85mで、観客出入口は4ヶ所。定員は、階段席使用の場合123人 (内車椅子席4)、平戸間で立ち見席の場合600人。
- アンガー・ジャルダン (Hanger Jardin / 庭側の倉庫) : かつての倉庫を改修したスペースで、天井は吊り物に対応できない。階段席108席＋ハンディキャップ対応2席、舞台は面積151㎡ (幅12.8m×奥行11.8m)、高さ5.6m。
- アンガー・ソーヌ (Hangar Saône / ソーヌ河側の倉庫) : 客席は階段席140席＋ハンディキャップ対応4席。舞台は面積135㎡ (幅11.75m×奥行11.5m)、高さ5.66－6.2m。

なお、アンガー・ジャルダンとアンガー・ソーヌは隣接しており、つなげて大きく使うことが可能。その場合は、階段席174席＋ハンディキャップ対応2席、舞台面積157㎡となる。

③ 屋外のパフォーマンス・スペース：ヴェリエール (Verrière / ガラス屋根のある中庭スペース)

国立美術学校の建物とブーランジュリーの壁面に囲まれた、ほぼ真四角なスペースの中央部分に4本の「エッフェル様式」の鉄の柱で支えられたガラス屋根が設置されている。このスペースは雨天でも利用可能で、夏期を中心に大規模なパフォーマンスが行われる。

面積は1,332㎡ (36m×37m)、天井高10.5m－17m。

立見の公演なら3,000人、着席の講演会や公演なら600人、カクテルなど立食なら2,000人、着席の食事付きイベントでは1,150人まで収容可能である。

④ リハーサルスペース

- プラトール2: 基本的にはリハーサルスタジオだが、階段席を設置することで公演も可能なブラックボックス型のスペース。面積136㎡、公演では40－80人の収容が可能。
- プラトール4: 主としてアマチュアの稽古用だが、小規模なパフォーマンスにも使用可。壁と天井は黒で、木製の梁はむき出しで、ダンス用の床は薄い木彫色。公演では40－80人の収容が可能。
- アトリエ7: 梁と小屋組みがむき出しのリハーサル室。壁と天井は白、床は黒く、面積は約115㎡、天井高4.4m。収容人数はアーティストと技術スタッフを含めて19人。

⑤ その他

その他に、リヨン国立美術学校と相互使用の展示会場 (かつての修道女の厨房スペース)、3つのワークスペースが設置されている。

4. 運営体制と事業収支

(1) 運営組織

運営母体は、2003年8月に発足した「レ・ヌーヴェル・シュブジスタンス」という名の非営利組織 (1901年のアソシエーション法で規定) で、リヨン市との間で協定書を交わし補助金を受けている。

スタッフは常勤で19名、フェスティバルの際には技術スタッフ (仕事のない期間は社会保険で所得を保障される舞台関係者) を雇い、その時間数は年間1万5,000時間に達する。ディレクターのヴァルテール氏は、リヨン市内の文化施設ヴィラ・ギレ (Villa Guilet) のディレクターを兼任している。エグゼクティブ・ディレクターのブヴァール氏は、長年リヨン市内のクロワールス劇場のプログラム・ディレクターを務めた経験がある。2人とも2003年から現職。

スタッフの構成は次のとおり。ディレクター、エグゼクティブ・ディレクター、同・秘書、アドミニストレーター、制



技術スタッフのオフィス

作担当、アドミニストレーター補佐、財務、経理、パートナー&メセナ担当、レジデンス管理担当、広報・プレス担当、広報担当&ウェブマスター、観客担当(2名)、受付とチケット責任者、受付とチケット販売担当、その他、受付担当チーム、技術ディレクター、総合舞台監督、主任舞台監督、技術担当。その他に、前述の技術スタッフ、施設管理としてリヨンの担当者4名と外部の清掃スタッフが運営に携わっている。

(2) パートナースhip

ヴァルテル氏が兼任するヴィラ・ギレ(文学・哲学・思想を主なテーマとして討論会や講演を行っている)とは共同でフェスティバルを行うほか、リヨンの文化施設とも連携関係にある。例えば1月のフェスティバル、エール・ド・ジュには、クロワルッス劇場とリユール＝ラ＝パップ国立振付センターも参加している。

海外では、ヴァルテル氏が2011年に立ち上げた「Walls and Bridges」というフェスティバルをきっかけに、米国のパフォーマンス・スペースとネットワークがある。年2回、フランスの学者やアーティストを米国に送り、リーディング、ディベート、パフォーマンスなど10本以上のイベントを行うもので、シュブジスタンスのアーティストも参加している。

シュブジスタンスは、欧州内のネットワーク・プロジェクトである「A Space for live art」に参加している。このプロジェクトは、2007年から5年間欧州8ヶ国の舞台芸術機関の交流プログラムが開催された際に、共同制作やレジデンス、国際討論会などを通じて、一般にはあまり知られていない分野のアートを発展させ、ライブアートのスペースを強化していく目的で立ち上げられた。

またこの機関は、欧州委員会の2007-2013年の文化助成を受けている。他の参加国・都市とアートスペース(括弧内、一部はイベント名)は、スペイン・マドリード(AcciónMAD)、フィンランド・クオピオ(Antifestival)、スロヴェニア・リュブリャナ(City of Women)、スコットランド・グラスゴー(National review of live art)、ベルギー・ブリュッセル(Trouble)、ポーランド・ピョートルクフ・トルイブナルスキ(Interakcje)、ドイツ・ハンブルグ(Kampngel / Panorama)である。

アーティスト・イン・レジデンスのネットワークには加盟していない。「機関同士のネットワークだと、こちらの状況や特殊性が理解されなかったり、画一的で融通がきかなかったり、ということがあります。それよりも私は、信頼関係のある専門家同士の個人のネットワークを重視しています」というのがブヴァール氏のネットワークに関するコメントである。

(3) 事業収支

年間の総予算は230万ユーロ(約3億円)、収入のほぼ70%が協定書を結ぶリオン市からの補助金である。その他の公的支援は、ローヌ＝アルプ地域圏が30万ユーロ(約3,900万円)、文化省(DRAC: 地方文化事業局経由)から8万ユーロ(約1,040万円)、欧州委員会からもライブアートスペースへの助成の一環として7万ユーロ(約910万円)の助成がある。

その他、チケット収入が30万ユーロ(約3,900万円)あり、これは収入の約13%にあたる。また、ハンディキャップの方々など特別の観客を対象にしたプログラムの場合、別途、資金調達活動を行って、イベント単位で財団からの支援を得ることもある。

5. 現在の課題と今後の方向性

補助金を支給しているリオン市や助成団体だけではなく、アーティストからも全面的な信頼を得ており、観客動員も順調なことから、今後も現在の事業や運営を続けていく方針である。しかし課題が全くないわけではない。運営財源はリオン市への依存割合が高いため、自治体の財政状況の影響を受ける可能性があり、それがリスクのひとつだということであった。

なお、事業評価は特に行なわれていない。

4. リヨン・ビエンナーレ | La Biennale de Lyon

リヨンビエンナーレ事務局 <http://www.labiennaledelyon.com>

面会日:2013年2月27日(水)17:30-18:30

面会者:Karine DESRUES LIANO IZZAGUIRRE (Executive Producer)

リヨン現代美術館 <http://www.mac-lyon.com>

面会日:2013年2月27日(水)11:30-12:30

面会者:Thierry RASPAIL (Director)

リヨンには2つのビエンナーレがあり、ダンスは1984年、現代美術は7年後の1991年にそれぞれ始まった。それ以降、偶数年がダンス、奇数年が現代美術というリズムで交互に開催されている。近年どちらのビエンナーレにもレジデンスプログラムが取り入れられた。

I リヨン・ダンス・ビエンナーレ

1. ダンス・ビエンナーレの概要

ダンス・ビエンナーレは前回の2012年に15回目を迎えた。初回から14回までの26年間は創立者でリヨンのメゾン・ド・ラ・ダンスのディレクターでもあったギ・ダルメ (Guy DARMET) が芸術監督を務めてきた。この2つのポストは互いに補完的な関係にあり、2011年にダンサー・振付家の経歴をもつドミニック・エルビユー (Dominique HERVIEU) に引き継がれた。

2012年、第15回のビエンナーレでエルビユー氏は初めて指揮をとり、新しい作品の創造を中心とする祭典、という方向性を打ち出した。「以前は3週間だった期間を2週間半に短縮しましたが規模は縮小されていません。招待カンパニーは外国とフランス合わせて34団体、新作は19作品あり、そのうちの15作品が世界初演です。また公演会場をローヌ＝アルプ地域圏にも広げ、観客の総数は10万人に達しました」とダンス・ビエンナーレのプログラム・ディレクター、カリーヌ・デリュー (Karinne DESRUES) は話す。

公演作品のバラエティーが豊富だったことも特徴のひとつだ。40ほどの規模の違う会場を使うため、リスクのある作品もプログラムに入れられるという。革新的でエッジの立ったもの、これからが楽しみな若いカンパニーの作品、大衆向けのものなど、非常に多様な作品構成となっている。同じ作品は3回から、多いものでは20回公演された。日本のアーティストやカンパニーは、山海塾、伊藤郁女、梅田宏明、モータルコンバット、Repoll:Fx、フォーマーアクションが参加した。

ダンス・ビエンナーレは、メディアへの露出がかなり高いだけでなく、専門家からも注目されるフェスティバルである。2012年もフランス国内や世界中から1,200人のダンス関係者や批評家などが訪れた。

- 会期:2012年9月13日から30日(18日間)
- 招待カンパニー数:34(内外国カンパニー15 / フランス11)
- アーティスト数:825名
- 公演作品数:43作品、公演回数:167回
- クリエーション(新作):19作品
- 世界初演:15作品、フランス初演:3作品
- 共同製作:15作品
- レジデンス・カンパニー:8団体
- 公演会場となった劇場の数:42
- 劇場内の公演の観客数:97,463人
- 公共スペースでの公演の観客数:12,400人
- その他のイベントやダンスクラスの観客・参加者数:20,563人

◎ 参考:メゾン・ド・ラ・ダンスの概要

芸術監督のエルビユー氏が年間を通じてディレクターを務めるメゾン・ド・ラ・ダンスには1,100席のホール、リハーサル室、80席のホールがあり、郊外に立地する700席の劇場とも提携することで、まだ無名のカンパニーの公演も行なっている。1シーズンで35のカンパニーが招へいされる。メゾン・ド・ラ・ダンスでの公演はカンパニーによっては3週間続くこともある。しかし、メゾン・ド・ラ・ダンスの使命は、基本的に発表の場であり、制作費は限られている。

2. レジデンスプログラム

(1) 概要

2012年(第15回)に始まったレジデンスプログラムは、ビエンナーレにおける創造活動の強化の方針と密接に結びついている。それは、いずれも「ファブリック(製造所/fabrique)」で始まる3つのサブプログラムが加えられた。すなわち、「作品の製造所 / fabrique des oeuvres」、「ダンス好きな人の製造所 / fabrique de l'amateur」、「観る目の製造所 / fabrique du regard」である。この中の「作品の製造所」が、レジデンスプログラムにあたる。

ビエンナーレを単なる発表の場ではなく国際的創造の場にするという考えの下、エルビユー氏は15の世界

初演を含む19の新作をプログラムに組み入れた。そのうち15のカンパニーと共同製作を行い、その中の8団体をレジデンス・カンパニーとしてプログラムに「作品の製造所」のラベルをつけてアピールしている。2012年には芸術予算200万ユーロ(約2億6,000万円)のうちの50万ユーロ(約6,500万円)がレジデンス及び共同製作費として使われた。2010年の同経費と比較すると37%の増加である。

レジデンスには、フランス、フランス＝アルゼンチン、ベルギー、日本の8つのカンパニーが選ばれた。選考の基準は、カンパニーの規模とは関係がなく、世界的なカンパニーをはじめ、若く国際的な知名度の低いカンパニーも含まれている。選ばれたのは、かなり前からプロジェクトと一緒に話し合っていて、エルビュール氏が共同製作を強く望んでいたところである。ただし、国立振付センターに属するカンパニーなど、稽古場のあるところは対象外となっている。

日本から招へいされたレジデンス・カンパニーは天児牛大/山海塾である。「これまで、山海塾の初演は日本かパリのテアトル・ド・ヴィルに限られていましたが、このレジデンスプログラムのおかげで今回はリヨン歌劇場で彼らの世界初演を行なうことができました。これは私たちにとってたいへん名誉なことです」とデリュー氏と言う。その一方で15分ほどの短い作品を公演する小規模のカンパニーもレジデンス・カンパニーに選ばれている。

(2) 支援内容・目的

レジデンス・カンパニーは初日の2週間前からリヨン入りする。支援の内容は、作品の規模に相応しい劇場(本公演の会場)と照明・音響の技術的サポート、住居と食事の提供、そして共同製作費の支給である。初日の2週間前から、公演期間を入れると滞在期間は3週間程度で、宿泊場所はホテルではなく賃貸のアパートが手配される。アーティストが望めば自炊もできるようになっている。

レジデンスの目的は、初演へ向けての最終調整である。「2週間ですから、新しい作品を一から創り出すということをねらいとしているわけではありません。また、リヨ

ンの街並や環境、文化や歴史と関連した新しい作品の創造ということも、今のところは特に考えていません」とデリュー氏は語る。通常、ビエンナーレに招かれるカンパニーは、世界初演をする場合でも直前に会場入りする。「これは大変リスクの大きいことです。こうしたカンパニーを2週間前から滞在させることで、本公演の会場で演出を入念に仕上げることができ、音響や照明の最終調整にも時間をかけられます。作品が磨かれ、完成度が上がります」と、デリュー氏は本公演に直結する時間と空間をカンパニーに与える効果を強調する。

前もってリヨン入りすることで、時間的な余裕が生まれ、カンパニーによっては、オープンレジデンス、ワークショップなど、公演以外に一般向けの活動も行える。また、広報面でも大きなメリットがある。新作発表の場合、カンパニーから事前に情報を得られることは稀で、広報は簡単ではないが、カンパニーがレジデンスしていることで、インタビューも容易なためである。

レジデンスの滞在地はリヨンとその周辺である。今回使われたのはリヨン国立歌劇場、レ・シュブジスタンス、クロワ＝ルッス劇場、ENSATT(国立高等演劇芸術・技術学校)、リヨン郊外のヴィル＝バヌに立地するTNP(国立民衆劇場)とデシーヌの文化センター・トボガンである。

レジデンス会場とレジデンス・カンパニーは次のとおりで、括弧内に公演以外の活動を記載した。[*OR]はオープンレジデンス、[*WS]はワークショップ、[*PC]は公開プレス懇談会、[*OT]はその他のコミュニティプログラム(アフタートークは除く)。

- リヨン国立歌劇場(Opéra de Lyon) :
天児牛大・山海塾[*PC*OT]
- レ・シュブジスタンス(Les Subsistances) :
Antoine Defoort et Halory Goerger [*OR*PC]
David Bobee, Groupe Rictus [*OR*WS*OT]
- クロワ＝ルッス劇場(Théâtre de la Croix-Rousse) :
Yuval Pick・CCN de Rillieux-la-Pape[*OR*WS*PC]
- TNP 国立民衆劇場(TNP : Théâtre national populaire) :
Cie Maguy Marin[*OT]
- 国立高等演劇芸術・技術学校(ENSATT) :

François Chaignaud et Cecilia Bengolea[*OR*PC]
Cie14 :20 (Clément DebailleulとRaphaël Navarro)
[*OR*PC]

- トボガン(Le Toboggan) :
Rachid Ouramdane [*OR*PC]

3. 運営体制

ラ・ビエンナーレ・ド・リヨン(La Biennale de Lyon)という1901年のアソシエーション法による協会組織(日本のNPOに近い非営利組織)が、ダンスと現代美術のビエンナーレの両方の運営母体となっている。ラ・ビエンナーレ・ド・リヨンの主な使命は、作品創造の支援と発信、一般の人々へのアートの普及、フランス、特にリヨンとその地方の国際的な発信、地域の振興である。

スタッフの数は約30名だが、ダンス・ビエンナーレのためだけに働くのは芸術監督のデルヴュー氏とプログラム・ディレクターのデリュー氏の2名、現代美術も同様で、専任は2、3名である。他のスタッフは両方のビエンナーレの仕事をし、継続的に事務、広報、メディアや民間資金の調達などを行っている。

4. 事業収支

2012年の年間予算は約828万ユーロ(約10億8,000万円)。その内訳は下表のとおりで、公的補助金が全体の55%を占めている。その内訳は60%強がグラン・リヨン(リヨン大都市圏)から、次いでローヌ＝アルプ地域圏、国(文化省)、アンスティチュ・フランセと続く。その他の収入は、チケット収入、民間からの支援が、それぞれおよそ収入全体の22%を占めている。

リヨン・ダンス・ビエンナーレの収入内訳(2012年)

財 源	金額(ユーロ)
公的補助金	4,552,000
グラン・リヨン	2,740,000
地域圏	915,000
国(文化省)	870,000
アンスティチュ・フランセ	27,000
チケット収入他	1,873,000

民間企業等	1,857,000
計	8,282,000

支出のうち、200万ユーロ(約2億6,000万円)がカンパニーの制作に当てられる事業費。その25%にあたる50万ユーロ(6,500万円)がレジデンス及び共同製作費である。

5. 現在の課題と今後の方向性

「レジデンスプログラムの初めての試みに、カンパニーも私たちビエンナーレ側も大変満足しています。国際的な作品を生み出す場としてのリヨン・ビエンナーレの成功に、レジデンスプログラムは大きく貢献しています」と、デリュー氏は語る。

レジデンスプログラムは今後もっと発展させていく方針だ。芸術監督のエルビュー氏はカンパニーの数を15程度に増やしたいと強く望んでいる。それに加え、別の形のレジデンスも検討中である。2012年のビエンナーレでは、エルビュー氏は着任したばかりで十分な準備時間が取れなかったが、次回の2014年の構想をすでに練り始めている。2013年にメゾン・ド・ラ・ダンスで公演予定の2つの外国のカンパニーに、次回のビエンナーレの新作づくりを目的にしたレジデンスプログラムを提供する意向である。

具体的にはまず2013年にメゾン・ド・ラ・ダンスでの公演のためにリヨン入りし、公演後も残ってレジデンスを行なって2014年のビエンナーレのための新作を共同製作するというスタイルが想定されており、場所はメゾン・ド・ラ・ダンスのスタジオの予定である。エルビュー氏は他にもこの新しいプログラムに招へいしたいカンパニーがあるが、予算の制約もあって、メゾン・ド・ラ・ダンスで公演を予定しているカンパニーを対象とする計画だ。

いずれにしても、リヨン・ダンス・ビエンナーレは、予算に目を配りつつ、レジデンスプログラムをさらに発展させる方針である。

II リヨン・現代美術ビエンナーレ

1. 現代美術ビエンナーレの概要

1991年に始まった現代美術ビエンナーレの創設者は、現在も芸術監督を務める、リヨン市現代美術館館長のティエリー・ラスパイユ (Thierry RASPAIL) とティエリー・プラット (Thierry PRAT) である。キュレーターは毎回変わり、2013年の12回展では、アイスランド出身のグンナー・B・クヴァラン (Gunnar B. KVARAN) が起用されている。

(1) 第10回、第11回ビエンナーレの概要

第10回のビエンナーレは、2009年9月16日から翌2010年1月3日までの3ヶ月半、「日常のスペクタクル (Le spectacle de quotidien)」というテーマで開催された。キュレーターは中国出身のホウ・ハンルー (Hou HANRU) である。テーマの趣旨は、世界が目に見えるもの (一スペクタクル) と、目に見えないもの (一日常) とで構成されているという考えに立ち、芸術的な創造活動と各人の暮らしを結ぶ絆を再発見する、というものである。参加したアーティストは26ヶ国、56名、国際展のメイン会場はリヨン市現代美術館、ラ・シュークリエール、ビシャ倉庫、ビュルキアン財団の4つで、来場者数は16万8,361人であった。

第11回のビエンナーレは、2011年9月15日から12月31日まで開かれ、キュレーターは、アルゼンチン出身のヴィクトリア・ノーソーン (Victoria NOORTHOORN)、テーマは「恐ろしい美が生まれた (Une terrible beauté est née)」だった。イエーツの作品から引用したこのテーマの趣旨は、パラドックス、矛盾、緊張とアンビバレンスの強さを探り、現在の世界とアートの緊急を要する状態について問いかけよう、というものである。25ヶ国から78名のアーティストが参加した。メイン会場は全体で14,000㎡の広さがあり、リヨン市現代美術館、ラ・シュークリエール、ビュルキアン財団の他に、第11回はT.A.S.E.工場が加わり、490作品が展示された。来場者は20万1,546人を記録した。

2. レジデンス・プロジェクトの誕生とその経緯

レジデンスプログラムが独立して存在しているわけではなく、レジデンス・プロジェクトはビエンナーレに付随したものとなっている。「このビエンナーレには、3つの大きなフィールドがあります。ひとつ目はご存知の国際展覧会、2つ目がローヌ＝アルプ地域圏のいろいろな展示場を結ぶネットワーク、それから3つ目がソーシャルプログラムです。そしてそのソーシャルプログラムの中に、レジデンス・プロジェクトが含まれています。決まった場所があり、そこに毎回アーティストを滞在させる、というレジデンスではありません」とラスパイユ氏は説明する。

ソーシャルプログラムは「ヴェデュータ (VEDUTA)」と名付けられている。ラスパイユ氏は、これを「展示ケースの中に閉じ込められていないアート体験」と考えている。2007年に始まったヴェデュータの初期の目的は、ローヌ＝アルプ地域圏全体で現代美術の創造と普及を図ること、そして討論会や出版を通じた研究や発見のツール、という2つであった。それらを融合させること、そしてレジデンスプログラムを立ち上げることが2009年以降の課題となっていた。

ビエンナーレをメイン会場だけに閉じ込めないためにも、住民とのコミュニケーションを促進する社会プログラムのヴェデュータにレジデンス・プロジェクトを加えることは自然な流れだったと言えるだろう。

2009年のビエンナーレのヴェデュータでは、3名のアーティストが初めて滞在アーティストとしてリヨンとその近郊に滞在し、住民と共に制作を行なった。2011年のヴェデュータでは、6名のアーティストがレジデンス・プロジェクトに参加している。

「このプログラムではビエンナーレと自治体・コミュニティ、そして様々なアーティストとの関係を築こうと考えています。リyonは小さい街ですが周辺には60-65の自治体があり、アーティストは主にリヨン郊外の住民と協働します。キュレーターは毎回変わりますから、レジデンス・プロジェクトの内容も数も変わります。周辺自治体からの参加要請も多く、私の方でも毎回異なる自治体に参加してもらいたいと思っているので、場所も変わ



現代美術ビエンナーレの会場の一つのリヨン市現代美術館

ります。私たちは、ビエンナーレの開催年ごとに、参加する地方自治体と契約書を交わしています。そういうわけでこのレジデンスプログラムには決まった構造がないのです」とラスパイユ氏は不定型のレジデンスプログラムであることを強調する。毎回違うプログラムが異なる場所で行なわれ、レジデンス期間もプログラム次第である。

決まっているのは、アーティストはヴェデュータのためだけに来るのではなく、全員がもともと現代美術ビエンナーレに招待されたアーティスト(ビデオ・インスタレーション、彫刻など)だという点である。つまり、彼らは国際美術展のスペースでも作品展示を行う。したがって、地方自治体との契約によっては、アーティストは2つ作品を制作し、レジデンスの場所とメイン会場の両方で展示を行う場合がある。

レジデンス・プロジェクトのアーティストの選考は、主にキュレーターが行うが、ヴェデュータは社会的なプログラムでもあるため、ラスパイユ氏とキュレーターが話し合い、レジデンスを行うスペース、場所、周辺住民に適応したアーティストを考える。地域の参加者は若者のこともあれば年配者のこともあり、また移民の場合もある。さらに受け入れる地方自治体や、住民がどのようなプロジェクトを望むかが重要で、彼らの意見も反映される。

「アーティストの選考は、対話から生まれます。私たちが最善と思うアーティストを押しつける、ということはありません」とラスパイユ氏は説明する。

3. プログラムの内容と実績

(1) 2009年のレジデンス・プロジェクトから

① 概要

はじめてレジデンス・プロジェクトの行われた2009年のヴェデュータは、「(アートを作る)」「(アートを)食べる」「(アートに)住む」「(アートを)懸ける」「(アートを考える)」の5つの部門で構成され、リヨンを含む9都市が参加した。レジデンス・プロジェクトは、その中の「アートを作る」の中に位置づけられている。

レジデンス・プロジェクト参加のアーティストは、ビク・ヴァン・デル・ポル(Bik Van DER POL)、ロベール・ミラン(Robert MILIN)、エコ・ヌルゴホ(Eko NUGROHO)の3名。彼らはリヨン市とリヨン近郊に滞在し、一般の住民と共同で作品づくりを行った。完成した作品は、レジデンスの会場(ヴォー＝アン＝ヴィラン(Vaulx-en-Velin)、ミリベル・ジョナージュ大公園(Grand Parc Miribel Jonage)、ヴェニズィュー(Vénissieux))だけでなく、ビエンナーレの本会場にも展示された。

② 具体例

1977年生まれのインドネシアのアーティスト、ヌロホの例を見てみよう。

彼は、5月22日から9月15日までの間に1ヶ月ずつ2回にわたり、リヨン近郊のヴォー＝アン＝ヴィランでレジデンスを行ない、地元の若者たちと『石の下に虹 (Rainbow Beneath Stone)』という作品を創作した。影絵人形芝居とインスタレーション、パフォーマンスを組み合わせた作品はレジデンス会場で2回の公演が行われた後、その映像とインスタレーションがビエンナーレの期間を通して展示され、作品はフェスティバル終了後にリヨン現代美術館に所蔵された。

このビエンナーレで、ヌロホはヴェデュータのプロジェクト作品以外にも、メイン会場のひとつラ・シュークリエールの外壁に作品を設置している。

(2) 2011年のレジデンス・プロジェクトから

① 概要

2011年のヴェデュータには、リヨンを含め7市町村が参加し、一般の参加者は1万2,000人にのぼる。その中で、レジデンス・アーティストは次の6名である(氏名、生年、出身、プロジェクト実施場所)。

- エルネスト・バステロス(Ernesto BALLESTEROS)、1963年、アルゼンチン・ブエノスアイレス生まれ、リヨン3・9区
- ジャルバス・ロペス(Jarbas LOPES)、1964年、ブラジル・リオデジャネイロ生まれ、フェイザン
- マリナ・ド・カロ(Marina de CARO)、1961年、アルゼンチン・ブエノスアイレス生まれ、ヴィルールバンヌ
- トレーシー・ローズ(Tracey ROSE)、1974年、南アフリカ・ダーバン生まれ、リヨン2区とフェイザン
- クリスチャン・ロピタル(Christian LHOPITAL)、1953年、フランス・リヨン生まれ、デシーヌ＝シャルピュー市
- ヨナ・フリードマン(Yona FRIEDMAN)、1923年、ハンガリー・ブタペスト生まれ、ミルベル・ジョナージュ大公園

レジデンス・プロジェクトは、それぞれの自治体と共同でプロデュースされた。

② 具体例

○ エルネスト・バステロスがリヨン3区と9区で実施したグライダー・プロジェクト

バステロスは、ビエンナーレの1ヶ月前にリヨンに来て、会期の終わるまで5ヶ月間滞在。子どもと大人を対象としたワークショップでは、本会場のシュークリエールのインスタレーションと同じようなグライダーの制作が行なわれた。その後何回か参加者と一緒にグライダーを飛ばす練習をした後、12月に入って、バステロスはリヨンの様々な場所でグライダー・インドア・コンクールを開催し、優勝者には彼の制作した署名入りのグライダーが贈られた。

また、バステロスは会期中、毎週水曜日と日曜日の12時から午後6時まで会場で観客を迎えた。

○ クリスチャン・ロピタルがデシーヌ＝シャルピュー市で実施したキューブ・ブラン

「キューブ・ブラン(cube blanc / 白い立方体)はデシーヌのサブロン＝ベルトディエール地区に置かれた3辺が6mの白い立方体の展示場です。ここでは2つの展覧会が行なわれましたが、働いたのはすべてアートと関わりのない普通の人々です。作品を理解することから始めて展示する側へまわるアートプロジェクトで、ソーシャル・プロジェクトでもあります」と、ラスパイユ氏は説明してくれた。

キューブ・ブランの展覧会ではリヨン現代美術館の作品やデシーヌに滞在したアーティスト、ロピタルの作品がそれぞれ展示された。

参加者はまず、4月から毎週、ワークショップで展覧会に関するあらゆる仕事の手ほどきを受け、その後、コミッショナーグループがロピタルのアトリエで展覧会用の作品を選定。ミーティングを重ねる中で参加者は作家の作品群を理解し、次第に展覧会の形を固めていった。つまり参加者が、キュレーター、管理人、メディアータといういろいろな役割を担うというプロジェクトである。

4. 運営体制と事業収支

運営母体は、ダンス・ビエンナーレと同じ、「ラ・ビエンナーレ・ド・リヨン」である。

現代美術ビエンナーレの予算は2011年(11回展)が約785万ユーロ(約10億2,000万円)、2009年(10回展)が約762万ユーロ(約9億9,000万円)である。2009年の収入内訳は下表のとおりで、公的補助金が全体の約67%を占め、自己収入と民間支援はそれぞれ約15%である。展覧会(キュレーター・フィー、プロダクション、ヴェデュータを含む)に約36%の292万4,000ユーロ(約3億8,000万円)が使われている。

グラン・リヨンの予算は2009年の263万ユーロ(約3億4,190万円)から2011年には268万ユーロ(約3億4,840万円)に増えているが、その理由は、ヴェデュータをさらに2市に発展させるためだという。

リヨン現代美術ビエンナーレの収入内訳(2009年)

財 源	金額(ユーロ)
公的補助金	5,096,000
グラン・リヨン	2,630,000
地域圏	800,000
国(文化省)	1,513,000
その他の公的助成*	153,000
チケット収入	902,000
その他の自己収入	239,000
特別利益	368,000
源泉消費税	- 114,000
メセナ(民間企業等)	1,104,000
計	7,626,000

*Fonds européen de développement régional (Feder), Agence nationale pour la cohésion sociale et l'égalité des chances (Acse), Association pour le développement économique de la région lyonnaise (Aderly) など

6. 現在の課題と今後の方向性

次回2013年秋のビエンナーレでも、ラスパイユ氏は、キュレーターに指名したクヴァラン氏とともに「ナレーション」をテーマにしたレジデンス・プロジェクトを、ヴェデュータの枠内で引き続き実施する構想である。

「フランスでは現代美術の新しい作品が生まれつつあります。20世紀の初めから80年代まで多くのアーティ

ストが出て来たのですが、当時は彼らの作品のためのスペースはありませんでした。その後、国や地方自治体が現代美術館やアートスペースを建設するようになり、同時に大きな議論が起きました。コンセプチュアル・アート、ポップ・アートとは一体何なのか?、と。今、美術館にはエデュケーション部門があります。アートを語るとき、メディアータが作品の前で説明するよりもっといい方法は、アーティスト自らが話し、市民と協働することだ、と私は思うのです。私たちのレジデンスプログラムは、アートプログラムであると同時に社会的プログラムでもあり、エデュケーションの一環だと考えています」とラスパイユ氏はレジデンスプログラムの意義を説明する。

ビエンナーレに関しては、さらに様々なストラクチャーがあることが大事だと彼は続ける。ビエンナーレはひとつのスペースだけでは不十分で、美術館やその他いくつもの会場にレジデンスなど様々なプログラムを結びつけて一種のネットワークを構築していく、というのが望ましい方向だというのである。

「横浜ビエンナーレを訪問したときにも、(そこはレジデンスではありませんでしたが、)広々としたスペースの中、公園や街の中を歩いている多くのアーティストに出会うことができました。ビエンナーレという機会があってこそこのことです。ビエンナーレではどのようにアートの専門家同士を結びつけていくのかも課題です」というのが、ラスパイユ氏の考えるビエンナーレとアーティスト・イン・レジデンスの関係である。



D. オランダ

1. ライクスアカデミー(国立美術アカデミー) | Rijksakademie van Beeldende Kunsten
2. デ・アペル・アーツセンター | De Appel Arts Centre
3. サンデーモーニング・アット・イーケーダブリューシー | sundaymorning@ekwc

写真:ライクスアカデミー(施設内に設けられた4つの工房のひとつ。アーティストの要望に基づきテクニカル・アドバイザーによって新しい製作技法が開発されることもある)

現地調査協力:三橋紀子(美術家、在ロッテルダム)

1ユーロ=130円で換算

1. ライクスアカデミー(国立美術アカデミー) |

Rijksakademie van Beeldende Kunsten

面会日: 2013年2月25日(月) 13:00-15:30

面会者: Wylske VISSER Program (Coordinator)

URL: <http://www.rijksakademie.nl/>

1. 運営機関の概要

(1) 設立趣旨・経緯

ライクスアカデミーは、1817年に王令で設立された王立美術アカデミーの後身として、1870年、時のイングランド王で後のオランダ総督、ウィレム三世(Willem III van Oranje)によって設立された。17世紀の美術工房や18世紀のアムステルダム市立アカデミー(Amsterdamse Stads Tekenacademie)の歴史やアカデミックな伝統も、当時のライクスアカデミーに受け継がれた。オランダを代表する画家、ピエト・モンドリアン(Piet Mondriaan)も1892年から3年間に在籍している。

1980年代になって、教育文化科学省(Ministry of Education Culture and Science)の指示で脱教育機関を目指した改革が行われ、アーティスト・イン・レジデンスへと変貌を遂げた。教室は個別のスタジオへ、教師は経験豊富なアーティストやアドバイザーへ、生徒は美術教育を修了した、国内外の若いアーティストへと置き換えられた。授業の代わりにワークショップが開かれ、アドバイザーがアーティストのスタジオを個別に訪問して、助言や意見交換を行うという、現在の形となった。ただし、今も教育文化科学省の管轄となっている。

80年代の大きな方向転換の後、90年代になって諸外国からのアーティストが増加し、ライクスアカデミーは国際的な地位を確立していった。その頃には、オランダや欧州にとどまらず、世界中のアーティストに門戸を開いていることが重要視されるようになった。

ライクスアカデミーは、国際的な芸術コミュニティの中でも中心的な存在となりうる機関で、そのことは、オランダやアムステルダム市にとっても副次的な効果をもたらしている。ライクスアカデミーが国内外のキュレーターや評論家を惹きつけることで、アムステルダム市の文化的なプレゼンスが高まり、それが内外から人を惹きつけ、観光業にも良い影響を与えるためである。

(2) ミッション

ライクスアカデミーは、国際的な美術界において、才能ある若手アーティストを育成し、現代社会においてアートとアーティストの地位を確立していくことを目標とし

ている。

2. プログラムの内容と実績

(1) アーティスト・イン・レジデンス

ライクスアカデミーに滞在するアーティストには、研究や制作のためのスタジオ、制作費、奨学金、アドバイザーによるサポートが、最長で2年間与えられる。滞在期間は1年間でスタートするが、ほとんどのアーティストは2年まで延長する。ライクスアカデミーは、単なる施設の提供だけではなく、制作に集中できる環境や時間、実験的な制作の場に加え、専門家との意見交換や議論の機会を提供している。

滞在アーティストは50名で、個別にスタジオが与えられ、施設内には制作に必要な設備や工房(ワークショップ)が揃い、技術講習や指導も受けられる。レクチャー、セミナー、旅行(エクスカーション)、他分野とのコラボレーションなども実施され、滞在アーティストの顔ぶれに応じてテーマや内容が決められる。

① アーティストの募集・選考方法、条件

例年、1,500から2,000人の応募があり、2013年度まではその中から25人が選考されていた。最近4年間の日本人応募者は年間40-70人で、ほぼ毎年1名が選考されている。2014年度から、選考はデ・アトリエ(De Atelier、アムステルダム市内の別レジデンス機関)と共同で行われ、合計30人が選考される予定である。同時に、今まで無料だった応募費用が50ユーロ(約6,500円)必要になった。開発途上国からの応募者は無料。

応募はオンラインで、履歴書、作品リストと作品の写真データを指定のサイトにアップロードする仕組み。ただし映像作品は郵送。アーティストは、①制作テーマや関心のあること、アーティストになった動機、②ライクスアカデミーに滞在する意味(アーティスト自身及び作品にとって)、という2つのエッセイを提出しなければならない。推薦状は不要。

年齢制限はないが、美術教育修了後3-5年のキャリアを積んだ、25-35歳位までのアーティストが対象で、応募要項にも明記されている。実際に選考されるアーティストも、ほとんどがそうした人たちである。

ライクスアカデミーのエントランス



アーティストの選考は、アドバイザーからなる選考委員会によって行われる。2014年度から、デ・アトリエと共同の選考委員会となり、オランダ国籍もしくはオランダ在住のアーティストの場合は、彼らに資金提供を行うモンドリアン・フォンズも選考委員会に参加する。何段階かの選考を経て、最終段階では60～70人のアーティストがアムステルダムに招かれ、面接を経て決定される。

その際に重視されるのはアーティストとしての「伸びしろ」である。作品の質も重視されるが、キャリアが確立されたアーティストが選ばれることはない。ただし、経験の豊富なアーティストが、さらなるリサーチや制作に集中できる環境を求めて滞在しているケースもある。アーティストが何をしたいのか、作品制作のリサーチにまとまった時間が必要なのか、積極的に制作して発表したのか、そして、ライクスアカデミーはそれに対して何を提供できるのかが考慮され、選考委員によって滞在に最適なタイミングどうか議論され、最終選考が行われる。

③ アーティストの費用負担と資金的な支援

海外アーティストには滞在許可申請などのサポートを行うほか、施設外にいくつかのアパートを管理しており、海外からの滞在アーティストに相場よりも安価で提供している。

滞在が決定したアーティストは、事前に年間2,750ユーロ(約36万円)の負担金を支払う必要があるが、1,500ユーロの材料費を含む1万2,500ユーロ(約160万円)の滞在費が支給される。

またアーティストには、可能な限り出身国の政府機関から、それが難しい場合は企業や財団などから、一人当たり1万5,000ユーロ(約195万円)の助成金を調達することが求められる。ただし、出身国によって条件が異なっているのが実情。今年度からライクスアカデミーへの政府予算が削減されたのに伴い、アムステルダムのアーティストはアムステルダム市から、オランダのアーティストはモンドリアン・フォンズから、韓国人アーティストは韓国アーツカウンシルから、トルコ人アーティストはトルコ政府から、といった具合に、特定の機関から資金提供を受けるように変わりつつある。なおこの助成金

は、アーティスト個人に対するものではなく、アーティストを通してスタジオを助成する形になっている。スタジオへの助成団体は今後も増加すると思われるが、現時点ではモンドリアン・フォンズ以外の資金提供団体は選考に関与していない。

最終選考の面接はアムステルダムで行われるが、そのための助成(渡航費等)はない。ただし、出身国によっては、面接でも助成金を得られる場合がある。また、ライクスアカデミーでも宿泊場所など金銭以外のサポートをすることがある。

④ 作品の構想、制作等に対する支援

ライクスアカデミーでは、経験豊富なアーティスト、美術史家、キュレーター、教育専門家などでアドバイザーチームを組織しており、アーティストは、通年で彼らの訪問(スタジオビジット)を受けられる。時には外部からゲストアドバイザーが招かれることもある。アーティストは彼らのスケジュール表を見て、コーディネーターにスタジオビジットを申し込む仕組みになっている。

スタジオビジットは1回、1時間半程度で、アーティストが一方向的にアドバイスを受けるというより、作品の構想や、様々な分野についてアドバイザーと話し合い、意見交換を行うといったスタイルのことが多い。

ワークショップ(工房)では、テクニカル・アドバイザーのサポートを受けられる。必要な技術の習得だけでなく、作品の構想に基づいて、まったく新しい技術が開発されることもある。つまり、作品の構想を膨らませる段階ではアドバイザーの、作品の制作段階ではテクニカル・アドバイザーのサポートを受けられる仕組みである。

ライクスアカデミーが、直接、キュレーターや美術評論家とのコンタクトを仲介することはないが、アーティストにはウェブサイトを経由してコンタクトできるようになっており、オープンデイを利用して直接アーティストとコンタクトを取ることもできる。ライクスアカデミーのアーティストに決定された時点で、彼らは既に専門家の間で注目される存在となるため、そうした仕組みを用意するだけでコネクションは自然と広がっていく。

(4) プログラムの実績、過去の滞在者

今までライクスアカデミーに滞在したアーティストの



ケミカルワークショップ

総数は900名を超えている。彼らの多くはアーティストとして成功を収めており、国内外の美術界に刺激を与え続けている。ライクスアカデミーでの経験と成長を元に、キュレーター、プロモーター、あるいは教育者になった者もいる。過去の滞在アーティストの作品は、国際的なビエンナーレや美術館で展示されたり、パブリック、プライベートを問わずコレクションされることも多い。以下はその一例である。

- ビエンナーレ・アートフェア等：ヴェネチア・ビエンナーレ2011の展示・関連イベント(20名)、イスタンブール・ビエンナーレ2011の展示・関連イベント(19名)、ロンドン・フリーズ2011(80名)、ニューヨーク・アーモリーショー2012(40名)
- 美術館コレクション：パリ・ポンピドゥーセンター(30名)、ロンドン・テートギャラリー(19名)、ニューヨーク近代美術館(22名)

80年代にレジデンスが始まって以来の日本人アーティストは次の12名(年度順)。小松敏宏(1995/96)、武智子(1997/98)、Mayumi NAKAZAKI(2000/01)、渡部睦子(2001/02)、Shunji HORI(2004/05)、出田郷(2004/05)、小泉明朗(2005/06)、川内朋子(2005/06)、隅本大心(2007/08)、萩原留美子(2008/09)、肥沼義幸(2009/10)、Lei SAITO(2010/11)。

このうち3分の2はそのままオランダで制作活動を行っている。修了後にライクスアカデミーから滞在許可申請などの支援を行うことはないが、滞在中の活動経験とコネクションによって、アーティストビザの申請が可能になっている。なお、2010年から滞在許可の特例が設けられ、日本人はビザ取得が容易になった。

(5) オープン・スタジオ

ライクスアカデミーでは、毎年11月末のライクスアカデミー・オープンをはじめ、一般公開のイベントを随時開催している。

① ライクスアカデミー・オープン

毎年11月最後の週末の2日間、ライクスアカデミーは一般公開される(2012年は12月1、2日)。50人の滞在アーティストのスタジオ・プレゼンテーションが行われ、2

日間で7,000人以上が来場する。アーティストは原則的に自身のスタジオ内で展示やプレゼンテーションを行うが、施設内の他の場所を使うことも可能。ただし、展示のための専用スペースはない。

期間中、キュレーター、美術評論家、コレクター、アーティスト等、多くの美術関係者が訪れるが、近隣住民を含むアムステルダム市民、学生、家族、友達、観光客など、様々な人が国内外からやってくる。来場者にはガイドブックが配布される。2012年度版は、A4カラー76ページで、各アーティスト1ページのカatalog、コレクション紹介、関係者4名の寄稿で構成されている。

2012年から、アムステルダムのギャラリーが日程を合わせて、アムステルダム・アート・ウィークエンドを開催している。ほとんどの企画にライクスアカデミーの出身アーティストが関わっており、共催ではないものの、ライクスアカデミー・オープンありきの企画となっている。

ライクスアカデミー・オープンは、有能な若手アーティストとその作品に出会える機会として、国際的にも重要なアート・プログラムと認識されている。

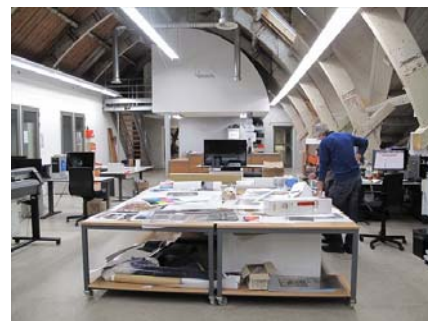
② 一般公開

普段ライクスアカデミーには関係者しか入れないが、9月の文化遺産公開日(Open Monumentendag)や11月第一土曜日のミュージアム・ナイト・アムステルダムなど、記念日やイベントに合わせて公開されることがある。

③ 一般公開イベント

2011年からは、アドバイザーのひとり、フィリップ・ピロッテ(Philippe PIROTTE)のキュレーションでライクスアカデミー・ライブが行われている。パフォーマンスやビデオワークなどのライブで、ライクスアカデミーの出身アーティストが毎回参加している。パフォーマンスの後、ピロッテ氏の司会で、ゲストと観客を交えたディスカッションが行われる。5回目の昨年は、ライクスアカデミーの出身アーティストの招待によって、北京のUCCA(Ullence Center for Contemporary Art)で開催された。

2012年には、アムステルダム市立美術館(Stedelijk Museum Amsterdam)と共催でStedelijk@Rijksakademieがスタートした。これまで、ライクスアカデミーで2回の公開レクチャーが行われている。



これら二つのイベントは、ライクスアカデミーのウェブサイト上で動画が公開されている。

3. 施設の構成と内容

(1) 歴史

ライクスアカデミーの建物は、1864年から65年に騎兵隊の兵舎として建てられたもので、1874年に厩舎が増築され、第二次世界大戦後は政府の医療倉庫として使われていた。建物は文化遺産に指定され、9月の文化遺産公開日には一般公開されている。1980年半ば、ライクスアカデミーは、当時の建物からより設備の整った環境への移転を計画し、オランダ人建築家クーン・ファン・フェルセン(Koen VAN VELSEN)を起用して改修を行い、1992年に現在の建物に移転した。

55のスタジオは本館2階と旧厩舎に、ワークショップ(工房)は中庭を囲む長方形の本館1階に設けられている。コレクションや蔵書などは、中庭新館に収められ、これらの建物はガラス張りの廊下でつながっている。

(2) ワークショップ(工房)

施設の中には以下の4つのワークショップがあり、テクニカル・アドバイザーが常駐している。複数のワークショップを同時に使って作品の制作を行うことも可能。材料の購入には実費が必要で、アーティストに支給される材料費から直接支払われる仕組みとなっている。設備の使用料は発生しない。

新しい設備の購入は、外部に委託する場合と比較して慎重に検討される。特定の企業から技術提供を受ける場合もある。最近購入した3Dプリンター(コンピューターで立体造形ができる機器)は、利用者も多く、正しい投資だったと評価されている。

① イメージ・アンド・サウンド・ワークショップ(写真、映画、ビデオ、サウンド、エレクトロニクスに対応)

撮影スタジオ、暗室、ビデオ編集室、録音スタジオ、デジタルスキャナーとプリンターが備えられ、カメラやビデオカメラ、プロジェクターの貸し出しも行っている。24時間利用可能で、新しい印刷技術、タイルなどの紙以外の素材への印刷を試しながら制作することができる。

② グラフィック・ワークショップ(凹版画、凸版画、リトグラフ、シルクスクリーン、アーティストの出版物に対応)

③ ケミカル・ワークショップ(ペイント、プラスチック、陶芸、ガラスに対応)

強制排気設備のある塗装室で樹脂系の素材を扱うことができる。作品制作のため、様々な素材と樹脂系の素材を融合させる実験が、アーティストとワークショップ・アドバイザーによって常に行われている。

④ コンストラクション・ワークショップ(鉄工、木工、精密機械に対応)

電動木工機械、溶接設備、破碎機械、鉄板加工用機械などが揃っている。

4. 運営体制と事業収支

(1) 運営組織

ライクスアカデミーでは、常勤のワークショップのテクニカル・アドバイザーを除いて、ほとんどが非常勤である。政府の予算削減で人員も削減され、今年度の運営体制は以下のとおりでスタッフ数は約20名。他に管理委員会、諮問委員会が設けられている。

ディレクター	<ul style="list-style-type: none"> 1名
レジデンス	<ul style="list-style-type: none"> 責任者 プログラム・コーディネーター 滞在申請・受入手続き担当 ウェブ・ドキュメンテーション担当 技術理論・図書館・コレクション担当 ワークショップ技術者(エレクトロニクス) ワークショップ技術者(イメージ・アンド・サウンド) ワークショップ技術者(コンストラクション) ワークショップ技術者(ケミカル)
オペレーション	<ul style="list-style-type: none"> 責任者 管理担当 秘書 コミュニケーションPR担当 ICT担当 カフェテリア管理担当
ファイナンス	<ul style="list-style-type: none"> 担当者(4名)
信託基金	<ul style="list-style-type: none"> 責任者 ライクスアカデミー交友会(Rijksakademie)

	Circle of Friends) 担当 ● 広報担当
アドバイザー	● 16名

現在のディレクターは、エルス・ファン・オダイク(Els VAN ODIJK)。1953年生まれで、美術史を学んだ後、マネジメントとコミュニケーションの複数のコースを修了。2000年から理事を務め、2010年にディレクターに就任した。シアター・プロダクト協会(Stichting Toneelschuur Producties)理事長、ファイフハウゼン芸術城砦(Kunstfort Vijfhuizen、中世アムステルダム市の城砦を改修した文化施設)のアドバイザーでもある。後述するRAINの共同設立者。

(2) 他の芸術関係機関等との連携状況

他のレジデンス機関とのパートナーシップはないが、世界中の美術館、中でもアムステルダム市立美術館とは緊密な関係にある。過去に滞在したアーティストの作品が展示されることも多く、滞在中のアーティストたちがブック・プレゼンテーション、アーティスト・トーク、レクチャー、データベースといったパブリックイベントに参加することも多い。

他にも、美術館とのコラボレーションは数多い。一例として、アムステルダム郊外のコブラ美術館(Cobra Museum voor Moderne Kunst)とは、カレル・アペル・ハウス(Karel Appelhuis)というプロジェクトを行っている。これは、芸術/運動集団コブラの結成メンバーのカレル・アペル(Karel APPEL)の生家を使って、11ヶ月のレジデンスプログラムとその後の1ヶ月間のオープンハウスを行うものである。

また、滞在中のアーティストは、科学者や他分野の専門家とのコラボレーションも行っている。ライクスアカデミーが特定の誰かを招くのではなく、アーティストの興味から派生して、希望者が参加する形態となっている。ライクスアカデミー・オープンなどが出会いの場となり、博士課程の若い科学者とアーティストの交流に発展する場合もある。ライクスアカデミーは、KNAW国立オランダ科学アカデミー(Koninklijke Nederlandse Akademie van Wetenschappen)とその関連機関、TNOオランダ応用自然科学研究所(Nederlandse Organisatie voor toegepast-natuurwetenschappelijk onderzoek)、大学、

フィリップスなど企業とも連携している。

ライクスアカデミーは、アムステルダムに拠点を置くレズ・アルティス(Res Artis)の創設時からの会員で、トランス・アーティスト(Trans Artists)のサイトにも情報が掲載されている。

(3) 事業収支

① 収入と支出の内訳

前政権時に文化予算の大幅な削減が可決され、今年から補助金が見直された。2012年度の教育文化科学省の補助金は400万ユーロ(約5億2,000万円)だったが、今年は60%削減され150万ユーロ(約1億9,500万円)。前年度までは、教育文化科学省の補助金が予算全体の75%を占め、残りの25%が国内外の財団、企業、個人などからの寄付だった。

今後、数年間補助金を受けるために政府が出した条件が、デ・アトリエとの統合だった。アーティストの選考は今年度から共同で行うことになったが、それ以外についてはまだ協議中である。今年度の予算は別々に措置されており、デ・アトリエの補助金は100万ユーロ(約1億3,000万円)だが、両者を足しても、昨年度までのライクスアカデミーの予算よりも少ない。

なお、2011年度の年間予算(支出額)は、680万ユーロ(約8億8,000万円)であった。

収入と支出の内訳(単位:ユーロ)

	2011年度	2010年度
収入		
教育文化科学省	5,351,000	5,355,000
一般出資金	165,000	500,000
寄付金	300,000	350,000
その他の収入	508,000	369,000
小計	6,324,000	6,574,000
支出		
事業費(レジデンス、ローマ賞、コレクション、パブリックイベント)	3,393,000	3,267,000
人件費	4,429,000	1,422,000
建物質料	1,991,000	1,940,000
小計	6,813,000	6,629,000



② 運営団体やアーティストへの資金提供機関

滞在が決定したアーティストは、ライクスアカデミーのサポートを得ながら、各自、助成金を調達するように義務づけられている。その結果、世界中のファンドから助成金が寄せられ、信託基金も運用されている。2013年度の資金提供団体は次のとおりである。

- 海外ファンド：ベルギー（Vlaams Ministerie van Cultuur, Jeugd, Sport en Media）、フランス（L'Institut Français des Pays-Bas）、ドイツ（Andrea von Braun Stiftung）、インド（Inlaks Shivdasani Foundation）、アイルランド（Arts Council of Ireland）、イタリア（Fiorucci Art Trust）、韓国（Arts Council Korea）、メキシコ（Fundación/Colección Jumex）、スペイン（Ministerio de Cultura）、スイス（Pro Helvetia, the Swiss Art Council）、台湾（Council for Cultural Affairs）
- 国内ファンド：アムステルダム美術基金（Amsterdams Fonds voor de Kunst）、オランダ・米国友好基金（Holland America Friendship Foundation）など13件。
- 国内企業：銀行、通信など12団体

5. 事業評価の実施状況

(1) 事業評価

ライクスアカデミーは、決算と年間事業報告書を教育文化科学省に提出する義務がある。政府の補助金の支給にはいくつかの条件があり、評価のガイドラインが定められている。また、オランダ文化評議会は、補助金団体について政府への助言や評価を行うとともに、国の文化政策に関するビジョンを策定し、教育文化科学省はそれに基づいて補助金を支給している。

2009－11年度の年次報告書はライクスアカデミーのサイトで公開され、2011年度は印刷板（カラーA3、24ページ）も配布されている。内容は、執行部報告（ディレクターの報告）、監督者（Supervisor）メッセージ、年間事業実績（レジデンスやコレクションの概要と受賞や展示の内容）、統計データ（レジデンスや組織に関する各種データ）、決算報告、信託基金、受賞者、文化予算削減について、となっている。2012年度以降は、同じようにデザインされた報告書を作成できるかどうかは予算

削減のため不透明である。

(2) 過去に滞在したアーティストのフォローアップとネットワーク組織（RAIN）

過去に滞在したアーティストの活動状況は常に把握するよう努めている。以前はそのためのスタッフがいたが、人員削減の対象となったため、現在は、ウェブサイトやフェイスブックを活用して情報を収集している。

ライクスアカデミーでの滞りを終え、自国に戻ったアーティストや彼らの関係団体の集合体によって、1990年代後半、RAINというネットワーク組織が設立された。ライクスアカデミーの主導で立ち上げたものではないが、設立時から連携している。現在、アフリカ8、アジア3、南米4の15団体が構成され、団体間、アーティスト間の交流やコラボレーションが行われている。ライクスアカデミーも、アーティストが滞在中に得たつながりを維持して、発展させていくことを重視している。

2012年には、ブラジルのマルコ・パウロ・ローラ（Marco Paulo ROLLA）が創設したCEIAの主催によって、ブラジルのベロ・ホリゾンテ（Belo Horizonte）でワークショップが開催され、ライクスアカデミーの滞在アーティストも何人かが参加した。

6. 現在の課題、アーティスト・イン・レジデンスの社会的意義について

ライクスアカデミーは予算や人員が削減され、デ・アトリエとの統合も決まっているが、クオリティを保持することを目指している。重要なことは、何を変えていくべきか、新しい機関として何が必要なのか、必要な設備はあるか、ゲストには誰を呼ぶべきか、アーティストには何が必要か。それらを自問し続けることで、そうすることでライクスアカデミー自体も発展できると考えられている。

アーティスト・イン・レジデンスの社会的意義を考える場合、科学者の研究と同じように、アーティストの創造活動にも時間が必要だということが認識されなくてはならない。制作や展示のためには時間が必要だが、レジデンスでは小額の資金的援助で、大きな成果が期待できる。海外の美術館にコレクションされたり、レジデンスの期間に作品に新たな展開が見られることもある。そ

うしたことを国にとって有益だととらえ、政府や社会がそれを認識して、投資することが有効である。

滞在アーティストへのインタビュー

面会者: セリーヌ・ベルガー (Céline BERGER)

1. 略歴、活動実績

仏サン・マーティン・エレス (Saint-Martin-d'Hères) 出身、エンジニアとして働いた後、ドイツ、ケルンのアカデミー・オブ・メディアアート修士課程を修了。ライクスアカデミー滞在2年目 (インタビュー時は1年2ヶ月)。

企業で働いていた経験を元に、企業社会の言語と問題を解体、流動化させ、美術表現に展開させている。主に映像を用いた表現活動を行っており、インスタレーション的な作品を制作することもある。アーティストとしてのキャリアは短いものの、高く評価され、様々な展示、上映会に招かれている。2012年、ナム・ジュン・パイク・アワード新人賞を受賞。

2. アーティスト・イン・レジデンスに参加した動機

ケルンのアカデミーに在籍していた時に、教授の勧めで応募した。

作品制作のためのリサーチに時間がかかる場合、ライクスアカデミーのように滞在期間が長いことは大きな助けになる。2年間というまとまった期間、日常の問題から開放されて制作できるのは貴重な機会。金銭的な心配もなく、滞在中に問題が起きたときも、助けてくれる人がいるのですべてがスムーズに進む。アパートも確保されているので、家探しに煩わされることもない。

自分はまだ美術界にネットワークがないため (通常ライクスアカデミーは、卒業後数年のキャリアを持つアーティストを選考するが、彼女は大学院修了から間をおかずに選考されている)、業界にいきなり出て行っても上手くいかないと思うので、作品を発展させる機会を持つことは重要だと思う。

3. 創作活動の支援

ライクスアカデミーでの滞在中で、自分にとって重要なサポートが2つある。

ひとつめはスタジオビジットで、経験豊富なアドバイ

ザーと1時間半にわたって、ディスカッションできること。アドバイザーは多分野にまたがっているため、制作のためだけではなく、ネットワークを広げることもできる。

ふたつめは、他の滞在アーティストと交流できること。まったく異なる分野のアーティストと作品について意見交換ができる。美術学校でも同じようなことはあるが、レベルの高いアーティストとシンプルな形で出会い、意見交換できることは素晴らしいと思う。ライクスアカデミーがコーディネートしてグループ活動を行ったり、全員参加で新入りのアーティストのプレゼンテーションを聞くこともある。毎年、旅行もあるので、交流は容易に深められる。

ここが初めてのレジデンスだが、すべてにおいてハイレベルなサポートを受けているので問題点はない。

4. 日本のアーティスト・イン・レジデンスについて

直接探したことはまだないが、友人が応募したことがあるので、話は良く聞いている。妹が東京で5年間働いていたので、1ヶ月滞在したことがあり、機会があればぜひ日本のレジデンスに参加したい。

自分の作品制作における典型的な特徴は、常に企業など、他分野のパートナーが必要だということ。ライクスアカデミーでは、ファシリテーターがコンタクトを取ってつないでくれた。そうしたスタッフの存在はとても重要な要素のひとつだ。作品の材料があれば十分というアーティストもいるだろうが、自分にとって作品の材料は他の人たちとのコネクションなので、仲介のサポートがあれば、制作を簡単にスピーディに進められる。

企業で働いている時、50年代にトヨタで開発された看板方式に関係する仕事をしたことがある。元の職場では日本企業との接点もあったため、日本には色々な面でとても興味を持っている。大野耐一のトヨタのマネジメントの本も読んだ。日本でどのような作品を作りたいか、事前に説明するのは難しいが、特定の企業とつながって作品制作に結びつくこともあると思う。

私の場合、作品を制作するにはリサーチに時間がかかるため、滞在期間がある程度長いということが必要。例えば1ヶ月の滞在中で作品をつくりあげることが不可能で、1年ぐらいいはあったほうがいい。

2. デ・アペル・アーツセンター | De Appel Arts Centre

面会日: 2013年2月26日(火) 15:00-16:00

面会者: Guus VAN ENGELSHOVEN (Coordinator of Curatorial Programme)

URL: <http://www.deappel.nl/>

1. 運営機関の概要

デ・アペル・アーツセンター (De Appel Arts Centre 以下、「デ・アペル」) は、現代美術を軸に展覧会、パフォーマンスやイベントを開催するアート・センターで、アムステルダム市中心部にある。アーティスト・イン・レジデンスに関連する事業として、滞在型のキュラトリアル・プログラムとギャラリスト・プログラムを実施している。

(1) 設立趣旨・経緯

デ・アペルは、ウィース・スマルス (Wies SMALS) の主導の下で1975年に設立された。オランダでは現代美術を専門とする最も歴史のある非営利団体の一つで、その名前は設立時に使用された元倉庫の建物の呼び名に由来する。設立当初、特にパフォーマンス、インスタレーション、ビデオアートの分野で高く評価され、さらに1984年にサスキア・ボス (Saskia BOS) をディレクターに迎え、世界的な名声を獲得した。

1994年、デ・アペルはキュラトリアル・プログラムをスタートする。当時、キュレーターの多くは大学で美術史を専攻していたが、プロのキュレーターになるためのニーズと大学の美術史課程の内容にギャップがあった。美術史課程では、展覧会の企画に必要な美術の歴史や文脈を学ぶことができるが、展覧会を実現するために必要な制作や運営、予算管理などのスキルを学べる場がなく、また、モダンアートの流れでアーティストやキュレーターのポジションが変化し、展覧会でのキュレーターの役割の重要性が高まったという背景がある。そして、デ・アペルはより実践的な内容を学ぶことができるプログラムを立ち上げる。学位は授与されないが、プログラムを修了したことがキャリアとして広く認められ、現在、第一線で活躍するキュレーターを多く輩出する。

2006年にディレクターに就任したアン・デメーステル (Ann DEMEESTER) は、先鋭的なプログラムを数多く企画し、また、透明性の高い運営とアクセスの向上を目指している。

(2) ミッション

デ・アペルは現代美術の潮流を視覚化し、広く一般に発信することをミッションとする。

2. プログラムの内容と実績

(1) 教育プログラム

デ・アペルでは、教育事業の一環として、キュレーターを対象とする滞在型のキュラトリアル・プログラムと、商業ギャラリーで働くギャラリストを対象とするギャラリスト・プログラムを推進している。

① キュラトリアル・プログラム

キュラトリアル・プログラムは毎年、9月にスタートして6月に終了する10ヶ月のプログラムで、前半の9月から1月までは主にチュートリアル、レクチャー、フィールド・リサーチを行い、後半の2月から6月までは展覧会の企画・制作を中心にチュートリアルやレクチャーを行う。また、そのほかに、展覧会のオープニングに参加したり、アーティストや美術関係者を訪問したり、参加者同士でミーティングをする時間が必要なため、仕事との両立は難しい。

チュートリアルでは、美術館のディレクターやキュレーター、アーティストがチューターとして指導を行う。現在、アムステルダム市立美術館のディレクター、アン・ゴールドステイン (Ann GOLDSTEIN)、アーティストのリースベス・ビク (Liesbeth BIK) やバーバラ・フィッサー (Barbara VISSER) などがチュートリアルを受け持つ。

レクチャーでは、キュレーターや美術史家、アーティストと出会い、意見交換をする機会を提供している。例えば、市立美術館で著名な美術史家やアーティストが参加するシンポジウムがあれば、キュラトリアル・プログラムの参加者と1時間でも話す機会をつくる。また、参加者が面会を希望するアーティストやキュレーターをゲスト講師として招くことも少なくなく、オランダ国内の美術館のニュースレターにそれらの名前を見つけたときには、すぐにコンタクトをとるようにしている。さらに、プログラムで展覧会を制作するときに、平面作品の展示方法を実習したいと参加者から要望があれば、国内の歴史博物館から展示技術の専門家を招いたレクチャーを行う場合もある。

フィールド・リサーチでは、オランダ国内や海外の主要な国際展、アートフェア、文化機関等の視察を行う。オランダ国内では、例えば、アムステルダムのライクス

デ・アペルの外観。オランダ語で「アペル」はりんごを意味する。



アカデミーに滞在するアーティストのスタジオを訪問している。参加者はアーティストから直接作品の話を聞いたり、最新のアートの動向について意見交換をする。海外のフィールド・リサーチでは、欧州の都市を訪問する短期の視察と欧州以外の国や都市を訪問する長期の視察がある。短期の視察では、主にロンドン、パリ、ベルリン、ケルン、ブリュッセル、アントワープ、ワルシャワなどの都市を年に7回程度訪問している。例えば、ロンドンで開催されるフリーズ・アート・フェア（Frieze Art Fair London）は毎年訪問する場所である。長期の視察は年に1回企画され、2014年はサンパウロ・ビエンナーレ（Bienal Internacional de Artes de São Paulo）が開催予定のため、ブラジルのサンパウロに視察に行く計画をしている。

プログラムの参加者のキュレーションする展覧会は毎年4月にデ・アペルで開催されている。企画から参加者全員で考え、共同作業で一つの展覧会を制作する。展覧会の会期中には、レクチャーやワークショップ、ギャラリーツアーも行う。参加者は企画から制作、運営までの一連の作業を通して実務的な経験を積み、多くの知識を得ることができる。

② ギャラリスト・プログラム

ギャラリスト・プログラムは、デ・アペルとフェア・ギャラリー（Fair Gallery）との共同プログラムとして2012年に開始された。フェア・ギャラリーは、欧州の4つのギャラリーで構成される共同組織である。

ギャラリスト・プログラムがスタートした背景には、キュラトリアル・プログラムと同様に、プロのギャラリストになるためのニーズと大学の美術史課程の内容にギャップがあった。そして、デ・アペルはギャラリストの実践的な業務内容を9ヶ月に凝縮し、プログラムとして提供している。一方で、キュラトリアル・プログラムはアーティストックで非営利を目的とするプログラムで、ギャラリスト・プログラムはコマーシャルでディーリングを目的とするが、デ・アペルはディーリングをしていないため、知識と経験豊かなギャラリストを招いて指導を行っている。

参加者は主要なアートフェアを視察するツアーに参加し、また、デ・アペルが提供する資料を読み、2つの研究課題を提出することが求められる。アムステルダム

に滞在する必要はないため、デ・アペルと参加者、参加者同士の交流は主にメールとインターネットを介して行われる。

主要なアートフェアを視察するツアーでは、年度ごとに6ヶ所から8ヶ所の候補が選出される。2013年度はライクスアカデミー・オープン（Rijksakademie OPEN）とアート・ロッテルダム（Art Rotterdam）のオランダ国内の2ヶ所、海外ではフリーズ・アート・フェア、アーモリー・ショー（The Armory Show）、ABCギャラリーウィークエンド・ベルリン&ワルシャワ（ABC Gallery Weekend Berlin & Warsaw）とアート・バーゼル・香港（Art Basel Hong Kong）の4ヶ所のアートフェアやアーティスト・イン・レジデンスの視察を予定している。視察先では、美術館のディレクターやキュレーター、コレクター、アーティストとの面会、また、展覧会や関連ワークショップの視察も行われる。

ファイナルプロジェクトでは、スイスのバーゼルのリスト・ヤング・アート・フェア（Liste The Young Art Fair）に出展するデ・アペルのスタンドの企画運営を行う。そこで、アーティストをプレゼンテーションして作品を売るという実地体験をすることができる。

(2) 募集・選考方法

デ・アペルでは公募で募集を行い、参加者を選考している。キュラトリアル・プログラムでは世界中から50人から80人の応募があり、6人から8人が選ばれる。また、2012年度からスタートしたギャラリスト・プログラムでは10人の応募があり、8人が選ばれた。

申請者は志望理由書、履歴書、展覧会の計画書、大学の指導教員や勤務先の上司からの推薦状（2通）を用意し、Eメールで応募する。展覧会の計画書では、具体的な企画内容、実施場所、出展アーティストの候補、予算を考慮する必要がある。

選考では、デ・アペルのディレクターと2名のキュラトリアル・プログラム・コーディネーターが書類選考を行い、12人から15人の候補者を選ぶ。そして、選考委員



デ・アペルの展示スペース

会を組織し、書類選考で選ばれた候補者とアムステルダムで面接を行い、最終的に6人から8人の参加者が選ばれる。選考委員会はチューターやゲスト講師と同様に、国内外の美術館のディレクターやキュレーター、アーティスト、教育者などの様々な専門家で構成されている。クンストハル・ウィーン (Kunsthalle Wien) のディレクター、ニコラウス・シャフハウゼン (Nicolaus SCHAFHAUSEN) もメンバーの一人である。

年齢的にもキャリア的にも様々な応募者がいるが、キュレーターとして数年の活動実績があり、より実践的なキャリアアップの機会を必要だと感じている28歳から38歳くらいのキュレーターからの応募が多いという。例えば、国際的な経験を積みたい、キュレーターとして今までとは違ったことがしたいなどの応募理由がある。また、展覧会を企画したいと考えるアーティストから応募がある場合もある。

書類選考では、以下の点を重視して選考している。

- 志望理由書:なぜこの時期に、デ・アペルのキュラトリアル・プログラムを選んで応募しているのか
- 履歴書:どのような教育を受けてきたのか、また、どのような経験を積んできたのか
- 展覧会計画書:展覧会をどう考えているのか?

デ・アペルでは、若手のキュレーターにチャンスを与える場合少なくないが、応募者のキャリアの中で、なぜこのタイミングでプログラムに参加するべきなのかということをよく検討しているという。例えば、もう少し実務経験を積んでから参加した方が良いと思われる場合や、すでに十分な実務経験があるために効果が期待できないと思われる場合があるため、タイミングは重要な要素だと考えられている。

また、第一次選考では、能力やキャリアが重視されるが、第二次選考では、グループとして活力が引き出されるようなメンバー構成になるように配慮しているという。国籍、文化的背景、経験も異なるキュレーターが世界中から集まる少人数のグループで共同作業をするためには、その構成が重要になるためである。

また、第二次選考で、6人中5人を既に選定し、もう一人を選ぶ場合に応募者の出身国を考慮する場合もある。例えば、シリア出身とベルギー出身の有力な候

補者が2人残っており、もしも、既に選ばれた5人の中にベルギー出身者がいる場合には、シリアの応募者を選ぶようにしている。

(3) プログラムの実績・過去の滞在者

デ・アペルのキュラトリアル・プログラムそのものが国際的な評価を得ているため、プログラム修了者の多くがキャリアアップに成功し、現在、第一線で活躍している。また、国際的な環境で学んだ経験がその後のキャリアに与える影響も大きい。

デ・アペルはプログラム修了者とのネットワークを大切にし、公式ではないが同窓会を開くこともある。過去のプログラム修了者の中から現在、第一線で活躍するキュレーターを以下のように抜粋した。

- ロレンツォ・ビナデッティ (Lorenzo BENEDETTI、イタリア出身、98年度参加)、ディレクター／フリースハル (De Vleeshal、オランダ、ミデルブルグ)
- デフネ・アヤス (Defne AYAS、トルコ出身、05年度参加)、ディレクター／ヴィッテ・デ・ヴィス (Witte de With、オランダ、ロッテルダム)
- アニー・フレッチャー (Annie FLETCHER、アイルランド出身、95年度参加)、シニア・キュレーター／アベミュージアム (Van Abbemuseum、オランダ、エントホーフェン)
- トビアス・ベルガー (Tobias BERGER、ドイツ出身。97年度参加)、シニア・キュレーター、M+ (中国、香港)
- ニキータ・チャイ (Nikita CAI、中国出身、09年度参加)、シニア・キュレーター／広東タイムスミュージアム (GuangDong Times Museum、中国、広州)
- アダム・シムツィック (Adam SYMCZYK、ポーランド出身、96年度参加)、ディレクター／クンストハル (Kunsthalle、スイス、バーゼル)

過去の日本人プログラム修了者は以下の2名。

- 神谷幸江 (97年度参加)、チーフ・キュレーター／広島市立現代美術館
- 原田真千子 (98年度参加)、キュレーター／秋吉台国際芸術村

キュラトリアル・プログラムのためのプロジェクト・ルーム。4月に開催予定の展覧会のためのミーティングを行う。



(4) その他のプログラム

デ・アペルは広い展示スペースを持つアート・センターで、1年を通して展覧会やパフォーマンス、イベントなどを開催している。また、出版業務にも力を入れており、これまで数多く出版してきた本は、デ・アペルのウェブサイトで購入することもできる。ライブラリーとアーカイブがあり、週2日、一般開放されている。

3. 施設の構成と内容

デ・アペルは、1階から3階に展覧会やパフォーマンスのための展示スペースがあり、最上階にオフィスエリアがある。そして、スタッフのオフィスの奥にキュラトリアル・プログラムのためのプロジェクト・ルームがある。プロジェクト・ルームは、作業をしたり、チュートリアルを受けたりする場所として使用されている。

デ・アペルには宿泊施設がないため、デ・アペルが市内のアパートの賃貸契約をして参加者に貸し出す場合がある。アムステルダムではアパートの賃貸契約をするのがとても難しいためである。

4. 運営体制と事業収支

(1) 運営組織

デ・アペルは非営利の芸術団体で、理事会がディレクターを任命する。ディレクターは組織の役職の任命権がある。ディレクターとマーケティング・コーディネーターの2名以外は非常勤のスタッフで、全体で16名のスタッフが働いている。キュラトリアル・プログラムの担当は2名、ギャラリスト・プログラムの担当はキュラトリアル・プログラムの1名が兼任し、いずれのスタッフも週3回の非常勤である。主な役職は以下のとおり。

- ディレクター
- ビジネス・ディレクター
- プロダクション・コーディネーター
- プロダクション・アシスタント
- 出版編集担当
- 出版流通担当
- 図書・アーカイブ担当
- キュラトリアル・プログラム・コーディネーター

- ギャラリスト・プログラム・コーディネーター
- マーケティング・広報 コーディネーター
- コピーライター
- オフィス・マネージャー
- 会計
- 技術アシスタント
- 受付

教育プログラムは、ディレクターのアン・デメーステル、キュラトリアル・プログラム・コーディネーターのフース・ファン・エン・ヘルスホーフェン (Guus VAN ENGELSHOVEN) とナタリー・ハルチェス (Nathalie HARTJES) の3名が運営をする。

デメーステル氏はゲルマン言語学を学んだ後、ベルギーの新聞「De Morgen」で文化を担当するジャーナリストを、「金融経済タイム (De Financieel-Economische Tijd)」で文学を担当する編集者をした経歴を持つ。ベルギーのアントワープにあるSMAM 現代美術館 (Stedelijk Museum voor Actuele Kunst) でヤン・フット (Jan HOET) のアシスタントキュレーター、ドイツのマルタヘルフォルト (MARTa Herford) で副ディレクターを務め、2003年、アムステルダムのコンテンポラリー・アート・センター、W139のディレクターに就任した。2006年から現職。

(2) パートナースhip

キュラトリアル・プログラムとギャラリスト・プログラムでは、レクチャーのためのゲスト講師を招くなど、オランダ国内や海外の文化機関、アーティストとの交流を盛んに行っている。また、それらの機関と交流プログラムを実施する場合もある。例えば、アムステルダムの大学院、サンドベルグ・インスティテュート (Sandberg Instituut) とは、大学院の学生の作品を囲んでデ・アペルのプログラムの参加者と学生がディスカッションをしている。また、ライクスアカデミーのスタジオビジットでも同様に、ライクスアカデミーに滞在するアーティストの作品を囲んでデ・アペルのプログラムの参加者とアーティストがディスカッションをしている。

(3) 事業収支

デ・アペルの主な収入は、教育文化科学省 (Ministry Education Culture and Science) とアムステルダム市から補助金である。通常より予算が必要な展覧会を企画するときは、モンドリアン・フォンド (Mondriaan Fonds) に企画助成の申請を行う。教育文化科学省からは文化基本基盤 (culturele basisinfrastructuur) と呼ばれる枠組みの補助金を受け、現在は2013年度から2016年度の4年間の補助が決定している。

キュラトリアル・プログラムとギャラリスト・プログラムは、参加者から参加費を徴収している。キュラトリアル・プログラムの一人当たりの参加費は7,000ユーロ (約105万円) で、チュートリアル、ワークショップ、レクチャー、オランダ国内と海外の視察の旅費が含まれる。また、ギャラリスト・プログラムの一人当たりの参加費は1万ユーロ (約130万円) で、オランダ国内と海外の視察の滞在費と市内交通費が含まれる。しかし、これらの参加費用だけではプログラムの予算を賄うことができないため、デ・アペルの全体の予算からも支出している。

デ・アペルは参加者に参加費用の補助をしていないが、参加者が自国の奨学金を申請する際に必要な書類を作成するなどのサポートは行っている。ギャラリスト・プログラム参加者は、参加者の所属するギャラリーが参加費用を負担することが多い。

5. 事業評価の実施状況

公的機関から補助金を受けるための条件として、ディレクターの任命を行う理事会が、職務の監督を行う。また、教育文化科学省やアムステルダム市にはアニュアル・レポートを提出することが義務付けられている。運営の透明化のために、インターネットで公開されている。なお、2011年度のアニュアル・レポートはA4カラー15ページで、展覧会、二次活動、発行物と出版書籍、キュラトリアル・プログラムとギャラリスト・プログラム、図書館・アーカイブ・コレクション、委員会とスタッフの構成メンバーなど、年間の活動の記録がまとめられたもので、決算報告は含まれていない。

6. 現在の課題と今後の方向性

近年、オランダでアートを取り巻く環境が変化してきている。政府からの予算削減も大きな課題であるが、芸術の卓越性の追求よりも、芸術の普及が求められてきている。

特に、キュラトリアル・プログラムやギャラリスト・プログラムは国民の利益になるのか理解を得るのが困難で、外国人の育成に税金を費やすことに疑問の声があがっている。デ・アペルでは、世界的に名声を得ているプログラムに世界中から才能ある人々がアムステルダムに滞在して知識や経験を向上することが、将来的にアムステルダムの利益になると考えているが、芸術の普及との整合性を図るために、キュラトリアル・プログラムの方向性を再検討するための専門家会議を計画している。ライクスアカデミーや、ヤン・ファン・アイク・アカデミー (Jan van Eyck Academie)、ロンドンのロイヤル・カレッジ・オブ・アートのコンテンポラリー・アート・キュレーティング部門、ロンドン大学ゴールドスミス・カレッジのキュレーティング・プログラム、そしてエコール・デュ・マガジンなどの代表者を招いて、意見交換をする場を2013年から17年にかけて持つ予定である。

また、デ・アペルでは、2012年からギャラリスト・プログラムを開始し、キュレーターはアートを取り巻く経済により目を向けるべきで、また、ギャラリストはアートの市場に目を向けるだけでなく、アートの芸術性により精通するべきだと実感したという。そして、2つのプログラムの特徴を活かして、これらの課題に取り組むたいと考えている。

3. サンデーモーニング・アット・イーケーダブリューシー | sundaymorning@ekwc

面会日：2013年2月26日（火）10:30－12:00

面会者：Ranti TJAN（Director）

URL：<http://sundaymorning.ekwc.nl/>

1. 運営機関の概要

サンデーモーニング・アット・イーケーダブリューシー（以下、サンデーモーニング）は陶芸を専門とするアーティスト・イン・レジデンスで、南オランダのデン・ボス市内（Den Bosch/s-Hertogenbosch）にある。陶芸家の集う工房としてスタートしたが、現在は、アーティスト、デザイナー、建築家を積極的に受け入れ、陶芸を用いた作品制作を支援している。芸術分野に垣根なく技術開発を推進しており、陶芸分野の革新に力を注ぐ。

(1) 設立の経緯

1969年12月7日、陶芸家ヤン・オーステルマン（Jan OOSTERMAN）とボイマンス・ファン・ベニンゲン美術館（Museum Boijmans Van Beuningen）の当時のキュレーターのベルナディネ・デ・ネーフエ（Bernadine DE NEEVE）の主導の下、デン・ボス近郊の町ヘースデン（Heusden）にサンデーモーニングの前身であるセラミック・ワーク・センター（KWC/ Keramisch Werkcentrum）がオープンした。当時、美術教育を修了したばかりの陶芸家に作陶を続ける環境がないという問題を背景に、KWCは若手の陶芸家を対象に10部屋のスタジオを開放した。作陶に必要な材料費や焼成代、スタジオ使用料に該当する助成金を支給し、また、美術館、ギャラリー、コレクターとの交流を後押しするなど、若手の陶芸家のキャリアを支援する取り組みを行った。

オープンからしばらくして、陶芸以外の分野のアーティストから作陶の施設を利用したいという要望があったため、1981年頃からワークショップやセミナーを開催して陶芸家以外でも施設を利用できる対応を始めた。

1987年、劇場のディレクターを歴任したアドリアン・ファン・スパンイエ（Adriaan VAN SPANJE）がディレクターとして迎えられた。スパンイエ氏は哲学と宗教倫理を学んだ後、15年間で9つの劇場のディレクターを務めた経歴があり、陶芸以外の分野からアーティストを受け入れることに前向きな考えを持っていた。ディレクターに就任後、アーティストの制作を支援するスタッフの数を倍増し、また、アーティストが施設で寝泊りして作業するようになったため、宿泊施設を備えた新しい施設を新しい場所につくることを検討する。オランダ国内のい

くつかの都市を視察した結果、1989年、施設の誘致に積極的であったデン・ボス市に移転することに決定し、1991年7月、古いコーヒー焙煎所を改装した現在の施設に移転した。

そして、移転を機にセラミック・ワーク・センターからヨーロッパ・セラミック・ワーク・センター（EKWC/ Europese Keramisch Werkcentrum）に改称する。「ヨーロッパ」を冠したことはとても重要なことで、国境を超えた開かれた場であることが意図され、また、伝統を尊ぶ陶芸の概念に革新をもたらすことでもあったという。国境と同じようにヒエラルキーが存在しないオープンソースであるという理念は、現在も受け継がれている。

1992年1月18日、24人のアーティストの作品の展示をするオープン・プロジェクトの発表とともに、正式にオープンしたEKWCでは、アーティストにとどまらず、建築家や文筆家の受け入れを始めた。アーティストは創作的な陶芸作品を、デザイナーはテーブルウェアなど、建築家はレンガや瓦の制作をするというように、90年代、EKWCはアーティスト・イン・レジデンスと陶芸分野の革新の場として広く知られるようになる。

2010年、ランティ・ヤン（Ranti TJAN）がディレクターに就任し、EKWCからsundaymorning@ekwcに名称を変更した。ヤン氏はCAD/CAMワークショップを新設し、3Dデザインの機材や3Dプリンターを導入するなど、陶芸の持つ可能性を一層広げる試みを行っている。

(2) ミッション

サンデーモーニングは国内外のアーティスト、デザイナー、建築家が陶芸の技術的な可能性と芸術的可能性を探究する場である。そして、アーティスト・イン・レジデンスと芸術の卓越性の場を運営することで、創作的な陶芸、デザイン、建築の発展を普及することを目的とする。

2. プログラムの内容と実績

(1) アーティスト・イン・レジデンス

サンデーモーニングでは、インディビジュアル・レジデンシーとプロジェクト・レジデンシーの2つのプログラムがある。



① インディビジュアル・レジデンシー

インディビジュアル・レジデンシーは約3ヶ月の制作機会を提供するプログラムで、年間約40人のアーティストを受け入れている。最大12人のアーティストが同時に滞在することができるが、窯の使用が重なってしまわないように滞在の開始日を振り分けている。

これまでの滞在アーティストの約90%は陶芸が専門外のアーティストで、初めて滞在する大半のアーティストは陶芸の知識や経験が全くない。そのため、サンデーモーニングでは、滞在アーティストから提出された制作計画書に基づいて滞在アーティストとのミーティングの機会を持つ。そして、たくさんの種類の粘土の中から制作に適したものを選び、必要に応じて制作の技術指導も行う。「陶芸の知識や経験のないアーティストには、まず粘土に触れてもらうことが大事だと考えています」とヤン氏は説明する。

滞在アーティストは施設を24時間使うことができる。多くの滞在アーティストは、到着してからほとんど外出せずに作業に没頭する。特に、陶芸の性質上、制作工程が複雑で納得のできる成果を得られない場合も多く、質の高い作品を作り上げるには試行錯誤が必要である。そのため、滞在アーティストは制作上の悩みや課題を共有し、上下関係のない家族のように過ごしている。一方で、家族や友人、アシスタントを同伴してはいけないというルールがある。それは、日常生活から離れて、創作に集中する環境を維持するためである。そして、滞在アーティストは成果として滞在中に制作した作品を一般公開する機会が与えられている。

サンデーモーニングでは、スタジオ代、ゲストルーム代、技術指導とその他のサービスを含む滞在費と税金(21%)を前払いで支払う必要がある。それは、サービスを提供する立場を明確にし、全員が同じ条件でコストを負担することを重要だと考えているためで、その公平さが滞在アーティストの結びつきを強める効果もあるという。なお、材料費、焼成代、3Dプリント代などの実費は、利用時に支払うことになっている。

② プロジェクト・レジデンシー

プロジェクト・レジデンシーは展覧会やコミッションワークのための制作、製品のプロトタイプ製作など、特定のプロジェクトのために施設を利用したいアーティストを支援するプログラムである。インディビジュアル・レジデンシーで滞在したアーティストは、再びインディビジュアル・レジデンシーに応募することができないルールがあるため、2回目以降の滞在を希望する場合は、プロジェクト・レジデンシーに応募する必要がある。

プロジェクト・レジデンシーでは、年間4人から8人のアーティストを受け入れている。週単位の滞在で申し込むことができ、過去に滞在したアーティストは直接電話で申し込むことができる。また、急を要するプロジェクトにも対応できるように、プロジェクト・レジデンシーのゲストルームを1部屋確保している。

なお、プロジェクト・レジデンシーでは、家族や友達等を連れてきてはいけないというルールはなく、アシスタントを連れてくる滞在アーティストもいるという。

(2) アーティストの募集・選考方法、応募アーティストの条件

サンデーモーニングのレジデンスに滞在を希望するアーティストは、申請書、アーティスト・ステイトメント、志望理由書、制作計画書、予算書、過去5年間に制作した作品の画像データ(最大14枚)を提出する必要がある。そのほかに、モンドリアン・フォonzのグラントに申し込む場合(オランダ在住のアーティスト)は身分証明書のコピーを、美術専門教育課程を修了して間もない場合は1もしくは2通の推薦状を提出する必要がある。なお、申請者は美術専門教育課程を修了後2年以上のアーティストでなくてはならないという条件がある。

制作計画書では、具体的な創作案を提示することが求められている。それは、サンデーモーニングが陶芸に触れる機会を提供するレジデンスではなく、アーティストの創造性を具体化するレジデンスであるからだと言氏は話す。また、滞在のスケジュールも綿密に計画する必要があり、例えば、最後の1週間は梱包して作品を送送するというように準備から完了までの段取りを考慮に入れなくてはならない。



予算書では、滞在中にかかる費用の概算とその費用を支払うことができることを証明する銀行の残高証明書等を提出する必要がある。

応募は35ユーロ(約4,550円)の有料で、申請に必要な書類は両レジデンスプログラムで共通である。サンデーモーニングではビザのサポートをしていないため、滞在期間に十分なビザを各自で取得することが義務付けられている。

募集と審査は年に2回あり、サンデーモーニングが選考を行う。同時にモンドリアン・フォonzに応募している場合は、モンドリアン・フォonzが選考を行う。

サンデーモーニングでは、選考の際に12人の滞在アーティストの組み合わせを考慮し、以下のような表を用いて年間の滞在アーティストの配分を決めるという。

	美術	デザイン	建築	陶芸	人数
欧州	-	-	-	-	8
オランダ	-	-	-	-	12
北米・南米	-	-	-	-	4
アジア	-	-	-	-	12
その他	-	-	-	-	12
小計	32	8	4	4	48

陶芸家を選考する場合は、世界最高クラスの作家を求めているため、年間で4人しか選ばれない。

募集は、サンデーモーニングのウェブサイトのほか、レズ・アルティスやトランス・アーティストのウェブサイトを通じて告知している。過去にアニッシュ・カプーア(Anish KAPOOR)やトニー・クラッグ(Tony CRAGG)、他にも著名なデザイナーや建築家が滞在していたことで、陶芸以外の分野のアーティストにも広く知られるようになり、応募者は毎年、数百人にのぼるという。

その一方で、サンデーモーニングからアプローチすることもある。例えば、アフリカからの応募があまりない場合は、セネガルやモロッコなどの機関とのプロジェクトを立ち上げ、それらの国のアーティストが滞在できるように助成も行う。また、交流の少ない国や地域から有名な作家や関係者を招待することもある。

(3) アーティストへの支援内容

サンデーモーニングのレジデンスは有料で滞在費を支払う必要があるが、その滞在費には制作に関する技術指導なども含まれている。

一方で、有料の滞在費を賄うための支援制度があり、滞在希望者はサンデーモーニングのグラントもしくはオランダ在住アーティストを対象とするモンドリアン・フォonzのグラントに申請することができる。サンデーモーニングのグラントの支給額は3ヶ月の滞在費と同額の1万8,000ユーロ(税抜、約230万円)で、モンドリアン・フォonzのグラントの支給額は3ヶ月の滞在費と材料費、追加施設使用料に相当する2万ユーロ(税抜、約260万円)である。どちらのグラントも、グラントの同時申請の有無を選ぶ申請書の項目にチェックをするだけで、特別な手続きは必要ない。また、プロジェクト・レジデンスーの場合は、滞在期間や制作内容によって支給額が決められる。

過去に、ホームシックになる滞在アーティストやレジデンスに馴染めない滞在アーティストがいたため、毎週月曜日にキャリアについての相談会、毎週水曜日に陶芸の技術についての相談会を実施し、滞在アーティストの精神的なケアも行っている。特に、昼夜を問わず制作を行っているアーティストには、健康を損ねないために、寝るべきだとアドバイスして部屋へ戻すという対応をする場合もある。

(4) プログラムの実績・過去の滞在者

1969年の創立から現在までの滞在アーティスト数の累計は約800人で、日本人のアーティストは1991年から2011年の間に35名滞在した。著名な日本人の滞在アーティストは以下のとおりである。

- 中村錦平(1991) 多摩美術大学教授
- イケムラレイコ(1995/98) ベルリン芸術大学教授
- 金子潤(1995/96/2001) 京都精華大学客員教授
- 秋山陽(2004) 京都市立芸術大学教授

(5) その他のプログラム

サンデーモーニングはレジデンスプログラムに加え、展覧会と出版事業に取り組んでいる。また、施設の一部を一般に開放している。例えば、3Dプログラムのワ

中型の窯と大型の窯



ークショップは滞在アーティスト以外も利用可能で、毎月最後の金曜日には、一般向けに施設全体のツアーを実施している。

① 展覧会

大学等の共同プロジェクトとして、年に2-3回、展覧会の企画を行っている。また、国別や特定のテーマの展覧会を企画することもある。例えば、2007年にロッテルダムで開催された「レンガ展 (Brick: the exhibition)」では、レンガをテーマに、国内外の著名な建築家や様々な分野の専門家が新しい種類のレンガや新しい使用方法を提案する展覧会を企画した。

② 出版事業

1992年のオープニング・プロジェクトのカタログを制作して以後、出版事業に取り組んでいる。特定の作家を特集する本や、ガラスと陶器を一緒に焼く技術や釉薬について特集する解説書などを出版している。単独で出版する場合もあるが、出版社との共同出版や、過去に滞在したアーティスト、美術館、ギャラリーなどとの共著もある。

サンデーモーニングが出版した本に興味を持った団体から講演会の登壇を依頼されたこともあるなど、出版事業はサンデーモーニングのネットワークを広げ、また、レジデンスを宣伝してくれる効果もある。

3. 施設の構成と内容

サンデーモーニングは生活施設と作業施設で構成される。生活施設には、12部屋のゲストルームと共同キッチンがあり、各ゲストルームはバストイレ付きで、生活に最低限必要なものがある。また、作業施設には、各滞在アーティストのためのプライベートスタジオと作陶の各工程に対応した設備や材料が全て揃っている。そのため、滞在アーティストは施設の外に出ることなく制作に集中することができる。プライベートスタジオのサイズは様々で、滞在アーティストの専門分野や作風に合わせて割り振られる。

(1) 生活施設

滞在アーティストにバストイレ付きの個室を提供する一方で、キッチンを共有にしていることに特徴がある。

滞在アーティストは共有スペースで時間を過ごすことで、他の滞在アーティストと自然に交流をすることができる。また、12人の滞在アーティストが当番制で夕食の支度をしている。ベジタリアンやビーガンなど、食事に制限がある滞在アーティストもいるため、食事を共有することでお互いを尊重する心が生まれ、グループが一つにまとまる効果があるという。毎朝10時には、滞在アーティストとスタッフがダイニングキッチンに集まり、コーヒータイムを過ごしている。

また、滞在アーティストが憩う場として図書室がある。堅苦しくないリラックスした雰囲気スペースで、ソファとテレビ、数台のコンピューターがある。窓の外にはテラスがあり、夏はそこで過ごすこともできる。

(2) 作業施設

作業施設は24時間オープンしており、照明は自動点灯で制御されている。多様な形の型や様々な技法に対応する用具や鉛筆等の細かい道具も揃っている。

作業施設の中には、製パン機やオリーブ絞り機も置いてある。これは、様々な機械や道具を用いて、作陶の可能性を広げることにチャレンジしているためだと言う。ヤン氏は、「例えば、粘土乾燥機でラムローストを作ったりすることができるかもしれません。物の使い方は一つではないのです」と説明する。このような環境から新しいアイデアを得る滞在アーティストもいると言う。

週に3回、2名の清掃作業員が作業場を掃除しており、作業施設はきちんと整えられている。水場で粘土を扱う作業場は、部屋中を水洗いして粘土汚れを洗い流すことができる。このような掃除も考慮して設計された施設のため床は平らに作られており、水はけなどの問題はない。

① 粘土と成形

粘土貯蔵室には、様々な粘土が種類ごとに分かりやすく置かれており、滞在アーティストは到着後すぐにも作業を始めることができる。粘土を練るための作業場には、真空土練機があり、型成形の作業場には、多様な型が揃っている。

② 施釉

施釉の作業場には、壁一面に様々な釉薬と、棚に

施釉の作業場で色見本を説明するヤン氏と様々な釉薬の棚



色見本資料がある。自分で調合することもできるが、粘土、釉薬、火の温度などの条件が合わないと同じ色を出すことはできないため、その作業を補助する施釉担当の技術者が2名配置されている。吹きつけができる部屋も別にある。

③ 窯

1991年の施設開設当時に、当時のスタッフが作ったもので、そのスタッフが運営する窯制作会社ブラウ・プロダクト(Blaauw Products)は現在では高い評価を受けている。そのため、窯設営を予定する団体から見学者が頻繁に訪れる。開設当時は小さい窯しかなかったが、現在では数台の窯がある。最も大きな窯は6,000リットルサイズで、全ての窯はコンピューターで制御されている。窯入れの台車、リフトなどの全ての備品が窯のサイズを合わせて設計されている。

④ 木工鉄工室

作品制作のためだけではなく、自国へ作品を輸送するための輸送箱(クレート)を作る場としても利用されている。担当技術者が1名配置されていて、輸送箱の制作を依頼できるが、滞在アーティストが自作してもよい。

⑤ Cad/Camワークショップ

Cad/Camワークショップには、平面のドローイングから3Dデータをおこして、立体造形をつくる3Dプリンターとコンピュータープログラムがある。2010年に欧州委員会から1,000万ユーロ(約13億円)の助成を受け、高額な最新鋭の3Dプリンターと中古の3Dプリンターを導入し、開設された。コンピューター制御で固めた粘土ブロックに3Dプリントをすることができ、手作業では塑像できない形を作ることができる。システムはオンラインでも操作できるので、米国から遠隔操作して制作も可能である。ヤン氏は、「陶芸分野の総本山として、技術的に最高であることを自負し、機材も最も新しいものを揃えています」と話す。このワークショップに魅力を感じて応募するアーティストもいるという。

4. 運営体制と事業収支

(1) 運営組織

運営組織はディレクター、アドミニストレーター、コーディネーター、技術監督者、技術者、清掃作業員、事務員の22名で構成される。レジデンスプログラムを中心的に運営するスタッフは、ディレクター、アドミニストレーター、技術監督者の12名である。政府からの補助金が削減されたため、レジデンスプログラムを運営するスタッフの数を22名(2012年)から8名(2013年)に減らした。新しい資金提供者を探してその数が増える度にスタッフを増員して2月末現在でその数は12名になった。

(2) パートナーシップ

サンデーモーニングは国内ではレジデンスプログラム施設と陶芸分野の革新の場と知られ、世界中の陶磁器の工房や窯元、文化機関と関係を結んでいる。その中には信楽焼の窯元などが含まれている。

レズ・アルティス(Res Artis)とICOM 国際博物館会議(International Council of Museums)の2つのメンバーシップに加盟している。また、アムステルダムを拠点とするレズ・アルティスとトランス・アーティストズ(Trans Artists)に、レジデンスの情報を公開している。アーティストに最適なレジデンスプログラムの情報を提供するという点で評価しているとヤン氏は話す。

(3) 事業収支

2012年度の予算は130万ユーロ(約1億7,000万円)であったが、2013年度の予算は60万ユーロ(約7,800万円)になった。2012年度までは政府からの補助金が予算の約75パーセントを占めていたが、2013年度より、その補助金が完全に停止されることになったためである。また、モンドリアン・フォonzの助成金は、滞在アーティストに直接助成するという仕組みに変わった。そして、新しい資金提供者を探した結果、デン・ボス市から今年度から補助金を受けることができたという。

レジデンスの事業費は、3ヶ月の滞在アーティスト一人当たりで約2万ユーロを経費として算出している。これまでの滞在アーティストからは3,120ユーロ(240ユーロ×13週)を徴収するだけであったが、政府からの補助

Cad/Camワークショップの入口と
3Dプリンター



金がなくなったために、今では全額負担にしている。なお、プロジェクト・レジデンスで2度目もしくは3度目と滞在する場合、週240ユーロの滞在費の2倍もしくは3倍の滞在費を徴収している。クライアントから委嘱された作品の制作で滞Inする場合が多く、滞在アーティストの負担にはならないためである。

なお、サンデーモーニングは建物を所有しているので、賃貸料支払う必要がない。

2013年度資金提供団体は以下のとおり。

- 北ブラバント州 (Provincie Noord-Brabant)
- OP-Zuid 南オランダ・オペレーショナル・プログラム (Het Operationeel Programma Zuid-Nederland)
- 欧州地域開発基金 (European Regional Development Fund)
- デン・ボス市 (Gemeente 's-Hertogenbosch)

5. 事業評価の実施状況

サンデーモーニングでは、事業評価を実施していない。

これまでに最も成功したプロジェクトの事例として、2010年に滞在したクリスティー・ライト (Christie WRIGHT) のオーディオウェア (Audiowear) があるという。デザイナーのライト氏は3Dプリンターを使った成形で、楽器になるアクセサリーを制作した。レジデンスを終了してニューヨークに戻った彼女は、ナイトクラブでDJたちにその作品を用いて演奏してもらい、その後、その作品はMADミュージアム・オブ・アート・アンド・デザイン (Museum of Arts and Design) にコレクションされ、さらに彼女はクラウド・ファウンディングを使って、作曲家やDJたちとミュージックアルバムを制作した。ヤン氏は、「サンデーモーニングで新しい技術を駆使して制作された作品がミュージアムにコレクションされ、また、一般の人々にも購入された、理想的なプロジェクトでした」と説明する。

6. 現在の課題と今後の方向性

サンデーモーニングは、新しいレジデンス施設を建設する計画をしている。陶芸と、ガラスやテキスタイル

などを含む複合的な分野に対応するラボやワークショップがないため、現在の施設の倍の広さで最大24人のアーティストを同時に受け入れられ、様々な芸術分野の制作に対応する設備を持つレジデンス施設をつくりたいという。例えば、ティルブルフのテキスタイル・ミュージアム (TextielMuseum) に併設されたテキスタイル・ラボでは、ミュージアムの開館時間内でしか作業をすることができなく、デンマークのコペンハーゲンにあるSVK デニッシュ・アート・ワークショップ (Statens Værksteder for Kunst) では、セラミック、テキスタイルを含む複合的な分野に対応するワークショップがあるが、レジデンス用のアパートは1部屋しかないという。

また、サンデーモーニングはアジア圏との結びつきが十分でないことを課題としている。例えば、日本にはたくさんの陶芸分野の文化機関があるが、日本のアーティストからの応募が少ない。今後、サンデーモーニングをアジア圏でも広く知られるような施設にしたいと考えている。



E. ベルギー

1. カーシアター | Kaaitheatre
2. ワークスペースブリュッセル | workspacebrussels
3. ウィールズ | WIELS

写真:ウィールズ(旧ビール醸造工場をリノベーションした美術館と。エントランスホールにはビールを醸造するタンクが残っている)
現地調査協力:倉本祐(美術家、在ロッテルダム)
1ユーロ=130円で換算

1. カーイシアター | Kaaitheater

面会日: 2013年3月1日(金)9:00-9:45

面会者: Guy GYPENS (Artistic Director)

URL: <http://www.kaaitheater.be>

1. 運営機関の概要

カーイシアターは舞台芸術作品の共同製作と上演プログラムの企画や運営を事業の柱として、ベルギーの首都ブリュッセルで劇場を運営する。主な上演プログラムは、演劇、ダンス、音楽をはじめとする実験的な舞台芸術作品で、共同製作事業の一環としてレジデンス事業に取り組んでいる。

(1) 設立経緯

カーイシアターはユーゴ・ドゥ・グレーフ (Hugo DE GREEF) により隔年の国際フェスティバルを運営する芸術団体として1977年に設立された。当時、カーイシアターはフェスティバルで作品を上演するだけでなく、アーティストとともに共同製作した作品を欧州の各地の劇場等で発表していた。そして、1987年から短期間で終わるフェスティバルでなく、年間を通して上演プログラムを企画するようになる。自前の劇場を持たないカーイシアターは国内各地の劇場を借りて公演を行っていたが、90年代前半に、倉庫として放置されていたルナシアターを見つけ、ベルギー・フランダース政府の協力を得て1993年からルナシアターを拠点に活動を始める。当初は劇場名をルナシアターとしていたが、2001年よりカーイシアターと改称し現在に至る。

1932年に建設されたルナシアターは後期アールデコ・モダニスト様式の建築物で、劇場、カフェ、オフィススペース、会議場、集合住宅を備えた多目的ビルであった。しかし、1960年代から1980年代にかけて諸事情により倉庫として利用されるようになり、建物の大部分は未使用の状態で放置されていた。1992年、ベルギー・フランダース政府がルナシアターを所有する不動産業者と30年間の借用契約を結び、本来の用途である劇場として再出発をした。

カーイシアターは実験的で斬新な舞台芸術作品を紹介する劇場として広く知られているが、団体の基本方針は新作の舞台芸術作品をアーティストとともに共同製作することだという。そのため、長期にわたりアーティストとの共同製作をするためのプラットフォームとしてレジデンス事業に取り組み、大規模な施設の一部を

アーティストやカンパニーに提供している。

(2) ミッション

カーイシアターはアーティストにスタジオやリハーサルスペースを提供して新作公演のプロデュースすること、また、より実験的で社会性のある舞台芸術作品を広く観客に紹介することをミッションとする。

2. プログラムの内容

(1) レジデンス事業

カーイシアターのレジデンス事業では、アーティストにオフィススペース、スタジオやリハーサルスペースを提供し、アーティストとの長期的な関係を持ちながら新作公演の共同製作を推進している。近年、アーティストや芸術団体が国際化する一方で、地域や観客との結びつきが希薄になっていることを背景に、アーティストと地域や観客との関係を再び深めていく目的がある。

欧州の舞台芸術業界では独自のアイデンティティを持つ規模の小さいカンパニーが主流で、その状況に柔軟な対応が必要と考え、4名のアーティストを4年間支援するアーティスト・イン・レジデンス・プログラムを軸に、アーティストの要望に合わせた多様なレジデンスプログラムを展開している。

① アーティスト・イン・レジデンス

このレジデンスプログラムでは、アーティストの活動を4年間という長期にわたり支援し、それらのアーティストの作品を共同製作することを目標としている。現在、4名のアーティストがレジデント・アーティストとしてカーイシアターと関わりを持ち、共同製作の過程でリサーチやリハーサルを行い、また、アーティスト・トークやワークショップを実施している。

レジデント・アーティストはカーイシアター内にスタジオやリハーサルスペースや事務所を置くことができ、また、カーイシアターに経理業務を委託することもできる。既にリハーサルスペースを所有するアーティストや、カーイシアターとは別の劇場やスタジオにリハーサルスペースを持つアーティストは、必要に応じてのみカーイシアターでリハーサルを行う。最終的に作品を仕上げる際には劇場スペースでリハーサルを行い、照明や音



2013年から2016年までのレジデント・アーティスト。左から、Eleanor BAUER、Ivo DIMCHEV、Mette INGVARSEN、Kris VERDONCK
© Danny Willems, Kaaitheater

響などの舞台技術スタッフの協力を得ることができる。また、作品のアドバイスをするカーイシアター専属のドラマトゥルクもいるという。

4年間のレジデンスプログラムで、カーイシアターがレジデント・アーティストの全作品のプロデュースを手がけることはなく、また、全ての活動経費を負担することもない。多くのアーティストは他の芸術団体や文化施設と契約を持つ自由があり、独立した活動を維持している。アーティストは束縛を受けることもなく、カーイシアターに依存することもないが、充実した環境で新作の創作に専念することができる。

② アソシエイト・アーティスト

アソシエイト・アーティストは特定の期間を持たないが、アーティスト・イン・レジデンスのレジデント・アーティストとほぼ同様の支援を受けることができる。例えば、ベルリンで暮らすアーティストがカーイシアターにカンパニーのオフィスを置くことも可能で、様々ななかたちで支援を受けることができるが、カーイシアターとの関係も流動的である。メガ・ステュワート(Meg STUART)率いるダメージド・グッズ(Damaged Goods)のような規模の大きいカンパニーから規模の小さいカンパニーまで様々なカンパニーが、アソシエイト・アーティストとして活動する。

③ 短期レジデンス

短期レジデンスでは、特定のプロジェクトへの支援のために約2週間から5週間の滞在の機会を提供している。プロジェクトの規模や内容によりその支援内容も大きく異なるが、この枠組みで新作を共同製作したアーティストもいる。その場合は前述した2つのレジデンス事業と同様の支援関係をカーイシアターと築くこととなったという。

④ その他のレジデンス

上記のレジデンスでは共同製作やプロジェクトの支援を目的とするが、研究を目的とするレジデンスの機会を提供する場合もある。アーティストはオフィスとリハーサルスペースの提供を受け、実験的なパフォーマンスの制作のために研究に専念することができる。例えば、カーイシアターを含めた4つの団体が連携し、各団

体が5,000ユーロ(約65万円)の研究費を支給し、振付家ジョナサン・バロー(Jonathan BURROWS)の研究を支援した事例がある。バロー氏はカーイスタジオ内に研究室を構え、1年間ブリュッセルに滞在した。このような研究を目的とするレジデンスプログラムでは、カーイスタジオにて作品を発表する場合もあるが、作品の創作を重視していない。一方で、純粋な研究活動を支援することはカーイシアターの本質ではないという。その理由を「私たちは劇場ですので、観客に見せる作品が常に必要なのです」と芸術監督のフイ・ヒュペンス(Guy GYPENS)は説明する。

(2) アーティストの受入期間

アーティスト・イン・レジデンスプログラムの受入期間は4年間である。アソシエイト・アーティストでは特定の期間の規定はなく、アーティストとの話し合いの上で決定される。また、短期レジデンスでは、約2週間から5週間の滞在の機会を提供している。

(3) 支援内容

主な支援内容はオフィススペース、スタジオやリハーサルスペースの提供などの支援と、作品の共同製作に必要な支援である。

カーイシアターがアーティストへ提供できる最大限の支援の例として、ア・トゥー・ドックス・カンパニー(A Two Dogs Company)の主宰者クリス・ファドンク(Kris VERDONCK)との共同製作がある。この新作はフェスティバルと連携して2013年5月に初公開される予定で、カーイシアターがプロデュースをする。現在、ファドンク氏のカンパニーはカーイシアターに専用オフィスとリハーサルスペースを構え、カーイシアター専属のドラマトゥルクが作品のアドバイスをを行う。カーイシアターはリハーサルのために6週間という長期間大劇場を提供する予定で、他の資金提供者を見つける支援もしている。

(4) アーティストの募集・選考方法と傾向

通常、カーイシアターは独自のリサーチをもとにアーティストを招待している。特に、演劇、ダンスや音楽などの領域を横断する表現やそのほかの実験的な表現に挑戦しているアーティストで、大型のステージでの作品発表に興味のあるアーティストに注目しているという。



カーイシアターの外観 © Danny Willems, Kaaitheater

また、多くの観客動員を見込めない場合でも、アーティストのキャリアの育成になると判断した場合には、積極的に支援を提供する。一方で、最終的に大型のステージに不向きな作品になった場合には、その規模に合わせて上演する会場を変更することもある。

(5) レジデンスプログラムの成果

カーイシアターは共同製作して完成した舞台芸術作品がレジデンス事業の主な成果と考えている。プレミアをカーイシアターで迎えるために、レジデンスプログラムに参加するアーティストも多いが、レジデンスプログラム参加後に他の劇場でプレミアを迎えるアーティストもいる。あるアソシエイト・アーティストはリハーサルをカーイシアターで行い、プレミアは他の劇場で開催したという事例もある。

また、カーイシアターがレジデンス事業に取り組む意義は、新作公演のプロデュース以外に、アーティストとより深く関わることができるという点にある。「レジデント・アーティストは芸術団体に大きな影響力を持っています。芸術団体が本来求めていることは、アーティストが機動力となって芸術団体とともに前進していくことです」とヒュペンス氏と説明する。例えば、レジデント・アーティストのエレノワ・パウワー (Eleanor BAUER) は、新作の製作とともに、「パウワーの時間 (BAUER hour) 」

と呼ばれるトークショーの開催を計画した。これは、アーティストの新しいアイデアについて観客との対話の機会であると同時に、アーティストがカーイシアター周辺で起きている政治的問題、社会的問題や環境的問題に触れる機会であり、カーイシアターの活動理念を理解する機会でもあるという。

3. 施設の内容

カーイシアターはブリュッセル市内にあるカーイシアターとカーイスタジオの2つの施設を運営する。

カーイシアターは1932年に建てられた後期アールデコ様式の建物で、モダニスト建築の影響を強く受けた建物内に劇場、カフェ、チケットオフィスとオフィススペースを有する大規模な施設である。カーイシアターの大劇場の最大観客席数は369席で、用途によって観客席のレイアウトを変更できる。現在、16の劇団やダンスカンパニーがオフィスを置き、スタジオを利用している。

ネオ・ロココ様式の旧ビール醸造所の一部を1983年に改装したカーイスタジオには、音楽スタジオ、ダンススタジオ、演劇スタジオの3つのスタジオ、2つのリハーサルスペースと、小規模のコンサートなどで利用が可能な多目的オープンスペースがある。カーイスタジオでも公演が行われることがあり、リハーサルスペースの



カーイシアター
© Kaaitheater

うちの一つには110席の客席が付帯する。さらに、醸造所のオーナーが居住していたというカーイスタジオに隣接する建物には、現在、若手アーティストを対象にアーティスト・イン・レジデンスを運営するワークスペースブリュッセルと3つのカンパニーがオフィスを置く。

4. 運営体制

(1) 運営組織

カーイシアターは文化事業を運営する非営利団体で、主に上演プログラムの企画や制作、レジデンス事業に関わるスタッフ6名と、それ以外に事務スタッフ3名、広報スタッフ4名と舞台技術スタッフ9名が働いている。

- Guy GYPENS, Artistic Director
- Katleen VAN LANGENDONCK, Programmer
- Lana WILLEMS, Project Manager
- Marianne VAN KERKHOVEN, Dramaturge
- Myriam DRABS, Planning
- Valerie VERNIMME, administration & production

カーイシアターはアーティストとの関係を持続的にするために、他の劇場やフェスティバルとの契約を多数抱えるアーティストと各団体との関係を調整する製作のスタッフを3年程前に選任した。「言うなればカーイシアターが、(アーティストに逃げられないように) クモの巣を演じているのです。この10年間で、業界は多くのコンプレックスを抱え、益々混迷するばかりなのです」とヒィペンス氏は説明する。

(2) パートナリシップ

ワークスペースブリュッセルと連携し、若手アーティストの支援に取り組んでいる。ワークスペースブリュッセルはカーイシアターの施設の一部を利用して若手アーティストを対象とした独自のアーティスト・イン・レジデンスを運営している団体で、そのプログラムでは主に研究活動の支援を推進している。このプログラムに参加する若手アーティストは、スタジオスペースとしてカーイシアターの施設を利用しているが、カーイシアターで作品を発表することはほとんどない。カーイシアターのような大きな劇場で作品を発表することは、若手アーティストには大きなプレッシャーになるためだという。

(3) 国際ネットワーク

カーイシアターは2つの国際ネットワークに加盟している。どちらのネットワークも欧州域内の舞台芸術の芸術団体により構成されるネットワークである。

① 欧州想像2020ネットワーク(European Imagine 2020 Network)

欧州想像2020ネットワークは舞台芸術業界を取り巻く環境の変化に対し問題意識を持つ団体が参加しているネットワークである。「芸術的な想像力こそ新しく革新的な未来を導いていくものである」という理念の下、欧州委員会の欧州文化プログラムから2010年から2015年の5年間に220万ユーロ(約2億8,000万円)の助成金を受けてスタートした。現在の参加団体は下記のとおりである。

- Kaaitheater(ベルギー、ブリュッセル)
- Le Domaine D'O(フランス、モンパリエ)
- Artsadmin(英国、ロンドン)
- Kampnagel(ドイツ、ハンブルグ)
- Bunker(スロベニア、リュブリャナ)
- Transforma(ポルトガル、トレスフェドラス)
- London International Festival of Theatre(英国、ロンドン)
- Théâtre Le Quai(フランス、アンジェ)
- Domino(クロアチア、ザグレブ)
- Stichting Rotterdamse Schouwburg(オランダ、ロッテルダム)
- New Theatre Institute of Latvia(ラトビア、リーガ)

② ハウス・オン・ファイアーネットワーク(House on Fire network)

ハウス・オン・ファイアーネットワークは、舞台芸術の領域で国際的なプログラムの企画と作品のプロデュースを行う団体のネットワークである。このネットワークは新しいコミュニケーションによる創造や現代社会が直面している問題について議論を促すという芸術の基礎的な役割を検証し、それを実践することを理念とする。現在の参加団体は下記のとおりである。

- LIFT(英国、ロンドン)
- HAU(ドイツ、ベルリン)



- Kaaithheater (ベルギー、ブリュッセル)
- BRUT (オーストリア、ウィーン)
- Archa Theatre (チェコ、プラハ)
- Teatro Maria Matos (ポルトガル、リスボン)
- Frascati (オランダ、アムステルダム)
- Malta Festival (ポーランド、ポズナン)
- Théâtre Garonne (フランス、トゥールーズ)
- BIT (ノルウェー、ベルゲン)

5. 現在の課題と今後の方向性

カーイシアターはブリュッセルを代表する劇場で、実験的な作品から知名度のあるアーティストの作品まで様々な舞台作品を上演している。そのため、カーイシアターのプロデュース作品が受け手である観客の理解するもの、または、期待するものと一致するかという課題がある。特に、実験的な作品に観客を呼ぶためには、プロデューサーとして多くの努力が必要で、アーティストの理想と観客の期待にどう折り合いをつけていくかベきか、カーイシアターは常に模索をしているという。

また、カーイシアターは劇場で、レジデンス事業を活動の中心とする芸術団体ではないため、レジデンス事業への理解を得ることに苦労することがある。レジデンス事業には多くの予算と労力が必要で、なぜレジデンス事業が重要であるのかを政治家や助成機関に納得してもらったり、また、レジデンス事業で共同製作した作品と招待作品の違いを観客に理解してもらうのは容易でない。ヒュピュス氏はレジデンス事業の成果を水面に浮く氷山に例え、水面下の目に見えない部分にもその成果が多くあると考えている。

政府や助成機関が助成するということは、その業界における需要と供給の関係に干渉することで、特に舞台芸術の業界にはその支援が必要不可欠になっている現状の仕組みに問題があると指摘する。例えば、人気作品や人気カンパニーをプログラムとして招待するだけなら容易であるが、それは多くの劇場が抱える問題への解決にはならないという課題がある。

(1) 舞台芸術業界の現状とレジデンスプログラムの役割

欧州の舞台芸術界の現状と課題を反映し、なぜ劇場がレジデンス事業に取り組むべきなのかというヒュピュス氏の考えを以下に整理した。

① アーティストと観客を再び密接に繋げる役割

新しい自由主義的な政府のポリシーの影響として、欧州では伝統的な劇場のモデルを維持する劇場や劇団が急速に減少している。伝統的な劇場のモデルとは、劇場が専属の劇団を抱え、作品のプロデュースからリハーサル、公演までを一環して行うもので、そのような劇場や劇団に対する行政の支援も、年々、縮小している。一方で、現在は小規模で独立したカンパニーと専門性を持つ芸術団体や文化施設で構成されるモデルが主流で、地域性よりも専門性が重視され、舞台芸術の市場は断片化する傾向にあるとヒュピュス氏は指摘する。国際的でダイナミックなシステムになりつつあるが、製作側であるアーティストやプロデューサーと消費側である観客や地域との接点が希薄になってきている。こうした現状の中で劇場がレジデンス事業を推し進めることは、アーティストと観客を再び密接に繋げるきっかけになるという。「観客はアーティストが作品を作るといことがどのようなことか感覚的に漠然と理解していますが、専門性を重視するシステムの中で活動するアーティストは、観客に対してある種の繋がりや理解を持っているのかという疑問があります。近年、多くのアーティストはプロデューサーである私に作品について熱意を持って話をしてくれますが、観客を気にかけている様子がありません。現在のシステムでは、アーティストと観客の間に非常に沢山の仲介人が介在しているからかもしれません」とヒュピュス氏は説明する。

② アーティストと地域を再び密接に繋げる役割

アーティストはレジデンス事業を通じて一定の期間ブリュッセルに滞在し、地域との関わりを持ち、観客の存在や作品に対する街の反応を知ることができる。「世

界中を巡回する人気アーティストは、自己完結した空想とともに世界を遊泳しているようなものです。自己満足はするでしょうが、それだけでは、観客から多くのフィードバックを得ることはできません。レジデンスプログラムはそのような状況に対しての解決策でもあります」とヒュペンス氏と説明する。

レジデンス事業は行政にとっても、予算をより定住化した方法で費やし、地域に還元するという意味において効果的で、さらに、アーティストやプロデューサーも地域の助成金で何を果たすべきかという問題により自覚を持つと考えている。自由主義的な仕組みの欠点は、全ての事柄をその専門に関わる組織間で調整し完結してしまうことにある。お互いの意思疎通や問題点の共有は容易になるが、自己完結と同じように抽象的なシステムに至りやすく、劇場や舞台芸術の本来の役割を見失うと危惧している。

③ アーティストを保護するシステム

舞台芸術を製作するという仕事の基本は、様々な技術や役割をどのように1つの作品として融合させていくかということで、作品を完成させるためには、芸術的技能、照明や音響の技術、作品執筆など多くの要素をマネジメントすることが必要である。個人で活動するアーティストが増えた現在の舞台芸術業界では、これらの全ての要素をアーティストがマネジメントするように強要する傾向がある。規模の大きい作品を規模の大きい劇場で上演する場合、アーティストがその責任を一人で負わなければならないとすると、その責務はアーティストには重過ぎるのではないかとヒュペンス氏は考える。「レジデンスプログラムは、個人で活動するアーティストを『私は何もかもしなければならぬ』といった危機感から守る仕組みでもあります。この先、舞台芸術業界のシステムが、旧来のような専属劇団モデルへと戻るとは良いこととは言えませんが、さらに自由主義的になることも理想的だと考えていません。カーイシアターはこの問題について議論を続けたいと考えています。現在のところ、レジデンスプログラムを推進することが、この状況に対する解決策の一つと考えています」とヒュペンス氏はレジデンスの意義を強調する。

④ 新しい課題

ブリュッセルが抱える大きな問題として、アーティストの数の増加を挙げる。「ブリュッセルはアーティストに大変人気のある都市で、突然、アーティストの数が都市の許容範囲に達してしまいました。ブリュッセルの人口は約120万人で、それ程大きな都市とは言えません。しかし、現在、ブリュッセルに活動拠点を置くアーティストの数は膨大です。どのようにこの事実と向き合うべきか、それはアーティストを支援するブリュッセルの全ての団体にとって大きな課題であり、挑戦です」とヒュペンス氏は説明する。パリやロンドンといった欧州の大都市は物価も高くアーティストにとって活動しやすい都市とは言えないが、ベルリンやブリュッセルのような都市は物価も比較的安く、かつ国際的で魅力的なアートシーンや教育機関がある。このような都市が、現在、欧州においてアーティストの活動拠点として非常に注目されている。この問題は、今後、他の芸術団体や文化施設とともに取り組んでいく必要のある課題であると考えている。

2. ワークスペースブリュッセル | workspacebrussels

面会日: 2013年3月1日(金) 10:00-11:30

面会者: Charlotte VANDEVYVER (Artistic Coordination)

URL: <http://www.workspacebrussels.be>

1. 運営機関の概要

ワークスペースブリュッセルはダンスとパフォーマンス・アートを対象領域に若手アーティストがプロへの第一歩を踏み出すための支援を提供する芸術団体で、欧州連合の本部があるブリュッセルを拠点とする。ブリュッセル市内の芸術団体や文化施設と提携し、それらの施設のスタジオや宿泊施設を利用してアーティスト・イン・レジデンスを運営している。

(1) 設立趣旨・経緯

ワークスペースブリュッセルはカーイシアター(Kaaitheater)とローザス(Rosas)とのイニシアティブとして、2008年に設立された。カーイシアターはフレミッシュ・ウェイブを牽引したユーゴ・ドゥ・グレーフが創設した芸術団体で劇場を運営し、ローザスは振付家のアンヌ・テレサ・ドゥ・ケースマイケル(Anne Teresa DE KEERSMAECKER)が芸術監督を務めるベルギーを代表するダンスカンパニーである。

ブリュッセルはフランダースの現代舞台芸術を代表するヤン・ファールブル、アンヌ・テレサ・ドゥ・ケースマイケル、ヤン・ロワースを輩出したことで広く知られ、また、世界で最も実験的なフェスティバル、クンステン・フェスティバル・デザールが開催される都市で、ダンスやパフォーマンス・アートの領域で活動する若手のアーティストやカンパニーが集まる魅力的な場である。カーイシアターとローザスはそれらの若手のアーティストやカンパニーの育成を目的に、制作環境を提供する新しい組織、ワークスペースブリュッセルを立ち上げた。

カーイシアターとローザスは発起団体だが、ワークスペースブリュッセルは独立した組織として運営を行う。2010年、シャルロット・ファンデヴァイヴァー(Charlotte VANDEVYVER)がアーティスト・コーディネーターに就任し、ワークスペースブリュッセルの活動方針やプログラムを決定している。

(2) ミッション

ワークスペースブリュッセルはアーティスト・イン・レジデンス、海外の文化機関とのアーティスト交換事業、フェスティバルの運営を事業の核に、若手アーティスト

がプロとしてキャリアをスタートさせるために必要な支援を提供することをミッションとする。特に、海外の文化機関と連携してアーティストを招へいすることで、ベルギーのダンスとパフォーマンス・アートの領域に新鮮な空気を送り込み、それを活性化されることを目指している。

2. プログラムの内容と実績

(1) アーティスト・イン・レジデンス

ワークスペースブリュッセルのレジデンスプログラムは、初期の創作過程を支援することに重点を置いている。アーティストが作品のアイデアを着想し、それを具体的に発展させる段階で、ワークスペースブリュッセルは舞台照明や音響といった技術的なサポートではなく、「空白の空間」を提供している。

ワークスペースブリュッセルで初めてプロジェクトに取り組むアーティストは、通常、2週間の滞在機会としてスタジオと宿泊施設を提供される。必要に応じて旅費も支給されるが、奨学金、滞在費や制作費の補助はない。そして、2週間の滞後に、滞在の成果を話し合うミーティングが行われ、プロジェクトの継続支援の可能性が検討される。

プロジェクトの継続支援を受けた場合、アーティストは次のレジデンスの機会を提供され、作品制作のための研究費や経費として4,000-7,000ユーロ(約52-91万円)の制作補助費を支給される。また、滞在期間も一定ではない。年間約50人前後の招へいアーティストのうち約3分の2のアーティストがこの制作補助費を受ける。制作補助費の用途は自由で、アーティストの判断に任せられている。また、創作過程で専門家によるアドバイスが必要な場合には、ドラマトウルクを紹介することもある。特に、若手アーティストには的確なアドバイスが必要なケースが多く、アーティストと対話の場を持ち、誰が適任であるかという点から検討し、その経費もワークスペースブリュッセルが負担している。

また、レジデンスの機会を提供するだけの関係を越えた密な関係を築くことも多く、アーティストと共に考え、次なるキャリアのステップに近づいたときには、アーティ



ワークスペースブリュッセルのパートナーのカーイシアターの所有するカーイスタジオのリハーサルスタジオとラウンジ。

ストに必要な新たなパートナーを探すなどのフォローアップもしている。

滞在アーティストの多くはダンスとパフォーマンス・アートの領域で活動する若手アーティストだが、特定のリサーチプロジェクトに関しては若手ではないアーティストが支援を受ける場合もある。作品になるとまだ決定されてない段階でのリサーチプロジェクトを支援する芸術団体が少ないためである。

(2) アーティストの受入期間

ワークスペースブリュッセルは年間約50人程度のアーティストを受け入れており、標準的な期間は約3週間である。長期のリサーチのためとして、最高6ヶ月の滞在機会を提供したケースもある。また、集中的な作品制作を支援するために短期で受け入れる場合もある。

(3) アーティストの募集・選考方法

① アーティストの募集・選考方法

ワークスペースブリュッセルでは、公募でアーティストを募集する場合とワークスペースブリュッセルがアーティストに直接アプローチする場合がある。

公募には申請締切日はなく、随時、募集をしている。以前は特定の書式のない自由形式で応募可能であったが、近年は申請者が増加したため、選考の効率性を考慮して申請書を作成し、ホームページからダウンロードできるようにしている。申請者は申請書の他に、活動歴、ポートフォリオや映像資料(過去の作品のDVDやインターネットで映像が閲覧可能なリンク先)を提出する必要がある。

「申請書を読んで興味を持ったアーティストには出来る限り直接会うようにしています」と話すファンデヴァイヴァー氏は、アーティストの作品を実際に鑑賞することを重視しており、プライベートでも頻繁に公演、リハーサルやワーク・イン・プログレスに足を運ぶという。また、ダンスやパフォーマンス・アートの教育機関にも出向き、卒業して間もない優秀な若いアーティストにチャンスを与えることも少なくない。

選考では、未知の領域に挑戦したいという意味を持つアーティストを優先している。過去に有名なカンパニ

ーに所属した経験があり、これから始めて自分自身の作品へ取り組むアーティストも支援の対象である。一方、既に作品の制作が最終段階でリハーサルをするだけであったり、既に公演の企画や形態、キャスティングなどが具体化しているプロジェクトは対象ではない。

② 滞在アーティストの傾向

ワークスペースブリュッセルでは実験的で斬新な作品に取り組むアーティストに注目している。レジデンスプログラムに参加するアーティストには領域横断的な活動をするアーティストも多く、ダンスと美術との関係を探るアーティストや、ダンスと音楽との関係を探求するアーティストも少なくない。

主にレジデンスプログラムに参加する約8割がダンスやパフォーマンス・アートの領域で活動するアーティストで、演劇を活動領域にするアーティストの場合には言語による表現を中心とする従来の演劇ではなく、身体を中心とする表現活動や美術を中心とする表現活動を行うアーティストを対象としている。

過去に、オーストラリアの砂漠でフィールドレコーディングをするサウンドアーティストがレジデンスプログラムに参加した事例もある。「ダンスやパフォーマンス・アートの領域で、どのように沈黙とパフォーマンス、身体が共存できるのかという議論があったときでした」とファンデヴァイヴァー氏は説明する。このように、ダンスとパフォーマンス・アート以外の領域のアーティストを招へいする場合は、そのテーマが身体性や空間性など、ダンスやパフォーマンス・アートの動向に関連している場合が多い。

3. 施設の構成と内容

ワークスペースブリュッセルはアーティスト・イン・レジデンスのための自己所有の施設を持たないため、ブリュッセル市内にある劇場やダンスカンパニーなどの4つのパートナーからスタジオや宿泊施設、運営面でのサポートを受けている。それぞれのパートナーとの提携形態は以下のように異なるが、施設の維持費を負担する必要がなく、アーティストを支援する事業費に大半の予算を費やすことができる。



ワークスペースブリュッセルのパートナーのローザスの所有するリハーサルスタジオ。

① ローザス

ローザスはベルギーを代表するダンスカンパニーで、ブリュッセル市内に大規模なリハーサルスタジオとパーツ(P.A.R.T.S.)という若手育成を目的としたダンススクールのスタジオを所有する。

ワークスペースブリュッセルにはリハーサルスタジオの1つを無償で提供している。

② カーイシアター

カーイシアターは先鋭的な舞台芸術を発信するブリュッセルを代表する劇場で、主に規模の大きい公演を行うカーイシアターと、規模の小さい公演やリハーサルを行うカーイスタジオ(Kaaistudio's)の2つの施設を所有する。

カーイシアターは年間スケジュールを作成し、利用予定のないスタジオをワークスペースブリュッセルに提供している。また、ワークスペースブリュッセルの経理事務を全面的に請け負う。

③ レ・ブリジティ(Les Brigittines)

レ・ブリジティはコンテンポラリー・ダンスを中心とした

ブリュッセル市の劇場で、リハーサルスタジオと2つの劇場を所有する。また、劇場の近くに1名から2名が滞在可能なアパートメントと4名から5名のグループが滞在可能なロフトの2つの宿泊施設を所有する。

レ・ブリジティは2010年からワークスペースブリュッセルと提携し、レ・ブリジティのアーティスト・イン・レジデンスプログラムの選考から運営までの全ての業務をワークスペースブリュッセルに委託している。

④ ウルティマ・ヴェス(Ultima Vez)

ウルティマ・ヴェスはベルギーを代表する振付家で映像作家のヴィム・ヴァンデケイビュス(Wim VANDEKEYBUS)の率いるダンスカンパニーで、2012年にブリュッセル市のモーレンビーク地区に2つのスタジオを持つ施設をオープンし、ワークスペースブリュッセルにスタジオを提供している。

ウルティマ・ヴェスはワークスペースブリュッセルとともにジャルダン・ドゥ・ロップ(Jardin d'Europe)のネットワークのメンバーで、欧州諸国に拠点を置く10の芸術団体と連携して若手アーティストの作品の共同製作を行い、アーティストと作品の派遣や受け入れを行う。



ワークスペースブリュッセルのパートナーのレ・ブリジティの施設の
外観とリハーサルスタジオ。

4. 運営体制

(1) 運営組織

ワークスペースブリュッセルでは2名の専属スタッフが働く。アーティストック・コーディネーターのファンデヴァイヴァー氏は、ベルギー・フランドル政府でダンス分野の文化政策の顧問も務める。

- Charlotte VANDEVYVER, Artistic Coordination
- Veerle VAES, General & Production Management

(2) 他の芸術関係機関等との連携状況

ワークスペースブリュッセルのレジデンス事業は、ブリュッセル市内に拠点を置くローザス、カーイシアター／カーイスタジオ、レ・ブリジティ、ウルティマ・ヴェスの4つのパートナーからスタジオや宿泊施設、運営面でのサポートを受けている。

設立当時、ワークスペースブリュッセルはブリュッセル市内のダンス、パフォーマンス・アートのコミュニティに重点を置いていたが、近年は、国際的な取り組みとして、主にワークスペースブリュッセルが独自に構築した国際ネットワークと、欧州委員会から助成を受けて運営されている国際ネットワークであるジャルダン・ドゥ・ロップと連携しながらアーティストの海外への派遣と海外からの受け入れを行う。

① 独自の国際ネットワーク

海外からアーティストを受け入れる方策として、ワークスペースブリュッセルは欧州諸国の芸術団体とのネットワークを構築している。このネットワークでは、各芸術団体が推薦したいアーティストのリストを作成し、受入先の芸術団体に提案し、受入先の芸術団体が最終選考をするという仕組みで、アーティストの派遣と受け入れを行う。現在、以下の芸術団体とのネットワークを持つ。

- ZODIAK—Centre for New Dance(フィンランド、ヘルシンキ)
 - MDT(スウェーデン、ストックホルム)
 - 4Culture(ルーマニア、ブカレスト)
 - fabrik Potsdam(ドイツ、ベルリン)
- 「各団体は自国のダンス、パフォーマンス・アートの

シーンに誰よりも精通しています。また、このネットワークを利用することで、自国のアーティストに提供できる支援が国際的なものに広がりました」とファンデヴァイヴァー氏は説明する。特に、実験的なダンス、パフォーマンス・アートの作品は難解なものが多く、申請書と映像資料だけでアーティストを選考することが容易ではない。そのため、このようなネットワークは国際的なレジデンスプログラムを発展させるために役立つ。

一方で、このネットワークでの派遣や受け入れは、制作費のほかにも、旅費や滞在費を補助する必要がある。そのため、ブリュッセルに事務所を置く海外の文化機関などに協力を要請している。例えば、フィンランドのゾーディアクとのアーティスト交換事業では、ベネルクス・フィンランド文化センター(Fins Cultureel Instituut voor de Benelux)から毎年5,000ユーロ(約65万円)の助成を受けている。

② ジャルダン・ドゥ・ロップ

前述した独自の国際ネットワーク以外に、ワークスペースブリュッセルは、ウルティマ・ヴェスを仲介してジャルダン・ドゥ・ロップのネットワークに加盟している。ジャルダン・ドゥ・ロップはコンテンポラリー・ダンスの欧州ネットワークの一つで、欧州委員会の教育・文化総局が運営する欧州文化プログラムから5年間の継続助成を受けている。2013年の6月に5年間の助成期間が終了する予定だが、現在、新たな5年間の助成を申請し、その結果が2013年4月に通知される予定である。

欧州文化プログラムは欧州諸国間のモビリティを促進することを目的とし、助成を受けるためには欧州諸国内に少なくとも5団体以上の芸術団体と提携関係をつくる必要がある。特に、トルコ、ルーマニア、ポーランドなどといった欧州連合に新しく加盟した国や加盟を予定している国との交流やネットワークの活性化を推奨している。

現在、提携関係を持つ団体は以下のとおりである。

- 4Culture(ルーマニア、ブカレスト)
- Bimeras Culture Foundation/ iDans festival(トルコ、イスタンブール)
- Centre Chorégraphique de Montpellier(フランス、モ

ンパリエ)

- Cullberg Baletten (スウェーデン、ノルスボルグ)
- danceWEB (オーストリア、ウィーン)
- Lokomotiva (マセドニア、スコピエ)
- Southbank Centre (英国、ロンドン)
- Station – Service for contemporary dance (セルビア、ベオグラード)
- Ultima Vez/workspacebrussels (ベルギー、ブリュッセル)
- Workshop Foundation (ハンガリー、ブタペスト)

ジャルダン・ドゥ・ロップはウィーンに拠点を置くダンスウェブ (danceWEB) のイニシアティブで2008年にスタートし、欧州諸国でコンテンポラリー・ダンスの領域を対象にアーティスト・イン・レジデンスを運営する団体や、若手育成のプログラムを持つダンスカンパニーなどが加盟している。ダンスウェブはオーストリアのウィーンで毎年夏に開催されるダンスフェスティバル、イム・プル・ス・タンツ (ImPulsTanz) の運営下にある団体で、ワークスペースブリュッセルと同様にアーティスト・イン・レジデンスを運営し、若手アーティストを支援している。

ジャルダン・ドゥ・ロップでは、提携団体間でアーティストの海外への派遣と海外からの受け入れを行うとともに、各団体は毎年1–2人の若手アーティストと共同製作を行う。年一度の全体会議で各団体が支援するアーティストの情報を共有しているため、各団体の主催するフェスティバルなどへそれらのアーティストが招待されることも少なくない。共同製作に必要な費用の50%は欧州文化プログラムの助成金から補助を受けることができる。ワークスペースブリュッセルでは、若手アーティストの作品の制作費として平均5,000ユーロ (約65万円) の予算を確保しているため、同額の5,000ユーロを欧州文化プログラムから受けることができ、合計1万ユーロ (約130万円) を共同製作の予算としている。

また、このネットワークでは、ネットワークと同じジャルダン・ドゥ・ロップの名称で、各提携団体が共同製作するアーティストの作品を取り上げるフェスティバルを年一度開催している。フェスティバルは巡回型で、毎年、提携団体の中の1つがホストとしてその地域のフェスティバルと共同開催する。2012年はdanceWEB (オー

ストリア、ウィーン)、2011年は4Culture (ルーマニア、ブカレスト)、2010年はiDance Festival (トルコ、イスタンブール)、2009年はワークスペースブリュッセルとウルティマ・ヴェスがホストを務め、ブリュッセルで開催した。

また、毎年フェスティバルの参加作品の中から、優秀な作品にジャルダン・ドゥ・ロップ賞 (Prix Jardin d'Europe) を授与している。受賞アーティストは新作を制作するための資金として10,000ユーロ (約130万円) の賞金を与えられる。ジャルダン・ドゥ・ロップ賞の審査員は、欧州を代表するダンス・カンパニーの代表者や若手の評論家で構成され、全作品の鑑賞と2週間の集中的なワークショップを通して受賞作品を審査する。審査員に若手の評論家を起用する理由は、評論家とダンス、パフォーマンス・アート界の関係を魅力的で持続的なものに保ちたいという主催者側の意図がある。「近年、欧州では、新聞やメディアが文化面に割く紙面の割合が少なくなってきました。若い評論家にチャンスを与え、より良い関係を築くことが必要なのです」とファンデヴァイヴァー氏は説明する。

5. 事業収支

(1) 事業収支

主な収入はフランダース政府やブリュッセル市からの補助金、欧州委員会からの助成金で、その内訳は下記のとおりである。

- フランダース政府: 31万5,000ユーロ (約4,095万円)
- ブリュッセル市: 1万5,000ユーロ (約195万円)
- 欧州委員会: 2万ユーロ (約260万円)

一年間の総予算は約35万ユーロ (約4,550万円) で、その予算の30%が運営費で、残りの70%を事業費である。ワークスペースブリュッセルはパートナーの団体や組織の施設を利用してアーティストにスタジオや宿泊施設を提供しているため、運営費の負担が少なく、数多くのプロジェクトの支援が可能である。

(2) フランダース政府の助成の仕組み

① 助成プログラムの特徴

ワークスペースブリュッセルの主な資金提供者であるフランダース政府は、作品やプロジェクトの内容を重

視し、助成事業に関わるアーティストの国籍に柔軟な考えを持っている。その結果、海外からの新鮮な刺激を常に享受することができ、ベルギー・フランダー文化圏でのダンス、パフォーマンス・アート界の活性化を促す。一方で、ベルギー国内でもフランス語文化圏の助成機関から補助金や助成金を受ける場合、同文化圏のアーティストを優遇しなければならない。例えば、レ・ブリジティは、主にフランス語文化圏の助成機関から補助金や助成金を受けているため、フランス語文化圏からある定数のアーティストを確保した事業を計画する必要がある。

しかし、オープンな環境は海外のアーティストの移住を促し、ブリュッセルのダンス、パフォーマンス・アート界の生存競争を年々厳しくしている側面もある。ファンデヴァイヴァー氏によると、アーティストを支援する許容範囲に対して、アーティストの数が大幅に上回っていると言う。例えば、ローザスが運営するダンススクールから2年ごとに30人が卒業し、その大多数の若手アーティストがブリュッセルでの活動を希望するが、それらの若手アーティストを支援できる機会は限られたものしかない。

② 助成プログラムへの申請と報告

フランダー政府の助成対象期間は4年間で、4年間の事業計画を立てる必要があるが、全ての計画内容が具体的でなくても良い。例えば、規模の大きな芸術団体は2年間の具体的な計画を示す必要があるが、ワークスペースブリュッセルのような規模の小さい芸術団体は初年度の具体的な計画を示せば良い。申請時にはワークスペースブリュッセルの活動の意義や、アーティストの選考方法や支援内容を詳細に記述することが重要で、毎年10月に次年度の計画内容を提出し、3月に年間の活動内容の概要と予算収支に関する報告書を提出する必要がある。

6. 事業評価の実施状況

(1) 活動成果の記録と一般公開の機会

ワークスペースブリュッセルに滞在するアーティストの活動はリサーチを中心としているため、その活動の

成果が見えにくいという課題がある。そのため、その活動をどのように記録していくかということと、どのように一般に公開していくかということが重要となる。

① 活動の記録

2012年にサルマ(SARMA)というインターネットでダンスの批評を発信しているプラットフォームと共同研究し、オーラルサイト(Oral Site)というウェブサイトを立ち上げた。このサイトでは、アーティストのリサーチを記録したビデオ、写真、ノートやスケッチ、また、リサーチに関連した参考テキストなどを閲覧することができる。

また、ダンス、パフォーマンス・アートの若い批評家やジャーナリストを招いて、アーティストが取り組んでいる活動を文章に記録する依頼をしており、ワーキング・タイトル・プラットフォームと呼ばれるフェスティバルのカタログのテキストとして活用している。

② 一般公開

ワーキング・タイトル・プラットフォーム(Working Title Platform)と呼ばれるフェスティバルを年2回開催し、アーティストのリサーチ活動を視覚化する試みを実施している。レジデンスプログラムに参加したアーティストの中からアーティストを選び、リサーチの成果をワーキング・イン・プロGRESSとして発表している。

作品発表の後にはアーティストと観客とのディスカッションが行われ、また、発表日の翌日には、専門家を交えたフィードバック・セッションも行う。このフェスティバルはアーティストが観客の前で成果を発表するとともに、アーティストが作品に対してのフィードバックに触れる機会でもある。さらに、フェスティバルには多くの専門家が招かれ、若いアーティストにとっては将来のチャンスを含む重要な機会である。

ファンデヴァイヴァー氏はワークスペースブリュッセルとアーティストを理解してもらうために、また、人々と時間と空間を分かち合うというパフォーマンスアートの一面を再認識してもらうためにも一般に発表する場が重要であると考えている。「リサーチ活動というのは本来オープンであるべきですが、ある時点に至っては結果を求めていかなくてはなりません。これは、ワークスペースブリュッセルの2つの対称的な要素でもあります。

オープンでありながら、ある時期にはアーティストがステップを踏み出すよう促しています」とファンデヴァイヴァー氏は説明する。

ワークスペースブリュッセルの特徴は、一度だけでなく継続的にレジデンスの機会を提供することで、親密な関係をアーティストと築き、滞在後のアーティストの活動もフォローアップする中長期的な支援体制が整っている。

7. 現状の課題と今後の方向性

(1) 現状の課題

① 欧州域外からのアーティストの受け入れ

過去のレジデンスプログラムに欧州域外で活動するアーティストが参加した事例はなく、それらの国や地域からアーティストを受け入れるプログラムを計画することが課題である。

例えば、日本などのアジア諸国から申請を受け取ることがあるが、その国や地域のダンス、パフォーマンス・アートのシーンの状況を把握していないため、アーティストの選考では欧州のダンス、パフォーマンス・アートの傾向や期待を判断基準とするしかないという問題や、どのように支援すべきなのかという疑問もあるという。ワークスペースブリュッセルが全世界を視野に入れる場合、欧州のコンテキストを共有するために、スタジオを提供するのみではなく、パフォーマンスを鑑賞する、指導者を提供するなどの補足的な内容も必要ではないかと思案している。

(2) 今後の方向性

ワークスペースブリュッセルはアーティストへの支援内容をより充実したものにしていくこと、また、新たなパートナーを見つけて国際ネットワークをより充実したものにしていくことを今後の目標としている。

① 若手アーティストの支援

若手アーティストの支援としてより多くのワークショップの機会を提供したいと考えている。個々のリサーチに集中することも大切な要素だが、そのリサーチの内容を他者に説明し、情報交換する機会を持つことも大

切と考え、指導者の知識や経験を教えるワークショップではなく、アーティストと専門家が知識や経験を共有することを目的に実験的な対話の場を提供するワークショップを予定している。

アムステルダムにあるダスアート(Dasarts)というパフォーマンス・アートの修士課程で、1人のアーティストが自身のプロジェクトを数人のグループの前でプレゼンテーションしてフィードバックを受けるというフィードバック・セッションと呼ばれるプログラムが行われている。過去にこのフィードバック・セッションのワークショップをダスアートともに実施した経験があり、このフィードバック・セッションのワークショップをより長期的に実施することに力を入れていきたいという。

② 夏期プログラム

アーティスト・イン・レジデンスと年2回開催されているフェスティバルの2つの事業に加え、大規模な夏期のレジデンスプログラムを事業化したいと考えている。

2012年にブリュッセル・ダンス・サマー(Brussels Dance Summer)という夏期レジデンスプログラムを試行した。パートナー団体であるローザスと連携し、ローザスの所有する5つのスタジオを利用して1ヶ月のレジデンスと集中的なワークショップの機会を海外のアーティストに提供するプログラムであった。滞在アーティストは個人のリサーチ活動のほかに、ブリュッセルを拠点とするアーティストなどと交流し、最後の週に作品の発表を行う。ブリュッセルでは3つのパフォーマンス・アートのフェスティバルが夏に開催されており、夕方には作品の鑑賞する機会もある。

2013年の夏には、1ヶ月間の夏期レジデンスプログラムを行う予定で、滞在アーティストを一つのグループとしてまとめ、グループワークを行う。ソロで活動するアーティストはレジデンスプログラムにおいても孤立する傾向があり、経済的な援助を受ける可能性も狭まれていると考えるファンデヴァイヴァー氏は、「将来、アーティストが施設を所有し、最良の環境で芸術活動を継続していくためにもグループで活動することを勧めたい」と話す。

この夏期レジデンスプログラムが夢のプロジェクトと

語るファンデヴァイヴァー氏は「夏の期間、ブリュッセルが『ダンスの街』となればという思いがあります。他の芸術団体が子供たちのためのワークショップやショーを企画するように、ダンスがブリュッセルの街にとって重要なものであることをブリュッセル市民に伝える機会となることを願っています」と説明する。

③ 日本のAIRとの連携の可能性

ファンデヴァイヴァー氏は日本のダンス、パフォーマンス・アートの領域で活動するアーティストや芸術団体、アーティスト・イン・レジデンスと出会い、ワークスペースブリュッセルとの新たな関係を築くことには大きな関心がある。

フランダース政府は海外のアーティスト・イン・レジデンスと連携するプログラムを推進しており、フランダースの美術家をそのレジデンスプログラムに派遣する奨学金を運営している。現在、同政府のダンス、パフォーマンス・アートの顧問委員会でも、同様のプログラムの必要性を議論しており、海外のアーティスト・イン・レジデンスプログラムの参考リストを作成するようにとファンデヴァイヴァー氏に依頼があったという。ファンデヴァイヴァー氏は「ワークスペースブリュッセルが実施可能な事業の範囲には限界がありますが、このフランダース政府の奨学金制度が実現すれば、ダンス、パフォーマンス・アート領域において、大きな規模での日本とベルギーの関係を築くことも可能になります」と説明する。

3. ウィールズ | WIELS

訪問日: 2013年3月1日(金)15:00-16:00

URL: <http://www.wiels.org>

1. 運営機関の概要

ウィールズ(WIELS)はベルギーを代表する現代美術を専門とする美術館でブリュッセルに拠点を置く。現代美術の展覧会を事業の柱とし、若手アーティストを対象とするアーティスト・イン・レジデンスプログラム、アーティスト・トークやレクチャー、子どもや家族を対象とする教育プログラム、地域住民を対象とする地域交流プログラムなどの様々な事業を推進している。

2007年のオープン当初よりレジデンスプログラムに取り組み、美術館にスタジオを併設している点に特徴がある。

(1) 設立趣旨・経緯

ベルギーの首都ブリュッセルは数多くの商業ギャラリーがあり、大規模なアートフェアが開催されるなど、現代美術の活動が盛んで、市民の現代美術への関心も高い。一方で、ウィールズがオープンした2007年まで現代美術に的を絞った美術館がなかった。そのため、現代美術を専門とする美術館を要望する市民や美術関係者からの声に後押しされ、2001年、ブリュッセル首都圏委員会(the Brussels Capital Region)は建築遺産でもあるウィールマン社(Wielman Ceuppen's)の旧ビール醸造工場を美術館に再生する計画を立てる。そして、2005年1月より改修工事が開始され、ウィールズは2007年5月にオープンした。名称、ウィールズは、旧ウィールマン社の社名から名称を受け継いだものである。カフェ、ブックショップ、チケットカウンターがある広々とした1階のエントランスホールには旧ビール醸造工場時代に使用されていた醸造タンクが残されている。

(2) ミッション

ウィールズは現代美術の発信と文化教育の普及を主な目的とする美術館で、一般的な美術館のように美術品の収集を行わない。ダイナミックかつオープンな活動を基本理念とし、展覧会、レジデンスプログラム、教育プログラムや地域交流プログラムなどを通じて、革新的で実験的かつ社会的な文化施設として地域の文化交流の促進に貢献することをミッションとする。

2. プログラムの内容

(1) アーティスト・イン・レジデンス

ウィールズのレジデンスプログラムは、国内外の才能ある若手アーティストとともに国際的な現代美術の実験の場をつくることを目的とし、個人の創作活動や研究活動に専念できる環境と現代美術の可能性を議論する場を提供している。滞在アーティストは創作の技術的なサポートのほかに、アーティストや専門家からのアドバイスを受けることができる。

(2) アーティストの受入期間

ベルギー在住のアーティストの受入期間は6ヶ月。その他のアーティストの受入期間は1月から12月までの1年である。

(3) アーティストの募集・選考方法

ウィールズでは公募を通じてアーティストを選考している。応募の締切日は毎年5月末で、申請者は応募する年の翌年のレジデンスプログラムに応募することになる。申請者はホームページから申請書をダウンロードして、下記の書類を添えて提出する必要がある。

- 申請書
- 活動歴: 過去の美術教育機関での学歴を含む
- アーティスト・ステイトメント: 英文250ワード以下で作品の傾向、手法や媒体を記述する
- 滞在目的の説明文: 英文250ワード以下でウィールズに期待すること、レジデンスプログラムで取り組みたいプロジェクトの計画やアイデアを記述する
- 美術関係者からの推薦状: 推薦者の名前と連絡先を明記した推薦状を3通用意する
- 作品資料: 写真資料または映像資料を10点まで添付する。印刷写真はA4サイズ以下、デジタル写真は解像度72dpiをCD-ROMに保存する。映像資料はパフォーマンスや映像作品のみ添付可能で、作品の制作過程や展示風景を収録した映像資料は対象外である
- 写真・映像資料の説明文: タイトル、制作年、メディアを明記し、英文50ワード以下で各作品の内容を記述する



ウィールズの外観
© Kristien Daem

オランダとノルウェーに在住するアーティストは、ウィールズが提携するオランダのモンドリアン・フォnds (Mondriaan fonds) とノルウェー現代美術オフィス (Office for Contemporary Art Norway) の応募規定に準じて、各機関に応募する必要がある。

選考はウィールズのディレクターとアーティスト2名の選考員が行う。この2名のアーティストは週に一度、ウィールズを訪れ、滞在アーティストとミーティングをしたり、スタジオビジットを行うレジデンスプログラムのチューター(指導員)でもある。

(4) プログラムの実績

レジデンスプログラムは2008年にスタートし、2012年までの5年間に61名のアーティストが滞在した。2013年のプログラムでは、ベルギー在住のアーティスト4名と海外のアーティスト7名が参加している。これまでに2名の日本人アーティストが参加した。

(5) 支援内容

ウィールズでは奨学金の提供や渡航費、宿泊費、生活費、宿泊費、作品制作費などの補助はなく、また、宿泊施設の提供もない。通常、滞在アーティストに提供される支援は、下記のとおりである。

- 24時間365日使用可能なスタジオ。広さは約45平方メートルで、基本的な家具とインターネットがある
- チューターとの週に一度のチュートリアル
- 創作活動に必要な支援。技術サポートを受けられる外部施設の紹介などもある
- キュレーター、美術評論家などの美術関係者によるスタジオビジットのコーディネート
- ベルギー国内、または、周辺国の美術館やギャラリーのディレクターやキュレーターとの面会のコーディネート
- 滞在期間中に創作した作品のプレゼンテーションや展覧会の企画。ウィールズ施設内、又は、外部ギャラリーなどで開催される

上記以外に、海外から参加するアーティストが滞在に必要な奨学金を自国の助成機関等から取得するための支援や、市内の宿泊施設を探すための支援も行う。なお、オランダとノルウェーから参加するアーティストには、ウィールズと提携する各国の助成機関が滞在に必要な費用を奨学金として支給している。

(6) その他のプログラム

展覧会事業を中心に、現代美術の振興や普及を目的とするアートイベントや出版事業、地域社会への貢献を目的とする教育プログラムや地域交流プログラムを推進している。

① 展覧会

主に現代的な革新性をもつ創造的な活動を行う国内外のアーティストを取り上げた大規模な個展、現代美術の動向を反映するグループ展、特定のテーマに焦点を当てたグループ展を企画する。大規模なアートセンターや美術館で個展を開催した経験のない新鋭アーティストの作品を紹介することも少なくない。

② アートイベント

上映会、コンサート、レクチャー、パフォーマンスなどのアートイベントを開催する。また、ブリュッセル市内で開かれているフェスティバルやアートフェアと連携したイベントも誘致している。

③ 出版事業

展覧会のカタログをはじめとする出版物を企画する。エントランスホールには、ウィールズが自主出版したカタログや書籍をはじめ、現代美術、建築、デザイン、写真・映像に関する書籍やアーティストブック、ポスター、ポストカードなどを販売するブックショップがある。

④ 教育プログラム

他の芸術団体や地域コミュニティと協力して子どもと家族を対象とする教育プログラムを実施している。子どもたちが現代美術と触れることで、社会で起こっている事柄を感じ取り、理解する力を高め、楽しみながら「何かを作り出すこと」を学ぶことのできる機会を提供している。

⑤ 地域交流プログラム

ウィールズの展示スペース
(Thomas Bayrleの作品)
© Sven Laurent



地域社会に貢献するための事業として地域の持つ異なる文化の交流を促すソーシャル・アーティストック(Social Artistic)と呼ばれるプログラムを推進している。ウィールズのあるブリュッセル市南部のフォルスト地区は中小規模の工場の並ぶ工業地域で、多くの労働者が住む地域であった。現在は、中間層の住民も増え、移民も多い。オランダ語を第一言語とする住民とフランス語を第一言語とする住民が混在する地区で、それらの多種多様な文化的背景を持つ住民の交流を促すことを目的としている。

3. 施設の構成と内容

(1) 施設の構成と内容

ウィールズは主に展覧会事業のための4つのフロアの展示スペースとレジデンスプログラムのためのスタジオを有する。スタジオは展示スペースに隣接して各フロアで3部屋、合計12部屋ある。また、ビールの醸造タンクが残る広々としたエントランスホールには、カフェ、ブックショップ、チケットカウンターがあり、コンサートやイベント等にも利用されている。屋上にはブリュッセル市内を見渡すことのできるルーフテラス、ウィールズと隣のビルの間にある敷地にはピクニックなどに利用できる庭と近隣住民の家庭菜園などが整備されている。

このように、ウィールズはブリュッセルの市民が気軽に訪れることができるミーティングスポットとして、また、市外や海外からの多くの訪問者を魅了する美術館として、周辺地区の文化振興や地域経済の復興に貢献している。

(2) 建物の歴史

ウィールズが拠点とするBlommeビルは、既存するモダニストスタイルの産業ビルの一例として、ベルギーの王立遺産委員会(the Royal Commission for Monuments and Landscape)から建築遺産として登録された貴重な歴史的建築物である。Blommeビルは1931年にベルギー人建築家アドリアン・ブロム(Adrien Blomm)によってビール醸造工場として設計された。建設当初は欧州最大級のビール醸造工場、ブリュッセルの新しいランドマークとしてウィルマンズ・タワー

(Wielemans Tower)の愛称で親しまれていたが、1988年に閉鎖された。1989年と1991年の2度にわたり、開発業者が施設一帯の再開発計画を試みたが実現せず、2001年にブリュッセル首都圏委員会がBlommeビル保存運動のイニシアティブをとってビルの所有者となった。その結果、Blommeビルはブリュッセルの市民に持ち込まれていた現代美術を専門とする美術館に再生することが決定し、2007年5月にウィールズとして生まれ変わった。

4. 運営体制

ウィールズは民間の非営利団体で、総会と理事会で事業計画、収支予算、事務局の組織や運営などに関する決定を行う。総会は12名、理事会は7名の委員で構成され、アーティストのアン・ヴェロニカ・ヤンセンズ(Ann VERONICA JANSSENS)、リュック・タイマンス(Luc TUYMANS)が理事会の委員に含まれる。

(1) スタッフ

現在、14名のスタッフが勤務しており、レジデンス事業はキュレーターのデヴィリン・バイヤー(Devrim BAYAR)が担当している。バイヤー氏はイスタンブールのレジデンスプログラムやニューヨークのMoMA P.S.1などでインターンをした経験があり、2006年から現職に就いている。

アーティストティック・ディレクターのデリック・スナウワート(Dirk SNAUWAERT)は、ドイツやフランスのアートセンターでディレクターを務めた経験があり、開館以前からウィールズの創設準備に関わる。また、第53回ヴェネチア・ビエンナーレのベルギー館のキュレーションを担当した実績もある。

- Artistic Director
- Financial Director
- Curator & Head of Residency Program
- Education & Audiences
- Press & Communication

ウィールズのエントランスホール
カフェやブックショップがある。
© Filip Vanzieleghem



- Production & Presentation
- Bookshop
- Registrar
- Coordination Reception, Tickets and Info
- Event Manager
- Technical Coordination
- WIELS Business Club & Sponsoring
- WIELS Club
- Benefit Auction

(2) 他の芸術関係機関等との連携状況

ウィールズはオランダのアムステルダムに本部を置くモンドリアン・ファン・ゾグとノルウェーのオスロに本部を置くノルウェー現代美術オフィスの2つの助成機関と提携し、定期的にオランダとノルウェーからアーティストを招へいしている。各助成機関はアーティストに渡航費、滞在費や制作費などを支給している。

アーティストはウィールズのレジデンスプログラムに応募した理由を、幾度か訪れた際の展覧会が素晴らしかったことと建物が印象的であったからだとする。また、ブリュッセルという都市が地理的に欧州の中心にあることも魅力の1つで、既にたくさんの日本人アーティストが活動する他の欧州の都市で作品制作をするよりもパイオニア的な活動が期待できるとも考えている。特に、レジデンスプログラムを機会に、海外でのネットワークを築き、多くの人に作品を知ってもらいたいと考えている。

5. 事業評価の実施状況

ウィールズでは、アンケートや調査による事業評価は実施していないが、レジデンスプログラムの全ての活動内容はウェブサイトとソーシャルネットワークで公開されている。

また、2013年6月には、レジデンスプログラムがスタートした2008年から2012年までの5年間にレジデンスプログラムに参加したアーティストのグループ展の開催が予定されている。主にアーティストが滞在期間中に制作した作品が展示され、これまでのレジデンスプログラムの成果を一般公開する予定である。

滞在アーティストへのインタビュー

現在、ウィールズのレジデンスプログラムに参加している日本人アーティストは、これまで5ヶ国の海外のレジデンスプログラムに参加した。その中でもウィールズのレジデンスプログラムが最も充実した制作環境を提供すると話す。ウィールズのレジデンスプログラムは、1年間と滞在期間が長く、海外での生活体験と作品制作、人的交流のために十分な時間があるためである。



F. 米国

1. インターナショナル・スタジオ & キュラトリアル・プログラム | The International Studio & Curatorial Program
2. エイペックスアート | apexart

写真: インターナショナル・スタジオ&キュラトリアル・プログラム
現地調査協力: 山崎梨真 (ドキュメンタリー映像作家、在ニューヨーク)
1米ドル=100円で換算

1. インターナショナル・スタジオ & キュラトリアル・プログラム |

The International Studio & Curatorial Program

面会日: 2013年1月22日 (火) 15:00-16:00

面会者: Dennis ELLIOT (Founding Director)

URL: <http://www.iscp-nyc.org/>

1. 運営機関の概要

インターナショナル・スタジオ & キュラトリアル・プログラム (The International Studio & Curatorial Program, 通称、ISCP) は、若手から中堅のアーティストやキュレーターを対象にアーティスト・イン・レジデンス事業を行っている非営利団体である。

(1) 設立趣旨・経緯

ISCPは1994年にデニス・エリオット (Dennis ELLIOT) によって創設された。エリオット氏はカナダ出身の画家であったが、1973年にニューヨークへ移り住み、1980年代中頃から、アーティストや美大生をニューヨークへ招へいする教育プログラムを始めるようになる。90年代初頭までに5種類のプログラムを企画・運営し、計18の米国の大学と4つのカナダの大学から派遣された美術大学院生に、教育・学術的な活動を提供していた。また、カナダのノバスコシア美術デザイン大学 (Nova Scotia College of Art and Design) のためにプログラムも企画・運営した。なお、これらはエリオット氏自身の事業としてではなく、あくまでも各大学に雇われる形でプログラムの企画・運営をしていた。

1991年からはマリー・ウォルシュ・シャープ美術財団 (Marie Walsh Sharpe Art Foundation) が実施するスタジオ・プログラム (Studio Program) のコーディネーターとして働くようになる (なお、エリオット氏は2012年8月にこの職を退職した)。このスタジオ・プログラムはブルックリンのDUMBO地区にあるスタジオを、選ばれた米国内のアーティストに提供することを通して、アーティストの創作活動を支援するものだ。しかし、エリオット氏いわく、「一度プログラムの内容が整ってしまうと、その後は仕事がほとんどなくなってしまった。せいぜい、アーティスト同士はうまくやっているか、建物が火事で焼けてなくなっていないか、なんてことを確かめるぐらいで、働く時間も結局、週7時間程度だった」。そこで他にも仕事が必要となり、最終的に自身で新しい事業を始めることにしたと言う。それがISCPの始まりであった。

ISCPを始めた1990年初頭はドットコム不況の真っ只中であった。「当初は自分自身で新しい事業を立ち上

げるつもりはあまりなかったが、不況のためこの大学や機関も予算がない状態で、自分自身で事業を興す以外に選択肢がなかった」とエリオット氏は言う。国際的なプログラムを始めようと決めたものの、国際的なプログラムについての知識は何もなく、また資金集めをすることも初めてという、何もないところからの出発だった。

1994年、韓国の国際ギャラリー (Kukje Gallery) から資金援助を受け、マンハッタン南西部にあるトライベッカ地区にISCPをオープンする。幸運にも2年後には順調にスタジオの利用が埋まるようになり、徐々に自然と軌道に乗るようになった。トライベッカ地区にあった当時、スタジオは12部屋であった。しかしその後、トライベッカ地区の高級化が急速に進み、家賃が高騰する。家賃の4倍の値上げを要求されたため、賃貸契約の更新は諦め、2001年にミッドタウン地区へ移転する。そこではスタジオが26部屋あったが、展示室等のイベント用スペースはなかった。だが、ミッドタウンの地区の家賃も高騰し、再び移転することを余儀なくされる。そして2008年、ブルックリンの東ウィリアムズバーグ地区に施設を移転し、現在に至る。

現在の施設は、もともと1901年に建てられた印刷会社の工場だった建物をリノベーションしたものである (なお、リノベーション費用は、エリオット氏が個人的にローンを組んで工面したという)。敷地は約1,600㎡もあり、この建物に移転したことで、スタジオ35部屋に加えて展示スペースやプロジェクト用スペースを備えた施設に拡大可能となった。これに伴い、プログラムの内容もさらに充実した。

現在では毎年100人以上のアーティストやキュレーターがISCPに滞在し、約1万人以上が公開プログラムに参加している。

(2) ミッション

ISCPはアーティストやキュレーターのキャリア育成に重点を置いて活動している。ISCPが掲げるミッションは以下のとおり。

- 世界中の若手から中堅アーティスト及びキュレーターにスタジオや新しいチャンスを与えることを通して、



ブルックリンの東ウィリアムバーグ地区にあるISCPの外観。旧印刷工場だった建物をリノベーションした。

プロとしての資質の養成を推進する

- 優れた海外アーティストの活動をニューヨークの観客へ紹介する
- 公開プログラムを通してニューヨーク市やブルックリンの地域コミュニティと交流する

ISCPは素晴らしいアーティストやキュレーター間のネットワークを築くこと、そして新しい作品を生み出すためのサポートを行うことに努めている。さらに、アートの専門家や一般の観客とISCPに滞在するアーティストやキュレーターとの橋渡し役としても活動している。多様な国際的な視点に立ちながら、現代アートを生み出し発表するための類のない場としてISCPは機能している。

2. プログラムの内容と実績

ISCPの活動は主に、アーティスト・イン・レジデンス、展覧会プログラム、そして一般参加型プログラムの3つの領域にわたっている。各プログラムはアーティストやキュレーターのキャリア育成を支援するため、そして対話とコラボレーションを促進するために考え出されたものである。

(1) アーティスト・イン・レジデンス

ISCPでのアーティスト・イン・レジデンス・プログラムでは最長12ヶ月間滞在することができ、アーティスト及びキュレーターはそれぞれ政府や企業、財団、研究機関、個人パトロンなどのスポンサーから支援を受けて滞在する。ISCPとしては各滞在アーティストが1年間滞在することが最も望ましいと考えているが、スポンサーの予算の関係などから、3ヶ月から6ヶ月間滞在するケースが多い。各滞在アーティストには個室スタジオが提供される。

ISCPのアーティスト・イン・レジデンス・プログラムでは①客員批評家(Visiting Critics) ②フィールド・トリップ(Field Trips) ③サロン(Salons) ④オープン・スタジオ(Open Studios) の4つのプログラム活動を実施している。滞在アーティストはオープン・スタジオへの参加が必須であるものの、それ以外は任意である。また滞在中、ISCP以外でのイベントの参加・活動・作品展示することも推奨している。

① 客員批評家(Visiting Critics)

美術館やギャラリー、その他の芸術施設や専門誌などに所属する専門家を客員批評家として滞在アーティストのスタジオへ招き、一対一で作品の講評をもらうというプログラムである。これはISCPのアーティスト・イン・レジデンスの特徴的な活動と言えよう。なお、客員批評家には謝礼金を支払っている。

② フィールド・トリップ(Field Trips)

ISCPでは美術館やギャラリー、その他の芸術施設、資料館などに滞在アーティストを連れて行くイベントを企画している。多くの場合、訪問先の学芸員や職員に各組織のミッションやプログラムを紹介していただく。過去の主な訪問先はフィラデルフィア美術館、ニューヨーク近代美術館の保存修復部門、ディア・ビーコン美術館、ストーム・キング・アートセンター、バード大学キュレーター学センター、ソーホーやローワーイーストサイドにあるギャラリー、個人コレクションや著名アーティストのスタジオなどである。

③ サロン(Salons)

滞在アーティストが各自の作品や活動について公開プレゼンテーションできる機会を設けている。このイベントは「サロン」と呼ばれ、月2回開催されている。形式は映像上映やパフォーマンス上演、インスタレーションやレクチャーなど様々である。このサロンはISCPに滞在するアーティストやキュレーターの作品をニューヨークのアート・コミュニティに紹介する役割を果たしている。

④ オープン・スタジオ

ISCPでは5月と11月の年2回、4日間のオープン・スタジオを実施している。期間中には、ライブ・パフォーマンスやパネル・ディスカッション、展覧会などのイベントも併せて開催される。ニューヨーク市内外から訪れる2,000人以上の専門家やアートファンに向けて、滞在アーティストは最新のプロジェクトの発表、制作途中の作品の公開、サイト・スペシフィックのインスタレーション展示、また過去の活動記録の紹介などができる。

ギャラリー。訪問時はISCPトークの開催準備のためプロジェクターと客席が設置されていた。

(2) アーティストの募集・選考、応募アーティストの条件

ISCPでは、アーティストとキュレーターを年間通して受け入れている。各滞在アーティストは、政府系機関や企業、財団、研究機関、美術団体、ギャラリーや個人パトロンなどからの経済的支援を受けてISCPに滞在する。スポンサーがプログラム費用を負担し、また多くの場合、住居費、生活費、旅費、材料費なども給付する。

最長12ヶ月滞在することができるが、滞在期間は特に決まっておらず、スポンサーが支援する資金額やアーティストの希望などに合わせて決められる。前述のとおりの3ヶ月から6ヶ月のケースが最も多い。

パートナー・スポンサー団体がアーティストやキュレーターを派遣するケースと、アーティストやキュレーター本人がISCPへ直接応募するケースの2つのタイプに分けられる。

① パートナー・スポンサーシップ

これまで40以上の団体がパートナー・スポンサーとしてアーティストやキュレーターを派遣してきた。この場合、パートナー・スポンサーは派遣者を公募することが条件となる。最終的な派遣者はパートナー・スポンサーが選考することも可能であり、スポンサーは候補者を絞るのみで、最終的な選考はISCPへ委ねることも可能。なお、ISCPが候補者の中から招へい者を選考する場合、ISCPのスタッフではなく、選考委員会が招へい者を決定する。

現在の主なパートナー・スポンサーには、ベルギー、カナダ、デンマーク、フランス、ドイツ、メキシコ、オランダ、ニュージーランド、ノルウェー、スウェーデン、台湾などの政府系機関があり、これらの国からは定期的にアーティストが派遣されている。パートナー・スポンサーの中には、アワードの賞としてISCPへアーティストを派遣するところもある。

もっとも手厚い支援を行っているスポンサーの例としてカナダ・アーツカウンシル (Canada Council for the Arts) がある。カナダ・アーツカウンシルでは、年間2人のアーティストにアワードを授与し、ISCPのアーティ



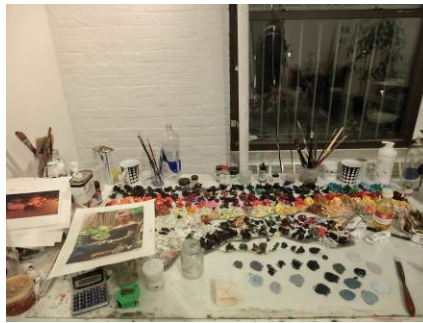
スト・イン・レジデンスに6ヶ月間滞在させている。各アーティストにはプログラム参加費、住居費や旅費、医療費に加え、月2,000ドルの給付金と1万ドルの制作費を支給しているという。住居に関しては、ISCPがチェルシー地区に家具付きのアパートを所有しており、そのアパートをカナダ・アーツカウンシルから派遣されるアーティストに貸している。

② アーティストやキュレーターからの直接応募

ISCPのアーティスト・イン・レジデンスに滞在を希望するアーティストやキュレーターがISCPへ直接応募することも可能である。この応募方法は1999年に導入された。締め切りはなく、随時応募を受け付けている。審査は2ヶ月に1回のペースで行われている。現在は、平均して毎月10～12件の応募があるという。その中から、月3～5人へ受け入れの許可を出すという。

しかし、受け入れが認められたとしても、受入許可から2年以内にプログラム参加費を負担するスポンサーもしくは参加資金を応募者本人が確保しなければならない。応募者本人がプログラム参加費を自己負担したり、その家族が負担したりすることは認められていないが、それ以外の規定はない。スポンサーが見つかった時点で、ISCPがスポンサーに直接確認をし、確認が取れ次第、滞在スケジュールを組み始める。滞在時期や期間は、スタジオの空き状況をみながら応募者本人とISCPが相談して決定する。通常、一年先に滞在中のスケジュールを組むことが多い。

年間60人ほどへ受入通知を発行しているものの、多



滞在アーティストがスタジオで使用していた画材類。

くの者がその後のスポンサー探しで苦労し、実際にISCPに滞在できる滞在アーティストの数は年間10人程とかなり少ない。

③ 選考方法

ISCPが招へい者の選考を行う場合、選考委員会が応募者の作品の質、オリジナリティ、そして芸術的価値を基準に審査する。また、ISCPでの滞在中に応募者に与えるであろう影響力、過去の業績、プログラム参加への準備度なども審査の要因となる。ニューヨークに滞在したいだけで、ISCPのプログラムに参加する必要性が見出せない場合や、逆に国が全面的に押す国宝のようなアーティストは受け入れないようにしている。

また、ISCPのプログラムでは対話する機会がとて多い内容になっているので、英語でのコミュニケーション能力も必要となる。さらに、滞在アーティストはアーティスト・イン・レジデンス参加費が必要である。

(3) その他のプログラム

ISCPには、アーティスト・イン・レジデンス・プログラムに加え、①展覧会プログラム ②ISCPトーク ③一般参加プロジェクト がある。これらのプログラムは一般公開され、またアーティスト・イン・レジデンス・プログラムと関連していることが多い。

① 展覧会プログラム

2009年から始まったプログラムで、ISCP施設内にあるギャラリーやイベントスペースにて開催される。自由度は高く、展覧会以外にも映像上映会やパフォーマンスの発表なども行われる。ISCPのスタッフや滞在キュレーター、そして外部のキュレーターなど、年間平均9名のキュレーターによって展示を企画してもらう。また2011年からはISCPに滞在中のアーティストや過去に滞在したアーティストの個展を実施する企画も始まった。

このプログラムは、ニューヨークや大手商業ギャラリーではなかなか目にすることができないようなアーティストの作品・活動を広める機会として機能している。

② ISCPトーク

現代アートに関連した様々なトピックについて議論や理解を深めるため、パネル・ディスカッションやラウン

ドテーブル、対話などを通年で開催している。著名なアーティストやキュレーターなどによるトークイベント、他の芸術団体と共催でディスカッションを企画されることもある。また滞在アーティストによる「サロン」もこのプログラムに含まれている。

③ 一般参加プロジェクト

ニューヨーク、特にISCPが拠点を置くブルックリンの東ウィリアムズバーグ地区から刺激を受け、近年、より公的な領域において作品制作や活動をしたいと考える滞在アーティストが増えてきたという。そうした要望に応える形で、2011年から一般参加型のプロジェクトが始まった。

このプロジェクトでは、ISCPの滞在アーティスト及び過去の滞在中者に、公的な場での作品制作・活動を依頼する。アーティストと地元コミュニティとの橋渡しをすることによって、東ウィリアムズバーグ地区の活力を高めながら、また同時に滞在アーティストの作品・活動を都市生活の一部へ組み込んでいくことを目指している。特に決まった形式はなく、滞在アーティストからの提案を取り入れながら、一時的でサイト・スペシフィックな作品、及び時間芸術作品・活動を紹介することに重点を置いている。

もう一つの参加型プロジェクトとしてあるのは、美大生に滞在アーティストらのアシスタントとして制作補助してもらうというものだ。このスタジオ・アシスタント・プログラムでは、学生が実際に作品制作やリサーチを手伝うことを通して、国際的に活躍する滞在アーティストから一対一で指導を受けることができる。また、アシスタントの学生は、トークイベントやフィールド・トリップなどの他のISCPのイベントに参加することもできる。

(4) プログラムの実績・過去の滞在中者

1994年のISCP創設から現在までの18年間で、米国を含む58ヶ国から、1,700名以上のアーティストとキュレーターが参加している。

日本からは1997年以降47名のアーティストを受け入れている(複数回滞在中者を含む延べ人数)。パートナーシップを結んでいるスポンサー団体は特になく、日本からのアーティストの多くはISCPへ直接応募して

スタジオの部屋番号、使用者、
国名が書かれたフロアマップ。



参加しているようである。なお、キュレーターとしてプログラムに参加した者はまだいない。

過去の滞在アーティストには中山ダイスケ(1997年ACC/1998年ポーラ美術財団/2000年文化庁)、会田誠(2000年ACC)、開発好明(2002年ポーラ美術財団/2004年文化庁)名和晃平(2005年ACC)、澤田知子(2006年文化庁/2008年ポーラ美術財団)などがある。

3. 施設の構成と内容

ブルックリンにある現在のISCPの施設は長期賃貸契約をしているものである。総面積は約1,600㎡あり、建物は3階建て。スタジオ35部屋、ギャラリー2部屋、キッチン兼ラウンジスペース、屋上には映像上映スペースがある。各スタジオの広さは約27～37㎡。

各滞在アーティストに提供される個室スタジオは家具付きで、無線インターネットが利用できる。共有スペースには24時間アクセスすることができる。

なお、ISCPのアーティスト・イン・レジデンスでは滞在施設の提供は含まれていないため、住居は滞在アーティスト自らが用意しなければならない。毎年アーティストを派遣するパートナー・スポンサーの中には家具付きの滞在施設を所有しているところもある。

4. 運営体制と事業収支

(1) 運営組織

ISCPは非営利団体である。創設者のデニス・エリオット氏を含む6名のスタッフが働いており、うち3名がフルタイム、他はパートタイムでの勤務である。

- Founding Director
- Director of Programs and Exhibitions
- Program Manager
- Program Associate, Administrator (兼任)
- Special Project Coordinator
- Facilities Assistant

また理事会はエリオット氏を含めて8名いる。

(2) パートナースhip

現在は32のパートナー・スポンサーがいる。多くは欧

州やオセアニア、カナダの政府系機関である。最近では中東や北アフリカ地域にある団体とパートナーシップを結び、アーティストの招へいや展覧会を開催しようと計画しているようである。

なお、以前はレズ・アルティスの総会などへ参加していたが、最近は出席していないという。

(3) 事業収支

① 収入

2010/2011年度の収入は97万6,512ドル(約9,800万円)、2009/2010年度85万1,976ドル(約8,500万円)であった。アーティスト・イン・レジデンスの参加者を個別支援するスポンサーとは別に、その他の事業資金として政府系機関、財団、企業、そして個人から助成・資金援助・寄付を受けている。パートナー・スポンサーを含めると、海外の政府系機関からの支援が最も多い。ニューヨーク市や米国連邦政府からの助成も受けているが、額はそれほど多くない。近年は、財団や企業、そして個人からの支援・寄付が増えてきたという。だが、主要となる資金提供団体はなく、様々なところから資金援助を少しずつ受けている。

2013年度のアート・イン・レジデンス参加費は年間2万761.71～2万2,947.73ドル(約200～230万円)、もしくは月1,730.14～1,912.28ドル(約17～19万円)となっている。この参加費で主にスタジオ費、アーティスト・イン・レジデンス関連のプログラム事業費、スタッフ人件費などが賄われている。

② 支出

2010/2011年度の支出は89万8,872ドル(約9,000万円)でそのうち人件費が29万8,977ドル(約3,000万円)、2009/2010年度76万4,302ドル(約7,600万円)、うち人件費が23万428ドル(約2,300万円)であった。最近では、緊急時用の積立金のために黒字になるようにしているという。



共有スペースにあるキッチン。

5. 事業評価の実施状況

事業評価は特に行っていない。過去の滞在者の一覧がウェブサイトにも国別で掲載されている。各滞在者のスポンサーも併せて記載されている。

これまでにISCPに滞在した約1,700名のアーティスト及びキュレーターの中には、現在著名なアーティストも数多く含まれている。

6. 近年の変化と現在の課題、今後の方向性

2008年にブルックリンへ移転したことによって、ISCPはさらに発展することができた。ちょうどその頃、ISCPの現在の施設があるウィリアムズバーグ地区やブッシュウィック地区へ若手アーティストらが移り住み、アート・コミュニティもブルックリンへ移動し始めていた。マンハッタンに拠点を置いていた時代も十分成功していたが、ブルックリンに移転したことで、より広いスペースを手頃な価格で確保することができ、それまで有していなかったギャラリースペースなどを設けることが可能となった。それがさらにプログラムの拡大へも繋がった。また、賃料を抑えることによって、その分を人件費に回すことができ、展覧会・一般参加プロジェクト担当者やマーケティング担当者なども雇うことができるようになった。

これ以上の施設の拡大は考えずに、今後はプログラムを更に充実・拡大させていくことに集中し、また、より質の高い展覧会を開き、ISCPの主要プログラム以外でもさらに規模の大きなイベントを実施する意向である。

さらに、過去に十分な支援を受けていなかった国・地域からアーティストを招へいすることも今後の目標としている。これまで南アフリカを除くサブサハラ・アフリカ(サハラ以南のアフリカ)からの滞在者は全く不在で、中南米からは徐々にアーティストが派遣されるようになったものの、いまだブラジルからの滞在アーティストが全くいないのが現状だ。他にも、中国とトルコからの滞在者が過去におらず、長年働きかけていたところ、近頃ようやく両国からアーティストを迎えることが決定したという。また現在、中東・北アフリカ地域のパートナー団体と共同でアーティストの招へいと展覧会を実施する計画があり、ウォーホール財団に6万ドルの助成金を申請していたが、招へい資金の申請は却下され、展覧会資金へ4万ドルのみの助成が決定したという。

常に抱えている課題は言うまでもなく、いかに資金を集めるかである。近年、財団、企業、個人レベルからの支援も受けるようになったが、それと同時に、資金集めのイベントを開催することが必要となってきた。

欧州のアーティスト・イン・レジデンス事業を行っている機関の多くは政府から多額の助成を受け、それを主要財源としているのに対し、ISCPは一つの資金源に頼ることはできず、数多くの機関や団体から支援を募らなければならない状態だ。しかし、それぞれに利点と欠点がある。ISCPの場合は「確かに資金集めに苦勞するものの、逆に主要スポンサーの意向に左右されることなく、より自由にプログラム運営することができる」とエリオット氏は言う。

2014年は創設20周年にあたり、様々な催しを企画している。

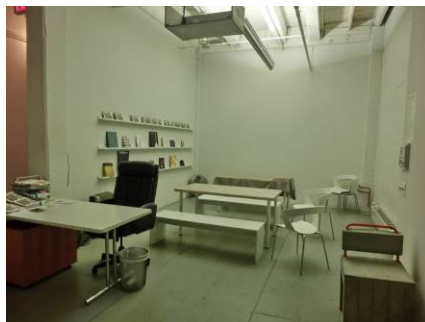
滞在アーティストへのインタビュー

面会者：マアイク・スクーレル (Maaike SCHOOREL、以下「MS」)、ガマリエル・ロドリゲス (Gamaliel RODRIGUEZ、以下「GR」)、アナスタシア・アクス (Anastasia AX、以下「AA」)

1. 略歴、活動実績

MS: オランダ出身。歴史的絵画や写真をもとに、色あせて筆跡のみが残ったような絵画を描き、鑑賞者

左の写真は滞在アーティストのインタビューを行ったラウンジスペース。右の写真はインタビューに協力していただいたアナスタシア・アクス(左)、ガマリエル・ロドリゲス(中央)、マリーケ・スクーレル(右)。



が時間をかけて観ることによって徐々にイメージが浮かび上がって見えてくるような作品を制作している。1998年アムステルダムへのリット・リートフェルト・アカデミー卒業、2001年ロンドンのロイヤル・カレッジ・オブ・アートにて修士号を取得。以後、ロンドンとアムステルダムに拠点を置いている。フランス・ハルス美術館(オランダ・2012年)、マウリエン・ペイリー画廊(ロンドン・2012年、2008年)、在ロンドン・オランダ領事館(2011年)、マルク・フォックス画廊(米国・2011年、2009年)、デ・ハーレン美術館(オランダ・2008年)などで個展を開催。グラスゴー近代美術館(2012年)、メンデス・ウッズ画廊(ブラジル・2012年)、チャプター芸術センター(英国・2012年)、ワティス現代アート・インスティテュート(米国・2011年)などでのグループ展に参加。

GR: 1977年生まれ、プエルトリコ出身。2004年にプエルトリコのセイクリッド・ハート大学を卒業、2005年に英国のケント・アート&デザイン・インスティテュートで修士号取得。現在はボールペンや油性ペンで油彩画や版画のような質感のある建築的なドローイングを制作している。ARCOアートフェア(スペイン・2012年)、PINTAアートショー(ロンドン・2010年)、CIRCAプエルトリコ・アートフェア(プエルトリコ・2009年)などで個展を開催。デイビット・カステイリョ画廊(米国・2012年)、ボンセ美術館(プエルトリコ・2012年)、プエルトリコ美術館(2012年)、ドムス・アトリウム2002(スペイン・2011年)、アーネム近代美術館(オランダ・2011年)などでのグループ展に参加。

AA: 1979年生まれ、スウェーデン出身。ストックホルムに拠点を置く。パフォーマンス、ドローイング、彫刻、サウンド、ビデオなど様々なジャンルのアート作品の制作活動を行っている。ジョアン・ミロ財団(スペイン・2012年)、ボンニエシュ・コンストハッル美術館(スウェーデン・2012年)、ストックホルム近代美術館(2012年・2011年)、AMアートスペース(上海・2012年)、ルレロ美術館(スウェーデン・2011年)、ヨーテボリ美術館(スウェーデン・2010年)、レイキャビック美術館(アイスランド・2010年)

などで個展を開催。2010年カーネギー美術賞の最終候補に選ばれる。ストックホルム近代美術館、ヨーテボリ美術館、カーネギー美術賞コレクション、イェヴレ・アートセンターに作品が収蔵されている。

2. アーティスト・イン・レジデンスに参加した動機

MS: レジデンス期間は11ヶ月(2012年3月1日から2013年1月31日)。キャリアを広げること、そしてキュレーターたちと会うことを目的にアーティスト・イン・レジデンスに参加している。また、過去10年間ロンドンで制作活動を行ってきたが、他の都市へ拠点を移したいと考えて、そのきっかけ作りのためにもニューヨークのアーティスト・イン・レジデンスに参加した。新しい都市に拠点を移す場合、スタジオ探しや人と知り合うためにはやはりサポートが必要であり、一人で全て一から始めるのは大変である。また知り合いがいない環境では、人と交わる事もせずに、一人でこもって制作してしまいがちになる。そのため、アーティスト・イン・レジデンスに滞在することによって、そのような問題点が解消され、様々な人と出会い、地域と交わる機会を得ている。ISCPの行うフィールド・トリップのようなプログラムでは一人では決して行かないような美術館や機関へ行くこともでき、新しい環境でより良いスタートがきれると考えていたことも動機の一つである。なお、自らISCPをレジデンス先を選んだわけではなく、モンドリアン・フォonzから助成・派遣されてISCPに滞在しており、ISCPでのレジデンス終了後もニューヨークに残って活動を続ける予定である。

GR: レジデンス期間は5ヶ月(2013年1月1日から2013年5月31日)。ISCPのアーティスト・イン・レジデンスに参加したきっかけは、昨年、ニューヨーク州に所在するオミ国際アートセンター(Omi International Arts Center)が実施するアート・オミ・国際アーティスト・レジデンス(Art Omi International Artists Residency)に滞在中、ISCPのディレクターであるエリオット氏と会い、ISCPのレジデンスに応募するよう勧められた。自らISCPへ直接応募したため、その後のプログラ



滞在アーティストのスタジオの様子。

ム参加資金集めに苦労した。特に、プエルトリコにはアーティストを支援する団体・機関がないため、コレクターなどの個人やギャラリーなどに自らアプローチし、サポートを頼まなければならなかった。アーティスト・イン・レジデンスに参加した動機は、より幅広い視野を得るため、そしてキャリアアップのためである。

AA: レジデンス期間は12ヶ月(2012年9月1日から2013年8月31日)。私はパフォーマンスなどで他のアーティストとコラボレーションすることが多いため、様々なアーティストと出会うことに関心があり、アーティスト・イン・レジデンスに参加した。特に、過去に上海でパフォーマンスをした際、現地のサウンド・アーティストとコラボレーションをし、かなり貴重な体験を得たため、それに刺激され、アーティスト・イン・レジデンスに興味を持った。

ストックホルムにあるイアスピス(International Artists Studio Program in Sweden、通称「IASPIS」)から助成・派遣されて、ISCPのプログラムに参加している。IASPISはISCPとパートナーシップを結んでおり、毎年アーティスト1名を派遣している。IASPISは他にベルリン、ロンドン、イスタンブールにある団体とパートナーシップがあり、各都市にアーティストを派遣している。そのため、自らISCPを選んで参加した訳ではない。

3. 過去のアーティスト・イン・レジデンスへの参加経験

MS: 過去のアーティスト・イン・レジデンスの参加経験はない。というのも、画家にとって、道具や持ち物を全て移動させ、環境を変えて制作することはそう簡単なことではないからだ。新しい環境に慣れて、作業を始めるまでには時間が結構かかる。パレットの準備ができ、絵を描き始められるようになるのでさえ1ヶ月はかかる。最低でも8ヶ月はないと満足のいく作品制作はできないと考えているため、そうまでして環境を変えることに興味がなく、これまでアーティスト・イン・レジデンスへの参加に消極的であった。だが、今回のISCPへの参加をきっかけに、今後も他のアーティスト・イン・レジデンスに

挑戦してみたいと考えている。

GR: 昨年2012年は1年間でマクドウェル・コロニー(The MacDowell Colony)、アート・オミ、そしてプラハにあるフューチャ現代美術センター(FUTURA Center for Contemporary Art)の3ヶ所のアーティスト・イン・レジデンスに参加した。そのため、昨年はかなり飛び回ることになり、一つのレジデンスを終え、次のレジデンスに行くまでの間が2週間しかないこともあった。その他には、2010年にトライアングル・アーツ・アソシエーション(Triangle Arts Association)、2011年にスコヒーガン・スクール・オブ・ペインティング・アンド・スカルプチャー(The Skowhegan School of Painting and Sculpture)のアーティスト・イン・レジデンスに参加した経験もある。今後は、もう一ヶ所ほどアーティスト・イン・レジデンスに参加したいと考えている。

これまで参加したアーティスト・イン・レジデンスにはそれぞれ全く異なった特徴があり、単にスタジオスペースを提供するだけの所もあれば、まるで学校のようなプログラムを用意している所もあった。滞在期間中、ほとんど他の人に会わないケースもあれば、毎日3食同じテーブルで他の滞在者と一緒に食事をし、まるで大家族のように朝から晩まで一緒にいるようなケースもあった。しかし、どのアーティスト・イン・レジデンスでも素晴らしい時間を過ごすことができた。

アーティスト・イン・レジデンスに参加する度に、全く新しい世界を体験することができる。何よりも他の分野のアーティストに囲まれて作業するのはとても貴重な経験だ。

AA: 過去のアーティスト・イン・レジデンス参加経験はない。

4. 創作活動の支援

MS: アーティスト・イン・レジデンスに望むことは、他のアーティストと時間を共有し、関係を築けるような環境だ。特に、他の滞在者と共に食事したりできる共有スペースが設けられていると良いだろう。大抵、アーティストは人見知りしてしまい、一人でスタジオにこもって制作することに満足してしまいがち

建物の内部の壁は全体的に白で統一され、展示にも使われる。また、スタジオのドアには使用している滞在者の氏名、国名、スポンサーとなっているファンドやグラントの名称、滞在期間が書かれたプレートが掛かっている。



である。他の滞在者と知り合うにも時間がかかり、やっと仲良くなったと思ったら、もう滞在期間が終了してしまったということも多い。しかし、アーティスト・イン・レジデンスに参加する意義の一つは、他の滞在者や人と出会うことなので、他のアーティストとの交流ができるような環境やプログラムがあると良い。

また、海外からのアーティストだけではなく、その国や地元で活躍しているアーティストも滞在していることが望ましい。そうすれば、その国や地元のアートシーンに直接触れることがより可能となるからだ。さらに、異なる分野のアーティストが滞在している方が良いだろう。

他に望むことは、プリンターのような基本的な機材・道具が揃っていることだ。

GR: 最も望むことは、他の滞在者や人と知り合う環境が整っていることだ。制作するだけならば、自宅のスタジオで十分にできる。アーティスト・イン・レジデンスの魅力の一つは他のアーティスト、特に異なった分野で活躍する人達と出会い、彼らの持つ全く違った視野について学ぶことはとても刺激になる。

また、各滞在アーティストの滞在期間が異なっているよりは、滞在者全員が同じ日に到着し、そして同じ日に全員の滞在が終了するような形式の方が良いと考えている。実際にそのようなアーティスト・イン・レジデンスに参加した際に、全員の滞在期間が一致していることで、自然と他の滞在者と仲良くなれて、それぞれの連絡先やFacebookの情報などを交換したので、プログラム終了後もお互いに連絡を取り合ったりして、関係を維持することができている。

ISCPには、ゲスト批評家のように、学芸員や専門家を招待し、作品講評してもらうプログラムがあるが、将来のチャンスにもつながる内容なので、どのアーティスト・イン・レジデンスでも主要プログラムとして取り入れるべきではないか。

AA: ISCPには学芸員などをゲスト批評家として招き、作品講評してもらうプログラムがあるが、そうした場



合、アーティストと批評家のマッチングの工夫が必要だと考えている。ゲスト批評家と呼ばれた側も、そのアーティストの作品に全く興味がない場合もあるし、また逆に、アーティストにとってもそのゲストが必ずしも会いたかった人物とは限らない。運営者が勝手に選ぶのではなく、アーティストとゲスト批評家それぞれにリストを渡し、その中から双方が選べるようにするなどした方が良いだろう。また、アーティストが特定の学芸員に興味がある場合、運営者がその人物へアプローチして、招待してくれると良い。

それぞれのアーティストが異なったニーズを持っているので、そうした希望について運営者と滞在アーティストが話し合えるような機会を設ける必要があるだろう。

5. 日本のアーティスト・イン・レジデンスについて

MS: 他の国へ滞在することによって視野を広げることができるので、日本のアーティスト・イン・レジデンスにも興味がある。特に欧州と日本とでは社会や文化が大きく異なるため、欧州から米国へ行くよりも、より違った経験が期待できる。

昔に比べれば、西洋世界でもアジアの文化について知られるようになってきたが、それでもまだ知らないことが多い。最近では、アジアのアートは「カッコいい」と見られるようになってきたものの、ロンドンのような都市でさえアジアの作家の作品が見られる機会はまだ少ない。そのためにも、全く違



ISCPのロゴマークが描かれている正面玄関。

う文化に身を置くことは素晴らしいことだし、より大きなチャレンジになると思う。

GR: 新しい文化と新しい人々に出会うことは素晴らしいことなので、日本のアーティスト・イン・レジデンスにも参加してみたい。特に、日本のアーティストと出会い、日本のアートシーンを見てみたい。実際に日本のアーティストがどのようなことをして、どんな苦勞をして、どうやって生き延びているのか、そしてギャラリーがどう機能しているのか、などに興味がある。

さらに、建築的な作品を制作しているので、違う国の建築に興味があるという。また、例えば版画でも、日本には西洋とは異なる技法の伝統があるので、そうした異なる芸術や伝統についても学んでみたい。

AA: インクや紙を使った作品を制作したり、パフォーマンスを行ったりしているので、日本美術にも興味がある。欧州と異なる美術の伝統・歴史が日本にはあり、たとえ同じ素材でも、それぞれの国で異なっ

た使われ方がある。パフォーマンスにしても、欧州とアジアとでは違う歴史があり、その国によって異なった捉え方をしたり、反応を示したりする。そうしたことを知るためにも日本のアーティスト・イン・レジデンスへの参加にも興味を持っている。

2. エイペックスアート | apexart

面会日：2013年1月22日（火）11:00－13:00

面会者：Steven RAND (Executive Director & Founder)

Cybele MAYLONE (Deputy Director)

Julia KNIGHT (Program Director)

URL: <http://www.apexart.org>

1. 運営機関の概要

エイペックスアートはマンハッタン南西部のトライベッカ地区に拠点を置くオルタナティブなアートスペースである。アーティスト・イン・レジデンスや展覧会、公開イベント、本の出版などを行っている。

(1) 設立趣旨・経緯

エイペックスアートは1994年にスティーブン・ランド (Steven RAND) によって設立された。もともとランド氏は国際的に活躍するアーティストであったが、1990年代以降、ビジネス色が強まっていく現代アートの状況に憤りと疑問を感じるようになっていた。「現在のアート業界ではごく一部の人々によって作品が評価され、質の良くない作品が高値で取引される。アーティストが自らを売り込むことに積極的になればなるほど、展示する機会を手に入れ、レビューをたくさん書いてもらい、知名度をあげていく。アート業界にいる人々は徐々にただのビジネスマンのようにってしまった」とランド氏は嘆く。

そうした現代アートの在り方に挑戦するため、ランド氏はそれまで抱いていた怒りと不満をぶつける形でエイペックスアートを始める。ランド氏は「いうなれば、自分たちが行きたくなるような場所を作るためにバーやパブを開く感覚だった」と言う。

エイペックスアートは、作品の背景にある考えや理論を重視しており、新しいコンセプトや考え方を紹介したり、議論したりする場となっている。ランド氏はエイペックスアートを、単なる展示スペースではなく、より創造的で実験的な活動を行う研究所と形容する。

さらにランド氏は、アーティストを支援する方法として大きく二つのタイプがあると考えている。一つはアーティストを売り込み、キャリアアップの手助けをするものであり、もう一つは、アーティストの創作力を高め、より質の高い作品を生み出す手助けをするものだ。アーティスト・イン・レジデンス事業の多くはアーティストのキャリア育成支援を主眼としており、一種のビジネス・プログラムのようになりがちである。しかしランド氏は、キュレーターやディレクターらにアーティストを紹介し、新しいチ

ャンスを次々に与えていったとしても、それは決して作品の質を高めることに繋がらないと主張する。むしろそうした状況に置かれることで、若いアーティストはチャンスばかりを追い求め、考えることをやめてしまい、肝心の作品の質が落ちてしまうことが多いと言う。そうした状況を打開するためにも、エイペックスアートではアーティストの創造力を高め、質の高い作品を生み出す手助けをするためにアーティスト・イン・レジデンスを実施している。

(2) ミッション

エイペックスアートでは、現代アートや文化の在り方に対して問題提起を行うことをミッションとしている。プログラムを通して、文化的・知的多様性を促し、現代アートについての議論を活発化させることを試みている。さらに、それまで様々な理由からチャンスを得ることがなかったアーティストやキュレーターなどに新しいチャンスを与え、彼らの創造力を高めていくことを目指している。

2. プログラムの内容と実績

(1) アーティスト・イン・レジデンス

エイペックスアートのアーティスト・イン・レジデンスは、住み慣れた環境とは異なる海外の都市で新しい体験・刺激を得てもらうことを目的にしている。このオルタナティブな教育プログラムは、あくまでも新しいことを体験してもらうことを趣旨としている。そのため、滞在中にアーティストが制作活動を行うことは求めず、また、キャリアアップのためのプロモーション活動も行っていない。

エイペックスアートでは、芸術活動において最も必要なことは考える時間だと認識しており、アーティスト・イン・レジデンスに滞在している期間は、創作活動から一旦距離を置くための時間とみなしている。また、創作活動に打ち込みたいならば、自分の住み慣れた空間で制作に専念することが最も効率的であり、知らない土地に滞在し、短期間で作品制作をすることには意義を認めていない。滞在中に様々なことをできるだけ吸収し、インスピレーションを受けることで、アーティスト・イン・レジデンスを終えた後、その吸収したことを作品と

して表現したり、新しい活動を始めたりするといった、より創造的な制作・活動に発展することを期待している。そして内面を豊かにし、質の高い作品を創ることによって、自然と次のチャンスが訪れてくると考えている。

特にニューヨークでは様々な教育的・文化的イベントが日々開催され、興味深い人々が数多く存在する。そうした都市で新しい体験をすること、新しい人々と出会うことはアーティストに大きな影響を与えると、エイペックスアートは考えている。「一般の人から見れば、エイペックスアートのプログラムはただの旅行にしか見えなかもしれない。だが、アーティストにとって新しいことを体験するのは非常に意味のあることだ」とランド氏は主張する。

エイペックスアートでは、諸外国からニューヨークへアーティストやキュレーターを受け入れるインバウンド・レジデンシー(Inbound Residency)と、ニューヨークから海外へアーティストやキュレーターを送り出すアウトバウンド・レジデンシー(Outbound Residency)を行っている。

① インバウンド・レジデンシー

インバウンド・レジデンシーでは海外に住むアーティストやキュレーターなどをニューヨークに招へいし、約1ヶ月間滞在してもらう。招へい者数は年間10人まで。

滞在者には綿密に計画された旅程が渡され、ユニオン・スクエア近くにあるワンルームの家具付きの部屋(インターネット有り)と携帯電話が提供される。作品制作は禁止しているため、スタジオは提供しない。

滞在者は渡された旅程をもとに一人で行動することになる。旅程は、いわゆる一般の観光旅行の内容とは異なり、ニューヨークに馴染みのない旅行者では考えつかないような滞在計画となっている。スケジュールには1日あたり4つまでの活動内容が組まれる。ニューヨークについて基本的なことを知ってもらうためにも一般的な観光スポットへ行ってもらふこともあるが、主な活動は、コンサート・演劇・朗読会などの鑑賞、専門分野外の授業やレクチャーの聴講、あまり知られていない風変わりな美術館・博物館見学(ニューヨークにはそうした施設が200以上ある)などで、地元の人でも知らないよう

なイベントや訪問先であったりするという。

また、様々な分野で活躍している人々と直接会って話をする機会も多く設けられている。人と会う状況は、一緒にパフォーマンスを鑑賞したり、お茶を飲んだり、その人物の活動機関へ訪問し活動内容を紹介してもらったりするなど、様々である。その際、滞在者自身の作品や活動を紹介したりするのではなく、より個人レベルでの会話することが期待されている。さらにワシントンDCへも2泊滞在し、ニューヨークとは異なるもう一つの米国の都市について知ってもらう。

スケジュールは、各滞在者の専門分野や興味などはあまり考慮せず、むしろニューヨークならではの場所や、滞在期間中のみ開催されるイベントを選んでいる。多種多様な活動を盛り込み、少しでも多くの地区へ行く機会を作り、ニューヨーク市の5つの区全てに必ず訪れるようにさせている。

旅程表には、各イベントや場所についての情報、行き方や入場料金など詳細な情報が記載されており、それを見れば一人でも行動できるようになっている(本項巻末「参考資料:ある日のスケジュールの例」を参照)。エイペックスアートのスタッフとは電話で常に連絡が取れる体制で、道に迷ったりトラブルにあったりしてもサポートが可能だ。

滞在期間中、滞在者にはブログを書いてもらう。このブログから各滞在者がどう反応し、何を感じているのかを知ることができる。また週に1回はエイペックスアートスタッフと滞在者が直接会う機会を設けている。滞在者によっては個人的に毎日連絡をして報告する人もいれば、週1回顔を合わせる以外、連絡を取る必要がない人もおり、それぞれの性格によって対応を変えている。

滞りの最後には、滞在者がニューヨークでの滞在を振り返って体験したことや考えたことについて語るインタビュー形式の一般公開トークが開かれる。このトークイベントは、一般の観客にエイペックスアートのアーティスト・イン・レジデンス事業について知ってもらう機会としても機能している。トークイベントは録音・録画され、その記録は後日ウェブサイトへアップされる。

エイペックスアートのギャラリースペースとオフィススペースが入居するビルの外観(中央)。

なお、航空費や滞在期間中の交通費、訪問施設の入場料等はエイペックスアートが負担するが、食費は参加者が自己負担しなければならない。

② アウトバウンド・レジデンス

インバウンド・レジデンスとはほぼ同様の内容で、ニューヨークから海外へ送り出すアウトバウンド・レジデンスも行っている。派遣者数は年間4人まで。参加者は海外の都市に1ヶ月間滞在する。過去の派遣先は韓国・ソウル、カンボジア・プノンペン、タイ・バンコク、ブラジル・サンパウロ、エチオピア・アディスアベバ、ギリシャ・アテネ、オーストラリア・ケラーベリンが挙げられる。

アウトバウンド・レジデンスの場合、派遣先の現地にアパート探しや旅程作成、滞在期間中の滞在者のサポートなどを担当するコンタクト・パーソンがいる。コンタクト・パーソンは過去のインバウンド・レジデンス参加者、展覧会プログラムに参加したキュレーター、もしくは誰かに紹介してもらった人物であることが多い。

エイペックスアートから航空費、アパート、滞在計画等が支給・提供される。滞在期間中の飲食費や所持品などは自己負担となっている。

(2) アーティストの募集・選考、応募アーティストの条件

エイペックスアートのアーティスト・イン・レジデンスでは、公募は行わず、推薦のみである。エイペックスアートのプログラムに参加することがその人物にとってプラスとなると思われる候補者を推薦者が選び、エイペックスアートに推薦してもらう。プログラム参加者の条件は、30歳以上であること、これまでにニューヨークに来たことがないことである。

推薦者は必ずしもエイペックスアートが知っている人物とは限らない。実際に、エイペックスアートから世界中の様々な機関へ働きかけ、エイペックスアートの活動に興味を持ってもらえる推薦者を探している。その際、役職の高い人物ではなく、現場のことを熟知している副学芸員や講師のような人物に推薦を依頼していると言う。

プログラムに適した人物を選んでももらうためには、ま



ず推薦者にエイペックスアートの理念とプログラム内容を十分に理解してもらうことが鍵となる。そのため、まず推薦者の言語でエイペックスアートの事業内容を正確に記述することが必要になる。推薦者がプログラム内容を理解した時点で、滞在者候補者を選んでもらい、その候補者がエイペックスアートのプログラム参加者として相応しい理由を書いてもらう。それをもとにエイペックスアートがさらに推薦者へ質問したり、候補者の情報を集めたりして、選考が行われる。

エイペックスアートは、積極的で将来有望とされるような人物というよりも、むしろこれまでチャンスを逃してきたような人物にこそプログラムに参加してもらいたいと考えている。今日の社会では、積極的な人物であるほど新しいチャンスを自ら作り出すことができ、周囲も深く考えずにその人物へチャンスを与えてしまいがちである。しかし、積極性には欠けるものの、才能と可能性を秘めた創造的な人物が多くいるのも事実である。エイペックスアートはそうした人物にこそチャンスを与え、またそうした人物であるほどエイペックスアートのプログラムはより効力を発揮すると考えている。

なお、一人になる時間・環境を作ることも趣旨の一つであるので、パートナーや家族などを同伴することはできない。

(3) プログラムの実績・過去の滞在者

これまでにプログラムに参加した滞在者は、アーティストやキュレーターに加え、文筆家や批評家、詩人、建築家、ジャーナリスト、女優、哲学者、政治家などと幅



エイペックスアートのギャラリースペースで開催されている展覧会の様子。

広い。アートと何らかの関係があれば、誰でも参加対象者になり得る。2000年以降、50ヶ国以上の国から100名以上が滞在している。

日本からの過去の滞在者は笠木日南子氏(2006年11-12月)と小澤慶介氏(2005年2-3月)の2名。両者ともキュレーターである。

(4) その他のプログラム

エイペックスアートではアーティスト・イン・レジデンスの他に①展覧会 ②出版事業 ③一般公開イベントを行っている。それぞれの事業は直接的には連携していない。

① 展覧会プログラム

エイペックスアートでは年間約7件の展覧会を開催している。エイペックスアートが招待した人物によって企画される展覧会3件に加え、2件はニューヨークのエイペックスアートで開催する「持ち込み型提案プログラム(Unsolicited Proposal Program)」,もう2件はニューヨーク以外の都市(海外も含む)で開催する「フランチャイズ・プログラム(Franchise Program)」として展示企画案を一般公募している。この一般公募では応募者の資格条件は特になく、本職がキュレーターでなくとも応募できる。

企画内容の基本的な条件は3人以上のアーティストの作品を含むグループ展であることだけだ。応募方法は500字以内の展覧会趣旨と4点以下の画像をウェブサイトから提出するだけである(他の情報・資料は一切不要)。最大限に公平性を保つため、審査過程では各企画案は匿名となり、世界中にいる最多150名の審査員によってコンピューター上で審査される。各審査員は一定数以上の企画案を読むことが条件付けられ、その中で優れていると思われる企画案に投票する。そして投票数上位の企画が選ばれる。審査員はアーティストやキュレーター、文筆家など、様々な分野で活躍している人物で構成され、毎年交代する。同じ年に誰が審査員となっているか、審査員同士は知らされない。

こうした公募方法も、可能な限り政治性を排除し、公平な審査を行うために考案されたものである。純粋に質によって評価を下すことで、新しい人物にチャンス

与えたいというエイペックスアートの信念がここにも表れている。

1994年の創設以降、150回以上展覧会を開催し、計1,200以上のアーティストが世界中から参加してきた。なお、エイペックスアートでは一人のアーティストだけをプロモーションすることを避けているので、個展を開催することはない。新しい考えや理論を紹介する場として活動しているため、コンセプトのあるグループ展を開催することに焦点を置いている。

2012-2013年度は、「持ち込み型提案プログラム」で3件、「フランチャイズ・プログラム」で3件選ばれた。「フランチャイズ・プログラム」の開催地はペルー・リマ、ウガンダ・カンパラ、テネシー州・メンフィスである。

② 出版事業

エイペックスアートではこれまで3冊の本を自費出版している。1冊目の『On Cultural Influence』(2006年発行)は過去にエイペックスアートが主宰した国際会議で発表された会議論文を編纂したもの。2冊目は『Cautionary Tales』(2007年発行)はキュレーションについて、3冊目は『Playing by the Rules』(2010年発行)はオルタナティブ・アートスペースの在り方についての論文集である。現在、創作活動と移動の関係性やアーティスト・イン・レジデンス事業など「ノマディズム」をテーマとした本の出版に取りかかっている。

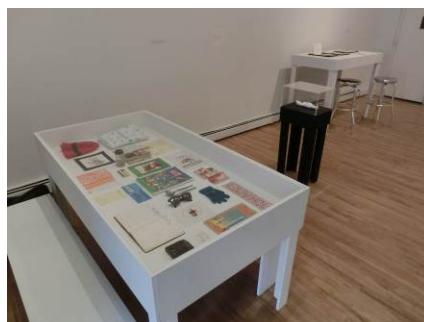
③ 一般公開イベント

エイペックスアートでは朗読会、上映会や討論会、パフォーマンスなど様々な公開イベントも開催している。公開イベントの多くは録音・録画され、その記録はウェブサイトにもアップされる。

3. 施設の構成と内容

前述のとおり、滞在者にはワンルームアパートが滞在場所として提供される。このアパートはマンハッタンを中心部にあるユニオン・スクエアに位置している。ニューヨークという街を体験してもらうことを目的としているので、行動しやすい街の中心部に滞在することが重要となってくる。なお、この部屋は過去に寄贈された物件である。制作用のスタジオは提供せず、アパートで

ギャラリースペースでの展示の様子とカタログ。



制作活動することも禁止している。

アウトバウンド・レジデンシーの場合、各都市の中心部にアパートを1ヶ月間借りる。この際、アート地区となっているような場所は避け、あくまで地元の人々が多く集まる地区を選ぶことをポイントとしている。

エイペックスアートの施設はマンハッタンのトライベッカ地区にあり、施設内には主にギャラリースペースとオフィススペースがある。

4. 運営体制と事業収支

(1) 運営組織

エイペックスアートは非営利団体である。5名のスタッフが勤務している。理事はランド氏を含め8名。副ディレクターのシベレー・メイローン (Cybele MAYLONE) は、これまで美術館等の資金調達部門などに勤務してきた人物である。プログラム・ディレクターのジュリア・ナイト (Julia KNIGHT) は、出版業界で働いた後、大学院で美術を学び、修士号取得後にエイペックスアートで働き始めたという。スタッフの職種は以下のとおり。

- Executive Director and Founder
- Deputy Director
- Media Director
- Programs Director
- Production Assistant

(2) パートナーシップ

エイペックスアートが唯一、パートナーシップを結んでいるのは韓国にある創作空間事業団衿川 (クンチョン) 芸術工場のみである。もともと衿川 (クンチョン) 芸術工場の事業がうまく機能していなく、運営に問題を抱えていたという。そこで、ある韓国人キュレーターがエイペックスアートの活動を紹介したところ、Seoul Art Space_Geumcheonがエイペックスアートに興味を持つようになり、それがきっかけで数年前からパートナーシップ関係を結ぶことになった。当初は運営の上層部がなかなか理解を示していなかったが、アーティストを交換するにしたがって、徐々にプログラムの趣旨と成果を理解してもらえるようになった。

レズ・アルティス等の国際ネットワーク組織には加盟

していない。しかし、ロードアイランド州のプロビデンスに拠点を置くアーティスト・コミュニティ・アライアンス (The Alliance of Artists Communities) とは連絡を取り合い、事業運営上の問題について話し合ったり、他のアーティスト・イン・レジデンス団体の運営者と会ったりしている。副ディレクターのメイローン氏は「私たちのプログラムは他の団体の事業とは大きく異なっていますが、他がどのようなアーティスト・イン・レジデンスを行っているかはやはり気になりますし、お互いのプログラム内容を紹介し合って意見交換することは重要なことだと思います。また、どのようなプログラム内容であれ、海外旅行保険のことや事務のことなど、国際的なアーティスト・イン・レジデンス事業を運営していく上で共通して抱える問題はありますし、そうしたことについて情報交換することはとても役立ちます」と話す。

(3) 事業収支

2011年度の収入は48万8,053ドル (約4,900万円)、支出45万7,929ドル (約4,600万円)、2010年度の収入42万9,489ドル、支出48万6,495ドルであった。2011年度支出の内訳は、プログラム運営費21万4,909ドル、スタッフ人件費24万3,020ドルとなっている。エイペックスアートは主に財団や政府などから助成を受けている。

アーティスト・イン・レジデンスの1ヶ月の平均予算は以下のようにになっている。エイペックスアートでは作品制作を行わないので、スタジオ費等の負担がないため、一般のアーティスト・イン・レジデンスよりもかなり低予算になっている。なお、エイペックスアートは滞在者の滞在期間中の食費は負担しない。

1ヶ月の平均予算 (単位: 円)	
航空費	100,000 - 150,000
アパート維持費	48,000
アパート電気代	6,000
携帯電話代	4,000
外ロカード (ニューヨーク市内地下鉄・バス運賃)	10,400
空港からのタクシー料金	6,000
スタッフ人件費	200,000

プログラム経費	
到着初日のエイペックスアートスタッフとの昼食会費	16,000
訪問施設入場料	30,000
滞在者が人と会う時の飲み代(コーヒー・酒等)	20,000
ワシントンDCへの電車代	20,000
ワシントンDCでの宿泊代	30,000
合計	490,400 - 540,400

5. 事業評価の実施状況

エイペックスアートでは各滞在者が滞在した1ヶ月後と6ヶ月後にアンケート調査を行っている。アンケートの質問は約30項目。質問内容の例として以下のような項目がある。

- 滞在中のイベント数は適当であったか
- どのぐらいの割合で計画されたイベントに出席できたか
- 最も気に入った活動内容・イベントはどれか
- 楽しめなかったイベントや場所はどれか
- プログラムで改善すべき点は何か
- このプログラムをアーティスト・イン・レジデンスと形容することは適しているか
- 滞在中に出会った最も印象的だった人物とその理由
- 滞在期間中に創作活動ができないことについてどう感じたか
- アーティスト・イン・レジデンスに参加したことが今後の創作活動にどう影響すると考えるか
- ニューヨークと出身地の違いは何か など

このアンケートから、プログラムが各滞在者へどのような影響を与え、成果をもたらしたのかを知ることができる。また、アンケートから得たフィードバックをもとに、プログラムの改善を常に行っている。

6ヶ月後に行うアンケートは最近になって始めたものだが、しばらく時間が経ってから、改めてエイペックスアートのプログラムについて考えてもらうことで、各滞在者へどのような長期的影響を与えられたのか知ることがで

きる。

こうしたアンケート調査に加え、定期的に個人的なEメールを送ったり、Facebookやtwitterで繋がることで、各滞在者の近況を随時知ることができる。このプログラムでは事務的なやり取りだけではなく、より個人レベルの関係を築くことができるため、自然と連絡を取り合うような関係が維持されている。

しかし、スタッフたちは「エイペックスアートでは、参加者に考え方や人生を変えるような体験をしてもらい、最終的に彼らの創造力を高めることを目指しているため、事業の成果はそう簡単に数値化できるようなものでは決していない」と強調する。滞在中に滞在者が作品の制作・発表を行わないので、もちろん目に見える成果などは得られない。「そもそもアーティストの成功度を測ることは非常に困難なことだ。一般的に展覧会の数やレビューの数が多いほどそのアーティストは成功していると安易に判断してしまいがちだが、そうしたアーティストの作品を良く見てみると決して質の高いものとは言えない」とランド氏は主張する。エイペックスアートでは、プログラムの成果は目に見えないものと認識しているので、定量的な評価には頼っていない。アンケート調査から得られる結果も「自分自身に自信が持てるようになった」「自分の才能をもっと信じられるようになった」など、むしろ私的な反応であることが多いと言う。

しかし目に見えない成果であれ、滞在者からの反応は非常に良く、他のアーティスト・イン・滞在者と比べても記憶に残る体験となっていることが明かだと言う。また、過去の滞在者の多くは、エイペックスアートのアーティスト・イン・レジデンス終了後、新しいチャンスをさらに掴み、活動の幅を広げており、滞在中に出会った人物とも、その後共同で創作活動をするケースも多いようだ。

6. 現在の課題と今後の方向性

エイペックスアートのアーティスト・イン・レジデンスは、ニューヨークの人々と出会い、より私的な繋がりを持つことが趣旨であるため、英語でのコミュニケーションが要求される。最低限の英語を話せば問題ないが、全く話せない場合、滞在中に出会う人も限られてしまい、



エイペックスアートのスタッフ。中央がExecutive Directorのランド氏。

ニューヨークならではの体験・出会いができなくなってしまう。そうした言語の壁を乗り越えることが現在の課題として認識している。

今後の可能性として、海外の他の団体とパートナーシップを結ぶことも前向きに考えているが、その場合、そのパートナー団体はエイペックスアートの理念を理解し、同じような趣旨の事業を行っていること、もしくは行うことが条件だと言う。現在、韓国の創作空間事業団 衿川(クンチョン)芸術工場とパートナーシップを結んでいるが、エイペックスアートの活動理念や事業内容を理解してもらうまで、かなりの困難があった。「私たちのやっている活動を他の人や団体に理解してもらうことは、簡単なようでいて、実はとても難しいのです」とランド氏は言う。

現在の米国ではアーティスト・イン・レジデンス事業はむしろ飽和状態で、制作スペースを確保するためだけに、アーティスト・イン・レジデンスを渡り歩いて生活するアーティストも数多くいる。しかし、それだけでは単なる不動産取引で終わってしまう。「アーティスト・イン・レジデンス事業は、単にスタジオを提供するだけではなく、それ以上の大きな可能性を秘めているはずだ」とランド氏は主張する。

参考資料:ある日のスケジュールの例

以下のスケジュールは、インバンド・レジデンシーで2013年1月2日から2月2日まで滞在した、韓国・ソウル出身のアーティストに対して提供された旅程表の一部である。このレジデンスプログラムの趣旨や具体的な活動内容が分かる資料として掲載するものである。

2013年1月13日(日)

◎ 午後1時 | リマの聖ローズ教会でのミサ(Catholic Mass service @ The Church of St. Rose of Lima)

- 住所:(省略)
- 電話:(省略)
- <http://catholicmanhattan.blogspot.com/2008/08/39-st-rose-of-lima.html>
- 入場料無料

- 最寄り駅:A・Cラインの168th Street駅
1ラインの168th Street-Washington Heights駅
- 行き方:A・Cの駅から歩く場合、駅を出てSt. Nicholasアベニューに沿って南に向かう。165thストリートで左に曲がり、半ブロック歩く。教会は進行方向右側。
- このイベントについて:宗教的なことについて知ってもらうというより、むしろ文化的な体験をしてもらうためのものです。ハーレム地区のコミュニティはとても信仰心が強く、またヒスパニック系の信徒も多くいるため、この教会では英語とスペイン語の両言語で礼拝を行っています。今回の礼拝は英語で行われます。この地域について知るのに良い機会でしょう。

◎ 午後2時30分 | モリス・ジュメル・マンション(Morris Jumel Mansion)

- 住所:(省略)
- 電話:(省略)
- <http://www.morrisjumel.org/>
- 開館時間:午前10時—午後4時
- 入場料:5ドル
- 最寄り駅:A・Cラインの163rd Street-Amsterdam Avenue駅
1ラインの157th Street駅
- 行き方:聖ローズ教会から歩く場合、教会を出てWest 165th Streetを来た時と同じ方向に歩き、Amsterdam Avenueで右に曲がる。Amsterdam Avenueに沿って3ブロック歩き、West 162nd Streetで左に曲がる。Jumel Terraceまで歩き、そこで右に曲がる。邸宅は進行方向左手に位置する。
- 邸宅について:1776年の秋にワシントン将軍がこの邸宅を司令部として使っていたのです。これは本当!ちょうど独立戦争でのハーレム・ハイツの戦いでワシントンが英国軍を撤退させた時期にあたります。独立革命の11年前にあたる1765年にこの邸宅は英国のロジャー・モリス大佐と彼の米国人の妻、メアリー・フィリップスによって建てられました。この場所はそよ風の吹く高台にあり、彼らにとって夏の避暑地として格好の場所だったのです。マンハッタンの北西

部に位置するこの地区はマウント・モリスとも呼ばれ、ハーレム川からハドソン川まで伸び、その面積は130エーカー以上あります。しかし彼らは英国王室に忠実であったため、最終的には英国へ戻らざるをえませんでした。

戦時中、邸宅は、夏場の涼しいそよ風ではなく、むしろ高台にあるという立地から利用価値が見いだされます。東側にはハーレム川、ブロンクス、そしてロング・アイランド海峡が、南側にはニューヨーク市と港が、そして西側にはハドソン川とジャージー・パリセーズが眺められるため、マウント・モリスに軍司令部が置かれたのです。ハーレム・ハイツの戦いのすぐ後、ワシントンと彼の軍隊はこの邸宅を退き、その後しばらく英国とヘッセンの軍部が占拠していました。

その後、ワシントンが大統領となり、1970年の7月10日にこの邸宅を再び訪れ、閣僚たちと食事します。この中にはジョン・アダムス副大統領、トーマス・ジェファーソン国務長官、アレキサンダー・ハミルトン財務長官、そしてヘンリー・ノックス陸軍長官もいました。

◎ 午後4時 | マージョリー・エイオットのパーラー・ジャズ (Parlor Jazz at Marjorie Eliot's)

- 住所: (省略)
- 電話: (省略)
- <http://www.harlemonestop.com/organization.php?id=84>
- 時間: 毎週日曜午後4時～6時
- 入場料無料
- 最寄り駅: A・Cラインの163rd Street-Amsterdam Avenue駅
1ラインの157th Street駅
- 行き方: モリス・ジュメル・マンションから歩いていく場合、邸宅を出たら左に行き、Jumel Terraceに沿って歩く。West 160th Streetで左に曲がり、Edgecombe Avenueで右に曲がる。
- このイベントについて: ハーレムの北の端に位置するマージョリー・エイオット宅の居間では、十年以上もの間、雨が降っても晴れても、休むことなく毎週日

曜日にジャズ・コンサートが開催されます。この彼女のアパートの居間で毎週される無料コンサートはハーレムでは伝説ともなり、ニューヨークのジャズ愛好家にとっては名物イベントとなっています。これといった看板もないし、呼び鈴に応える人もいないので、ただ直感を信じて行けば、辿り着けるはず！

◎ 午後7時 | スコット・キールナン (Scott Kiernan) と飲む

- 場所: E.S.P. TV
- 住所: (省略)
- スコットの携帯電話番号: (省略)
- <http://madmuseum.org/series/esp-tv>
- 最寄り駅: LラインのBedford Avenue駅
- 入場料: スコットに自分のお金で飲み物一杯おごること
- スコットについて: スコットはE.S.P.TVという、奇抜なバラエティショーをする団体の創設者の一人です。E.S.P. TVは実験ビデオ、パフォーマンス、そして音楽を紹介するショーケースを様々な場所で行い、アナログな方法と電子技術の両方を使って音と視覚の可能性を探求しているのです。芸術活動の場として公共の電波を利用してきたニューヨークのアーティストの伝統を引き継ぐように、E.S.P. TVの創設者であるScott KiernanとVictoria Keddleは、グリーンスクリーンの使用やビデオ信号の操作、アナログビデオのミキシングなどを行うライブ撮影イベントを主宰しています。



G. カナダ

1. プリム | PRIM: Productions Réalisations Indépendantes de Montréal
2. バンフセンター | The Banff Centre

写真:バンフセンター

現地調査協力:原万希子(キュレーター、在バンクーバー)

1カナダドル=100円で換算

1. プリム | PRIM: Productions Réalisations Indépendantes de Montréal

面会日: 2013年1月24日(木) 10:00-12:00

面会者: Alain PELLETIER (Executive Director)

URL: <http://www.primcentre.org/>

1. 運営機関の概要

Productions Réalisations Indépendantes de Montréal (以下、PRIM)は、モンリオールのダウンタウンから北へ3kmの住宅の多い地域に位置する。アーティストやインディペンデント系映画・映像の製作者が数多く集まるメディア・ラボとして知られ、主にデジタルメディア技術を活用した創作活動を支援している。映像編集や音声編集、ナレーション収録のためのスタジオを提供するほか、創作上の技術面でのサポートや編集技術のトレーニングを提供する。

(1) 設立の趣旨と経緯

1981年、実験的なビデオアートが盛んに創作されるようになった時流を受けて、ビデオアートを創作するためのプロダクション・センターとしてPRIMは設立された。設立から10年かけて、ビデオから映画、音楽、ニューメディアに対応する創作環境を整備し、1995年には新しい技術と芸術表現を結ぶメディア・ラボとして位置付けられる。

アナログからデジタルという大きな技術革新が進んだ90年代には、コンピューター・グラフィック(CG)の進化により表現のリアリティの精度が向上し、それらを具体化する作品が数多く作られた。しかし、それらの作品は必ずしも芸術的完成度が高いものではなかったと言う。そうした状況を踏まえ、より質の高い内容の創作活動を広く普及するために、1996年、創作上の技術面での支援をPRIMの技術スタッフが行う「クリエイティブサポート・プログラム」をスタート。2003年、現在の建物に移転し、デジタルハイビジョン映像の製作に対応する最新の設備環境を整え、それらの最新技術に精通した技術スタッフがアーティストやインディペンデント系映画・映像の製作者の創作活動を支援している。

(2) ミッション

PRIMでは、アーティストの創造的な自由を尊重し、創作上の編集機材 (editorial control) や創作機材 (creative control) を維持する最適な環境を提供することをミッションとしている。プロレベルの映像編集や音声編集が可能なスタジオ設備を備えるだけでなく、アー

ティストの創造的なアイデアを実現するために高度なスキルを持つ技術スタッフを配置し、多様な分野で活躍するアーティスト、インディペンデント系映画・映像の製作者に広く開かれた施設を目指す。また、デジタルメディア技術を活用した創作活動の普及のために、アーティスト・イン・レジデンスや共同製作を推進し、新しいメディアや技術に対応するトレーニングを提供している。

アライン・ペルティエ (Alain PELLETIER) は、「アーティスト、インディペンデント系映画や映像の製作者が、芸術系大学を卒業した後にデジタルメディア技術を活用した創作活動を継続できる環境が少ないため、PRIMはそのようなニーズに対応した環境を提供する役割があります」と説明する。

2. プログラムの内容と実績

PRIMの活動は、最新のデジタルメディア技術に対応した創作環境を提供する総合的なクリエイティブサポートに重点を置き、その一環として国内のアーティストやクリエイターを対象とするレジデンス事業と、海外のアーティストやクリエイターを対象とするレジデンス事業を運営している。

(1) 国内のアーティスト等を対象とするレジデンス事業

① アーティスト・レジデンシー

アーティスト・レジデンシー (Artists' Residencies) では主にモンリオール周辺地域を活動拠点とするアーティストやクリエイターを対象に、1年を上限にPRIMのスタジオ設備や創作上の技術面でのサポートを提供している。アーティスト等の創作プロセスに応じてカスタマイズした支援をしており、アーティスト等による映像や音声の編集作業をPRIMの技術スタッフに依頼することができる (100時間が上限)。アーティスト等は滞在成果としてPRIMで制作した作品をPRIMのメンバーに公開することが義務づけられている (著作権はアーティスト等に帰属する)。



旧銀行の建物をリノベーションしたプリムのエントランスロビー。この空間で映像インスタレーションを展示・上映したこともあると言う。

このレジデンス事業では、映像・映画、デジタルメディアの専門領域で活動経験が十分にあるアーティストを対象とした「Established Artist」と、前述の専門領域以外での活動経験が十分にあるアーティストを対象に、新しいメディアや技術を取り入れる機会を提供する「Les Transfuges(亡命者)」の2つの枠組みがある。それらの枠組みの中で、公募ではなく理事会の推薦を通じて各1人のアーティストまたはクリエイターが選考される。

② ジョイント・レジデンシー

上記のアーティスト・レジデンシー以外に、国内向けのレジデンス事業として、モントリオール市内の文化機関であるDAZIBAO(メディアセンター)、CODE D'ACCES(現代音楽センター)、MAI(Montréal arts interculturels: 国際文化交流センター)やEastern Bloc(メディアセンター)とパートナーを組み、共同プログラムを推進している。アーティスト等の募集や選考はDAZIBAO、CODE D'ACCES、MAI、Eastern Blocが主体となって実施しており、アーティスト等はPRIMのスタ

ジオ設備や技術面でのクリエイティブサポートの提供を受けて創作活動を行うことができ、PRIMで創作した作品をDAZIBAO、CODE D'ACCES、MAI、Eastern Blocのいずれかの応募先の文化機関で発表することができる。

(2) 海外のアーティスト等を対象とするレジデンス事業

① CCA/CALQ/PRIM

ケベック・アーツカウンシルの主導するエクスチェンジ・プログラムで、グラスゴー現代美術センター(以下、CCA)とケベック・アーツカウンシル(以下、CALQ)とPRIMが2005年にスタートした。毎年、CCAからサウンド・アーティストがCALQを介して1人、PRIMに派遣され、5月から9月の約3ヶ月間滞在する。CALQはCCAとクリエイティブ・スコットランド(旧スコティッシュ・アーツカウンシル)とそれぞれのアーティストの受け入れ行う契約を3年単位で交わしており、PRIMとの仲介を行う。

アーティストの選考は、CCAが3人のアーティストの候補者を推薦し、最終的にPRIMが決定する。このプロ

録音スタジオ(左)では、アフレコでドキュメンタリー映像のナレーションを録音していた。右は編集用のPCが並ぶスタジオ。



グラムにかかる費用に関しては、クリエイティブ・スコットランドがアーティストの渡航費と滞在費を負担し、CALQが宿泊施設を、PRIMがスタジオと創作上の技術面での支援を提供している。なお、このプログラムにかかる経費は直接的にはCARQからPRIMに支払われないが、年間助成の一部として間接的に支払われている。

② ヨーロピアン・ペピニエール・プログラム

モビリティファンドのヨーロピアン・ペピニエール(European Pépinières)との提携によるヨーロピアン・ペピニエール・プログラムは、欧州及びカナダ(ケベック州)の間の移動性(mobility)を向上することを目的とした18歳以上35歳以下の若手アーティストが対象のプログラムで、3年毎に公募される。欧州及びカナダ(ケベック州)に在住するアーティストが応募することができ、両地域の文化施設やレジデンスに滞在することができるプログラムである(CALQ、p.388-396参照)。PRIMは、3年毎に2人のメディア・アーティストを4ヶ月間受け入れている。ヨーロピアン・ペピニエールからPRIMに対して、アーティスト1人につき約4,000カナダドルがアドミニストレーション費用(スタジオ使用料や設備の維持費は含まない)として支払われる。

(3) アーティストの募集・選考、応募アーティストの条件

前述のように、PRIMのレジデンス事業ではプログラムに応じたアーティストやクリエイターの選考方法と応募条件がある。PRIMが主体となって公募を実施する事業はないが、最終的な選考はPRIMが行う。ペルティエ氏は「いずれのプログラムでも、芸術的に優れた内容のプロジェクトかどうか、実現可能なプロジェクトかどうか、現実的な予算計画かどうかの3点を基準に選考します」と説明する。

(4) プログラムの実績・過去の滞在者

① アーティスト・レジデンス

2011-12年度のアーティスト・レジデンスでは、Established Artist で Christian CALON、Sylvain L'Espérance、Luc BOURDON、Robin AUBERTの4名を、Les Transfuges(亡命者)で Diane LANDRY、

Netochka NEZVANOV, Marie BRASSARDの3名を招へいた。

② CCA/CALQ/PRIM

CCA/CALQ/PRIMでは、毎年1人のアーティストを招へいしており、2011-12年度はCharlotte PODGER(英国)を招へいた。

③ ヨーロピアン・ペピニエール・プログラム

ヨーロピアン・ペピニエール・プログラムでは、3年毎に2人のアーティストを招へいしており、過去にMartina MOOR(イタリア/英国)とBroc STEPHONE、Pernot LAURENTを招へいた実績がある。

(5) その他

PRIMの施設利用希望者は、事前にメンバーシップに加入しなければならない。メンバーシップの年会費は個人で75カナダドル(約7,500円)、芸術団体の組織は150カナダドル(約15,000円)で、希望利用日の8ヶ月前から予約をすることができる。以前は、希望利用日の3ヶ月前から予約をすることができたが、近年は、ドキュメンタリーを制作するアーティストが多く、長期間の利用を希望するため希望利用日の8ヶ月前からの予約に変更したと言う。

3. 施設の構成と内容

PRIMには、映像編集スタジオが4部屋と音声編集スタジオが1部屋あり、その他にスクリーニングやミーティングのためのスペースがある。映像編集スタジオには映像編集機材の開発、製造、販売を行うAVID社(本社:米国)のPlatformなど、ハイビジョン映像の編集機材が完備され、他にハイビジョン映像を撮影するためのカメラや照明、プロジェクターなどがある。また、音声編集用スタジオには、AVID社のPro Tools 24などの編集機材が完備され、ナレーションや吹き替えを収録する録音スタジオも併設されている。

PRIMは海外のアーティストやクリエイターが宿泊することができる施設は所有していない。海外からアーティストやクリエイターを招へいするプログラムでは、CALQと共同で事業に取り組み、CALQが契約するアパートの部屋を提供していると言う。



スクリーニングのためのスペース(左)と、数々の貴重な映像の記録媒体が収蔵されている倉庫(右)。倉庫は、かつて銀行の金庫として使われていたスペースを使用している。

4. 運営体制と事業収支

(1) 運営組織

PRIMは、アーティストでPRIMの最高責任者(Executive Director)のペルティエ氏が運営するアーティスト・ランの非営利組織で、現在、ペルティエ氏を含めて6名のスタッフがフルタイムで働いている。最高責任者以外には、映像、音声などの技術スタッフが3名、プログラム・コーディネーターが1名、スタジオの受付と予約管理の担当スタッフが1名いる。なお、ペルティエ氏は、アーティストとしてPRIMのレジデンス事業に2年間参加した経験があり、その経験を生かしてPRIMを運営しているという。

- Executive Director
- Coordinator, Member Services and Communications
- Technical Coordinator
- Post-production Assistant
- Audio Coordinator
- Reception and reservations

(2) パートナーシップ

前述したように、国内のアーティストやクリエイターを対象とするレジデンス事業では、モントリオール市内の文化機関、DAZIBAO、CODE D'ACCES、MAIやEastern Blocなどとパートナーシップを組んで共同プログラムを実施している。また、海外のアーティスト等を対象とするレジデンス事業のうち、CCA/CALQ/PRIMではCALQと、ヨーロッパ・ペピニエール・プログラムではCALQとヨーロッパ・ペピニエールとパートナーシップを組んで共同プログラムを実施している。PRIMの設備環境と技術スタッフをリソースとして、様々なレジデンス事業を推進していることが特徴的である。

(3) 事業収支

PRIMの事業予算は約59万8,000カナダドルで、主な補収入はスタジオレンタル料や技術料以外に、CALQから約17万カナダドル(約1,700万円)、カナダ・アーツカウンシル(Canada Council for the Arts)から約8万7,000カナダドル(約870万円)、モントリオール・シティ・カウンシル(Montréal City Council)から約2万5,000カナ

ダドル(250万円)の補助金がある。なお、CALQからの助成は毎4ヶ年ごとの契約更新の継続助成である。

5. 事業評価の実施状況

PRIMはアニュアルレポートを作成しているが、事業評価は特に行っていない。事業評価のためのレポートや資料を作成する必要性について、ペルティエ氏は、「カナダの中でもケベック州は文化芸術を外交の大使として理解しており、レジデンス事業の重要性を認識しているため、レジデンス事業を正当化する必要がない」と説明する。また、国内のアーティスト等によるレジデンスの成果については、滞在制作された作品の国内外の重要な賞の受賞実績などの情報をもとに判断することができるが、海外のアーティスト等は、その後の展開を追跡調査するのが困難である。そのために、政府がアーティストを審査するのではなく、アーティストがアーティストを審査する仕組みが重要だとペルティエ氏は考えている。

6. 現在の課題と今後の方向性

前述のように、海外のアーティスト等を対象とするレジデンス事業では、CALQやヨーロッパ・ペピニエールと連携して共同プログラムを推進しているが、応募や選考に独立性が少ないことが課題である。しかし、独立したレジデンス事業を推進するためには、アーティストやクリエイターへの謝礼や滞在費、宿泊施設の維持費などの資金をどのように捻出するかという問題があると言う。

また、インディペンデント系の映画や映像の創作で利用されることが多くなった一方で、新しい技術を導入することで実験的な創作をするアーティストやクリエイターが少なくなってきたことを課題と捉えており、今後の展開として、実験的な創作とリサーチに焦点を当てた新しいレジデンスプログラムを計画している。ペルティエ氏は、「PRIMはビデオアートにフォーカスしたコンテンツボラリーアートセンターとして設立されたという経緯があり、より実験的なコンテンツボラリーアートの創作を支援したい」と説明する。

さらに、欧州のメディアアートの文化機関を中心とし

たネットワークが企画するレジデンス事業への参加を検討している。これは、EMAN (European Media Art Network) が主宰するEMARE (European Media Artists in Residence Exchange) という交流プログラムで、現在はドイツ、オランダ、フランス、英国の欧州4ヶ国とメキシコの、合計5ヶ国のメディアアートセンター間でのアーティストの移動を支援している。今後、EMAREは、カナダ、オーストラリアのメディアアートセンターを含めた7ヶ国での交流レジデンス事業を検討しており、PRIMもそのパートナーとして協議に参加しているが、アーティストの選考の仕組みや財政的な問題などが数多くある。

PRIMは、北米や欧州圏外の国や地域(日本を含む)からのアーティストやクリエイターの招へいに消極的な姿勢であると言う。それは、レジデンス事業を通じてアーティストやクリエイターとの長期的な関係を築くことが目的であるからには、物理的な距離の問題によって、一回限りの関係になるのではないかという懸念を抱いているからである。また、日本のメディアアートの文化機関やレジデンスとのコンタクトがないことも、理由の一つとなっている。

2. バンフセンター | The Banff Centre

面会日：2013年1月26日（土）11:00－13:00

面会者：Jim OLIVER (Director Custom Service)

Laura S. LYNES (Director, Government Relation)

Tamara ROSS (Director, Programming Operation)

Jesse MCKEE (Water Phillips Gallery Curator)

URL: <http://www.banffcentre.ca/>

1. 運営機関の概要

カナダ・アルバータ州最大の都市、カルガリーの西方に位置し、ユネスコの世界遺産に登録されたバンフ国立公園内に位置するバンフセンター（以下、「センター」）は、施設の規模、プログラムの充実性、分野間の交流などの観点から、世界で最大規模の「創造性を育む」施設となっている。

(1) 設立趣旨・経緯

カナダが不況時代にあった1933年、州立大学であるアルバータ大学が、カナディアン・ロッキー山脈の観光地のバンフという小さな町に、演劇を学ぶ夏のワークショップを開催することから始まった。大学の公開講座として米国のカーネギー財団から助成金を得て創設された。最初は演劇に関する単一の講座から始まり、100人の教師を3週間招待した地域演劇（community theater）について考えるプロジェクトが大成功を収めた。夏季合宿形式で継続される中で、さらに他の芸術分野のプログラムが追加され、1935年には「バンフ芸術学校（The Banff School of Fine Arts）」として知られるようになった。

1948年、当時のディレクターであったドナルド・キャメロンが、バンフ国立公園の中に約17万6,000㎡（東京ドームの約3.7個分）の土地を交渉して獲得し、現在のバンフセンターの基盤が形成された。プログラムは継続的に成長と発展を遂げて、1953年にカンファレンス（会議）部門、1954年にはマネジメント・プログラムが導入された。1970年にはより広範な教育的役割を認識し、実験的かつ革新的なセンターとして展開する方向を目指して、バンフ生涯教育センター（The Banff Centre for Continuing Education）、略称「バンフセンター」に改称した。1978年、アルバータ州政府は任命理事会の統治下で認可非学位の教育機関としてセンターに完全な自治権を付与した。

1990年代半ば、州のほとんどの公的機関と同様にセンターの事業助成金が縮減された。センターは起業的な経営方針を定め、自己収益を生み出すため、会議施設と新しい音楽・音響芸術の複合施設を設立する資金調達キャンペーン“Creative Edge”を開始し、成功を

収め、新しい施設が1996年にオープンした。同年、山岳文化プログラム（Mountain Culture programming）部門が設立され、1999年には、カナダ連邦政府によりカナダの国立研修所（National Training Institute）として認知された。

(2) ミッション

センターは「創造性を刺激すること（inspiring creativity）」というミッションと、「芸術・文化を通じてカナダの創造性や知識の推進に貢献すること」をビジョンに掲げている。芸術、文化、教育機関、会議施設であると同時に、芸術、科学、ビジネス、環境分野における創造的な活動の発展と振興の牽引役として、国際的な名声を獲得している。

現在は、すでにキャリアを築き始めている中堅レベルのアーティストやクリエイターたちが、さらなるキャリアアップ、ステップアップをするためにサポートすることを事業目的としている。サポートしている分野は多岐にわたり、美術、映画、メディア、舞台芸術、音楽、ダンス、文学、さらには先住民の芸術などが挙げられる。センターでは、新しい人たちとの交流を通じて企画を生み出す可能性が多くあり、多様かつ創造的な企画が新しく発想され、実践されている。

2. プログラムの内容と実績

(1) プログラムの概要と特徴

様々な分野のアーティストをサポートし、また異分野間を横断する作品の創造や改良のサポートをすることが、センターのプログラムの目的である。滞在アーティストは、スタッフの協力を得てオープンスタジオやワークショップを開催する。プログラムを概観すると、以下のような特徴を挙げることができる。

① 多彩なプログラムと参加者への奨学金



雄大な自然に囲まれたサリー・ボードン棟には、ダイニング、フィットネス、レクリエーションのための設備などが設けられている。

センターには年間に渡って膨大な数のプログラムが提供されている。それらは多岐にわたる芸術分野（例えば室内楽、オペラ、インスタレーションアート、詩、劇作、写真、映画、ダンスなど）で、多様な内容と方法で実施されており、年間約4,000人のアーティストが滞在している。基本的に芸術ジャンルごとのディレクターの裁量でプログラムは展開されている。例えば、学校のように直接講師から学ぶこと、参加者自身の新しい作品を創作すること、参加者が企画を持ち込むこと、特に決まったアイデアを持たずに参加し、ここで企画を構想し、実現することもできる。

センターでは、プログラムの参加者に奨学金を用意している。平均すると参加費、滞在費の70%の費用を支援し、残りの30%はアーティストが自己負担している。アーティストが直接、カナダ・アーツカウンシル(The Canada Council for the Arts)や、アルバータ州政府の助成を受けて自己負担することも稀にある。またナショナル・トレーニング・プログラムからの助成も受けている。

② 講師(faculty)制度による企画運営

センターはアートスクールと同様に中等教育機関(セカンダリー・スクール)という位置づけになる。大学の教授陣と同じように講師を配置しているが、常勤ではない。実際にアーティストとして活動している人たちを

プログラムに併せて講師として招へいし、それぞれのプログラムを企画運営してもらう。学期制ではなく、2週間から6週間程度のタームでプログラムを組んでおり、通常はタームごとに講師を配置する。例外的に、長い場合は1年間講師を務めるアーティストもいる。

講師の選考は、それぞれの分野のアーティストック・ディレクターが、彼らのネットワークを通じて選抜する。例えばダンス分野のプログラム・ディレクターは、通常はトロントのカナダ国立バレエ学校の仕事をしており、国内のバレエ分野に幅広いネットワークを持っているため、優れた講師を熟知している。主にアートスクールなどを卒業し、プロとして活動を始めた人たちがキャリアアップや新しい試みを求めて参加することが多い。多くの場合はロコミでの紹介が多い。受講するアーティストの場合も同様に、ロコミで評判が広がることや、分野間のロコミ、推薦も多い。

③ 異分野間の共同制作と日常的な交流

センターでは、分野を超えた共同作業の要望も多々ある。例えば、レジデンスで滞在していた振付家、アズブル・バートン(Azure BARTON)のプロジェクトがある。滞在中のある日、彼女は水の中でロッキングチェアを使ってダンスをしている夢を見て、それを実現したいとディレクターに交渉し、その後、3回に渡ってバンフセンターを再訪して、この作品に参加するダンサー、



サリー・ボーデン棟の最上階にあるヴィスタ・ダイニングルームはマーケットスタイルのダイニングで、ロッキー山脈に囲まれながら食事ができる(左)。宿泊施設のロイドホールには、177部屋のスタンダードルームが備わっている(右)。

映像撮影スタッフ、衣装など必要なものを全てをセンターが協力・提供したことで、彼女の夢のプロジェクトを実現させた。現在ではバートン氏は世界のトップダンサー兼振付家として活躍している。

別の成功例としては、トロントの音楽団体がレジデンスで参加し、演劇プログラムに参加している役者や映像編集スタッフの協力を得て、ミュージックビデオを製作したことがある。センターは彼らのために、演劇、ダンス、映画・メディアの各分野のディレクターを通じて、撮影・編集のスタッフ、出演者などを調整した。完成した彼らのビデオは世界中に流通した。これはかなり大掛かりで異例な異分野間の共同制作だった。

施設内の共有のダイニングルームが、異なる分野のアーティストたちの活発な交流の場になっている。ここで様々なアーティストたちが偶然出会い、新たなコラボレーションが生み出される。例えば、ダンサーが作曲家と出会って4ヶ月後には新しいコラボレーションの作品が生まれるといった可能性がたくさんある。ネットワーキング、異分野間の交流や共同プロジェクトは、偶発的にパブやダイニングルームで日々展開している。ここはそういう意味でアーティスト同士の新しい出会いに最も適した場所となっている。

④ シーズンごとに特徴のあるプログラム

秋季から冬季にかけては中堅のアーティストがプロジェクトを持って参加する。最も参加者が集中するのは夏季で、比較的若手のアーティストたちが研修目的で参加することが多い。夏季はBanff Summer Arts Festivalと題した大規模なフェスティバルがあり、その関連でオペラ、ダンス、リーディングなど数多くプログラムが組まれる。また3年毎の8月末には、バンフ国際弦楽四重奏コンクール(Banff International String Quartet Competition)を開催している。この最優秀受賞者は、その後のレジデンスの機会が提供されるほか、センターの企画で2年間のツアーの機会を与えられる。

秋季にはバンフ・マウンテン・フィルム・フェスティバル(Banff Mountain Film & Book Festival)をナショナルジオグラフィック社と共催でセンターが毎年開催している。山岳文化プログラムが企画する国際映像祭で、毎年11月初旬に開催される。映画のほか、写真エッセイ

や出版書籍などの分野も加えた山岳文化を総合的に紹介するフェスティバル。最高レベルのシンクタンクや超一流の環境科学者、政府や地域社会のリーダーを一同に集めた「山岳コミュニティ会議」など、極めて重要な環境問題への解決のアイデアや提案などを議論する場を提供してきた。

当初は一夜限りの映画祭として始まり、いまや世界最大の山岳文化の映画祭に発展したことで、センターは国際的な知名度を獲得した。ここで選抜されたベストフィルムは、世界に巡回上映を行っており、今年は37ヶ国(日本も含む)で800回上映された。

⑤ 理想的な環境・設備と滞在者に対する生活サービス

センターは、多分野のアーティストが、世界に紹介されるような興味深いアート作品を開発するためのサポートを提供する。アーティストに可能な限り最高の体験を提供するために、常にレジデンスプログラムの変革、改善を継続的に行っている。全てのレジデンス滞在者のために、ダイナミックで革新的なアプローチを試すことのできる、理想的で柔軟かつ高度なサポート環境設備を整えている。例えば映画監督であれば、撮影機材、編集機材、スタッフなどセンターが全て提供できるので、ここにきて制作に没頭することができる。

また、滞在者に対して、宿舎や食事など、洗濯以外の基本的な生活のサービスを提供しており、日常の家事から解放されて作品制作や活動に集中することができる。2011年に拡大改装した図書館は非常に充実しており、プール、フィットネス、スカッシュコートや体育館などのスポーツ・レジャー施設もあり、子ども連れの家族で滞在するアーティストにも高く評価されている。

(2) 特徴的なアーティスト・イン・レジデンスのプログラム

前述したとおり、センターのプログラムは膨大な数で、内容や方法は個別に異なっている。本調査ではインタビューから詳細を直接伺うことができた「アーティスト・コロニー・プログラム」と「テーマティック・レジデンス」を取り上げて紹介することとする。

① アーティスト・コロニー(Artists' Colony)

陶芸スタジオの電気窯(左)と屋外にある窯小屋(右)。屋外の窯小屋は日本のものを参考に作られた。



森の中に建てられた大小様々の9つのキッチン付きの「コロニー」と呼ばれる個別のスタジオで、文筆家、作曲家、美術家などが自主企画を持って滞在できるプログラム。キッチン、ベッドルーム、インターネット、コンピューター、プリンターなどの設備を備えており、スタジオに終日こもって制作活動に打ち込める。数週間こもって制作に集中して打ち込むことができるので、執筆や作曲など孤立して集中を必要とする制作分野には最適なプログラムである。また、施設内の図書館やスポーツ施設の使用は自由で、滞在中にセンターで行われる全ての舞台芸術の公演を観覧することができる。

コロニーはセンター敷地内の森の中に隔離されているが、滞在中はバンフセンターの全ての施設や各種の制作工房を使うことができる。工房の使用は予約制で、アーティストの希望に応えられるように、工房スタッフの配分や使用スケジュールを各分野のディレクター間で交渉して決める。できる限りアーティストの要望に応じてサポートをするために、あらかじめプロジェクトの内容を把握し、目的に沿ったスケジュールを組むことが理想ではある。しかし、多くのアーティストは、センターに到着して様々な施設を見てから、新たな可能性を思い付くこともしばしばある。センターはできる限り臨機応変に彼らのニーズに応えるようにしている。

アーティスト・コロニーは、提携機関(行政か財団)を通した紹介が必要で、個別には参加申請できない。使用料は1日60カナダドル以上(食事は別途料金)となっている。現在、このプログラムではメキシコ、コロンビア、スコットランド、アイスランド、オランダの政府の行政機関と提携しており、例えばメキシコとは、メキシコ政府の費用負担により年間19人のアーティストが6-9週間使える提携となっている。その他にも、各国の民間財団や教育機関(例えば英国・ロンドンのギルトホール音楽演劇学校)との提携がある。

カナダの小説家で、2012年のアカデミー賞監督賞を受賞した映画『ライフ・オブ・パイ / トラと漂流した227日』の原作者のヤン・マーテルは、映画の原作『パイの物語』(原題“Life of Pi”)を、このセンターのコロニーで執筆した。

② テマティック・レジデンス(Thematic Residencies)

美術部門のプログラムの一つで、アーティストやキュレーター、その他の専門家がお互いに持ち寄った特定の研究テーマに基づいて構築されて提供するプログラム。

テーマティック・レジデンスの参加者の選考は、基本的に参加者から送られてきたアプリケーションと希望する制作内容などを考慮しながら、各レジデンスプログラムの招待講師と、彫刻(木金工)、写真現像、プリント、陶芸、ビデオ映像室、編集室、紙漉／紙作り、版画など、各スタジオの常勤スタッフ、経理・教務課のディレクターの3者が相談しながら、公募審査形式で選考する。現在は美術部門のディレクターが不在だが、もちろんディレクターもこの選考過程に加わる。

審査にあたっては、工房スタッフ(アーティストでもある)は参加希望のアーティストからの提案プロジェクトの実現性や技術的な考察をもとに、工房の使用が一つのジャンルに偏らないよう工房使用のスケジュール調整をする。また、経理・教務課のディレクターは、奨学金の配分などを受け持つ。テーマ内容、講師の人気などで応募数はまちまちだが、おおよそ一つのレジデンスに対して60-70人の応募がある。定員は、冬の時期が10人、夏は30人。

例えば、米国のアーティストが講師を務めたテーマティック・レジデンスの際には、「コメディ」というテーマに非常に幅広い応募が集まった。「ただ自分のメールアドレスだけ送ってきたものや、封筒を開けたら、”Take me, take me, take me...”(採用して、採用して、採用して)とだけ延々と8ページに渡って書いたものを送ってきたアーティストもいたよ」とウォーター・フィリップス・ギャラリー(Water Phillips Gallery, 以下「WPG」)のキュレーターを務めるジェシー・マッキー(Jesse MCKEE)は言う。

最近で最も人気のあったレジデンスは、2012年の夏にドイツのカッセルで開催された現代美術の国際展「ドクメンタ(13)」と提携したプログラムで、30人の定員に対して300人以上の応募があった。

(2) アーティストの募集・選考、応募アーティストの条件

センターでは、すでにプロとしてキャリアを築き始め



キーンセンター・フォー・クリエイティビティ棟の外観(左)と、国際会議が開催されることもあるカンファレンスルーム(右)。背後の窓からはロッキー山脈の雄大な景色が望める。

ているアーティストが最適な参加対象者となるように、プログラムを提供している。年間を通して季節によってプログラムが変化し、夏は講師が来てセミナーやワークショップ式の研修プログラムを多く行っているが、秋と冬は、プロジェクトベースでアーティストがそれぞれのプロジェクトを実現するタイプのレジデンスが組まれている。

各プログラムの公募はウェブサイトを中心に告知している。例えば前述した美術部門のテーマティック・レジデンスでは、それぞれのプログラムの講師が、カリキュラムとプログラムのテーマについてテキストを書き、応募者はテーマに応じた参加希望の内容や、作品制作の希望などを自由な形式で送ってくる。計画書というよりも、テーマに対してのコンセプチュアルな考え方のレスポンスとしてテキストが送られる。

(3) プログラムの実績・過去の滞在者

センターの参加者は国際的で、カナダ全土から、また、世界各国からアーティストが参加している。参加者の30%がアルバータ州出身、30%がカナダ出身、残りの約40%は海外からの参加者となっている。基本使用言語は英語で、フランス語のプログラムもあるが、交流言語は英語が主流となっている。

メキシコ、アイルランド、オーストリア、アルゼンチン、アイスランド、オランダ、スコットランド、ブラジル、コロンビア、英国、アイルランドとはレジデンス参加の提携関係を結んでいる。さらに、多くのカナダの先住民系のアーティストも参加しており、他国の先住民系(モンゴル、ニュージーランド、マオリ族など)のアーティストも積極的に招へいし、国際交流を促している。

海外からのアーティストはカナダの文化に大きく貢献してくれるため、国際交流の観点からも、海外のアーティストは重要な存在となっている。ほとんどのアーティストは大学教育を終えて、プロとして活動している。

日本人では、作曲家の故・武満徹が1985年に「現代音楽の日々」と題したプログラムのテーマ作曲家として招へいされた(当時の武満氏は55歳)。2006年以来、日本からは22名のアーティストがセンターのプログラムに参加した。日本人の参加したプログラムの内訳は、

以下のとおり。

- バンフ・ニューメディア研究所 …………… 7名
- ビジュアルアート(視覚芸術) …………… 2名
- デジタルフィルム&メディア …………… 2名
- 劇場芸術 …………… 3名
- 音楽・音響 …………… 7名
- 文芸 …………… 1名

調査訪問の際に、インターンとして参加していた東京藝術大学音楽学部学生と面会することができた。1年間休学し、半年間の研修中とのことで、CDの録音プロジェクトに参加している。彼以外にも3名がCD録音、2名がラジオ放送のインターンとして参加し、共同で作業している。

(4) その他のプログラム

センターのプログラムは、各業界の現在のニーズに対応して企画している。通常のアートスクールでは技術を学ぶことはできるが、バンフはさらにその先の「どのようにして担い手(performer)となるか」を教えることが目的である。また、アーティストに対象を限定しているものだけではなく、例えば、以下のようなプログラムも提供している。

- リーダーシップ・プログラム: 企業の上層幹部スタッフが参加する新しいスタイルの企業研修をバンフのアートのプログラムを通して提供している。例えば、ビジネスマンに対する陶芸のワークショップや、即興演奏や即興演劇など、彼らの属している世界と全く違った芸術的な環境の中で、慣れない新しい作業を他人との共同作業を通して学ぶことで、起業家としての既成概念に捕らわれない新しい発想を培う機会を提供している。カナダ全土から企業や地域社会の指導者がバンフのプログラム研修に参加し学んだ教訓を生かし、彼らの生活や職場環境を変革し、カナダの知識経済への貢献している。
- キュラトリアル・ワーク・スタディ(Curatorial Work Study): 美術分野では、大学を卒業したばかりの若いキュレーターが現場でアシスタントとして働きながら展覧会の企画、実施・運営を学べるプログラム、キュラトリアル・ワーク・スタディを継続的に実施している。現在は休止しているが、以前はアート・アドミ

ロルストン リサイタルホール(右)は、クラシック音楽の演奏会や録音に使用される。ベントレー 室内楽スタジオ(左)では、訪問当日はリサイタルホールで行われるコンサートのプレ・トークの会場として使用されていた。



ニストレーターのプログラムがあり、再開の予定が検討されている。例えば、国内外からキュレーターを招いた国際会議や、レジデンスプログラムと提携した大学生グループのキュatorialなプロジェクトを共同で開催するといった可能性が検討されている。そうしたプログラムによってセンターはシンクタンクのような役割にもなり得る。

- カナダ・アートサミット(Canadian Arts Summit): センターとビジネス・フォー・アーツ(Business for the Arts)の共同開催でカナダ・アートサミットと銘打ったアートリーダーたちを集めた会議を開催することもある。そこでは、各芸術分野の業界が今必要としているアーティスト像や、トレーニング、マネジメントについて議論の場で、それをもとにセンターもプログラムを組み直していく。今年の11月に開催するサミットは、

「異分野間の交流(interdisciplinary)」がテーマで、例えばシルク・ド・ソレイユがダンス、音楽、アクロバット、演劇などを統合した新しい分野を開拓し、これまで存在しなかった「サーカスアート」と呼ばれる分野を確立したが、そのような動向について考える予定となっている。様々な分野のアートリーダーを集め、現在における異分野交流の国際的なアートの実践例やニーズなどについて話し合う。

- その他: 他にも、フランス語圏との地域交流をテーマにしたプログラムもある。カナダではケベック州がフランス語を唯一の公用語としているが、他の都市にもフランス語で活動するアーティストがいる。そのような地域間の交流が業界として必要というニーズに応じてプログラムを組んだりしている。

3. 施設の構成と内容

センターは約176,000㎡(東京ドームの約3.7個分)の敷地面積を有し、多種多様なスタジオ設備、飲食施設、会議施設、宿泊施設など特徴的な施設は、全てユネスコの世界遺産に登録されている国立公園の中に整備されている。

以下に、アート・プログラムに関連する施設の概要を一覧に整理した。

スタジオ設備 STUDIO RESOURCES	
アーティスト・コロニー Leighton Artists' Colony	
8戸のアーティスト・コロニーは、創作に打ち込むために8名のカナダ人建築家によってデザインされた。各スタジオは、窓からのプライベートな眺め、キッチン、洗面所、居心地の良い家具、電話、CD・カセットプレーヤーを備えた明るい部屋となっている。3つのスタジオにはピアノ、2つは美術家のための設計、3つのスタジオは小規模な団体の共同作業にも十分な広さとなっている。すべてのスタジオにMacintosh G4と印刷出力が可能な設備が備えられている。	
音楽・音響棟 Music & Sound Building	
ロルストン リサイタルホール Rolston Recital Hall	音楽・音響棟に設けられた200席の美しいリサイタルホールでは、まるで絵のようなランドル(Rundle)山の景色を眺めることができる。舞台は多様なサイズのアンサンブル(ソリストから小編成オーケストラまで)に応じて可変となっている。ホールの設営に応じて、平面の床上の客席を含んだ段床形式の客席形状が可能。
ベントレー 室内楽スタジオ Bentley Chamber Music Studio	音楽・音響棟に設けられた室内楽スタジオは、約75-100人の客席を持つ親密な空間となっている。最大間口の窓からは山並みを眺望でき、夏季には音楽・音響棟の中庭に開くこともできる。
スタジオ Studios	
音楽・音響棟に設けられた美しいスタジオの全てに、コンサートレベルのグランドピアノが備え付けられている。	
ピアノショップ Piano Shop	
熟達したピアノ調律士、最新のピアノの調整、修理、教育のための技術が配置されたピアノショップ。バス・ストリングマシンとグランドピアノの響板の製作設備を併せ持つ、カナダで数少ないピアノショップの一つ。ピアノの調律士はセンター敷地内の100台を上回るピアノのメンテナンス、修理、調整をする。	



敷地内の林の中に点在するミュージックハット。小屋には過去の偉大な作曲家の名前が付けられている。写真右は「メンデルスゾーン」。

ミュージックハット / Music Huts

音楽・音響棟の音楽スタジオに加えて、設備の整った28のハット(huts、「小屋」の意味)が棟の近くの林の中に設けられている。秋季から冬季にかけてのキャリア開発レジデンシーの参加者は、いつでも望む時間に使用できるスタジオ、もしくはハットが提供される。

メディア・美術 | Media & Visual Arts

陶芸スタジオ / Ceramics Studio

陶芸スタジオは、ビジュアルアーツ・クリエイティブ・レジデンシープログラムに参加するアーティストを支援する。クリエイティブ・レジデンシーに申請のあったアーティストの陶芸を基本としたプロジェクトの提案を受け入れている。

彫刻スタジオ / Sculpture Studio

彫刻スタジオは立体物の作品製作の開発のために開かれているスタジオで、木、鉄、石、モールド(鋳型)成型技術を簡易に使用できるスペースをアーティストに提供している。この環境で、高度に試験的・実験的なプロジェクト、あるいは洗練された製品ベースのプロジェクトをサポートする。美術部門の講師やスタッフは、想像力に富んだ志の高いアーティストが創造性と専門性を満たすために全面的に関わり、開発をアシストする。

ヴェルヴェット・アントレー印刷スタジオ / The Velvet Antler Print Studio

クリエイティブ・レジデンシー参加者は申し込みをすれば印刷物製作のプロジェクトの提案が受け入れられる。こうした提案を受理されたアーティストは、印刷スタジオの24時間使用が可能で、少なくとも製作する作品プランに必要な分野の入門レベルの経験が要求される。印刷・用紙関連のファシリテーターは、有害物質情報システムの作業場(WHMIS, Workplace Hazardous Materials Information System)に関するオリエンテーションとスタジオ設備の研修を指導する。

紙漉 / 紙作りスタジオ / Paper Making Studio

クリエイティブ・レジデンシー参加者は申し込みをすれば紙すきもしくは繊維からの紙作りのプロジェクトの提案が受け入れられる。こうした提案を受理されたアーティストは、印刷スタジオの24時間使用が可能で、少なくとも製作する作品プランに必要な分野の入門レベルの経験が要求される。印刷・用紙関連のファシリテーターは、有害物質情報システムの作業場(WHMIS, Workplace Hazardous Materials Information System)に関するオリエンテーションとスタジオ設備の研修を指導する。

写真スタジオ / Photography Studio

センターの写真スタジオは、9つの暗室、印刷室、撮影スタジオから構成される。個人利用や能率的なプロダクションのために設計された設備によって多様な写真プロジェクトをサポートし、アーティストは24時間使用可能となっている。写真芸術への関心を促し、学習を発展させることが、写真スタジオの目標である。

コンピューター室 / Computer Resources

SGI02、Intel、Macintoshといったワークステーションを活用し、UNIX、Linux、Windows、MacOSによるOS下での専門的なプログラミングのチームによってインタラクティブ・メディア環境が設置されている。特殊なコンピューター設備の使用については、使用頻度の高い設備との事前のスケジュール調整が必要。

テレビ・ビデオプロダクション / Television and Video Production

合成撮影用の背景幕とコンピューター制御による照明操作卓が備わった最大232.3㎡のスタジオ。

オーディオ・ビジュアル / Audio / Visual

標準的なオーディオ・ビジュアル設備はセンターの技術サービス部門からレンタルすることができる。ただしレジデンス参加者には、自身のコンピューター、付属品、特殊デバイスを持参するように助言している。

スタジオ / Studios

約40の美術のスタジオを備える。全てのスタジオで自然採光が可能となっている。必要に応じて、より大きなプロダクションベースのスタジオ(平均32.5㎡)、もしくは小規模なオフィスタイプのスペース(15.0㎡)一両者ともに基本的なスタジオ設備が備わっている一を選択できる。

959席を擁するエリック・ハービー劇場の内観(左)とキャバレースタイルのクラブ(右)。クラブでは、ライブが行われるだけでなく、撮影が行われることもある。



劇場芸術 Theatre Arts	
リハーサルスタジオ / Rehearsal Studios	弾力あるダンス用の床を備えた2つの大きなスペースと、8つの中規模スペースのあるバラエティに富んだリハーサル室。あらゆる劇場芸術のトレーニングと公演に向けたプロフェッショナルな演出に最適なスタジオとなっている。
エリック・ハービー劇場 / Eric Harvie Theatre	959席のエリック・ハービー劇場は、劇場複合施設のメイン会場である。オペラ、ダンス、幅広い分野の音楽、映画、演劇、会議などに適した舞台上部空間を有するプロセニウム劇場となっている。
マーガレット・グリーンハム劇場 / Margaret Greenham Theatre	246席のマーガレット・グリーンハム劇場は、複合施設の中で2番目の劇場空間で、傾斜のある客席、黒い壁、固定グリッド天井のスタジオ空間である。ダンス、演劇、親密な音楽イベントミーティングなど広範囲に利用できる。
クラブ / The Club	180人収容(客席設営時は最大120席)のクラブは、低い舞台、自由な客席、バックステージを備えたキャバレースタイルの空間で、温もりのある親密な雰囲気となっている。
飲食施設 DINING FACILITIES	
ヴィスタ・ダイニングルーム / Vistas Dining Room	センターでは、年中無休で多種多様なクライアントにケータリングを行っている。サリー・ボーデン棟の最上階にあるヴィスタ・ダイニングルームは、センターのすべてのコミュニティに開かれている。各自お好みで楽しめるメニューを用意したマーケットスタイルのユニークなダイニングで、「待っている間に」お好みのメニューをカスタマイズ。ロッキー山脈の頂上に囲まれながら、感動的な背景をともにした食事を体験できる。
スリー・レイブン・レストラン&ワインバー / Three Ravens Restaurant & Wine Bar	サリー・ボーデン棟の最上階のスリー・レイブン・レストラン&ワインバーは、センターに新次元を提供している。アラカルト・レストランの料理は、創造的で、ローカルで、新鮮で、季節の彩りに満ちている。第一級の貯蔵庫から選ばれたワインの風味とワインバーのメニューをお楽しみに。
マックラボ・ビストロ / MacLab Bistro	キーンセンター・フォー・クリエイティビティ棟にあるマックラボ・ビストロは、居心地のいい客席と美しい山並みを見渡せる明るい窓に恵まれたカフェバー。手軽な軽食、カジュアルな夕食、リラックスしてお酒を楽しむことができ、大好きなコーヒーを楽しめる場所でもある。屋内でも、中庭でも飲食でき、テイクアウトも可能。
カフェ / Le Café	オーダーされてから作られるサンドイッチ、絞りたての新鮮なジュース、スペシャルなコーヒー、他にも様々なメニューをお楽しみに。サリー・ボーデン棟のメインフロアにて、様々なメニューを扱っている。
資源・設備 RESOURCES AND FACILITIES	
ポール・D・フレック 図書館・アーカイブ / Paul D. Fleck Library & Archives	センターの芸術プログラム、山岳文化プログラム、リーダーシップ・プログラムに必要な専門的な研究・開発のための図書館、アーカイブ。
サリー・ボーデン フィットネス・レクリエーション / Sally Borden Fitness and Recreation	センターが提供するものは、芸術性の涵養や知的なイノベーションに関する経験だけではない。創造性には健康的な体と精神が必要となる。フィットネス/レクリエーションでは、あらゆる能力や関心を持つ人々に娯楽や体力増進のための幅広い活動を提供している。

上記の施設概要に加えて、現地視察の際に見学したセンターならではの特徴的な施設や、レジデンスプログラムでの活用の具体例について、以下に記す。



グリッドホール棟の玄関(左)とウォーター・フィリップス・ギャラリー(右)。

(1) メディア・美術関連施設

① グリッドホール(Glyde Hall)棟

- ウォーター・フィリップス・ギャラリー(WPG): 美術分野の施設が集合したグリッドホール棟の1階には、ウォーター・フィリップス・ギャラリーが設けられている。国内外の優れた企画展の開催する現代美術ギャラリーとしても知られている。また、滞在中のアーティストが作品の発表をすることもあり、3-4週間のスパンで展示が入れ替わる。
- WPGのキュレーターを務めるジェシー・マッキーのレジデンスプログラムとの関わりは、センター内の現代美術ギャラリーのキュレーターとして、滞在するアーティスト全てのスタジオを訪問し、作品を見ながら評価やディスカッションをすることである。そのような出会いから展覧会に発展することもある。センターを訪れる年間約700万人のうち、WPGを訪れるのはおよそ6万人。レジデンスの滞在アーティストはギャラリーの主要な訪問客でもある。一度参加したアーティストはその後にも再訪することが多く、ギャラリーにとっては重要なネットワークになる。またレジデンスのテーマや講師、参加アーティストと提携した展覧会を企画することもある。
- 陶芸工房(Ceramics Studio): グリッドホール棟の陶芸工房には、陶芸アーティストでもあるスタッフ(アドミニストレーション兼任)1名が常駐し、それに加えて、ワーク・スタディ・プログラム(以下「研修プログラム」)に参加するアーティストのスタッフが常時つく。2種類の電気釜と新しいガス釜が屋内にある。また、屋外には日本式の階段式薪炊きの釜がある。

③ ジャン・アンド・ピーター・ラグヘッド(Jeanne & Peter Lougheed)棟

- テレビスタジオ、音響スタジオ、ダンススタジオ、映像編集室、調整室、楽屋などがある。機材はプロフェッショナルな撮影収録可能で非常に充実している。
- この施設群を最大限に活用したレジデンスプログラムとして、3週間で8名の女性の映画ドキュメンタリープロデューサーを招へいたWomen in the Director's Chairというプログラムがある。センターが

提供するスタジオ、機材、小道具、制作スタッフ全てを自由に使って、短期間でショートフィルムを作る。撮影、音響、メイクアップなど、あらゆる分野のスタッフ70名を提供している。参加者は、3週間という短期間に全てのプロセスを企画運営し、集中して映像制作をするという貴重な体験をすることができる。これは毎年恒例のプログラムで過去17年間に170名のディレクターをサポートしてきた。参加の中には、その後、カナダの有名なテレビシリーズに採用された人もいる。

- 例えば、サウンドスタジオには3名の常勤スタッフと5-6名の研修生が勤務している。音響効果の録音は施設内の4つの劇場、リサイタルホール、6つのポストプロダクションスタジオなどあらゆる施設を使って行われ、10-15名のスタッフが常時関わっている。年間を通して莫大な数の音響作品がここで制作される。それらを海外に紹介し、配給することも重要な活動である。それら全ての作品はオンライン番組「バンフセンター・ライブ」(THE BANFF CENTRE LIVE! <http://www.banffcentre.ca/live/>)で視聴できる。
- この施設では、ドラマ、オペラ、コンサートなどの運営に関するあらゆること(ステージマネージメント、オペレーション、編集など)が学べる。特撮、タイトル製作を含めたビデオ編集室、音響編集室、デジタル・アナログのフィルム現像室、プリント室などが整備されている。
- 多くのダンサーがセンターで映像作品を作りたいと希望し、そのニーズに対応できる全てのシステムが揃っている。ここはそういった意味で、アーティストにとって新しいことにリスクを持って挑み、開拓するのに最も適した場所とも言える。

(2) 劇場芸術関連施設

① ショウ屋外円形劇場(Shaw Amphitheatre)

- 2011年に完成したばかりの屋外の円形劇場。ベンチシート450席に加えてステージ前の芝生席には1,500人が座れるので、約2千人を収容できる。

② マーガレット・グリーンハム劇場(Margaret Greenham Theatre)

テレビスタジオ(左)では、美術セットの設営だけでなく、合成撮影用の背景幕も備わっている。衣裳工房(右)は、国内外のバレエ団との提携による舞台衣裳の制作も行われている。



- 衣裳工房 (Costume Shop) : ダンス、オペラ、演劇、バレエなど様々なニーズに応えられる衣裳工房。ここで衣裳製作の研修もする。また、センターでの演目だけでなく、ヴァンクーバーオペラと提携し、彼らのコスチュームがここで製作されている。他にもアルバータバレエ (Alberta Ballet)、ブリティッシュコロンビアバレエにも使われている。格安コストで、世界標準の質の高い衣裳を制作できる。今後、海外のカンパニーとの提携や共同制作を積極的に進める予定である。

③ エリック・ハービー劇場 (Eric Harvie Theatre)

- センターで最も大きなエリック・ハービー劇場は959席を有し、1965年に開館した。ここではダンス、演劇、オペラ、そして恒例のバンフ弦楽四重奏コンクールなど、様々な催しが開催される。5月には恒例のバンフ・チルドレンズ・フェスティバル (Banff Children's Festival) をここで開催している。自主企画の演目以外でも使用されており、例えば今年3月には、著名な映画監督のオリバー・ストーンを招き、新作映画の上映を行った。
- ロビーにはこれまでに行われた重要な講演の記録写真が展示されている。ジャズ・ピアニストのオスカー・ピーターソンが1972年にバンフセンターのジャズプログラムを創設したときの写真や、センターの創設期である1930年代の夏季ワークショップの写真もある。

(3) 宿泊施設

- プロフェッショナル・ディベロップメントセンター棟に170部屋のスーパーリアルーム、ロイドホールに177部屋のスタンダードルーム、センターの施設内の滞在施設としては計450部屋のゲストルームを備えている。すべての客室にテレビ、ヘアドライヤー、アイロン、アイロン台、コーヒーマーカーが常設され、プログラムや会議の参加者に提供されている。

(4) その他の施設

① コルベット・ホール (Corbett Hall)

- 数学者の研究ステーションであるコルベット・ホールは、バンフ数学イノベーション・発見国際研究ステ

ーション (Banff International Research Station for Mathematical Innovation and Discovery, BIRS) の拠点になっている。世界中の数学科学に関する最先端の分野の専門家がともに研究をする施設で、日本からも多くの数学者が参加している。

- 毎週、約40人の数学者、科学者が世界中から集まり、6日間共同研究をする。例えば、最先端のDNAに関する共同研究など、科学分野における大きな問題を、様々な大学や科学機関などと共同して考えるためのハブになっている。北米では唯一のユニークな施設。この施設は映像シアターなどを含む様々な施設があり、700人を収容できるので、大型の国際会議なども開催可能。
- 少しずつだが、アート・プログラムとの連携も始まっている。最近では、科学者や数学者が文学者と一緒に詩作をするという文学のレジデンスとの提携プログラムを実験的に行い、パブリックに発表する場を持った。そうした異分野を横断する活動をこれからも提供する。

4. 運営体制と事業収支

(1) 運営組織

センターは非営利の高等教育機関 (not-for-profit post-secondary institution) である。約490名の正規職員と、芸術とリーダーシップ・プログラムの客員講師を雇用している。プログラムは各分野のディレクターが企画している。例えばジャズのプログラムでは、年間60人のジャズミュージシャンが3週間のレジデンスにくる。ジャズ部門のディレクター (彼自身もジャズミュージシャン) は年間常勤している訳ではないが、この3週間の間にどのような活動をするか、ディレクターが企画する。プログラム・ディレクターが代わることで、レジデンスの内容も一新する。前任のジャズ部門のディレクターは10年間勤務した。プログラムにもよるが、おおよそ5年程度の周期でディレクターが入れ替わる。

プログラム運営ディレクター (Director, Programming Operation) のタマル・ロス (Tamara ROSS) は、センターでの勤務歴5年だが、実は父親も25年間センターに勤務し、バンフのキャンパス内にある家で育った。「私にと



ロッキー山脈と針葉樹に囲まれたバンフセンターの建物。

ってバンフは特別な場所です。また、私は以前ダンサーで、ブリティッシュコロンビアバレエやロイヤルウィニペグバレエで活動していました。なので、センターを通じて成長してきたダンサーたちを近くでずっと見てきたんです」と言う。

タマル氏は例外的ではあるが、実際にセンターに勤務する人々は、ほとんど過去にバンフのプログラムに参加し、それに感銘し就職を決める人が多い。そのため、例えばマーケティングのスタッフも、仕事の枠を越えて自分自身の体験をもとに、愛情を持ってセンターを語ることができる。そのような意味で、センターは大きな家族のような組織でもある。

(2) パートナiership

センターでは、国内外の芸術団体と多くの提携を行っており、多くの国々や芸術団体とアーティストを招へいする提携契約を交わしているが、運営は全てセンター内で行っている。

運営においては民間企業とのパートナーシップが非常に大きな役割を果たしている。企業との連携は、センターの経営企画部が直接担当している。新しいスタイルの企業研修プログラムであるリーダーシップ・プログラムでは、民間企業の上層部を対象として行うことが多いことから、センターの多くの寄付者は、リーダーシップ・プログラムを通じて開拓してきた。また、企業のニーズに応じてカスタマイズしたプログラムも企画することがある。企業が満足すれば、寄付の可能性も広がる。

また、センターはThe European League of Institutes of the Arts（以下、「ELIA」）に加盟している。ELIAは、45ヶ国における約350団体の高等芸術教育機関の加盟組織で1990年に創設された。欧州や、より幅広い地域において、高等芸術教育に関する普及啓発、及び対話と交流を促す機関である。センターにとっても、ELIAは欧州在住のアーティストへのプログラムの広報活動に大いに貢献している。また各国の行政機関との国際協定も、それぞれの国のアーティストに向けた広報活動に大変役立っている。

(3) 事業収支

センターの年間予算は1,900万カナダドル（約19億

円）。そのうちカナダ連邦政府機関のトレーニングプログラムから200万カナダドル（2億円）、カナダ・アーツカウンシルから3万カナダドル（300万円）、アルバータ州文化省から2.5万カナダドル（250万円）の補助金が出ている。カナダ・アーツカウンシルの助成は、バンフセンターを通さず直接アーティストに支払われることもある。残りの財源は、バンフセンターで年間を通して開催される民間企業の会議利用、リーダーシップ・プログラムなどの収入から賄っている。

このように資金源は多岐に渡り、行政の助成金は割合としては決して高くない。全体の割合としては30%が行政機関から、70%がバンフセンターの寄付、基金、企業提携プログラムからの収入などの自己収入が財源となっている。

これまで、経済が低迷した時期は、まず行政の助成金が削減され、民間企業からの寄付なども縮減されたが、管理部門の経費を削減することで、センターはアート・プログラムの予算をほとんど変えずに乗り切った。また、人員の解雇もしなかった。持続的、包括的にアートをサポートすることが最重要事項だと考えられている。

5. 事業評価の実施状況

センターでは全ての参加者に、プログラム滞在後に滞在体験のフィードバックを促すために、規定の記入フォームを用意している。参加者が参加したプログラムの内容、講師、スタッフについて、また施設、サービス、食事などへの評価をオンラインで送信するシステムになっている。レジデンス中に問題が生じていても即座に対応、解決できるように、コミュニティ・サポート・サービスのスタッフが日々迅速に対応する。レジデンスの終了後には悪い評価、苦情やクレームはほとんどない。例えば、様々な人種や宗教的背景の参加者がいるため、食材への配慮やベジタリアンメニューの充実など食事の対応は特に気を使っている。

また、マーケティング・チームは、主要な過去の参加者のその後の活動やキャリア展開の経過を追跡記録している。多くの過去の参加者は、新しい作品制作のために再来し、またその中には講師になる人もいる。カナ



キーンセンター・フォー・クリエイティビティ棟には、この棟の建設費に対する高額寄付者の銘板が埋め込まれている。

ディアン・アーツ研修基金からは、参加者のその後のキャリア展開と業績を追跡することが義務付けられている。

センターの過去の参加者と講師陣の多くは、様々な賞を受賞してきた。このことは、センターの参加者のクオリティを証明していると同時に、プログラムにも多大な変革をもたらし、世界最大のアート・インキュベーターに発展させた原動力にもなっている。

6. 現在の課題と今後の方向性

プログラム運営ディレクターのロス氏は、レジデンスでの体験を、メディアやウェブサイトを通じて広報していくことの重要性を指摘する。国際的なパートナーシップで参加したアーティストの全てには、滞在後、自国に戻ってから、センターでの体験や成果の報告、広報に協力することが義務づけられている。参加したアーティストの体験談が、それぞれのコミュニティに広がることによって、各国でセンターの評価が高まり、広がることが大きい。またセンターで制作された作品は、その後発

表される際にはセンターの名義がクレジットされる。それを通じて世界的に広報されている。プログラムを知らない人に広報するのは難しいことだが、「アーティストの生の体験談が最も説得力があり、また広報効果があります。そのためにtwitterやブログといったソーシャルメディアは重要なメディアです」とロス氏は言う。

センターでは、オンラインのラジオ放送も始め、ウェブサイト「バンフセンター・ライブ」でもパフォーマンスが閲覧できる。さらに、開催したアーティストの公演や講義はiTunes U(アップル社が提供するオンラインサービスの一つで、世界の有名大学の講義や紹介などを視聴できる)にアップロードされており、他の大学がこれらを活用している。またこれは広報活動という意味だけでなく、ここで構想、企画、制作をされた数々の作品を世界に普及し、流通させるために大きな役割を果たしている。現在センターは、3-5年後の完成を目標に新しい施設を計画しているが、こうした広報メディアは、現在計画中の施設の建設プロモーションにも重要な役割を持っている。

今後、日本におけるアーティスト・イン・レジデンスを



数多くの美術のスタジオが並ぶグリッドホール棟の3階のフロア案内図(左)と、標準的なスタジオ室内の様子(右)。

発展させるためのアイデアとして、ロス氏からは国際的なコンペティションの提案があった。例えばセンターでは、音楽のプログラムで弦楽四重奏のコンクールを開催しているが、これは国際的に開かれており、受賞者にはレジデンスプログラムに参加する機会を与えている。同じように、各国の政府行政機関と連携しているレジデンスプログラムも、それぞれの国がコンペティションで参加アーティストを選抜するシステムになっている。「このようなコンペティションのシステムは、応募する全てのアーティストにプログラムが広報されるので、宣伝効果が高いのです」とロス氏は説明する。

行政担当ディレクター (Director, Government Relation) のローラ・リン (Laura S. LYNES) からは、「日本でのアーティスト・イン・レジデンスでは、アーティストの海外からの受け入れと併せて、日本から海外に送り出すことにも興味をお持ちだと思います。そのために、今後、日本の行政がセンターとの提携に興味があれば、ぜひ可能性を広げたいと思います」との進言があった。バンフのようなユニークなプログラムにより、アーティストに最高の機会を提供することに関心を持つ日本の慈善家からの資金調達の可能性に触れて、政府と民間団体の支援の組合せによりコミュニティと経済を豊かにし、より幅広い国家投資になるものではないかと提案する。

バンフセンターは現在、オーストラリア、ブラジル、コロンビア、オランダ、メキシコ、フランス、英国、スコットランドとの正式な提携関係を持っており、新たなパートナーシップをオーストラリア政府とも提携を交わした。日本との提携の可能性に対して大変興味を持っており、アーティスト、芸術団体、及び指導者との国際的なコラボレーションを推進する機会を歓迎している。

滞在アーティストへのインタビュー

面会者：アビー・シャイン・ダービン (Abbey Shaine DUBIN、以下「AD」)、デュアン・リンクレイター (Duane LINKLATER、以下「DL」)

1. 略歴、活動実績

AD: 2006年から米国アラバマ州を拠点にOur Literal Speed (略称: OLS) というアーティスト・コレクティブとして活動している。欧米のアートと美術史をテーマに、他者との共同作業を通して「美術界における公的な生活」やアートのムーブメントを、それが置かれる制度やテクノロジーを通して内証的に検証する活動を行っている。

この数年間、OLSは展覧会、カンファレンス、評論・エッセイ、台本、作品やインスタレーション、パフォーマンスなどのプロジェクトを企画してきた。「現代文化にとって何がアートなのか？」をテーマに、アートとアカデミックの相関関係について研究活動している。去年の3月、ハーバード大学で主催したのを皮切りに、これまでいくつか主要な教育機関でコンファランスを企画主催してきた。

調査訪問時にテーマティック・レジデンシーの招へい講師として企画を実施中であつた。期間は7週間で参加者は10人。アーティストや学者などのゲストを招待している。レジデンスでは、読書会、レクチャー、セミナーと並行してDJパーティーをやったりしながら、例えば、アートフェア、オープニングパーティー、カンファレンスなどアート作品を取り巻く周辺の出来事との相関関係で、何がアート作品を成り立たせているのか、考え、話し合うことをテーマにしている。

DL: カナダの先住民族であるオマスケコ・クリー部族 (Omaskêko Cree) の出身で、ノースベイ (オンタリオ州) に在住している。アルバータ大学で先住民学の学士号と美術学士号を取得後、ニューヨークのミルトン・エイブリー大学院において映画、ビデオで美術修士号 (MFA) を修了。アルバータ美術館 (エドモントン)、ギャラリー101 (オタワ)、Utopics - 第11回スイス彫刻展 (ビール)、アンソロジー・フ

インタビューに協力していただいたアビー・シャイン・ダービン(左)とデュアン・リンクレイター(右)。



イルム・アーカイブス(ニューヨーク)、OKビデオフェスティバル(ジャカルタ)など国内外の展覧会やフィルムフェスティバルにおいて、国際的に作品を上映、発表している。

作品のスタイルは、身の回りに起きた出来事やパフォーマンスなどをドキュメンタリー形式のフィルムやビデオで撮影し、その期間に交わしたEメールの通信記録や、旅券、レシートなどの一時的な書類と併せたインスタレーション作品となっている。観客は、そうした書類を映像と併せて見ることで、作者の行動や思考を追跡できるように作っている。2012年のドクメンタにヴァンクーバー在住のブライアン・ヤング(Brian JUNGEN)と共同で、ムース狩猟に行くドキュメンタリー(15分)を16mmのフィルムで撮影した映像作品で参加。その作品はセンターで構想、制作し、発表した。

調査訪問時には先住民系アーティストのテーマティック・レジデンシーの講師として参加していた。これは前任ディレクターのキティー・スコット(Kitty SCOTT)に誘われて企画提案したプログラムである。7週間の先住民系アーティストたちとのレジデンスプログラムで、美術、音楽、詩、ビデオ、ダンス、フィルムなど多岐にわたるジャンルのアーティストが11人参加している。カナダ全域から世代やジャンル、キャリアも幅広く招いた。

毎週火曜日にセミナーとディスカッション、金曜日の夜はパフォーマンスナイト、フリースタイルで作品発表、日曜日の夜は映画上映と講座と、週に3回集まって、話し合い、作品を見せ合い、意見交換の場を設けている。既に国際的に活躍するアーティストから、美術学校を卒業したばかりの若いアーティストまでが滞在していて、世代やジャンルを超えて刺激しあえて、とてもいい感じで交流が進んでいる。

2. アーティスト・イン・レジデンスに参加した動機

AD: 美術大学時代の先生がバンフセンターに参加し、彼の紹介でバンフを知った。充実したプログラムや講師陣にひかれ、2010年のヴァンクーバー在住のジェフリー・ファーマー(Jeffrey FARMER)が企

画したテーマティック・レジデンシーに参加したのが最初。この時は新しい特殊な環境に圧倒されてしまい、ほとんどグループ活動に参加せず、一人でハイキング、水泳、フリーヨガ、セラピーなど、アート以外の活動ばかりやっていた。レジデンスプログラムの内容も参加メンバーもよかったが、とにかくこの環境の中での活動が濃密で圧倒されていたと思う。

センターは、壮大な自然環境のなかで、初めて出会う参加者とアートだけに集中する7週間というかなり特殊な環境におかれるので、ある意味では非日常的で「演劇的」といえる。

DL: 学生時代からバンフセンターの評判は知っており、興味を持っていた。カナダの美術学校ではすでに有名な存在となっている。同じような興味を持っているアーティストと時間を過ごしたり、自分の芸術表現についてじっくりと考えたりする時間が欲しかったので参加した。

最初は2009年にカナダ人アーティストのケン・ラム(Ken LUM)が講師を勤めるレジデンスプログラムに参加。その際にブライアン・ヤングと初めて出会い、共に同じような遠隔の先住民集落で育ったことなどで意気投合した(それがきっかけで2012年の共同制作に至る)。2010年も参加し、その後何度かヤングとの作品制作、編集などのためセンターを訪れた。

前任ディレクターのスコット氏は多くの国際的なアーティストやキュレーターを招いていたので、国際的なネットワークを築くこともできた。センターは映像、音響、版画、写真、セラミックなど多岐の分野の制作施設大変充実しているので、滞在期間中いろいろな作品制作を試みることができるのも、もちろん魅力だった。

3. 創作活動の支援

AD: レジデンスプログラムで一番重要なのは活動するための設備やプログラム、サポートシステムが整っていること。企画講師がきちんとプログラムを運営し、宿泊や食事を提供するシステムがあり、そしてアーティストが滞在中、柔軟に活動できること。ア



雪に覆われている半円形の階段は、ショウ屋外形劇場。ベンチシートとステージ前の芝生席を合わせて約2千人を収容できる。

アーティストによって参加目的は様々なので、ここのアーティストが自分にあった参加の仕方ができることが重要。

これまで他のレジデンスプログラムにもいくつか参加した。欧州でかなりの数のレジデンスを体験したが、ただスタジオだけを提供してくれるような所が多かった。ほとんど地元の人との交流もなく、その地域の文脈がよくわからないため、まるでお金がないのに観光旅行にきた旅行者みたいな気分になった。

レジデンスプログラムの期間としては、7週間は短い。10週間が理想。経験上、最初の1週目と最後の1-2週間は実質的な活動にはならない。環境やメンバーに慣れるのに1週間かかり、レジデンスの最後は自分の作業を終わらせるのに焦っていてプログラムを組むのが難しい。個々の制作もおよそ2-3週間を要するので、10週間あるのが理想だ。

バンフセンターは、唯一アーティストに対して最大の敬意と、サポートをしてくれる場所だと思う。宿

泊、食事サービス施設や設備も大変充実している。アーティストとして、自分の存在や活動を重要視してもらえる場所はない。

レジデンスの参加には総費用で5,000カナダドル(50万円)以上かかる。そのうち約半額はセンターが負担してくれる。最初に参加したときは、かなり奨学金を出してくれたので、自己負担は数百カナダドルですんだ。その後、前任ディレクターのスコット氏に、お金も家もないが、ぜひ実現したいプロジェクトを提案したところ、3ヶ月間全てセンターが資金負担して招へいしてくれた。それは全て彼女の決定と手腕によるもの。ただし、ディレクターが代われば、プログラム内容も変わるだろう。

DL: 創作活動の支援に望むことは、多くのアーティストやアート関係者(ライターやクリティック、キュレーターなど)と出会うこと。そして、自分のプロジェクトに集中する時間が持てることを望む。

センターで一番学んだのは、他の人たちとのコラボレーションが自分の作品制作に重要になったこと。多くの出会いが共同制作につながったり、ネッ

バンフセンターから徒歩15分ほどの距離にあるバンフのダウンタウン(左)と、劇場ロビーに展示されていた1930年代の夏季合宿形式による「バンフ芸術学校」の様子の写真(右)。



トワークが広がったり、素晴らしい体験がたくさんあった。前述のブライアンとのコラボレーションでは、センターがレジデンスの期間後も制作補助、施設提供や発表のネットワークなど全面的に多くの支援をしてくれた。

レジデンスの期間として、7週間は、あっという間に過ぎてしまうものの、ちょうどいいと思う。その間、人里離れた小さなコミュニティに籠って、ものすごく集中した時間を過ごすのは、良い意味でも悪い意味でもかなり特殊な体験だと思う。期間中に時々、カルガリーやシカゴなどの大都市に息抜きに出かけると大変を広い視点で捉え直せる。

スタッフ、施設、アドミニストレーションなど、バンフにおいては全てが大変充実しており、文句のつけどころが何もない。こんなに作品制作に集中できる恵まれた環境は他にはないだろうと思う。

12歳、8歳、5歳の3人の子どもがいるが、前回滞在したときは、妻を含めて家族全員で滞在した。センターには家族で滞在できるサイズの施設があり、スポーツ・レジャー施設が充実していて、子どもたちも大喜びで、家族連れのアーティストにとっても大変優れた施設だと感じた。

他のレジデンスにはまだ参加したことがない。今年の秋、トロントアイランドのレジデンスにリード・アーティストとして招へいされたので参加する予定。

4. 日本のアーティスト・イン・レジデンスについて

AD: 日本のレジデンスに参加したことはまだないが、興味は大変ある。

DL: 参加したこともないし、情報もないが、興味は大変ある。日本は全く知らない文化なので、おそらくその土地や文化に慣れるまで圧倒されるだろう。自分はそれぞれの土地や場所の歴史、文化の文脈を自分のものと比較してリサーチすることから作品を作り始める。数年前、ラム氏の影響で過去の日本映画を見始めた。今、勅使河原宏監督の「砂の女」に刺激されて、ダンサーの妻と共同で音とダンスの作品を制作している。日本映画における、重要な場所などについてリサーチするというような事に興味がある。('砂の女'の音楽を担当した故・

武満徹が1980年代にバンフに招待されワークショップをしたという話を受けて)それは知らなかった。嬉しい発見。早速ライブラリーでアーカイブを調べてみる。



H. 中国

1. レッドゲート・ギャラリー / レッドゲート・レジデンス | Red Gate Gallery / Red Gate Residency
2. 三影堂 撮影芸術中心 | Three Shadows Photography Art Centre
3. プラットフォーム・チャイナ/北京インターナショナル・アーティスト・プラットフォーム | Platform China / Beijing International Artist Platform
4. アローファクトリー 箭厂空间 | Arrow Factory
5. ビタミン・クリエイティブ・スペース / パビリオン | Vitamin Creative Space / The Pavilion

1. レッドゲート・ギャラリー / レッドゲート・レジデンスプログラム

Red Gate Gallery / Red Gate Residency

面会日: 2013年2月5日(火) 15:00-18:00

面会者: TANG Zehui (Residency Program Director)

URL: <http://www.redgategallery.com>

1. 運営機関の概要

運営母体であるレッドゲート・ギャラリーは、オーストラリア人ブライアン・ウォレス(Brian WALLACE)により、1991年に創設されたアートギャラリー。中国本土で初めて外国人によって設立されたコマーシャルギャラリーとして国際的に知られている。北京駅南に位置する歴史的建造物、旧城下樓門公園内に現存する望楼を拠点に中国現代美術に焦点を当てた活動を行い、今年で22周年を迎える。

ウォレス氏は、1986年より中国人民大学で中国語を学んだ後、中国中央美術学院(北京)にて美術史を専攻。その間、88年より、中国の若手アーティストの展覧会を企画運営し始めたことが、レッドゲート・ギャラリーの創設へとつながる。以来、年間を通じて、現代芸術の分野で活躍する中国人アーティストを紹介。国内外からのゲストキュレーターを招いた企画などにも取り組み、中国現代美術の多様な表現を広く世界に紹介。中国人アーティストの現在を通して、刻々と変わりゆく中国社会の現状を国際社会へと発信している。

(1) 設立趣旨・経緯

レジデンス事業は2002年からスタート。オーストラリアの文化交流機関であるアジアリンク(Asia Link)より、画家のRodney POPLERを北京に2ヶ月間派遣したいという相談を受けたが、当時、北京にはそのような受入機関やプログラムが存在していなかった。実際には、POPLER氏の派遣先である北京画院(Beijing Fine Art Academy)が所有するゲストハウスなどのスペースがあり、立地には恵まれていたのだが、滞在制作のインスピレーションを得るための地元アーティストとの交流がほとんど行われていなかった。美術大学内にあるため、ほとんど学生の往来しかなく、また、スタジオも狭く、非常に限定された環境であった。

そこで、ウォレス氏自らが滞在アーティストのためのスタジオと住居を探し出し、滞在制作のための環境を整えたことがレジデンス事業開始のきっかけとなった。毎年、世界各国から約70名のアーティストが滞在しており、現在、北京、あるいは中国本土内でおそらく最も規模の大きいプログラムのひとつといえる。

(2) ミッション

アーティストのほか、ライターや研究者など、海外からの多様な芸術活動に携わる人材の中国滞在を推進することで、国内のアートコミュニティとの交流を促し、将来にわたって国際的なフィールドで活躍する人材を中国で育成することを目的とする。北京のアートシーンは、今最も飛躍、発展を遂げつつある場であり、多くのアーティストが訪れ仕事をしてみたいと思う場である。しかし、現実的には言語の問題などもあり、実際の情報をあまり知る機会がない。

レッドゲート・レジデンスプログラムは、滞在アーティストに対し、美術館、ギャラリー、アーティストなどを紹介し、北京の文化、アートシーン、アートコミュニティの実態を伝える役割を担う。また、これまで中国のアートシーンにおける基盤として、レジデンスプログラムはこれまであまり知られることがなかったが、現在では中国人アーティストのキャリア形成にとって切り離すことができない存在となっている。北京のアートコミュニティにとって国際的なアートシーンに触れることは意義のあるものであり、美術館や教育機関と同様に重要な社会基盤であると考えている。

2. プログラムの内容と実績

(1) アーティスト・イン・レジデンス

レッドゲート・ギャラリーは、レジデンスプログラムを非営利の活動として位置づけている。アーティストに対する滞在条件を特に示すことはなく、固定した成果を求めることもない。作品制作は必須条件ではなく、リサーチのみの活動や、異なる文化に触れることでインスピレーションを受け、次のステージに向かうための転換期として視野をオープンにする時間を過ごすことも可能である。アーティストの制作状況によって、通訳、アシスタント、あるいは工場の紹介なども行い、また、オリエンテーションとして北京のアートシーン、アートコミュニティ、制作に必要な様々なリソースを紹介し、ウェルカムディナーなどの交流を行う。

絵画、彫刻、写真などの表現や、ライターやリサーチャーなど、個々の滞在者の需要によって、スタジオや



レッドゲート・ギャラリー内部。
歴史的建造物の内装をそのまま活かした
空間に、中国現代美術の作品を展示。

住居など、快適な環境をアレンジするよう努めている。

(2) アーティストの募集・選考方法、応募アーティストの条件

主催者であるレッドゲート・ギャラリーはプログラムの運営及び施設管理を行うが、アーティストへの助成はしていない。スタジオ及び住居賃借費、生活費、制作費、渡航費は海外からの滞在アーティスト自身が費用を捻出、あるいは自国の芸術支援組織等からの支援を得る必要がある。ただし、自国にそのような制度がない、あるいは自身で見つけることが困難な場合は、レッドゲートとの協力体制にあるいくつかの支援組織に対して、助成支援の依頼をサポートすることも可能。

美術のほか、音楽家、劇作家、文筆家、キュレーターなどのアカデミックな分野の研究者も滞在することができる。

(3) プログラムの実績・過去の滞在者

2012年の実績では20ヶ国、75名のアーティストが滞在。これまでの滞在者では美術のアーティストが8割を占める。日本人のアーティストは過去に3名の滞在実績がある。

(4) その他のプログラム

公開のプログラムとして、滞在期間中のアーティストトーク、最終期間にはオープンスタジオや展覧会を行う場合もある。公開プログラムは、地域コミュニティに直接働きかけるものではなく、中国内のアーティスト及び美術館、ギャラリーのキュレーターのなど、アートシーンを構成するコミュニティを対象としている。アーティストの成果を直接マーケットにつなげることはなく、あくまでも緩やかな関係性を築く、非営利活動の範囲での交流を行う。

レッドゲート・レジデンスプログラムでは主に海外アーティストを対象としているが、2003、04年には北京以外に拠点を置く中国人アーティストを招へいた。しかし2005年以降は北京のアートシーンが変化し、中国人アーティストが北京へ移住し始めたので、レジデンスプログラムとしては対象外としている。

3. 施設の構成と内容

市内に3つの住居と、Chao Chang Di (草場地) Art Village の北側に位置する Beigao にロフト形式の6部屋のスタジオ兼住居を保有している。

4. 運営体制

(1) 運営組織

コマーシャルギャラリーを母体する組織だが、レジデンスプログラムは非営利の活動。スタッフは3名でレジデンスの専任ではなく、ギャラリーの仕事を含み、会計、事務、コーディネートをそれぞれ兼任、分担している。タン・ツェフィ (TANG Zehui) は、レジデンスプログラム・ディレクターとして主にアーティストのコーディネートをを行っているが、過去には美術館学芸員としての経歴を持ち、アーティスト・イン・レジデンスという新たな仕事の可能性を求め、働き始めたという。スタッフの職種は以下の通り。

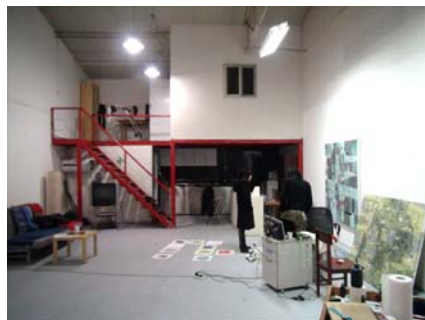
- Brian WALLACE, Director / Founder
- TANG Zehui, Residency Program Director
- Cameron Segraves-KIMBALL, Assistant to the Director

(2) パートナーシップ

2001年より Australia - China Council (ACC) とのパートナーシップの提携をしている。同組織には滞在アーティストに対するスタジオ及び住居賃借費、生活費、旅費等のサポートを行うプログラムがある。

また、ネットワーク組織として「Res Artis」、「Alliance of Artists Communities」に加盟。中国に訪れたことのないアーティストにとっては、言語の問題もあり、滞在先をどのように探し始めればよいかわからないため、上記の2つの著名なネットワーク組織のメンバーであることは重要となっている。また、世界中の多くのレジデンスプログラムから学ぶことも多く、レジデンス事業組織間における相互交流が生まれることも有意義である。

スタジオ兼住居は、主に画家の使用に適している。ロフト形式のスタジオ空間にキッチン、ベッドルームがある。



5. 事業評価の実施状況

現在、具体的なアーティストへのフォローアップは行っていないが、レッドゲート・ギャラリーで行う展覧会の案内をメールや DM 等で送るなど、コンタクトを継続している。また、過去の滞在アーティストが再滞在するケースもあり、オーストラリアのあるアーティストは、6年間連続で毎年3ヶ月間の滞在を行っている。

評価については、主催者として滞在後の反応や成果を当然求めているものの、もっとも重要なことは滞在中に得た経験だと考えている。レッドゲート・レジデンスプログラムがこれまで成長を遂げてきた理由は、滞在アーティストにとって素晴らしい環境と経験を提供してきたことであり、次のようにタン氏は語る。「アーティスト自身が持つネットワークが、その評価を世界に広げてきた結果なのです。レジデンスプログラムをとおして北京のアートシーンに優れた人材が投入され交流が生まれることこそがアーティスト・イン・レジデンスの意義であり、多くの人々にとってかけがえのない、非常に価値あるものと考えています」。

アーティストは様々な異なる文化を持ち込み、様々な考えや気づきをもたらす。アーティストがここで経験したことへの価値を発見し、表現の変容につなげる。集中した時間を過ごし、文化を吸収するという経験が、私たちの文化を捉えなおし、新しい価値へと転換されること。さらに、相互交流を行うことで、海外からのアーティストだけではなく、海外でのアーティスト・イン・レジデンス経験をした中国人アーティストが帰国後にその経験を中国国内アーティストのコミュニティにもたらしてくれることは、非常に意義深いものと考えている。

6. 現在の課題と今後の方向性

(1) 運営における課題

まずは継続していくことが課題である。現在はオーストラリアと欧米からが主要だが、今後はアジア圏からのアーティストの滞在を促進したいと考えている。また、施設に関しては現在のところペインターに適した施設が中心だが、陶芸の設備も備える意向がある。運営の拡大、設備投資のための資金は必要だが、現実的に

は非営利の中で収入を増やすために大きなプロジェクトやイベントを開催することは難しい。

(2) 直面する国内の課題

伝統的な芸術教育の課題もあるが、欧米のアーティストのアクティブなアーティスト・イン・レジデンスでの活動に比べ、中国も含む多くのアジアのアーティストはアーティスト・イン・レジデンスを知る機会が少ない。ただし、現在では中国人アーティストのアーティスト・イン・レジデンスへの認識、重要性は伝わりつつあり、海外での学びの場を求め、卒業後のキャリアを伸ばすための戦略的な機会として捉えられ始めている。2012年には、中央美術学院 美術館 (Central Academy of Fine Arts Art Museum) で、若いアーティストに向けた教育プログラムとして、国際的なレジデンスプログラムを知るためのワークショップが行われた。

(3) 日本との交流に対する課題、期待

これまで日本人アーティストが滞在した実績は3名のみ。その理由として、ひとつには言語、そしてアーティスト・イン・レジデンスそのものの存在への気づきが課題となっている。「まず、国内アーティストに対してのアーティスト・イン・レジデンスの認識を高め、国際文化交流の基盤であることを知らしめること。プロフェッショナルなアーティストの活動を支える、非常に戦略的な場でもあるという理解を促すことが重要ではないでしょうか」とタン氏。

また、それぞれのレジデンスプログラムが個性を持つことも大切であるという。例えば現在の北京は、世界のアートシーンの中心として多彩な文化的な機能があり、日々様々な出来事に出会うことができるという利点がある。その一方で、例えば中国の山西省の山間の許村国際芸術公社 (XuCun International Art Commune) では、アートコミュニティもなく、現代芸術の知識や理解がない人々が住む孤立した地域にあるという。タン氏は「ここにはこうした場に興味を持ち、村人たちとの生活や、自然の中での経験を望むアーティストが世界中から滞在している。このような多様性がアーティストをひきつけ、活動の場を広げるための選択肢として認識されるのではないのでしょうか」との意見を述べた。

2. 三影堂 撮影芸術中心 |

Three Shadows Photography Art Centre

訪問日: 2013年2月6日(水) 13:30-14:30

訪問者: Jillian SHULTZ (Director of International Programs)

面会日: 2013年2月26日(水) 10:30-12:00 ※横浜でのインタビュー

面会者: inri (Founder, Photographer)

URL: <http://www.threeshadows.cn>

1. 運営機関の概要

2007年6月にオープンした、中国初の民間による写真専門の現代アートセンター。中国における現代写真芸術の発掘、普及、発展のためのプラットフォームとなることを目的に、様々な展覧会、出版、レジデンスプログラムやプロジェクト、野外コンサートなどのイベントを開催している。

建築、庭園の設計は、国際的に著名なアーティストであり建築家のアイ・ウェイウェイによるもの。4,600㎡の敷地内にギャラリー、ライブラリー、カフェ、暗室、レジデンス等を有し、近年、芸術区域として発展を遂げる草場地(Caochangdi Village)の中で、最も注目される国際的なアートセンターのひとつである。

(1) 設立趣旨・経緯

三影堂撮影芸術中心(Three Shadows Photography Art Centre)は、中国の著名な写真芸術家、ロンロン(榮榮 RongRong)と彼の妻で日本人の写真家、インリ(映里 inri)により開設され、2012年に創立5周年を迎えた。

ロンロンは1993-94年にかけて、中国現代芸術の拠点であった東村を代表するアーティストとして活躍。その後、東村は政府によって強制閉鎖を余儀なくされたものの、ロンロン&インリは国際的に活動の場を広げ、現代写真芸術を代表するアーティストとして高い評価を受けてきた。やがて2000年以後、急速に変化を遂げる国内外の状況下において、中国現代芸術をとりまく環境も大きく変容する。海外での中国現代芸術の市場は高騰し、北京では798芸術区に商業ギャラリーが次々とオープンした。二人は市場をターゲットにした作品制作、展示が中心に行われ始めた中国において、アーティストとして何をすべきか、何が必要かを考え、その結果が、三影堂の設立へとつながった。設計を手がけたアイ・ウェイウェイは東村の盟友であり、彼のスタジオも草場地内にある。

計画当初は、世界各国から集めた写真に関する良質の図書を若い世代に公開するための図書館開設を考えていた。しかし、写真家のための環境を考えたとき、

現代写真を発表する場も、評価する場も、学ぶ場も無かった。「一からではなく、ゼロからのスタートでした。何もない中で、まずは自分たちに必要な、自分たちの足場を作っていかなければならないと。そのためには図書館だけではだめ。あれもない、これもないと付け足していった先に、現在の三影堂の空間が立ち上がったのです」と、インリ氏は振り返る。

設立当初から国際交流事業を念頭に置いたプログラムを展開し、国内外の優れた写真芸術を紹介する展覧会を開催。中でも、中国を拠点とする若手の写真家の公募展「草場地春の写真祭(Caochangdi Photo Spring)」は、2010年よりフランスのアルルと提携する国際交流展として展開した。国際的な審査委員会が構成され、日本からは飯沢耕太郎氏、笠原美智子氏が審査員として参加し、優れた中国若手アーティストを海外に紹介する機会として高い評価を受けている。

また、アートセンターのコレクションとして、ベルナール・フォコン、マン・レイ、ロバート・フランク、荒木経惟、細江英江、森山大道、森村泰昌等の作品を保有、公開している。さらに、写真芸術の発展、普及のための専門家による講座、技術習得のためのワークショップを開催するなど、教育プログラムの充実も図ってきた。

(2) ミッション

- 中国に立脚して、現代写真芸術を深く発掘、開拓、発展させること。
- 各歴史年代における創造的な作品の発掘・整理。
- 国際間の対話を促進して、中国現代写真芸術の国際的地位と重要性を向上。
- 現代写真芸術と大衆社会との意思疎通の「場＝プラットフォーム」を構築し、豊かな経験を持つ独自の運営組織を通じて現代写真芸術の健全な発展の促進に貢献すること。

以上をミッションに掲げている。アートセンターの中核をなす図書館では、ロンロンが世界中で収集した多様な国と言語の写真集、評論集を中心とした出版物、その他の資料が公開され、中国で唯一、最大の現代写真に関するコレクションを有している。

アイ・ウェイウェイ設計による建築。
 (右)カフェ&ブックショップのエントランス
 (左)ギャラリー空間



2. プログラムの内容と実績

(1) アーティスト・イン・レジデンス

3週間から5ヶ月までのレジデンスプログラムを実施。写真芸術、映像制作の分野で活動する海外からの写真家、アーティスト、キュレーター、学術分野の研究者に対し、中国での滞在と制作、展覧会、リサーチ活動の機会を提供し、また、中国のアートコミュニティの発展に寄与することを目的とする。滞在アーティストは新たな作品制作や、他のアーティストやコミュニティとの協同制作、あるいはワークショップや講座を行うなど、それぞれ独自のプログラムを設計することができる。三影堂はアーティストの個々の要望に応じ、素材探しや制作に必要な地域の情報の提供などのサポートを行い、また、中国国内にむけたプロモーションを行う。

(2) アーティストの募集・選考方法、応募アーティストの条件

アーティスト個人が個別に申請できる。施設提供のほか、滞在中の生活費のサポートを行う。

(3) プログラムの実績・過去の滞在者

2010-11年の実績では、Nadine STIJNS(オランダ)と北野謙(日本)が滞在中。

「アーティストにとっては、新たな作品へのチャレンジが実現できるかが最大の実績・成果ではないでしょうか」とインリ氏。三影堂で制作された北野氏の代表作である《our face》シリーズにおける大判写真は、これまでインクジェット出力をしていたものを、ロンロンとインリ両氏の強い勧めにより、三影堂での滞在中に手焼きでの制作を行い、表現の幅を広げるという成果に至った。

3. 施設の構成と内容

- 敷地面積4,600㎡
- 建築設備2,500㎡
 - ギャラリー×3部屋(1,300㎡)
 - ライブラリー(約3,000部以上の蔵書・資料)
 - カフェ&ブックショップ
 - 講義室
 - ラウンジ

- 暗室
- 宿泊施設(リビング&ベッドルーム×1部屋)、他

4. 運営体制と事業収支

(1) 運営組織

中国には、政府によって認められる非営利活動がほぼ存在しないが、三影堂では営利活動と非営利活動が共存しており、展示、開発、出版、メディア部門での運営が行われている。レジデンス事業は、国際プログラム・ディレクターのジリアン・シュルツ(Julian SHULTZ)が担当。シュルツ氏は、ニューヨークの大学で中国美術について学び、卒業後、さらに中国現代美術に興味を持ったことから中国での経験を積むために2008年から北京に在住。2009年から三影堂のスタッフとして働き始め、「草場地春の写真祭」など国際交流事業を手がけている。

その他、三影堂のスタッフ構成は以下のとおり。また専門家による顧問委員会が設けられており、事業の諮問、公募展の審査等を担っている。

[運営スタッフ]

- Founders, Directors: RongRong & inri
- Art Director: Mao Weidong
- International Programs: Jillian Schultz
- Office Manager: Xu Dong
- Public Relation: Xu Lijing
- Library Director: Zhong Linchun
- Art Store: Lu Liqing

[顧問委員会]

- Ai Weiwei, Conceptual Artist, Curator and Architect, China
- Alison Nordström, Curator of photographs at the George Eastman House, NY, USA
- Bas Vroeghe, Director and Curator of the Paradox Foundation, The Netherlands
- Berenice Angremy, Executive Director of Dangdai International Art Festival in Beijing
- Britta Erickson, Independent Researcher and Curator, USA



(右) 写真作品のストックルーム
(左) 三影堂設立のきっかけともなった、写真資料のライブラリー。世界各国の写真集、評論集などが並ぶ。

- Christopher Phillips, Curator at the International Center for Photography, NY, USA
- Fan Di'an, Director of National Art Museum of China
- Fei Dawei, Artistic Director of Ullens Centre for Contemporary Art, China
- Karen Smith, Critic and Curator, China
- Kataro Iizawa, Critic of Photography, Japan
- Richard Loh, Art Consultant, China
- Wu Hong, Distinguished Service Professor of Art History at the University of Chicago, USA
- Yoshiharu Fukuhara, Director of Tokyo Metropolitan Museum of Photography

(2) パートナーシップ

プログラム毎に様々な組織、団体とのパートナーシップやサポートを受ける。一例として、2010年から継続開催を行っている「草場地春の写真祭」では、展覧会等の企画を行うシンキング・ハンズ社、フランスのアール国際写真フェスティバルとの提携により開催した。

(3) 事業収支

出版、ギャラリー（作品販売）、ブックショップ、カフェなどによる収益事業。企画展、レジデンスプログラム、教育事業等は非営利の活動として運営している。

5. 事業評価の実施状況

評価に値するひとつのエピソードとして、三影堂の存在によって、拠点である草場地全体が取り壊しから免れたということがある。「草場地春の写真祭」を開催した2010年に、ちょうど草場地全域の再開発の計画があり、明日にも取り壊されるというような状況の中で国際展を行いました。展覧会は高い評価を受け、多くの来場者があると同時に、草場地が大きな話題となったことで、取り壊しが中止されました」とインリ氏は言う。「私たちは、自分たち自身の必然から様々なことに取り組んできましたが、自ら声を上げ、行動することが、現在の〈草場地国際芸術村〉の展開につながったのです」。

また、北京在住の写真家を紹介する「ポートフォリオレビュー」を開催した際に、東京都写真美術館の学芸

員である笠原美智子氏がレビュアーとして招かれた。笠原氏は、そこで出会った菊地智子氏の作品を高く評価し、「日本の新進作家」展（日本の新進作家 Vol.11 〈この世界とわたしのどこか〉）の出展アーティストとして抜擢した。さらに菊地氏は、2013年の第38回木村伊兵衛賞を受賞するという快挙を遂げた。インリ氏は「場、機会を作り出していくことは、本当に重要なことだと実感しました」と、菊地氏の受賞への喜びと三影堂の活動の成果について語った。

6. 現在の課題と今後の方向性

(1) 運営の課題

現在、レジデンス事業は一時休止中である。その理由のひとつとして、言語の問題が挙げられる。滞在するアーティストのほとんどが初めて北京に滞在するため、制作や生活面において多くのサポートが必要となる。現在、英語が話せるスタッフはシュルツ氏のみであり、申請の受付を含めて多くの労力を一人で対応するには物理的に困難な状況だと言う。

そのため、今後はプログラム全体の再構築を行い、教育プログラムの一部としてより戦略的にレジデンス事業を位置づけて統合していく予定である。招へいする人材は、写真家のみならず、研究者、編集者なども含み、中国での経験を希望する人々で、申請方法も、個人のアーティストではなく、大学などの教育機関、他のレジデンス機関を通した相互の国際交流プログラムを計画している。滞在アーティストは自身の仕事だけでなく教育プログラムの一部を担ってもらう方向で検討している。「ワークショップ、講座、暗室作業の指導などを含めて、それらを資源としながら将来的な方向性を作っていきたいと考えています。必ずしも写真制作に限らず、観客や参加者に対する何かしらの指導を行ってもらいます」とシュルツ氏は今後の展開を語る。これまで個々の自由設計であった教育プログラムへの参加は、滞在条件として組み込むことで、相互の活動をより有機的に成果へつなげていこうとする戦略である。

三影堂がオープンするまでの過程をとらえたロンロン&インリによる写真作品が、ラウンジに展示されている。



また、組織経営面での再編も試みているという。「これまで三影堂は自分たちの進むべき、やるべき方法を目指してきました。ある意味この5年間がもっとも理想的な形の運営で、それはロンロンも私もビジネスマンでなかったからできたのだと思います。お金のことを考えていたら、このようなことはできなかった」とインリ氏は言う。しかし、今後の会社経営を考え、市場として発展するためには、動員数や収益という、いわゆる公の部分でいう「数の評価」も必要になってくる。そのため今後の三影堂は、アートセンター、学校、会社とはっきり3つにわかれて運営し、会社としては発展をしながらも、大きな方針を変えることなく、写真センターの非営利の部分では、純粋に、自由に良い企画を展開できるような運営体制を計画している。「その方が、多くの可能性があると思う」と、インリ氏は今後の取り組みについて語った。

2013年4月からの展開として、本格的に写真を学ぶことができる教育プログラムを立ち上げようとしている。中国では、広告専門の学校や大学の美術コース内での写真の授業、あるいは工学系の写真コースは設置されているものの、芸術写真の専門家から本格的に学ぶ場がないという。以前から講演会などは行っているが、2012年から教育プログラムを実施しており、今後、写真学校を展開していくための下準備としてのプログラム、システムを構築し、その中にレジデンス事業を位置づけていく予定である。

また、今後の展開によっては、草場地に学校とレジデンスが併設された場をつくるというビジョンも描いている。「場を与え、一流のものを与える。本当に写真界の第一線で活躍する人たちと直接触れ合える機会をつくるのが重要だと思います」とインリ氏。人と人との出会い、誰と何をどのように取り組むか。レジデンス事業がそうした活動をつなぐ場となる可能性に大きく期待を寄せているという。

(2) 日本との交流について

第一に、中国国内では、日本の政府機関は企業を中心とした経済活動に対する関心は高いように思われ

る一方で、文化事業に対する動きがほとんど見えず、欧州の機関とは大きな違いがあるという。三影堂の国際プログラムに関しても、欧州の大使館の担当官は必ず足を運ぶが、日本大使館の担当者が足を運ぶことはなく、事業を後援することはあるが、書類での結果報告で済まされることが多いという。また、政府セクターが直接事業を行ったり、動いたりすることが難しいのであれば、民間の草の根のネットワークを利用すればよいではないか、と続ける。

「日中関係は、政治や経済だけに偏らず、もっと文化交流をすべきだし、文化は漫画ばかりに頼りすぎているように見えます。写真もアートもとても多様です。アーティスト・イン・レジデンス自体も効果は目に見えにくいかもしれませんが、本当はとても自由に開かれています。その良さを利用して、広げていくことが必要ではないでしょうか」とインリ氏は訴える。

個人の単位で海外での活動や学びの場を広げる際には、多くの苦労を要する。その必然から、レジデンス事業では、アーティストにとって滞在地にある草の根のネットワークの力はとても重要な要素となる。「交流とは、まず壁を壊すことから始まります。組織や政府では越えられない壁でも、個人には越えていく力があると思います」。アーティストに限らず個々人が世界を旅し、壁を壊し、相互の価値を交換することの意義について、インリ氏は示唆をする。「日本人だけを、あるいは日本という国だけを相手にしていくという価値観を壊し、生きること驚くこと。若い人たちには、そうした経験がとても重要だと思います」。

3. プラットフォーム・チャイナ/北京インターナショナル・アーティスト・プラットフォーム |

Platform China / Beijing International Artist Platform

面会日: 2013年2月6日(水) 11:30-12:30

面会者: SUNG Ning (Director)

URL: <http://www.platformchina.org>

1. 運営機関の概要

プラットフォーム・チャイナは2つのギャラリー兼プロジェクトスペースとスタジオを保有する多機能ギャラリー。北京のアーティストコミュニティで有名な798芸術区に続き、近年、大規模なギャラリーやアーティストのスタジオがオープンし注目される草場地(Caochangdi Village)に、2005年に設立された。元倉庫を改装したという2階建てのギャラリー(総面積1,500㎡)は、スケールの大きな作品設置やワーク・イン・プロGRESSなどのプロジェクトが可能な、アーティストにとって非常に魅力的な空間である。

(1) 設立趣旨・経緯

ロンドンの Institute of Contemporary Art (ICA) に研修し、アーティストとしての研鑽を積んだディレクター、スン・ニンの「中国に ICA をつくりたい」という思いから、2005年にオープンした。以来、中国の若手アーティストを中心に、年間、約7、8回の企画展を開催し、また台北、香港、光州、バーゼルなど海外の主要なアートフェアに参加をしてきた。

(2) ミッション

〈新しい試み〉、〈ワーク・イン・プロGRESS〉、〈様々な表現領域間の横断〉、〈開かれた表現と場〉をテーマに、中国における現代美術の発展と、国内外のアーティスト間の交流と対話を生み出す「プラットフォーム」となることを目指している。

2. プログラムの内容と実績

(1) アーティスト・イン・レジデンス

プラットフォーム・チャイナの目的のひとつである、国内外のアーティスト間の交流と対話を生み出す場として、ギャラリー設立当初の2005年からレジデンスプログラム、北京インターナショナル・アーティスト・プラットフォーム(Beijing International Artist Platform、以下「BIAP」)の運営を開始した。大きく変容を遂げ続ける中国の首都であり、現代アートシーンの発展でも注目される北京での滞在制作、リサーチの場を提供する。対象は、アーティスト、キュレーター、作家、デザイナー

のほか、アカデミックな分野での研究者と幅広く、芸術のみならず様々な文化活動を行う人々に対し、中国での暮らし、仕事の機会を開き、中国、そして中国人アーティストとの対話と深い理解を促すものである。

「北京の他のレジデンスに比べ快適で広いスペースは提供できないが、798芸術区も近く、毎週のようにギャラリーのオープニングパーティーが開催されるため、芸術関係者に出会うチャンスが多いことも特徴。目標を持ってやってくるアーティストそれぞれの要望を聞き入れ、制作やリサーチ環境を整えている」と、スン・ニン氏。アーティストにとって必要な環境とは何か、自らの経験からフレキシブルな対応を行っている。

プログラムは、一般公募及び提携組織との連携によるプログラムがある。

(2) アーティストの募集・選考方法、応募アーティストの条件

① 提携組織との連携によるプログラム

駐北京ノルウェー大使館とノルウェー現代美術財団(Office for Contemporary Art Norway、以下「OCA」)。ノルウェー文化省と外務省が現代美術の振興と国際交流を目的に2001年に設立した財団)が共同するレジデンスプログラムと提携し、年に2名程度の滞在者を受け入れている。大使館及びOCAより選考されたグランティは、旅費上限1万ノルウェークローネ(17万4,000円)、生活費月額8,000ノルウェークローネ(13万9,000円)の支給を受けることができる。

希望者はOCAが公開する申請書に従って応募の上、選考される。OCAはノルウェー大使館からのサポートを母体とし、主に美術の分野のアーティストの海外派遣にかかる事業を行っており、その中で「インターナショナル・サポートプログラム」及び「レジデンスプログラム」へのグラント制度がある。「レジデンスプログラム」では、BIAPの他、WIELS Contemporary Art Centre(ブリュッセル)、International Artist & Curatorial Studio Programmes(ニューヨーク)、Künstlerhaus Bethanien(ベルリン)、Residency Berlin Mitte(ベルリン)、18 Street Art Center(ロサンゼルス)との提携を行っている。



近年、様々なギャラリーやアーティストスタジオが点在する草場地区内に位置するプラットフォーム・チャイナのゲート前。元倉庫を改造している。

② 公募プログラム

- 対象: 現代芸術の分野におけるアーティスト(美術、舞台芸術ほか)、評論家、キュレーターのほか、文筆家、研究者、編集者も対象とし、中国現代芸術への高い関心を持って仕事をすることができる者。
- 選考方法: 申請ガイドラインに従って必要書類を提出後、BIAP 審査委員会によって選考される。
- 滞在期間: 8-12週間を目処に個別に設定する。
- 条件: 旅費、生活費は滞在者自身が負担。レジデンス・スタジオ使用料(水光熱費、清掃費、インターネット回線使用料を含む)として、月額8,500元(約14万円)を支払う。
- その他、アシスタント、通訳などについて必要に応じて相談、斡旋を行うが、費用については滞在者本人が負担する。
- 助成を必要とする申請者には、BIAP と関係するいくつかの助成機関の紹介をすることができる。

(3) プログラムの実績・過去の滞在者

日本からのアーティスト滞在の実績はなし。OCA との提携プログラムによるアーティストは、以下のとおり。

Ragnhild AAMÅS、Marius MOLDVÆR、Steinar Haga KRISTENSEN、Victor MUTELEKESHA、Per Bjarne BOYM、Torgeir HUSEVAAG、Ane GRAFF、Tarje Eikanger GULLAKSEN、Inger Lise HANSEN、Stian ÅDLANDSVIK、Torbjørn RØDLAND、Bodil FURU、Siri HERMANSEN、Ole Henrik HAGEN、Anne-Karin FURUNES、Vibeke JENSEN、Mette TRONVOLL、Vegar MOEN。

最も成功した事例について、ディレクターのスン氏は「ここで発表や滞在制作を行うのは若手が主流であるため、評価が定まり、成功したアーティストがいるかどうかはひと言では言えません。だからこそ、若いアーティストが自主的な目標を持ち、中国での体験をもって何かを得てもらうことが重要だと考えている」と言う。

(4) その他のプログラム

公開のプログラムとして、参加者は、滞在期間中にオープンスタジオを行うことができる。BIAP は、関係機関に開催案内を送付するなど PR のサポートを行うが、展示作品制作にかかる費用、チラシやポスターなど告知物の制作費は本人が負担する。



(左／中) 大小のギャラリースペースに、現在注目されている中国若手アーティストによる作品が展示されている。
(右) 代表のスン・ニン氏。「中国にも Institute of Contemporary Art (ICA) を作りたかった」と、設立の背景を語る。

3. 施設の構成と内容

ロフト形式のスタジオ兼住居(50ー70㎡、2名以上での滞在不可)、キッチン、冷蔵庫、洗濯機、ソファ、ベッドなどの家具類、インターネット環境が整備されている。

オープン当初、5つ所有していたスタジオは、現在プログラム再考のため1つに限定して運営を行っている。その理由を「多くの滞在者を受け入れることで実績となるが、一方でアーティストにとって十分な対応ができないことに疑問を持った。目的を持って滞在する人たちのために、ベストな環境をつくりたい」とスン・ニン氏は言う。

4. 運営体制と事業収支

(1) 運営組織

スタッフは10名(フルタイム)、ギャラリー部門と兼任し、滞在中の様々な情報の提供、制作サポート、アシスタントや通訳の手配を行う。

(2) パートナーシップ

① 事業提携

- 駐北京ノルウェー大使館
- Office for Contemporary Art Norway (OCA)

② 国際ネットワーク

2005年から ResArtis のメンバー。

(3) 事業収支

ギャラリー部門は作品の販売が主な収入源であり、BIAP は非営利事業として位置づけられる。提携事業にはプログラム運営のサポートを受けており、例として月額20時間までの展示アシスタント経費、8,500円(約14万円)のスタジオ経費等の提供を受けている。

5. 事業評価の実施状況

プラットフォーム・チャイナは、オープン以来、一貫し

て若手アーティストを中心に紹介するアートのスペースとして展開し、2010年あいちトリエンナーレに参加したスン・シュン(孫遜 SUN Xun)をはじめとして国際的に活躍するアーティストを輩出してきた。公的機関ではないので、滞在中の公開プログラム、オープンスタジオ等の成果発表をできる限り条件とせず、あくまでアーティスト自身の自主的な成果目標の達成を優先し、それに対し、何を提供し、何を成果とするか協議した上で、展覧会、オープンスタジオなどのプログラムを組んでいる。特に、本人が希望してもプラットフォーム・チャイナのコンセプトに沿ったものでなければ展示は行わないこともある。

場合によっては、滞在アーティスト等へのキャリア形成に対するフォローアップとして、アートディレクターやキュレーターを紹介する場合もあるが、発表するためのクオリティをもった作品制作がされないこともあるため、アーティストの要望によって個別に対応することになっている。また、過去の滞在アーティストとは、展覧会の案内などコンタクトを取り続けており、再度滞在の希望にも対応している。

6. 現在の課題と今後の方向性

現在、北京のアートマーケットは世界的な市場を持っており、プラットフォーム・チャイナの若手アーティストの作品も市場で評価され、近年よく売れているという。しかし、アーティスト・イン・レジデンスをとりまく環境では未だ発展途上にあり、特に北京ではプログラムを運営しているところがほとんどない。

スン氏はアーティストにこそ交流が必要だと考えており、次のように語る。「新しいアイデアを国際的にシェアできる機会を持ち、優れたアーティストを輩出していきたい。優れたアーティストの作品は必ず認められ、売買が行われ、誰かの手元に渡り、そして歴史に残されていく。レジデンス事業は、すぐに大きな変化をもたらすことはできないかもしれないが、これからも続けていきたい」。

4. アローファクトリー 箭厂空间 | Arrow Factory

面会日: 2013年2月7日(木) 14:00-15:00

面会者: Rania HO (Artist, Co-Founder)

WANG Wei (Artist, Co-Founder)

URL: <http://www.arrowfactory.org.cn>

1. 運営機関の概要

歴史的な建造物や商店街が連なる国子監街に近く、賑やかな表通りを裏手に入った胡同とよばれる路地の一角に、軒を並べるアローファクトリー。下町風情の民家や小さな商店が連なる通り沿いに位置している。

(1) 設立趣旨・経緯

アローファクトリーは、2008年にオープンしたオルタナティブ・スペースである。アーティストのラニア・ホー(Rania HO)とワン・ウェイ(WANG Wei)、キュレーターのヤオ・ポーリン(Paulin J. YAO)の3名により設立された。商業的なアートスペースが郊外に次々とオープンする北京の現代美術をとりまく状況の中、アーティストが実験的な作品を自由に制作し、発表できる場所はほとんどなかった。そのため、小さく、ヒューマンスケールのオルタナティブな場所を自らつくりだそうとプロジェクトをスタート。アートエリアではなく、過度に商業的ではない場所を探していたところ、ちょうど青果店だった場所が空いたという情報を得て、現在の場所にスペースをオープンさせた。古い町並みの中で古くからの住人が暮らし、日常生活を感じられる場所でありながら、現在は若い世代にも人気のエリアにもなっているという。人と町の状況の変化について、「5年前から大きく変化して、レストランなどの商業施設が現れ始めています。それまでは住宅地がメインでしたが、とても柔軟性のある場所。その中で私たちも生き残っていかなければならないのです」とホー氏は説明する。

新しく実験的な制作を中心に、インスタレーション、サイトスペシフィックな表現にフォーカス。作品を収集せず、テンポラリーな形での発表を行い、展示期間中は通りに面したウィンドウギャラリーを通して、24時間いつでも誰でも作品を観ることができる。展覧会は厳密なスケジュールを組んでおらず、それぞれのアーティストの状況にあわせ、約2ヶ月間の会期で開催している。

(2) ミッション

現在、北京の現代美術は、次々と郊外に出現するアートスペースによって商業化に向かい急展開している。アローファクトリーはそうした社会的・政治的状況と芸

術表現の関係を断ち切り、アーティストの新しい表現を通して、都市の中で、身体的な存在としての人間と芸術との関係性について問うことを目的としている。中国国内のみならず、海外のアーティストとのプロジェクトを展開することで社会的規範のフレームを取り外し、実験的な新しい表現を積極的に行い、自然で自発的な環境の中から生まれる新しい価値を提示している。

2. プログラムの内容と実績

(1) アーティスト・イン・レジデンス

中国国内のアーティストによる展示が主な活動で、正式なレジデンス事業の運営は行っていない。ただし、展覧会やプロジェクトによって海外からのアーティストを招へいし、滞在しながら制作活動を行う場合がある。

(2) アーティストの募集・選考方法、応募アーティストの条件

運営者自身がアーティストであることから、招へいアーティストはアーティスト同士の信頼関係の上に成り立つネットワークの中で、自発的、偶発的に選ばれる。中国国内のアーティストが中心であることは、資金的な理由からでもある。海外アーティストの場合は、中国国内で別の仕事で滞在している際に、アローファクトリーからプロジェクトを持ちかける場合もある。

ワン氏曰く、「彼らはリサーチのための渡航費、滞在場所や制作費などを主催者から支給されてくるので、私たちが自ら工面する必要がないのです(笑)」。以前の例では、ビタミン・クリエイティブ・スペース(P●—●参照)に田中功起が滞在していた際、彼を訪ねて参加のオファーをしたという。「もっと北京のことを知りたくない?何かやってみない?とね。ここでの仕事に非常に興味を持ち、快く参加してくれました。アーティストはとても寛大なので、大抵の場合は引き受けてくれます。もちろん、様々な条件があるので、いつもうまくいくとは限りませんけれどね」とホー氏は言う。アーティスト・ランである特性を生かし、アーティスト同士で成り立つ信頼関係だからこそ成しえる運営手法といえる。

(3) プログラムの実績・過去の滞在者

これまで行ってきた展覧会は個展形式が中心だが、



アローファクトリー前景。以前は青果店であった建物をギャラリーに改装。周囲には住宅や小さな商店が並ぶ。

海外アーティストを含むグループ展形式のプロジェクトを過去2回開催した。屋外を含む近隣の様々な場、環境に対するアプローチを行った。

- 「《在拐角》Just Around the Corner」(2009.08.15 — 2009.11.11)
张怡 Patty Chang、何颖宜 Rania Ho、洪浩 Hong Hao、李明 Li Ming、梁远苇 Liang Yuanwei、林载春 Lim Tzay-Chuen、林天苗 Lin Tianmiao、刘窗 Liu Chuang、林荫庭 Ken Lum、丹·皮乔沃维奇 Dan Perjovschi、田中功起 Koki Tanaka、王卫 Wang Wei、西京人 Xijing Men、颜磊 Yan Lei
- 「《高光一箭厂收藏展》Arrow Factory: Collection Highlights」(2010.12.21 — 2011.02.17)
张怡 Patty Chang、何颖宜 Rania Ho、李景湖 Li Jinghu、刘窗 Liu Chuang、尤安·马唐纳 Euan MacDonald、丹·皮乔沃维奇 Dan Perjovschi、王功新 Wang Gongxin、王卫 Wang Wei、颜磊 Yan Lei、张培力 Zhang Peili。

3. 施設の構成と内容

青果店として使われていた15㎡のスペースをアートスペースとしてリノベーションした。その他のプロジェクトを行う際は、近隣の通りや家屋の屋根の上など、サイトスペシフィックな展開も行う。海外からのアーティストを招へいする場合は、その時々予算により、運営者の自宅あるいはホテルに滞在している。

4. 運営体制と事業収支

(1) 運営組織

設立スタッフ3名がすべてボランティアで活動。

- ラニア・ホー: 創設者、フリーランスアーティスト
- ワン・ウェイ: 創設者、フリーランスアーティスト
- ヤオ・ポーリン: 創設者、インディペンデント・キュレーター

(2) パートナーシップ

① 助成等

プロジェクト毎に異なる。過去に「Arts Network Asia」、「Foundation for Arts Initiatives」等からの助成実績がある。

② ネットワーク、提携組織など

アローファクトリーでは、世界中の友人たちを中心とした不定形なネットワークを重視している。独立した存在を維持し、自由度を確保するために、組織自体も不定形である必要があるという。

創設者であるホー氏とワン氏は、これまでアーティストとして、Gasworks (ロンドン)、Ssamzie Space (韓国)、Organhaus Art Space (重慶) などへの滞在経験を持っている。

(3) 事業収支

非営利活動のため、初期の頃の財源はすべて自己



(左／右)アローファクトリー周囲は、胡同(フートン)と呼ばれる路地が点在する。

資金で運用していた。その後、友人たちから寄付を受けたこともあったが、現在はニューヨークにある民間基金である Foundation for Arts Initiatives から助成を受けており、展覧会やプロジェクトによって確保できる予算規模に応じて事業運営を行っている。「サポートを得ることはとても難しいことです。我々はボランティアによる最小限の人数で働いているので、助成の申請書を作成したりする時間を取ることが、ほとんどできません」とホー氏は説明する。

5. 事業評価の実施状況

最大の成果は「私たちの活動が存続していることです。これからこの活動を続け、面白い展覧会を発表し続けること。それが私たちの存在そのものです」と両氏は語る。商業ギャラリーの重要性を認める一方で、日常的な場で、より自然な形で制作や発表ができる環境を、アーティストが自ら作り、運営することの責任は、表現することと同等な価値であるという。「設立当時、私たちのような活動自体が北京にはなかったもので、誰にも理解されていませんでした。もちろんこうした活動を続けることはとても難しく、誰にでもできることだとは思いません。けれども、今、多くの人々が多様な選択肢を必要としているはずです」とホー氏は言う。

また、近隣の地域住民との関係性も、ひとつの成果と言えるだろう。「隣のお店の女性は、5年たった今でも私たちのやっていることが何なのか、実際は理解していないと思います。でも、それはまったく構いません(笑)。時間はかかりましたが、今は、留守がちな私たちのメッセンジャーのような役割を担ってくれて、道に迷っている人を見かければ、『アートスペースはここだよ』と声をかけてくれるんですよ」。人と人との自然なつながりを大切に作るエピソードを語ってくれた。

6. 現在の課題と今後の方向性

(1) 運営における課題

継続することが課題であり、責任であるという。運営のための資源は非常に限られており、明確なスケジュールもなく、常にオープンしているわけでもない。展覧

会の準備ができるとドアの鍵をあけて、メールでインフォメーションを送る。そうしたことを常に続けているのですが、ここでは、必ず何かが起こっているのです」。

(2) 海外との交流に対する課題、期待

ホー、ワンの両氏は、自身がアーティストとして様々な国での制作、展覧会に参加しており、日本では、2009年にファーイースト・コンテンポラリーズ(横浜市内に活動拠点を置く、東アジアで活躍するアーティストのためのクリエイティブ・プラットフォーム)の招きにより、横浜「ZAIM」での滞在制作、展覧会を行った経験がある。そこでの交流がきっかけで、2013年には、横浜・若葉町を拠点とするアーティスト・イニシアティブ「ART LAB OVA」の北京での滞在制作を計画している。

アローファクトリーは、オルタナティブ・スペース同士がそれぞれリサーチをしたり、共同制作を行う相互交流に興味を持っており、海外で行う新しい共同プロジェクト、特に独立系の小さな組織に対してのサポートが必要であるという。例えば、数年前に彼らはイスタンブールで、彼らと非常によく似た状況のアーティストのカップルが運営を行う、小さなアートスペースに滞在してコラボレーションを行った。それがきっかけで、イスタンブール、北京、そしてエジンバラからのアーティストが3つの空間で作品を発表した。そして、次の機会として2012年8月の1ヶ月間、アローファクトリーにイスタンブールとエジンバラからのアーティストが滞在し、そして次に、ホー氏がエジンバラに滞在するという交換事業である。

1つの場に固定せず3者それぞれが移動するというユニークで興味深いプログラムだが、そのすべての費用は英国からのファンドだったという。相互に費用を供出しあうことは現実的に非常に難しいのが現状だが、世界中を旅するアーティストやキュレーターの移動のための費用を助成することは、世界に多様な層を作り出すと語るホー氏。アーティスト・イン・レジデンスの可能性について「人、そして情報の存在は移動可能であり、様々な状況、知識をもたらします」と示唆した。

5. ビタミン・クリエイティブ・スペース / パビリオン |

Vitamin Creative Space / The Pavilion

面会日: 2013年2月6日(水) 16:00-17:00

面会者: Luisa TRESKA (The Pavilion Staff)

URL: <http://vitamincreativespace.com>

1. 運営機関の概要

2007年にオープンしたビタミン・クリエイティブ・スペースは、広州と北京に拠点を置くコマーシャル・アートギャラリーである。2つのギャラリースペースでの展示のほか、毎年フィレンツェ、香港、マイアミ、バーゼルなどのアートフェアへ出展を行っている。アジア、ヨーロッパからの12名の契約アーティストを有し、中国におけるリサーチベースのプロジェクト型の作品制作を推進。また、出版事業も展開し、アーティストの活動に関する書籍を出版、オンライン及びアートフェアなどで販売している。

(1) 設立趣旨・経緯

この度訪問した北京のパビリオン(The Pavilion)は2009年にオープン。主にビタミン・クリエイティブ・スペースと契約を結ぶアーティストの、リサーチベースのプロジェクトのプロセスや成果の紹介、発表を中心としたスペースとなっている。北京で新しく開発されたビジネス街である建国門外に位置し、2006年にオープンした北京で初の私立美術館「今日美術館(Today Art Museum)」に隣接する高層ビルの23Fに、ギャラリー兼事務所を設けている。レジデンスプログラムとしてのシステムではないが、アーティストの北京での滞在制作をサポートし、その過程や成果を発表する場としてユニークな活動を展開している。

(2) ミッション

個人の日常的な体験やコミュニティとの協同の場を通じ、現在と過去の生活や哲学の双方にインスパイアされながら、それらを異なる文脈、要素、テーマに落とし込み、新たな価値を創造する表現活動を探求している。こうした現代社会における実践的芸術活動の独立性を確保するための手法として、商業ギャラリーが運営されている。相反する2つの戦略を併せ持つことによって、中国における現代芸術の発展に貢献し、既存の制度に対する新しい世界観を作り出すことを目的としている。

2. プログラムの内容と実績

滞在中のアーティストに対し、プロジェクトベースの活動支援やプロモーション、リサーチに必要な様々なロケーションや情報を提供し、メディアアート等の技術的なサポートのほか、様々な環境整備についてアーティストの条件によって柔軟に対応している。

作品制作の経過に応じたプレゼンテーションや展覧会を行う以外に、主だったパブリック・プログラムを設けることはない。基本的には人と人とのコミュニケーションに限定され、展覧会の会期中には主にギャラリスト、研究者、博士、キュレーターなど、現代アートに興味を持った層が訪れている。

3. 運営体制

- フ・ファン(HU Fang): Artistic Director
 - ルイザ・トレスカ(Luisa TRESKA): The Pavilion Staff
- アーティストック・ディレクターのフ氏は、キュレーターとして国内外での幅広く活動を行っている。小説家、ライターとしても活動しており、エッセイや美術批評でも著名。「ヨコハマトリエンナーレ2008」のキュレーターを務めた。

参考事例: 田中功起によるプロジェクト

パビリオンは、ビルの1部屋をロフト形式の2つのフロアに改装し、使用している。ギャラリー、オフィス、出版物の閲覧スペースなど、各機能を壁や間仕切りで独立させない、開放的な空間となっている。ここでのプロジェクトは場合によっては1回につき約6ヶ月の期間を設けている。「これらの状況のすべてが関係しており、日常生活、オフィスの活動、アート、そして社会状況のすべてが相互に作用しながら、プロジェクトに反映されていきます」と、トレスカ氏は説明する。

今回の訪問時には、日本人アーティスト、田中功起によるプロジェクトが公開されていた。過去の作品を含む様々な要素で構成された共同制作の過程が展示されており、その中の一つが2012年の11月に北京に滞在した際の作品。田中功起は以前にもビタミン・クリエイティブ・スペースで滞在制作型のプロジェクトを行っ



ビタミン・クリエイティブ・スペース・パビリオンは、北京初の非営利美術館「今日美術館」近くに位置する高層ビル内にあり、アートコミュニティと密接につながる場となっている。田中功起による進行中のプロジェクトの展示がされていた。

ている。彼のリサーチは、主にその土地に古くから根ざした事物の情報を集めることで、今回は、中国の仏山（Foshan）という陶芸の町と北京に滞在した。個人や工房などの窯元で、芸術作品として、あるいは商業製品として制作している様々なバックグラウンドを持つ陶芸家とコンタクトを取った。「田中氏は、北京での生活の難しさやギャップを経験した上で、人間の生活を支える職業とは何かを考え、そして、アーティストであること、陶芸家であることとは何かを問うプロジェクトを行うことになりました」とトレスカ氏は作品の背景を解説した。

プロジェクトの初期段階では、地元の代表的な陶芸家たちの作品を収集し、ひとつの場に集合させることを考えたが、途中でアイデアを変更し、人々との協同作業を行った。北京に在住する何人かの人々を招待して一緒に焼き物を焼いたという。「これはその成果を現す映像です。田中氏はこうした活動を〈collective act（集団的行為）〉と称しており、いくつかのアイデアを熟成させ、発展させるためのリサーチでもあります」とトレスカ氏は説明する。田中氏のこうした考えは、2011年に起こった東日本大震災によってもたらされたという。

行き場の定まらない状況で人間と人間が関係性をどのように結び、社会をつくり、日常というものをつくっていくのか。そうした考えに基づき、田中はこうした活動を繰り返し行っている。中国に滞在して、焼き物をテーマとしたプロジェクトに至ったきっかけは、益子の有名な陶芸家である浜田庄司（1894 – 1978）にまつわるエピソードだという。津波の被害によって多くの人の命が失われ、そしてまた、浜田庄司の陶芸作品、建築物も被害を受けた。震災は人々の価値、物に対する価値、社会に対する価値のすべてに変化を与えた。そして、震災後の社会をつくる協同作業の過程を考えることが、田中功起氏の重要なテーマになったという。「そして、今回のプロジェクトの過程においても、人々との協同作業へと展開させていきました」とトレスカ氏は言う。このプロジェクトは現在進行形で今後も継続し、まもなく最終的な形が見えてくる予定とのことであった。



Ⅰ. 韓国

1. ソウル芸術文化財団 / 創作空間 | Seoul Foundation for Arts and Culture / Seoul Art Space
2. 創作空間事業団 衿川(クンチョン)芸術工場 | Seoul Art Space_Geumcheon
3. 創作空間事業団 文來(ムンレ)芸術工場 | Seoul Art Space_Mullae
4. 仁川アートプラットホーム | Incheon Art Platfrom

写真:創作空間事業団 文來(ムンレ)芸術工場の立地する「ムンレ芸術村」の一角
現地調査協力:木村典子(舞台芸術コーディネーター・翻訳者、在ソウル)
100韓国ウォン=9.0円で換算

1. ソウル芸術文化財団 / ソウル市創作空間 |

Seoul Foundation for Arts and Culture / Seoul Art Space

面会日: 2013年1月23日(水) 14:00-16:30

面会者: HAN Jung-hee (Seoul Art Space Head Office Manager)

KIM Young-ho (Seoul Art Space Head Office Director)

URL: <http://www.sfac.or.kr/>

1. ソウル芸術文化財団の概要

ソウル芸術文化財団は、2003年にソウル特別市が文化芸術を通じた「暮らしの質の向上」「都市の競争力の育成」を目的に300億ウォン(約26億円)を出資して設立された。「文化芸術創作環境の整備」、「市民への文化サービスの拡大」、「文化競争力の強化」、「文芸振興の基盤構築」を事業の柱とし、「芸術助成」、「芸術教育」、「創作空間の運営」、「フェスティバル開催」などのプログラムを実施している。

2009年からはソウル市が市内9ヶ所に開設したアーティスト・イン・レジデンス機能のある「ソウル市創作空間」を、ソウル市から委託されて運営していたが、2013年からこのうち6施設は財団が直接管理・運営することになった。

(1) ソウル市創作空間の設立趣旨・経緯、ミッション

ソウル市創作空間は、「デザイン都市ソウル」を掲げたオ・セフン前市長(2006-11年)が、文化(カルチャー)と経済(エコノミクス)を融合させる「カルチャーノミクス(Culturenomics)」政策の一環として、08年から準備が始められた。「カルチャーノミクス」は、文化で地域を再生させ、産業に付加価値を生み出すことを大きな目的としている。

準備当初、横浜のBankART1929などの海外事例を調査し、文化空間が都市を変える可能性に着目した。「横浜はBankART1929が誕生してから都市全体が文化的に変わりました。最近はトリエンナーレが開催され、ダンスシーンも盛んです。横浜の事例を見て、文化空間が都市を変えることができると感じました」と、創作空間本部長のキム・ヨンホ(KIM Young-ho)は語る。

創作空間の最初の目的は、文化による都市再生で、市内の古い建物をリフォームする試みからスタートした。現在11の創作空間があるが、2008年からソウル市内の遊休施設となっていた洞(最小行政区)の行政機関の事務所や市場、工場など廃屋になりつつある建物を再利用したり買い上げたりして整備し、2009年から事業を本格的にスタートさせた。

ソウルは漢江(ハンガン)を挟んで北側の江北(カン

グク)、南側の江南(カンナム)に分かれる。創作空間は江南の商業地域を除いて市内全域に立地しているが、多くはあまり生活環境のよくない地域である。

遊休施設を文化空間として再活用することで、アーティストには創作空間と環境を支援し、市民には質の高い文化享受の機会を提供して、芸術の創作と享受を同時に追及している。また、「芸術」-「人間」-「都市」を結ぶ文化空間として、ジャンル間の統合と地域社会との交流を通じた地域文化の活性化や、市民の芸術参加を実践する施設としての役割も担っている。

ソウル市創作空間の創設の背景には、社会が急速に発展・変化する中で、市民の文化への接し方が変わってきたことが挙げられる。以前は美術館や劇場に足を運び、公演や展示を鑑賞するという受動的なものだったが、最近では文化芸術を楽しみながら自身も「生産」し「消費」する方向へと変わっている。

それに伴い、アーティストの市民への向き合い方も大きく変化してきた。以前はスタジオや稽古場にこもって創作活動をしていたが、「疎通(コミュニケーション)」に関心を持ち、例えば自身の創作活動からジャンルを越えた共同作業やコンセプトアート、最近ではコミュニティアートへと広がっている。このような変化の中で誰もがアーティストになれる時代となり、アーティストも既存のアーティスト像ではなく、文化芸術の媒介者としての役割が大きくなりつつある。

このような社会変化から、官民がともにこのような創造空間を作り出す流れが生れてきたといえる。

創作空間の発足とともに財団に入ったという創作空間本部マネージャーのハン・ジョンヒ(HAN Jung-hee)は「当時はアーティストと地域住民との交流という美しいスローガンを唱えても、まだそれを実践できる社会ではありませんでした。ただ、社会も市民もアーティストも思いのほか早く変化しました。現市長は文化福祉、住民の文化活動を推進していますが、韓国は早い勢いで文化に対する視点が変わってきています」という。

昨年からはソウル市は新たに「マウル(村・町内)芸術創作所」というプロジェクトを推進している。創作空間は規模も大きく、アーティストを滞在させて活動をするこ



左:キム・ヨンホ氏(創作空間本部長)
右:ハン・ジョンヒ氏(創作空間本部マネージャー)

で地域住民とのコミュニケーションを図るものだが、「マウル芸術創作所」は完全に町内のアーティストたちのための文化福祉的な空間で、町内ごとに設置される計画である。ただし、それはソウル芸術文化財団の業務ではなく、ソウル市が洞の行政機関を通じて直接行う仕組みとなっている。

(2) ソウル市創作空間の概要

現在のソウル市創作空間は全部で9館、次ページの表のとおりで、各施設は、それぞれ再利用した建物の特徴を考慮し、独自の特性とジャンルが付与されている。しかし、「創作」―「疎通(コミュニケーション)」―「共有」の流れをもった事業(プログラム)を通じ、「地域の活性化」や「コミュニティの形成」など地域との連携を模索している点は共通している。

創作空間は稽古場やスタジオが不足していたために整備されたものではない。創作活動の場であると同時に、発表の場であり、市民プログラムを提供する場でもある。そうした多様な機能が評価され、国からも大きな期待が寄せられているという。

これら9つの創作空間の建物自体はソウル市の所有だが、「ソギョ(西橋)芸術実験センター」「ソンブク(城北)芸術創作センター」「クアンアク(冠岳)こども創作遊び場」の3施設はソウル市からの委託による管理・運営で、その他の6施設はソウル芸術文化財団が直接管理・運営している。今後、委託施設も直接運営へと移管される予定だ。

「(4)事業収支」で後述するように、直接管理・運営する施設については、来年度以降、ソウル市から財政的な支援がなくなり、ソウル芸術文化財団の自主財源で運営しなければならないことになっている。

実は、このソウル市からソウル芸術文化財団への移管は、ソウル市が創作空間を手放したわけではなく、ソウル芸術文化財団の要望で実現したものだ。ソウル芸術文化財団はこれまで資産を所有しておらず、施設や空間を保有することによって、文化芸術助成にシナジー効果が生まれ、事業自体が拡大していくと判断したためである。

(3) 各創作空間の特徴

最初にオープンした「ソギョ芸術実験センター」は、弘益(ホンイク)大学(美大)のあるソギョ区で空き家になっていた行政事務所を改築したものだ。本来アンダーグラウンド文化、インディペンデント文化が盛んな大学生の街であり、若者文化を発信してきた地域でもある。この若者パワーを活かし、多様性と創造性を兼ね備えた文化コンテンツの生産と流通ネットワークの中心となることを目指している。

次いで開館した「クンチョン(衿川)芸術工場」は、ソウル西南部の製造業団地に放置されていた印刷工場を利用し、国際アーティスト・イン・レジデンス機能を有する施設として整備された。ここはアートと産業の結合などによる地域再生を掲げるとともに、美術を中心としたアーティストに安定した創造環境と国際交流の機会を提供しようとしている。

「シンダン(新堂)創作アーケード」は、1971年に開業した旧シンダン地下ショッピングセンターの空き店舗を利用し、工芸(陶磁器・繊維・金属・ガラス・紙・漆・七宝)、版画、イラストレーション、写真、ブックアートなどのアーティストにスタジオを提供している。さらに、隣接する市場の経営者たちと地域密着型の文化プログラムを運用し、文化による地域活性化を目指している。

「ヨンヒ(延禧)文学創作村」は、唯一文学のための空間で、旧市史編纂委員会の建物4棟を利用し、20部屋の執筆室を整備し、レジデンス事業を運営している。事業の一環として市民対象の創作講座(詩・小説)である文学学校や野外舞台での朗読など市民サービスを積極的に実施している。執筆室20室のうち17室は国内アーティストに、3部屋は海外交流と国際アーティスト・イン・レジデンス用として海外アーティストに提供されている。

「ソンブク芸術創作センター」は、ソンブク洞の旧保健所の建物を利用し、アーティストと住民をつなぐ新たなオルタナティブスペースを目指している。保健所だったことを踏まえ、文化芸術教育を通じた「治癒」「疎通(コミュニケーション)」「分ち合い」を実現する文化福祉プログラム実践をしている。

「クエンアク子ども創作遊び場」は、旧ウンチョン洞住民センターを利用し、子どもたちに公演、メディア、美術、文学と様々な文化芸術を体験できる機会を提供している。生活環境があまりよくない地域だが、子どもが多いことから、子どものための新たな芸術プログラムを実施している。ただし、子どもたちに芸術教育をおこなうのではなく、アーティストの活動や作品と子どもをつなぐようなインフラを創出するとともに、芸術教育の専門家や団体も育成している。

「ホンウン(弘恩)芸術創作センター」は、旧西部道路交通事業所を利用した施設で、小川が流れているという環境条件から、「芸術」―「自然」―「人間」をテーマに、当初は「生態美術」や「環境美術」など自然や生態をコンセプトとする美術を中心に据える計画だった。しかし、様々な事情からダンスが加えられ、美術とダンスの国内レジデンスを実施してきた。2013年からはダン

スをメイン事業にした創作助成、地域文化団体と連携したプログラムを展開する予定だ。

「ムンレ(文來)芸術工場」は、ソウル創作空間の中でも特異な施設で、ムンレ地区に自然発生的にできた「ムンレ芸術村」(現在200人余りが入居)の活動をサポートするために新たに建てられた。複合舞台芸術を中心に若いアーティスト育成を目的としたインキュベーター的なプログラムを実施するとともに、地域の特徴を活かしたワークショップやフェスティバルを開催している。

「チャムシル(蚕室)創作スタジオ」は旧中小企業の展示販売場を改修し、2007年に障がい者のためのアートスペースとしてオープンし、2011年にソウル創作空間の施設に位置づけられた。芸術を通した社会融合を目的に視覚障がいをもつアーティストに創作空間と展示空間を提供するほか、文化芸術政策の研究、市民参加の芸術享受プログラムを開発している。

ソウル市創作空間一覧

施設名／開館年・運営形態	所在地	特 徴	施設内容
チャムシル(蚕室)創作スタジオ 2007(2011創作空間化) 直接運営	ソンバ 松坡区	旧中小企業製品展示販売場／ 障がい者アーティストの創造空間	スタジオ、共同作業場、展示・教育室
ソギョ(西橋)芸術実験センター 2009 委託運営	マッポ 麻浦区	旧西橋洞事務所／実験的な視 覚美術の創造空間	多目的空間(5部屋)、ハヌル工作所(屋 上)、ギャラリー、アーカイブ・ルーム
シンダン(新堂)創作アーケード 2009 直接運営	チュン 中区	旧新堂地下ショッピングセンター ／工芸作家スタジオ	創作工房(40部屋)、展示室(2部屋)、展 示準備室、共同作業場、倉庫(2部屋)
クンチョン(衿川)芸術工場 2009 直接運営	衿川区	旧印刷工場／美術と国際アーテ ィスト・イン・レジデンス	※別途報告書で詳細を記載
ヨンヒ(延禮)文学創作村 2009 直接運営	ソデムン 西大門区	旧市史編纂委員会／文学の創 造空間	創作室(27部屋)、文学アーカイブ、メディ アラボ、野外公演場、洗濯室、共同キッ チン、国際レジデンス(3部屋)
ソンプク(城北)芸術創作センター 2010 委託運営	城北区	旧城北区保健所／芸術治療	ホール、スタジオ(8部屋)、住民創作室(2 部屋)、企画研究室、多目的スペース(2 部屋)、音楽室、ギャラリー、工房、カフェ
クエンアク(冠岳)子ども創作遊び場 2010 委託運営	冠岳区	旧殷川(ウンチョン)洞住民センタ ー／芸術教育	室内プログラム空間(2部屋)、屋外プロ グラム空間(屋上)
ムンレ(文來)芸術工場 2010 直接運営	ヨンドンボ 永登浦区	複合芸術と文來居住アーティスト の支援	※別途報告書で詳細を記載
ホンウン(弘恩)芸術創作センター 2011 直接運営	西大門区	旧西部道路交通事業所／ダンス と美術の創造空間	ダンス専用稽古場、スタジオ(2部屋)、教 育稽古室、セミナー室、カフェ

出典)ソウル市創作空間HP <http://www.sfac.or.kr/main.asp#111418>

他にも、「ナムサン(南山)芸術センター」「ナムサン創作センター」もソウル芸術文化財団が運営しているが、それらは舞台芸術関連の劇場と稽古場などの施設である。9つの創作空間を含め、これらの施設はすべて2009年から2011年5月の間にオープンしたものだ。

「ソウルには、例えばスペインのビルバオにあるグッゲンハイム美術館のような大型施設はありませんが、地域拠点型の小さな施設が点在しているのが大きな特徴です」とキム氏は説明する。

2. アーティスト・イン・レジデンス事業の概要

(1) 韓国のアーティスト・イン・レジデンスの歴史とソウル芸術文化財団のレジデンス事業

韓国のアーティスト・イン・レジデンスはまだ歴史が浅く、日本と韓国ではレジデンス事業の成り立ちも異なっている。日本の90年代のレジデンス事業の多くが地方自治体による地域活性化をきっかけに始まったのに対し、韓国のレジデンス事業は民間美術館によってアーティスト育成を目的に始められた。民間美術館にとってアーティストの育成は、将来的に美術館の利益として還元されるという考え方がベースになっており、レジデンスプログラム終了後に作品を寄贈する契約が結ばれている。

韓国政府もこれら民間美術館のレジデンス事業を支援したが、事業はあまり広がらなかった。そんな中、最近になって、ソウルも含め各地方自治体が強力にレジデンス事業を推進するようになった。ソウルとその他の地方ではレジデンス事業に対する考え方は異なるが、ソウルの場合、必ずしも優秀なアーティストを育てようということではない。アーティストを媒介とする住民同士のコミュニケーション、地域交流を重要視している。アーティストも、これまでレジデンス施設の多くが都心から離れた場所にあったため、ソウルという都心で地域の人々と交流し、芸術的な力を育て、地域に新たな活力をもたらすなど、お互いにギブ・アンド・テイクできる価値を求めている。

ソウル以外の多くのレジデンス事業は美術中心で、

レジデンス施設も市内中心部から離れている。そのため地方議員たちからは、何故レジデンスに対して助成をしなければならないのか、アーティストへの投資に見合ったものが都市に還元されているのか、というような疑問も出てきた。ただしソウルの場合は、都心にレジデンス施設を置き、美術だけでなく演劇、文学、ダンスと多様なレジデンス事業を展開し、地域との連携を促進しているため住民からも好意的に見られている。

地域住民とのコミュニケーションはしたくない、面倒だ、自分の作品に専念したいというアーティストもいる。こうした点に関して、創作空間本部部長のキム氏は「そのようなアーティストに対しては、『ソウル芸術文化財団のレジデンスはアーティスト個々人の力を育てることを重要視しているが、その力は人々の中でも育てられる』と話すようにしています。他のレジデンスに比べ、比較的オープンだというだけで、個々人の創作活動ができないわけではありません。施設を一步出れば市場などがあり作品の材料を購入するにも便利です、複雑な都心、人々との関係というのは創作の妨害というより、むしろ素材あふれる環境だと思います」と述べている。

ソウル芸術文化財団の役割は、単純な創作支援ではなく、文化芸術の「生産」―「流通」―「消費」のシステムに責任も持つことである。このシステムのなかで、地域との交流はもちろん、国内外のネットワーク形成も推進しようとしている。

(2) アーティスト・イン・レジデンス導入の経緯

ソウル市創作空間の大きな目的は、アーティストへの創造空間の提供と市民の文化享受である。この目的を達成するためにアーティスト・イン・レジデンスが導入された。

芸術の創作活動には空間が必要だということから、アーティスト・イン・レジデンスという発想が生まれた。特に美術の場合、スタジオやスタジオ不足が問題となっていた。文学でも執筆できる空間は大切だとされた。ホンウン芸術創作センターではダンスのレジデンスプログラムを行っている。ダンスの場合、公演ごとにチームが組まれ、公演が終わると解散することが多く、レジデ

ス事業の必要性を問う意見もあるが、現段階では実験的に実施されている。ダンスはレジデンスという形態でなくても稽古場が必要なため、稽古場の提供と一般公開も行われている。

韓国のアーティスト・イン・レジデンス機関の多くは美術が中心だが、ソウル芸術文化財団は文化芸術の助成が中心となる事業であるため、ジャンルが偏らないよう配慮する必要がある。また、地域の特性を考慮した施設配置を行うなど、公平性やバランスが求められる。美術のレジデンスは国公立機関でも行われているため、ソウル芸術文化財団は特に美術を重視する必要がない。文化芸術助成という大きな枠組みの中で、ヨンヒでは文学、ホンウンでは舞台芸術、ムンレではクロスオーバーアートのレジデンスに取り組んでいるのは、そうした理由からである。

ただし、実際にはほとんどはもっとも空間を必要としている美術が対象になっており、舞台芸術については、別途「大学路(テハンノ)稽古場」や「南山芸術センター」、「南山創作センター」など、公演や稽古のための施設が運営されている。

(3) アーティスト・イン・レジデンスの内容

ソウル市創作空間のすべての施設がレジデンス事業を実施しているわけではない。本格的な国際レジデンス事業に取り組んでいるのはクンチョン芸術工場だけで、他の施設では事業の一部としてレジデンスプログラムが行われており、海外のアーティストが滞在することもある。ムンレ芸術工場は従来のレジデンス事業(アーティストに対するスタジオや宿泊施設の提供)とは異なり、プログラム中心のレジデンス事業を展開している。

また、シンダン創作アーケードには特殊な事情がある。付近に市場があるが、大型ショッピングセンターなどがオープンして市場は沈滞し、特に地下商店街は荒れ果てていた。一つの店舗は5〜7坪と小さいため、その狭さを活用でき、また市場の人々とあまりかけ離れることのないジャンルとして工芸が選択された。それまで工芸アーティストの多くはホンデという地域にスタジオを持っていたが、地価高騰で出て行かざるを得なくなったという背景もある。また商品化に結びつくことから、市場の人々にも違和感がなく、市場に工芸作家が作

アーティストの募集・選考方法、応募アーティストの条件

施設名	区分	選考方法	応募条件
ヨンヒ文学創作村	国際 随時	公募はなく、個別に連絡し相談 活動経歴、活動計画などで審査	詩・小説・戯曲・児童文学・評論 韓国文学の翻訳者
クンチョン芸術工場	国際 公募	※別途報告書で詳細を記載	
チャムシル創作スタジオ	国内 公募	活動経歴・活動計画などの書類と 面談を通して審査	西洋画・韓国画・版画・マンガ・イラスト・グラフィック・ 写真・映像・インスタレーション・彫刻などの分野で 活動する障がいをもつアーティスト
シンダン創作アーケード	国内 公募	活動経歴・活動計画などの書類と 面談を通して審査	創作空間の運営理念と活動を理解し、市民の文化 享有の増進に寄与できる工芸などのアーティスト
ソンプク芸術創作センター	国内 公募	活動経歴・活動計画などの書類と 面談を通して審査	市民とともに場所・生態・歴史・文化間の関係形成 のためのプロジェクトが可能な文化芸術教育、企画 関連の個人またはグループ
ホンウン芸術創作センター	国内 公募	活動経歴・活動計画などの書類と 面談を通して審査	映像・写真・ダンスの個人アーティストまたはグルー プ
ムンレ芸術工場	国際 公募	※別途報告書で詳細を記載	

品を展示するなど、市場の活性化にもつながっている。

レジデンス事業のタイプ別の実施状況は次のとおりで、アーティストの応募・選考方法や条件は前ページの表のとおりである。

① 国際アーティスト・イン・レジデンスの実施

- クンチョン芸術工場:スタジオと宿泊施設の提供
- ヨンヒ文学創作村:執筆室の提供

② 国内アーティスト・イン・レジデンスの実施

- チャムシル創作スタジオ:スタジオの提供
- シンダン創作アーケード:工房の提供
- ソンブク芸術創作センター:スタジオの提供
- ホンウン芸術創作センター:稽古場ならびにスタジオの提供

③ プログラム型アーティスト・イン・レジデンスの実施

- ムンレ芸術工場:共同施設(小劇場・展示場・映像編集室・録音室)及びゲストルーム(宿泊施設)を低価格で提供(部分的に海外のアーティストを受入れ)

(4) その他のプログラム

ソウル芸術文化財団の基本事業ならびにプログラムは、①芸術助成、②芸術教育、③文化事業、④創作空間、⑤フェスティバル・交流に分けられるが、これらは個別に実施しながらも各事業をリンクさせて運営しているのが特徴である。各創作空間は個別に年間予算が組まれているが、年間予算以外に①芸術助成や②芸術教育のプログラムを適応させるなどして、各施設の活性化に努力している。

4. 運営体制と事業収支

(1) 運営組織

ソウル芸術文化財団は、理事長をトップに「経営企画本部」、「文化事業本部」、「芸術支援本部」、「創作空間本部」の4つの部に分かれている。2013年にソウル市から移管され直接運営することになったソウル市創作空間の各施設は、すべて創作空間本部が管轄している。

各創作空間の運営は、それぞれ対象とするジャンル

が異なり、地域の特色もあるため、各施設の総括マネージャーをトップに自主裁量で独自運営されている。また、2013年からは施設間の連携、ソウル芸術文化財団の各種助成プログラムとの連携を通じて、シナジー効果を図る予定である。

「韓国社会の近年のキーワードは『統合』、『協力』、『交流』である。公共といえども、互いにミキシングされ、フュージョンされるシステムになっています」というのがキム氏の解説である。

(2) 事業収支

ソウル芸術文化財団の2012年の総予算は260億ウォン(約23億円)で、そのうちソウル市創作空間の予算は57.5億ウォン(約5億円)である。昨年まではソウル市からの委託事業として管理・運営を請け負っており、ソウル市創作空間の事業は予算規模も大きく、ソウル市の財政状況も厳しいので、今年は約30%が削減された。2013年はさらに45.9億ドル(約4億円)に削減される予定である。

創作空間の予算

(千ウォン)

施設名	2012年度	2013年度
チャムシル創作スタジオ	266,942 (2,300万円)	429,473 (3,800万円)
ソギョ芸術実験センター	522,937 (4,600万円)	385,790 (3,400万円)
シンダン創作アーケード	627,740 (5,500万円)	456,738 (4,000万円)
クンチョン芸術工場	1,114,482 (9,800万円)	809,793 (7,100万円)
ヨンヒ文学創作村	580,506 (5,100万円)	515,812 (4,500万円)
ソンブク芸術創作センター	708,916 (6,200万円)	514,999 (4,500万円)
クァンアク子ども創作遊び場	528,430 (4,600万円)	528,430 (4,600万円)
ムンレ芸術工場	722,740 (6,300万円)	468,578 (4,100万円)
ホンウン芸術創作センター	681,633 (6,000万円)	478,464 (4,200万円)
合 計	5,754,326 (5億600万円)	4,588,077 (4億300万円)

資料)「ソウル芸術文化財団2013年主要業務報告」より

また、2012年は施設移管の初年度のためソウル市から若干の予算がついたが、今後はソウル芸術文化財団の予算の範囲内で運営しなければならないという。

5. 事業評価の実施状況

ソウル市によるソウル市創作空間の事業評価は数値を中心に実施されている。毎年、各種項目のデータが記入された評価表をソウル市に提出している。ソウル芸術文化財団としては、創作空間ごとに特色があり、また開館年度も異なるため、現段階で評価を下すのは性急だと判断している。

評価には「無形」の評価と「有形」の評価があるが、「有形」は観客数、アーティスト数、展示回数など、数値での評価であり、「無形」は施設ができたことによって地域のコミュニティアートがどれほど活性化したか、市民がどれだけ参加したか、地域住民の文化芸術活動がどれほど増加したか、地域活性化の度合いなどでの評価している。このような評価は1年に1度外部機関を通して行われている。

ただしハン氏は、「実際には『有形』が『無形』を現してもいます。『有形』のデータを分析することで『無形』の評価が出てくるのではないのでしょうか。『有形』『無形』とお話をしましたが、実際には区別がないのかもしれない。例えば、地域が活性化したと『無形』の評価をした時、それを証明してくれるのは数値である『有形』の評価ですから」と付け加えた。

6. 現在の課題と今後の方向性

(1) 運営予算の確保

これまで100%ソウル市の予算で運営されていたソウル市創作空間の移管を受け入れたが、経済状況も悪く、レジデンス事業に収益を求めることが難しい状況で、今後どのようにして独自の予算を確保し、自立運営していくのが課題となっている。

ソウル芸術文化財団の事業全体で財源を調整して、創作空間の予算を確保するため、今まで無料で空間を提供していた芸術家合同組合やアートマーケットなどからも、若干の賃料を徴収したり、企業からの協賛金

も積極的に誘致しようとしている。また、財団は法的には収益をあげてはいけない機関となっているため、法改正も含め収益をあげて経済的自活のシステムを検討する予定である。

(2) アーティスト・イン・レジデンスの今後の方向

「私たちが創作空間に期待しているのは、既存の美術中心的なアーティスト・イン・レジデンスから脱して、私たちが抱える問題を、アートを通して共に解決できるのではないかという点です」と語るのは、創作空間本部部長のキム氏である。

例えば、「ソンブク芸術創作センター」は「芸術治療（ヒーリング）」をコンセプトにしており、滞在している演劇、美術、音楽、ダンス、写真などのアーティストが「芸術治療」をテーマに集まり、人々を治癒するプログラムに取り組んでいる。2012年の場合、施設側がプログラムを提供し、フランスの製薬会社の協賛で、乳がん患者を対象にした芸術教育を試み、大きな成果をあげた。乳がん患者にとって病はもちろん、心のケアも必要で、1年間の芸術教育プログラムを進めながら、大きな心の変化を見ることができたという。

今後このようなプログラムも含め、アートを通じた芸術治療関連の事業を積極的に推進していく予定である。

2. 創作空間事業団 衿川(クンチョン)芸術工場 |

Seoul Art Space_Geumcheon

面会日: 2013年1月23日(水) 17:00-18:30

面会者: KIM Hee-Young (Manager)

URL: http://www.seoulartspace.or.kr/G02_geumcheon/main.asp

1. 運営機関の概要

衿川(クンチョン)芸術工場は、ソウル市が掲げた文化と経済を連携させる「カルチャーノミクス」政策の一環で整備されたソウル市創作空間のひとつである。建物は、放置されていた印刷工場を改修したもので、2009年10月に開館した。

クンチョン芸術工場のある衿川(クンチョン)区はソウルで最も代表的な工業地域であり、経済開発5ヶ年計画に基づいて1965年から韓国で初めて建設された韓国産業団地公団(現ソウルデジタル産業団地)の第2、第3公団が立地している。また、この地域を先端高付加価値産業の集積地として育成していくため、衣類・毛皮などのファッションデザイン産業(2団地)と知識・情報通信産業専門団地(3団地)の開発が進められている。

クンチョン芸術工場が位置する禿山(トクサン)洞地域には、この他にも多くの小規模工場が立地しており、始興(シフン)洞には1987年に大規模に造成された始興産業用材流通センターと中央鉄材商店街もあって産業流通基地としての役割を担っている。

このような地域の特性を踏まえ、クンチョン芸術工場は「カルチャーノミクス」を実現する文化芸術空間として設立された。

(2) ミッション

クンチョン芸術工場は、アーティストに安定した創作空間と国際交流の機会を提供することを基本に、ソウルという国際都市におけるアートと産業の協働を指向している。「アーティストの支援・育成」、「市民文化の享受」、「都市再生」という3つ運営方針を掲げ、アーティストだけでなく、地域住民、1,100余りの製造業団地で働く勤労者とのコミュニケーションを試みながら、「都市を再生産する夢の工場」としての機能を追及している。

- アーティストの支援・育成: 国際交流プログラムを通して世界レベルの審美眼を有したアーティストを育成
- 市民文化の享受: 芸術工場の国際交流プログラムによって市民の暮らしとつながる芸術的提案を実現

- 都市再生: 文化的基盤の脆弱なクンチョン区の地元地域や都市空間におけるアートのモデルを提示

2. プログラム内容と実績

クンチョン芸術工場は、韓国のアーティスト・イン・レジデンスの歴史の中では第2世代に属している。2000年代に始まった第1世代のレジデンス事業が創作支援のための空間提供を主としていたのに対し、第2世代はさらに多くの社会的要求に対応しなければならなくなっている。公共性、教育機能、産業との連携など、アーティストも、レジデンス事業も、社会とともに歩む役割が期待されるようになってきた。それを先導しているのがクンチョン芸術工場である。

また韓国では、これまでアーティストは国家が保護しなければならない対象であったが、最近では徐々に状況が変化している。アーティストたちは創造的な集団であり、彼らは企業や学校などの他機関や組織とパートナーを組める存在であるということを、クンチョン芸術工場はアーティスト・イン・レジデンスを通じて提示しようとしている。

第1世代のレジデンス施設は空間を提供し、国が運営するレジデンス施設はスタジオと国際交流プログラムを提供するというのが、韓国のレジデンス事業のすべてだった。クンチョン芸術工場は1年に9つのプログラムを実施しており、プログラム中心のアーティスト・イン・レジデンスとしては韓国で初めての事例となっている。

(1) アーティスト・イン・レジデンスの概要

クンチョン芸術工場では、レジデンス事業として以下の3つのプログラムを実施している。

- 海外芸術家交換プログラム: 海外の主要都市(横浜、ニューヨーク、バルセロナ、メルボルン)のレジデンス機関と協力して交換プログラムを実施。アーティストはその年に選定されたプロジェクトに沿って、海外機関と協力して選出
- 国際共同プロジェクト: ソウルの都市問題などを対象にした国内外のアーティスト、キュレーターの作品や共同リサーチの展示を行う



- レジデンスプログラム: 毎年1回、スタジオに入居するアーティストを公募で選考

(2) アーティストの募集・選考方法、応募アーティストの条件

① 海外芸術家交換プログラム

- 募集方法: 推薦
- 選考方法: 海外レジデンス機関との協議

② 国際共同プロジェクト

- 募集方法: 推薦
- 選考方法: 国内外の機関との協議

③ レジデンスプログラム

- 募集方法: 公募
- 対象分野: ビジュアル・アーティスト(絵画、インスタレーション、ビデオ、写真を含む美術全般)、美術分野のキュレーター・批評家(学生は対象外)
- 選考方法:
 - 1次審査は書類審査
 - 2次審査はプレゼンテーション(海外居住のアーティストは免除)
- 選考基準: クンチョン芸術工場のミッションと運営方針に照らし合わせ、将来性、社会や地域に対する関心度、ジャンル間の協働の可能性などを重視して選考
- 滞在期間: 国内アーティスト1年、海外アーティスト3ヶ月、国内批評家・キュレーター6ヶ月、海外評論家・キュレーター3ヶ月
- 参加条件:
 - ー毎月15日以上スタジオを使用すること
 - ーオープン・スタジオ、コミュニティプロジェクト、芸術タレント・シェア・プログラム(教育プログラム)、プレゼンテーションなどへの協力
 - ークンチョン芸術工場もしくはアーティストの企画した地域プログラムへの参加
 - ースペース使用料(坪あたり5,000ウォン/約430円)を毎月支払うこと(海外からの入居者はスペース使用料・宿泊施設使用料は免除)

(3) 支援内容

① スタジオ提供

- 韓国アーティスト用: 10部屋
- 韓国キュレーター・批評家用: 1部屋
- 海外アーティスト用: 6部屋
- 海外キュレーター・批評家用: 1部屋

② その他の支援内容

- 韓国アーティスト: 海外アーティストとの交流プログラム
- 海外アーティスト: 往復航空券、スタジオ、宿泊施設の使用料免除
(以下は国内外アーティストに共通)
- クンチョン芸術工場のプログラムへの参加(展覧会、オープン・スタジオ、ワークショップ、プレゼンテーション、コミュニティ・プログラム、タレント・シェアのためのトレーニングプログラム、芸術家の提案事業など)
- クンチョン芸術工場での展覧会の部分的支援
- 国内外への広報支援
- メディアラボ、共同作業場、工具室、セミナールーム、キッチンなどの施設・設備の利用

(4) プログラムの実績・過去の滞在者

2009年から2012年までのレジデンス事業における滞在者数は次表のとおり。

年	人数(国内外別)	分野別人数
2009年	14名 (国内14/海外0)	演劇(2)、美術(7)、メディア(2)、写真(2)、芸術治療(1)
2010年	22名 (国内13/海外9)	美術(12)、メディア(4)、写真(2)、パフォーマンス(1)、企画・理論(3)
2011年	28名 (国内13/海外15)	美術(18)、メディア(6)、写真(1)、パフォーマンス(1)、企画・理論(2)
2012年	29名 (国内10/海外19)	美術(24)、メディア(2)、写真(3)



多目的ルーム。カタログ閲覧や展覧会情報などが掲示されている。

応募は3年目がピークだったが、現在はそのピーク時の応募者数を維持している。競争率は20倍。旺盛な活動を展開している30代の若いアーティスト対象としているので、応募者が大幅に増えることはない。

また、これまでに滞在した海外アーティストは次のとおりで、欧州、北米、日本を含むアジア、アフリカなど、幅広い地域から参加している。

- 2012年(19名) : Adam THOMPSON(イタリア)、David KAGAN(米国)、Douglas PAULSON(ドイツ)、Gabriel RICO(メキシコ)、James Rob SOUTHARD(米国)、Jan ALBERS(ドイツ)、Jan CHRISTENSEN(ノルウェー)、Jody WOOD(米国)、Laura MERGONI(フランス)、Les JOYNES(米国)、Linh NGUYEN(ベトナム)、Manuel GRAF(ドイツ)、Marie ANDREE(カナダ)、Miguel Angel DELGADO(スペイン)、Quentin CORNET(フランス)、Sonya & Sarah(カナダ)、Takashi HORISAKI(日本)、Timothy CITIZEN(英国)、Varvara & Mar(ドイツ)
- 2011年(15名) : Anja MARAIS(南アフリカ)、Abigail COLLINS(米国)、Alex Martinis ROE(オーストラリア)、Blikman & Dijkstra(オランダ)、Jason WAITE(英国)、Julien COIGNET(フランス)、Kazuya

TAKAGAWA(日本)、Kit REISCH(米国)、Kristin JUAREZ(米国)、MG Pringgtono(インドネシア)、Rai FUJII(日本)、Susan KANG(カナダ)、Tammy KIM(米国)、Valerie CROSSWHITE(米国)、Veronique & Attilio(イタリア)、Vicente & Usue(スペイン)

- 2010年(9名) : Jasmina & Luis(ドイツ)、Jeff SCHMUKI(米国)、Jeremy D. SLATER(米国)、Luigi COPPOLA(イタリア)、Natacha PAGANELI(フランス)、Patricia THOMA(ドイツ)、Saskia JANSSEN(オランダ)、SUPERFISHES(英国)

(4) その他のプログラム

クンチョン芸術工場では、レジデンス事業以外にも次のようなプログラムを実施している。

① 国際シンポジウム

国際的な潮流や論点を紹介し討論する知的交流の場として国際シンポジウムを開催。

② 芸術タレント・シェア・プログラム(教育プログラム)

入居アーティストによる中高校生、産業団地の勤労者を対象にした4〜5週間の長期ワークショップの他、「アーティストと1泊2日(アーティストの指導による作品制作と発表)」、「アーティストの部屋(アーティストのスタジオ訪問)」などを実施している。



「アーティストと1泊2日」は、ソウル市内の8つの高校と連携し、高校生30人と5名のアーティストが1泊2日でワークショップを行うものである。参加アーティストはレベルが高く、学生に与えるミッション(課題)もかなり高度だが、1泊2日でそれを遂行して展示・批評会まで行う。参加した学生たちは大学入試の面接時にこの経験を発表することで合格率が高くなるという。

③ コミュニティアート・プロジェクト

アーティストと住民の協働だけではなく、地域を素材にしたリサーチ、アーカイブ制作など、文化の基礎作りに寄与するプロジェクトを実施。

④ オープン・スタジオ

入居アーティストのスタジオを一般市民に公開。

⑤ ダビンチ・アイデア・コンテスト

これは、専門家ならびに一般市民を対象にデジタルメディア、ロボット、最先端映像、キネティックアート(動く芸術)など、テクノロジーを基盤とした産業化の可能性のあるアイデアを公募し、産業化支援、技術協力、製作費助成、完成品展示の機会を提供しようというものである。

アートと企業を連携させる取り組みは前例がなかったため、「ダビンチ・アイデア・コンテスト」は大きな注目を集めている。アートを通じて、産業化、ビジネス化が可能な作品の開発を目的としたものだ。実際に企業と共同で推進しており、アイデアの公募とともに「芸術の試み、アーティスト、企業、そして産業団地」というテーマでシンポジウムも開催された。

産業化が可能な作品のアイデアやプランをアーティストが提案し、クンチョン芸術工場が展示・プロモーションを行う。その過程で企業が参加し、エンジニアが開発に協力をしたり、産業展示会に出品してプロモーションを行ったり、アイデアに基づいた製作を支援するプログラムである。

(5) 産業や教育との連携について

産業や教育と連携したプログラムへの参加は、入居

アーティストの義務でない。クンチョン芸術工場としてアーティストの社会的役割を示すためのものであり、あくまでもアーティストの創作支援が基本となっている。

教育プログラムや企業関連プログラムを批判的に見たり、アーティストを利用していると考えたりする人がいないわけではない。参加を拒むアーティストもいるが、反対に作品創作のひとつの契機と考えるアーティストもいる。こうしたプログラムにまったく関心がなかったにもかかわらず、クンチョン芸術工場の環境やプログラムを通して方向性が変わったアーティストもいる。

多様な反応があって、心理的に少しストレスを感じるアーティストもいるようだが、義務とはしていない。

3. 施設の構成と内容

クンチョン芸術工場の建物は、地上3階、地下1階で倉庫が併設されており、建築面積は2,358㎡(714.45坪)、延べ床面積は3,070㎡。施設の内容は下表のとおりである。

施設一覧

区 分	規 模	室 数
スタジオ	49.587㎡	8部屋
	23.1406㎡	3部屋
	16.529㎡	8部屋
ホステル	13.2232㎡	4部屋
	19.8348㎡	1部屋
共同作業場	277.6872㎡	1部屋
台所	33.058㎡	1部屋
多目的ルーム	99.174㎡	1部屋
	66.116㎡	1部屋
	33.058㎡	1部屋



アーティスト、イ・チャンフン氏のスタジオ内。

4. 運営体制と事業収支

(1) 運営組織

クンチョン芸術工場は、ソウル芸術文化財団「創作空間本部」に属する職員11名で運営されている。内訳は、統括マネージャー(1名)、総務・企画(6名)、施設管理スタッフ(4名)である。

職員の大部分は、美術史、美術実技、アートマネジメントを専攻した人材。総括マネージャーのキム・ヒョン(KIM Hee-Young)は、ビエンナーレのキュレーターとして仕事をしてきた経歴がある。

(2) パートナースhip

横浜、ニューヨーク、バルセロナ、メルボルンのアーティスト・イン・レジデンス機関と協力し、交換事業を実施している。また海外機関の協力を得てアーティストを選考し、国際共同プログラムも実施している。

昨年までの毎年、横浜の「BankART1929」とアーティスト交換事業を行っていた。毎年開催している国際シンポジウムでは、2010年に北川フラム氏を、2011年には猪子寿之氏を招待している。北川氏との出会いが契機となり、2013年からは瀬戸内国際芸術祭と交流事業を行うことになった。

その他、ソウル市が2年ごとに「メディアアート・ビエンナーレ」を開催しており、昨年は日本を代表するメディアアーティストが大勢参加し、クンチョン芸術工場の宿泊施設に滞在した。

(3) 事業収支

2012年の年間予算は約11億ウォン(約9,700万円)。2013年はソウル市の文化予算の削減とソウル芸術文化財団による直営化のため約8億ウォン(約7,100万円)に削減されている。この予算には、人件費、施設管理費、事業がすべて含まれており、事業費の割合は40%余りである。

5. 現在の課題と今後の方向性

韓国では国の予算をはじめ、文化芸術助成の予算が削減され始めている。そのため、公共施設も今後は

外部からの運営財源を確保していかなければならないという。外部資金を確保しやすいのは、教育関連プログラムだが、「アーティストの創作活動を考えると、教育関連事業に動員されるのはあまりいい状況とは思っていません。予算の縮小に合わせて事業を消極的に展開していくのか、あるいはアーティストに負担をかけても予算確保が可能な教育プログラムを開発していくのか。この点が大きな課題です」と、キム氏は言う。ただ彼女は、「どちらにしても予算があれば施設が成長するのは間違いありません。クンチョン芸術工場は事業を拡大しても、縮小するものではありません」と考えている。

滞在アーティストの事後フォローやサポートは最も大きな弱点だ。韓国の多くのレジデンス施設はこれらの対応ができていない。2013年からこの点を改善しようと検討中である。アーティストはここで製作した作品を海外で展示したりもしているが、そのようなアーティストたちを集めたグループ展の開催を計画中である。

滞在アーティストへのインタビュー

面会者:イ・チャンフン(LEE Chang-Hoon、第4期滞在アーティスト)

1. 略歴、活動実績

韓国で大学と大学院を終えた後、9年ほどドイツに留学し、ドイツでも大学と大学院を卒業。帰国後、アーティストとして活動中で、ひとつの素材だけではなく写真、映像、インスタレーションなど多様な素材を使ったミックスメディアを追求している。

2. アーティスト・イン・レジデンスに参加した動機

アーティスト・イン・レジデンスへの参加はクンチョンが3ヶ所目。ソウル市立美術館が運営する創作スタジオ、京畿道(キョンギドウ)美術館が運営するGCC(京畿創作スタジオ)のレジデンスにも参加したことがある。

ドイツ滞在中もシュトゥットガルトのレジデンスに招待という形で短期参加したことがあるが、学生だったため本格的なレジデンスプログラムには参加できなかった。

アーティスト・イン・レジデンスに参加した動機のひとつは、長い間海外にいたので国内ネットワークもなく、

帰国後、できるだけ短期間で自分の存在をアピールする必要があったため。レジデンスでは自ら積極的にアピールしなくても、外部の人々がレジデンス施設を通じてアーティストに興味を持ってくれたり、研究対象としてくれることも多い。

もうひとつの理由は、自宅のあるソウルは地価が高くスタジオを持つのが大変で、レジデンス施設を利用すれば無料で空間を確保できるから。

アーティストの立場としては、世界的にも有名なレジデンス施設があり、自身の経歴につながるという側面もある。それが主目的ではないが、そうした利点もあると思う。

また経験してわかったのは、個人では解決できない問題、特に大きなプロジェクトを推進するのはひとりでは大変だが、レジデンス施設の多くは公的機関なので問題解決などのサポートを受けられるということ。最近はこの点もアーティスト・イン・レジデンスに参加する理由になっている。

クンチョン芸術工場に滞在している海外のアーティストは、クンチョンという地域に関心があるというより、韓国という異文化・異空間に関心を持って来ているのではないかと思う。キョンギ創作スタジオの場合は島の独自性に関心を持って来ている人が多かったようだ。

3. 創作活動の支援、レジデンスの経験

現実的な支援としては、空間提供も含めた経済的なサポートが最も大きい。若いアーティストはこうしたサポートがあるからこそ、創作活動を続けていけると思う。

ソウル市立美術館の場合は年齢制限があり、若手を対象にしている、実に多様なジャンルのアーティストが集まり、作品も実験的な面があった。

キョンギ創作スタジオの場合、今は橋でつながっているが、島の施設で文化の疎外地域だったため、アーティストが学校訪問をしてワークショップを行ったり、「才能寄付」ということで島の文化商品を一緒に開発したり、地域住民との交流、地域の文化、教育などを重視していた。海外アーティストも含め、多様なアーティストが参加していた。

クンチョン芸術工場の場合は、ソウル芸術文化財団

が運営しているため規模も大きい。キョンギ創作スタジオ同様、地域との連携という部分があるが、公務員の文化セミナーの講師を務めたり、地域の特色を活かした作品づくりをしたり、もっと大きな地域とのかかわりが特長だと思う。

ここには国内外の多様なジャンルのアーティストが入居・滞在しているが、自分がいる場所や環境に関心を持って作品づくりをするアーティストたちが集まっていると感じる。自国にしようと、海外にしようと、自分の作品世界にだけ向き合うならレジデンスに参加する必要性はあまりないし、面白くないと思う。ここに参加しているアーティストはもっと積極的に自分がいる場所や環境に関わろうという意思を持つ人たちだと思う。

私に関心を持っているのは自分が属する社会と自分の関係。それが作品づくりの核になっているので、作品には自分を取り巻く地域や環境が大きく反映される。コミュニティアートを志向しているわけではないが、どちらにしても自分を取り巻く地域や環境に関心がある。

4. 日本のアーティスト・イン・レジデンスについて

個人的には、静かなところよりは中心地に行ってみたい。今の日本のアートシーンにアクセスしやすい所、日本の文化を経験できる所だったら参加してみたいと思う。レジデンスプログラムは自身の作品づくりも大切だが、「見る」ことも大切。参加できるなら、多くのものが見られることを希望したい。

3. 創作空間事業団 文來(ムンレ)芸術工場 |

Seoul Art Space_Mullae

面会日: 2013年1月24日(木) 13:00-15:00

面会者: SUH Myung-Gu (Manager)

URL: http://www.seoulartspace.or.kr/G05_mullae/main.asp

1. 運営機関の概要

(1) 設立趣旨・経緯

文來(ムンレ)芸術工場は、ソウル市が掲げた文化と経済を連携させた「カルチャーノミクス」政策の一環として整備されたソウル市創作空間のひとつである。創作空間の中では唯一新たに建物が建設され、2010年1月に開館した。

ムンレ芸術工場がある永登浦(ヨンドンポ)区文來(ムンレ)洞は、鉄工所や資材販売店などが密集する工業地域だ。1970年代、朴正熙(パク・チョンヒ)大統領時代の高度成長期に形成され、多い時には800余りもの中小規模の工場や大手鉄鋼会社の加工所などが操業していた。80年代までは「韓国の鉄材は文來洞を通る」といわれるほど一帯は国内有数の鉄鋼産業地帯として名を馳せ、栄えていた。しかし、90年代以降の産業構造の転換と人件費の安い海外の生産工場の影響を受け、町は衰退していった。

現在は都市再開発によって大型マンションやオフィスビルが立地し始めてはいるが、まだ再開発から取り残された工場街が残るなど、過去と現在が混在する地域でもある。一帯の古い建物は、今も鉄工所や資材販売店が入居して営業しているが、2階や3階、地下の事務所や店舗は老朽化して空き家になっている。建物のオーナーがそうしたスペースを安く賃貸し始め、2007年頃からアーティストたちが集まるようになって、スタジオとして活用している。

ソウルには、演劇なら大学路(テハンノ)、美術なら弘大(ホンデ)と、アーティストたちが集まるエリアがある。しかし、これらの地域には商業施設が立ち並び、地価が高騰し、稽古場やスタジオを構えて活動していたアーティストたち、より家賃の安いムンレ地区に移ってきた。

現在、舞台芸術では演劇、ダンス、パフォーマンス、美術では絵画はもちろんメディアアート、映像、さらにプロデューサーやキュレーター、文化政策研究者など200人余りがここを活動拠点にしている。小規模な劇場やギャラリーなどのオルタナティブスペースも含め、多様な人材で「ムンレ芸術村」が形成され、自主運営され

ている。

国や自治体の誘導ではなく、自然発生的に生まれた文化芸術の生態系的な存在である。3年前、ソウル芸術文化財団がソウル市から創作空間事業を委託された際、彼らをサポートする施設が有用だろうという考え方に基づいて、ムンレ芸術工場は開設された。

(2) ミッション

「ムンレ芸術村」をはじめとする国内外のアーティストの創作支援、文化芸術を通じて都市再生に寄与すること。また、「若い有能なアーティストのインキュベーター、芸術の創造と交流の新しい流れを切り開くグローバルなアートスペース」というビジョンを掲げ、次のような戦略に基づいた事業を行っている。

- 第2世代のアートスペースとして新たな役割と方向性を提示
- 舞台芸術、美術などの将来性のあるアーティストを育成(インキュベーター)
- ムンレ芸術工場のアーティストを支援する文化的なインフラの形成
- 国内外のアーティストの交流拠点づくり
- 芸術と市民の交わりを通して、地域の文化的な活力の創出に寄与

(3) ムンレ芸術工場の基本的性格

同じ創作空間でも、クンチョン芸術工場と違って、ムンレ芸術工場では、個人アーティストに対するスタジオの提供は行っていない。大型プロジェクトや共同プロジェクト、稽古など、アーティストが共同で使用できる空間と設備を運営し、個々の様々なプロジェクトを支援する施設となっている。

同時に、周辺のアーティストたちと共同でオープン・スタジオやフェスティバルを行うなど、アートコミュニティの一部としても機能している。ムンレ芸術工場の事業は、オルタナティブな空間を運営する人たちが集まって結成された「ムンレ・オルタナティブ・ネットワーク」が中心になって運営されている。また、最近では工場労働者、中小企業の経営者、地域住民とのコミュニケーションプログラムが増えている。そうしたコミュニティ活動を支援するのもムンレ芸術工場の目的である。

文來(ムンレ)芸術工場の周囲には鉄工所や資材販売店が立ち並び、老朽化し、空き事務所となったスペースに、オルタナティブスペースやスタジオが入居している。



海外アーティストや地方のアーティストがプロジェクトをおこなうために短期間宿泊できる施設として9部屋のゲストルームがある。しかし、大型プロジェクトや共同プロジェクト、演劇やダンスの稽古・発表に使える空間はあっても、個人が創作活動を行うスペースは用意されていない。例えば、日本のアーティストが文來のアーティストと共同プロジェクトを行うといった場合に、この施設や設備を利用することは可能で、いわば、共同の作業場的な施設となっている。

韓国のレジデンスは公共であろうと民間であろうと、クンチョン芸術工場のように美術を対象に個人スタジオを提供するのが大半である。「ムンレ芸術工場のこうしたコンセプトは独自のもので、国内でも唯一といえます。レジデンス事業の新しいあり方を作っているといえますし、新しい事例として視察に訪れる人も多いです」とマネージャーのソ・ミョング(SUH Myung-Gu)は言う。

ジャンルも美術や純粋芸術というより、舞台芸術をベースにした実験的でクロスオーバー的な活動、学術的な活動、人文学的な活動までもが対象となっている。こうしたことから、ムンレ芸術工場は、韓国の芸術界ではまったく新しい芸術活動のインキュベーター的な拠点として注目されている。

2. プログラム内容と実績

(1) アーティスト・イン・レジデンス関連の事業

① ゲストルームの運営

アーティストのスタジオが密集しているムンレ芸術村を支援するために設立されたため、滞在型のアーティスト・イン・レジデンスは実施していない。

ただし、9部屋のゲストルーム(1泊5,000ウォン/430円)を運用している。これは海外や国内(地方)のアーティストがプロジェクトを実施するために短期間宿泊できる施設だ。例えば、韓国と日本のアーティストが共同でプロジェクトを実施する場合、ムンレ芸術工場の事業でなくても、申請をすれば一定期間ゲストルームや施設を使用できる。

② 募集方法、条件

ゲストルームの利用は年2回公募しており、韓国のア

ーティストとの交流・共同プロジェクトという形で申請を受け付けている。これは必ずしも条件ではないが、個人の創造活動のための使用はムンレ芸術工場のコンセプトや予算とは相容れないので、韓国アーティストとの交流・共同プロジェクトを優先している。

プロジェクトのベースキャンプとして使用されるべき施設が、単なる宿泊施設のように利用されないよう、このような制限が設けられている。ただし、部屋が空いていれば随時受け付ける仕組みとなっている。これはゲストルームだけではなく、音響室や映像編集室など他の施設も同様である。

③ 宿泊施設の滞在者

宿泊施設の利用は欧州、特にフランスが多く、次いでドイツ。日本、東南アジア、オーストラリア、米国など各国のアーティストも利用し、昨年は100人以上が滞在した。

(2) ムンレ芸術工場のプログラム

ムンレ芸術工場のプログラムは、周辺に拠点を持つアーティストを支援し、地域コミュニティの活動を支えることに加え、新しい芸術表現や実験的な試みをインキュベートすることも大きな目的となっている。

またプログラムは、演劇、ダンス、美術、音楽など、既存のカテゴリーに属さない、ジャンルを越えたクロスオーバー的な新しい創造活動である横断的な芸術表現をメインジャンルに、大きく3つに分けられる。①横断的な芸術表現を中心に、若く将来性のあるアーティストを育成するインキュベーター事業、②地域住民や労働者とアーティストのコミュニティ事業、③海外交流プログラムである。毎年これらを具現化するプログラムを、約8事業実施している。

プログラムは次の4種類で、基本的にムンレ芸術工場が方針を出して運営しているが、2013年からはムンレ芸術村のアーティストと企画者、そして地域住民で構成された「ムンレ芸術工場運営委員会」が組織され、地域のアーティストや住民が直接運営に参加してもらう体制になった。



カフェ兼コミュニティ・スペース。スペース内では、未来周辺のアーティストのアーカイブが閲覧できる。

① 創造空間の提供

有望なアーティストやムンレ芸術村のアーティストの作品の創造や公開を支援するため、多様なスペースや設備を提供する事業。特に、アーティストや企画・制作者と市民との双方向のコミュニケーションや交流、企画・制作などに基づいた協働を促す文化事業に対して積極的な施設提供が行われてきた。

② アーティスト支援プロジェクト

MAP (Mullae Art Plus)

制作費やスペース、設備に加え、メンタリングや批評、さらには創造的なアイデアを形にするネットワークを提供し、芸術的な創造活動をインキュベートするシステム。支援は言葉を使わない身体芸術、音楽、サイトスペシフィックな作品などの分野で活躍するアーティストを対象としている。

③ ムンレ芸術村周辺の文化活動の支援

MEET (Mullae, Emerging & EnergeTic)

自然発生的に形成されたアーティスト・コミュニティであるムンレ芸術村において、アーティストや企画者の芸術的な能力を高め、彼らの文化交流を促進するためにデザインされたプログラム。地域が共有する文化の活性化に寄与し、地域住民とのコミュニケーションを促進

することを目指している。

この事業の枠組みで、2011年には8つのプロジェクトが実施されたが、そのうちのひとつは、写真と映像のアーティストが鉄工所で働く人々とワークショップを実施するというものだった。文来は路地ごとに昔の姿や韓国のダイナミックな産業の歴史が残る特殊な地域だが、それらをアーティストが見る視点、働く人々が見る視点、住民が見る視点はそれぞれ異なっている。参加者は写真や映像の基礎を学んだ後、その違いを話し合いながら、ひとりひとりがアーティストとしてこの地域を表現する作品を作り、展示を行った。

2012年秋にはこのプロジェクトをさらに拡大して、総勢60人にもものぼるアーティスト、労働者、住民が参加して、6ヶ月間ワークショップを行い、ムンレをテーマにした作品作りと展示が行われた。展示期間中は、路地のあちこちで小さなイベントを行ったり、通常は休業する日曜日に鉄工所の工場を開けて臨時ギャラリーにしたりして、約1ヶ月間のフェスティバルを開催した。鉄工所で働く人や住民はアーティストに対して若干の警戒心を抱いていたが、このプロジェクトを通して交流が生まれ、お互いを理解する契機になった。

「お酒も飲んで近くなりましたね。『ムンレ芸術工

左:映像編集室
右:録音室



場運営委員会』には、アーティストだけでなく、住民と鉄工所の経営者も参加していて、互いに話し合いをしてプロジェクトを進めています」とソ氏は言う。

プロジェクトはムンレ芸術工場から提案されることもあれば、アーティストから提案されることもあるが、重要なのは、提案を話し合って共同で作っていくということ。そのため、懇談会など常に話し合いの場が持たれ、出てきたアイデアが面白ければ企画会議が開かれてプロジェクトとして推進される。そうした話し合いの場をシステム化したのが「ムンレ芸術工場運営委員会」だ。

④ 国際交流プログラム

ムンレ地区の有能なアーティストと海外のアーティストの協働プロジェクトのために用意されたプログラム。海外の芸術機関や団体との文化的交流に基づいて、ムンレ芸術工場が国際的な創造交流のプラットフォームとなることを目指している。ムンレ芸術工場のゲストルームに滞在する海外のアーティストとの協働作業も含まれている。

具体的には次の3種類の事業が行われている。

- オーストラリアのREM Theaterと交流協定を結び、毎年それぞれフィジカルシアターのアーティスト2名を選んでチームを組み、韓国とオーストラリアで発表する共同創作ワークショップを実施。
- シンガポールのサブステーション (Substation) と交流協定を結び、毎年それぞれ美術のアーティスト2名を選んで共同創作ワークショップを実施。美術でも、場所や空間の特徴を活かすサイトスペシフィックなアートプロジェクトに限定されている。
- 「国際サウンドアート創作ワークショップ」を毎年開催。欧州、米国を含め国内外のサウンドアーティストが集まり交流する場を提供し、他ジャンルのアーティストも参加できる講座やワークショップを実施して、最終的にパフォーマンスや展示として発表している。

これらはムンレ芸術工場の企画プロジェクトで、参加者は公募で選考される。個人の参加も可能で、どのプログラムも一定期間、公募が行われる。

この他、個人主導の国際交流プロジェクトに対する

支援もある。韓国と日本のアーティストが共同プロジェクトを行う場合、申請をすれば一定期間、ゲストルームや各スペース、設備を使用できるようになっている。

サウンドアートやクロスオーバーアートの分野や横浜との交流など、国際交流については、ソウル芸術文化財団の国際交流助成プログラムから助成金を調達しても拡大したい、とソ氏は言う。

3. 施設の構成と内容

ムンレ芸術工場の建物は、地上4階、地下1階、延べ面積は2,832.40㎡(858.30坪)で、下表の施設によって構成されている。

施設一覧

施設名	面積	室数
スタジオM30(製作・展示)	300.96㎡(91.20坪)	1
ボックスシアター (稽古・劇場)	263.34㎡(79.80坪)	1
ポケットギャラリー	75.24㎡(22.80坪)	1
録音室	74.67㎡(22.63坪)	1
映像編集室	9.60㎡(2.91坪)	1
カフェ(コミュニティスペース・アーカイブ)	125.4㎡(37.93坪)	1
ホステル	18.81㎡(5.70坪)	9
セミナー室	25.00㎡(7.58坪)	1

ボックスシアターの稼働率はほぼ100%、ゲストルームはオフシーズンの冬場は活動が少なく空室のこともあり、施設全体でみると稼働率は80-90%である。

スケジュール調整は極めて大変で、施設管理だけを担当するスタッフを置いている。プロジェクトごとにスケジュールも使いたい空間も異なり、空間を最大限に有効活用するには、内部調整が必要なためである。あるチームに1日の譲歩を依頼して、他のチームを受け入れるなど、きめ細かな調整が行われている。

4. 運営体制と事業収支

(1) 運営組織

ムンレ芸術工場はソウル芸術文化財団「創作空間本



左:ボックスシアターのエントランス。
右:訪問日には、劇団の稽古が行われていた。本物の羊が俳優とともに劇中に登場するユニークな試み。

部」に属する職員5名で運営されている(昨年までは6名)。内訳は、総括マネージャー(1名)、地域プロジェクト担当(1名)、創作プロジェクト担当(1名)、施設関連(1名)、予算や会計管理の総務(1名)である。施設と総務の職員は各プロジェクトの補助も行う。

職員は、アートマネジメント専攻者、社会学を学んで一般の会社に勤めてから勤務など、多様な人材で構成されているが、大半はアートマネジメント、美術史、キュレーターなど芸術文化関係を専攻した人材。マネージャーのソ氏は特異な経歴の持ち主で、経営学を専攻した後、芸術分野の仕事を希望し、公演やフェスティバルの企画、文化空間の運営、自治体の文化プログラム研究、国際交流事業などに携わっていた。

この点に関連してソ氏の次の発言が印象に残っている。「文化芸術界は多様なジャンルの人材が必要です。文化芸術を専攻した人だけが集まり、その中に閉じこもっているのは、なかなか突破口は見出せません」。

前述の通り、ムンレ芸術工場はムンレ芸術村などのアーティストと共同でプロジェクトを実施しているため、民間ガバナンスともいえる「文来芸術工場運営委員会」を結成し、アーティストや企画者が直接、運営に参加してもらう体制になっている。

(2) パートナリシップ

国際交流事業の一環として、オーストラリア「REM Theater」やシンガポールの「サブステーション」とは交流協定を締結しているのは既に述べたとおりであるが、レズ・アルティス(Res Artis)のような国際ネットワークに参加はしていない。レズ・アルティスは、一定期間滞在する美術系のレジデンスが中心で、ムンレ芸術工場には該当しない点が多い。

① 韓国国内のネットワーク

ソウルはもちろん地方でもネットワークに関するシンポジウム、セミナーが毎年開催されるなど、国内ネットワークを形成しようという動きがあるが、実質的なネットワークの形成には至っていない。「ネットワークを作ろう」と声高に言っても、まだお互いに警戒しているような状況だという。多くのレジデンスは自身のカラーを明確に持てずにいる。それができれば、ネットワークを形成

して互いのカラーを活かした協力ができるが、似たような組織だと、交流よりも競争となる可能性もある。

シンポジウムやセミナーのように話し合いをするだけでは交流や共同プロジェクトは立ち上がらない。実質的な事業を通して向き合わなければ、互いに理解し、コミュニケーションし、次回を約束することはできない。韓国ではまだ事業を通しての出会いがないのが現状。ネットワークを形成するにはもう少し時間が必要だろう。

② 東北アジアのネットワーク、日本との共同

今後、国際ネットワークに参加していく意思はある。韓国の文化体育観光部の傘下の韓国芸術経営支援センターという機関が海外とのネットワーク作りをサポートしている。そこを通じて米国の創造空間と交流事業を行ったことがある。しかし重要なのはムンレ芸術工場と似た機能をもつ機関とネットワークを形成すること。米国や欧州を指向しなくても、特に東北アジアにおいて類似機能をもつレジデンス施設や創作空間とネットワークを形成していく必要性を感じている。現在はどこもそうしたネットワークを主導していない。

プロデューサーなど個人的なネットワークで動いている人はいるが、公的機関として動いているところはない。日本と韓国が共同でアジアのレジデンスの公的なネットワークの協議会を形成していくという提案はどうだろうか。日本と韓国が動き出せば、香港、シンガポール、台湾、マカオなども参加するはずだ。アジアの舞台芸術の流通ネットワークはアートマーケットなどを通じてシンガポールが主導している。しかし、基礎的な創造基盤、インキュベーション事業を土台としたネットワークは個別の動きはあっても、求心点がないのが現状。

「私自身はまだ日本との交流事業を行ったことがありませんが、韓国には日本との交流事業や共同創作活動事業を積極的に推進するプロデューサーたちがいますし、日本にも優秀なカウンターパートナーたちがいると聞いています。こういった人たちの活動をサポートして韓国と日本で求心点を形成していくのはどうかと思います。ソウル芸術文化財団は9つの創作空間が個々にネットワークに参加するのではなく、ひとつの団体として参加するのがいいと思います。日本が主導的にソウル芸術文化財団と協議してこのようなネットワーク作

りを提案くださればと願います」とソ氏は語る。

(3) 年間予算と財源

2012年の予算は約8億ウォン(約6,900万円)、のうち3億ウォン(約2,600万円)強が人件費で、残り5億ウォン(約4,300万円)が施設運営管理費と事業費。この他、ソウル芸術文化財団の既存の助成金プログラムを利用し、約2億5,000万ウォン(約2,200万円)を事業費に充当している。

2013年の予算は約5億ウォン(約4,300万円)に削減されたが、ソウル芸術文化財団の有望芸術育成事業の助成金の一部を、ムンレ芸術工場のプログラムに充当し、将来性のあるアーティストを積極的に育成していくことが決まっている。この他、地域住民とアーティストが協力して行うコミュニティアート事業への助成、教育チームの事業予算など、ソウル芸術文化財団の既存の助成プログラムや各部署の事業費とマッチングさせ、約2億5,000万ウォン(約2,200万円)の事業費を確保する予定である。

(4) ソウル芸術文化財団の助成プログラム等との連携

費用負担はプロジェクトごとに異なっている。アーティストが自己資金を投入することもあれば、協賛金など外部資金を得てムンレ芸術工場の予算と合わせたり、100%ムンレ芸術工場の予算で進めることもある。ムンレ芸術工場の予算は限られているため、アーティストがソウル芸術文化財団の助成金プログラムに申請して、その助成金を共同で運用することもある。

2012年、ソウル芸術文化財団の助成プログラムのひとつとしてアーティストと住民が協力しておこなうコミュニティアートを対象としたものが新しく増設され、その一部をムンレ芸術工場にまわしてもらえることになった。また、毎週土曜日に行う地域の青少年を対象とした芸術教育プログラムでも、ソウル芸術文化財団の教育チームの事業予算をまわしてもらうなど、多くのプログラムではソウル芸術文化財団の予算が活用されている。

5. 事業評価の実施状況

創作空間は昨年までソウル市からソウル芸術文化財

団に委託して運営されていたが、ソウル市は文化事業担当者も公務員で異動があるため、評価も実績主義で基準表のようなものがあり、数字で評価されていた。何人のアーティストが参加したか、市民はどれほど恩恵を受けたか、プログラムをいくつ実施したかなど、数値的な資料の要求が多く、作成に苦労していた。

2013年からソウル芸術文化財団の直営となり、このような数的評価を求められることは少なくなった。数的評価がまったくないわけではないが、それよりも質的なものを重要視している。これはソウル市からソウル芸術文化財団に移管されて改善された点のひとつである。

経営学を専攻したソ氏は、経営的視点から自分たちの事業を見ることがあり、評価システムを改善するポイント次のように指摘する。「市など、文化とはまったく異なる大きな組織が予算の権限や執行権を持っていると、評価は、どうしても量的・数値的なものになりがちです。予算は市が立てたとしても、予算執行や評価などは公的な文化芸術専門機関へと移管させる必要があります。そうすれば評価を量的なものから質的なものへと変えることができます」と。

また、事業の評価基準を見直し、新たに策定する必要もある。例えば市民フェスティバルを開催した場合は市民の参加人数も重要な指標だが、プロジェクトの場合、人数は指標とはなり得ない。共通の評価基準はありながらも、事業ごとに事業に合った特化された評価基準をそれぞれ策定し直すことが今後の課題である。

6. 現在の課題と今後の方向性

(1) 予算の確保

予算はソウル芸術文化財団から出ているが、ムンレ芸術工場の目標を達成するためにはこの事業費だけでは不十分だ。ソウル芸術文化財団の既存の助成金プログラムを活用して事業費を確保はしているが、経済的な安定が課題となっている。

ムンレ芸術工場の事業は、ムンレ芸術村など地域と連携するプロジェクトと、アーティストの新たな試みや作品創造を支援する事業の二つが柱となっており、後者はプロジェクトごとにソウル芸術文化財団の既存の助

成プログラムに申請して助成金を活用していた。今年からは、ムンレ芸術工場の事業費の大部分は前者のコミュニティアートを支える事業に回し、後者については、ソウル芸術文化財団と協議を行った結果、財団が全面的に支援してもらえることになった。

その仕組みを活用して、柱となる2つのプログラムをさらに活性化させたいと思うが、今後も安定した財源を確保していく必要がある。

(2) アーティストの創造活動の支援

ムンレ芸術工場が実施するプログラムはあくまでも過程であって、完成品を求めるものではない。創造活動の過程をサポートし、支援するというのが基本方針である。

「韓国では、アーティストが助成金申請をし、審査が通れば助成金をもらって事業をおこない、結果・決算報告をおこなうのが一般的な流れです。ムンレ芸術工場で活動しているような若い将来性のあるアーティストにはこのようなシステムは妥当ではありません。実際に私たちがプロデューサーの役割をしてインキュベーションしてこそ、若い人材は育ちます」とソ氏は言う。予算、空間、そして必要な設備や機材などの物質的なサポートも必要だが、それだけではなく、メンタル面の支援、結果に対する批評、ネットワーク、プロモーションなど、立体的なサポートシステムが求められている。

オープン時からそのような支援システムを独自に開発して試みてきた結果、それが評価され、2013年からソウル芸術文化財団が行っている将来性のあるアーティストに対する助成金の一部、ジャンルでいえば多元芸術(クロスオーバーアート)、音楽、伝統音楽を基盤とした作品に対する助成金は、全面的にムンレ芸術工場に投資してその運営も任せられることになった。

同じ助成金のうちダンスはホンウン芸術創作センターが、美術はソギョ芸術実験センターが任され、今後は各創造空間が実質的に運用し、将来性のあるアーティストを育成していくことが決まっている。

これは、ムンレ芸術工場からソウル芸術文化財団に対する提案を行い、財団の事業改善の検討を行う全体会議で決まったものである。ムンレ芸術工場が実施

してきた若手アーティストの育成プログラムの成果が評価され、現場の声が反映された結果である。

「韓国もすべての助成金制度がこのように運用されているわけではありません。もちろん現場との齟齬もあります。助成金制度全体を変えることはできなくとも、将来性のあるアーティスト育成に対する助成制度という、ある一部だけでも変えることは可能です。一部でも改革が成功すれば、他にも波及していくはずです。現在も予算執行の権限はソウル芸術文化財団の関連部署で、運用だけが私たちに任されている状況です。今年成功すれば、来年は予算執行の権限まで任されるのではないかと期待していますし、提案しようと思っています」と、ソ氏は将来の展望を語ってくれた。

4. 仁川アートプラットフォーム | Incheon Art Platform

面会日：2013年1月22日（水）14:00-17:00

面会者：OH Hye-Mi (Curator)

URL: <http://www.inartplatform.kr/>

1. 運営機関の概要

(1) 設立趣旨・経緯

① 仁川アートプラットフォームの設立経緯

仁川（インチョン）アートプラットフォームは、仁川広域市が旧市街の再生事業の一環として中（チュン）区海岸（ヘアン）洞にあった開港期の建築物を購入、改修して整備された。アーティスト・イン・レジデンスを中心に、公演や展示、教育を行う複合文化施設で、開館は2009年、運営は財団法人仁川文化財団である。

レジデンス事業では、美術をはじめ多様なジャンルのアーティストや研究者が創作や研究活動に専念できるよう支援を行っている。他にも、展示や公演など多様な自主企画事業を行い、地元アーティストと国内外のアーティストとの協働を推進している。

仁川や京畿道（キョンギドウ）には芸術家が多い。近郊で稽古場やスタジオなどを構えて活動していた仁川在住の美術、演劇、舞踊などのアーティストたちが、各協会を通じて要望をまとめ、レジデンス施設の必要性を市に提言。市がそれを受け入れて、仁川アートプラットフォームが整備された。仁川文化財団もアーティストの要請によって発足したものだ。

このような経緯はあるが、地元アーティストだけではなく、国内外の多様なアーティストが入居・滞在している。また、仁川は韓国第3の都市でありながら市立美術館がないため、コレクションはないものの展示機能を持つ美術館としての役割も果たしている。

② 韓国におけるアーティスト・イン・レジデンスの状況

韓国では1990年から道（日本の県に近い行政区分）や市などの自治体が美術館を設置しはじめ、事業の一環としてアーティスト・イン・レジデンスが導入されるようになった。

また、2000年以降、流行のように各地の自治体がレジデンス事業を立ち上げた。使われなくなった施設や建物を改修し、空間をアーティストに提供するようになったが、やがてどこも同じような内容の事業になり、個性なくほぼ同じスタイルで運営されている。

それに対し、仁川アートプラットフォームは自治体主

導ではなく、地元アーティストの要望によって誕生したという点で、韓国の中でも特異な事例だと言える。

最近では、韓国の有名アーティストが、経歴を積むためにレジデンス施設を渡り歩くようになってもいる。レジデンス施設が飽和状態になり、3-4年前から各機関・施設は「もっと深みのあるレジデンスプログラムとは何か」「個々の施設の特徴をどのようにプログラムに反映するのか」などの課題を検討するようになった。

2009年にオープンした仁川アートプラットフォームは、同時期にオープンした京畿創作スタジオ同様、レジデンスの後発組ともいえる。それだけにレジデンスに関して深く考え、施設と地域の特徴をいかしたプログラムを展開している。

(2) ミッション

仁川アートプラットフォームのミッションは次のとおり。

① 新しい芸術制作の発信地

- 多様な芸術ジャンルの創作環境ならびにプログラムの支援
- 海外アーティストのプロモーション、新人アーティストの発掘

② 国際ネットワーク形成のプラットフォーム

- 国内外のアーティスト間のネットワーク形成、創造的な芸術交流の推進
- 海外の関連機関との文化芸術交流の推進、国際協力関係の構築

③ はつらつとした市民とともに

- 自主プログラムを強化することでオルタナティブな文化空間を構築
- 市民を対象とした文化芸術教育プログラムの強化ならびに文化媒介者の育成

④ 地域文化育成の中核

- 仁川の都市的特性を踏まえた自主事業の企画・実施
- 文化芸術の創作活動を通じた旧市街の再活性化への寄与



仁川アートプラットフォーム外観。旧市街再生事業の一環として、開港期の建物を改修し、再利用している。

2. プログラムの内容と実績

(1) アーティスト・イン・レジデンスの概要

仁川アートプラットフォームでは、美術だけでなく、舞台芸術、文学・批評、文化一般など、多様な文化的背景のアーティストの創作活動と研究者の研究活動を支援している。

新しい芸術のインキュベート機能を担うだけでなく、ジャンルや国籍、出身など、多様な文化的背景をもつアーティストと研究者が相互交流を行うことで、学際間、ジャンル間の協働を促進し、新たな芸術的エネルギーを生み出すことを目標としている。

アーティストには、スタジオ提供だけではなく、広報やプロジェクト実施の支援など、ソフト面のサポートも行っている。入居期間中には、プラットフォーム・サロン、批評家とのマッチング、国際交流プログラムなど、入居アーティストの力量を高めるための多様なプログラムを提供し、成果はオープン・スタジオ、オープン・ショーケース、展示、公演など様々な形式で発表される。

- 入居期間：
 - 短期(3ヶ月)
 - 中期(6ヶ月)
 - 長期(1年間)
- 助成内容：

スタジオまたはゲストルーム

共同作業室

プログラム、その他のプロジェクト実施に対する支援

● レジデンスプログラム：

創作助成

プラットフォーム・サロン

ー入居アーティストのプレゼンテーションならびに
交流ワークショップ

ー仁川リサーチツアー

ー創作助成の講義

批評家とのマッチングプログラム

国際交流

(2) アーティストの募集・選考方法、応募アーティストの条件

アーティストはすべて公募で選ばれる。

① 公募対象・期間

- 公募対象：国内外のアーティスト(個人あるいはグループ可能)
- 公募期間：毎年11月に公募し、オンラインで約2週間申請を受付。

② 対象とする芸術の分野

- 美術：絵画、彫刻、写真、インスタレーション、映像、

左:過去の滞在アーティストのアーカイブを収集・公開している。
右:こどもたちのワークショップで制作された作品の野外展示。



グラフィック等

- 舞台芸術:演劇、ダンス、音楽、パフォーマンス等
- 文学・批評:文学・研究ならびに批評(文学、人文学、展示企画、批評ならびに理論分野等)
- 文化一般
- その他(クロスオーバー、サイトスペシフィック、コミュニティアート等)

舞台芸術は年ごとに異なるが、これまでは演出家、パフォーマー、舞台美術家などが入居。5-6名のチームで入居し小さな公演を一緒にプロデュースしたケース、あるいは演出家が入居し外部の人材を提供して作品を作ったケースもある。

文学・批評には詩や小説、児童文学などの創作、舞台芸術や美術の批評なども含まれ、文化一般にはキュレーターも含まれる。

現在までは、舞台芸術や文学・批評などの割合は低く、80%以上が美術となっている。

③ アーティストの申請資格

- 募集公募日に満25歳以上で創作活動を活発におこなっている国内外のアーティストまたはグループ(大学生は対象外)
- スタジオを月10日以上を利用すること(満たさない場合は3ヶ月後に評価を行って退室を決定)
- 入居者以外、ペット、幼児、家族の滞在は不可

④ 入居期間

入居期間は、国内外、分野別に設定されている。

	分 野	期 間
国 内	美術、インスタレーション／映像、そのほか	長期1年(3月-2月)
	舞台芸術	中期6ヶ月(3月-8月／9月-2月)
	文学、研究・批評	長期1年(3月-2月)
国 外	美術、インスタレーション／映像、舞台芸術、文学、研究・批評	短期3ヶ月(3月-5月／6月-8月／9-11月／12月-2月)

※現入居者、入居経験者も申請が可能。最長滞在期間は3年。

※長期入居者は期間ごとに内部評価をおこなう。中・短期入居者は期間内の作品活動を審議して入居期間を

最長1年まで延長可能。

※国内アーティストと国外アーティストの区分は国籍を基準とする。

(3) 審査

① 審査手順

アーティストの選考は、1次書類審査、2次書類審査、3次面接で行われる。

② 審査書類(提出書類)

- 入居申請書
- プロフィール
- 入居期間中の創作活動(プロジェクト)計画書
- 過去の作品紹介資料
 - ー美術:作品に関する情報
 - ー舞台芸術:最近3年間の活動を証明するプログラム、映像、写真など
 - ー文学・批評:詩／詩調(10作品以上)、小説／戯曲／童話／散文(短編3本、中篇2本、長編1本以上)、批評・理論(調査、研究、評論集など5冊以上)

③ 審査基準

次の3つの基準に基づいて審査が行われる。

- プロジェクトの実施計画の内容(充実度)
- 創作活動の経歴と成長の可能性
- 仁川アートプラットフォームの運用目的への寄与度

(4) 支援の内容

アーティスト等への支援内容は次のとおりである。

- スタジオ助成(1名／チームに1部屋)ならびに創作空間助成
 - ※公演芸術はスタジオ使用を原則とし、稽古場の別途提供はなし。
 - ※文学、研究・批評はゲストハウスを提供。
 - ※海外アーティストにはスタジオとゲストハウス(宿舍)を提供。
- レジデンスプログラム、展示ならびにプロジェクト、広報を助成



滞在アーティストは展覧会開催の支援を受けることができる。ギャラリーは、アーティストの成果を発表するための十分な広さを有している。

- プロジェクト実施の一部を助成（審査を通過すれば自動的に助成される）
- 国内アーティストの中から海外レジデンス機関への参加者を選考し、交流を助成
- 海外アーティストの中から往復航空券を助成（2～3人の一部を助成）
- 入居アーティストの中からプロジェクトの内容によっては白翎島（ペンリョンド）平和芸術レジデンスならびにプロジェクトの助成を受けられる。

スタジオ提供に関連して、レジデンスの入居時、中間時、終了時にオープン・スタジオを実施し、作品や活動を市民に見てもらうプログラムを実施している。また、創作活動を支援するため、スタッフが共同でアイデアを出し合い、展示や公演として実現させている。

その他、小旅行を通じて作品素材を探したり、アーティストの交流をサポートする「サロン」という事業、アーティスト対象の教育プログラムの提供、出版などがある。アーティストを他の施設や機関に紹介するプロモーションも日常的に行われている。

さらに、アーティストは国が提供する無料健康診断を受けられないため、仁川医療病院と提携して入居アーティストの健康診断をおこなっている。

「小さいけれど人間的なサポートを補完することで、アーティストと施設間の関係も近いものになります。仁川アートプラットフォームは、一人ひとりのアーティストに対応し、要望に応えたいと思っています」とレジデンスを担当するキュレーターのオ氏は語る。

(5) プログラムの実績・過去の滞在者

2012年度までの応募総数は2,000人あまり、入居アーティストは20ヶ国、100名を越えた。ジャンルは80%以上が美術である。入居者は、若手から実績のあるアーティストまで多様で、若いアーティストにとっては活動領域が広がるという成果が出ている。

出身国は20ヶ国余りで、英国、ドイツ、フランスが多く、そのほかブラジル、ギリシャ、米国、日本、中国などで、欧州出身者が多い。「選考の際に多様な国のアーティストを選考するよう配慮しているので、どこかの国が突出して多いということはない」とオ氏。

日本からの入居者はこれまで3名、うち2名は今年の美術家とキュレーター。日本や中国などアジアのアーティストに重点を置きたいが、応募が少ないのが実情。

レジデンスプログラム終了後も大部分のアーティストの活動状況をフォローし、展示や公演案内など資料の

送付を依頼している。仁川アートプラットフォームはアーカイブを運営しており、随時、チラシなどの資料類をアーティスト別のポートフォリオに蓄積し、一般公開している。

ただし、今後、滞在アーティストの数が増えてきた時にどのように対応すべきかが課題。

- 2009年パイロットプログラム:
31名(国内30名・国外1名)
スタジオ20名、ゲストハウス5名、アート&デザインスタジオ6名
- 2010年第1期:
28名(国内25名・国外3名)
スタジオ26名、ゲストハウス2名
- 2011年2期:
35名(国内27名・国外8名)
スタジオ30名、ゲストハウス3名、地域連携プロジェクト2名
- 2012年3期:
36名(国内29名・国外7名)
スタジオ32名、ゲストハウス4名
- 2013年4期:
39名(国内27名・国外12名)
美術26名、舞台芸術5名、文学・批評・研究5名、白翎島(ペクリョンド)平和芸術レジデンス3名

(4) その他のプログラム

仁川アートプラットフォームは、レジデンス以外に、自主企画プログラムや教育プログラムを実施しているが、内容は毎年異なっている。入居アーティストのこれらのプログラムへの参加は強制ではない。

仁川アートプラットフォームが提案することもあるし、アーティストから提案されることもある。毎年入居アーティストが異なるため、プロジェクト実施計画を見て、アーティストの意向を聞いて判断している。

① 自主企画プログラム(展覧会、公演、講演等)

仁川アートプラットフォームでは、展覧会や公演、国際シンポジウムなどの事業を実施している。展覧会や公演の多くは、入居アーティストの作品である。

また、国内アーティストと海外アーティストの共同プロ

ジェクト、海外アーティストが仁川の姿を写真に収めて仁川の姿や暮らしを外国人の視線でとらえるプロジェクトなどを実施し、市民とアーティストをつなぐ努力もしている。

アーティストの共同プロジェクトとして、文学関連の入居アーティストの作品を5名の美術関連のアーティストが表現するというプロジェクトが実施された。作家の詩を素材に巨大なウォールアートを描くというもので、ひとは海外のイラストレーターだった。また、海外からの入居アーティストが市場などで庶民の姿を写真に収めるなど、仁川の姿や暮らしを外国人の視線でとらえるというプロジェクトも実施したことがある。

② 教育プログラム

仁川アートプラットフォームは、地域と住民、そしてアーティストをつなぐことを重視し、入居アーティストや市民、学生などを対象にした教育プログラムを実施している。市民対象の教育プログラムはできるだけ入居アーティストが講師となるように組み立てられている。アーティストに対して直接的な現金支給が出来ない中、教育プログラムの講師などを通じて収入が得られるようにするためである。

③ プラットフォームフェスティバル

2012年にはプラットフォームフェスティバルが開催された。レジデンス終了後、入居アーティストと疎遠になってしまうことが多いため、テーマを決めて過去の入居アーティストに声をかけ、展示や公演をおこなったり、オープニングパフォーマンスを一緒に創ったり、パーティや屋台を出すというものだ。仁川アートプラットフォームの歴史的な建築物を背景に野外で韓国画と音楽、チャング(太鼓)のパフォーマンスなどを実施。韓国画が沈滞する中で伝統を再発見する機会ともなり、住民たちも熱狂的に楽しんだという。

「多ジャンルのアーティストが一同に介するパフォーマンスや展示を企画する契機ともなりました。入居したすべてのアーティストが満足感を持ってレジデンスを終え出て行くわけではありません。しかし、このフェスティバルを通じて共に展示をおこない、芸術について語り合い、再び出会うことで仁川アートプラットフォームに

新たに関心を持ち、認識してもらうことにもなりました。これは成功だったと思います」と、オ氏は振り返る。

イベント終了後、アーティストたちがフェスティバルや仁川アートプラットフォームを宣伝したり、知り合いのアーティストに声をかけたりする成果もあった。参加したアーティスト一人ひとりに十分な対応ができなかったという課題はあったものの、数多くのアーティスト、地域住民も参加し好評だったという。

2013年からは事前にアーティストを選抜して企画展を開催するなど、より充実したフェスティバルを計画している。昨年同様のオープニングイベントに加え、ワークショップ、フォーラムなども企画予定である。

④ 北朝鮮をテーマにしたプログラム

仁川アートプラットフォームの特徴は、地域に根ざした施設であること、展示や公演が可能な様々な空間（施設）を保有していることである。仁川には近代の開港都市という歴史的・人文学的な特徴もあり、北朝鮮とも隣接している。このような仁川や仁川周辺の多様な歴史（文学、建築等）に関心をもつ国内外のアーティストが、仁川アートプラットフォームにも関心を持ちはじめている。

2010年に北朝鮮が延坪島（ヨンピョンド）を爆撃する事件があり、民間人の死亡者も出て、島は大きく破壊された。当時は民間人立ち入り禁止区域となったが、立ち入り禁止が解除されてすぐにアーティストたちと共に島に渡り、この現状を作品にどう表現するのかという試みが行われた。2012年には、市内から4時間、北朝鮮に近い白翎島（ペンリョンド）にアーティストが滞在できる施設を作り、2012年から「白翎島平和芸術レジデンス」プログラムを実施している。

特にアジア、第三国では最近「社会」「政治」的な作品を発表するアーティストが脚光を浴びているが、そうしたアーティストが仁川に関心を持っている。「仁川が北朝鮮に一番近い訳ではありませんが、白翎島（ペンリョンド）や延坪島では過去に軍事事件が起こっただけに、「政治」「歴史」「北朝鮮」に関心をもって活動しているアーティストは少なくありません。特に海外のアーティストは高い関心を持つ人が多い」とオ氏は言う。

3. 施設の構成と内容

仁川アートプラットフォームは、1883年の開港後に建てられた建築文化財、1930年～40年代に建てられた建物など、近代建築の技術と歴史的記録が感じられる建物で構成されている。

旧日本郵政株式会社（登録文化財第248号）をはじめ近代建築物を改築し、創作スタジオ、工房、資料館、教育館、展示場、公演場など、全部で13棟が整備された。稼働率は99%である。

- 敷地面積: 8,450.30㎡
- 建築面積: 4,165.06㎡
- 延べ床面積: 5,593.43㎡

施設一覧

建物名	建物構造	施設
A(教育館)	2階	教室(2)、クリスタルキューブ、授乳室、事務関連室(10)
B(展示場)	2階	展示室、所蔵庫
C(公演場)	1階	公演場、多目的ルーム、楽屋
D(アーカイブ)	1階	資料室(2)、メディアラボ、管理事務所
E1(スタジオ1)	1階	スタジオ(3)、共同作業室
E2(スタジオ2)	3階	スタジオ(9)、洗濯室
E3(スタジオ3)	3階	スタジオ(8)、休憩室
F(ゲストハウス)	4階	ゲストハウス(9)、ゲストラウンジ、洗濯室
G(アート&デザインスタジオ)	1階	スタジオ(3)
H(コミュニティ館)	2階	仁川アートプラットフォーム事務局、事務関連室(3) コミュニティホール、プロジェクトルーム

4. 運営体制と事業収支

(1) 運営組織

仁川アートプラットフォームを運営する財団法人仁川文化財団は、公演や展示、出版等に対する助成のほか、様々な文化事業や市内3館の図書館の運営なども行っている。仁川アートプラットフォームの職員は、館長、総括キュレーター、キュレーター(2名)、プロデ

ユーザー、教育エディケーター、建築専門の施設担当、予算管理の8名である。雇用形態は生涯契約で、1年ごとの更新で本人が望む限り延長契約が可能。その他に、学芸チーム7名とインターン4名が働いている。

現館長は美術史を専攻しキュレーターとして活動した経験がある。統括キュレーターも美術史を専攻したキュレーターで、プロデューサーは作曲を専攻し音楽分野で活動した経験がある。

(2) パートナースhip

① 国際ネットワーク

レズ・アルティスなど、国際ネットワークにはまだ加盟していないが、公募に際しては協力を得ている。海外アーティストの多くがレズ・アルティスを通じて申請してくる。

韓国の場合、国際交流プログラムは「機関・施設」対「機関・施設」という基本形がある。しかし、仁川アートプラットフォームでは別の形でどのようなことが可能なのか模索している。

例えば、横浜と仁川は同じ開港都市という歴史的・地理的共通点があるため、横浜市芸術文化振興財団と相互交流やパートナーシップを結べないかを検討している。「横浜のアーティストが来たり、仁川のアーティストが派遣されたり、既存のアーティスト交換プログラムではなく、共通点を持った機関や施設として、中身にこだわった国際交流を目指したい」と、オ氏は語る。

② 国内ネットワーク

韓国では1年に数度国内のレジデンス機関や施設でネットワークに関するフォーラムが開催されている。そのため、レジデンスの担当者同士はある程度お互いを知っているが、具体的にどのように協力してネットワークを形成していくのかは定まっていない。

そんな中、昨年にはソウルのクンチョン芸術工場で「地域連携プログラム」として、各地のレジデンス・アーティストの展示が行われた。仁川アートプラットフォームでも2009年に「パレード」と題し、他のレジデンスに滞在しているアーティストの招待展を開催したことがある。

このように、毎年単発のフォーラムや共同プログラム

はあるが、長期的な展望をもった組織的なネットワークはまだ形成されていない。

(3) 事業収支

年間予算は13億ウォン(約1億1,000万円)。電気代なども含めた13棟の建物の維持管理費だけで約10億ウォン(約8,600万円)かかるため、事業費は非常に限られているのが現状だ。

ほとんどの予算は仁川市からの補助金であるが、それだけでは厳しいので、仁川市内の企業から全体予算の3-5%くらいの協賛金を受け取っている。ただし、企業協賛は教育プログラムなど限定されたものが対象となっている。

5. 事業評価の実施状況

仁川市の評価基準は、観覧客数、施設の稼働率、入居アーティストの数などで、それらの各種数値を市に提出している。専門性などの内容面については別途、運営評価委員会を設置して評価が行われている。ただ、オ氏は、評価という点では大衆性と公共性の間で難しさを感じているという。

館長が市議会に出向くと、「なぜ数名のアーティストだけを、それも仁川市民ではないアーティストを支援しなければならないのか」という質問を受けるそう。その際には、「レジデンスを通じて国内外の優秀なアーティストが仁川に来ることで、展示をはじめ多様な会話のチャンネルが開かれ、仁川のアーティストも共に育つことができる」「市民は展示や公演を、隣家でも訪ねるように気軽に見られ、芸術を享受している」「芸術作品に接した市民が将来アーティストになる可能性がある」「文化的な波及効果によって、将来ピカソやナムジュン・パイクのような天才的な芸術家が誕生するかもしれない」「芸術に対する投資だ」といった説明を行うという。

同時に、美術館と同じような教育プログラムを実施することで、市議会議員や財政当局の評価を得ている。実際、仁川市内のほとんどの学校が授業の一環としてここを訪れている。そういう現状がなければ、存在意義に対して説得力がないのが実情だという。



入居アーティストのオ・ソククン(OH Suk-kuhn)のスタジオ。
日本でも数度にわたる展覧会に参加した経験を持つ。

6. 現在の課題と日本との交流について

① 現在の課題

予算面の課題が大きい。ひとつは事業費が不足している点で、これは企業協賛などを得るなどして自己努力をしている。もうひとつは、予算上の制約から十分なスタッフを雇用することが難しく、スタッフ1人当たりの仕事量も他の機関に比べかなり多い。大型の自主企画展を実施できない理由は、この資金不足とスタッフ不足にある。

またスタッフが不足していることから、行政的な実務に終われ、専門職にもかかわらず本業のプロジェクトや企画を提案する時間が十分に確保できない。アイデアは機械のように自動的に出てくるものではないが、仕事の後、勉強や調査を行える環境にないという。

スタッフの育成も課題になっている。韓国の場合、キュレーターは卒業後に美術館でインターンとして仕事するケースが多いが、給料は安く、経済的に耐えられる人は多くない。また、美術の知識より実務経歴をより重要視する傾向にある。この実務経歴を重ねる場が少ないのが現状だ。

「仕事の量に比べスタッフも少なく、アーティストからの要求も多い。しかし、企画化されたプログラムではなく、芸術家一人ひとりが個々のプロジェクトを達成できるよう同伴者として対応したいと思いますし、それがレジデンスの役割です。今後もこの点に重点をおいて進めていきたい」とオ氏は前向きである。

② 日本のアーティスト・イン・レジデンス等について

日本との交流についてオ氏は「日本は地理的にも近く、アジア圏の中でも情緒面や考え方も似ています。共にプロジェクトを行うにも短所より長所が多いですし、他の国よりはるかに親近感があります」と言う。

日本の地域の施設や空間と連係した拠点的で長期的なパートナーシップをベースに、アーティストを招へいしたり、派遣したりする交流が政府次元でできないだろうか。それも一回性ではなく継続的に続けられる関係を作れないだろうか、というのが彼女のアイデアである。

その一環として、横浜との交流を模索している。横浜から来館したディレクターも興味を示し、仁川アートプラットフォームの館長も横浜に関心を持っている。「例えば『ノマドプロジェクト』という旅行を伴う企画があるのですが、横浜と仁川のアーティストと一緒に旅行をしながら、展示プロジェクトを立ち上げるような企画も試みたいですね」とオ氏は夢を語ってくれた。

**"A worthy failure is more valuable
than a mediocre success."**

Kuo Pao Kun (1939-2002)

Founder & Artistic Director, The Substation (1990-1995)

J. シンガポール

1. サブステーション | The Substation
2. シアターワークス | TheatreWorks
3. シンガポール・タイラー・プリント・インスティテュート | Singapore Tyler
Print Institute (STPI)
4. オブジェクティフス | Objectifs

写真:サブステーションの入りロビーに掲げられた創設者クオ・パオクンの言葉「価値ある失敗は、ほどほどの成功に勝る」
現地調査協力:齋藤梨津子(在シンガポール)
1シンガポールドル=80円で換算

1. サブステーション | the Substation

面会日: 2013年3月12日(火) 14:00-16:00

面会者: Noor Effendy IBRAHIM (Artistic Director)

Chris ONG (Programme Manager)

URL: <http://www.substation.org/>

1. 運営機関の概要

サブステーションはシンガポール初の非営利のインディペンデント・アートセンターである。アーティスト・イン・レジデンスのほか、公演、展覧会、シンポジウム、文化講座や本の出版などを行っており、地域のアーティストが企画するイベントにも会場を貸し出している。

(1) 設立趣旨・経緯

サブステーションは1990年、劇作家のクオ・パオクン(KUO Pao Kun)によって設立された。その名が示す通り、施設は1926年に建てられた変電所(Substation)の建物を利用している。80年代後半から芸術文化振興とそのための環境整備を模索していたシンガポール政府は、変電所跡をアートスペースとして再利用するというクオ氏の提案を受け入れて建物のリノベーションに着手し、彼を初代芸術監督に任命。

1990年9月、クオ氏の経営する舞台芸術学校「プラクティス・パフォーミングアーツセンター(Practice Performing Arts Centre Ltd)」に運営を委託する形でサブステーションは開館。その後95年に、サブステーションの名前で有限責任保障会社(Company Limited by Guarantee)を設立している。

1990年代、シンガポールでは政府の文化政策への関心が高まる一方で、新しい戯曲を上演するプロの劇団や新世代の美術家たちの活動も盛んになってきたが、当時国内には彼らの実験的な表現を許容する場は数えるほどしかなかった。初期のサブステーションはそうしたアートスペースのパイオニア的存在となり、今日のシンガポールの芸術文化を担うアーティストが巣立っていった。

異なる文化、言語、意見を持つ様々なコミュニティの人々に開かれた場所であることを目指すサブステーションが実施する事業は、演劇、音楽、現代美術、映画、文学のほか、伝統舞踊からパンクロック・コンサートに至るまで幅広い。2010年から芸術監督を務めるヌーア・エイブラハム・エイブラヒム(Noor Effendy IBRAHIM)は、多様な事業の根底にある理念を次のように語っている。「クオ氏の掲げた”アートの家(Home for the Arts)”という

構想では、アートの概念は芸術だけでなく多様な活動を含んでいる。アートは常に社会に関心をもっていなければならないし、だからこそ必要とされる。そうした意識から、過去に天安門事件についての展示や反イラク戦争のコンサートを開催したり、移民や女性の権利を推進するNGOと連携したりしてきた」。この理念はアーティスト・イン・レジデンスでも重視されており、参加者は芸術や文化以外の分野で活躍する人々を巻き込んだ企画を実施することが条件となっている。

サブステーションはシンガポールで最初にできた非営利のインディペンデント・アートスペースであり、設立以来その独立の精神を大切にしている。エイブラハム氏は「サブステーションもシンガポール・アーツカウンシル(National Arts Council Singapore)の助成を受けているが、充実した公的支援に依存してしまうアーティストや団体もいる中で、いかに独立した活動が続けていけるか、常に注意を払っている」と言う。

(2) ミッション

サブステーションは、実験的で領域横断的な表現活動に挑戦するアーティストを支援し、活動の場を提供することをミッションとしている。ギャラリー・スペースの横の壁に書かれた創設者・クオ氏の「価値ある失敗は、ほどほどの成功に勝る(A worthy failure is more valuable than a mediocre success.)」という言葉が示すように、新しい表現を模索するアーティストの実験と失敗を許容し、深みと多様性を備えたアートの質を追及し続けることがサブステーションの活動を貫く基本理念となっている。

2. プログラム内容と実績

(1) アーティスト・イン・レジデンス

サブステーションでは、2011年からアソシエイト・アーティスト・リサーチ・プログラム(Associate Artist Research Programme)という名のレジデンスプログラムを実施している。この事業はシンガポールの新進アーティストが行うコンテンポラリーアートや分野を超えた実践に対する、批評的で持続可能なリサーチとその発展の推進を目的としている。



サブステーション前景。組織名の由来である、1926年に建てられた変電所(Substation)を改造し、様々な活動を展開している。

招待アーティストには2年間、リサーチ費用として毎年1万シンガポールドル(約80万円)が与えられ、発表やワークショップ、リハーサルのためにサブステーションの劇場、ギャラリー、教室、ダンス・スタジオを使うことができる。サブステーションは広報や機材、事務的な手続きではサポートを行うが、率先してコネクションをつくったり、アーティストのリサーチを誘導したりすることはない。アソシエイト・アーティスト・リサーチ・プログラムはサブステーションの中核事業に位置づけられ、芸術監督のエイブラハム氏とプログラム・マネージャーのクリス・オン(Chris ONG)が担当している。

サブステーションは2002ー11年までアソシエイト・アーティスト事業(Associate Artists Scheme)というレジデンスプログラムを実施しており、これまでに50名近くのシンガポールのアーティストが参加した。これをリニューアルしたのがアソシエイト・アーティスト・リサーチ・プログラムで、以前に増して分野を横断するリサーチと実験的な活動を重視している。アーティストと観客の対話の場として、劇場などに加え、新たにランダムルームを活用するようになった。

かつて自身もアソシエイト・アーティストだったエイブ

ラハム氏は「これまでも制作と発表の場は提供されたが、財政的な問題からキュレーションや記録作成については十分なサポートが受けられず、参加アーティストは不満を感じていた。以前のレジデンスは非常にゆるやかな事業であったため、もっとしっかりした枠組みが必要だと考え見直し、この事業取り組んでいる」と話す。2000年代の厳しい財政状況は、前述の反戦コンサートや各種 NGO など市民運動との連携が政治的な色彩が強すぎるとみなされ、政府の助成が減少したために生じたそうだ。

① プロセス重視の姿勢

レジデンス事業の特徴の一つが、サブステーション設立当初から活動の根幹に据えられていた“制作のプロセスに重きを置く姿勢”だ。完成した作品が重視されるシンガポールの風潮を批判的に捉え、最終的な成否ではなく制作過程を発表することで観客とアーティストのつながりや対話を生み出そうとしている。「プロダクションとしての価値はないかもしれないが、プロセスを見せることでのみ生まれるストーリーがあり、制作過程自体は評価も可能だ。国内の文化施設は充実してきたが、プロセスを評価する場所は減ってきている。過程

重視のコンセプトこそ、サブステーションがシンガポール社会に不可欠な存在であり続けるために必要だと感じている」とエイブラハム氏は語る。

2011-12年度アソシエイト・アーティストでダンサー・振付家のミン・プーン(Ming POON)は「レジデンスの終わる2年前に完成作品について問われるのは早すぎる。どんなパフォーマンスが出来上がるかは制作過程によるものであり、プロセスの重要性を理解してくれるサブステーションのような場所はアーティストにとってとても貴重だ」と話す。同じく2011-12年度のアソシエイト・アーティストでファッション・デザイナー、美術家であるグレース・タン(Grace TAN)も「他の美術館のアーティスト・イン・レジデンスでは完成作品を求められるが、サブステーションでは最終的な発表よりもアイデアを深めるところに重点が置かれている点がいい。新しい作品を生み出すためにはある程度時間が必要で、作品の完成を前提としたレジデンスでは難しい場合もある」と話している。

② 独立性(インディペンデント)の重視

もう一つの特徴となっているのが、インディペンデントという概念である。アーティストの自由裁量に委ねる部分の大きいこの事業において、滞在アーティストは自力でプロジェクトを推進できる独立したアーティストであることが求められる。プロジェクト・マネージャーのオン氏は次のように語っている。「この事業ではアーティストがいかにして、資金を持って独立した活動ができるかを大切にしている。資金があればアーティストはやりたいことができる。そしてアーティスト自身が最初の一歩から自力でリサーチを進めるので、まったく新しい作品が生まれる。完成作品を発表しなかったとしても、それは制作活動をしなかったというわけではない」

他のアーティスト・イン・レジデンスではスタジオにこもって作品を作り、報告書を提出して終わりという場合もあるが、サブステーションではアーティストは新しいアートの方向性をともに探るパートナーのような存在となっている。自分自身で行ったリサーチをもとに制作するため、自身の表現により確信的になれるとプーン氏は言う。さらにエイブラハム氏は、「担当者とのきめ細かいコミュニケーションを通じてサブステーションとアーティ

ストのつながりを強化し、双方が成長できるような関係を目指している」と続ける。

そして、インディペンデントには様々な制約から独立し、自由な表現を行うという意味もこめられている。シンガポールではパフォーマンスを実施する際、メディア開発省(Media Development Authority)にエンターテインメント・ライセンスを申請しなければならない。政治的なメッセージや裸体、同性愛にまつわる表現は検閲の対象になり得るが、サブステーションでは通常周辺に追いやられているマイノリティ集団に取り組むアーティストを積極的に支援している。例えばプーン氏はシンガポールでは偏見から身を守るためその存在を秘匿しているHIV感染者へインタビューを行い、彼らの言葉を元に作品を制作した。また2013-14年度アーティストのタニア・デ・ロザリオ(Tania DE ROZARIO)やルー・ジハン(Loo ZIHAN)は同性愛やトランスジェンダーの問題に取り組んでいる。

後述するとおりサブステーションでは教育プログラムも実施しており、アソシエイト・アーティストが講師となる場合もあるが、義務ではない。オン氏は「アーティストが制作中の作品について語るアーティストトークを開催する場合もあるが、たとえ無料であっても作品が見られるわけではないので集客は難しい」と言う。

(2) アーティストの募集・選考方法、応募アーティストの条件

アソシエイト・アーティスト・リサーチ・プログラムは公募でなく、参加できるのは招へいされたアーティストのみである。アーティストの選考は芸術監督のエイブラハム氏が行う。候補者は様々な芸術ジャンルから選ばれるが、シンガポール国民かシンガポール生まれ、もしくは永住者に限られる。アーティストにはシンガポールや周辺地域のアートシーンと社会状況を反映したプロポーザルが求められ、芸術や文化以外の分野で活躍する人々とコラボレーションすることが必須条件となっている。基本的には、特定の芸術文化団体に属していないインディペンデントに活動するアーティストを対象としている。

プロセスを重視する事業であるため、レジデンス期



間中に作品を完成させなくてもよいが、アーティストは制作過程の一部を公開し、2年目には最終発表(完成作品である必要はなく、その時点での成果を発表)を行わなければならない。経過を確認するために2年のレジデンス期間中のうち最低年3ヶ月、計6ヶ月はサブステーションで制作することが求められるが、同時期に他のアーティスト・イン・レジデンスに参加することも可能だ。

今後レジデンスの過程をアーカイブ化する計画があるため、リサーチの過程でアーティストが収集した資料や記録はサブステーションに提出することが求められる。

(3) プログラムの実績・過去の滞在者

アソシエイト・アーティスト・リサーチ・プログラムでは毎年2名のアーティストが参加する。プログラム初年度は4名のアーティストが参加したが、資金とスペースに限界があるため参加人数を絞って手厚いサポートを実現できるようにしたそうである。

2011-12年度の参加者は、前述のダンサー・振付家のブーン氏、立体作品と空間を使ったインスタレーションを制作するタン氏のほか、作家で音楽家のバニ・ハイカル(Bani HAYKAL)、アーティスト集団・ヴァーティカル・サブマリン(Vertical Submarine、メンバーは Joshua YANG、Justin LOKE、Fiona KOH の3名)である。

2012-13年度はビジュアル・アーティストのザキ・ラザク(Zaki RAZAK)と、フェリシア・ロウ(Felicia LOW)、2013-14年度はパフォーマンスと映像作品を制作するルー・ジハン氏と作家でキュレーターのタニア・デ・ロザリオ氏がアソシエイト・アーティストに選ばれている。

(4) その他のプログラム

サブステーションのプログラムは独自に企画するインハウス・イベントと外部のアーティストと共催で行うオープンハウス・イベントの二つに大別できる。オープンハウス・イベントは自身の拠点を持たないアーティストに作品発表やリハーサルを提供することを目的としている。様々なコミュニティに対し“オープン”であることを目指すという理念に則り、その内容は歴史・伝統文化にまつわるものからグラムロックまで幅広い。アーティ

スト・イン・レジデンス以外のインハウスイベントは次のとおりである。

① 公募プログラム(Open Call)

次世代の才能を発掘し、ステップアップを支援する公募プログラム。2008年に美術のプログラムとして始まり、10年には舞台芸術部門、11年には音楽部門も設立された。毎年1月から3月に企画の募集を行い、各部門につき一件ずつ採用される。選考されたアーティストには最大6,000シンガポールドル(約48万円)の制作費と1,000シンガポールドル(約8万円)の賞金、5ヶ月間の制作期間が与えられる。ゲストキュレーターが制作や発表をサポートする点が特徴。

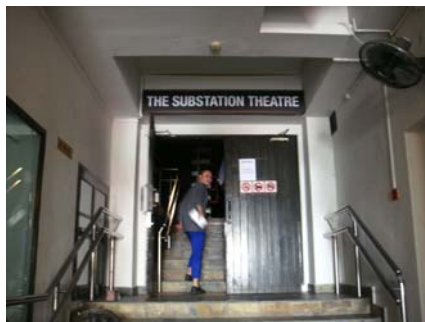
支援金額が少ないので作品を完成させることは求めておらず、参加者はサブステーションの劇場やギャラリーなどで途中経過と最終成果を発表することが義務づけられている。主にプロのアーティストとしての経験が3年以下のシンガポール人もしくは永住者を対象にしているが、アートを実践しようとする企画であれば、経験を問わず学生や教育関係者などにも広く門戸を開いている。美術部門ではオープン・コールをきっかけに5名の参加アーティスト全員がシンガポール美術館の展覧会に招へいされたり、若手アーティストに与えられる大統領賞(President's Young Talent Award)を受賞したりとその才能を認められている。

② ディレクターズ・ラボ(Directors' Lab)

新たな手法を開発しようとしているシンガポールの若手舞台芸術関係者を対象とした18ヶ月間に及ぶ参加型研修事業。シンガポール・アーツカウンシルの事業助成を受け2013年4月に始まった。

公募で選ばれた5人の参加者(俳優、ダンサー、演出家)は、エイブラハム氏をはじめとする地域の舞台芸術専門家で構成される委員会と定期的なミーティングやディスカッションを重ねながら新作を制作する。参加者には毎月500シンガポールドル(約4万円)の奨学金、ワークショップやプレゼンテーションのための費用として最大4,000シンガポールドル(約32万円)、そして最終発表のために最大1万シンガポールドル(約80万円)の制作費が支給される。サブステーションの単独事業と

ブラックボックス形式の劇場。アソシエイ
ト・アーティストのバニ・ハイカル氏が成
果発表のライブのために、リハーサルを
行っていた。



いうより、委員会に参加する5つの地域の芸術団体と
連携して実施している事業である。

③ 音楽事業(Tribal Gathering)

2010年から実施している音楽事業「トライバル・ギャ
ザリング」はシンガポールの多彩な音楽シーンを紹介
すると同時に、これまで接点のなかった異なるジャンルの
音楽家同士が出会い、協働することを通して新しい
音楽とその楽しみ方を生み出すことを目指している。
毎月開催されるトライバル・ギャザリング・オブ・タン
グ・テイスター(Tribal Gathering of Tongue Taster)は音楽と
他分野の芸術のコラボレーションを発表するもので、ア
ソシエイト・アーティストのハイカル氏がキュレーションを
行い、パンクバンドや中華系、インド系、マレー系伝統
音楽の演奏家と2、3週間のワークショップを経て新し
い音楽作品を作っている。年一回開催されるトライバ
ル・ギャザリング・オブ・ジョー・ベンダー(Tribal
Gathering of Jaw Bender)は地域のインディーズのミュー
ージシャンが登場するパンクや実験音楽を中心とした
音楽祭である。

④ 映画事業(Moving Images)

1997年にスタートした映画事業では、地域の自主制
作映画を中心に、短編作品、ドキュメンタリー、実験映
画などを紹介している。2004年からは短編映画を毎月
上映するファースト・テイク(First Take)と、自主制作の
ドキュメンタリー映画祭(Singapore Indie Doc Fest)を開
催。10年には実験映画フォーラム(Experimental Film
Forum)を、写真と映像が専門のアートスペース・オブ
ジェクティブス(後述)とともにシンガポール短編映画賞
(Singapore Short Film Awards 2010)を開始し、シンガポ
ールとアジアの映画制作者の育成とネットワーク作りを
支援している。

⑤ 文学事業(Literary Art)

サブステーションでは、小説や詩、戯曲、芸術批評
などに関するイベントや書籍の出版も行っている。2009
年から継続中のラブレター・プロジェクト(The
Substation Love Letters Project)では毎年異なる民族、
性別、言語のバックグラウンドを持つ12人の書き手が選
ばれ、様々な言語で書かれた詩が毎月一編、部数限

定のポストカードとして発行される(ウェブサイトでも公
表)。

⑥ 社会の隅に追いやられている才能を発掘する事業 (Identify Talents from Marginal Community)

エイブラハム氏が受刑者の美術展に招待された際
に、力強い表現を発見したことがきっかけで始まった事
業(正式な事業名はない)。二人の受刑者が出所後、
シンガポールの美術家が企画する6ヶ月の研修プログ
ラムに参加し、最終的に展覧会で作品を発表する予定
だ。事業への参加は受刑者に委ねられており、本人が
芸術をやる意思がない場合は作品づくりを強要しない。
「刑務所から日常生活へ適応するために重要なプロセ
スであると同時に、シンガポールの美術界がそうした才
能に気づき、受刑者が前向きな市民生活をスタートす
るきっかけとしたい」とエイブラハム氏は言う。

⑦ フェスティバル

サブステーションの創立記念日である9月16日を祝
福すべく、約一ヶ月間にわたって開催されるフェスティ
バル。期間中は舞台芸術、美術、音楽、映画、文学な
ど様々なジャンルのイベントやシンポジウム、セミナー
などが行われる。前述の公募に参加した若手アーティ
ストの最終発表もこの時期に行われ、多くの観客の目
に触れることが可能となっている。

⑥ 教育プログラム

サブステーションでは一般向けの文化講座や小中
学生を対象とした教育プログラムも実施している。サブ
ステーションの教室やスタジオでは年間を通じてフリー
ランスの指導者による多様な講座が開催されている。
子どもたちの創造力と批評的思考力を育む教育プログ
ラム(Learn*)では、舞台芸術や現代美術、ストリートア
ートなどを専門にするアーティストが小中学生と教員に
ワークショップを行っている。

3. 施設の構成と内容

サブステーションは国立博物館やプラナカン博物館
に程近いアルメニアン・ストリートに立地する、元変電所
だった3階建ての建物に入居している。これはアーツカ
ウンシルが、改装した歴史的建造物を家賃の大部分を

助成して芸術団体に貸し出すアーツ・ハウジング事業 (Arts Housing Scheme) の初期の事例である。

このアート・ハウジング事業は、アーティストや芸術団体に安価なスペースを提供し活動を支援するため、1985年にコミュニティ開発省 (Ministry of Community Development) が始めたもので、その後新設されたアーツカウンシルに引き継がれた。単一団体が一つの建物を賃貸するタイプ、複数のアーティストや団体が一棟に入居するタイプ、芸術以外の団体と一緒に入居するタイプの三種類があり、現在38棟の建物(多くは戦前に建設されたもの)が90人/組以上のアーティストや芸術団体のスタジオや稽古場、劇場やギャラリーといった作品の制作や発表の場として利用されている。賃料は土地管理庁 (Singapore Land Authority) に支払われる。アーツカウンシルは都市再開発庁 (Urban Redevelopment Authority) と連携して戦略的に建物を選定し、ワーテルロー・ストリート、チャイナタウン、リトルインディアではアート関連の物件が集積するアートベルトを形成している。

サブステーションの1階にはブラックボックス型の劇場(最大108席)と113㎡のギャラリー、チケットや書籍、DVDを販売するボックスオフィスとアーティストのミーティングなどに使用される小さなランダムスペースがある。2階は各種講座やリハーサルに使われるダンススタジオ(135㎡)と2つの教室(30㎡)、3階部分は事務所となっている。開館してしばらくは音楽フェスティバルや実験的な野外演劇の会場として使われてきた裏庭には、現在ライブ演奏を行うビストロ・バーが店を構えている。

アーティスト・イン・レジデンスの専用施設はない。劇場、ギャラリー、ランダムスペース、教室、ダンス・スタジオは自主事業で使用するほか、外部にも貸し出しており、各スペースは年間を通じて稼働している。滞在アーティストはワークショップやリハーサルのため教室やダンス・スタジオを使用できる。リサーチの中間発表や最終発表は劇場やギャラリーで行われる。それ以外で滞在アーティストが使用できるのは小さなランダムルームしかなく、滞在施設もないため、海外のアーティストを招へいすることは困難である。

4. 運営体制と事業収支

(1) 運営組織

サブステーションは有限責任保障会社の形をとった非営利団体で、現在14名のスタッフが勤務している。劇場関係者や大学教授、企業家など10人の理事からなる理事会が設置されている。インターンやボランティアは常時募集している。スタッフの職種は下記のとおり。四代目の芸術監督を務めるエイブラハム氏はマレー系劇団・シアター・エカマトラ (Teater Ekamatra) の元芸術監督でサブステーションのアソシエイト・アーティストだった人物である。

- Artistic Director
- General Manager
- Programme Manager (美術、舞台芸術、映画、デザイン事業に一人ずつ。現在デザインと舞台芸術は兼務。オン氏はこのうちの一人)
- Project Programme Manager
- Education Manager (Box Office Administrator と兼務)
- Account Executive
- Operations Manager
- Technical Manager
- Box Office Administrator
- Marketing Manager
- Duty Officer
- Caretaker
- Technician

(2) パートナースhip

現在サブステーションがパートナーシップを結んでいる文化施設や芸術団体はないが、前述のディレクター・ラボなどの事業は国内の芸術団体や他の文化施設と連携して行っている。国外では2012年に初めて韓国の文来(ムンレ)芸術工場と連携した国際交流事業を実施した。2年間のプロジェクトで12年は両国のアーティスト各1名が参加、シンガポールとソウルに3週間ずつ滞在しコラボレーションで作品を制作、発表した。

2013年は各国での滞在期間を6週間に延長する。「難しいのは海外のアーティストとコラボレーションがで

きる人材を見つけること。良い受入先が見つければ日本の機関とも連携してみたい」とエイブラハム氏は語っている。サブステーションはレズ・アルティス等の国際ネットワークには加盟していない。

(3) 事業収支

2012年度の年間予算(支出ベース)は、97万シンガポールドル(約8,000万円)で、2009－12年までの収支は下表のとおりである。2012年度支出の内訳は事業費17万8,000シンガポールドル、運営費79万2,000シンガポールドルで、うち人件費は55万シンガポールドルである。収入はシンガポール・アーツカウンシルの助成金が20万4,000シンガポールドルで約20%、寄付が11万4,000シンガポールドル、その他助成金と講座・貸し会場等による収入が68万3,000シンガポールドルとなっている。

サブステーションの収支の推移 (千シンガポールドル)

	2009年	2010年	2011年	2012年
収入	1,038	924	871	1,004
支出	1,029	887	937	970
収益	9	37	▲66	34

資料: The Substation “Financial Information”より作成

アーティスト・イン・レジデンスはシンガポール・アーツカウンシルの助成のほか、民間のリー財団(The Lee Foundation)からの支援も受けて実施している。アーティストは毎年最大1万シンガポールドル(80万円)をリサーチのために自由に使用できる。

アソシエイト・アーティストのブーン氏は「リサーチの一環として会食が必要なら食費を計上できるし、インタビューに応じてくれたアーティストに謝礼を支払うこともできる。ただし、担当のオン氏になぜその予算が必要なのかを説明し、領収書と一緒に詳細な使い道を報告しなければならない。サブステーションはアーティストのニーズに応じて柔軟な対応をしてくれるので嘘はつけない。結果的にリサーチについて常に考えていることになる」と言う。オン氏は「リサーチのすべての過程を見ることはできないので、アーティストを信頼して資金を渡す以外ないことが、この事業の難しい点。そのため日々アーティストと細かなやり取りを継続していく必要

がある」と話す。

5. 事業評価の実施状況

サブステーションのアーティスト・イン・レジデンスでは作品を完成させることよりリサーチのプロセスを重視するため、事業の数やチケットの売り上げなど数値的な結果のみでは評価できない。「政府やスポンサーは作品と経済的価値を重視するので彼らを説得することは容易ではないが、ここ数年でアーツカウンシルに変化が生じてきた。彼らは持続可能なプロセスを支援する重要性に気づき始めたが、今度は財務省をいかに納得させ、予算を確保するかが課題となっている」とエイブラハム氏は言う。オン氏は「我々の仕事はアーティストが怠けないように注意しつつ、実験的でプロセスに重点を置く支援の意義を説明していくことだ」と話す。

6. 現在の課題と今後の方向性

プロセスを重視し実験的な表現活動を支援するサブステーションでは、資金調達も難しい問題だが、最も深刻なのは活動場所の確保である。自前の拠点を持たないアーティストにも活動の場を提供しているため、劇場とギャラリーでは連日作品発表が行われ、教室やダンス・スタジオは練習や講座に使用されている。

「滞在アーティストが自由に使えるスペースは一番小さいランダムルームしかないが、ここすらアーティストのミーティングで使用中の場合が多い。例えばアソシエイト・アーティストのハイカル氏がキュレーションを行う音楽事業のタング・テイスターでは、参加アーティストが最低月に2、3回ミーティングで使用し、その状況が2ヶ月ほど続く」とオン氏は話す。レジデンスプログラムでは常時6－7人のアーティストを受け入れているが、彼らは年間最低3ヶ月サブステーションに滞在するため、使用可能なスペースは常に不足している。

今後の方向性について、初代芸術監督クオ氏の率いるサブステーションでアーティストとして活動したことのあるエイブラハム氏は「設立当初この場所が持っていた意義も理解しているが、ときに回帰するだけでは単なるノスタルジアで終わってしまう」と言う。アートは社会とつながっていなければいけないと考えるエイブラハ

グレース・タン氏／アソシエイト・アーティスト(左)

クリス・オン氏／プログラム・マネージャー(右)



ム氏は、観客との対話という極めて重要な要素が、お金がかかるという理由でエリート層に限られてしまっている現状を危惧し、より広いコミュニティを巻き込んだ事業を展開することを目指している。

アーティスト・イン・レジデンスに関しては「以前のレジデンス事業は非常にゆるやかなもので詳細な記録は残っていなかったが、今後はアーティストの制作過程やリサーチで使用した資料などをアーカイブ化し、アートを学ぶ学生や研究者が自由にアクセスできるようにしたい」とエイブラハム氏は語る。

滞在アーティストへのインタビュー

面会者:ミン・プーン(Ming POON、以下「MP」)、グレース・タン(Grace TAN、以下「GT」)。ともに2012-13年度アソシエイト・アーティスト

1. 略歴、活動実績

MP: 1968年生まれ、シンガポール出身。現在はベルリンを拠点に、ダンサー・振付家として活動している。20年前のシンガポールではダンスと言えばクラシック・バレエしかない状況だったため、大学卒業後に渡欧、1993年からオランダをはじめとする欧州各地でダンサーとしての経験を積んできた。ダンス・カンパニーに所属していた時期もあったが、スケジュールに縛られず自分のやりたい表現に専念するため、現在はフリーで活動している。

GT: 1979年生まれ、マレーシア出身。2000年からシンガポールでファッション・デザイナーとしてのキャリアをスタートさせるが、海外ブランドには高い対価を払っても、自国のブランドには斬新さや品質より安さと流行のみを要求するシンガポールのファッション業界に限界を感じ始める。2003年にファッション、アート、建築、数学的理論の垣根を越えたデザインを研究するkwodrentを立ち上げ、様々な分野の表現者とコラボレーションしながら、自身もアーティストとして立体作品を発表している。

2. アーティスト・イン・レジデンスの経験、参加の動機

MP: 2008年から HIV 感染者をテーマにしたプロジェク

トを実施していたところ、2011年、新たにアソシエイト・アーティスト・リサーチ・プログラムを始めるに当たり芸術や文化とは関係のない人々を巻き込んだ活動のできるアーティストを探していたエイブラハム氏から声をかけられ、参加した。HIV 感染を公言することをはばからない欧州と、根強い偏見の残るシンガポールの違いに興味を持ち、反発が強く制限の厳しい環境こそアーティストにとって挑戦する価値のある場所だと、以前からの知人であるエイブラハム氏の申し出を快諾。

テーマに制約のない欧州ではダンサーの関心は技術的な問題に向かっていくのに対し、検閲など制約の多いシンガポールでは“ダンスとはなにか。我々はなぜ動くのか。”といった本質的な問いを掘り下げることができる。

GT: アソシエイト・アーティスト・リサーチ・プログラムに参加して「音楽とデザイン」という新しいテーマに取り組むことになった。

3. 創作活動の支援と成果

MP: 2年間のレジデンスで、身体 (body) の動き (movement) に対する疑問を、ダンスと社会との関わり、様々な集団 (body) の運動 (movement)、といったより広い文脈で捉えることができるようになった。

リサーチの過程で収集した HIV にまつわる資料は最終発表では使いきれないほどの量になった。今後の活動にも影響を及ぼすだろうし、同じテーマに関心を持つアーティストはこれらの資料を使って異なるアプローチの作品を生み出すこともできるだろう。

GT: (「音楽とデザイン」という企画の内容について) 子どもの頃ピアノを習っていたが挫折した経験を思



ギャラリーで開催中のグレース・タン氏の成果発表展の様子。コンピュータ・グラフィックスを使った緻密な平面作品、立体作品が展示されていた。

い出し、もう一度音楽に挑戦してみようと思った。音楽とデザインの共通性をパターンやテクスチャーを使って表現しようとした。最初は何から手をつけていいのか分からず、とりあえず一番有名なバッハのフーガの楽譜を買い、特定のモチーフが楽譜の中でいかに繰り返され、変化していくかに注目して、音をグラフィックに変換していった。機械任せにすれば手早くできる作業だったが、自分自身でグラフィックソフト(イラストレーター)を使いながら新しい言語を獲得するように作っていったからこそ、この作品が生まれた。(オン氏は彼女の作品を「図表とグラフ好きのオタク的プロジェクト」と形容する)

最終発表の展覧会では、切り絵のアーティストとコラボレーションをして平面作品と立体作品を展示。最終発表には間に合わなかったが、私の新しい作品に興味を示した建築家とのコラボレーションの話も進んでいる。

GT: 作品データが大きすぎてサーバがダウンしたり、デザインが複雑すぎてレーザーを使った金属加工が何度も失敗したりしたが、こうした実験的でマニアックな制作に没頭できたのもサブステーションのサポートがあったから。

4. 日本のアーティスト・イン・レジデンスについて

GT: シンガポールと異なり、工芸やテキスタイル分野で豊かな歴史と伝統を持つ日本は魅力的なレジデンス先である。しかしシンガポール芸術大学(School of the Arts Singapore)で教鞭をとっているため、長期にわたる海外のレジデンス事業では教職と作家活動のバランスをとることが難しいと思う。

2. シアターワークス | TheatreWorks

面会日: 2013年3月11日(月)14:30-16:30

面会者: TAY Tong (Managing Director)

URL: <http://www.theatreworks.org.sg>

<http://www.artsnetworkasia.org>

<http://www.72-13.com/>

1. 運営機関の概要

シアターワークスは劇作家のオン・ケンセン(ONG Keng Sen)が芸術監督を務めるシンガポールを代表する劇団のひとつである。各国のアーティストとともに伝統芸能と現代芸術の垣根を超えたコラボレーションで作品を創作し、国内外で上演している。また、異なる地域や芸術ジャンルのアーティストの交流と共同制作を推進するため、レジデンス事業やフライング・サーカス・プロジェクト(Flying Circus Project)、アーツ・ネットワーク・アジア(Arts Network Asia)なども運営している。

(1) 設立趣旨・経緯

シアターワークスは1985年に設立された劇団で、これまでに200作品以上を制作、国内外で2,500回以上の公演を行っている。学生時代から演劇活動を行っていたオン氏は、1988年に法律事務所の職を蹴ってシアターワークスの芸術監督となり、様々な芸術分野の表現者とともに斬新な解釈と批評精神に満ちた作品を発表しはじめる。

シェイクスピアの『リア王』を岸田理央の台本で6ヶ国

の俳優が異なる言語で演じる『リア』(1997)など、伝統と現代芸術、西洋とアジアといった異なる文化の出会いから現代アジアのアイデンティティを描くオン氏とシアターワークスの表現は、日本や欧米でも高く評価されている。カンボジアの大量虐殺を描いた『キリング・フィールドを越えて』(2001)では史料と個人的な経験をドキュメントし、史実をパフォーマンスとして再構成するドキュ・パフォーマンスという手法を考案、実践した。

舞台芸術の発展を牽引した功績が認められ、オン氏は2003年にはシンガポールの文化勲章を授与されている。カンパニーとしての作品を作る一方で、国内の芸術家を対象としたアーティスト・イン・レジデンスや劇作家を育成するライター・ラボ(Writers' Lab)などにも取り組んでいる。

シアターワークスは、1990年代に行った国際共同制作の経験からアジアの芸術家同士の交流が少ないことに気づき、これからは欧州ではなくアジアで地域の芸術家が出会い、語り合う場が必要だと考えた。そうして

90年代後半に戦略的に整備されていったのが、アジアの都市に世界各地のアーティストが集い共同作業を通して新しい表現を模索するフライング・サーカス・プロジェクトやアーティストの交流を促進するネットワーク組織アーツ・ネットワーク・アジアである。

2005年、劇場やギャラリー等を備えた現在の拠点「72-13」に移転し、それまでの取り組みを、①アジアとその他の地域のアーティストの交流を促進する国際アジア芸術センター(International Centre of Asian Arts)及び、②シンガポールのアートと創造産業の出会いと発展を目指すシンガポール・クリエイティブ・アーツ・ニュークリアス(Singapore Creative Arts Nucleus)というコンセプトのもとに全体的に捉えなおし、様々なレジデンス事業を展開している。

(2) ミッション

シアターワークスは創造活動を通じてハイブリットな現代アジアのアイデンティティと美学を探究している。共同制作やアーティストの支援を実施する際も、他とは異なる視点を重視し、アートや社会に生じている格差を埋めることを目指している。

2. プログラム内容と実績

(1) アーティスト・イン・レジデンス

シアターワークスでは活動拠点であるアートセンター「72-13」で、4種類のレジデンス事業を行っている。

① クリエイティブス・イン・レジデンス(Creatives in Residence)

クリエイティブス・イン・レジデンスは2006年から始まった、シンガポールを拠点とするクリエイターを対象にしたアーティスト・イン・レジデンスである。新進気鋭のアーティストとクリエイターに芸術的な戦略と技術を開発する機会を提供することを目的としており、成果物よりも研究と制作の過程を重視している。

○ アーティストの選考方法と実績

2012年までに13件のレジデンスプログラムを行っており、参加者の顔ぶれは舞台芸術の実践者や美術家だけでなく、デザイナー、建築家、ミュージシャン、映画



元倉庫を改造し、ホール、ギャラリーを整備したシアターワークスの拠点「72-13」は、住所の番地から名付けられた。

た映画監督である。シアターワークスは共同プロデューサーという立場で、彼女の「見えない都市 (Invisible City)」という作品の制作費を支援、彼女は滞在中に72-13で連続上映会や公開トークを行った。この作品は後にシネマ・ドゥ・リール国際ドキュメンタリー映画祭や釜山ビエンナーレでも上映された。

監督と幅広い。公募はせず芸術監督のオン氏が参加者を選考しており、事業を担当するマネジング・ディレクターのテイ・トン (TAY Tong) がクリエイターを推薦することもある。参加者は毎年5人程度だが、年によって参加者数は変化する。シアターワークスでは一定の枠組みに沿った事業実施よりもプロジェクトの内容を重視しているため、注目に値するアーティストが見つからなかった場合、事業を実施しない年もあるという。

○ 支援内容と具体例

滞在アーティストは2万シンガポールドル (約160万円) の制作費を支給され、72-13のスペースを無料で利用できる。滞在中に制作過程のプレゼンテーションと最終発表をしなければならない。発表の際にはシアターワークスが舞台技術や広報、制作面でサポートする。レジデンス事業は事前に決まった企画を支援するものではなく、アーティストがやりたいことに応じて柔軟にサポートすべきだという考えのもと、個々の参加者のニーズに合わせた支援が行われている。

ドクメンタ (2002) やマニフェスタ (2008)、上海ビエンナーレ (2008) に出展したことのある美術家、チャールズ・リム (Charles LIM) は、2008年にこのレジデンスプログラムに参加した。彼は郊外の使われていないスカッシュ・コートスタジオに改装するプロジェクトに取り組み、シアターワークスはリノベーションに必要な資金を支援した。72-13 オフサイト (72-13 Offsite) と名づけられたこの場所は制作場所を求めている他の美術作家に提供され、もう一つのレジデンス施設ともいえる場所が誕生した。「リム氏個人に対する支援で終わるのではなく、彼をサポートすることでより広いアートコミュニティの支援へとつながった好例」とテイ氏は評価する。

2007年に参加したタン・ピンピン (TAN Pin Pin) はシンガポールの映画館で初めてドキュメンタリーを上映し

クリエイティブス・イン・レジデンスは事業開始から6年を経て素晴らしい実績をあげてきた。2013年度以降のプログラムに関してはシンガポールのアーツシーンの現状に即して見直しと評価を行っている最中だ。国内のアーティスト・イン・レジデンスは若手アーティストを対象にしたものが増えてきたため、シアターワークスでは発掘された彼らを次のステップへ押し上げるサポートを行っていきたいと考えている。

② アソシエイト・ディレクター・プログラム (Associate Director Program)

アソシエイト・ディレクター・プログラムはクリエイティブス・イン・レジデンスと同じく、シンガポールを拠点とするアーティストを支援する事業である。2012年は美術を専門とするアーティスト集団、ヴァーティカル・サブマリン (Vertical Submarine) が参加し、対話の不可能性をテーマに、4つの小説の朗読を下敷きに4つのストーリーが展開する舞台「Four Plays: ABCD」を上演した。ABCDとは朗読される小説の著者 (Roberto Arlt, Jorge Luis Borges, Julio Cortazar, Marguerite Duras) の頭文字を表している。

③ 海外アーティストを対象としたレジデンス事業

シアターワークスは毎年2名ほどのアーティストを海外から受け入れている。正式名称はなく、滞在目的に応じて、制作過程を支援するプロセス・レジデンスプログラム (Process Residency)、作品の完成を支援するプロダクト・ディベロップメント・レジデンスプログラム (Product Development Residency)、国際交流を行うエクスチェンジ・レジデンスプログラム (Exchange Residency) と呼ばれている。ただし、決まった枠組みはなく、シアターワークスでは、海外アーティストの受け入れに柔軟に対応しているようである。その具体例としてテイ氏がコロンビア外務省との共同プロジェクトを紹介してくれた。



元倉庫を改装し、ホール、ギャラリーを整備。様々な表現活動にフレキシブルに対応できる大空間を有する。

2012年はコロンビアから、ドローイングと紙を使った作品を制作するマテオ・ロペス (Mateo LÓPEZ) とパフォーマンス・アーティストのマリア・ホセ・アルホナ (María José ARJONA) が参加した。これはコロンビア外務省が実施するイレギュラー・ヘキサゴン (Irregular Hexagon) というアーティスト・イン・レジデンスの一環で、シンガポール以外にベトナム、モロッコ、オーストラリア、トルコ、イスラエルの5ヶ国に3週間、コロンビアのアーティストが滞在して作品を作るというもの。プログラムのキュレーターでアートのスペースを運営するホセ・ロカ (José ROCA) はオン氏と面識があった。他の文化施設がアジアか欧州のアートを取り上げる一方で、シンガポールでは見る機会の少ないコロンビアのアーティストを紹介することは、シンガポールのアートシーンとのギャップを埋めることにつながると、連携が始まったそうだ。今回の場合予算は双方が負担し、コロンビア政府が旅費等を持ち、シアターワークスはアーティストの滞在所と制作場所を提供して展覧会を開催した。「特に重要なのは彼らをシンガポールのアートコミュニティとつなぐことだった」とテイ氏は言う。例えばロペス氏は紙と建築に関心があったので、中華系の宗教行事で燃やす紙銭などを作る職人や、建築家や建築を学ぶ学生など多くの人々と出会う機会を設け、彼のリサーチをサ

ポートした。また、香港の芸術文化関係者ともつなぐことが出来た。アルホナ氏の場合はシンガポールの舞台芸術関係者とのつながりを作った。

シンガポールでは様々な舞台芸術のフェスティバルが開催されているが、招へいされるアーティストの国の数で見るとそれほど多様ではない。シアターワークスは90年代からアジアの芸術文化関係者の連絡先データベースのようなものを蓄積しているので、新しいつながりを生み出すコーディネーションが可能になるという。

④ 公募プログラム (Open Call)

公募プログラムはシンガポールの若手アーティストを支援する事業である。非営利のイベント企画を募集し、選ばれた企画には72-13を無償で貸し出し、ワーク・イン・プログレスや公演、展覧会の会場として使ってもらう。会場費以外の費用はアーティストが負担する仕組みとなっている。「今後はプロのアーティストだけでなく現役の美大生にも参加の機会を広げたい。主に教育機関の内部で発表している彼らを象牙の塔の外に出して、卒業後に会おうであろう、よりリアルな観客と触れ合う機会を作っていきたい」とテイ氏はこのプログラムの今後の展開を語ってくれた。

(2) 移動型レジデンス事業：フライング・サーカス・プロジェクト

① 事業の概要

シアターワークスがアジアのアーティスト同士の交流を念頭に1996年に立ち上げたもう一つの事業が、フライング・サーカス・プロジェクトである。フライング・サーカスというネーミングはオン氏によるもので、今の仕事を放り出してサーカス一座に入るように、一定期間どこか別の場所に行き束縛や限界から解放されて、冒険と楽しみに満ちた自由を手にするイメージを表している。このプロジェクトは、一時的にある場所に出現するアーティスト・イン・レジデンスとも言える極めてユニークなものとなっている。

2012年で8回目を迎えるこの事業は当初、日本を含むアジア各国の伝統・現代芸術の実践者がシンガポールを訪れ、互いの差異を認識しながら“21世紀のアジアの表現”を追及する実験室のようなものだった。2004年からはアジア以外にもアラブ諸国や欧米、アフリカなどからもアーティストを招へいするようになった。2007年からは2〜3週間で二つの異なる都市を訪れながらアーティストが共同作業をする場となり、2007年はホーチミンとシンガポール、2010年はブノンペンとシンガポール、そして2012年はミャンマーとシンガポールで実施している。

場所の選定ではタイミングが重視される。98年にミャンマー人アーティストが参加したことがきっかけで、ミャンマーでフライング・サーカス・プロジェクト開催に向けた調査を始めていたが、現地の政治的状況を見計らって実行に移された。その場所で何かが起こりつつある時期であり、海外のアーティストが訪れれば何かしら得るものがある時期が戦略的に選ばれる。

② アーティストの選考と支援内容

参加者は公募ではなくすべてオン氏のキュレーションによって決まる。招へいされる人数は年によって異なるが、おおむね30名前後だ。2000年は3ヶ年プロジェクトだったため参加者は102名にも上った。渡航費や滞在費はすべてシアターワークスが負担し、参加者は居住地に関わらず平等にサポートされる。「文化を越えて

活動する場合、優位に立つ文化をつくらず、全員が平等であると感じてもらわなければならない」とテイ氏は言う。その他、フライング・サーカス・プロジェクトで作品を作るときの制作費もシアターワークスが支援する。

2〜3週間の滞在期間中、アーティストは様々なデイリー・プログラムをこなしていく。プログラムの内容は開催地によって異なる。カンボジアでは映画学校とダンス学校に通う若手のアーティストが対話する機会を設け、海外アーティストはメンター役として対話に加わった。現地の参加者はすでに技術を持っていたので、メンターは教師のように振舞うのではなく、異なる見地を提供することが求められた。

フライング・サーカス・プロジェクトの成果を数値化することは困難だが、ここでの出会いがきっかけで国境を越えたアーティスト同士のネットワークは着実に広がったという。シアターワークスと参加アーティストのコラボレーションによって『デスデモナ』(2000年)や『キリング・フィールドを越えて』といった革新的な国際共同制作が生み出されていった。

(3) 国際ネットワーク型助成事業：アーツ・ネットワーク・アジア

アーツ・ネットワーク・アジアは1999年、オン氏がアジアの芸術関係者に呼びかけて設立した助成団体である。1997年の『リア』の国際共同制作などを経て、欧州だけでなくアジアでもアーティストが出会う場が必要だと認識されるようになった。そうして生まれた事業のひとつがアーツ・ネットワーク・アジアだ。

事務局はシアターワークスが担っており、アジア各国の芸術文化専門家からなる委員会意思決定が行われる。現在の委員はインド、インドネシア、フィリピン、シンガポール、スリランカ、台湾、タイ、ベトナム、中国の専門家9名で、過去にはマレーシア、カンボジア、韓国からも委員が選出されている。

業務は大きく二つあり、ひとつは助成事業、もう一つはアジアの芸術関係者をつなぐネットワーク事業である。いずれも、アーティストの国際交流と滞在や創作活動を支援するアーティスト・イン・レジデンス的な要素を含んでいる。

建物の2階にあるギャラリー。ミーティングスペースなど多目的に利用できる。



一連の業務を担当するテイ氏は「アーツ・ネットワーク・アジアはネットワーク団体というより、ネットワークを作る助成団体」と話す。助成金申請者や採択された事業はデータベースとして蓄積されており、アーツ・ネットワーク・アジアのウェブサイトには国別のアーティスト名簿がある。申請者は海外のアーティストと交流を持ちたいと思っている人々だ。アーツ・ネットワーク・アジアの第二の仕事はこれらの情報をもとに「こんなアーティストとコラボレーションをしたい」という問い合わせに答え、関係を作り、ネットワークを広げていくことである。しかし、最初のつながりを作った後は連絡を取り続けることは強要せず、当事者同士に委ねているという。

政府系の助成団体ではその国のアーティストしか支援されないが、アーツ・ネットワーク・アジアは独立した団体なので、国境を越えて様々な場所で活動する人々に助成できる。アーツ・ネットワーク・アジアが実施する助成プログラムは下記の三つである。

① 事業助成 (Arts Network Asia Project Grant)

2000年から始まった事業助成は、アジア地域内における分野横断的な共同制作や異文化を理解するためのコミュニティ・プロジェクト、アートマネジャー向けの研修などを対象としており、一件につき最大1万米ドル(約100万円)が支給される。募集締切は年末で毎年300件近くの応募があり、その中から10件ほどが採択される。

申請のプロセスは二段階になっている。一時選考で申請者は一枚の企画書にアイデアとコンセプトを書いてオンラインで提出する。申請は英語のほか、日本語を含むアジアの11の言語に対応しており、英語に翻訳された企画書が委員会に提出される。委員会は最終候補を30件ほどに絞り込み、より詳しい企画書の提出を要請する。予算が潤沢だった時には一時選考のために委員たちが集まっていたが、現在はメールでのやりとりとなっている。詳細な企画書と最終候補者への面接を経て、採択される事業が決まる。面接はアジアの都市で2、3日かけて行われる。こうした二つの段階を踏むことで、申請者に過度の負担を強いることがないのだという。

2012年までに144件の事業が採択された。2012年度

には古郷卓司とチャールズ・リムによるアジア各地での展覧会や、マレーシア、フィリピン、タイのウェブサイトを中心に東南アジアの現代美術データベースをつくるサーチ・プロジェクト(SEARCH)、香港と上海でサウンドアートのレジデンスプログラムを行い、作品の上演を行うソニック・アンカー(Sonic Anchor)などが採択された。「香港も上海も中国だが、両者の文化は大きく異なるので交流する意義がある」とテイ氏は言う。

② 渡航費助成 (Travel Grant)

渡航費助成はアジア地域内へ渡航するアジアのアーティストや芸術関係者が応募できる。年間を通じて応募可能で、採択されると最大1,000米ドル(約10万円)が支給される。申請は事業助成と同じく11言語に対応している。過去に採択された企画書はウェブ上にアーカイブされ、誰もが参照できるようになっている。

採択の際には申請者と渡航先の双方にメリットがあるかどうか重視される。直近の例では、香港で行われるキュレーターの国際会議に出席したいベトナム人キュレーターが採択された。選考基準についてテイ氏は「例えば中華系米国人が調査のために中国へ行く場合、申請は採択されないだろう。第一に我々の予算に限りがある。それに米国人なら他の助成金を得ることができる」と話す。

③ クリエイティブ・エンカウンター

(Creative Encounters: Cultural Partnerships between Asia and Europe)

クリエイティブ・エンカウンターはアジアと欧州の交流を目的に、アーツ・ネットワーク・アジア、アジア・欧州財団(Asia-Europe Foundation)、欧州の独立系文化施設のネットワーク組織であるトランス・ヨーロッパ・ホール(Trans Europe Halls)が連携して2011年から開始した助成事業である。

アジア・欧州間の国際共同制作やネットワーク事業、文化施設のパートナーシップなどが助成の対象となる。採択件数は毎年5件ほどで、一件につき最大20,000米ドル(約200万円)を助成する。2012-13年度の申請は2012年7月31日に締め切られ、308件の応募の中から6件が採択された。この助成も二段階で選考を行い、最

終候補に残った13件は二次選考のために改めて詳細な事業計画を提出し、それを元にアーツ・ネットワーク・アジア、アジア・欧州財団、トランス・ヨーロッパ・ホールの三者が採択事業を決定する。2012-13年度は日本とロシアの建築家が行うイベントや、フランス、ドイツ、フィリピン、インドネシア、マレーシアの文化機関が行うドキュメンタリー映画の研修事業などが採択されている。

(4) その他のプログラム：劇団としての活動

シアターワークスはこれらの事業に加えて、カンパニーとしても国内外のアーティストとコラボレーションしながら作品を発表し続けている。またシンガポールの若手劇作家を対象としたライター・ラボでは研修事業のほか新作戯曲の出版や、24時間以内に戯曲を書き上げるコンペなども行っている。かつては教育機関と連携したアウトリーチにも取り組んでいたが、現在は事業を見直し中である。

2013年には24時間戯曲コンペのユース部門優勝者の作品を舞台化して地域の図書館やコミュニティ・センターで巡回公演し、鑑賞後に出演者と観客がディスカッションを行うコミュニティ・プロジェクトにも取り組む予定である。

3. 施設の構成と内容

シアターワークスが拠点としているスペース、72-13はシンガポール川に程近くホテルや飲食店、外国人向け高級マンションが立ち並ぶモハメド・スルタン・ロードに立地する。72-13とは建物の所在地の番地で、隣にはタイラー・プリント・インスティテュート (Singapore Tyler Print Institute) が、近隣にはシンガポール・レパートリー・シアター (The Singapore Repertory Theatre) が拠点とする DBS アーツセンター (DBS Arts Centre) がある。

72-13はもともと米穀倉庫だった建物を改装し、1階にはホワイエ (160㎡、天井高4.8m) と、250人を収容できパフォーマンスや映画上映に使用できる平土間型ホール (294㎡、天井高7.5m) がある。倉庫の面影を残す木製の階段の先にある2階部分にはミーティングスペースとしても使えるギャラリー (272㎡、天井高4.6m) があ

り、ロフト部分にシアターワークスの事務所がある。イベントの形態によっては事務所スペースを移動させることもあるという。

アーティスト・イン・レジデンスの専用施設はないが、これらの空間を柔軟に活用して事業を展開している。もともとはフォート・カニング・パーク内に専用劇場を持っていたシアターワークスだったが、2005年に現在の場所に移転し、レジデンス事業を実施するスペースができた。以前の拠点にはブラックボックスの劇場にもスタジオもあったが、前述のような複数のレジデンス事業を実施するのに十分な場所を確保できなかった。

72-13の建物は土地管理庁の所有物で、280万シンガポールドル (約2億2,400万円) をかけてアートセンターとして整備された。シアターワークスは家賃と光熱費を払っているが、サブステーションと同様、シンガポール・アーツカウンシルのアーツ・ハウジング・スキームにより家賃の大部分が補助されている。年間1ヶ月のみ外部団体のイベントのために会場の貸し出しも行っている。主な貸出先はソニーやブラダ、シャネルなど豊富な資金を持つところで、個人的な誕生日会など小規模なイベントのために会場を貸すことはないという。

4. 運営体制と事業収支

(1) 運営組織

シアターワークスは有限責任保障会社の形態をとる非営利の劇団である。前述のとおり、劇団としての活動のほか、各種レジデンス事業、アーツ・ネットワーク・アジア、フライング・サーカス・プロジェクトを運営している。フルタイムのスタッフは芸術監督のオン・ケンセン氏、マネージング・ディレクターのテイ・トン氏を含めて4-5人。事業の種類や規模に対してあまりにも少ない人員で驚くが、「現場の変化にすぐさま対応していくためには組織や設備に投資しすぎず、少人数を保つほうが有効だ。シアターワークスの成功要因の一つは、この機動力を生かして政府やアーツカウンシルの動きを待たずに、独自に格差を発見し問題に対処してきたことにある」とテイ氏は言う。

テイ氏は1989年からシアターワークスに加わり、レジ

ギャラリーの上にはロフト形式のオフィスがある。スタッフが空間全体、プログラムの動きを常に把握できる。



ダンス事業、アーツ・ネットワーク・アジア、フライング・サーカス・プロジェクトなどに携わっている。1999年にロンドン大学ゴールドスミスカレッジでアートマネジメントと文化政策の修士課程を修了、同年からシアターワークスのマネジング・ディレクターを務めている。

シアターワークスの理事会は常務理事 (Board of Directors) 4 名、実務スタッフ (Board Members Operational) 7 名、名誉理事 (Honorary) 7 名の計 18 名で構成。スタッフの職種は次のとおり。

- Artistic Director
- Managing Director
- Administrator
- Project Manager
- Arts Network Asia Manager
- Financial Support
- External Financial Controller
- Media Archivist (パートタイム)
- Arts Network Asia Administrative Assistant (パートタイム)
- Publicity / Publications Assistant (パートタイム)
- Administrative Assistant (ボランティア、パートタイム)

(2) パートナースhip

現在シアターワークスが公式なパートナーシップを結んでいる団体はない。レジデンス事業ではノルウェーの NIFCA (Nordic Institute for Contemporary Art) と、自国のアーティストに資金を渡して相手国のレジデンスプログラムに送り込むというシンプルなパートナーシップを結んでいた (NIFCA は 2006 年に解散)。90 年代のシンガポールでは海外に学ぶ必要があったため、ブリティッシュ・カウンシルと連携して劇場運営のワークショップを行ったこともある。ゲーテ・インスティテュートやアンステイチュ・フランセとは現在もインフォーマルな形で連携をとっている。

国際的なネットワーク組織には加盟していない。アジア地域においてはアーツ・ネットワーク・アジアやフライング・サーカス・プロジェクトを通じてシアターワークス自身がネットワークづくりの主体となっている。

(3) 事業収支

シアターワークの年間予算は、各年によって異なる。

2011 年度は、収入が 69 万 5,368 シンガポールドル (約 5,600 万円)、支出が 99 万 2,530 シンガポールドル (約 8,000 万円)、2010 年度は収入が 172 万 8,873 シンガポールドル (約 1 億 3,800 万円)、支出が 164 万 9,863 シンガポールドル (約 1 億 3,200 万円) であった。2011 年度支出のうち制作費が 53 万 6,095 シンガポールドル (約 4,200 万円)、人件費が 17 万 9,399 シンガポールドル (約 1,430 万円) である。重要な収入源は会場の賃料 (2011 年度は 160,556 シンガポールドル、約 1,280 万円) と、チケットの売り上げ、個人の寄付などが収入となっている¹。

シアターワークスは年間予算のうち 65 - 70% を芸術活動に充てるようにしている。「フライング・サーカス・プロジェクトなどはリスクの高い事業だが、こうした芸術的な活動にいかにか資金を投入できるかが重要。普通のマネージャーなら無理だというのが、何もかも駄目でフラットな状態になってしまっただけでは観客も自分たちも面白くない。時には損失が出る場合もあるが、他のプログラムで帳尻を合わせている」とテイ氏は話す。

シアターワークスはアーツカウンシルからの助成金のほかに、フォード財団をはじめとする民間財団や私企業からも支援を受けている。政府の助成に頼りすぎて自由な創造活動ができていないカンパニーが多い中、助成金の割合を意識的に下げることで独立性を高め、活動内容に干渉されることを最小限に抑えようとしている。例えば、クリエイティブ・イン・レジデンスはアーツカウンシルの助成を受けて行っているが、その割合は全体予算の 20% 以下である。アーツ・ネットワーク・アジアはすべてフォード財団からの直接助成で運営されていたが、今後は基金を創設してその運用益を運営費に充てていくそうだ。

5. 事業評価の実施状況

レジデンス事業では過去の滞在アーティストのその後を厳密に追っているわけではない。ただ、クリエイティブ・イン・レジデンスの場合は参加者がシンガポー

¹ 出典 TheatreWorks web サイト Financial Information
http://www.theatreworks.org.sg/the_company/financial_information.htm

ルを拠点に活動しているため、その後の動向も自然と耳に入ってくるという。

フライング・サーカス・プロジェクトの場合は数的評価ができるものではないので、シンガポール・アーツカウンシルに対しては、重要業績評価指標（Key Performance Indicator、KPI）にしたがった評価は拒み続け、独自の評価基準で報告している。もし KPI の評価基準に照らし合わせれば、プロジェクトは大失敗という報告になりかねないという。参加アーティストに報告書を提出することは求めているが、多くのアーティストがブログなどに活動記録を書きとめていて、それらは事業の成果を示す根拠となる。こうした活動についてシンガポール政府は当初助成をしたがらなかったが、ここ数年で徐々に理解を示すようになったそうだ。

フライング・サーカス・プロジェクトとアーツ・ネットワーク・アジアはフォード財団の支援で実施している。フライング・サーカス・プロジェクトに関しては質的評価に基づく報告をし、アーツ・ネットワーク・アジアに関しては助成したプロジェクトがいかに効果的であったか、または効果を発揮しなかったかを報告するという。

「シンガポール政府も含め、芸術文化に関しては関係団体が質的評価の重要性を認識していかなければならない。アーツカウンシルも財務省を説得して予算を確保しなければならないので数的評価の資料も必要だが、大部分は質的評価であるべきだ」と、テイ氏は質的評価の重要性を語る。

6. 現在の課題と今後の方向性

シアターワークスが抱える課題のひとつは、革新的でクリエイティブな事業を継続していくためのリソースである。資金面だけでなく、プロジェクトを面白い方向に持って行ってくれるアーティストやそれを支える人材という意味でもリソースは重要だという。

もう一つの課題は、いかにして人々にプロジェクトを楽しんでもらえるかということだ。「シンガポールの人々は常にやるべきことを抱えており、自己利益を越えたことについて考える時間が持てない。5秒でもいいので彼らから時間を掠め取って、アートの魅力を伝えていくことが課題。例えば今シンガポールでは外国人の受け

入れを増やすかどうかで緊張が高まっている。こうした時期こそ、我々が長年取り組んできた他者との対話、異なる視点への気づきといったことが重要で、アートがその役割を果たすところだと思う」とテイ氏は話す。

2012年度でシンガポール・アーツカウンシルからの3年間の事業助成が終了し、シアターワークスのレジデンス事業は見直しの時期を迎えている。シンガポール国内にアーティスト・イン・レジデンスが増えてきたため、シアターワークスでは人材育成の面からギャップを埋めることができるよう、新しい構想を考えているところだ。シンガポールは小さな国なので、複数の場所で同じことをやっても効率が悪い。他のレジデンス事業では若手を支援するプログラムが多いので、シアターワークスでは発掘された若手をもう一歩先のステージへ導くようなことに資金を投入していく計画である。「アーツカウンシルの3年間の助成が終わる度に事業内容が変わっていくように受け取られるが、今日的な問題に取り組み、ギャップを埋めていくためには当然必要なこと。我々自身が変化し続けなければならない」とテイ氏は言う。

日本との連携やアーティスト・イン・レジデンスの可能性については、シアターワークスではすでに日本との関係ができているので、事業に日本人アーティストが関わってくるのは自然だという。またシアターワークスも過去にセゾン文化財団のアーティスト・イン・レジデンスで日本に滞在した経験がある。「日本のアーティスト・イン・レジデンスは東京や大阪など都市部に集中している。地方都市にアーティストを呼んで出合いを増やせば、そうしたギャップを埋められるのではないか」というのがテイ氏のアイデアである。またテイ氏は「日本とアジアの交流を考えた場合、アーティスト・イン・レジデンスを実施し、資金援助するだけでなく、しっかりとキュレーションされた場で滞在アーティストが経験を深めることのできるような事業が必要ではないか。数は多くなくても、質の高い事業を行っていくことが大切だ」と今後のあるべき方向性を語ってくれた。

3. シンガポール・タイラー・プリント・インスティテュート |

Singapore Tyler Print Institute

面会日：2013年3月12日（火）11:00-13:30

面会者：OGAWA Eitaro (Chief Printer)

IWASAKI Tamae (Printer)

URL: <http://www.stpi.com.sg/>

1. 運営機関の概要

シンガポール・タイラー・プリント・インスティテュート（以下、STPI）は、米国版画工房の発展を支えたプリンター、ケネス・タイラー（Kenneth TYLER）がシンガポール政府と協力して設立した版画工房兼ギャラリーである。年間を通じてアーティスト・イン・レジデンスと展覧会を開催し、作品の販売、学校や一般向けの教育プログラムも実施している。

(1) 設立趣旨・経緯

STPI はタイラー氏の遺志により、世界中のアーティストが技術とアイデアを磨くアーティスト・イン・レジデンスとして運営されている。1990年代、新たな活動拠点を探していたタイラー氏と、芸術文化のインフラ整備を進めていたシンガポール政府の意向が一致し、両者の協力関係の下に整備が進められた。ニューヨークを拠点に活動を続けていたタイラー氏は70歳を超える年齢になって、後進の育成を構想していた。そしてこれらの活動は、ニューヨークではなくこれからアート活動が活発になるであろうアジアで行うのが適切だと考えた。しかし彼の版画工房の設備は個人の力で移送するには巨大すぎたため、日本、タイ、オーストラリアなどアジア各地に協力者を求めてアプローチをかけた。その中で前向きな反応を示したのがシンガポールだった。

当時のシンガポールでは、経済発展一辺倒の政策の結果、人々が訪れ、暮らしてみたいと思うような文化的豊かさに欠けていることが課題となっていた。政府は1989年に初の文化政策の指針となる「文化と芸術に関する諮問委員会レポート」を発表し、各種文化施設の整備に着手した。タイラー氏の版画工房の構想は当時のシンガポールの文化政策の方針に一致するものだった。

STPI の設立当初からのスタッフでチーフ・プリンターの小川栄太郎氏は「タイラー氏ひとりを支援するのではなく版画工房という施設、システムを支援することで、様々なアーティストが集い、新しい活動を始め、発展させていく可能性があった。また美術館を整備する場合、政府は一方的に資金援助をせざるを得ないが、版画工房では作品の売買が行われる。政府の手を離れて

もお金と人の動きを生み出すことができるという点でも好都合だったのではないかと当時の経緯を振り返る。

こうして1990年代後半から、情報通信芸術省（Ministry of Communications and Information、2012年にMinistry of Culture, Community and Youthに再編）、公営賭博管理庁（Totalisator Board）、観光局（Tourism Board）の支援でシンガポール川沿いにあった古い倉庫を版画工房に改築する作業が始まった。2002年、長年タイラー氏とコラボレーションしてきた米国現代美術の巨匠フランク・ステラ（Frank STELLA）の展覧会でSTPIの歴史が幕を開ける。副ディレクターのオン・ブーンチャイ（ONG Boon Chai）氏によればSTPIは政府が進める「ルネッサンス・シティ・プラン III」の中でシンガポール美術館（Singapore Art Museum）、シンガポール・アートギャラリー（Singapore Art Gallery、2015年開館予定）とともに3館でビジュアルアーツ・クラスターとして機能することが期待されているようだ。

タイラー氏はSTPIの開館後数ヶ月はシンガポールに滞在してワークショップなどを実施し、限られた時間であったが技術の伝承などに取り組んだ。STPIでは現在でも一般向けの版画講座や子ども向けワークショップも開催しているが、事業の中心はあくまでも世界屈指のアーティストを招待して行うアーティスト・イン・レジデンスである。ともすれば趣味の版画教室にもなり得る施設を、一定のクオリティを守り続けることで国際的にも注目されるような斬新な作品が生み出される場所として運営し続けている。

(2) ミッション

STPIは、伝統的な手作業による職人の技術的サポートでアーティストの表現活動の幅を広げ、この場所でしかできない作品づくりを実現することを目指している。同時にアーティストの革新的なアイデアによって、職人の持つ版画（print）と製紙技術の可能性を広げていくことを目的とする。版画工房として常に新しい表現と技術に挑戦し続けることと、ギャラリーとして質の高い作品を世界に送り出していくことが活動の両輪となっている。

シンガポール川沿いに面した倉庫を改装した建物を、版画工房としてリノベーション。シアターワークスのアートスペース「72-13」と隣接している。



2. プログラム内容と実績

(1) アーティスト・イン・レジデンス

STPI のアーティスト・イン・レジデンスでは毎年6-8人のアーティストを招待している。大抵のアーティストは二期に分けて STPI を訪れる。4週間と2週間の2回に分けて滞在するアーティストが多いが、制作プロセスやスケジュールによって滞在期間も滞在中の作業内容も異なり、忙しいアーティストの場合は1週間刻みで何度か訪れることもあるという。

レジデンスにあたっての渡航費、滞在費(専用アパートメントの提供)、制作費、日当は STPI によってカバーされる。制作費に関してはアーティストに費用が支払われるのではなく、STPI の工房を無償で貸し出し、作品制作に必要な紙やインクなどの材料の調達や職人への給料の支払いを STPI が行うという形式である。また展覧会の開催とカタログの発行、完成作品のプロモーションまで STPI が行う。レジデンスで制作する作品に関して、基本的にアーティスト自身が費用を支払うことはない。

他の版画工房と比較すると、STPI で制作されるエディションの数はかなり少なめに設定されている。量産を前提にする必要がないのでアーティストが実験的な作品に取り組みやすく、ユニークな作品のほうがコレクターにも好まれるという。作品の所有権と売買、プロモーションの権利についてはアーティストと個別に契約を交わす。多くの場合アーティストと STPI が半分ずつ権利を所有することになるが、アーティストの所属するギャラリーがプロモーションを行う場合は、ギャラリーにも作品売買による収入の一部が支払われるような契約になる。例えば、日本人アーティストでシンガポールにマーケットがない作家の場合、日本のギャラリーの協力を得て作品を販売する必要がある。STPI のアーティスト・イン・レジデンスは作品を作って終わりではなく、作品を売るところまでが重要な作業の一つとなっている。

作品制作以外のアーティスト支援としては成果発表の展覧会を開催している。STPI はギャラリーを会場として提供し、カタログの作成も行う。アーティストには限られた期間の中で制作に集中してもらうことを最優先とし

ているため、教育プログラムの実施は求めている。アーティストトークなどは滞在アーティストの負担にならない範囲で行われる。「優れたアーティストがよりよい作品を作ることが、ひいては観客の教育にもつながる。まず作品があって、教育プログラムはそれを補助するものという位置づけだ」と小川氏は説明する。

滞在中のアーティスト名は本人から要望がない限りすべて STPI のサイトで公開される。参加者はいずれも国際的に著名なアーティストたちなので地元の美術館やギャラリー関係者は自然とコンタクトをとってくる。希望者が多いので、アーティストの制作活動に影響が出ないよう、面会はアポイントメント制にしている。コレクターやギャラリーはいち早く新作を購入しようとするので、STPI のギャラリーではどのタイミングで彼らに門戸を開くかに細心の注意を払っている。

(2) アーティストの募集・選考方法、応募アーティストの条件

公募はせず、アーティストはディレクターのエミ・ユー(Emi EU)のキュレーションにより招待される。有名ギャラリーから推薦があった場合は受け入れることもあるという。「STPI のアーティスト・イン・レジデンスは好条件のため参加したいというアーティストが多く、公募にしてしまうとコントロールが効かなくなる。彼らを説得して申し出を断ることはとても難しいので、あえて間口を狭くしている」と小川氏は言う。年間6人のアーティストを受け入れているため、急な推薦や申し出があっても時間的に実現は難しいそうだ。

作品を制作することが前提となるため、アーティスト以外の専門家は対象とならない。招待にあたっては STPI のスタッフがアーティストの展覧会やアートフェアを訪れて交渉する。すぐにレジデンスに来る場合もあれば、事前に工房の様子を見学し、参加を決める場合もある。

アーティストの条件としてはまず、国際的に活動し一定の評価を得ていることが挙げられる。芸術的な側面ではユー氏のキュレーションは明確で、いわゆる版画の作家というより、コンセプチュアル・アートや彫刻などの分野に取り組み版画界に革新的なアイデアと技術をし



版画スタジオの一室(左)

ギャラリー(右)

提供する可能性のあるアーティストが選ばれる。同時にコマーシャル・ギャラリーとしてのビジネスの観点からは、ギャラリーにおける作品売買や美術館のコレクションとしてのマーケットを有するアーティストであることが重要な選択基準になってくる。

しかしビジネスを度外視した企画を採用することも出来ない。「売れるかどうかを基準にプロジェクトの可否を決めていると、動きが止まってしまう。売れないだろうと思った作品が売れるということもあるため、実験的なプロジェクトも対象にしている」と小川氏は言う。

(3) プログラムの実績・過去の滞在者

STPI のアーティスト・イン・レジデンスでは2012年までに61名のアーティストが滞在している。12名がシンガポール人、49名が海外のアーティストで、そのうち40名はアジア太平洋地域の出身者である。政府の支援を受けているため、年に最低一人はシンガポールのアーティストを招待するようにしている。参加アーティストにはリクリット・ティラヴァーニャ(Rirkrit TIRAVANIIJA)、リチャード・ディーコン(Richard DEACON)、林天苗(LIN Tianmiao)、ス・ドホ(Do Ho SUH)など現代美術界を代表するアーティストの名前が並ぶ。日本からは過去に束芋(2010年)、志賀理江子(2007年)、照屋勇賢(2006年)らが参加している。

(4) その他のプログラム

① 展覧会

STPI ではアーティスト・イン・レジデンスの成果発表としての展覧会のほかに、年に数回企画展を開催している。これまでに現代版画の名作コレクションを紹介する「STPI サマー・ショー」などが開催された。

② 教育プログラム

地域の教育機関や博物館などの文化施設に対しては工房のツアーや制作を体験するワークショップを実施しており、これまでに21団体が参加している。一般向けには毎月1回版画講座を開催しており、ゲスト用の小さな工房でリトグラフや銅版画など毎回特定の技法を取り上げて実技を教える。2日間の短期ワークショップで、参加者全員が制作を行うため定員は8-10人に限られる。STPI の職人が講師となって実施するため、

募集開始と同時に定員が埋まってしまうという。

講座以外でも会費を払って STPI メンバーになるとゲスト用工房を有料で使用できる。現在の会員数は20人ほどで、シンガポール人のほか、STPI の近隣に住む駐在員が趣味で版画を制作するために登録している。しかし技術と知識がなければ工房を使いこなせないため、版画文化の根付いていないシンガポールでは会員が自主的に工房を使用するという状況になっていない。技術講座を行いながらアクティブな会員制度への移行を目指しているが、後述するとおり、技術を持った人員に限りがあるため、現状では実現は難しいという。

また年に1回オープン・ハウスと称して工房全体を無料で一般公開する家族向けのイベントを開催している。1日で1,000人以上の来場者が訪れ、職人の指導でリトグラフやエッチングなどを制作するワークショップは長蛇の列ができる人気プログラムである。

③ 作品売買

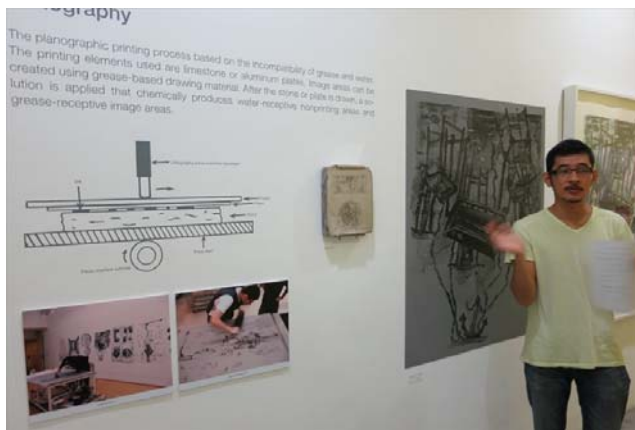
STPI ではシンガポールでの作品販売のほか、ニューヨークのアモリー・ショーやアート・バーゼル 香港など海外のアートフェアに出展して作品を販売している。

3. 施設の構成と内容

STPI はシンガポール川沿いに面した倉庫を改装した建物である。1921年に建てられた建築だが、外壁を残して版画工房として大規模なリノベーションが行われた。1階部分にはレストランが、隣はシアターワークスのアートスペース「72-13」が入居している。

延べ床面積4,000㎡の施設内には、製紙工場、400㎡のギャラリー、視聴覚室、ゲスト用工房、事務所、レジデンスプログラム専用スタジオと住居を備える。これは家賃が高く場所を確保することが困難なシンガポールにおいては、他のレジデンス担当者も羨む好条件である。アーティストは4階の宿泊施設に滞在し、期間中、24時間スタジオを利用できる。

ギャラリーから工房につながる廊下には、タイラー氏の功績や STPI の歴史、歴代の滞在アーティストや製紙技術などを解説したパネルが並び、学生などが見学



STPI の教育プログラムのひとつとして、来館者に版画制作のプロセスを紹介する展示を行っている。銅版画、木版画、リトグラフ、シルクスクリーンなど、あらゆる版画技法のプロセスを知ることができる。

に来た際に参照できるようになっている。

アジア最大規模を誇る製紙工房、版画工房ではリトグラフ、沈み彫り、レリーフ、シルクスクリーンなどの専門家がアーティストの制作をサポートする。タイラー氏がフランク・ステラ氏などの巨大な作品を作るために設計した500t のプレス機といった巨大な設備も完備されている。アーティストはこうした環境のもとで職人の力を借りながら自分のスタジオではできない表現に挑戦できる。それが STPI のアーティスト・イン・レジデンスの特色となっている。

4. 運営体制と事業収支

(1) 運営組織

STPI は非営利組織で、現在全体で24名ほどのスタッフを抱えている。フルタイムのスタッフは20名で、そのうち工房で働くプリンター（刷り・摺り師）が7名、ペーパーメーカー（製紙職人）が3名で、ギャラリーで作品管理を担当するスタッフが10名である。アーティスト・イン・レジデンスのキュレーションを担うのはディレクターのユー氏で、副ディレクターのオン氏がマネジメント全般を担う。チーフ・プリンターの小川氏はリトグラフの専門家であるが工房での作業には全面的に関わっている。

工房の職人たちはほとんどがシンガポール人で、南洋芸術学院(Nanyang Academy of Fine Arts)やラサール芸術大学(LASALLE College of the Arts)など芸術系大学の出身者が多い。STPI 設立当初はタイラー氏が、タイラーグラフィックスの工房長と二人の職人をニューヨークからシンガポールに連れてきたが、現在は3名とも工房を離れている。開館前にはシンガポールの職人6人に対しニューヨークの工房で技術訓練も行われたが、シンガポール人スタッフの定着は難しく、6人とも辞職してしまったという。

ギャラリーのスタッフの経歴はアートギャラリー勤務経験者や芸術系の大学出身者が多い。アーティスト・



イン・レジデンスの期間中はインターンが入って制作をサポートする。調査時は高等専門学校(Polytechnic)の学生がインターンとし働いていた。インターンとパートタイムで計4名ほどが勤務している。スタッフの職種は以下のとおり。

- Director
- Deputy Director
- Gallery Manager
- Head, Marketing and Development
- Exhibition and Education Coordinator
- Gallery Staff
- Printer
- Paper Maker

(2) パートナースhip

STPI では、アーティストが作りたい作品によって随時国内の企業や文化施設と連携を取っている。というのも、アーティストが制作で必要とする技術や機材がプロジェクトによって大きく異なり、それをすべて STPI が整備することは不可能だからである。例えばリクリット・ティラヴァーニャ氏の場合は、作品で3D プリンターを使用したいという話になった。STPI でも3D プリンターに興味を持っていたので機材を所有する地元企業を調査し、連携して作品づくりに取り組んだ。インクジェットプリンターを使った作品でも地元企業の協力を仰いだことがある。

こうした機材を購入しなかった理由は、STPI が伝統的な手仕事による製紙・印刷技術の実践を活動の中核においており、そうした技術に関する設備投資が最優先されるためである。職人の技術に対する確固たるポリシーがある一方で、「技術の継承は重要だが、そこに固執しすぎると頭が固くなりすぎるので、アーティストの要望には柔軟に対応している。技術を残すことが目的なのではなく、面白い作品を作るために技術を使う、ということを常に意識している」と小川氏は話す。

教育プログラムを通じて、国内の教育機関や文化施設とも連携している。後述のとおり今後は大学とのつながりを強化していきたいという。

海外とのパートナーシップに関しては、例えば日本の阿波和紙の工房、アワガミファクトリーとは技術面での情報交換を行ったり、STPI の職人を研修に送ったりというインフォーマルな形での交流が行われている。国際ネットワーク組織には加盟していない。

(3) 事業収支

年間予算は約400万シンガポールドル(約3億2,000万円)で、2011年度の収入は435万7,000シンガポールドル、支出は402万4,000シンガポールドル、2010年度の収入は405万1,000シンガポールドル、支出は399万8,000シンガポールドルであった。

2011年度支出のうち人件費を含むプログラム運営費は337万1,000シンガポールドル(約2億7,000万円)である。STPI の主な収入はアーティスト・イン・レジデンスで制作された作品の売り上げだが、政府や民間の財団から助成も受けている。アーツカウンシルからの助成金の割合は設立当初は大きかったが、芸術団体の自立を促すという方針に従い年々少なくなっているそうだ。2011年度収入における助成金の総額は115万7,000シンガポールドル(約9,250万円)となっている²。

5. 事業評価の実施状況

STPI の事業評価は重要業績評価指標(Key Performance Indicator)に基づいてなされている。

6. 現在の課題と今後の方向性

STIP での課題は人員の確保である。講座の参加者からは継続的に実施して欲しいという要望があるが、工房の職人が講座にかかりつきりになってしまうとアーティストとの制作に時間が割けなくなる。仮に技術を持った人材が現れたとしても、一般向け講師よりも、工房でアーティストと作品を作る戦力としての仕事が優先され

る。そうした事情から、教育プログラムを運営していくための人材は常に不足している状態である。

今後の方向性について、小川氏は「レジデンス期間が異なるためアーティスト同士が直接交流することは稀で、現地のアーティストの卵のような人たちとのつながりも生まれていない。人と人が出会う機能が強化されればレジデンスの効果は倍増するだろう。レジデンス滞在中に現地の人々に関わる機会をうまく設けていきたい」と話す。現状のアーティスト・イン・レジデンスは外部から閉ざされた環境の中でアーティストが制作し、完成した作品を展覧会で目にするしかない。アーティストも開催されるが、聴衆の多くは美術館関係者やコレクターなど作品の買い手で、一般の観客や子ども、これからアーティストになりたいというような作り手の姿は少ない。作品制作及びギャラリー活動と、教育プログラムにかかる労力の比重は現状では8対2程度だそうだ。小川氏は「工房の職人たちはアーティストと対話し、新しい技術に挑戦するというレジデンスの肝となる作業に携わるが、こうした体験をもっと多くの人々と共有していきたい」と話している。

地元の芸術系大学と連携の可能性も探っており、現在行っているインターンの受け入れのほか、レジデンス中のアーティストの制作に多くの学生がボランティアとして携わるようなことにも挑戦してみたいという。ホワイトカラーとブルーカラーの格差や意識の違いがはっきりしているシンガポールでは、手作業をする職人に対する敬意がない。そうした環境の中で職人として仕事を続けていくためには、工房に入ってから学ぶのではなく大学機関に在るうちから意識を育てていかないと間に合わないという危機感があるそうだ。

日本のアーティスト・イン・レジデンスに関して小川氏は「ひとりのアーティストに対する支援よりも、自身がレジデンス事業をプロデュースしたいと考えているような人材を支援するほうが効果的ではないか」と言う。つなぎ手が自らアーティストを呼び、場所をつくるので、個人のアーティストや施設に助成するよりも活動に広がり生まれるためだ。ただし、そうしたつなぎ手となれるような人材が不足していることも課題であると話していた。

² 出典 STPI web サイト financial statement
<http://www.stpi.com.sg/financialstatement.php> (2013年5月21日取得)

4. オブジェクティブス | Objectifs

面会日: 2013年3月11日(月)11:00-12:00、22日(金)15:00-16:00

面会者: Charmaine TOH (Programme Director)

Leong PUIYEE (Assistant Manager)

URL: <http://www.objectifs.com.sg>

1. 運営機関の概要

オブジェクティブスは写真と映像に特化した民間のアートスペースである。多彩な写真・映像制作講座を開講し、展覧会や上映会、アーティスト・イン・レジデンスなどを通じて多くの写真家・映像作家を育成し、観客の裾野を広げている。

(1) 設立趣旨・経緯

オブジェクティブスはエメリン・ヨン(Emmeline YONG)とドーン・テオ(Dawn TEO)によって2003年に設立された。米国に留学し海外で働いていた両氏は、各国の中小規模のアートスペースの活動に触れる中で自分たちも写真と映画への情熱を形にできるスペースを運営したいと考え、2002年にシンガポールへ帰国後オブジェクティブスを立ち上げた。

2000年代初頭のシンガポールには、写真や映画の技術を学ぶ場所は、趣味としての文化講座かプロを目指す専門的な学科やコースの両極端しかなかった。作品発表の場は、主なミュージアムと当時オープンしたばかりのエスプラナード、映画関係者にとって重要な拠点となっていたサブステーションに限られていた。こうした状況を受け、ヨン氏とテオ氏は、オブジェクティブスを写真・映画のセミプロの愛好家たちが趣味の域を超えた技術を学べる場所、そして若手の写真家・映画制作者が作品を発表し、他のアーティストと出会うことのできる場にしようと考えた。

ヨン氏らは街角のコーヒーショップに写真家や映画監督、アートマネジャーを集めてミーティングを重ね、ビジネスマンや観光客で賑わうリャンシャー・ストリートに最初の拠点をオープンさせた。2006年にはシンガポールと東南アジアの短編映画を専門に扱うオブジェクティブス・フィルム(Objectifs Film)を地元の制作会社(Infinite Studio、Shooting Gallery Asia)とジョイントベンチャーで立ち上げ、世界各国への映画を配給し、DVDの販売を始めた。事務所が手狭になったため2009年には同じくブギス地区にある観光名所のアラブストリートに移転し、今日に至っている。

(2) ミッション

シンガポールの写真家、映画監督、ビジュアル・アーティストを支援し鑑賞者の裾野を広げることを目指している。またシンガポールの作家の海外進出をサポートし、海外のアーティストとシンガポールのアートコミュニティやアートファンとの交流を促進している。

2. プログラム内容と実績

(1) アーティスト・イン・レジデンスの目的と概要

オブジェクティブスの活動は教育プログラムがメインとなっており、レジデンス事業もその一つに位置づけられている。オブジェクティブス・レジデンシー・アンド・ラボ(Objectifs Residency & Lab)と名づけられたこの事業の目的は、スキルアップを目指すアーティストに制作場所を提供し、新しい作品づくりを支援することである。海外のアーティストがシンガポールの様々なアーティストやその他のコミュニティと出会い、異なる視点やアイデアを交換することを目指している。

(2) アーティストの募集・選考方法、応募アーティストの条件

プログラムの参加者は毎年一回公募で選ばれる。応募の締切りは3月中旬である。応募者は写真か映像を使った作品を制作するアーティストに限られ、21歳以上で英語を話せることが条件となっている。キュレーターなどアーティスト以外の専門家は受け入れていない。レジデンスプログラムを担当するプログラム・ディレクターのシャーマイン・トー(Charmaine TOH)によれば「応募者の国籍は問わないが、シンガポール人アーティストは国内外で沢山のレジデンスの機会があるので、2010年頃からは海外のアーティストを重視している」そうである。

毎年40-50件の応募があり、その中からシンガポールで制作するに相応しい企画を2-3件トー氏が選考する。新作の企画でもいいし、既存のプロジェクトの一部をシンガポールで制作するものでも構わない。応募者は希望の滞在期間(5月から11月までの間で6週間、第二希望まで記入)、プロポーザル、ポートフォリオ、推薦状(2通まで)を提出する。また応募書類にはアーテ



オブジェクティブスは、アラブストリートに面したビルに入居している。周囲にはモスクや絨毯屋などが立ち並ぶ。

アーティストがレジデンス期間中に実施可能な講座やワークショップの案を記載する必要がある、シンガポールのコミュニティと関わりの深いものであるかどうかを選考上重要になってくる。応募者は同時に他の奨学金や助成金に申し込むことも可能である。

(2) 支援の内容と地域プログラム

アーティストには6週間のレジデンス期間中、奨学金と制作費(それぞれ1,000シンガポールドル、約8万円)と滞在場所が提供され、制作にあたってはオブジェクティブスの施設と機材を使うことができる。またオブジェクティブスが実施しているプログラムを3つまで見学できる。滞在アーティストは期間中の約8割をシンガポールで過ごすことが期待される。アーティストは作品を完成させる必要はないが、何らかの形で最終発表を行う必要がある。レジデンスプログラムが終了すると期間中に制作した作品のコピーをオブジェクティブスに提出することになっている。

滞在アーティストには作品制作以外に独自のワークショップやトークを実施することが求められ、そのための時間を毎週最長で6時間確保しなければならない。企画の形式や対象者は問わないが、地域のコミュニティに深く関わるものが求められる。例えば2012年に参加

したポーランド人アーティスト、カロリーナ・ブレグラ氏(Karolina BREGULA)は「社会に変化をもたらすツールとしての写真」と題し、7-8人の参加者を対象にした2時間のワークショップを行っている。

(4) プログラムの実績、過去の滞在者

オブジェクティブスのレジデンスには、2012年までに10ヶ国から23名のアーティストが参加している。参加者は40歳以下で英語圏からの応募が多い。過去に米国在住の日本人からの応募はあったそうだが、日本人のレジデンス実績はまだない。トー氏は「オブジェクティブスでは通訳や翻訳をサポートできないので、日本人アーティストにとっては英語でのプロポーザルがハードルになるのではないかと推測している。

トー氏は成功したレジデンスとして、2011年に参加したブラジル人アーティスト、キカ・ニコレラ(Kika NICOLELA)と米国人の写真家、オブリー・エドワーズ(Aubrey EDWARDS)を挙げる。ニコレラ氏は多文化・多言語社会を捉える映像作品を作ろうとオブジェクティブスのレジデンスプログラムに申し込んだ。彼女の「そこにはない映画(The Film That Is Not There)」という映像プロジェクトは世界各地の俳優が母語で出演するもので、オブジェクティブスに加え、オーストラリア、韓国、

エントランスから入ってすぐの場所に設けられたショップスペース。シンガポールの写真家、映像作家の作品、DVDなどが並ぶ。

スイスのレジデンスを利用し、母国ブラジルを含む5カ国から総勢200人の俳優が参加して制作された。

エドワーズ氏はシンガポールの性転換者の歴史を扱うプロポーザルを提出、「ゴールドダスト(Gold Dust)」というプロジェクトでシンガポールの性転換者コミュニティを取材し、彼らの実態と困難を写真とオーラルヒストリーを使って紹介した。「どちらもシンガポールに来なければ実現できない作品だったので支援を決めた。アーティストのモチベーションも高く、積極的に地域コミュニティに関わる企画を進めていった」と、トー氏はこの二人のケースの成功要因を語った。

(5) その他のプログラム

オブジェクティブスではアーティスト・イン・レジデンスの他に①写真・映像制作講座、②展覧会、③イベント企画・コンサルティング、④作品販売・出版事業を行っている。

① 写真・映像制作講座

オブジェクティブスの事業の根幹をなしているのは、年間100コース近くが開講される写真・映像の多彩な制作講座である。講師はシンガポールを拠点に活動するプロの写真家と映画制作者で、現在写真部門には36名、映像部門には23名が登録されている。内容は基礎講座のほか、中・上級者向けの編集や脚本に特化したもの、プロの写真家を対象にしたものまで多岐にわたり、受講料も80－800シンガポールドルと幅広い。映像講座の一部はメディア開発庁(Media Development Authority)の人材育成事業(Talent Development Scheme for media freelancers)の対象となっており、シンガポール人と永住者は受講料の90%が補助される。

また、オブジェクティブスではセミプロの写真家を対象にしたシューティング・ホーム(Shooting Home)という非営利の研修事業も実施している。毎年10人の写真家を公募で選考し、シンガポールの著名な写真家たちがワークショップの講師として参加し、研修の成果はオブジェクティブスのギャラリーで展示される。ワークショップ終了後も1年間はプロの写真家がメンターとして参加者の相談役になる。この事業は2003年に、文化勲章



受章者でもあるシンガポール人写真家、テイ・ケイチン(TAY Kay Ching)とともに立ち上げ、これまでに研修を終了した者の半数以上がプロの写真家や教育者としての道を歩んでいる。シューティングホームという名前には、自分が暮らす身近な環境(Home)からインスピレーションを得て、地域のアートシーン(Home)に貢献するような作品を作り上げて欲しいという願いがこめられている。2011年からはアーツカウンシルの助成を受け、15－18歳を対象に6日間の集中ワークショップと展覧会を行うジュニア・シューティングホーム(Junior Shooting Home)も実施している。

外部団体にも教育プログラムを提供しており、これまでに30校以上の小中学校・高校、30社以上の企業、ミュージアムなどで写真や映像の講座を実施している。

② 展覧会

ギャラリーではシンガポールの写真家を中心に紹介する展覧会を開催している。オブジェクティブスが企画するものが中心だが、アーティストから企画が持ち込まれる場合もあり、シンガポール・ビエンナーレのサテライト会場としても使われた。オブジェクティブスの写真・映像講座の修了生が最終作品を発表する場ともなっている。

③ イベント企画・コンサルティング

オブジェクティブスでは写真や映像をテーマにしたイベントを様々な場所で開催し、他団体が主催するイベントのコンサルティングも行っている。毎年11月には国立博物館やラサール芸術大学(LASALLE College of the Arts)などと連携して、夜間飛行ビデオ・チャレンジ(Fly By Night Video Challenge)という映画イベント行っている。

映画監督タン・ピンピン(TANG Pin Pin)とオブジェクティブス・フィルムのワーユニ・ハディ(Wahyuni A. HADI)が企画するこのイベントは、参加者が当日与えられるテーマに沿って48時間以内に短編影像を完成さ



暗室。若手写真家のワークショップのほか、有料での個人利用が可能。

素があふれるこのエリアには魅力的な被写体が多くある」とトー氏は言う。オブジェクティブスの建物はもともと肉体労働者の宿舎として使われていたらしく、1階部分には水煙草を提供すカフェが入居し、2-4階部分と屋上がオブジェクティブスの施設となっている。2階には事務所とショップ、上映会や講演のできるスペースがあり、3階は54㎡のギャラリーと教室、4階には映像・画像ソフトの入った iMac が使えるデジタル・ラボ、8㎡ほどの小さな会議室と暗室がある。65㎡の屋上は映画上映会やオープニング・パーティーなどに使われる。

アーティスト・イン・レジデンスの専用施設はなく、すべての設備はオブジェクティブスの他の事業でも使用しているほか、一般への貸し出しも行っている。オブジェクティブスの主催する講座の受講者は無料で、修了生は割引料金で暗室やラボを使用できる。滞在アーティストの住居はアパートのルームシェアの一室となっている。「我々は小さな施設しか持たない小規模な会社なので一度に沢山の滞在アーティストを受け入れることは不可能だ」とトー氏は言う。

せ、競い合うというもので2012年で9回目を迎えた。

政府が主催するイベントのキュレーションも行っており、2013年には国防省 (Ministry of Defence) が国民教育 (National Education) の一環としてシンガポールのアイデンティティを体現するような作品を募集する短編映像コンペ Cine65 や、国土交通庁 (Land Transport Authority) が学生から公共交通機関の思い出を募集し、短編映像化する「交通のお話を教えて (What's your transport story?)」などの企画を手がけている。

その他、過去には300シンガポールドル (約2万4,000円) 以下の作品を販売するアフォードブル・フォト・フェア (Affordable Photo Fair) や低賃金移民労働者が撮影した作品を紹介する写真展インサイドアウト (InsideOut、NPO と Migrant Vices と共催) などユニークな企画を実施し、シンガポールの写真・映像文化の振興に貢献してきた。

④ 作品販売・出版事業

オブジェクティブスのショップではオブジェクティブス・フィルムが発行する映画の DVD や、シンガポールで活躍する写真家の作品を販売しているほか、ロモグラフィカメラ、オリジナルデザインの文房具も取り扱っている。

2013年には設立10周年を記念して「カメラの向こう側ーシンガポール現代映画の個人的回想 (Behind the Camera: Personal Recollections of Contemporary Singapore Cinema)」と「リフレクト・リフラクトーシンガポール写真批評集 (Reflect/Refract: Essays on Photography in Singapore)」の二冊の書籍を出版した。

3. 施設の構成と内容

オブジェクティブスはモスクや絨毯販売店などが立ち並ぶアラブストリートにあるアールデコ風の建物を賃借している。「地下鉄の駅に程近く、様々な文化的要

4. 運営体制と事業収支

(1) 運営組織

オブジェクティブスは民間の有限会社である。メンバーは6名のうち4名が常勤のスタッフである。

全体のマネジメントと教育プログラム及び外部団体との連携事業を担当する創設者のヨン氏は米国留学後、ニューヨークの投資銀行で働いていた経歴の持ち主。アーティスト・イン・レジデンスを担当するプログラム・ディレクターのトー氏はオーストラリアの大学で美術を学び、オーストラリア大使館でアートマネジャーを務めた後、2010年からオブジェクティブスに勤務している。オブジェクティブスの展示・教育プログラムのほか、シンガポール・ビエンナーレなど外部の展覧会のキュレーションにも携わる。

パートナーとしてパートタイムでオブジェクティブスの映画事業を担当し、オブジェクティブス・フィルムのマネージャーも務めるハディ氏はシンガポールのラサール

デジタルラボ(左)

ギャラリー(右)

教育プログラムによるワークショップ、滞在アーティストの制作や成果発表のほか、いずれも有料での個人利用が可能。



芸術大学でアートマネジメントを学び、サブステーションの映画部門や地元放送局で働いた経験を持つ。創設者の一人で現在も金融業界で働くテオ氏はボランティアで運営をサポートしている。近々パートタイムスタッフが新たに一名加わる予定だ。スタッフの職種は以下のとおりである。

- Co-founder
- Partner
- Programme Director
- Assistant Manager

(2) パートナースhip

オブジェクティブスは国際ネットワーク組織には加盟していない。ネットワークへの加盟は過去に話題に上ったことはあったが、レジデンス事業には毎年相当数応募があるため当面は加盟の必要はないと判断したという。過去のアーティスト・イン・レジデンスは研究や展示、レジデンスを通じてアーティストを支援するアート・インキュベーター(The Art Incubator、シンガポール)やアジアリンク・アーツ(Asialink Arts)のアートプログラムと連携して実施されたこともある。現在レジデンス事業はシンガポール・アーツカウンシルの助成を受けて運営している。

パートナーシップを結んでいる文化施設はないが、国内の文化施設や教育機関とは教育プログラムの提供を通じた連携がある。今後、日本を含む海外の文化施設や団体とコラボレーションを行う可能性はあるとトー氏は言う。

(3) 事業収支

オブジェクティブスはシンガポール・アーツカウンシルからレジデンス事業に対する事業助成を受けている。主な収入源は教育プログラムである。レジデンス事業にかかる費用は別表のとおりで、1人当たり4,000シンガポールドル(約32万円)。毎年2、3件の滞在アーティストを受け入れている。

アーティスト・イン・レジデンスの1人当たりの費用

(シンガポールドル)

奨学金	1,000
旅費	最大 1,000
制作費	最大 1,000
家賃(ルームシェア)	1,000
合計	4,000

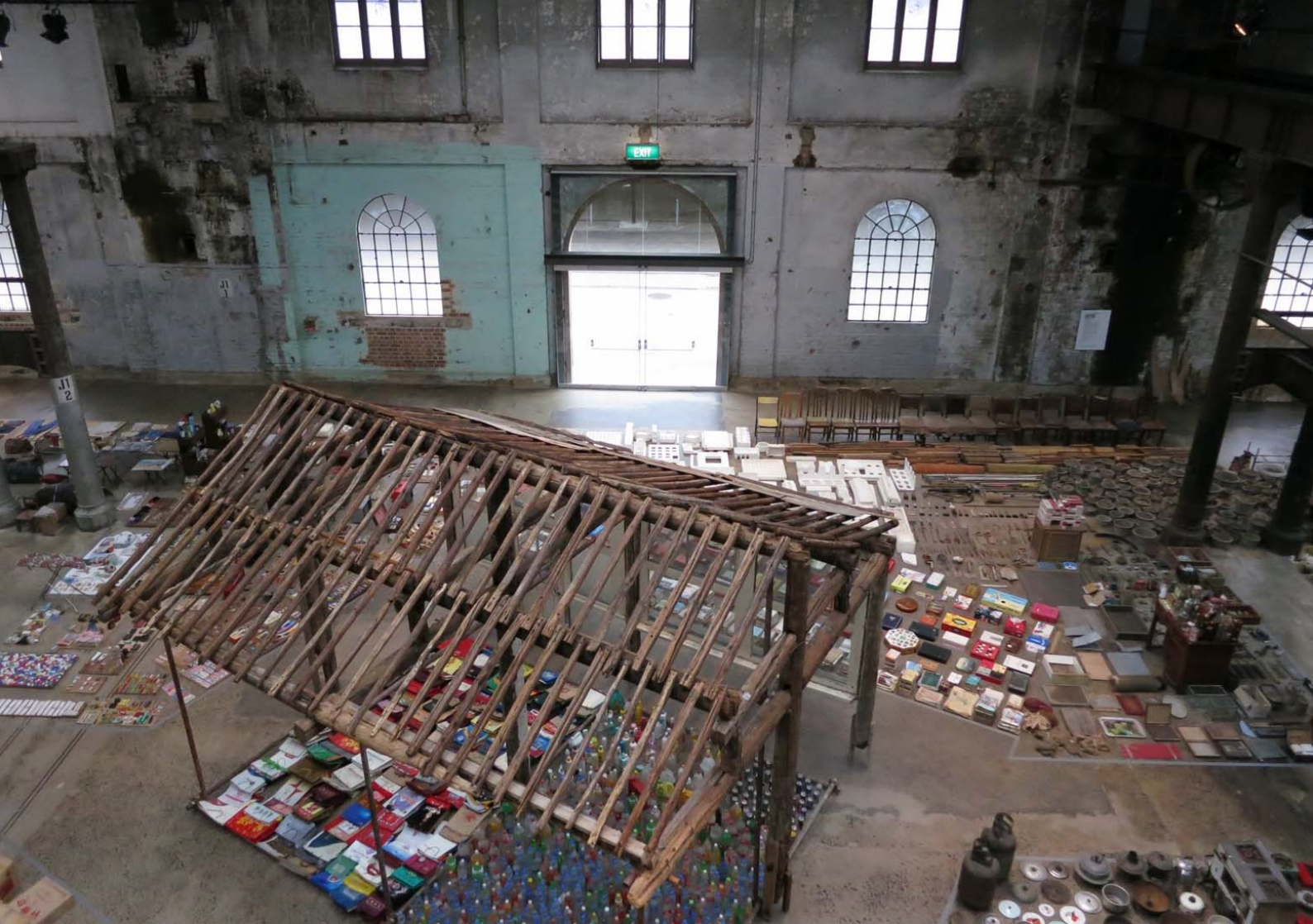
5. 事業評価の実施状況

オブジェクティブスでは参加アーティストへ公式の報告書の提出は義務づけていない。レジデンスプログラム終了後はインフォーマルな形式でメールのやり取りをしてフォローアップを行う。オブジェクティブス側は助成元であるシンガポール・アーツカウンシルへ事業の成果や課題、改善点などを毎年報告している。独自の年報や報告書は作成しておらず、過去の事業はウェブサイトに残している。

6. 現在の課題と今後の方向性

10周年を迎えたオブジェクティブスでは、今後も写真家・映画制作者・ビジュアル・アーティストの育成を支援し、シンガポールのアーティストが海外で作品を発表する機会を増やしていきたいと考えている。そして、東南アジアやアジア諸国のアーツスペースとの結びつきも強化していきたい考えだ。

オブジェクティブスのレジデンス事業は今のところ大きな方針変更はなく継続していく予定である。課題は「事業がアーツカウンシルからの助成金で運営されているため、助成を受けられなければ事業を実施ができない点だ」とトー氏は言う。



K. オーストラリア

1. ガートルード・コンテンポラリー | Gertrude Contemporary
2. アートスペース | Artspace
3. パフォーマンス・スペース | Performance Space
4. アジアリンク・アーツ | Asialink Arts

写真: パフォーマンス・スペースの入居するキャリジワークス(広大な鉄道車輛の工場跡を改修したアーツペース)の巨大なエントランス空間。展示されているのは中国人作家 SONG DONG の作品“WASTE NOT”(作家の母親が集めた10,000点以上の生活用品)

現地調査協力: 味岡千晶(豪日交流基金 理事会役員、在キングス・ポイント)

1豪ドル=100円で換算

1. ガートルード・コンテンポラリー |

Gertrude Contemporary

面会日：2013年3月13日（水）13:30－15:30

面会者：Pip WALLIS (Assistant Curator, Communications)

URL: <http://www.gertrude.org.au/>

1. 運営機関の概要

(1) 設立趣旨・経緯

ガートルード・コンテンポラリー（以下「ガートルード」）は、1985年、アーティストのグループがヴィクトリア州から事業資金及び当初の建物に設置費用（賃貸費を含む）の提供を受けて設立した非営利団体である。メルボルンの中心部に隣接するフィッツロイ地区の元テキスタイル工場の建物を、ギャラリー、スタジオを擁するアートスペースとしてリノベーションし、1985年にオープンした。ガートルード発足当時は犯罪の多い危険地域として知られていたが、立地条件がよいことから、近年では「おしゃれな街」に変容しつつある。

(2) ミッションと主な事業

設立のモデルとなったのはニューヨークの MoMA の P.S.1。展覧会、スタジオプログラム、国際交流、教育プログラム、出版を通して、アーティストの育成、及び現代芸術の実践と理論の連結を目指している。

展覧会事業では、専門パネル（スタッフ、理事会及び外部からの関係者で構成）により決定された年間8本の企画展を開催し、カタログを出版。

スタジオプログラムでは、16部屋あるスタジオを、メルボルン在住のアーティストに2年契約で賃貸（週50豪ドル、約5,000円）。メルボルンの現代美術の拠点、情報交換、交流の場としての実績があることから毎年約180人の応募者があり、前衛性と10－15年以内のキャリアであることを選考基準としている。

スタジオプログラムへのサポートとして、ガートルードは近辺のキュレーターやアーティストの訪問を奨励するための広報を行い、アーティストはその成果としてスタジオあるいはギャラリーでの展示発表を行うことが義務づけられている。これらの活動により、多くのガートルードの卒業生たちがヴェネチア・ビエンナーレのオーストラリア代表として出品するなど、大きな実績、成果をあげている。

レジデンス事業はこのスタジオプログラムとは別に、スタジオ兼住居1室を使って実施されている。

2. プログラム内容と実績

(1) レジデンスプログラムの内容

レジデンスプログラムは「国際交流」を目的とし、ガートルードを拠点とした滞在制作、ネットワーキング、リサーチなどを行う海外のアーティスト及びキュレーターを対象としている。アーティストは一般公募制で、年間約50件の応募者があり、渡航費・滞在費などの費用はすべてアーティストの自己負担となる。アーティストの選考は理事会によって行われ、目に見える成果より芸術性が重視される。キュレーターは推薦制により、政府の助成機関から資金援助を受けることとなっている。

アーティスト・イン・レジデンスの専用施設は、ガートルード内にあるスタジオ兼住居の「スタジオ18」（1部屋）を使用。2週間－3ヶ月を目処に、時期や期間は個人によって異なる。ガートルードはスペースと専門スタッフのサポートを提供するが、前述のとおりアーティストに対する金銭的サポートはないため、滞在者の多くは自国で資金を調達してくる。ただし、相互交流協定のある機関（ダブリンのファイヤーステーションなど）を通じて受け入れるアーティストについては、お互いにコストをカバーする場合もある。

パブリックプログラムとして、地域社会と結びついたプロジェクトを行うアーティストもいるが、芸術的な成果を重視するため、個々の活動目的を尊重し、条件として義務づけない方針としている。また、レジデンスの成果発表として、ギャラリーでの展示を行う場合がある。レジデンスプログラムによって同時に滞在できる海外アーティストは1名であるため、海外アーティスト同士の交流はない。ただし、ガートルードのアート・コミュニティであるスタジオプログラムのアーティストや地域のアーティスト、関係者との交流が行われている。

ガートルードは資金面のサポートは十分ではないが、その周辺には強固なアーティストのコミュニティが形成されており、そのコミュニティとの交流がガートルードの最大の強みである。中でも、公的機関からの助成を受ける海外キュレーターは、レジデンス事業への参加を通じた交流によって、オーストラリアの多くのアーティスト、キュレーターを紹介することが滞在の成果として望



ガートルード・コンテンポラリー前。建物は、元テキスタイル工場であった。

まれる。例えば、今年初めにフランスのパレ・ド・トーキョーから来たキュレーターは、10日間の滞在中に多くのオーストラリアのキュレーターやアーティストとのネットワークを形成した。レジデンス事業による国際交流は、巡回展の実現を可能にするなど、非常に重要である。

(2) プログラムの実績

「スタジオ18」には、ガートルードが重視する「リスク・協働・批判的精神」で現代美術の最先端を開拓するアーティストとキュレーターが年間数名滞在する。2011年にはオランダ、マレーシア、シンガポール、中国、米国、アイルランド、韓国から7名が滞在した。多くのアーティストは、ガートルードのスタジオ滞在中に相互の刺激によって作風を変え、より実験的かつリスクを伴う作風になることが多い。

3. 施設の構成と内容

ガートルードの施設は、個人所有の建物を賃借し使用している。建物内にはオフィス、レジデンスプログラムのための「スタジオ18」のほか、通りに面した展示スペースと貸しスタジオ16部屋を備える。

2部屋からなる展示スペースでは、年間を通じて8本の企画展を開催。前述のとおり展覧会プログラムは、

専門パネルによって決定されるが、レジデンスプログラムで滞在するアーティスト及び貸しスタジオのアーティストが関わる場合もある。国際交流は、巡回展の実現など、展覧会プログラムにとって非常に重要である。

4. 運営体制と事業収支

(1) 運営組織

ガートルードは非営利機関であり、理事会 (Board of Management) 及びスタッフが運営にあたる。理事会は議長、副議長、財務委員及び役員6名で構成される。役名と氏名、略歴は以下のとおり。

① 理事会

- 議長: トロイ・ヘイ (Troy HEY)
出資投資家リレーションズ MMG 社の総支配人。長年豪州の大企業において、行政、メディア、地域社会、政府関係対策の仕事をしてきた。
- 副議長: サンドラ・ファーマン (Sandra FERMAN)
現代美術のパトロンとして知られ、ニューサウスウェールズ州立美術館では現代美術購入のための資金プール設立にかかわり、4年間その主席を務めた。また国内外の文化振興プログラムにおいてアーティスト、キュレーター、美術批評家が積極的に協力し

左:ガートルードの出版物。プロジェクトのアーカイブが充実。
右:スタジオの1室。



てきた。

- 財務委員: ジャスティン・マストレス (Justin MASTORES)
大小のビジネスにアドバイスを提供するリース・グループ社の総支配人。複数の企業の理事を務める。
- 役員: 慈善事業のアドバイザー、弁護士、元ガートルードのアーティスト4名

② スタッフ

スタッフはフルタイム4名、パートタイム1名。役名と氏名、略歴は以下のとおり。ただし、ガートルードは「キュレーター協働方式」(Collaborative curatorial model)をとっており、各スタッフが年間を通じて独自に展覧会を企画する形となっている。

- 館長兼シニア・キュレーター: アレクシー・グラス＝カンター (Alexie GLASS-KANTOR) / 常勤
NSW 大学で美術史と写真を学ぶ。ガートルード着任前はオーストラリア動画センター (Australian Centre for the Moving Image) のキュレーター。それ以前は州立美術館、博物館、民間ギャラリー、フェスティバルなどに勤務。2005年にレジデンス・キュレーターとして韓国に滞在
- 副館長兼プログラム・キュレーター: ジャクリン・ドーティー (Jacqueline DOUGHTY) / 常勤
ミシガン大学で美術史を学び、シカゴ美術館付属美術学校で修士課程終了。ガートルード着任前はシカゴ美術館及びロンドンのバービカン・センター等で国際文化交流プログラムにかかわる。
- キュレーター兼情報マネージャー: エミリー・コーマック (Emily CORMACK) / 非常勤
ニュージーランドのオークランド大学で美術学士を取得後、メルボルン大学でキュレーター学修士を取得。2005年のヴェネチア・ビエンナーレでニュージーランド・パビリオンを運営。ガートルード着任前はウエリントンのアダム・アートギャラリーで教育プログラムのマネージャーを務め、アジア太平洋地域とヨーロッパで、公立・民間の大小の機関で展覧会企画の経験を持つ。
- ギャラリー・マネージャー: シェイ・ナゴーカ (Shae

NAGORCKA) / 常勤

メルボルンのモナシュ大学で美術史・美術デザイン理論を学ぶ。主にメルボルンで現代美術の展覧会を企画、設置にかかわってきた。

- アシスタント・キュレーター: ピップ・ワラス (Pip WALLIS) / 常勤
メルボルン大学で美術史とキュレーター学修士課程修了。ヴィクトリア美術館の版画素描部アシスタント・キュレーターを勤めながら現代美術プロジェクトにかかわってきた。ガートルードのアシスタント・キュレーターになる前はギャラリー・マネージャーを務め、それ以前は他の機関でギャラリーを運営した。

スタッフのほかに、毎年20人前後のボランティアがアシスタント及びトレーニングの一環としてガートルードのプログラムに参加している。

(2) 連携機関

他の芸術関係機関等の連携状況は、企画展などのプロジェクトによって流動的に変化する。これまでの事例として、2011年にはメルボルン芸術祭との協力関係を結んだ。また2005年以来、全国美術雑誌『アート・アンド・オーストラリア』誌と協力して、現代美術の批評家を育てるプログラムを実施している。他にも、オーストラリアのアーティストの海外展の開催や交流関係の構築を積極的に行っている。国際ネットワークには加入していない。オーストラリア国内では、CAOS (豪州現代美術団体 Contemporary Art Organizations)、NAVA (全国視覚美術協会 National Association for the Visual Arts) のメンバーである。

レジデンスプログラムでは、ダブリンのファイヤーステーション (Fire Station Artists Studio, Dublin) と相互交流の提携を結んでおり、現在、マレーシア、シンガポール、中国、インドネシアとの連携を試みている。

2011年の連携団体は以下のとおり。

- ファビオ・オンガラト・デザイン
- ヤニ・フローレンス
- 『アーツ・アンド・オーストラリア』誌
- メルボルン・フェスティバル委員会
- カリマンローリンズ・ギャラリー / ミッシェル・ウシャヤー

- アートソング・センター(ソウル)
- インデペンデント・キュレーターズ・インターナショナル(ニューヨーク)
- セント・ポール・ストリート・ギャラリー(オークランド)
- シャーマン・現代美術基金(シドニー)
- ディア・パティ・スミス・ギャラリー(メルボルン)

(3) 事業収支

年間予算は約70万豪ドル(約7,000万円、2011年度支出ベース)。収支の内訳は下表のとおりで、オーストラリア・アーツカウンシル、アーツ・ヴィクトリアから、収入の約50%に相当する34万4,000豪ドル(3,440万円)の助成金を得ている。

事業収支(2011年度)

(豪ドル)

収 入	
スタジオ賃貸料収入	41,846
外部資金・スポンサーシップ	129,578
スペシャル・プロジェクト資金	148,840
オーストラリア・アーツカウンシル(中核)	163,908
アーツ・ヴィクトリア(中核)	179,829
利子収入	1,758
その他収入	5,249
収入計	671,008
支 出	
職員給与	216,235
運営費	87,903
中核プログラム費	129,686
特別プロジェクト費	91,170
外部資金調達費	29,617
家賃(建物)	150,000
支出計	704,611
収益(損益)	(33,603)

資料: Gertrude Contemporary 2011 Annual Report

2011年度のその他の助成金の提供者は、豪韓交流基金(豪州外務省)、クリエイティヴ・ニュージーランド、ノルウェー芸術基金、ノルウェー外務省、オランダパフォーミング・アーツ基金、MIC ノルウェー、ポルトガル大使館、ポルトガル・インスティテュート・カモス、豪州リニア交流基金である。

上記の政府関係助成金の他に民間の慈善団体・個人の寄付・援助を得ており、展覧会カタログのデザインはメルボルンのデザイン会社が無料でデザインを提供

している。また、助成金、協力を得るための「ガートルード・テーブル」という夕食会、午後のお茶会を定期的で開催しており、近隣のレストランや花屋などからサポートを受ける機会となっている。

5. 事業評価の実施状況

(1) 展覧会・教育プログラムの評価

2011年度の展覧会・教育プログラム等における来場者、参加者数は次のとおりである。ただし、ガートルードの目的は、オーストラリアのアーティストが海外で作品を展示するきっかけを作ること、現代美術に対する理解と観客を増大させることであるため、展覧会の入場者数の実績のみを事業評価の指標としていない。

• 展覧会来館者	30,000人
• 館外企画プログラム	7,789人
• 教育プログラム	811人
計	38,600人

(2) レジデンスプログラムの評価

アーティストの場合、ガートルードの理事会は芸術性の評価を重視し、真の成果は目に見えず、長期的なものであり、数値で表せるものではないという考え方をしており、決まった評価形式はない。

キュレーターの場合は、滞在後にオーストラリアのアーティストの展覧会を行う例が多く、それがプログラムの大きな目標でもある。MoMA のバーバラ・ロンドンは、来年の企画展に元ガートルードスタジオアーティストの作品展を予定しており、特に助成金を出す政府機関の評価として、こうした実績は重要である。

6. 現在の課題と今後の方向性

州と連邦政府からの評価・規制が厳しくなり、これまでは3年単位で支給された予算が1年ごとに再申請する制度となり、また教育プログラムへの参加者数や原住民参加プロジェクト実施などが条件となってきた。しかしある意味では、政府機関と密接な関係を結ぶことはガートルードにとっても有利である。また、家賃が値上がりして支出に占める割合が高くなっているため、現在移転先を探している。



左:滞在アーティスト専用のスタジオ兼住居 右:ヴィクトリア・ワラム氏

レジデンスプログラムについて、ヴィクトリア州政府は、連邦政府の政策分野だとして、あまり積極的ではない。州在住のアーティストにとっても国際性が必要であることを説得しなければならない。

日本のアーティスト・イン・レジデンスについては、文化的(音楽・美術)に豊かで活発であること、経験者からよいフィードバックがあることなどから、多くのオーストラリアのアーティストが滞在を希望している。

ガートルードでは、レジデンスプログラムへの日本からのアーティストの滞在も希望しているが、資金調達が課題となっている。インドネシアのように助成金の出資者が見つかれば、日本のレジデンス機関とのパートナーシップを組むことも可能。2010年のコブラ(COBRA)の滞在は、アジアリンクとトーキョーワンダーサイトとの交換プログラムの一環として行った。コブラは地域社会とのかかわりを重視したため、人気を博した。

また、日本のキュレーターとしては片岡真実(森美術館チーフ・キュレーター)が2010年に滞在した。彼女がオーストラリアのアーティストの作品を展示したどうかの報告は受けていない。

滞在アーティストへのインタビュー

面会者:ヴィクトリア・ワラム(Victoria WAREHAM)

1. 略歴・活動実績

専門はメディア・アート。滞在は2ヶ月を予定。以前はサウザンプトン(英国)にスタジオを構えて活動していたが、現在はロンドンの出版社ペンギン・チルドレンで子ども向けストーリーの編集、デジタル教材の開発に携わっている。

2. レジデンスプログラムの経験、参加の動機

オーストラリアはロンドンと同様に芸術批判論が盛んであること。テレビ、フィルムを含むメディア・アートに対する海外の観客・友人・同僚との交流を志向し応募した。レズ・アルティスやウェブサイトで事前にリサーチし

たが、過去のガートルードのレジデンスプログラムの参加者たちは優れた仕事をしており、他のレジデンスと違ってオープンであること、豊かな経験ができることに興味を持った。

滞在に必要な資金は、メディア・トラスト、メディア・チャリティー、クラウド・ファンディングなどを使って集めた。

ロンドンではフルタイムの仕事と家の往復で、例えば今 ICA のクリティカル・デバートにとっても興味があるが、そのことを考える時間がない。また、一定のアーティストと常に交流しているので、お互いに影響して似たような作品を作る傾向にある。だからそこから離れて一人で熟考する時間が必要だった。

3. 創作活動の支援

今回の滞在は、自分の発展期間としたいと考えている。アーティスト・イン・レジデンスでは日常から離れ、一日中ゆっくりと物事を考えられる。また通常とは違う環境が面白い。ガートルードに到着後、フィルム理論を念頭に、カメラを持って近所の路上を少し撮影した。

一方で、ロンドンを留守にするための事前準備や限られた期間内で制作計画を立案する必要があり、また、経済的事情を考慮せねばならないなど、大変な面もある。また、プログラムに条件がある場合、それがアーティストにとって、負のプレッシャーになる危険があるかもしれない。

4. 日本のアーティスト・イン・レジデンスについて

日本のアーティスト・イン・レジデンスについては、「アカデミックなサポート」を期待する。他のアーティストが何をしているのか観察をしたいし、日本の環境からはいろいろな刺激を受け、学ぶことが多いと思う。

ガートルード滞在後のアーティスト・イン・レジデンス参加については、ニューカッスルのロックアップ・カルチャーセンターを予定している。

2. アートスペース | Artspace

面会日: 2013年3月15日(水) 11:00-13:00

面会者: Tracy BURGESS (Studio and Public Programs Coordinator)

URL: <http://www.artspace.org.au>

1. 運営機関の概要

シドニー港に面した歴史的建造物を再利用したアートスペースは、シドニー・ビエンナーレの会場としても知られ、アーティスト・イニシアティブ組織の先例としても内外で注目されている。

(1) 設立趣旨・経緯

アートスペースは、アーティスト・イニシアティブによって運営されるスペースとして、1983年にシドニーのセントラル駅近くに設立された。

1992年に、ニューサウスウェールズ州政府(以下、NSW 州)が元砲術訓練所であった現在の建物を芸術支援施設として改装した際、他の団体とともにアートスペースも現在の場所に移転した。同時に、それまでNSW 州が運営していたレジデンスプログラムの実務がアートスペースに委任され、これによって、アートスペースは企画展覧会とレジデンスプログラムをコーディネートすることとなった。ただし、その時点でもレジデンスプログラムの運営は依然として芸術省の管轄であった。

その後、現ディレクターのブレア・フレンチ (Blair FRENCH) が就任し、プログラムを拡張。そのため、2006年にプログラム運営権の州政府からの移管を交渉し、2007年からレジデンスプログラムの管理運営をすべてアートスペースが行うこととなった。

また、シドニー・ビエンナーレ開催事務局のオフィスも同ビルに入居していることから、ビエンナーレの企画展の開催会場として実務と設営を担当している。ビエンナーレ作家がアートスペースのスタジオや宿泊施設を利用することが多く、ビエンナーレとは長年にわたってパートナーシップ関係を結んでいる。

(2) ミッション

現代芸術に取り組むあらゆる成長段階のアーティストに対し、展覧会開催の機会、制作スペース、人的資源を提供。シドニー・ビエンナーレとの連携やレジデンスプログラムなどによる国際的なアートプラットフォームを形成し、持続的な表現活動の支援を行う。

2. プログラム内容と実績

(1) プログラムの内容

アートスペースのレジデンスプログラムは次の3つによって構成されている。企画展の招待アーティストが滞在すること多いが、それはレジデンスプログラムとは連動していない。アーティストは、滞在中に作品の制作発表を目的とする場合が多いが、アートスペースとしては、目に見える結果よりはリサーチや自己成長、ネットワークの形成が重要であることを強調し、レジデンス担当のトレーシー・バージェス (Tracy BURGESS) は滞在アーティストのためにインフォーマルなミーティングを催したり、他のギャラリーのオープニングに連れ出したりするなど、外部との接触を奨励している。

① 展覧会プログラムの一環

招待制。期間はプロジェクトによって異なる。

② 他機関との提携

他機関との連携プログラムには、アジアリンクの交換レジデンスプログラム、西オーストラリアのアートソースから派遣される3ヶ月のレジデンス事業などが含まれ、普通は3ヶ月の滞在。滞在費は、ホスト機関がアートスペースに支払うが、人的支援・情報提供等の費用はアートスペースが負担する。

また、NSW 州政府のアーツ NSW と、ケベック・アーツカウンシルとの交換プログラムで、モントリオールのダーリン・ファウンドリー (Darling Foundry) からアーティストの派遣を受け入れている。これはすべての費用込みの交換プログラムで、現在カナダ(ケベック州)に派遣するオーストラリアのアーティストを募集している。

③ 公募によるスタジオ及び住居の貸与

公募による滞在アーティストの場合、スタジオは週75豪ドル(約7,500円)、スタジオ兼住居は週250豪ドル(約2万5,000円)の家賃を支払うことになっている。この額は2007年以来据え置きであったが、来年はNSW 政府の不動産再評価で家賃が上昇したため、それぞれ90豪ドル(約9,000円)と300豪ドル(約3万円)に値上げされる。家賃には、電気・水道・インターネット・ランドリー設備、清掃などの費用が含まれている。

左:アートスペース外観。以前は新聞社、射撃場として使用されていた建物を使用している。同ビルにはシドニー・ビエンナーレ事務局のほか、いくつかの文化、芸術関係の事務所が入居している。



(2) 募集・選考方法・選考基準

公募のレジデンス事業の応募者数は年によって増減するが、スタジオ兼住居、スタジオのみ、双方とも30～40人。定員はスタジオ兼住居が4名で、期間は1～3ヶ月、6ヶ月の場合もある。スタジオのみは2～6ヶ月だが、アーティストは長期間の滞在で得るものが大きいので、今回の応募要項では6～12ヶ月とする予定である。

選考委員は3名で、アートスペースのスタッフ、NSW政府から一人、もう一人は過去のレジデンスアーティストまたはシドニー在住アーティストである。応募条件に幅があるため、年によりまた個人によって目的などはまちまちである。選考時に考慮されるのは、シドニーに来る必要性、計画の現実性(アートスペースのスタッフ、建物と設備、周辺の芸術コミュニティが、そのアーティストにとって有益なサポートを提供できる可能性があるかどうか)、そしてアーティストとしての業績(作品)である。アートスペースは美術を中心にサポートしているため、単にスタジオスペースが欲しい場合や、美術からかけ離れた作家やプロジェクトの受け入れは難しい。

(3) 関連プログラム

① オープン・スタジオ・プログラム

2010年から実施。滞在アーティストが制作中の「作品」を適宜一般公開して、観客との対話を奨励する。日程はニュースレターにより告知。

② コミュニティ教育プログラム

主に美術大学生の参加が多い。高校生の団体などは近くのNSW美術館などを訪問することが多いが、異なった体験の場を求める教師が生徒を連れてくることもある。その場合は担当教師が過去にアートスペースと何らかの関係を持った場合が多い。

(4) プログラムの実績・成果

昨年滞在したアーティストは44名、うちレジデンスプログラムが約18名(期間は異なる)。海外からのアーティストは台湾、韓国、ニュージーランド、英国から。

日本に関連した実績では、2008～09年にトーキョー

ワンダーサイトと提携して二国間交流事業を実施し、豪州から3人のアーティストが東京に3ヶ月滞在し日本のアーティスト3人と展覧会を開催。翌年その6人がアートスペースに滞在し展覧会を開いた。

その他の日本からのレジデンスプログラムは主に展覧会ベースで継続的なものではない。オーストラリア・アーツカウンシルやアジアリンクが助成するプロジェクトごとにアーティストが滞在するが、アートスペースが独自に助成金を申請することはない。海外から応募するアーティストの大半は自国で助成金を取得するが、バージェス氏の記憶にある限り、日本のアーティストが独自にレジデンスプログラムに応募したことはない。

2010年のシドニー・ビエンナーレでは、東京・六本木のスーパー・デラックスと提携し、12週間のビエンナーレ期間中アートスペースがライブ会場となった。スーパー・デラックスから数人が12週間滞在し、期間中、毎週金曜日ごとに異なるアーティストが日本から来て演奏・パフォーマンスを行った。

また2011年のクライストチャーチの大地震で多くの設備が破壊され、アーティストの活動範囲が狭まっている事情を考慮し、ディレクターのフレンチ氏がニュージーランド出身で関係が深いことから、2012年にニュージーランドの組織 SCAPE と提携して独自のアーティスト交換によるレジデンス事業を行った。

また、滞在アーティストの作品にキュレーターが注目して、その後の展覧会につながる例もある。過去のレジデンス事業で目に見える成果をあげたアーティストには、Sean GLADWELL(2007年にレジデンスプログラム滞在中に個展、その後ヴェネチア・ビエンナーレ参加)、Frances PRICHARD(ニュージーランドのアーティスト、その後ヴェネチア・ビエンナーレ参加)などが含まれている。



左: 1Fにあるギャラリースペース。
右: 上階にあるスタジオの1つ。

3. 施設の構成と内容

アートの入居する建物は、20世紀初頭にフェアファックス新聞社として建てられたものである。第二次大戦中に政府が買上げ、戦後砲術訓練所(Gunnery)として利用していた。1975年に政府から民間に移管、1980年代には州政府が低所得者住宅としてアーティストに貸していたが、1992年に、政府が芸術振興を目的として所有する建物の一つとして改修された。建物の内部施設は次のとおりである。

- 1階 展示スペース
- 2階 事務所(入居団体は次のとおり)
アートスペース
Arts Law (芸術家を対象とする法律事務所)
全国視覚美術協会(National Association for the Visual Arts: NAVA)
NSW 博物館美術館協会(Museums and Galleries NSW)
シドニー・ビエンナーレ(The Biennale of Sydney)
- 3階 スタジオ兼住居(4室)、スタジオ(6室)、セミナールーム(1室)、プロジェクトルーム(1室、オープンスタジオ・展示場等にも使用する)

アートスペースはアーツNSWに対し、市場価値の約30%の家賃を支払っている。1年間のレジデンス事業を計画する際には、予定以外にスタジオが必要になる場合を考慮して、スタジオ使用率は70-80%程度にとどめるようにしている。

4. 運営体制と事業収支

(1) 運営組織

アートスペースは正式名ビジュアル・アーツ・センターLtd.(Visual Arts Centre Ltd.)という会社組織の非営利団体であり、理事会(Board of Management)及びスタッフが運営にあっている。

① 理事会

- 理事長: ジェームス・エメット(James Emmett)、弁護士
- 理事: アートスペースのディレクター、ビル関係の会社役員、アウトドア・メディア協会 CEO、銀行家、ア

ーティスト(2名)、IFACCAのジェネラル・マネージャー(計7名)

② スタッフ

- ディレクター: ブレア・フレンチ PhD(Blair FRENCH) / 常勤
ニュージーランド生れ。着任は2005年末。前職は豪州写真センター(Australian Centre for Photography)のプログラム・マネージャー。パフォーマンス・スペースの副ディレクター、ニュージーランドと英国の美術館に勤務。シドニー大学で博士課程修了。シドニーとニュージーランドで教鞭の経験あり。2006-09年まで豪州の現代美術団体組織 CAOs の会長を務めた。
- 副ディレクター: ミシェル・ニュートン(Michelle NEWTON) / 常勤
前職はグリフィン劇団の開発マネージャー及びグランピリ(現代美術の商業ギャラリー)のディレクター。長年、営利・非営利の芸術部門で事業開発などに携わり、また、海外や原住民アボリジニとの展覧会・文化交流企画の経験がある。
- キュレーター: マーク・フェリー(Mark FEARY) / 常勤
ニューヨークのP.S.1現代美術センターと光州で研修、ウェストスペース(商業ギャラリー、メルボルン)、イアン・ボター美術館(メルボルン大学)でキュレーターとして勤務、また豪州現代美術センター、ヴェネチア・ビエンナーレのオーストラリア館(2003, 2005年)に勤めた。展覧会企画には東京都写真美術館の「South by Southeast: Australasian video art」がある。
- スタジオ・教育プログラム・コーディネーター: トレーシー・バージェス(Tracy BURGESS) / 常勤
カリフォルニア出身。2005年に来豪し、シドニー大学大学院で学ぶ。2006年、シドニー・ビエンナーレで仕事をした後、2007年からアートスペースに勤務。
この他のフルタイムは、コミュニケーション出版担当、管理・ディレクターアシスタントが2名、パートタイム技術担当が1名。アルバイト1名は週末の事務とスタジオ関連業務を担当。またボランティア、研修生を受け入れている。

(2) 連携機関

アートスペースは、オーストラリア全土のネットワーク団体 CAOs (現代美術団体組織 Contemporary Art Organisations) に参加している。

(3) 事業収支

年間予算は約100万豪ドル(約1億円)で、2011年度の収支の内訳は、下表のとおりである。

事業収支(2011年度) (豪ドル)

収 入	
パフォーマンス・展覧会入場料等	3,000
出版物売上	4,416
スタジオ運営	69,351
スポンサー・寄付	17,058
その他	55,098
オーストラリア・アーツカウンシル	256,594
アーツ NSW	568,708
その他(国内外)の助成金	28,925
収入計	1,003,150
支 出	
職員給与	467,193
謝金・材料費	146,181
プログラム費	142,964
マーケティング費	41,873
家賃・設備	273,950
支出計	1,072,125
剰余金(損益) * 前年の剰余金で補填	(68,975)

資料: Annual General Meeting 2012 AARTSPACE Visual Arts Centre Ltd.

オーストラリア・アーツカウンシルとアーツ NSW から82万豪ドル(約8,200万円)の助成金を得ているが、アートスペースは、美術工芸戦略(Visual Arts and Crafts Strategy, VACA 連邦政府・州政府の協力機関)が指定するキー団体の一つとして、基幹助成金とは別に運営費11万7,262豪ドル(約1,170万円)を得ている。これは、2004年から4年ごとの契約で、更新の際には戦略計画書を提出する必要がある。VACS は国と州の両政府にまたがった機関であるため、政権交代に影響されず、アートスペースにとって安定した収入源となっている。

5. 事業評価の実施状況

レジデンス事業担当のバージェス氏にとって、プログ

ラム成功の指標は、個人のアーティストが作家として成功することより、アートスペースがアーティストの成長に重要な役割を果たし、それが口コミでアートスペースの評判として世界に広がることである。

系統的な評価はあまり行われていない。アンケートをとっても回収率が低く、あまり意味がなかったが、今は観客に対してオンライン調査を開始している。より正直な回答が寄せられるので、その結果を活用したい。

6. 現在の課題と今後の方向性

アートスペースは常に変化するアーティストの要求に対応しているが、来年からスタジオの家賃が上がるため、アーティストの反応を懸念している。金銭面でアーティストをもっと支援するためには、すでにアートスペースを助成している機関・団体の他に資金源を探さなければならない。できるだけ安価にスタジオを提供するため、外部資金を探している。例えば現在、特許協会の助成金を申請しているが、これは NSW 州地方在住のアーティストをシドニーに滞在させ、シドニーへの往復交通費、3ヶ月の滞在経費、材料費が助成されるものである。

また2階の貸しオフィスに入居している団体のいくつかが新しいビルに移転するため、その空間をアートスペースで利用するかどうか、またその場合の利用形態をどうするか検討中である。

アートスペースで6年間にわたりレジデンスプログラムを運営してきたバージェス氏の個人的な感想として、プログラムを成功させるためには、運営能力のある専門スタッフが長期間勤務してアーティストとの関係を深めることが必要だという。一方で、アートスペースは非営利組織であり、スタッフの交代があるため、よりよい状態で次のスタッフへ引き継ぎを行うことを、組織の目標としている。



スタジオ兼住居の1室。

滞在アーティストへのインタビュー

面会者：ガイ・ベンフィールド (Guy BENFIELD、以下「GB」)、ロッシェル・ヘイリー (Rochelle HALEY、以下「RH」)

1. 略歴・活動実績

GB: 映像作家。シドニー生まれ、シドニー大学、メルボルンのヴィクトリア美術学校で学び、NSW大学美術学部で博士課程履修中。2004年以来ニューヨークのブルックリン在住。

RH: シドニーを拠点とし、平面作品、パフォーマンスなど、複数のメディアによる制作を行っている。

2. アーティスト・イン・レジデンスの経験、参加の動機

GB: これまで、オーストラリア・カウンシルのグリーン・スタジオでの滞在、またポルトガルその他でのレジデンスプログラムに参加した経験がある。生活はシドニー、ニューヨーク、欧州、アジアを拠点としながら、韓国・上海で作品発表を行っている。滞在国内によって言語の問題があり、人的支援について限定される場合がある。
今回の3ヶ月の滞在では、彫刻を教える傍ら、展

覧会、会議発表などを行う予定。アートスペースにおけるレジデンスプログラム参加の動機は、数年前に、展覧会のレジデンスを行って以来、長年にわたってアートスペースに馴染みがあることと、他にこのような施設が少ないこと。

展覧会のために作品をニューヨークから運ぶには費用がかかる。NSW大学は改造中でスタジオがなく、制作の材料を得るのは難しい。

ニューヨークで考えたアイデアを形にするためには、ここは恐らく最高の場所だ。これまで経験したレジデンスの中には刑務所のようなところもあるが、ここは非常に快適で仕事がしやすい。テクニカルな設備は非常に重要である。

RH: シドニーにはアーティストは非常に多いが、レジデンス施設はわずかしかないため、スタジオを探すことは難しい。アートスペースには、2年前にもレジデンスプログラムで滞在した経験があるが、スタジオが広く、家賃が安く、アーティストのネットワークがあるのが魅力だ。

自分にとってのレジデンスプログラムへの目的はプロジェクトによって異なるが、実験的な取り組みや、また、一つの長期的なプロジェクトを、複数の国に滞在しながら発展させることもある。異なる文

滞在アーティストのガイ・ベンフィールド氏のスタジオにて。



化の中で過ごすことは楽しく、言語の壁もそれなりに有益。様々なアーティストとの出会いの中から自分が何に貢献できるかを考えること、またネットワークを形成して現地でのアートシーンを観察することも重要。

RH: この4年間に次のレジデンスに滞在した経験がある。

Rimbun Dahan、クアラルンプール、マレーシア(2009年): 1年間のレジデンスで、オーストラリア人の妻を持つ建築家が家族で運営している。自宅の敷地に宿泊施設があり、若干の滞在費が支給され、展覧会も開くことができる。滞在中に複数のプロジェクトの作品を制作し、帰国後の展覧会で作品を売って、翌年の活動費用に当てることができた。

Drawing Spaces、リスボン、ポルトガル(2010年): 老人ホームでのレジデンス。宿泊施設とスタジオスペースの提供を受ける条件として、現地の人々と協力し、ホームの居住者とのワークショップ、レクチャーを行った。

Cité Internationale des Arts、パリ、フランス: サポートは特になく、放っておかれたが、大きな組織であるため、いろいろな人に会うことができた。

Performance Art Forum (PAF)、St Erme、フランス: 滞在形態はオープンで、数日から数ヶ月間の賃貸。特に義務はないが、フォーラムの活動への参加を奨励される。元ライクス・アカデミーのディレクターが、ディレクターとして運営に参加。幅広いネットワークを使い、年に3回プロの振付家、アーティスト、学者などを招き、無料で大学レベルの講義・ワークショップ・セミナーなどを行う。10日間ほどの期間中に滞在アーティストは自身でワークショップなどを企画し、参加者を募る。滞在は有料だが、応募時期・期間に規定がないため、別のレジデンスの合間に滞在することができるのが便利で、滞在アーティスト間の対話、議論の場が多いことが有益であった。

Olga Roriz Company、リスボン、ポルトガル(2011年): リスボンの老人ホームではダンスの動きとスケ

ッチを教えた。

3. 創作活動の支援

GB: 自分にとってのレジデンスプログラムの価値は、新しい国を経験するだけでなく、そのことで展覧会やプロジェクトの機会が与えられればなお良い。友人を作り、ネットワークを拡張し、人々との対話が出来ることが最も有益だ。ネットワークや人的交流がなく、例えば田舎のスタジオに放っておかれると困ってしまう。

RH: 応募時期・期間が規定されている、あるいはPAFのように融通の利くプログラムもそれぞれに有益だが、自分にとってもコミュニティにとっても有益なレジデンスプログラムが望ましい。例えばリスボンの老人ホームではダンスの動きとスケッチを教えたが、ダンスのリサーチでは、よく動く若者の身体と、動きが制限される老人の身体の違いについて考えさせられ、ダンスとスケッチを組み合わせ、ホームの人々にアクティブで健康的なプログラムを考案することができた。結果として彼らにも有益であったし、自分はその知識からアイデアを別の方向へ発展させることができた。

一方で、プログラムによっては受入機関が成果をわかりやすく示すために、アーティストにコミュニティ活動などを課す場合がある。アーティストは義務感からそれをこなすが、自分の成長にも周りのコミュニティにも有益とは限らない。リスボンの経験は、自分のリサーチには役立ったが、それがすぐに作品制作につながったわけではない。レジデンスによっては、形のある結果を要求する場合があるが、アーティストは制作を強制されるべきではない。教育プログラムをレジデンスの条件として組み込む場合は、そのアーティストの活動内容とマッチし、またコミュニティにも有益な、知的なプログラムを組む必要がある。レジデンスのプログラムを企画する担当者には、戦略的な思考能力と、アーティストやキュレーター、そしてコミュニティとも協議する能力が必要だと思う。

レジデンスプログラムの検索にはトランス・アーティストのウェブサイトをもっと頻繁に利用する。このサ

イト情報は、アーティストの視点で組み立てているため、例えばある国でレジデンスへの参加が決まっている場合、その近辺にどのような機会があるかなどを調べやすい。オーストラリアはどこへ行くにも遠いので、一旦海外に出たらできるだけその機会を利用したい。また、レジデンスプログラムの情報だけでなく、移動するアーティストのために、留守の間、自宅を賃貸する、または交換滞在などの可能性を検索できる。レズ・アルティスは組織する側の視点で、レジデンシーの紹介にとどまっている。

自分はいわゆるモバイル・アーティストで、他にもそのようなアーティストを何人も知っている。ここ10年ほどの間、モバイル・アーティストが増えている。その理由は、金銭的支援のあるレジデンスプログラムと、自費で参加するレジデンスプログラムとを組み合わせ、収支バランスをとることができ、雇用の規制を受けずにプロジェクトに集中することができるため。また世界各地を訪ねることができる。もちろんそのためには多数のレジデンスプログラムを調整し、フレキシブルな生活を余儀なくされる。

4. 日本のアーティスト・イン・レジデンスについて

GB: 日本のアーティスト・イン・レジデンスでは、トーキョーワンダーサイト、CCA(北九州)について名前を聞いたことがあるが、機会があれば京都、地方にも滞在してみたいと考える。

RH: 日本へはまだ行ったことはないが、日本のレジデンスプログラムは、非常によく企画・組織されているという印象を受けている。いつか日本に行くことを楽しみにしている。友人の何人かは日本でのレジデンスの経験がある。その内の一人(Jeremy BAKKER)は昨年越後妻有のオーストラリア・ハウスに滞在して、現地の人々を巻き込んだ野心的なプロジェクトを制作したが、越後妻有は非常によく組織されており、彼は滞在をとっても楽しんだようだ。もう一つ彼が感心した点は、アーティストとキュレーターの共同プロジェクトであったこと。これはとてもよい結果を生むシステムだと思う。

日本の展覧会は綿密に企画され、観客も多いと聞いているので、日本にレジデンスで滞在する場合は、展覧会プロジェクトを目標としたい。またインフラ設備が整っているので(アイデアを育むより)実際に活動する機会としたい。これまでのレジデンス滞在では、現地で作品を作り、帰ってから個展を開いたが、日本では滞在中に展覧会をやりたい。また、レジデンスに申請する場合、かなり前から申請せねばならず、また期間などにあまり融通がきかないと聞いている。アーティストによっては、いろいろなプロジェクトを調整する必要があるので、少しフレキシブルに対応して欲しい。例えば、共同プロジェクトのための協力者を連れて行きたい、あるいは家族を連れて行きたい場合なども考慮されるべき。

この(文化庁の)リサーチは、大変よいことだと思う。アーティスト・イン・レジデンスによっては、その意図はよくてもあまり効果的に運営されていない場合が多いので、きちんと調査することは非常に重要と考える。

3. パフォーマンス・スペース | Performance Space

面会日: 2013年3月14日(木) 14:00-16:00

面会者: Bec DEAN (Co-Director)

URL: <http://www.performancespace.com.au>

1. 運営機関の概要

パフォーマンス・スペースが拠点を置く「キャリジワークス(Carriage Works)」は、かつての鉄道車両工場の巨大な建物をリノベーションした大規模な複合芸術施設である。2002年、アーツ・ニューサウスウェールズ(以下「アーツ NSW」)が芸術創造の拠点として再開発するため土地と建物を購入、2003年から部分的な使用を開始、2007年に正式にオープンした。大小のスタジオ、劇場、レストラン、貸事務所を有し、パフォーマンス・スペースのほか、様々な芸術団体が入居し、先駆的な活動を行っている。

(1) 設立趣旨・経緯

パフォーマンス・スペースは、1983年、舞台芸術家のマイク・ムランズにより、シドニーのセントラル駅に近いレッドファーンに設立された非営利団体である。政府の助成を受けられるのはハイクラスな劇場のみであった当時、パフォーマンス・スペースは従来の劇場形式にとらわれない、実験的なパフォーマンスを安価に演じることのできる恒久的な施設として、前衛的なパフォーマーや観客の支持を受けた。劇場の付帯物をすべて取り去り、パフォーマーと観客との関係の原点を追求する活動は、国内外にも知られるようになった。その後、パフォーマンス・スペースの活動領域が広がるにつれ、レッドファーンの古い建物では変化するテクノロジーに対応できなくなり、またシドニーの地価と共に家賃が上昇したこと、観客収容数の限界が200席であったことから、2007年、NSW 州政府のイニシアティブで再開発されたキャリジワークスに移転した。

(2) ミッション

パフォーマンス・スペースは、公演、プロジェクト、レジデンスプログラムを通じて、新たな表現、特にジャンルを横断した共同制作の発展に寄与し、あらゆる領域を超えた観客との対話を生み出すことを目的とする。また、劇場以外での様々な活動を展開し、実験的で多様な表現を支援することにより、国内外における新たな観客層を発掘し、アーティストの表現とアート・コミュニティをつなぐ場を目指している。プロジェクトの約20%

は原住民(アボリジニ)関連で、パフォーマンス・スペースは原住民のプロデューサーを置き、原住民に関連した活動を推進している。

2. プログラム内容と実績

(1) アーティスト・イン・レジデンス・プログラム

パフォーマンス・スペースのレジデンス事業は、プロジェクトの萌芽からプロダクション(作品の制作)、巡回の可能性までを扱うもので、審査においては、プロダクションまでサポートできるプロジェクトであることを重視する。ただし、場所の提供以外アーティストへの資金的なサポートは行っていない。

レジデンス事業には次の3つのカテゴリーがある。

① インデジスペース・レジデンシー(Indigespace)

経験ある原住民アーティストのための公募制プログラム。2年前から開始され、当初はアーツ NSW の助成を受けていたが、現在はパフォーマンス・スペースが他のプロジェクトから得た収益を出資している。このプログラムの前身は、インデジラボといって、若手の原住民アーティストを南海岸の川沿いの広大な敷地バンダノンの施設にレジデンスとして2週間滞在させ、音楽・美術などのアクティビティを通じてアイデアを発生させるプログラムであった。そこから実現への発展がなかったという反省から、現在のプログラムに転換した。

② スティーヴン・カミンズ遺贈レジデンシー

1990年代にエイズで亡くなった、同性愛テーマのパフォーマンスで知られたスティーヴン・カミンズの遺贈金で運営される公募制のレジデンスプログラム。現在キャバレー等で演じているアーティストを対象とし、コンテンポラリーのパフォーマンスにレベルアップすることで違った観客に紹介することが目的で、パフォーマンス・スペースは次の支援を提供している。

- 1週間の集中レジデンシー:1,000豪ドル(約10万円)の滞在費付)
- 技術者・キュレーターのサポート
- 定評ある監督・プロデューサーの指導
- 発表とフィードバックの機会

③ オープン・レジデンシー



パフォーマンス・スペースが事務局を置く、キャリジワークスの建物外観。鉄道車両工場の建物を大規模に改造し、大小のシアター、スタジオが整備された。

パフォーマンス・スペースのキャリジワークスのスペースの他に、シドニー大学（パフォーマンス学部）、NSW 大学（アート・メディア学部）、クリティカル・パス（振付リサーチセンター）が受け入れパートナーとなっている。主として招待制で、分野は問わない。

(2) アーティストの選考方法、条件

パフォーマンス・スペースが実現したいと考えるプロジェクトであること、アーティストに経験・実績があり、企画ができていることが選考基準となる。選考はプログラムのチーム（ディレクター、プロデューサー）とプロダクション・マネージャーが当たる。また、受入先の領域（例えば、クリティカル・パスはダンス）も考慮される。最も重要なのはアイデアで、パフォーマンス・スペースは新しいアイデア（「伝えるべきストーリー」）を求めており、その実現に向けたサポートを行うことに主眼を置いている。プロダクションに関する助言、照明・音響等の技術サポート、マーケティング等、チームとしてのプロジェクトサポートがパフォーマンス・スペースの独自性である。その意味では、レジデンスプログラム自体はプロダクション過程の一部としてとらえている。アーティストの宿泊施設はない。

(3) プログラムの実績

昨年はオープン・レジデンシーを含め、計19～20名が滞在した。今年度はインデジスペース・プログラム

（定員2人）に対し25人、スティーヴン・カミンズ遺贈レジデンシー（定員3人）に対し40人の応募があった。

レジデンスプログラム経験者のプロジェクトがプロダクションとして実現するか否かは、パフォーマンス・スペースのチームの時間と能力に左右され、現在のところ半数以上の作品が制作され、年に1、2件が全国を巡回する。

(4) その他のプログラム

① キャリジワークス内でのプロジェクト

1シーズン毎のテーマに沿って5本の公演を開催。今年の上演作品の一つ『生と死』は、以前パフォーマンス・スペースのレジデンシー・プログラムに参加した原住民アーティストによるもので、擬似住宅を作ってそれぞれの部屋で原住民を取り巻く歴史的、社会的問題をテーマとした公演を行った。

また、ベルギーと英国をベースとした劇団による『最後の晩餐』では、観客が3名のパフォーマーとともにテーブルに着席し、3名のパフォーマーは有名人（アンディー・ウーホール等）の死の場面を語り、その言葉を読み上げる。その合間に13人の死刑囚がリクエストした最後の晩餐（1990年代にテキサスで処刑された約600人のリクエストを基にした）が、テーブルに着席した観客に運ばれる。食べるためには生きていなければならないが、最後の晩餐は死ぬためのものという矛盾や、

左: 大小ある劇場の1つであるベイ17。
右: 劇場のバックヤード



最後の言葉の重みを考えるプロジェクトである。

『一時しのぎ』は、土地の野菜や果物を、その土地のレシピでピクルスにして保存するもので、その作業と平行して、生態系問題を考えるレクチャーを行った。これは毎週土曜日にキャリジワークスで開かれる生鮮食品市場をテーマにしており、このプロジェクトを日本でも行いたいと考えている。

② オフサイトでの活動

移転した当初は、パフォーマンス・スペースのすべてのプログラムをキャリジワークスの建物内で行っていたが、現在はプログラムの3分の1をオフサイトで行っており、2年後にはこれを半々にすることを目標としている。その理由は、社会に出て特定の場所で行うサイト・スペシフィックなプロダクションを増加させ、他の機関とのパートナーシップを構築し、流動的な活動によってパフォーマンス・スペースの独自性を創り出すためである。

オフサイト・プロジェクトの例としては、アーティスト9人に依頼して、それぞれ特殊な「探索ワーク」を考案したものがある。一人は、シドニー市内で数十年前に住民運動によって開発が阻止された地域を、当時の活動家を招いて話を聞きながら歩くというプロジェクトを行い、また「ウォーターウェイ」という、途中パフォーマンスを交えながら、雨水の流れを通りから海まで辿るというプロジェクトもあった。

「貸しホール」というプロジェクトでは、様々なコミュニティ・ホールを使った。1つはカントリー・ウイメンズ・アソシエーション(CWA: 最も古い女性の組織)のホールで、CWA が出版した料理のレシピ139種すべてを90時間以内で調理してCWAの代表に審査させるというもの。その結果、会員が増えるなどCWAにも喜ばれ、成功を収めた。また別のプロジェクトでは、古い教会と墓地で、植民時代の住人や海で死んだ人々を偲ぶパフォーマンスを行い、墓地を観客で埋めつくした。今年1月にはシドニーフェスティバルと協力して、市内の小さな公園数ヶ所でパフォーマンスを行った。これらはシドニーを舞台に行われたが、現在ヨーロッパの5つの団体との共同プロジェクトを企画中である。

3. 施設の構成と内容

パフォーマンス・スペースが拠点とするキャリジワークスの建物は、19世紀の鉄道路線の発達を背景として、1880年代に車両(キャリジ)の建造工場として建てられたもので、総督や英国王家専用車両、オーストラリア初の電車や空調を備えた車両もここで造られた。しかし建物の老朽化、作業の民営化などに伴って生産性が低下し、工場は1988年に閉鎖された。キャリジワークスはNSW 州政府が所有し、キャリジワークスLtd. が州芸術省の部門であるアーツ NSW から助成金を受けて運営管理している。土曜日の生鮮食料市場を含めた独自のプログラムを運営するほか、事務所やスペースを賃貸し、パフォーマンス・スペースは必要に応じて次の劇場スペースを賃貸使用している。

- ベイ17 (1,072㎡、800席の劇場)
 - ベイ20 (290㎡の展示スペース)
 - ベイ18 (528㎡、332席の劇場)
 - トラック8 (380㎡、150席の小劇場)
 - トラック12 (280㎡、100席の小劇場)
- (客席はすべて可動式)

またキャリジワークスには、パフォーマンス・スペースのほかに、次に団体が入居している。

- EARTH (空気で膨らませた超大型の人形・動物などを取り入れた劇団)
- Force Majeure (現代舞踊団)
- Marrugeku (西オーストラリアで発足した、原住民文化を取り入れたパフォーマンス劇団)
- 劇作オーストラリア (オーストラリアの劇作家を助成)
- ストーカー (激しい身体の動きと文化・社会・政治の主題を特色とする劇団)
- ヴァージョン1.0 (社会・政治色の濃いパフォーマンス集団)

4. 運営体制と事業収支

(1) 運営組織

パフォーマンス・スペースは非営利団体で、理事会及び専任スタッフによって運営されている。また、全土のネットワーク団体 CAO (現代美術団体組織



キャリッジワークス内のオフィスエリア。
いくつかの舞台芸術関係のオフィスが入居する。

Contemporary Art Organisations)に所属している。

① 理事会

- 理事長:クレア・ペトラ (Clare PETRE)
1998年以来 NSW 州のエネルギー水道苦情処理官を務め、住民関係、政府関係、マスコミ関係に豊かな経験を持つ。
- 財務委員:ロンダ・マカン (Rhonda MCCANN)
ANZ 銀行を含め、銀行業と金融業に20年以上の経験を持つ。
- その他の理事(7名):コンサルティング会社社長、アーティスト・アニメーター・デザイナー、シドニー劇場リサイタルホールのジェネラル・マネージャー、弁護士、マーケティング専門家、プロデューサー・俳優、音響アーティスト

② スタッフ

スタッフはフルタイム10名、パートタイム2名。主なポジションの役名と氏名、略歴、その他のポジションは次のとおりである。

- ディレクター:ジェフ・カーン (Jeff KHAN) / 常勤
パフォーマンス、ダンス、美術にまたがるキュレーター及び批評家。専門は越境芸術、サイト・スペシフィック及び住民を巻き込むプロジェクト。2006-10年まで、ネクスト・ウェーブ・フェスティバル芸術監督。
- ディレクター:ベック・ディーン (Bec DEAN) / 常勤
2007年に着任する前は、オーストラリア写真センターのキュレーター、パース現代美術研究所の展覧会マネージャーで、それ以前に西オーストラリアで現代美術関係の仕事を経験した。
- ジェネラル・マネージャー:ステフ・ウォーカー (Steph WALKER) / 常勤
2012年のパフォーマンス・スペース着任前は、ニュージーランドで舞台芸術の企画・運営・マーケティングのリーダーとして活躍。2010-12年にはクライストチャーチ芸術祭のジェネラル・マネージャー兼芸術監督として大成功を収め、クライストチャーチの震災復興当局のためにコミュニティイベントを企画。
- プロダクション・マネージャー
- テクニカル・マネージャー
- プロデューサー

- 資金調達・会員オフィサー
- マーケティング・コミュニケーション・オフィサー
- 管理事務オフィサー
- 原住民プロジェクト・オフィサー
- プロジェクト・オフィサー
- 会計士

(2) 事業収支

パフォーマンス・スペースの年間予算は、173万豪ドル(約1億7,300万円、2011年支出ベース)。

事業収支(2011年)

(豪ドル)

収 入	
入場料	41,221
共同制作者からの支払い	27,650
メンバーシップ会費収入	677
賛助・プロジェクト運営費	20,588
ワークショップ参加費	1,111
機器貸出料	15,084
コピー料	2,112
協賛金・寄付金	97,465
その他	72,007
補助金・助成金	1,497,364
収入計	1,775,279
支 出	
給与等	1,020,566
制作費	341,707
マーケティング費	184,667
設備費	182,287
支出計	1,729,227
余剰金	46,052

資料: Performance Space Annual Report 2011

非営利団体による運営のため、資金の70-80%が連邦・州政府の補助金・助成金で賄われている。連邦政府の出資者であるオーストラリア・アーツカウンシルでは、従来の芸術部門とは別に設定された越境芸術 (Intra-art) 部門から助成を受けている。

なお、パフォーマンス・スペースはキャリッジワークス Ltd.における使用スペース(オフィス、倉庫、リハーサル・上演時の劇場スペース)の使用料を支払っている。



5. 事業評価の実施状況

各プロジェクト及びシーズン終了ごとの報告・反省会によって内部評価を実施。外部に対しては、政府・民間からの助成金の完了報告書による評価が行われ、芸術面、経営面の両面から分析が行われる。また年間報告書を作成し、一般に公開している。

パフォーマンス・スペースは、長年にわたり、オーストラリアの中堅となるパフォーマーを輩出しており、出資者である政府関係者は、その成果を認識している。パフォーマンス・スペースの活動は、オーストラリア・アーツカウンシルの目的に適合するため、非常によい関係を維持している。

6. 現在の課題と今後の方向性

レジデンス事業を運営する上で最も大きな問題は、宿泊施設を保有していないこと。シドニーの家賃は非常に高いので、難しい問題である。向こう2年ほどの間に何とか改善したい。現在のところ、安価なホテル、大学の宿泊施設、知人の家などを使用している。また、すべてのプロジェクトへのサポートは困難であるため、今年度以降はレジデンスの数を減らしてアーティストへの報酬を確保し、実現できるプロジェクトを厳選する予

定である。

資金調達の面では、政府の補助金や助成金に頼らず民間の資金源を拡大させるプレッシャーが増しているが、誰もが同様の立場にあり、民間の慈善団体は数が少ないため資金獲得の競争が激しく、将来の資金調達が難しくなっている。

また、キャリジワークスへの移転によって、キャリジワークスの活動とパフォーマンス・スペース独自の活動とが混同されることが多く、プログラムの独自性、固有性が問題となるようになった。しかし、ここ3-4年の間、キャリジワークス外で行われるプロジェクトを増大させることで、流動的な活動団体としてのパフォーマンス・スペースの独自性、固有性を徐々に確立してきている。一方では、スペースを自主運営、稼働させる必要がなく、プロジェクト運営に集中できる点では有利である。

日本との連携については、トーキョーワンダーサイト、BankART1929と仕事をすることがあり、将来的に相互提携を行っていきたい。また、越後妻有アートトリエンナーレ及びオーストラリア・ハウスにも興味があり、関わりを持ちたいと考えている。

4. アジアリンク・アーツ | Asialink Arts

面会日:2013年3月13日(水)11:00-13:00

面会者:Natalie KING (Director, Utopia@Asialink)

Eliza ROBERTS (Arts Residencies Manager)

URL: http://www.asialink.unimelb.edu.au/our_work/arts

1. 運営機関の概要

(1) 設立趣旨・経緯

アジアリンク・アーツ(以下「アジアリンク」)は、1990年に連邦政府の未来委員会と、民間の慈善団体であるマイヤー基金¹とによって設立された。その目的は、企業・政府・慈善団体・文化団体のパートナーと協力し、豪州におけるアジア諸国に関する知識を深め、関係を強化すること。翌年1991年にはマイヤー基金とメルボルン大学の合意で大学組織に組み込まれ、1998年には、メルボルン劇団及びイアン・ポター美術館と並んで、メルボルン大学の学部(非学術)として一つの独立組織となった。

アジアリンクのプログラムには、時事フォーラム、調査分析、教育、指導者養成、地域医療があり、芸術プログラムとして「アジアリンク・アーツ」がある。

(2) ミッション

アジアリンクは、2012年に連邦政府が発表した「アジアの世紀におけるオーストラリア白書」をうけ、次の3つ目標を設定した。

- アジア諸国の文化パートナーと協働できる知識と経験を備えた、次世代のリーダーを養成する。
- 豪州をアジア地域における文化のキーパートナーとして位置づけるにふさわしいプラットフォームのモデルを開発する。
- 豪州の文化外交、芸術市場、創造性の開発に向けて、政府の国際文化政策の構築に貢献する。

2. プログラム内容と実績

(1) アジアリンクのプログラム内容

アジアリンクの事業は、現在次の4つプログラムから構成される。

① レジデンスプログラム

豪州最古・最大の芸術関係者のレジデンスプログラ

ムを運営。

② 文芸交流プログラム

作家と出版社をつなぐほか、イベント等のプロジェクトを企画。

③ パフォーミング・アーツ

ダンス、音楽、舞台芸術全般を対象にした交換プログラム。

④ 巡回展覧会

豪州の現代美術をアジア各地に巡回させる。

⑤ ユートピア@アジアリンク

美術を対象とした、2年毎に開催される地域間交流プログラム。展覧会、レジデンスプログラム、国際会議など、多層的に展開。現在、トーキョーワンダーサイトのほか、シンガポール、インド、韓国のアートディレクター、キュレーターがパートナーとして参画。

これら4つのプログラムは、基本的に独自展開しているが、それぞれのプロジェクトが共同で実施される場合もある。一例として、レジデンスプログラムと文芸交流プログラムが共同し、オーストラリアとインドの文芸作家が共に列車に乗り、移動図書館の公開や路線沿いの地域との交流を行う「動くレジデンス」を実施したことがある。このプロジェクトでは、それぞれのプログラムがお互いの知識やコンタクトを持ち寄ることができた。

また、日本の瀬戸内国際芸術祭の一環である「福武ハウス」アジア・アート・プラットフォームでは、レジデンスプログラム担当のエリザ・ロバーツ(Eliza ROBERTS)が、地域のパートナー7者と共に、オーストラリアのアーティストの展覧会を企画。新しい地域パートナーを発見する機会ともなった。

(2) アーティスト・イン・レジデンス・プログラム概要

アジアリンクのレジデンスプログラムは、独自の施設を持たず、国内外のパートナー機関と提携して幅広い分野の芸術関係者の交流をサポートすることが特徴である。オーストラリア最古のレジデンスプログラムであり、22年の歴史と実績がある。当初の対象は美術家3名であった。10年ほど前は40名以上が対象となったが、予算等の制約から、現在は人数を削減している。

¹ マイヤーデパートの創設者であり、慈善家として名高いシドニー・マイヤー(Sidney Myer: 1878-1934年)の遺言によって、シドニー・マイヤー基金(Sidney Myer Fund)とともに設立された。

アジアリンク・アーツが事務局を置く、メルボルン大学の外観。



滞在期間は通常3ヶ月。舞台芸術、美術、文芸に携わるアーティスト、作家を公募対象とし、以下の4つのカテゴリーがある。そのほか、場合によっては招待プログラムを実施することもある。

① パートナー・レジデンス

アジアリンクと提携する海外のパートナー機関の施設に滞在するもの。応募者は希望滞在先を2ヶ所まで指定できる。

② 交換レジデンス

応募者は、日本、韓国、台湾から1ヶ所を選択する。

③ 実験レジデンス

新しいレジデンス事業のモデルを実験的に取り入れるもので、2013年には次の事業を実施した。

- 集中レジデンス (Intensive) : 3331アーツ千代田に1ヶ月滞在するプログラム。
- 1対1レジデンス (One-to-one) : 北京の国際的なレジデンスに滞在。受入先が、アーティストの目的に対応したプログラムを作成する。
- 多国籍レジデンス (Multilateral) : ジョグジャカルタで、現地のアーティスト及びオランダ人アーティストと3ヶ月間過ごし、共同プロジェクトを行う。
- スペース交流レジデンス (Spaced Reciprocal) : インドのアーティストが西オーストラリアの地方に滞在、同時にオーストラリアのアーティストがインドに滞在し、それぞれが制作した作品による展覧会を2015年に西オーストラリア博物館で開催する。

④ 自主レジデンス

自分で滞在先を決め、受入機関の許諾書とともに申請する。

(3) アーティストの選考方法、応募の条件

選考は、外部の専門家からなる選定委員会と担当者が協力して行う。トーキョーワンダーサイトの例では、アジアリンクで3人まで候補を絞り、日本側が最終選考を行った。受け入れ側が選考に関わることで、滞在アーティストとの親近感が生まれる。

① 応募者の条件

アジアリンクはレジデンスプログラムを長期的な成長

過程としてとらえており、応募は一定の結果を予測するプロジェクト主体のものではない。ただし、プログラムによっては、提携先が地域の教育プログラムなど、特定の目標を設定する場合もある。主な選考条件は次のとおりである。

- オーストラリア国籍または永住権保持者であること
- これまでの業績
- レジデンスの経験が、プロフェッショナルとしての将来の目標に沿っていること
- 応募者の目標が応募先の国と関連していること
- アジアで仕事をしようとする姿勢
- 滞在中、受入先と積極的にかかわる自信と能力
- レジデンスへの参加が将来オーストラリアの利益となる可能性

② 支援

オーストラリアのアーティストが海外へ行く場合は、最高3ヶ月の滞在中で1万2,000豪ドル(120万円)が支給される。3ヶ月未満の場合は、期間によって金額を調整する。交流プログラムのアーティストには9,000豪ドル(90万円)が支給される。これは、トーキョーワンダーサイトなどのように受入機関からスタジオ施設が提供されるため。日本からのアーティストがオーストラリアに滞在中の場合は、アジアリンクがスタジオ費用3,000豪ドル(30万円)をオーストラリアの受入施設に支払う。

他の支援として、アジアリンクのレジデンスプログラムの「同窓生」同士で情報やコンタクトをシェアし、サポートし合うことが多い。また、アジアリンクがこれまでのレジデンスプログラムから得た情報でデータベースを作成し、対象者に提供している。

(4) プログラムの実績

交換レジデンスプログラムは継続的な関係性を結ぶものである。例えば東京のスタジオに滞在したアーティストが、次に日本のアーティストがメルボルンに滞在中の際、周囲のアート・コミュニティに紹介・協力するなどの結果を生んでおり、相互にとって非常に有益である。ただし、このプログラムは、相手国の財政に余裕のあることが必要である点が課題である。

2012年の日本との交換レジデンスでは、タスマニ

アのアリシア・キング (Alicia KING) がトーキョーワンダーサイトに滞在。日本からは池田剛介が、メルボルンの RMIT 大学の施設に滞在した。

またアジアリンクは、一定の国との友好年などで政府から特別予算が出る場合、さらに実験的な試みを行う。例えば、インドとの友好年では、ゴアのアーティストが2週間シドニーのパフォーマンス・スペースで過ごした後、メルボルンに来て公開討論やパフォーマンスを行い、その後、西オーストラリアに移動して講演するなど、一人のアーティストに異なった地域を体験させることで違った感応を引き出す結果となった。

3. 運営体制と事業収支

(1) 運営組織

アジアリンクの運営組織は、メルボルン大学の学部(非学術)として一つの独立組織となっている。レジデンス事業を含むアーツ部門は、スタッフ7名(内フルタイム4名)で運営。

(2) 事業収支

アジアリンクは、連邦・州・地域レベルの政府機関、また外務省関係の二国間協定プログラムなど、16の助成プログラムからの資金、及び小額の慈善団体の寄付で賄われている。ただし、アジアリンクの他の部門はそれぞれ違った予算編成となっている。またアジアリンクでも、例えば巡回展覧会プログラムや文芸交流プログラムは資金源が異なる。

今年のレジデンシーの予算は、対象者24名で、レジデンシーの費用に25万豪ドル(2,500万円)、運営費6万豪ドル(600万円)。

アジアリンクの出資者は次のとおりである。メルボルン大学、マイヤー基金(The Myer Foundation)、オーストラリア・アーツカウンシル(Australia Council for the Arts:連邦政府)、外務貿易省(連邦政府)、美術工芸戦略(ヴィクトリア州政府)、豪韓交流基金(連邦政府)、豪日交流基金(連邦政府)、豪中協会(連邦政府)、豪州インドネシア協会(連邦政府)、豪州インド会議(連邦政府)、豪州マレーシア協会(連邦政府)、北部準州政府、西オーストラリア文化芸術省、アーツ SA(南オース

トラリア州政府)、アーツ・ヴィクトリア(ヴィクトリア州政府)、アーツ・クイーンズランド(クイーンズランド州政府)、アーツ NSW(NSW 州政府)、タスマニア州政府、豪州インド協会、Besen Family 基金、マルカム・ロバートソン基金、ゴードン・ダーリング基金。

4. 事業評価の実施状況

レジデンスプログラム終了後には報告書の提出が義務づけられており、自己評価がプログラム分析の役割を果たしている。評価に対する姿勢は、以前は個人的に、別の環境で仕事をするによる利益を主として考えていたが、近年では、そこから将来の可能性を重視するようになった。レジデンスプログラムは文化の相互理解が最大の利点であるが、何年も先までその影響が継続するため、記録として残すことは困難である。

5. 現在の課題と今後の方向性

オーストラリアでは全般的に、スタジオ・宿泊施設といったインフラ設備が不足しているため、海外からの滞在者を迎える場合に適当な場所を見つけるのが難しい。また、助成金のほとんどは海外に行く者を対象にするため、海外からアーティストを迎える場合にはその国から助成金を得る必要がある。最近ではアジアと関わるプロジェクト、特にレジデンスプログラムが増大し、政府の助成金の獲得競争が激化している。必要経費を確保することが難しくなっているため、民間からの助成金を得る必要がある。また、応募者からの申請書を審査・選択した後に、多数の助成金と適合させる仕事が非常に複雑であるため、簡易なモデルを模索している。現在、限られたスタッフで仕事の負担を軽減するための人的資源も必要である。

現在、アーティストは非常にモバイルになっており、同時に、それぞれの仕事、家族条件などにおいて個別の課題を抱えている。「レジデンスプログラムとは何か」という問題は、常にその時代の状況に合わせてながら考える必要がある。

6. 日本のアーティスト・イン・レジデンスについて

日本はオーストラリアのアーティストからもっとも人気の高い滞在国のひとつだが、現在のプログラムの提携先は、トーキョーワンダーサイト、3331アーツ千代田の2ヶ所である。助成金では豪日交流基金のみであるため、さらなる受入機関、助成機関との協力、連携を望んでいる。また、博物館学の部門でも、機関同士のキュレーターなどの交換プログラムや、情報交換のパイプ役の必要性があるということだった。

第3部

アーティスト・イン・レジデンスの国際ネットワークに係る調査

本調査研究では、アーティスト・イン・レジデンスの国際ネットワークについて、国内外の代表事例の概要を主にインターネット掲載情報から一覧表に整理するとともに、世界2大ネットワーク組織であるレズ・アルティスとトランス・アーティストについて、前者はインターネット掲載情報と会長のマリオ・カロ氏へのメールインタビューを、後者は現地訪問調査をそれぞれ実施し、設立の経緯や事業内容、運営体制等の詳細を把握した。

ここでは、それらの調査結果に基づいて、アーティスト・イン・レジデンスに関する国際ネットワーク組織の現状と傾向、日本のネットワーク組織の現状と課題、日本におけるネットワークの必要性和設立に向けた課題、を分析・整理した。

1. 国際ネットワーク組織の現状と傾向

(1) 主要な国際ネットワーク組織の設立と背景

国際ネットワーク組織、活動の発足は、1980－90年代の欧州諸国においてアーティスト・イン・レジデンスが急速に発展してきたことを背景としている。その過程で、大きく分けて二つの需要、必要性に基づいてネットワークが創設された。

第一は、利用者であるアーティストへの情報提供である。アーティストが自身の活動にふさわしいプログラムを知り、かつ参加に必要な自立的な資金を得るための、情報提供ができる仕組みづくりが必要となってきたことである。第二は、受入先である運営組織の持続的な活動を支える仕組みとして、ネットワークづくりへの期待が高まってきたことである。各プログラムの運営者が相互の知識と経験を共有することで、運営に関する課題を解決し、事業の発展を目指す場が必要とされるようになった。

そうした需要と必要性を基点にしながら、アーティストの要請に対しては、急速に発展したインターネットによる情報公開がネットワーク発展の基盤を支えた。運営組織の要請に対しては、ウェブサイト上のバーチャルな関係性を越えた、アーティスト・イン・レジデンスの担当者による、オフラインの、フェイス・トゥ・フェイスでの国際会議が活発に行われるようになった。

ネットワーク組織には、対象範囲によって「国際ネットワーク」と「国内や地域内限定ネットワーク」があり、その中でも国際会議などによるアーティスト及び運営担当者によるフェイス・トゥ・フェイスのプラットフォーム形成型と、アーティストのモビリティ支援を中心とした情報提供型に大きく分けられる。また、舞台芸術分野では、レジデンスプログラムに加え、その後のプロダクションまでを視野に入れて、独自のネットワークを形成している組織もある。

(2) 世界を代表する2つの国際ネットワーク

アーティスト・イン・レジデンスにおける世界の2大国際ネットワークの概要は次のとおりである。

① Res Artis(レズ・アルティス):アムステルダム／オランダ

アーティスト・イン・レジデンス事業者及び関係機関のネットワーク組織。現在、世界70ヶ国、400以上のアーティスト・イン・レジデンス事業者及び関係組織が加盟している。日本では、アーカスプロジェクト(茨城県)、遊工房アトスペース(東京都)、トーキョーワンダーサイト(東京都)など10のアーティスト・イン・レジデンス事業者や関係機関が会員となっている。欧州を中心とした組織間交流からスタートし、設立当初はドイツ、オランダ、オーストラリア、米国、カナダなどの欧米諸国の運営者がボードメンバーの中心を占めていたが、現在は南米、中東、アジア各国からもボードメンバーが選出され、世界的組織へ発展を遂げている。

メンバーシップ制によるウェブサイトでのレジデンスプログラム情報の発信、及び、2年に1回のフェイス・ト

ウ・フェイスでの世界大会(総会)を各国の持ち回りで実施。南米、中東、アジアに向けた戦略的な活動に取り組んでいる。2012年10月には東京で総会が開催された。

② Trans Artists(トランス・アーティスト):アムステルダム／オランダ

アーティスト・イン・レジデンスの研究機関で、アーティストや芸術団体を対象に世界のアーティスト・イン・レジデンスの情報を収集して公開している。ウェブサイトでの情報公開以外には、「AiR Platform NL」や「On-AiR」というサブネットワーク組織を運営しており、パートナーのアーティスト・イン・レジデンス事業者とともに、オランダと欧州を中心にセミナーやワークショップを実施。徹底した情報提供による、アーティストのモビリティを確保、促進する活動からスタートし、オフラインの国際会議の場づくりを積極的に行いながら、利用者であるアーティスト、受入先である組織運営者をつなぐ、世界でもっとも活発な活動を行う組織である。

- ウェブサイト“Trans Artists”:情報共有
- AiR Platform NL:オランダのアーティスト・イン・レジデンス事業者及び関係機関のネットワーク組織。Trans Artists のウェブサイトでオランダのアーティスト・イン・レジデンスの情報を掲載。セミナーやワークショップも実施。Trans Artists が運営を行っている。
- On AiR:ヨーロッパのアーティスト・イン・レジデンス事業者及び関係機関を対象とするネットワーク組織で、レジデンス事業の制作・運営面の知識やスキルを共有するセミナーやワークショップを実施。現在、EU に加盟する16ヶ国の18のアーティスト・イン・レジデンス事業者及び関連機関が加盟。Trans Artists が運営を行っている。

(3) 特定地域を対象とした国際ネットワーク及びモビリティ支援

① Arts Network Asia(アーツ・ネットワーク・アジア):シンガポール／シンガポール

主に東南アジア諸国の間のアーティストや芸術団体のモビリティを支援するネットワーク組織。シンガポールのシアターワークスを中心となって、域内のアーティストのグループが設立した組織で、現在、9つの国と地域の代表がパネルとして参加している。

② Asialink Arts(アジアリンク・アーツ):メルボルン／オーストラリア

オーストラリアとアジアとの文化交流を促す組織で、主にアジアのアーティスト・イン・レジデンス事業者とパートナーシップを組み、オーストラリアのアーティストや芸術団体の派遣や国際的な活動を支援している。

(4) 自国内を対象としたネットワーク

① Alliance of Artists Communities(アーティスト／コミュニティ協会):プロビデンス(ロードアイランド州)／米国

米国のアーティスト・イン・レジデンス事業者及び関係機関からなる会員制のネットワーク組織。ただし、米国のアーティスト・イン・レジデンス事業者中心の組織で、欧州やアジアの会員は少ない。「Sustainability Project」や「Artist Residencies + Dance」などの出版物がある。

② Artist Mobility(アーティスト・モビリティ):オーストリア

オーストリア国内のアーティスト・イン・レジデンス情報を提供。特に、アーティストが滞在するためのビザ取得に関する情報、公募情報、助成情報に加え、用語集なども掲載している。レジデンスプログラム利用者を重視した情報発信サイトで、オーストリア政府によって運営されている。

(5) ジャンルに特化したネットワーク

① On the Move(オン・ザ・ムーブ):ブリュッセル/ベルギー

ヨーロッパの舞台芸術や領域横断的な芸術を対象にアーティストのモビリティ(移動・交流)を支援するファンドやグラントのネットワーク組織。会員にアーティスト・イン・レジデンスの事業者は含まれていないが、舞台芸術に関連するレジデンスプログラムの情報提供やネットワーク化などを促進している。

② Triangle Arts(トライアングル・アーツ):

美術を中心としたレジデンスプログラムの国際ネットワーク組織。1982年に彫刻家アンソニー・カロ等によって設立された。アーティスト、レジデンス運営者間の対話を促し、新たなアイデアを交換する場を設けることで、視覚芸術の発展に寄与しようとしている。

2. 日本のネットワーク組織の現状と課題

現在日本には、アーティスト・イン・レジデンスを対象とした2つのネットワーク組織(うち1つは「情報提供型」)がある。また、その他、小規模のレジデンスプログラムをネットワーク化する研究を行う団体、国内のアートNPOのネットワーク、舞台芸術の分野のネットワーク組織についても参考事例として挙げた。

(1) 背景、現状

① J-AIR ネットワーク会議

主に国内のアーティスト・イン・レジデンス担当者間の交流と、各国の在京大使館文化担当官とのネットワークを主軸に活動をスタートした、非営利の任意組織。現事務局を担う、産業人文学研究所の門田けい子氏と TransArtis 代表のマリア・テウエリング氏との交流から、日本のアーティスト・イン・レジデンスに関する海外への情報提供の窓口が望まれ、組織設立の構想が生まれた。アーティスト・イン・レジデンス担当者間の交流と情報共有をベースに、海外とのネットワークを構築するため、在京大使館、文化機関等から会場提供の協力を得て、2002年より年1回の担当者会議、2008年からゲストスピーカーを招いたオープンフォーラムを開催してきた。

会員制はとらず、数名のレジデンスプログラム担当者で構成された事務局を置く。メーリングリストを活用しながら、会議開催ごとに全国の担当者に案内を出し、任意で参加できるゆるやかな運営を行っている。主な事業は次のとおり

- 年1回の担当者会議(2001年ー)
- オープンフォーラムの開催(2008年ー、一般公開、担当者会議と同日開催)
- ウェブサイトでの活動報告(随時)
- 担当者会議及びフォーラムの報告書発行(随時)

② AIR-J(日本全国のアーティスト・イン・レジデンス総合データベース)

2001年より国際交流基金が運営する、国内唯一のアーティスト・イン・レジデンス総合情報サイト(日英バイリンガル)。情報提供によるアーティストへのモビリティ支援を中心に、全国のアーティスト・イン・レジデンス施設、プログラムについて検索できるデータベースを構築、公開している。また、アーティスト・イン・レジデンス経験のあるアーティスト、プログラム担当者の寄稿や FAQ などを掲載し、知識と経験を共有できる多角的な情報を発信している。直近の情報については、Twitter、facebook でフォローアップされている。

国際交流基金は、1993-94年にかけて「アーティスト・イン・レジデンス研究会」を立ち上げ、国内外のアー

ティスト・イン・レジデンス団体・施設についての調査を行い、95年に視察報告書を出版。その成果はバイリンガルで公開された。その後、国内アーティスト・イン・レジデンスの発展とニーズにあわせて、数回にわたるリニューアルが行われている。

現在46件の国内アーティスト・イン・レジデンスが掲載されており、主なコンテンツと検索機能は次のとおり。

- レジデンスプログラムの内容(公募の有無、助成内容、施設内容、成果発表・オープンスタジオの有無、対象分野、招へい機関、募集期間):公募の有無や助成内容、施設内容で検索が可能
- 各施設に滞在したアーティスト一覧
- FAQ
- リソース(関係者やアーティストのインタビュー記事、関連書籍、カタログ紹介など)

③ マイクロレジデンスのネットワーク形成に向けた調査研究

遊工房アトスペース(東京)が中心となり、世界中のマイクロレジデンスの現状を調査し、プレゼンスの向上と共同プログラム実施の可能性について研究が行われている。マイクロの定義は、「インディペンデント」、「アーティスト・ラン」、「小規模(予算、施設)」、「草の根」などに該当するものとし、レズ・アルティスをはじめとするいくつかのネットワークの中から164件のレジデンスプログラムの団体、施設をピックアップしアンケート調査を行った。その結果を現在データベース化し、また2012年開催のレズ・アルティス総会(東京大会)の機会に担当者会議を開催するなど、活動の幅を拡げており、新たなネットワーキングの発展が期待される。

2013年2月には「MICRORESIDENCE! 2012 アーティスト・イン・レジデンス、マイクロレジデンスからの視点」と題した報告書(本冊及び4別冊からなる)を発表した。

④ Move arts Japan(アーティスト・イン・レジデンス ポータルサイト)

一般社団法人非営利芸術活動団体コマンド N により、2012年度に開設されたポータルサイト。世界的な国際展や個人・地域が主導するアートプロジェクトが日本各地で行われている近年、アーティスト、キュレーター、研究者、アートコーディネーター、アートファンが日本各地を旅する需要が増えている現況を背景に、各地のレジデンスプログラムの概要、滞在制作、訪問のためのガイドラインを提供し、利用者の利便性を図ることを目的とする。現在は、7つの組織が参加しており、今後、ネットワークが拡大される予定である。

⑤ 舞台制作者オープンネットワーク(ON-PAM)

2012年に設立。舞台芸術分野のアーティスト・芸術団体と観客の間を繋ぐ全国的・国際的な会員制ネットワーク組織。舞台芸術の制作実務者が主体的に参加し、各々の仕事を通じて日々更新される情報やアイデアを交換、共有し、活動の展開をつなげる場の形成を目標としている。主な事業は次のとおり。

- 委員会事業(文化政策委員会、国際交流委員会、地域協働委員会)
- 企画事業(シンポジウム、会員親睦など)
- 会員提案企画(政策懇談会、アジアリサーチネットワーク、等)
- 会員への報告、情報提供(インターネット、メール等)

⑥ NPO 法人アート NPO リンク

2004年に設立。全国の文化、芸術事業を行う NPO 法人(「アート NPO」と総称)のネットワーク組織。市民自治の理念にもとづき、アートと社会の橋渡しを通して、地域をこえて連携し、豊かな市民社会の創出を目指している。現在加盟する会員組織・団体のうち、レジデンス事業に取り組むケースが近年増加しており、レ

レジデンス事業運営における課題に対して、議論の必要性が高まっている。主な事業は次のとおり。

- アート NPO の社会的ポジションを確立し、社会に向けて提言
- アート NPO と他のセクターとのパートナーシップ
- アート NPO に関する情報収集・発信・研究調査
- アート NPO の基盤強化とマネジメントの確立
- 地域密着型のミニフォーラム開催と全国展開

(2) 課題

これら日本のアーティスト・イン・レジデンスのネットワーク組織は、事務局がボランティアでまかなわれているため、安定した組織運営が難しい状態である。それにともない、全国の担当者が個々に抱える課題に速やかに対応できるまでに至っていない。また、国内アーティストのアーティスト・イン・レジデンスに対する認知度が低いため、海外レジデンスで、日本人からの申請や滞在が1度もないという事例が少なくない。アーティスト・イン・レジデンスに対する認知度を向上させることも、国内のネットワーク組織の重要な役割だと考えられる。

3. 日本におけるネットワークの必要性和設立に向けた課題

(1) ネットワーク組織の必要性和求められる機能

海外のネットワーク組織の活動状況を踏まえると、日本のネットワーク組織には、海外ネットワークのハブあるいはプラットフォームとしての役割、中間支援(主にアーカイブ、助成、マッチング)的な機能を担い、次のような支援や活動、成果が期待される。

① アーティスト・イン・レジデンスというアートコミュニティのプラットフォーム

- ネットワークの各拠点である組織、団体、個人のニーズに対応し、現況に沿った有益な運営、活動となることを最も重視すべきである。
- ネットワーク組織は、アーティスト・イン・レジデンス組織、団体の異なるアートフォーム間のネットワークの結末点であり、さらに国際ネットワークへのつなぎ手としての役割が求められる。
- そのため、アーティスト・イン・レジデンス組織、団体、アーティスト、研究者、ファンドなどのアーティスト・イン・レジデンスをとりまく現況をとらえるためのリサーチ機能が求められる。
- アートフォームのみならず、仕組みを支える重要な基盤である国、地方行政、財団、企業、その他のファンドへのつなぎ手でもある。

② アーティスト・イン・レジデンス組織、団体、担当者間の情報共有とプレゼンスの向上

- オンライン上のデータベース公開及びフェイス・トゥ・フェイスの定期的な会議を開催し、アーティスト・イン・レジデンスをとりまく現況の課題、ノウハウを共有、議論することにより、各プログラムや制度の改善など、アーティスト・イン・レジデンス全体に対する影響を及ぼすこと。
- 特に、評価システムの確立について、ネットワーク組織内で議論されることが必要と考えられる。運営者側にとって最重要課題である資金獲得のための各種助成システムは、世界をとりまく経済状況によって常に変化する。そのため、ファンド側が最重要視する事業評価に対し、運営者自らがその評価軸について議論、研究し、政策提案を行うなど、自ら働きかけていく必要がある。個々の組織、団体、個人ではなく、ネットワーク組織というひとつのコミュニティから発言することで社会的インパクトをもたらす、業界全体に対するプレゼンス向上が期待される。

③ 国内外アーティストへの情報提供及びサポート

- ネットワーク組織をアーティスト・イン・レジデンス組織、運営者側だけにとどめず、アーティスト・イン・レジデンスの直接的利用者であるアーティストに対してオープンな場を提供する。
- アーティストが国内外でのアーティスト・イン・レジデンスにアクセスするためのコンサルティング、メンタリングにより、アーティストのモビリティを高め、キャリアステップを支援する。

④ アーティスト・イン・レジデンスの持続的な運営支援

- 国内外アーティスト・イン・レジデンスとの共同プログラムの開発、実施、マッチング機能。様々な課題解決の糸口を見つけ、運営の持続、発展を支援する。また、国内外のファンドやネットワークとの連携により、各アーティスト・イン・レジデンス間の戦略的プログラム実施を発展させる。
- 新たに立ち上がったばかりの経験の少ないアーティスト・イン・レジデンス組織、団体に対する指導、支援の必要性。多種多様な新規のレジデンスが生まれ、持続的な運営を可能にすることは、アーティスト・イン・レジデンスコミュニティ全体に対する持続性へとつながる。
- 国内外アーティスト・イン・レジデンス担当者間の人材交流、情報の交換。オンライン情報及び会議のみならず、実際の各現場での経験の場を提供し、相互に共有する仕組み。インターンシップ、相互交流、国際会議参加への機会を促すなど、情報提供のみならず、渡航費助成などモビリティ支援も必要となる。
- アーティスト・イン・レジデンスマネージャー育成のためのワークショップ、コンサルティング、メンタリング機能。組織、団体を支える担当者のスキルアップを促し、経験の共有を通してアーティスト・イン・レジデンス全体へその影響が波及されること。

(2) ネットワーク組織の設立に向けた課題

しかし、現況のネットワーク組織では安定した事業運営を行える状況ではないため、専任のスタッフを配置した公的組織(NPO、社団法人、財団法人、大学等の機関内での設置を含む)への転換、発足が望ましいと考えられる。その際、安定した組織運営のための資金確保について、政府や公的機関、助成財団からの支援及び、会員制による受益者負担など、複合的なファンディングが必要となる。また、活動によっては、レズ・アルティス等との協働により、設立に関するノウハウ、資金面でのサポートを得ることも検討すべきであろう。

ネットワークの設立に際しては、公的な支援のある比較的規模の大きな組織だけではなく、マイクロレジデンス(インディペンデント、アーティスト・ラン、小規模)も対象に含めることが望ましい。世界のレジデンスの多くが「マイクロ」という定義に位置づけることができ、アーティストのモビリティを支え、キャリアパスのプラットフォームとしてのマイクロレジデンスは国際的にも大きな意義を有しており、それらの活動を振興、支援する役割が、これからのネットワークには求められている。

4. 諸外国及び日本の主要な国際ネットワーク組織の一覧表

本調査研究で把握したアーティスト・イン・レジデンスに関する国内外の代表的なネットワーク組織の概要は下表のとおり。各組織のサイト掲載情報を参考に、一部は担当者へのインタビューに基づいて整理した。

海外の主要なアーティスト・イン・レジデンスのネットワークの概要	
Res Artis(レズ・アルティス)	
創設年 事務局所在都市	1993年 アムステルダム、オランダ
URL	http://www.resartis.org/
会員制	<ul style="list-style-type: none"> 世界70ヶ国、400以上のアーティスト・イン・レジデンス事業者及び関係組織、アーティストが加盟。 4つの会員制度: 1) General Members、2) Associate Members、3) Individual Members、4) Emerging Members がある。 上記の年会費は75 - 450ユーロ、組織形態、個人会員などによって異なる。
概要・特徴	<ul style="list-style-type: none"> キュンストラハウス・ベタニエン(Künstlerhaus Bethanien)のディレクター、ミヒャエル・ヘルター(Michael HAERDTER)が提唱し、1993年に第1回目の国際ネットワーク会議を開催。アーティスト・イン・レジデンスのプレゼンス向上、アーティスト、運営者の持続的活動を相互に支援する仕組みとしたネットワークを構築。 フェイス・トゥ・フェイスによる2年に1回の世界大会(総会)を主要事業とし、ウェブサイト上での会員施設・プログラムのデータベース公開、アーティスト及び運営者へのメンターリングワークショップ、運営助成等を行う。2012年10月に、東京大会が開催された。
日本の加盟団体	10団体 アークスプロジェクト(茨城県)、遊工房アーツスペース(東京都)、トーキョーワンダーサイト(東京都)、瀬戸市文化振興財団/瀬戸国際セラミック&ガラスアート交流プログラム(瀬戸市)、3331アーツ千代田(東京都)、秋吉台国際芸術村(山口県)、京都アートセンター(京都市)、アーティスト・イン・レジデンス山梨(山梨県)、スタジオ蔵(福岡県)
運営組織	<ul style="list-style-type: none"> 国際 NGO 及び NPO としてオランダ政府に登録。 会員及び会員内より互選された役員(8名)、名誉役員(6名)、事務局(3名)、インターン(1名)。
年間予算・財源	The European Commission、Ford Foundation、Asia-Europe Foundation、Conseil des Arts de Montréal、Canada、他、世界各国の政府機関、国際交流機関、助成財団等から幅広く運営資金を受けている。
Trans Artists(トランス・アーティスト)	
創設年 事務局所在都市	1997年 アムステルダム、オランダ
URL	http://www.transartists.org/
会員制	会員制なし、Trans Artists のリサーチによるデータベース掲載
概要・特徴	<ul style="list-style-type: none"> アーティスト・イン・レジデンスの研究機関。アーティストに対するレジデンスプログラムの活用促進、アーティスト・イン・レジデンスのプレゼンス向上、持続的発展へ寄与することを目的とする。 世界各国のアーティスト・イン・レジデンスの情報を収集したデータベースを公開。また、ウェブでの情報公開以外には、「AiR Platform NL」や「On-AiR」という事業を実施しており、パートナーのアーティスト・イン・レジデンス事業者とともに、オランダと欧州を中心にセミナーやワークショップを実施。

日本の加盟団体	<p>情報掲載33団体:</p> <p>とこなめ国際やきものホームステイ(愛知県常滑市)、アートスタジオ五日市市レジデンス事業(東京都あきる野市)、青森公立大学 国際芸術センター青森(青森市)、Beppu Project(大分県別府市)、福岡アジア美術館(福岡市)、IAMAS(岐阜県)※、スタジオ蔵(福岡県糸島市)、岩手町アーティスト・イン・レジデンス事業(岩手県岩手町)※H15年事業終了、CCA 北九州(北九州市)、Dance Box(神戸市)、滋賀県立陶芸の森(滋賀県甲賀市)、京都アートセンター(京都市)、美濃・紙の芸術村(岐阜県美濃市)、ARCUS プロジェクト(茨城県守谷市)、アート・ビオトープ那須(栃木県那須町)、信濃の国 原始感覚美術祭(長野県大町市)、ART-EX 大阪(大阪府)※、アート11号(神奈川県相模原市)、HeadSpace(奈良県桜井市)、S-AIR(札幌市)、瀬戸市文化振興財団/瀬戸国際セラミック&ガラスアート交流プログラム(瀬戸市)、トーキョーワンダーサイト(東京都)、神山アーティスト・イン・レジデンス(徳島県神山市)、国際交流基金(東京都)、A.I.T(東京都)、遊工房アトスペース(東京都)、アーツ千代田3331(東京都)、セゾン文化財団/森下スタジオ(東京都)、拝借景(茨城県取手市)、山口情報芸術センター(山口県山口市)、秋吉台国際芸術村(山口県秋芳町)、国際木版画ラボ(山梨県富士河口湖町)、Bank ART(横浜市)</p> <p>※印の2団体は現在プログラムを行っていない。</p>
運営組織	<ul style="list-style-type: none"> ● 政府の文化機関である「DCICC オランダ国際文化協力センター(Dutch Center for International Cultural Cooperation)」内に「Trans Artists Desk」を置く。 ● 事務局7名
年間予算・財源	Ministry of Education, Culture and Science より年120,000ユーロを受給(2012年度実績)
On the Move(オン・ザ・ムーブ)	
創設年 事務局所在都市	2001年 ブリュッセル/ベルギー
URL	http://on-the-move.org/
会員制	<ul style="list-style-type: none"> ● 欧州諸国を中心とした世界22ヶ国、36団体が会員登録。内訳として23事業運営組織と、13のネットワーク組織により構成。 ● 年会費300ユーロ
概要・特徴	ヨーロッパの舞台芸術や領域横断的な芸術を対象にアーティストのモビリティ(交流)を支援するファンドやグラントのネットワーク組織。舞台芸術に関連するレジデンスプログラム、グラントの情報提供やネットワーク化などを促進している。Trans Artists が会員に加盟。
日本の加盟団体	なし
運営組織	国際 NPO、会員総会及び役員(5名)、事務局(2名)
年間予算・財源	会員からの年会費及び、European Commission、Ministère de la Culture et de la Communication – France、Fundação Calouste Gulbenkian からの助成による。
Artist Mobility(アーティスト・モビリティ)	
事務局所在都市	オーストリア
URL	http://www.artistmobility.at/
会員制	<ul style="list-style-type: none"> ● なし
概要・特徴	<ul style="list-style-type: none"> ● 短期から長期にわたり、オーストリアにおける滞在を希望する海外のアーティストに向けた情報サイト。レジデンスプログラムのほか、創作活動のために滞在し、仕事を

	得るために必要なビザ取得に関する情報、助成情報に加え、用語集などを掲載。
日本の加盟団体	なし
運営組織	The Austrian Federal Ministry of Education, Arts and Culture Division
年間予算・財源	
Alliance of Artists Communities(アーティスト・コミュニティ協会)	
創設年 事務局所在都市	1990年 プロビデンス(ロードアイランド州) / 米国
URL	http://www.artistcommunities.org/
会員制	<ul style="list-style-type: none"> ・ 会員制。現在17カ国、43州から250組織及び個人が加盟。 ・ 1) Organizational Membership、2) Cohort Membership、3) Emerging Program Membership、4) Individual Membership、5) Affiliate Membership の5つがあり、組織・個人の形態によって年会費100-5,000米ドル。
概要・特徴	<ul style="list-style-type: none"> ・ 米国を中心としたアーティスト・イン・レジデンス事業者及び関係組織からなる会員制のネットワーク組織。1990年、マッカーサー財団(MacArthur Foundation)が行った助成プログラム「Special Initiative on Artists' Colonies, Communities, and Residencies」において採択された18組織が、翌91年に一同に集まり、助成金の一部を共同出資し、アーティスト・コミュニティ及び創造環境の整備等を目的とした活動が提唱されたことからスタート。アーティスト・コミュニティ、創造的環境、助成機関、政策担当者、研究者を対象とし、会員間のネットワーク構築、評価基準構築のためのリサーチ、助成機関とのパートナーシップの構築などを行う。 ・ ウェブサイト上での情報発信では、レジデンスプログラム情報及び、ツールボックスを設け、評価基準に資する様々なアートフォームの用語集、助成金申請のノウハウなどを掲載。
日本の加盟団体	なし
運営組織	NPO 組織。会員及び役員(16名)、名誉役員(10名)、事務局(5名)、コンサルティングメンバー(3名)により構成。
年間予算・財源	会員からの年会費、政府機関及びプライベートファンドからの資金を得て運営。
Asialink Arts(アジアリンク・アーツ)	
創設年 事務局所在都市	1990年 メルボルン / オーストラリア
URL	http://www.asialink.unimelb.edu.au/our_work/arts
会員制	
概要・特徴	<ul style="list-style-type: none"> ・ オーストラリアとアジアとの文化交流を促す組織。主にアジアのアーティスト・イン・レジデンス事業者とパートナーシップを組み、オーストラリアのアーティストや芸術団体の国際的な活動を支援。 ・ 「レジデンスプログラム」、「Arts Map」、「Writing Program(文筆家)」、「パフォーミングアーツ」、「巡回展プログラム」、「Utopia」などの各種プログラムを有し、各国及び組織、団体とのパートナーシップによる戦略的共同事業を展開している。
日本の加盟団体	なし
運営組織	オーストラリア・アーツカウンシル、オーストラリア政府アーツ部門から主な支援を受け、アドバイザリー組織が中心となり運営されている。現在、運営スタッフは7名。
年間予算・財源	オーストラリア政府、NSW 州政府、Arts Victoria、その他助成財団等を中心に、諸外国の各プログラムパートナー、助成財団等から幅広く運営資金を得ている。
Triangle Network(トライアングル・ネットワーク)	
創設年 事務局所在都市	1982年 ロンドン / 英国

URL	http://www.trianglearts.org/
会員制	<ul style="list-style-type: none"> 世界27カ国、34組織、団体の国際パートナー制(会員制度なし)。
概要・特徴	<ul style="list-style-type: none"> 美術におけるレジデンスプログラムの国際ネットワーク組織。1982年に彫刻家アンソニー・カロ等によって設立された。アーティスト、レジデンス運営者間の対話を促し、新たなアイデアを交換する場を設けることで、視覚芸術の発展に寄与する。 ネットワーク会議の開催及び、レジデンスに関する知識、スキルを共有するためのウェブサイトでのオンライン情報の発信。また、レジデンスプログラム、ワークショップ、アウトリーチを行う。
日本の加盟団体	なし
運営組織	<ul style="list-style-type: none"> およそ30組織がコンスタントにパートナーとして参加するトラスト(企業合同)。 運営(トラスティ)メンバー(8名)、プログラムスタッフ(4名) 事務局は Gasworks (英国)内に設置
年間予算・財源	Arts Council England、Prince Claus Fund for Cultural and Development、Arts Collaboratory、他
Arts Network Asia(アーツ・ネットワーク・アジア)	
創設年 事務局所在都市	1999年 シンガポール
URL	http://www.artsnetworkasia.org/
会員制	
概要・特徴	<ul style="list-style-type: none"> アジア間のアーティストや芸術団体のモビリティを支援するネットワーク型の助成活動。1999年、シンガポールを代表する劇作家オン・ケンセンにより提唱され、現在、9つの国と地域の代表がパネルとして参加。アジア内において、クリエイティブな人々が出会うプラットフォーム構築を目的に、国境を超えて活動するアーティスト、団体、組織間をネットワークし、その活動に助成を行っている。 主な支援として「事業助成」、「渡航費助成」、「クリエイティブ・エンカウンター(ネットワーク事業への助成)」を行っている。
日本の加盟団体	なし
運営組織	芸術文化専門家によるパネル(9名)及びシアターワークスが事務局を行う。
年間予算・財源	主にフォード財団(Ford Foudation)より助成
residencias_en_red(レジデncias・エム・レッド)	
創設年 事務局所在都市	2008年 サンパウロ、ブラジル
URL	http://residenciasenred.org/
会員制	イberoアメリカの13カ国、27組織・団体が加盟。
概要・特徴	イberoアメリカ(北米及び南米、欧州のイベリア半島にあるスペイン語諸国とポルトガル語諸国)のアーティスト・イン・レジデンス事業者を対象とする会員制組織。ラテンアメリカの統合にとともう、多様性の確保、協働への希求を受け、会員相互のコミュニケーション強化を目的として、2008年に設立された。アーティスト・イン・レジデンス事業者間の情報交換、共同プロジェクトを実施するほか、国際的なアドボカシー活動を行う。現在、13ヶ国から27のアーティスト・イン・レジデンス事業者及び関係組織が加盟。
日本の加盟団体	なし
運営組織	会員内に、「Gestión(マネジメント)」、「Comunicación(コミュニケーション)」、「Proyectos(プロジェクト)」の3つのワーキングチームを設置し運営を行う。
年間予算・財源	

日本のアーティスト・イン・レジデンスのネットワークの概要	
J-AIR ネットワーク会議	
創設年 事務局所在都市	2001年 東京都
URL	http://www.endeavor.or.jp/j-airnet/
会員制	なし(ただし、約30余の団体・組織がメンバーリストに登録)
概要・特徴	主に担当者間の情報交流と、各国の在京大使館文化担当官とのネットワーキングを主軸に活動をスタートした非営利の任意組織。
日本の加盟団体	約30団体
運営組織	<ul style="list-style-type: none"> 非営利による任意団体、代表、副代表及びボランティアによる事務局で運営 産業人文学研究所内に設置
年間予算・財源	会議開催経費を実施回ごとに参加者から実費徴収。
AIR-J	
創設年 事務局所在都市	2001年 東京都
URL	http://air-j.info/
会員制	なし
概要・特徴	2001年より国際交流基金が運営する、国内唯一の日英バイリンガルによるアーティスト・イン・レジデンス総合情報サイト。情報提供によるアーティストへのモビリティ支援を中心に、全国のアーティスト・イン・レジデンス施設、レジデンスプログラムのデータベースをオンライン検索できるシステムを公開。
日本の加盟団体	46団体(サイト掲載団体数)
運営組織	国際交流基金
年間予算・財源	国際交流基金事業費による。
マイクロレジデンスのネットワーク形成に向けた調査研究(MICRORESIDENCE! 2012)	
創設年 事務局所在都市	2012年 東京都
URL	http://www.youkobo.co.jp/microresidence/
会員制	
概要・特徴	小規模(施設・予算)アーティスト・ランで、インディペンデントに草の根的な活動を行うアーティスト・イン・レジデンスを「マイクロレジデンス」と称し、それらの機能、利点を問うため、アーティスト・イン・レジデンス及びアートコミュニティにおける可能性や重要な役割を多角的に検証する国際プロジェクト。
日本の加盟団体	31団体 国内では、遊工房アーツスペース、アーティスト・イン・レジデンス桜川、スタジオ蔵、XYZ SNOW レジデンス、ISHIWATA RESIDENCE、AIRY、アーティスト・イン・レジデンス京町屋が調査対象として参加。
運営組織	遊工房アーツスペース
年間予算・財源	
Move arts Japan(ムーブ・アーツ・ジャパン)	
創設年 事務局所在都市	2012年 東京都
URL	http://www.movearts.jp/
会員制	
概要・特徴	アーティストのモビリティを支援するポータルサイト。情報提供に参加する7つのレジデ

	ンスプログラムの概要及び滞在利用情報を掲載。主にアーティストを対象に、各地での滞在制作、スタジオビジットの利便性を高めることを目的としている。
日本の加盟団体	7団体 S-AIR、ゼロダテ、AIR3331、ヒミング、Kapo、BEPPU PROJECT、ano
運営組織	一般社団法人非営利芸術活動団体コマンド N
年間予算・財源	初年度立ち上げにおいて、文化庁「平成23年度次代の文化を創造する新進アーティスト育成事業」より助成。
舞台制作者オープンネットワーク(ON-PAM)	
創設年 事務局所在都市	2012年 東京都
URL	http://www.onpam.net/
会員制	正会員(1万円)、賛助会員(個人1口1万円/団体1口2万円)、学生会員(3,000円)
概要・特徴	アーティスト・芸術団体と観客の間を繋ぐ全国的・国際的な会員制ネットワーク。舞台芸術の制作実務を推進者を対象に、情報やアイデアの交換、共有、リサーチを行い、会員相互のスキルアップ、活動の展開を目指す。レジデンスに特化したネットワークではないが、会員内でレジデンスプログラムを実施する団体がある。
日本の加盟団体	12団体 KYOTO EXPERIMENT、boxes Inc. Art Revival Connection TOHOKU[ARC>T]、国際舞台芸術交流センター[PARC]、ゴーチ・ブラザーズ、NPO 法人 ST スポット横浜、アイホール[伊丹市立演劇ホール]、Next[有限会社ネビュラエクストラサポート]、鳥の劇場、NPO 法人アートネットワーク・ジャパン フェスティバル/トーキョー、株式会社ブリコグ NPO 法人ドリフターズ・ インターナショナル、Dance Box、こまばアゴラ劇場
運営組織	<ul style="list-style-type: none"> ・ 会員総会及び理事会(理事長、副理事長、常務理事、理事、監事)、事務局2名 ・ 事務局は、国際舞台芸術交流センター内
年間予算・財源	セゾン文化財団(設立時の助成)及び会員の会費による。
NPO 法人アート NPO リンク	
創設年 事務局所在都市	2004年 京都府
URL	http://arts-npo.org/index.html
会員制	正会員(1口3,000円)、賛助会員(1口3,000円)、学生会員(1口1,000円)
概要・特徴	2004年に設立。全国の文化、芸術事業を行う NPO 法人間のネットワーク組織。アート NPO の、情報収集・発信・研究調査、基盤強化とマネジメントの確立、地域密着型のミニフォーラムの開催などの事業を行う会員内でレジデンスプログラムを実施する団体がある。
日本の加盟団体	正会員(議決権をもつ) ;53組、賛助会員:13人、合計:66組
運営組織	会員総会及び理事会(理事長、副理事長、理事、監事、アドバイザー)、事務局1名
年間予算・財源	会員会費及び、年間事業に対する各種助成先からの助成金、等。

1. レズ・アルティス | Res Artis

インタビュー: Mario CARO (President, Res Artis)

URL: <http://www.resartis.org/>

1. 運営機関の概要

レズ・アルティスは、現在70ヶ国以上、400以上ものアーティスト・イン・レジデンス施設、運営者、個人会員によって構成される、世界最大の国際ネットワーク組織である。アーティスト、キュレーター、様々な創造的活動を行うメンバーにより、国、地域の地理的、文化的背景を超え、時間と空間を共有するための活動を展開。フェイス・トゥ・フェイスの国際会議、あるいはウェブサイト上での対話を通じた国際的なコミュニティを形成している。

(1) 設立の経緯

1993年、キュンストラーハウス・ベタニエン (Künstlerhaus Bethanien) のディレクターであるミヒャエル・ヘルター (Michael HAERDTER) を中心に提唱され設立。前年の92年、ヘルター氏がギリシャのデルフィ市政府主催の国際会議「EU-conference of European Cultural Networks」に招かれ、東西のレジデンスプログラムのディレクターと交流したことから着想を得た。

設立当初はボランティアで運営され、2001年からトランス・アーティスト (Trans Artists) 内に事務局を置く。1993-98年は年に1度、2000年からは2年に1度の総会 (General Meeting) を各国・都市で開催。また、地域会議 (Regional Meeting)、ワーキング・グループ、ボードミーティングなども行われ、様々な国際組織、文化機関とのパートナーシップによる事業運営など、世界のレジデンスプログラムの状況や多様性に沿った活動展開を行っている。

(2) ミッション

アーティスト・イン・レジデンス施設、国際レジデンスプログラムが持つ関心事を顕在化し、サポートするためのフォーラムを開催。アーティストの創造的活動を支援し、さらには施設、プログラムの持続的活動とクオリティを保つための相互ネットワーク構築を目的とする。

そのため、下記の項目を目標に活動を行う。

- アーティスト・イン・レジデンスが、現代の芸術活動発展へのつなぎ手であることの理解を促すこと。
- レジデンスプログラムに関する様々な情報収集と発

信を行うこと。

- 公的機関、民間機関、国際組織、財団、その他の協力機関に対し、会員及びアーティストの関心事や要望等について示すこと。
- 会員やアーティストのニーズに応じて、専門知識、アドバイスを参照できるような仕組みを提供すること。
- 新たに立ち上がった施設、リソースのない、あるいは乏しい地域の発展に対する支援を行うこと。
- 総会開催地の要望に合わせたテーマで会議を開催すること。

2. 事業内容

(1) インフォメーション

① ウェブサイト「res artis」の運営

会員登録をしているアーティスト・イン・レジデンス施設、レジデンスプログラムのデータベース、公募期間、レジデンス経験者によるレポート、書籍、助成情報などの検索システムを公開。その他、会議開催や各種プロジェクトの情報を掲載している。

(2) ミーティング(会議)

レズ・アルティスの中心事業としてフェイス・トゥ・フェイスによる、下記の3つの会議を開催。会員同士の出会い、議論、学び、滞在先のリサーチ、経験とアイデアの共有、そして食事をともにすることで、仲間である以上に、人間同士のつながりを作り出す場を目指す。

① 総会 (General Meeting)

2年に一度、各回ごとに異なる国・地域で開催。会議開催にあたっては、開催地のレジデンス施設や様々な組織とのパートナーシップによって実施される。これまでの開催地は下記のとおり。

2012年 (東京、日本) / 2010年 (モントリオール、カナダ) / 2008年 (アムステルダム、オランダ) / 2005年 (ベルリン、ドイツ) / 2004年 (シドニー&メルボルン、オーストラリア) / 2002年 (ヘルシンキ、フィンランド) / 2000年 (サンタモニカ&ロサンゼルス、米国) / 1998年 (ニューデリー、インド) / 1997年 (カシ、フランス) / 1996年 (ダブリン、アイルランド) / 1995年 (ブダペスト&タタ、

ハンガリー)／1994年(バルセロナ&サバデル、スペイン)／1993年(ベルリン、ドイツ)

② 地域会議 (Regional Meeting)

レズ・アルティス会員及び今後の入会が期待される組織、プログラム運営者による少数制での会議を開催。展覧会、あるいはその他の会議やネットワーキングに合わせて開催されることが多く、組織、機関、既存のネットワーク、アーティストが属する都市、地域が持つ課題などについてより議論や学びを深めるとともに、新たな人々との出会い、パートナーシップや協力関係の構築を目的とする。これまでの開催地は以下のとおり。

2012年(ウィーン、オーストリア)／2011年(デブレツェン、ハンガリー)／2009年(京畿道、韓国)／2009年(ワルシャワ、ロシア)／2006年(ピッツバーグ、米国)／2006年(ヘルシンキ、フィンランド)／2006年(メキシコシティ、メキシコ)／1996年(ベルリン、ドイツ)

③ 主題会議(Thematic Meeting)

レズ・アルティス会員及び今後の入会が期待される組織、プログラム運営者により、少数制により開催される会議。アーティスト・イン・レジデンスの国際的な発展に寄与するため、個々の特定のテーマに沿った議論を行い、交流、アイデアの共有を目的に実施される。

第1回目として、2014年にテルアビブ(イスラエル)での開催が予定されている。

(2) プロジェクト

ネットワークの活動として、プロジェクト及び継続プログラムを実施している。会員のすべてが個々が保有する様々な資源、経験を用い、プロジェクトに関与することができる。

① レズ・アルティス賞(Res Artis Award)

アーティストに対するモビリティファンドを、レズ・アルティス賞として授与。パートナーシップを持つ組織が主催するビエンナーレ、あるいはその他のイベントが対象となる。

② レス・サポート(Res Support)

新規で活動を始めたアーティスト・イン・レジデンス施設、組織に対し、運営に必要なトレーニング、サポート

を行うプログラム。会員であることを条件とし、運営にかかるワークショップの開催、アドバイス、指導を行う。

③ ビザ&モビリティ(Visa & Mobility)

アーティストが海外のレジデンスプログラムに参加する場合のビザ取得や、その他移動にかかる課題解決のサポート、アドバイスを行う。主に、ウェブサイト上で、移動の準備にかかる情報、各種機関の対応や相談窓口やサイトを紹介している。

④ レス・サポート・フェローシップ (ResSupport Fellowship)

新設されたアーティスト・イン・レジデンス施設、レジデンスプログラムに対し、一定の期間、会員からの寄付金を支給し、また、国際的ネットワークへの参入を積極的に行えるようサポートを行う。第1回目のフェローシップは、2012年、ストリート・アートセンター(ロサンゼルス、米国)が行った、南アフリカのディレクターを招へいたプログラム「in residence」に対し行われた。

⑤ レズ・アルティス・マッピング(Res Artis Mapping)

国際ネットワークを可視化するために、各施設、プログラムをマッピングし、それぞれの関係性や統計を地図上でグラフィカルに表し、公開するプロジェクト。Res Artisのウェブサイト上からアップデートされた地図を見ることができる。

⑥ 多様性プロジェクト(Diversity Project)

会員の国際社会における文化多様性を目指し、これまで、アフリカ、アジア、南米との協力関係の構築を行ってきた。フォード財団(Ford Foundation)からの支援により、多文化組織での運営を目指し、各組織がレズ・アルティス組織内におけるリーダーシップを確立できるよう金銭的、戦略的サポートを行う。

3. 運営体制・組織

(1) 運営体制

国際NGO及びNPOとしてオランダ政府に登録。無償のボードメンバーによる統括、いくつかのワーキング・グループ及びプロジェクトチームにより運営が行われている。運営体制は、統括にあたる役員、事務局ス

タッフ、ワーキング・グループ、名誉役員及びインターンで構成。役員は各国の施設やプログラムディレクターの会員からの立候補により、2年に1回の総会時に選挙によって選ばれる。任期2年、再選3回まで可能、最長6年までの任用。ボードメンバーの会議は、毎月1回のオンライン会議及び、フェイス・トゥ・フェイスでは総会、地域会議の際に行われる。メンバーの構成は以下のとおり(2013年現在)。

役員(Board of Directors)

- President
- Vice President
- Secretary
- Treasurer
- Members at Large

ワーキング・グループ(Working Groups)

- Membership
- Conferences and Meetings
- Public Relations (website, communications, newsletter)
- Governance (strategic plan, board book)
- Resource Development (finances)
- ResSupport

事務局(Staff Members)

- Managing Director
- Program Director & Fundraising
- Communications & web editor

名誉役員(Honorary Board Members)6名

インターン1名

(2) ネットワーク/メンバーシップ(会員)

レズ・アルティスのネットワークは会員制により運営されている。会員の分類は下記のとおり。

① General Members(通常会員※組織、団体)

- 総会、地域会議への参加資格
- ウェブサイトへのデータベース掲載
- 会員専用ウェブページの閲覧
- ニュースレター等の配信
- レズ・アルティスのロゴ使用
- 総会での議決権

- 年会費75 - 450ユーロ(約9,750 - 5万8,500円)
(総運営費によって異なる)

② Associate Members(他のネットワーク組織、助成団体、国際協力期間など)

- 総会、地域会議への参加資格
- Res Artisのウェブサイトへのデータベース掲載
- 会員専用ウェブページの閲覧
- ニュースレター等の配信
- レズ・アルティスのロゴ使用
- 総会での議決権
- 年会費375ユーロ(約4万8,750円)

③ Individual Members(個人会員、アーティスト、キュレーター等)

- 総会、地域会議への参加資格
- 会員専用ウェブページの閲覧
- 会員リスト名掲載
- 年会費75ユーロ(約9,750円)

④ Emerging Members(これからレジデンスプログラムを立ち上げる予定の個人、グループ)

- 「レス・サポート」への申請
- 総会、地域会議への参加資格
- ウェブサイトへのデータベース掲載
- 会員専用ウェブページの閲覧
- ニュースレター等の配信
- 総会での議決権
- 3年間限定期間
- 年会費75ユーロ(約9,750円)

4. 現在の課題と今後の取り組み

(1) 現在の課題

① 地理的・文化的多様性

レズ・アルティス代表のマリオ・カロ(Mario CARO)は、地域世界各国、地域の会員が保有する多様性について、「本ネットワークの資産であり、課題そのものである。そのために、基本的なサポートとして、様々な情報を多言語に翻訳する必要がある」と語る。

② 評価方法における世界基準の確立

評価方法の確立は、現在最も重視する課題であるという。現在、助成をめぐる状況が大きく変化し、政府、企業、プライベートファンドをはじめとする助成機関が、評価基準の明確化を求めていることによる。そのため、「アーティスト・イン・レジデンスの運営者自身が評価方法を確立し、また自己説明、自己評価をする必要性がある」と、カロ氏は述べている。

(2) 今後の取り組み

① 会員増加及び地理的・文化的多様性の確保

新規会員獲得のための活動を継続。特に、これまであまり顕在化されてこなかったアフリカ、東欧、中東などの地域に焦点をあてる。例えば、特定の文化圏の課題に即して行われる「主題会議(Thematic Meeting)」(2014年、テルアビブで開催予定)のように、各プログラムの実践事例を通し、アーティスト・イン・レジデンスの論理的解析に取り組むこととしている。

② 助成制度に対する会員へのナビゲート

前述のとおり、現在、助成制度をめぐる状況が大きく変化し、特に、欧州、アジアにおける政府機関に顕著にみられる。そのため、他の地域、例えば北米国ではプライベートファンドからの助成、また、ラテン米国、アフリカ、東欧での戦略的に助成金を獲得する動きなどが発展しており、そうした方法について共有することで、カロ氏は、「助成金に対する従来の考え方から、創造的に転換させるアイデアを得ることができる」と言う。

5. Res Artisによるアーティスト・イン・レジデンスの定義、意義

アーティスト・イン・レジデンスは、アーティスト、研究者、あらゆる創造的活動をする人々が、日常的な環境を離れ、個人の思考、研究、発表、あるいは制作の時間と場を提供するものである。異なるコミュニティ、文化、言語環境の中で、新たな人々との出会い、新しい素材、新しい生活体験の中で様々な探求を可能にし、多層的な文化交流の場として意義深い存在といえる。

組織的には、いくつかのレジデンスプログラムは、規模の大きな施設、組織により運営されている場合ある

が、その他のほとんどは、単独の組織で運営されている。美術館や大学、ギャラリー、スタジオスペース、劇場、アーティスト・ラン・スペース、市町村、政府、あるいはフェスティバルの中に組み込まれているもの。期間については、継続的あるいは、季節ごと、期間限定のイベントとして開催され、また、ロケーションについても、都市空間、農村、深い自然の中であるなど、世界には何百という機会、施設が存在し、ひとつとして同じ形式はなく、標榜するものもそれぞれ大きく異なる。

財政的背景においても、幅広いケースがある。滞在者自身が、自国あるいはネットワークを通じて助成や支援を受け、旅費、滞在費を確保しなければならない場合。あるいは、費用の一部または全額を、招へいアーティストに支給される場合もある。また、申請のプロセスは必ずしもすべてのプログラムが公募制ではなく、招待のみや、他の施設あるいは助成団体、運営者などのパートナーシップ提携先からの依頼を受ける場合もある。

滞在者と受入先との関係性は、レジデンスプログラムを方向付ける重要な要素である。滞在者は受入先のコミュニティにかかわり、展覧会やワークショップ、あるいは地域内の滞在アーティストとの共同制作を行うこともある。あるいは人里から離れ、研究に集中できる充実した時間を得ることもできる。「アーティストは文化大使であり、社会批評家ともなり、様々な役割を担う。そのために、アーティスト・イン・レジデンス主催者は、地域の文化を明確に提示し、アーティストとコミュニティとの長期的な関係をつくるための場を提供する必要がある」とカロ氏。アーティスト・イン・レジデンスの経験とは、相互の長い関係性を結ぶための最初の一步である。そうした機会を得ることで、プロジェクトの継続、新たな共同制作、展覧会、ワークショップに有機的につながれていく。「成果は、予想外の、偶発的な結果もあわせて、ゲストと主催者相相互の協力によってもたらされるものです。そうした意義、偶然の出会いがもたらす価値は、時には、レジデンスプログラム終了後、長い時間を経てから認識されることも多々ある。こうした出会いの意義、価値は重要である」と言う。

さらに、カロ氏は、アーティスト・イン・レジデンスによる交流から助成組織が得る意義について以下のように

語る。「資金提供者は、政府、ファンド、個人の寄付者であるにかかわらず、長期にわたる関係性が育まれ、強固なものとなったときにこそ豊かな利益を得ることができる。将来にわたる文化外交、地域の絆の深まり、市民社会の醸成、経済発展に対する刺激など。その地域の特性によっての有益性が見えるまでには、常に長い時間がかかるものである」。

アーティスト・イン・レジデンスの成果が見えるまでには、プログラムを継続していく必要がある。「アーティスト・イン・レジデンスを維持するための課題は、常に我々の議論の中心にある」。とりわけ、2008年以降の世界的経済破綻以降には、特に顕著となったという。しかし、「そうした一方で、事業費を得るための様々な共同の取り組み、クリエイティブな発想でのアイデア、方法が生まれた」と、カロ氏。営利、非営利の組織間を超えた共同、あるいはスタジオ及びレジデンス施設のある組織間の交流など、相互の持続的活動のために様々な革新的活動が生まれている。

そうした状況をふまえ、「最も重要なのは、これらの戦略をタイムリーに共有し、個々のレジデンスプログラムを越えて、国際的なサポートシステムを構築すること。アーティスト・イン・レジデンスが直面する課題に迅速に対応することは、アーティスト・イン・レジデンスの豊かな多様性を含んだ様々なネットワークが構築されてこそ実現できる、唯一の可能性である」と、あらためて国際的ネットワークの重要性、意義についてカロ氏は語った。

6. 日本のネットワーク組織構築に対する提言

レズ・アルティスと日本とのこれまでの取り組みについては、代表のカロ氏が「J-AIRネットワーク会議」への出席、マイクロレジデンスの調査への協力、国際交流基金が運営する情報サイト「AIR.J」へ寄稿した経緯がある。「我々は、ネットワークの構築、育成を強く推奨している。レズ・アルティス会員の中でも、地域ネットワークを構築している組織が多数あり、また、様々なニーズから派生したサブネットワークも発展している。例えば、パフォーミングアーツ団体のニーズから構成された『PAiR Network』。また、非常に興味深い新規の試みと

して『マイクロレジデンス・ネットワーク』の調査があり、レズ・アルティス会員のうち、小規模で、インディペンデントによる運営を行う団体、組織によって構成されている」と、近年のネットワーキングにみられる傾向を説明する。

また、ネットワーク構築を成功させるために必要な要素についても語った。「成功の要因としてひとつ挙げるとすれば、常に会員のニーズに耳を傾け、様々な仕組みを構築してきたことであろう。ダイナミックに発展するアーティスト・イン・レジデンスが面する直近の課題に対し常に迅速に呼応するためは、＜対話＞を持続させることが鍵となる」。

また、＜共同の場＞もネットワークの発展、継続のために重要であると示唆する。「会員は相互に、また、組織全体に対する責任感を持つことが必要」とカロ氏はいう。「アーティスト・イン・レジデンスの変化に対して積極的に相互に呼応しながら、ネットワークを持続するための活動が望ましい」。

日本においても、様々な文脈にもとづいたオープンでダイナミックな＜対話＞、＜共同の場＞が構築されることに期待を寄せた。

2. トランス・アーティスト | Trans Artists

面会日: 2013年2月25日(月) 10:00-12:00

面会者: Heidi VOGELS (AiR Platform NL)

URL: <http://www.transartists.org/>

1. 運営機関の概要

トランス・アーティストは、アムステルダムを拠点とする、アーティスト・イン・レジデンスに関する国際情報センターである。アーティストの国際的なレジデンスプログラムへの参加、経験の機会を広げることを目的に、知識、情報、経験のデータベース制作及びウェブサイトでの公開をはじめとし、アーティスト・イン・レジデンス施設・組織間の国際的ネットワークの構築、ワークショップやメンタリングプログラムなどによる普及活動などを行っている。1997年の設立から現在にいたるまで、情報量、ネットワークの広がりにおいては、世界で最も評価、信頼を受けている情報・ネットワーク機関である。

(1) 設立の経緯

トランス・アーティストの設立の背景には、オランダのアーティスト・イン・レジデンスが普及した経緯が関係する。特に、90年代に廃校になった学校の校舎や長年放置されていた建物を、アーティストがスタジオとして活用していたことが背景にあり、それらが発展してアーティスト・イン・レジデンスになった事例がいくつもあるという。それらのスタジオやレジデンスは、次第に美術館やギャラリー、文化機関から注目を受けるようになった。

トランス・アーティスト設立者のマリア・チュエリング(Maria Tuerlings)氏は、当時勤務していたアーティストへの助成機関「BKVB フォンズ (Fonds voor beeldende kunsten, vormgeving en bouwkunst)」でアーティスト・イン・レジデンスの存在を知る。そして、その情報を編集してアーティストに提供することで、アーティストの創作活動やプロジェクトの実現に有益になるのではないかと考えた。そこで、新聞、ニュースレター、美術関係者からの情報収集を始めたことから、現在、「トランス・アーティスト」という名称のウェブサイトで、約1,200もの世界中のレジデンスプログラム機関の紹介、助成情報をはじめとする様々なデータベースを公開するに至る。

さらに、レジデンスプログラムの運営者や関係者との出会いから徐々に拡大したネットワークを活用する取り組みへと発展を遂げ、2001年からは国際ネットワーク組織、レズ・アルティスの事務局も務めている。

エア・プラットフォーム・エヌエル (AiR Platform NL) を担当するヘイディ・フォーヘルス (Heidi VOGELS) は、「トランス・アーティストのウェブサイトはアーティストを対象としたデータベースですが、ネットワーキングは運営者にむけたサービスだという大きな違いがあります」と説明する。これらのネットワーキングでは、レジデンス機関やプログラムの動向や課題を可視化し、各機関の連携を促しているという。

2013年、オランダ政府の方針により「DCICC オランダ国際文化協力センター (Dutch Center for International Cultural Cooperation)」内に、他の組織とともに統合された。統合された組織は、オランダのアートの国際情報を提供する「SICA」、ヨーロッパのファンドに関する情報を提供する「オランダ・メディア・デスク (MEDIA Desk Nederland)」、欧州のファンドに関するアドバイスを芸術団体や文化施設に提供する「CCP (Cultural Contact Point)」、ヨーロッパのグラントの情報をアーティストに提供する「ECP (Europe for Citizens Point)」である。

(2) ミッション

アーティストの創作活動、プロジェクト実現、滞在制作の機会のため、欧州を始めとする世界中の様々なアーティスト・イン・レジデンスの知識と情報を提供。ウェブサイト、ニュースレターによる情報配信のほか、リサーチ、ワークショッププログラムを通して、世界の膨大な数のレジデンスに、アーティストが容易にアクセスし、利用可能な環境を提供することを目的とする。

トランス・アーティスト自体は、プログラムやゲストハウスの運営、助成制度を持たず、また申請書の審査などは行わない。アーティスト個人が情報を得た各機関にアクセスすることとしている。

2. 事業内容

(1) インフォメーション

① ウェブサイト「トランス・アーティスト」の運営

アーティストを対象にレジデンスプログラム情報を公開するウェブサイト「トランス・アーティスト」を運営している。掲載情報は、主にレジデンスプログラムの事業者から提供されたもので、有料、無料、助成金の有無

に関わらず同様にデータベース化されている。レジデンスプログラムの事業者はメンバーシップに加入する必要がなく、情報掲載を無料で依頼することができる。ただし、アーティストが滞在できるプログラムの情報であること、また、公募プログラムの情報であることが条件とされている。

また、トランス・アーティストの最新情報やレジデンスプログラム情報を、不定期のニュースレターにより無料配信している。

(2) ネットワーキング

国内外のアーティスト・イン・レジデンスを運営する機関、組織、さらに、それらの機関を支援する文化機関が、相互に情報と経験を共有し、共同プロジェクトへの可能性を広げるためのネットワーキング・プロジェクトを行っている。言語圏を単位とするもの、特定の国や地域を単位とするもの、ヨーロッパを単位とするものという各プロジェクトにわかれている。

アーティスト・イン・レジデンスに関与する文化機関の運営者のグループを、目に見えるかたちでネットワーキングすることを重要としており、スタッフが実際に各地域に赴き、どこにレジデンスがあるのか、どのようなアーティストがいるのか、自治体からの支援の有無などを調査。また、可能な限り、関係者を招いた会議の場を設けている。フォーヘルス氏は、「当事者間で連絡を取り合い何かを始めるための連絡先リストの構築ともいえるかもしれません」と説明する。そして、そのリストを共有し、年1回の公式な会議の場を持つことからネットワーキングを始めたという。

① オランダ語圏ネットワーク「エア・プラットフォーム・エヌエル (AiR Platform NL)」

オランダと、ベルギーのフランダース地方における約120組織・団体が加盟。課題とされることは何か、必要な情報は何かなどを調査した上で会議を企画することで、ネットワークに加盟する組織や団体が共同でアクションを行うように促している。また、毎回異なるレジデンスでの会議を行うため、各レジデンスを知る機会ともなり、参加者の結びつきは強まってきているという。

近年の大きな課題は政府の文化予算の削減で、レ

ジデンスの運営に困難な状況を生み出しているが、この課題に共同で取り組むことで、ネットワークは活性化しているという。2012年度は、アーティスト・イン・レジデンスの在り方を問う根本的な問題や社会的地位について再考する会議を何度も行った。その結果、新しい戦略が発案されたり、企業、民間の文化機関、地方自治体や海外に新しい財源に目を向けたり、他国のレジデンスプログラムとコラボレーションが行われるという動きが生まれたという。

また、トランス・アーティストのデータベースが基本情報となっているため、レジデンスを始めるための情報を得たり、あるいは国際パートナーシップを結びための組織間のマッチングの手助けともなっている。ネットワーク会議は年次計画が立てられてはいないが、スケジュール、タイミングに合わせて、有機的に活動が広がっている。

② 国際的ネットワーク「オン・エア (On-AiR)」

15の欧州の国と地域から、19のレジデンス組織が参加したプロジェクトで、地域間におけるアーティストの交流を活性化を目的とする。2010年から12年まで、主としてアーティストへの教育を目的に、毎月のワークショップ、トレーニング・プログラム、半年ごとにシンポジウムが開かれた。

このようなネットワーキングの機会を通じて、トランス・アーティストの持つ知識や情報を他の機関と共有し、さらに各機関がその地域で、トランス・アーティストのような役割を担うことを期待している。

③ 近隣国とのネットワーク

オランダを中心とする近隣国のインフォーマルなネットワークの強化を目的に、特定の地域のいくつかのレジデンスを視察するツアーが実施されている。

2007年、オランダと、ベルギーのフランダース地方のネットワークの強化を目的に、トランス・アーティストとフランダース文化センター・デ・ブラッケ・グロンド (Flemish Cultural Centre De Brakke Grond) の共催で、バスツアーが企画された。まず、オランダのレジデンス機関がベルギーのレジデンス機関を2日間の日程で訪問し、翌月ベルギー側がオランダのレジデンス機関を

訪問し、最後にシンポジウムが開催された。

また、2010年にはオランダからドイツのドルトムントとエッセンを訪問するツアーが組まれた。これらの都市は第二次世界大戦で戦場になった地域で、近年、様々な文化的な動きが活発化してきたという。オランダから25のレジデンス機関が参加し、2日間に渡りシンポジウムが開催された。

④ ロシアとのネットワーク

「相互のアーティスト・イン・レジデンスの刺激 (MUTUAL artist-in-residence IMPULSE)」

2012年からスタートした、オランダ、ロシア間のネットワーク活性化を目的とする現在進行中の長期プロジェクト(2014年までの開催がすでに決定されている)。

このプロジェクトは、約5年前にトランス・アーティストのスタッフのひとり、エリック・ハホールト(Erik HAGOORT)が、ロシアでもネットワークを作りたいと考える人たちから招待を受けたことを発端とする。シンポジウムに参加したハホールト氏は、十分に予算もない中で活動する人々の情熱とアイデアに感銘を受けたという。その後も個人的な交流が続き、モスクワ郊外にレジデンス施設を作る相談などを受けていた。そして、2013年がオランダ・ロシア年ということでネットワーキングの提案をし、オランダからモンドリアン・フォonz、在ロシア・オランダ大使館、ウェルヘルミナ・E・ヤンセン財団(Wilhelmina E. Jansen Foundation)の3つの機関から、ロシアからアーキポリス(Archpolis)の助成金を獲得してプロジェクトが実現化した。

2012年4月、トランス・アーティストからハホールト氏とフォーヘルス氏の2名、アムステルダムのレジデンス組織M4Studioから1名の計3名がモスクワとサントペテルスブルクのレジデンス機関を訪問し、アーティストをはじめレジデンスプログラムに興味を持つ人々を対象にワークショップを実施した。同年12月にはシベリアのエカテリーナブルク(Ekaterinenburg)、ノヴィシビルスク(Novosibirsk)、クラスノヤルスク(Krasnoyarsk)、そしてモスクワを訪問した。ロシアで出会った人々とオランダのネットワーク内の人々との交流を促すために、2013年9月にオランダにロシアから人を招いてオランダ

でシンポジウムを開催する予定である。

⑥ その他のネットワーク

その他のレジデンス機関や担当者とのネットワークを広げることも視野に入れ、プログラムが組まれることもある。最近のものでは、2012年5月に小田井真美氏(平成20年度文化庁新進芸術家海外研修制度でトランス・アーティストで1年間研修)をむかえて、「日本-今日全てが変わる(Japan – Today All Will Be Different)」をアムステルダムで行った。震災後の日本をテーマに、非常事態下でのレジデンス体験を考え、完全に変わってしまったアートのコンテキストの中で、どのように人々を受け入れ、何ができるかが話し合われた。プログラムにはシリア難民のアーティストも招かれ、広い範囲で議論が交わされた。

3. 運営体制と事業収支

(1) 運営組織

7名のスタッフで構成。ディレクター以外の6名は非常勤で、アーティストやデザイナーと兼業をしているスタッフもいる。

- ディレクター
- アドバイザー
- プロジェクト・マネジャー:国際コラボレーション担当
- プロジェクト・コーディネーター:国際コラボレーション担当、コミュニケーション・オフィサーを兼務
- 教育プログラム、ワークショップ担当
- エア・プラットフォーム・エヌエル担当
- ウェブサイト編集担当

(2) 事業収支

トランス・アーティストは、主に教育文化科学省からの補助金で人件費を含む一般経費を賄い、プロジェクトに応じて他の助成機関から助成金を受けて、その他の事業費を工面していた。2012年度の教育文化科学省からの受給額は12万ユーロ(約1千560万円)で、毎4年更新の補助金であった。

しかし、政府の文化政策の転換の影響を受け、規模の小さい組織であるということを理由にその補助金は停止され、2013年に他の機関と統合されることになった。

なお、新しい組織DCICCオランダ国際文化協力センターは今後4年間、政府から基本文化基盤(culturelare basisinfrastructuur)の補助金を受けることが決まっている。オランダでは、政府から補助金を受けている機関は、原則として政府予算で運営される助成機関には助成申請をすることができない。しかし、例外として、シンポジウムなど、単体のプロジェクトでの助成申請をすることはできるため、事業費に関しては、国内の助成機関と欧州の助成機関からの助成金で運営しているという。例えば、オン・エアの事業費の半分は、欧州委員会からの助成金で賄われたという。

また、ニュースレターの有料化をこれまでに何度も議論されてきた。組織の独立性を高めるために、政府からの補助金以外の収入源が必要だという意見と、情報はシェアされるべきだという意見に分かれているという。

4. 事業評価の実施状況

トランス・アーティストスは2012年度まで教育文化科学省から補助金を受給しており、年間の活動記録をまとめたアニュアル・レポートを作成している。アニュアル・レポートでは、ウェブサイトの訪問者数や属性を統計データとして集計し、また、ネットワーキングに関連するプロジェクトのワークショップやプレゼンテーションの実施状況やパートナーシップの状況などを整理している。特に、近年では、エア・プラットフォーム・エヌエルが担う役割やその成果が評価されており、トランス・アーティストス中でのネットワークを促す活動の割合が増えているという。

また、これまでに構築してきたネットワークの中で様々な文化機関から高い評価を受けてきたことが、政府からの評価にもプラスになったという。

5. 現在の課題と今後の方向性

今後5年もしくは10年間で、レジデンスの定義をどのように発展させていくか、どのようにしてサービスを向上させていくか、どのようなシナリオでアーティスト・イン・レジデンスを牽引していくのかを課題と考えている。小さな機関がネットワークに参加することは非常に重要だということだが、厳しいルールの中でこぼれおちて行く

ことも多い。しかし、同じ顔ぶれの大規模な機関によるネットワークでプログラムが組まれることよりも、ボトムアップして、全体を活気付けることの方が重要だと考えている。これまでの経験から、ディレクターのテュエリング氏はブリュッセルのアドバイザー委員会のメンバーでもあり、欧州内におけるこれらの問題にも取り組んでいる。

6. 日本の国内のネットワークへの提案

レジデンス機関が、集まるだけでも意味がある。初めはお互いの紹介だけだとしても、回を重ねるうちにシャープになって、焦点もあってくるものである。普段の活動ではあまりない、プレゼンテーションの機会になり、また、同じ視点で、これからの展望について話し合うこともできる。同じ分野で他の人や機関がやっていることを知るのも有益で、東京であったレズ・アルティス総会も刺激となったであろう。アーティストに情報提供するという点でも、日本にはまだ沢山やるがあるので、トランス・アーティストスのような機関を立ち上げることもできるし、各地域の人々を大きなコンテキストの中で招待して大規模な会議を開催して、情報共有と教育効果を得ることもできるであろう。ネットワークは、機関を結びつけることだが、機関はそれだけで存在するのではなく、アーティストが参加して成り立つものだ。そういう意味で、機関は孤ではなく、すでにサークルの中にあるといえる。

参考：アーティスト・イン・レジデンスの近況、ネットワーキングに対する考え方 トランス・アーティストスからの視点

① レジデンスプログラムの動向

これまでは、レジデンスは場所ありきの「設備」の時代で、アーティストが来ては去るものだった。現在は、アーティスト、アート、文脈、場所、人といった関係性の時代になってきている。アーティストが移動してつながってゆくこと、このことに関して、レジデンスプログラムは大きな可能性を持っていると考えられている。施設だけではなく、テーマ性をもたせることで、地域社会と結びつけたプロジェクトもあり、アート以外のプログラムもネ

ットワーキングの対象とされてきている。

他方で、ブロンズ鑄造や陶芸といった技術的な分野でも同様の動きが見られるようになり、アーティストに対し制作する機会、材料、技術、知識を提供することによる、伝統的な技術とアートの融合が試みられている。オランダは、ドイツや日本に比べて技術者内のヒエラルキーが無く、先生と生徒は同等とされる社会である。情報や技術をシェアすることで、より実践的で実用的なものへの展開がなされている

②教育機関としての役割

オランダでは、近年の教育費上昇に加え、アートアカデミーの予算削減から奨学金を得られる人数も減ってきている。これを背景に、レジデンスプログラムの教育的役割が増すことが期待されている。サマーコースのようなものから、アカデミーのように教授や他の生徒と出会う場という役割を担うことができると考えられている。すでに、その役割を意識したプログラムもあり、アカデミーとのコラボレーションや、プレゼンテーションを含んだ集中講義型の制作ワークショップなどがある。

③地域とのつながり

地域性のあるテーマを持つことで、地域社会で成功をおさめているレジデンスプログラムもある。デン・ハーグ郊外のスヘーフェニンゲン(Scheveningen)のビーチにある、「バドハスト(BADGAST)」は、2つのコンテナを重ねたレジデンスである。コンテナのひとつがスタジオ、もう一方が寝室になっている。テーマは「海と海岸(Sea and Coast)」。応募条件は、このテーマにそって仕事をするということだけで、アーティストでも建築家でも、哲学者でも属性は問われない。テーマを設定することで、それが、方法、知識、コネクションを変化させる触媒になることが期待されており、レジデンス機関はそのアーカイブを得ることができる。ビーチというロケーション、いつも何かが行われている場所であるということから、ある時期から市や、地元の人達、旅行者などをひきつけ始めた。そして、彼らに結果だけではなく、プロセスがあることに気がつかせることにもなった。作品制作ということだけではなく、異なる人々、異なる興味をつなげていっていることに他ならない。このレジデンス機関は、コンテキストを世界に広げ始め、トルコの黒海にパート

ナーを見つけ、ロシア、グルジアともつながりが広まり、資金も獲得し、成長し続けている。

同じく地域に密着する形で、海に対して、風景がテーマのレジデンスP.A.I.Rが、内陸部のドンデレン(Donderen)にある。バドハストの運営機関サテライトグループ(Satellietgroep)、P.A.I.Rの運営機関ピアグループ(Peergroup)、そしてトランス・アーティストの共催でエア・ミーティング2011:知識と場(AiR meeting: knowledge & location)が開かれた。副題は、地域コンテキストの中で、リサーチに基づいたプロジェクトを生み出す、レジデンスモデルを探るためのレジデンス機関会議、となっている。このような地域とレジデンスの関係が発達してきて、すでにしばらく経っていて、近年では、市が投資する場合や、地域の人が場所を提供してくれるケースもある。このように、レジデンスはアートの域だけに留まっていない。

④RAiR(ロッテルダム・アーティスト・イン・レジデンス)の活動

ロッテルダムには、最も古い部類のレジデンスがいくつかある。その5つのアーティスト・イン・レジデンス機関(Duende、Het Wilde Weten、Kaus Australis、Foundation B.a.d.、Kunst & Complex)で作ったのがRAiRである。それらは、アーティスト運営で、特に注目を集めているレジデンスというよりは、誰にでも開かれているタイプのものである。大きな建物のスタジオ・コンプレックスで、そのいくつかをゲスト・スタジオとしてレジデンスプログラムを行っている。滞在アーティストの選考はあるが、滞在するには賃料を払わなくてはならない。5つのレジデンスプログラムで、年間50人あまりのアーティストを受け入れているが、受け入れ側にとしてみると、受け入れと送り出しのサイクルの繰り返しなので、他に何ができるかが議論されてきた。そこで、彼らはRAiRを設立し、ロッテルダム市に申請して、コーディネーターが週2日働く人件費を得た。市の助成は1年でその間に機関の構造が作られ、ウェブサイトの開設、滞在アーティスト同士が会う機会、年1回の展覧会などが展開されていった。翌年は別のスポンサーを見つけたが、現在は財源がなく、役職はなくなってしまった。しかし、RAiR自体は活動を続けており、ウェブサイトも、

イベントも続けられている。レジデンス機関が活動を広げることで、市内の別のアート機関と知り合うことも有益であり、滞在アーティストが市内に滞在していることをアピールし、コラボレーションなどの可能性や、他機関でゲストを招く時に、ホテル以外の選択肢があることも提案でき、市内のアート全体の活性化につながっている。少ない予算で大きな成果を上げた例として、地方行政はこのような役職を置くことについて一考してもよいだろう。

④ ネットワーキングの考え方

トランス・アーティストの考えるネットワーキングの未来形は、世界の中でのオンリーワンとなることではなく、情報を求める人を、適切な地域の組織につなぐことである。ネットワークはお互いの機能を高め、サークルが広がり、さらにサークル同士もつながって行く、そして、アーティストがそこから利益を得ることができると考えている。

アーティストの視点からみたアーティスト・イン・レジデンスは、自分達の入っている箱を開けて、境界線を越えることであり、世界が広がることで制作上の大切な仲間とも出会うことができる。また、作品販売や次のプロジェクトへのつながり、資金調達の機会などの可能性を広げることができる。

一方で、トランス・アーティストの視点からは、世界はすでに開かれているものだといえる。人や場所をつなぎ合わせることで興味深い文化の多様性を、俯瞰して見ることができる。

第4部

各国のアーティストの海外派遣・研修に係る
ファンド・グラントに係る調査

本調査研究では、諸外国の代表的なアーティストの海外派遣・研修に係るファンド・グラントについて、インターネット検索や既存資料に基づいて代表例を抽出し、それらのウェブ掲載情報から19件の概要を一覧表に整理した。さらに、それらの中からタイプの異なる3事例、モンドリアン・フォonz(蘭)、アジア・カルチュラル・カウンシル(米)、ケベック・アーツカウンシル(加)について、海外 AIR 調査とあわせ、現地訪問調査を実施して詳細を把握した。

ここでは、日本のアーティスト・イン・レジデンスを支える仕組みとしてのファンド・グラントの在り方や方向性を検討するため、それらの調査結果から諸外国の主要なファンド・グラントの現状や傾向を分析・整理した。

1. 諸外国の主要なファンド・グラントの現状と傾向

諸外国の主要なファンド・グラントを運営する機関では、海外でのアーティストの創作活動やリサーチの支援、海外のアーティストとの共同制作の支援、海外での展覧会や公演を行う事業の支援など、様々な国際交流を促進する取り組みが実施されている。

アーティスト・イン・レジデンスの現地調査でも、自国のファンドやグラントから支援を受けて創作活動やリサーチに取り組むアーティストやキュレーターが多く、知名度の高いアーティスト・イン・レジデンスでは、ファンド・グラントを運営する機関とアーティスト・イン・レジデンスがパートナーシップを形成し、定期的にアーティストを受け入れる仕組みが少なくなかった。その場合、ファンドやグラントを運営する機関は自国のアーティストのキャリアの育成に有益なスタジオ・スペースを確保することができ、アーティスト・イン・レジデンスは才能のある若手アーティストを確保することができるという相互に利益をもたらす協力関係が成立している点は、日本も大いに参考にすべきであろう。

(1) 諸外国の主要なファンド・グラントを運営する機関の特徴

諸外国の主要なファンド・グラントは、運営機関の性格から、概ね以下の3つのタイプに分けられる。

- 政府機関や政府系機関(アーツカウンシル等)
- 非政府組織(非営利団体や民間財団等)
- 国際機関(ユネスコや欧州連合等の政府間組織)

① 政府機関や政府系機関

政府機関や政府系機関では、国内の文化芸術の振興や普及を主目的とする機関と、文化芸術の国際交流を主目的とする機関がある。また、国内の文化芸術の振興や普及と、国際交流を兼ねた政府系機関もある。特に、文化芸術の国際交流を主目的とする機関は、海外に在外事務所や施設を有する場合が多い。例えば、英国では、アーツカウンシル・イングランドが主にイングランド国内の文化芸術の振興や普及の役割を担い、ブリティッシュ・カウンシルが文化芸術の国際交流の役割を担う。また、ドイツのゲーテ・インスティトゥートは日本に在外事務所を置き、京都にアーティスト・イン・レジデンスの施設、ヴィラ・カモガワを有する。

これらの機関が運営する海外派遣・研修に係るファンド・グラントでは、主に自国のアーティストや芸術関係者の海外での活動の支援を重視する傾向にある。また、オランダのモンドリアン・フォonzやフィンランドのフィンランド芸術交流基金のように、海外のキュレーターやプロデューサー等を自国に招へいする機関もあるが、海外のアーティストを自国に招へいする仕組みを有する機関は少なく、一方向の交流が主流である。

② 非政府組織(非営利団体や民間財団等)

非政府組織では、二国間や特定の地域間の交流を促す非営利団体や民間財団、または、複数の非営利

団体や民間財団が加盟する組織がある。前者では、米国とアジアの双方向の交流を促す米国のアジア・カルチュラル・カウンシルが代表例で、後者では、アジア間の交流を促すアーツ・ネットワーク・アジアや、カナダのケベック州を含む欧州間の交流を促すヨーロッパ・ペピニエールが代表例である。

政府機関や政府系機関のファンド・グラントでは、自国のアーティストや芸術関係者を海外に派遣する一方向の交流が主流であるのに対し、非政府組織のファンド・グラントでは、二国間や特定の地域間の双方向の交流が主流である。政治的もしくは経済的理由から海外にアーティストや芸術関係者を派遣する仕組みの少ない国や地域との国際交流を活性化していることが特徴である。

③ 国際機関(ユネスコや欧州委員会等の政府間組織)

国際機関は複数の国の政府が国家間の条約に基づいて形成する組織で、ユネスコや 欧州委員会が代表例である。ユネスコは国際連合に加盟する国や地域を対象に交流を促し、欧州委員会は欧州連合に加盟する国を対象に交流を促す役割があり、その中にはアーティストの交流も含まれている。欧州委員会では、東欧諸国が西欧諸国と比較して、文化芸術を支援する仕組みが十分に整備されていないことや経済的格差があることを背景に、そうした地域の交流を重視する傾向にある。これらの国際機関のファンド・グラントは非政府組織(非営利団体や民間財団等)のファンド・グラントと類似した役割を担っているが、基本的に資金を提供するだけで、アーティストの選考や招へいの手続きなどは行わない。

(2) 海外派遣・研修に係るファンド・グラントの種類と目的

諸外国の主要なファンド・グラントには、モビリティという観点から考察すると以下のような様々なタイプがある。アーティスト・イン・レジデンスに関係するのは、トラベル・グラントと海外のスタジオやアーティスト・イン・レジデンスへの滞在機会を提供するグラントであり、それらがアーティストの海外派遣・研修に係るグラント・ファンドといえる。

- トラベル・グラント
- 海外のスタジオやアーティスト・イン・レジデンスへの滞在機会を提供するグラント
- 海外での展覧会や公演を支援するグラント
- 海外のアーティストや芸術団体との共同制作を支援するグラント

① トラベル・グラント

トラベル・グラントはアーティストや芸術関係者に渡航費、滞在費、活動費等を支給する助成の仕組みで、「travel grant」以外に「go and see grant」、「international research grant」、「international development grant」などの名称で呼ばれる。これらのグラントは海外での研修や滞在経験を通して、芸術的な才能の育成、キャリアの育成、国際的なネットワークの形成、国際的なマーケットの開拓などを目的とする。海外の研修には、文化機関での研修、アーティスト・イン・レジデンスへの参加、国際展やアートフェア、国際フェスティバルの視察などがある。また、各プログラムにより、一つの目的に特化したグラントや複数の目的を有するグラントがあり、それらの目的に応じて助成対象期間は2週間から6ヶ月と多岐にわたる。

② 海外のスタジオやアーティスト・イン・レジデンスへの滞在機会を提供するグラント

海外のスタジオやアーティスト・イン・レジデンスへの滞在機会を提供するグラントは、渡航費、滞在費、活動費等の金銭的な支援だけでなく、「環境」を提供することに特徴がある。主に、芸術的な才能の育成、キャリアの育成、国際的なネットワークの形成などの目的に見合うスタジオやスタジオ兼住居などの創作環境や滞在国のアーティストや芸術関係者とのネットワークを形成できる環境を提供する。スタジオやアーティスト・

イン・レジデンスの受入期間に応じて助成対象期間は3ヶ月から1年と多岐にわたる。

(3) 海外のスタジオの運営や国内のスタジオの運営

諸外国の主要なファンド・グラントを運営する政府機関や政府系機関には、アーティスト等の海外派遣・研修に対応できるスタジオを海外で運営する機関や、自国のアーティストや芸術関係者と海外のアーティストや芸術関係者との出会いや共同制作に対応できるスタジオを国内で運営する機関がある。

海外でスタジオを運営する代表的な機関は、カナダのケベック・アーツカウンシルやオーストラリア・アーツカウンシルなどである。それらのスタジオはロンドン、パリ、ニューヨークなど、文化芸術の集積する国際的な都市に設置されている。また、ケベック・アーツカウンシルでは、外交的な戦略に基づいてスタジオを設立している。日本でも、ドイツ文化センターが京都でヴィラ・カモガワ、アンスティチュ・フランセが旧関西日仏交流会館の施設の一部を利用してヴィラ九条山を、オーストラリア・アーツカウンシルが東京スタジオを運営していることは広く知られている。

また、国内でスタジオを運営する代表的な機関では、スウェーデンのイアスピスや韓国のソウル芸術文化財団がある。これらの機関では、自国のアーティストや芸術関係者と海外のアーティストや芸術関係者との国際交流の拠点を形成している。スウェーデンのイアスピスでは、国際共同制作を推進するために、海外のアーティストやキュレーター等の滞在に力を入れている。

(4) アーティスト・イン・レジデンスとのパートナーシップ

諸外国の主要なファンド・グラントを運営する政府機関や政府系機関には、海外のアーティスト・イン・レジデンスとパートナーシップを形成している機関が少なくない。特に、ベルリンのキュンストラーハウス・ベターニエン、ニューヨークのインターナショナル・スタジオ&キュラトリアル・プログラム、パリのシテ・アンテルナショナル・デ・ザールなど、文化芸術の集積する国際的な都市で知名度の高いレジデンスを運営している場合が多い。これらのアーティスト・イン・レジデンスは、その国の美術館やギャラリー、キュレーターや批評家などの美術関係者との幅広いネットワークがあり、それらの出会いからアーティストの国際的なキャリアを育成し、美術館の企画展やコレクションへの収蔵、ビエンナーレへの出品などで国際的に活躍するアーティストを多数輩出している。

また、これらのパートナーシップの利点は、海外で自らスタジオを設置・運営することに比べ、初期投資や運営費が少ないこと、また、芸術シーンの状況に合わせて、スタジオの数や立地都市を変更できることである。オーストラリア・アーツカウンシルでは、滞在アーティストからのフィードバックを参考に定期的にスタジオの開設先の見直しを行っている。

(5) 文化機関とのパートナーシップ

ケベック・アーツカウンシルでは、上記のアーティスト・イン・レジデンスのパートナーシップ以外に、文化機関との双方向の交流を促すプログラムがある。ケベック・アーツカウンシルは海外の文化機関のスタジオや文化機関が提携する芸術団体や文化施設にアーティストを派遣するだけでなく、ケベック州の芸術団体や文化施設に海外の文化機関を通してアーティストを受け入れるための双方向のコーディネートを行う。

この仕組みでは、ケベック・アーツカウンシルと海外の文化機関との間に以下のような経費の相互負担の考え方が共有されていることが特徴である。ケベック・アーツカウンシルがアーティストを派遣する場合は、ケベック・アーツカウンシルの財源でアーティストの渡航費、滞在費や制作費を負担し、海外の文化機関がアパートやスタジオを提供する。一方、海外からアーティストを受け入れる場合は、ケベック・アーツカウンシルがアパートやスタジオを提供し、海外の文化機関の財源でアーティストの渡航費、滞在費や制作費を負担するという仕

組みとなっている。

(6) 海外のキュレーターやプロデューサー等の招へい

諸外国の主要なファンド・グラントを運営する政府機関や政府系機関には、アーティストではなく海外のキュレーターやプロデューサー等を招へいする事例がある。これは、海外のキュレーター等に自国の芸術状況をリサーチする機会や自国のアーティストと出会う機会を提供し、海外に自国の芸術やアーティストを紹介することを目的としている。

海外の政府系機関では、モンドリアン・フォonzやフィンランド芸術交流基金、オーストラリア・アーツカウンシルが推進している。

2. 諸外国の主要なファンド・グラントの一覧表

アーティストやキュレーター、研究者等のモビリティを支援するファンド・グラントを対象に特徴的なファンド・グラントを運営する政府機関や政府系機関、非政府組織（非営利組織や民間財団等）を以下のように整理した。

英国	アーツカウンシル・イングランド Arts Council England			
	所在都市	ロンドン	機関属性	政府系機関
	機関概要	1946年にロイヤル・チャーターの交付を受けて正式に発足したアーツカウンシル・グレート・ブリテン (Arts Council Great Britain) から1994年にアーツカウンシル・イングランド、アーツカウンシル・スコットランド (現在、クリエイティブ・スコットランド) とアーツカウンシル・ウェールズに分割され、現在に至る。		
	主なグラント	名称	アーティスト・インターナショナル・ディベロップメント・プログラム (Artists' International Development Programme)	
		概要	<p>アーツカウンシル・イングランドでは、2012年、アーツカウンシル・イングランドとブリティッシュ・カウンシルが75万ポンド(1億1,250万円)を共同出資し、アーティスト・インターナショナル・ディベロップメント・プログラム (Artists' International Development Programme) をスタートした。2012年度から2014年度の3年間の共同プログラムとして、現在、アーツカウンシル・イングランドが運営している。</p> <p>2010年に発表されたアーツカウンシル10年間の戦略フレーム「Achieving Great Art For Everyone」では、10年間の5つの長期目標の一つ「才能と芸術的な卓越性が活況を呈し、賞賛される (talent and artistic excellence are thriving and celebrated)」を達成するためのプログラムとして位置づけられ、若手アーティストの国際的なキャリアの支援として、海外のアーティストや芸術団体、芸術関係者とのネットワークを形成する機会を提供している。具体的には、①国際的な活動の意義を理解し、国内のアーティストにその意義を普及するアーティストが増加すること、②国際共同制作が増加すること、③アーティストの芸術的な技能やスキルが向上することをプログラムの目標としている。</p> <ul style="list-style-type: none">対象者: イングランド在住のアーティスト対象分野: 美術、音楽、演劇、ダンス、文学、複合芸術等対象国: 申請者の希望する国や地域派遣期間: 1－2ヶ月派遣人数: 74名 (2012年度)募集方法: 年3回公募支援内容: 渡航費、滞在費、活動費を支給。2012年度の助成額の実績は約1,000ポンド－5,000ポンド (約15万－75万円)	
	所在地	14 Great Peter Street, London, SW1P 3NQ, UK		
	連絡先	http://www.artscouncil.org.uk/contact/head-office/		
	URL	http://www.artscouncil.org.uk/		
ドイツ	ゲーテ・インスティトゥート Goethe-Institut			
	所在都市	ミュンヘン	機関属性	政府系機関
	機関概要	ドイツ連邦共和国の政府系文化機関。世界93ヶ国に146の在外オフィスを置き、海外のアーティスト・イン・レジデンス、芸術団体や文化施設と連携してドイツ在住のアーティスト、キ		

		ュレーター、研究者を派遣している。また、2011年、京都にヴィラ・カモガワをオープンし、毎年12人のドイツ在住のアーティストに3ヶ月間の滞在機会を提供している。		
	所在地	Dachauer Strasse 122, 80637 München, Germany		
	連絡先	info@goethe.de		
	URL	http://www.goethe.de/		
フランス	アンスティチュ・フランセ Institut Française			
	所在都市	パリ	機関属性	政府系機関
	機関概要	フランスの政府系文化機関。旧関西日仏交流会館の施設の一部としてヴィラ九条山を1992年にオープン。フランス外務省とキュルチュールフランスが共同運営し、フランス在住のアーティストに滞在機会を提供していた。2013年に閉鎖。		
	所在地	8 - 14 Rue du Capitaine Scott, 75015 Paris, France		
	連絡先	http://www.institutfrancais.com/fr/contact		
	URL	http://www.institutfrancais.com/		
オランダ	モンドリアン・フォンズ Mondriaan Fonds			
	所在都市	アムステルダム	機関属性	政府系機関
	機関概要	美術と文化遺産に関する活動を支援する公的な助成機関で、オランダの美術、デザイン、文化遺産を海外に紹介する文化機関、モンドリアン・ファンデーション (Mondriaan Foundation) と、美術、デザイン、建築を支援する助成機関、BKVB フォンズ (Fonds voor beeldende kunsten, vormgeving en bouwkunst) が合併して、2013年に設立された。 オランダに在住するアーティストを対象に海外のアーティスト・イン・レジデンスと提携してアーティストを派遣するプログラムや、オランダに在住するアーティストやキュレーター等を対象に海外の主要な展覧会や文化機関を視察するプログラムを運営する。また、海外のキュレーターを招へいするプログラムもある。		
	主なグラント①	名称	海外のアトリエ (Ateliers Buitenland)	
		概要	海外のアーティスト・イン・レジデンスやレジデンスプログラムを運営する文化機関とパートナーシップを結び、オランダに在住するアーティストやキュレーター等を派遣するプログラム。 <ul style="list-style-type: none">対象者: オランダ在住のアーティストやキュレーター等対象分野: 美術対象国: 提携機関の国や地域派遣期間: 3ヶ月－1年派遣人数: 約35名募集方法: 年1回公募支援内容: 渡航費、滞在費と活動費として月2,500ユーロ(約32万5千円)を支給	
		提携機関	<ul style="list-style-type: none">AIR Berlin Alexanderplatz (ドイツ、ベルリン)Arts Initiative Tokyo (日本、東京)Atelier Holsboer (フランス、パリ)Capacete (ブラジル、リオデジャネイロ/サンパウロ)Center for Curatorial Studies and Bard College (米国、アナンデール・オン・ハドソン)Instituto Buena Vista (オランダ領、キュラソー島)	

		<ul style="list-style-type: none">● International Studio and Curatorial Program（米国、ニューヨーク）● Meetfactory（チェコ共和国、プラハ）● Projectstudio Berlijn（ドイツ、ベルリン）● Projectstudio China（中国、北京）● Projectstudio Rome（イタリア、ローマ）● Tembe Art Studio（スリナム共和国、ムーンホ）● Townhouse Gallery（エジプト、カイロ）● Wiels（ベルギー、ブリュッセル）
主なグラント②	名称	オリエンテーション・トリップ (Orientation Trip)
	概要	<p>オリエンテーション・トリップはオランダ在住のアーティストやキュレーター等を対象に海外の主要な展覧会や文化機関を視察するプログラムで、年一回指名制で実施されている。2012年度は中国とインドネシアを2週間訪問するツアーが行われた。</p> <ul style="list-style-type: none">● 対象者： オランダ在住のアーティスト、キュレーター等● 対象分野： 美術● 対象国： 中国、インドネシア(2012年)● 派遣期間： 2週間● 派遣人数： －● 募集方法： 指名● 支援内容： 渡航費、滞在費を支給
主なグラント③	名称	ビジター・プログラム (Visitors Program)
	概要	<p>ビジター・プログラムは海外のキュレーターを中心に美術関係者をオランダに招へいするプログラムで、指名制で実施されている。世界で注目を集めている美術館や国際展のキュレーターを招待し、オランダのアーティストが海外で作品を発表するチャンスをつくることを目的としている。</p> <ul style="list-style-type: none">● 対象者： 海外のキュレーター等● 対象分野： 美術● 招へい期間： 2週間● 招へい人数： －● 募集方法： 指名● 支援内容： 渡航費、滞在費を支給
所在地		Brouwersgracht 276, 1013 HG, Amsterdam, Netherlands
連絡先		info@mondriaanfonds.nl
URL		http://www.mondriaanfonds.nl/
ベルギー	国際ワロン・ブリュッセル Wallonie-Bruxelles International	
	所在都市	ブリュッセル
	機関概要	<p>ベルギー王国には、3つの地域と3つの言語共同体の6つの地方行政区分がある。文化芸術の国際交流に関しては、フランス語を主体とするフランス語共同体とワロン地域を代表する国際ワロン・ブリュッセル (Wallonie-Bruxelles International) と、オランダ語を主体とするフランダース政府が積極的に取り組んでいる。なお、フランデレン地域とオランダ語共同体は首都ブリュッセルを除き領域が重なることから公式に統一され、一般的にフランダース政府と呼ばれている。</p>

		国際ワロン・ブリュッセルはベルギーのフランス語圏に在住するアーティストを対象に海外での創作活動やリサーチの機会を提供するグラントや、海外にアーティストや芸術作品を紹介するグラントを運営する。また、海外のアーティスト、キュレーターやプロデューサー等を招へいするプログラムもある。		
	所在地	Place Saintelette 2, 1080 Sint-Jans-Molenbeek, Belgium		
	連絡先	wbi@wbi.be		
	URL	http://walloniabrusselsinternational.org/		
	フランダース政府 Flemish Government			
	所在都市	ブリュッセル	機関属性	政府機関
	機関概要	フランダース政府の文化・青年・スポーツ・メディア省 (Ministry of Culture, Youth, Sports and Media) は、ベルギーのオランダ語圏に在住するアーティストを対象にトラベル・グラント、インターナショナル・プロジェクト・グラント、海外のアーティスト・イン・レジデンスと提携した滞在機会を提供している。なお、キュンストラ・ハウス・ベターニエン (ドイツ、ベルリン)、ライクス・アカデミー (オランダ、アムステルダム)、ヤン・ファン・エイク・アカデミー (オランダ、マーストリヒト)、ISCP (米国、ニューヨーク)、プラットフォーム・ガランティ (トルコ、イスタンブール) の5つのアーティスト・イン・レジデンスと提携している。		
	所在地	Koning Albert II-laan, 1030 Brussel, Belgium		
	連絡先	http://www.flanders.be/en/contact/send-an-email		
	URL	http://www.flanders.be/		
スイス	プロ・ヘルヴェティア文化財団 Pro Helvetia			
	所在都市	チューリッヒ	機関属性	政府系機関
	機関概要	プロ・ヘルヴェティア文化財団は、政府から独立した財団として1949年に設立されたスイスのアーツカウンシルである。美術、音楽、演劇、ダンス、文学、社会、学際的な分野を対象に、スイス国内の芸術の振興と普及、国際交流を推進している。 スイスの文化発信と海外ネットワークの形成に積極的で、パリで在外文化センターを運営し、カイロ、ヨハネスブルク、ワルシャワ、ニューデリー、上海に在外事務所を置く。また、ローマ、ミラノ、ヴェネチア、ニューヨーク、サンフランシスコに提携機関を有する。		
	主なグラント①	名称	スタジオ・レジデンス (Studio Residencies)	
		概要	アーティストを対象にエジプト、南アフリカ、インド、中国で3ヶ月の滞在をする機会を提供する。このプログラムの目的は、創作のインスピレーションを得ること、ネットワークを形成すること、新しいプロジェクトや共同制作をすることである。 <ul style="list-style-type: none">対象者: スイス在住のアーティスト対象分野: 美術、音楽、演劇、ダンス、文学等対象国: エジプト、南アフリカ、インド、中国派遣期間: 3ヶ月派遣人数: 各対象国で年間4人程度支援内容: 渡航費、海外保険料、滞在費を支給、スタジオ、宿泊施設を提供	
主なグラント②	名称	リサーチ・レジデンス (Research Residencies)		
	概要	リサーチ・レジデンスはアーティストとキュレーター等を対象に、エジプト、南アフリカ、インド、中国で4週間滞在し、将来の国際交流プロジェクトの準備をする機会を提供する。滞在には、申請者のリサーチに関連する分野の現地の専門家を同行、現地のアーティストやキュレーター等との出会いを支援する。 <ul style="list-style-type: none">対象者: スイス在住のアーティスト、キュレーター等		

			<ul style="list-style-type: none"> 対象分野：美術、音楽、演劇、ダンス、文学等 対象国：エジプト、南アフリカ、インド、中国 滞在期間：4週間 派遣人数：－ 支援内容：渡航費、海外保険料、滞在費を支給、宿泊施設を提供
	所在地	Schweizer Kulturstiftung, Hirschengraben 22, CH-8024 Zurich, Switzerland	
	連絡先	info@prohelvetia.ch	
	URL	http://www.prohelvetia.ch/	
スウェーデン	イアスピス	IASPIS	
	所在都市	ストックホルム	機関属性 政府系機関
	機関概要	<p>イアスピスは美術、デザイン、工芸、建築の国際交流を推進する組織で、スウェーデン芸術助成委員会(Swedish Arts Grants Committee)の一部として1996年に設立された。スウェーデン在住のアーティストが海外の専門家とネットワークを形成することで、芸術性を向上し、創作環境を改善できるようにすることを目的とする。</p> <p>イアスピスはスウェーデン在住のアーティストを対象に海外での滞在制作と共同制作を支援する助成プログラムや、海外のアーティスト・イン・レジデンスと提携してアーティストを派遣するプログラムを運営する。また、スウェーデン国内でスタジオを運営しており、ストックホルムに9つのスタジオ、地方都市に3つのスタジオを有する。</p> <p>国内のスタジオは国際交流のプラットフォームの形成を目的に設置され、海外からアーティスト、キュレーターや批評家を招へいする際に利用されている。海外のアーティストやキュレーター等はスウェーデンのアーティストやキュレーター等の推薦で招待される。</p>	
	主なグラント①	名称	スウェーデンでの共同プロジェクトを支援する助成(International Project Grants)
		概要	スウェーデン在住のアーティストが共同プロジェクトを目的に海外のアーティストをスウェーデンに招待したい場合、海外のアーティストのための渡航費と滞在費を支給する。シンポジウム、セミナー、ワークショップ、共同制作などが対象で、共同制作のためのスタジオが必要な場合は、イアスピスの運営する国内のスタジオを提供している。
	主なグラント②	名称	海外のスタジオ(Studios Abroad)
		概要	<p>海外のアーティスト・イン・レジデンスを運営する機関と提携し、スウェーデン在住のアーティストに海外で創作活動やリサーチをする機会を提供し、渡航費と滞在費を支給している。</p> <ul style="list-style-type: none"> 対象者：スウェーデン在住のアーティスト 対象分野：美術、デザイン、工芸、建築 対象国：提携機関 派遣期間：2ヶ月－1年 派遣人数：9人 募集方法：年1回公募 支援内容：－
		提携機関	<p>2ヶ月滞在のレジデンスプログラム</p> <ul style="list-style-type: none"> Institute for Provocation (中国、北京) <p>3ヶ月滞在のレジデンスプログラム</p> <ul style="list-style-type: none"> Arts Initiative Tokyo (日本、東京)

			<ul style="list-style-type: none">● SOMA（メキシコ、メキシコシティ）● Space（英国、ロンドン）● Townhouse Gallery（エジプト、カイロ） 4ヶ月滞在のレジデンスプログラム <ul style="list-style-type: none">● WT Residency（オランダ、アムステルダム）＊工芸のみ対象 1年滞在のレジデンスプログラム <ul style="list-style-type: none">● ACME（英国、ロンドン）● International Studio & Curatorial Program（米国、ニューヨーク）● Künstlerhaus Bethanien（ドイツ、ベルリン）	
	所在地	Konstnärsnämnden, Maria skolgata 83, 118 53 Stockholm, Sweden		
	連絡先	info@iaspis.com		
	URL	http://www.konstnarsnamnden.se/		
フィンランド	フィンランド芸術交流基金 FRAME			
	所在都市	ヘルシンキ	機関属性	政府系機関
	機関概要	フィンランド芸術交流基金はフィンランドの美術に関連する国際交流を促す公的機関で、1992年に設立された。教育文化省 (Ministry of Education and Culture) が所管する。フィンランド芸術交流基金はフィンランド在住のアーティストを対象に海外の展覧会やアーティスト・イン・レジデンスへの参加を支援している。また、海外のキュレーターや批評家等を招へいするプログラムもある。海外のアーティスト・イン・レジデンスと提携していないが、海外の展覧会やプロジェクト、アーティスト・イン・レジデンスの情報提供を行う。		
	主なグラント①	名称	助成プログラム (Grants)	
		概要	フィンランド在住のアーティストを対象に海外の展覧会やアーティスト・イン・レジデンスへの参加を支援する。 <ul style="list-style-type: none">● 対象者：フィンランド在住のアーティスト● 対象分野：美術● 対象国：申請者の希望する国や地域● 派遣期間：1－3ヶ月● 派遣人数：189人● 募集方法：年3回公募 (応募締切日から結果通知まで約6－8週間)● 支援内容：渡航費、滞在費や輸送費を支給。2012年度の助成額の実績は約500－7,000ユーロ (約6万5,000円－91万円)	
	主なグラント②	名称	専門家によるビジター・プログラム (Visits by experts)	
概要		海外のキュレーター、美術評論家、美術史家等を招へいし、フィンランドの美術シーンをリサーチする機会を提供する。 <ul style="list-style-type: none">● 対象者：海外のキュレーターや美術評論家等● 対象分野：美術● 招へい期間：－● 招へい人数：－● 募集方法：指名● 支援内容：渡航費や滞在費、宿泊施設を提供		
	所在地	Cable Factory, Tallberginkatu 1 C 96, 4 th Floor, FI-00189, Helsinki, Finland		

	連絡先	info@frame-finland.fi		
	URL	http://www.frame-finland.fi/		
米国	アジア・カルチュラル・カウンシル Asian Cultural Council			
	所在都市	ニューヨーク	機関属性	民間財団
	機関概要	アジア・カルチュラル・カウンシルは、アジア及び米国間での国際文化交流を支援する米国の非営利財団で、1980年に設立された。ニューヨークに本部を置き、東京、香港、台北、マニラに支部を持つ。		
	主なグラント	名称	個人助成 (Individual Grants)	
		概要	アジアのアーティスト、キュレーター、研究者等が米国・他のアジア諸国へ、もしくは米国のアーティスト、キュレーター、研究者等がアジア諸国へ訪れ、現地で非商業的創作・芸術活動やリサーチ、研究、特別トレーニングなどに取り組むのに必要な支援を提供している。展覧会、公演、大学学部留学等の目的は対象とならないが、アーティスト・イン・レジデンスへの参加は助成対象で、米国のアーティスト・イン・レジデンスに滞在を希望するアーティストは少なくない。 <ul style="list-style-type: none">対象者: アジア及び米国在住のアーティスト、キュレーター、研究者等対象分野: 美術、メディア・アート、音楽、演劇、ダンス等対象国: アジア及び米国招へい・派遣期間: 最長6ヶ月招へい・派遣人数: 年間50－100件(団体助成を含む)募集方法: 公募支援内容: 渡航費、滞在費、国内交通費、リサーチ活動費(本や資料代等)、医療保険料(米国に渡航するフェローを対象)を支給	
		提携機関	米国内で提携しているアーティスト・イン・レジデンスは以下のとおり。 <ul style="list-style-type: none">Fine Arts Work Center in Provincetown (米国、マサチューセッツ州)Headlands Center for the Arts (米国、カリフォルニア州)International studio and curatorial Program (米国、ニューヨーク)Location One (米国、ニューヨーク)Lower Manhattan Cultural Council (米国、ニューヨーク)McColl Center for Visual Art (米国、ノースカロライナ州)Skowhegan (米国、メイン州)Virginia Center for the Creative Arts (米国、ヴァージニア州)Yaddo (米国、ニューヨーク州)	
	所在地	6 West 48th Street, 12th Floor, New York 10036-1802, USA		
	連絡先	acc@accny.org		
	URL	http://www.asianculturalcouncil.org/		
カナダ	カナダ・アーツカウンシル Canada Council for the Arts			
	所在都市	オタワ	機関属性	政府系機関
	機関概要	カナダのアーツカウンシル。カナダに在住するアーティストを対象に、トラベル・グラント、海外のアーティスト・イン・レジデンスと提携した滞在機会を提供している。また、海外のアーティスト等を招へいするプログラムもある。 海外アーティスト・イン・レジデンスと提携したプログラムでは、ACME スタジオ(英国、ロンドン)、シテ・アンテルナショナル・デ・ザール(フランス、パリ)、キュンストラーハウス・ベターニ		

	エン(ドイツ、ベルリン)、ISCP(米国、ニューヨーク)、サンタフェ・アート・インスティテュート(米国、サンタフェ)、アートスペース(オーストラリア、シドニー)にアーティストを定期的に派遣している。		
所在地	350 Albert Street, Ottawa, Ontario K1P 5V8, Canada		
連絡先	http://www.canadacouncil.ca/contactus/		
URL	http://www.canadacouncil.ca/		
ケベック・アーツカウンシル Conseil des arts et des lettres du Québec			
所在都市	ケベックシティ	機関属性	政府系機関
機関概要	ケベック・アーツカウンシルはケベック州のアーティスト、芸術団体や文化施設の活動を支援する専門的な助成機関として、1994年に設立された。 助成対象分野は美術、映画やビデオ、デジタル・アートや建築、工芸、音楽、舞台芸術、文学、領域横断的な芸術で、主に、州の文化芸術の普及活動を行うアーティスト、芸術団体や文化施設の支援と、海外に進出を願うアーティストや芸術団体の支援をする。		
主なグラント①	名称	スタジオ・アトリエ住居プログラム(Studio and Studio-Apartments)	
	概要	ケベック・アーツカウンシルは世界6ヶ国にケベック・スタジオ(スタジオ施設)を有し、そのスタジオにアーティストを派遣するプログラムや、海外のアーティスト・イン・レジデンスと提携してアーティストを派遣するプログラムを運営している。また、海外の文化機関とアーティスト交換プログラムを実施している。 <ul style="list-style-type: none">対象者: ケベック州在住のアーティスト対象分野: 美術、映画やビデオ、デジタル・アートや建築、工芸、音楽、舞台芸術、文学、領域横断的な芸術対象国: 提携機関の国や地域派遣期間: 3ヶ月－1年派遣人数: ー募集方法: 年1回公募支援内容: 渡航費、旅行経費(ビザ申請料や旅行保険料など)、滞在費や活動費を支給。6ヶ月の滞在の場合の滞在費と活動費は約2万カナダドル(約200万円)	
	スタジオ・提携機関	ケベック・スタジオへの派遣プログラム <ul style="list-style-type: none">パリ、ニューヨーク、ローマ、ベルリン、ロンドン、東京の6ヶ所 海外のアーティスト・イン・レジデンスへの派遣プログラム <ul style="list-style-type: none">Banff Center (カナダ、カルガリー)British School (イタリア、ローマ)International Studio & Curatorial Program (米国、ニューヨーク)Space118 (インド、ムンバイ)Tanz Werlstatt Berlin (ドイツ、ベルリン) 海外の文化機関とのアーティスト交換プログラム <ul style="list-style-type: none">Fondation Christoph Merian (スイス)The Finnish Artists' Studio Foundation (フィンランド)Wales Art International (ウェールズ)Communauté française de Belgique (ベルギー)Centre for Contemporary Arts in Glasgow (スコットランド)	

			<ul style="list-style-type: none">• Ministre de la Culture et de la Communication de France／Centre international d'accueil et d'Échanges des Récollets（フランス）• Clube Português de Artes e Ideias（ポルトガル）• New York State Council on the Arts（米国）• Fondo Nacional para la Cultura y las Artes（メキシコ）• Secretaria de Cultura of the Presidencia de la Nacion Argentina（アルゼンチン）• Ministerio de Cultura de Colombia（コロンビア）• Manitoba Arts Council（カナダ・マニトバ州）• New Brunswick Arts Council（カナダ・ニューブランズウィック州）• Kativik Regional Government（カナダ・ヌナビク準州）• Ontario Arts Council（カナダ・オンタリオ州）
主なグラント②	名称	トラベル・グラント(Travel Grant)	
	概要	トラベル・グラントは海外の国や地域及びカナダ国内の州(ケベック以外)の文化機関、芸術団体や文化施設から招待を受けたケベック在住のアーティストと芸術団体を支援するプログラム。 <ul style="list-style-type: none">• 対象者: ケベック州在住のアーティストや芸術関係者• 対象分野: 美術、映画やビデオ、デジタル・アートや建築、工芸、音楽、舞台芸術、文学、領域横断的な芸術• 対象国: 申請者の希望する国や地域• 派遣期間: ー• 派遣人数: ー• 募集方法: 年1回公募• 支援内容: 渡航費、旅行経費(ビザ申請料や旅行保険料など)、一日あたり200カナダドル(約2万円)を上限とする宿泊費と食費を支給	
主なグラント③	名称	ヨーロッパ・ペピニエール・プログラムやユネスコ・アッシェバーク奨学金	
	概要	ケベック・アーツカウンシルはヨーロッパ・ペピニエール・プログラムやユネスコ・アッシェバーク奨学金などの国際機関の運営するモビリティ・プログラムの窓口として、アーティストの派遣や招へいのコーディネートを行っている。	
所在地	79 Bd René Lévesque E Quebec City, QC G1R 5N5, Canada		
連絡先	info@calq.gouv.qc.ca		
URL	http://www.calq.gouv.qc.ca/		
韓国	韓国アーツカウンシル Arts Council Korea		
	所在都市	ソウル	機関属性 政府系機関
	機関概要	韓国のアーツカウンシル。韓国在住のアーティストを対象にトラベル・グラント、海外のアーティスト・イン・レジデンスと提携した滞在機会を提供している。また、海外のアーティストを招へいするプログラムもある。	
	所在地	26-1 Guro-dong, Guro-gu, Seoul, Korea	
	連絡先	arko@arko.or.kr	
	URL	http://www.arko.or.kr/	
	ソウル芸術文化財団 Seoul Foundation Arts and Culture		
	所在都市	ソウル	機関属性 政府系機関

	機関概要	ソウル特別市が2004年に設立した文化機関。助成事業のほか、「衿川芸術工場」や「文来芸術工場」などの海外のアーティストの受け入れを行うレジデンス施設を含む9つの創作空間を運営する。		
	所在地	130-823, 517 Cheong Gye Cheon-ro Dongdaemun-gu, Seoul, Korea		
	連絡先	webmaster@sfac.or.kr		
	URL	http://english.sfac.or.kr/		
シンガポール	シンガポール・アーツカウンシル National Arts Council Singapore			
	所在都市	シンガポール	機関属性	政府系機関
	機関概要	シンガポールのアーツカウンシル。		
	主なグラント①	名称	インターナショナル・トラベル・グラント(International Travel Grant)	
		概要	シンガポール在住のアーティストを対象に、海外のフェスティバル、国際展やアートフェアなどに参加を促すためのグラントで、2012年度より、マーケット・アンド・オーディエンス・ディベロップメント事業に再編成された。 <ul style="list-style-type: none">対象者：シンガポール在住のアーティスト、キュレーター等対象分野：全助成対象分野対象国：申請者の希望する国や地域派遣期間：－派遣人数：約70名(2012年実績)募集方法：年6回公募支援内容：平均1,000－3,000シンガポールドル(約8－24万円)を支給	
	主なグラント②	名称	インターナショナル・アーティスト・レジデンス・プログラム(International Artist Residency Programmes)	
		概要	海外のアーティスト・イン・レジデンスと提携した滞在機会を提供している。 <ul style="list-style-type: none">対象者：シンガポール在住のアーティスト、キュレーター等対象分野：美術、演劇、文学対象国：フランス、ドイツ、イタリア、米国、韓国、日本派遣期間：2週間－1年派遣人数：各提携機関1人募集方法：年1回公募支援内容：渡航費、滞在費、活動費。キュンストラーハウス・ベターニエンの場合は、1年間の派遣機関で5万シンガポールドル(約400万円)を支給	
		提携機関	<ul style="list-style-type: none">Dena Foundation (フランス、パリ)：美術を対象Künstlerhaus Bethanien (ドイツ、ベルリン)：美術を対象Ecole Phillippe Gaulier (フランス、パリ)：演劇を対象La Mama Umbria ラ・ママ・アンブリア (イタリア、アンブリア)：演劇を対象Summer Training in Toga (日本、利賀村)：演劇を対象Iowa University (米国、アイオワ)：文学を対象Toji Cultural Centre (韓国、江原道)：文学を対象	
	所在地	Goodman Arts Centre, 90 Goodman Road, Blk A #01-01, Singapore		
連絡先	nac_scholarship@nac.gov.sg			
URL	http://www.nac.gov.sg/			

	アーツ・ネットワーク・アジア (Arts Network Asia) / シアターワークス			
所在都市	シンガポール		機関属性	非営利団体
機関概要	劇団シアターワークスのオン・ケンセンが1999年に設立。アジアの国や地域のアーティストやアーツマネジャーの交流を活性化することを目的とした助成事業とネットワーク事業を運営する。事務局はシアターワークスが担っており、アジア各国の文化芸術の専門家からなる委員会で意思決定が行われる。現在の委員はインド、インドネシア、フィリピン、シンガポール、スリランカ、台湾、タイ、ベトナム、中国の専門家9名で、過去にはマレーシア、カンボジア、韓国からも委員が選出された。			
主なグラント①	名称	トラベル・グラント (Travel Grant)		
	概要	アジア地域内へ渡航するアジアのアーティストや芸術関係者が応募できる。年間を通じて応募可能で、採択されると最大1,000米ドル(約10万円)が支給される。申請は事業助成と同じく11言語に対応している。過去に採択された企画書はウェブ上にアーカイブされ、誰もが参照できるようになっている。 <ul style="list-style-type: none">対象者: アジア在住のアーティスト、キュレーターやプロデューサー等対象分野: 美術、映画、音楽、演劇、ダンス等対象国: アジアの国や地域派遣期間: -派遣人数: 3名(2012年実績)募集方法: 年1回公募支援内容: 最大1,000米ドル(約10万円)		
主なグラント②	名称	クリエイティブ・エンカウンター (Creative Encounters: Cultural Partnerships between Asia and Europe)		
	概要	アジアと欧州の交流を目的に、アーツ・ネットワーク・アジア、アジア・欧州財団 (Asia-Europe Foundation)、欧州の独立系文化施設のネットワーク組織であるトランス・ヨーロッパ・ハレス (Trans Europe Halles) と連携して2011年から開始した助成プログラム。 <ul style="list-style-type: none">対象事業: 国際共同制作やネットワーク事業等対象分野: 美術、映画、音楽、演劇、ダンス等対象国: 欧州とアジアの国や地域派遣期間: -派遣人数: 6件(2012年実績)募集方法: 年1回公募支援内容: 最大2万米ドル(約200万円)		
所在地	72-13 Mohamed Sultan Road, Singapore			
連絡先	taytong@theatreworks.org.sg			
URL	http://www.artsnetworkasia.org/			
オーストラリア	オーストラリア・アーツカウンシル・ Australia Council for the Arts			
	所在都市	シドニー	機関属性	政府系機関
	機関概要	オーストラリアのアーティスト、芸術団体や文化施設の活動を支援する専門的な助成機関として、1975年に設立された。助成対象分野は美術、メディア・アート、デザイン、工芸、音楽、演劇、ダンス、文学、先住民の文化芸術、コミュニティ・アーツで、主に、オーストラリアの文化芸術の普及活動を行うアーティスト、芸術団体や文化施設の支援と、海外に進出を		

主なグラン ト	願うアーティストや芸術団体の支援をする。	
	名称	海外のスタジオやレジデンスへの支援 (Supports artists to undertake overseas studio residencies)
	概要	<p>海外でプロフェッショナルな芸術的な技能やスキルの向上を支援することを目的として、美術、メディア・アート、デザイン、工芸、音楽、文学を対象分野に、オーストラリア・アーツカウンシル・の海外のスタジオ施設や海外のアーティスト・イン・レジデンスに滞在する機会を提供している。申請者は海外のアーティスト・イン・レジデンスの提携機関以外のアーティスト・イン・レジデンス等から滞在許可を取得し、申請することもできる。</p> <ul style="list-style-type: none"> 対象者： アーティスト 対象分野： 美術、メディア・アート、デザイン、工芸、音楽、文学 対象国： 提携機関の国や地域、申請者の希望する国や地域 派遣期間： 3ヶ月－1年 派遣人数： 約30人 募集方法： 年1回公募(8月応募締切、11月結果通知) 支援内容： 渡航費、滞在費、活動費として、3ヶ月のレジデンスの場合は1万豪ドル(約100万円)、6ヶ月のレジデンスの場合は2万豪ドル(約200万円)、1年のレジデンスの場合は、3万5,000豪ドル(約350万円)を支給。また、提携機関以外のアーティスト・イン・レジデンス等に滞在する場合、平均1万5,000豪ドル(約150万円)を支給。 <p>アーティストから滞在のフィードバック・レポートを回収しており、定期的に提携先のレジデンスの見直しを行っている。</p>
	スタジオ・提携機関	<p>3ヶ月滞在のレジデンスプログラム</p> <ul style="list-style-type: none"> ACME Studio (英国、ロンドン) Barcelona Studio (スペイン、バルセロナ) Cite Internationale des Arts Studio (フランス、パリ) Liverpool Biennial (英国、リバプール) Helsinki International Artist-in-Residence Program (フィンランド、ヘルシンキ) The British School (イタリア、ローマ) Tokyo Studio (日本、東京) * 自己所有 <p>6ヶ月滞在のレジデンスプログラム</p> <ul style="list-style-type: none"> International studio & curatorial program (米国、ニューヨーク) New York Studio (米国、ニューヨーク) * 自己所有 <p>1年滞在のレジデンスプログラム</p> <ul style="list-style-type: none"> Künstlerhaus Bethanien (ドイツ、ベルリン)
	所在地	372 Elizabeth Street, Surry Hills NSW 2010, Australia
	連絡先	mail@australiacouncil.gov.au
	URL	http://www.australiacouncil.gov.au/

3. 国際機関の主要なファンド・グラントの一覧表

アーティストやキュレーター、研究者等のモビリティを支援するファンド・グラントを対象に特徴的なファンド・グラントを運営する国際機関(政府間組織等)や非政府組織を以下のように整理した。

国際機関	ユネスコ UNESCO			
	所在都市	パリ		機関属性 国際機関
	機関概要	教育、科学、文化の発展と推進を目的として、1945年11月16日に採択された「国際連合教育科学文化機関憲章」(ユネスコ憲章)に基づいて1946年11月4日に設立された国際連合の専門機関。		
	主なグラント	名称	ユネスコ・アッシュェバーグ奨学金 (The UNESCO-Aschberg Bursaries for Artists Programme)	
		概要	ユネスコ・アッシュェバーグ奨学金は若手アーティストのモビリティを活性化する目的で、スウェーデンのフィランソロピスト、アッシュェバーグ夫妻の寄付によって1994年に創設された。世界各地にあるユネスコ・アッシュェバーグ奨学金提携レジデンスとともに運営をしている。1994年の創設から2007年までの13年間で世界72ヶ国の若手アーティスト合計640名に世界30ヶ国のアーティスト・イン・レジデンスや文化施設に滞在する機会を提供している。 <ul style="list-style-type: none">対象者: 25歳から35歳までのアーティスト対象分野: 美術、音楽、文学対象国: 提携機関の国や地域派遣期間: 1－3ヶ月派遣人数: 美術12人、音楽4人、文学4人(2013年度)募集方法: 年1回公募支援内容: ユネスコ・アッシュェバーグ奨学金が渡航費を支給。また、各提携機関が滞在費や活動費、宿泊施設を提供。	
		提携機関	<ul style="list-style-type: none">Bundanon Trust (オーストラリア、ニューサウスウェールズ州): 美術を対象Camac (フランス、マルリー): 美術、文学を対象Centro Colombo Americano (コロンビア、ボゴタ): 美術を対象Changdong National Art Studio (韓国、ソウル): 美術を対象Civitella Ranieri Center (イタリア、ウンベルティデ): 美術、文学を対象Dar Al-Ma'mûn (モロッコ、マラケッシュ): 美術、文学を対象Djerassi Resident Artists Program (米国、サンノゼ): 美術を対象La Chambre Blanche (カナダ、ケベックシティ): 美術を対象L'Espace Sobo Badè (セネガル、ダカール): 音楽を対象Musique Multi-Montréal (カナダ、モントリオール): 音楽を対象Sacatar Foundation (ブラジル、サルヴァドール): 美術、音楽、文学を対象UNIDEE - Cittadellarte (イタリア、ベネツラ): 美術を対象Virginia Center for the Creative Arts (米国、ヴァージニア州): 音楽を対象	
	所在地	1, rue Miollis, 75732 Paris Cedex 15, France		
	連絡先	aschberg@unesco.org		
	URL	http://www.unesco.org/culture/aschberg		

ヨーロッパ・ペピニエール European Pépinières			
所在都市	サン・クルー	機関属性	非政府組織
機関概要	<p>ヨーロッパ・ペピニエールは欧州諸国の文化機関のネットワークを統括する欧州非政府組織 (European non-governmental organization) で、欧州のアーティストのモビリティを向上することを目的に、1990年に設立された。</p> <p>主に若手アーティストのモビリティを促す助成プログラムを運営しており、そのプログラムに関連した展覧会や公演等の支援も行う。現在、欧州及びカナダ(ケベック州)で26ヶ国の文化機関がネットワークに加盟しており、各国を代表する文化機関がそれぞれの国のアーティスト・イン・レジデンスや文化施設との調整を行う。</p> <p>ヨーロッパ・ペピニエールの活動資金はネットワークに提携する文化機関、欧州委員会やフランス政府文化・コミュニケーション省からの補助金によって支えられている。</p>		
主なグラント①	名称	マップ・プログラム (Map Programme)	
	概要	<p>若手アーティストを対象に欧州及びカナダ(ケベック州)の間のモビリティを向上することを目的としたプログラムで、ヨーロッパ・ペピニエールのネットワークに加盟する国のアーティスト・イン・レジデンスや文化施設に滞在する機会を提供。</p> <ul style="list-style-type: none"> 対象者: 欧州及びカナダ(ケベック州)に在住する18歳から35歳までのアーティスト 対象分野: 美術、メディア・アート、デザイン、音楽、演劇、ダンス等 対象国: 欧州及びカナダ(ケベック州) 派遣期間: 3ヶ月 派遣人数: ー 募集方法: 2年に1度公募 支援内容: 渡航費、滞在費と活動費として月約1,250ユーロ(約16万2,500円)を支給、宿泊施設を提供 	
主なグラント②	名称	M4m (M for Mobility)	
	概要	<p>欧州及びカナダ(ケベック州)の間での若手アーティストと芸術関係者との出会いを促すことを目的としたプログラムで、3年毎にプログラムが更新されている。現在、7のパートナー団体と12の準パートナー団体が運営を補助している。</p> <ul style="list-style-type: none"> 対象者: 欧州及びカナダ(ケベック州)に在住する18歳から35歳までのアーティスト、キュレーター、プロデューサー、照明や音響の技術者、舞台監督等 対象分野: 美術、メディア・アート、デザイン、音楽、演劇、ダンス等 対象国: 欧州及びカナダ(ケベック州) 派遣期間: 3ヶ月 派遣人数: ー 募集方法: 3年に1度公募 支援内容: 渡航費、滞在費と活動費とし月約1,250ユーロ(約162,500円)を支給、宿泊施設を提供 	
	提携機関	<p>パートナー</p> <ul style="list-style-type: none"> La Brèche (フランス、シェルブール): ダンスを対象 Pépinières européennes pour jeunes artistes (フランス、サン・クルー): 複合分野を対象 SERDE (ラトビア、リガ): 文化、科学、教育を対象 Tanec Praha (チェコ共和国、プラハ): ダンスを対象 	

		<ul style="list-style-type: none"> • Transcultures (ベルギー、モンス):メディア・アートを対象 • UNITER (ルーマニア、ブカレスト):演劇を対象 • Workshop Foundation (ハンガリー、ブタペスト):ダンスを対象 <p>準パートナー</p> <ul style="list-style-type: none"> • MU (オランダ、アイントホーフェン):美術を対象 • Centre Méditerranéen de la Photographie (フランス、バスティア):写真を対象 • Centre chorégraphique national de Rilleux-la-Pape (フランス、リリユー・ラ・パブ):ダンスを対象 • Cittadellarte (イタリア、トリノ):複合分野を対象 • Cité du design (フランス、サン・テティエンヌ):デザインを対象 • David Rolland chorégraphies (フランス、ナント):ダンスを対象 • EKWC (オランダ、デン・ボス):陶芸を対象 • Heidenspass (オーストラリア、グラーツ):デザインを対象 • Institut du light design (チェコ共和国、ブラハ):デザインを対象 • Istituto Europeo di Design (イタリア、ミラノ):デザインを対象 • Le Prisme (フランス、サン・カンタン・アン・イヴリーヌ):演劇、ダンス、音楽を対象 • Studio Azzurro (イタリア、ミラノ):メディア・アートを対象 • TAM Teatro Musica (イタリア、パドヴァ):音楽を対象 • Ville de Paris (フランス、パリ):複合分野を対象
所在地	BP 80132, Domaine national de Saint-Cloud, F - 92216 SAINT-CLOUD Cedex, France	
連絡先	info@art4eu.net	
URL	http://www.art4eu.net/	

1. モンドリアン・フォンズ | Mondriaan Fonds

面会日: 2013年2月25日(月) 16:00-17:00

面会者: Mayke JONGSMA (Coordinator Project Support)

URL: <http://www.mondriaanfonds.nl/>

1. 運営機関の概要

(1) 設立の経緯

オランダの美術、デザイン、文化遺産を海外に紹介する文化機関、モンドリアン・ファンデーション(Mondriaan Foundation)と、美術、デザイン、建築を支援する助成機関、BKVBフォンズ(Fonds voor beeldende kunsten, vormgeving en bouwkunst)が2013年に合併して、モンドリアン・フォンズは設立された。モンドリアン・ファンデーションは、1994年に厚生省(Ministry of Welfare)によって設立された機関で、1995年からヴェネチア・ビエンナーレに関係する業務や、海外での展覧会や公演の支援に取り組んでいた。また、BKVBフォンズは、1988年に教育文化科学省によって設立された機関で、主に国内の芸術活動を支援していた。

これまでオランダ国内でBKVBフォンズから助成を受けているアーティストは、海外の展覧会に出品する場合や海外のアーティスト・イン・レジデンスに滞在を希望する場合にモンドリアン・ファンデーションに助成申請しなければならなかったため、一昨年より合併案が協議されていた。そして、政府が文化予算の削減を決定したため、合併することに合意した。合併時に、BKVBフォンズのデザインと建築の2分野は分離され、クリエイティブ・インダストリーを担当する機関として独立した。現在、モンドリアン・フォンズは美術と文化遺産を担当し、文学、映像、パフォーマンス、クリエイティブ・インダストリーを担当する機関が別にある。

(2) 目的

モンドリアン・フォンズはオランダ国内の才能あるアーティスト、芸術団体、アートプロジェクトや文化遺産に関する活動を支援し、また、海外で美術を紹介することで、芸術の卓越性を向上し、革新を促すことを目的としている。

2. プログラム内容と実績

モンドリアン・フォンズでは、オランダ在住のアーティスト、芸術団体、アートプロジェクトや文化遺産に関す

る活動を対象に22種類の助成の枠組みがある。その多くの助成は国内の活動を支援するものであるため、以下では、アーティスト・イン・レジデンスに関連すると思われる助成を中心に記述する。

(1) 国内外のスタジオ助成金(Bijdrage Gast- en Buitenlandateliers)

モンドリアン・フォンズは海外のアーティスト・イン・レジデンスやレジデンスプログラムを運営する文化機関とパートナー契約を結んでおり、アーティストがそれらの文化機関で滞在制作するために必要な資金を負担している。なお、国内のレジデンス・プログラムには助成をしていない。

① 海外のアトリエ(Ateliers Buitenland)

モンドリアン・フォンズは海外のアーティスト・イン・レジデンスやレジデンス・プログラムを運営する文化機関とパートナーシップを形成し、オランダ国内のアーティストを派遣している。現在、年間で約35人のアーティストを14の海外の文化機関に派遣し、その渡航費や滞在費を負担している。

提携先のアーティストへの対応は様々で、ニューヨークのISCPはアーティストの自主性を尊重して特別なプログラムを準備していないが、ブラジルのCapaceteはサンパウロ・ビエンナーレを視察するツアーを実施している。滞在期間も滞在場所の広さも違うため、そこで期待されることも様々である。「ここ10年でアーティストがスタジオで作品制作をするというかたちから、社会と関わりを持つかたちへと変わってきています」と、マイケ・ヨングマウ(Mayke JONGMA)は説明する。

パートナーシップは、モンドリアン・フォンズの独自のリサーチをもとに候補先の文化機関にコンタクトを取る場合と、海外の文化機関から提案を受ける場合がある。提携先の選考は、アーティストから良く聞き取りをして、現在の動向を反映している。また、カウンスル・アソシエイツからの提案や、教育文化科学省から特定の国や地域についてのリクエストがあることもある。

現在の海外の提携機関は以下のとおり。

- AIR Berlin Alexanderplatz (ドイツ、ベルリン)
- Arts Initiative Tokyo (日本、東京)

- Atelier Holsboer (フランス、パリ)
- Capacete (ブラジル、リオデジャネイロ/サンパウロ)
- Center for Curatorial Studies and Bard College (米国、ニューヨーク州アナンデール・オン・ハドソン)
- Instituto Buena Vista (オランダ領、キュラソー島)
- International Studio and Curatorial Program (米国、ニューヨーク)
- Meetfactory (チェコ共和国、プラハ)
- Projectstudio China (中国、北京)
- Projectstudio Berlin (ドイツ、ベルリン)
- Projectstudio Rome (イタリア、ローマ)
- Townhouse Gallery (エジプト、カイロ)
- Tembe Art Studio (スリナム共和国、ムーンホ)
- Wiels (ベルギー、ブリュッセル)

上記の提携機関以外に、1年契約で海外のアーティスト・イン・レジデンスやレジデンス・プログラムを運営する機関にアーティストを派遣する場合がある。この場合、ある地域に特定し、その地域の5ヶ所の文化機関と1年契約をする。そして、アーティストからのフィードバックの結果が良い文化機関と、継続的にパートナーシップを結ぶ場合もある。

② アーティストの募集・選考方法、応募アーティストの条件

毎年、3月中旬に公募で募集を開始し5月中旬に応募を締め切る。申請者は1回の応募につき最大2ヶ所の滞在先を選ぶことができる。年間約400人の応募があり、そのうちで、1年契約の提携機関への応募は約45人である。

審査は、一次審査と二次審査をモンドリアン・フォンズが行い、最終審査を海外の提携機関が行うという流れで進められている。一時審査ではアーティストの作品の質が重視され、二次審査では申請内容と志望理由が重視されるという。二次審査では、1ヶ所の提携機関あたり5人の候補者を選び、最終審査は海外の提携機関に委ねられる。ヨンズマ氏は、「モンドリアン・フォンズはアーティストの推薦をすることはできますが、どのアーティストが現地のプログラムに適しているのかを判断できるのは、そのプログラムの運営者だと考えています」と説明する。ブラジルのCapaceteはオランダに来て、

最終審査の面接を行っているという。

③ アーティストに対する支援内容

モンドリアン・フォンズはアーティストに往復の渡航費と月2,500ユーロ(約32万5,000円)の滞在費を支給し、提携機関にアーティストのスタジオや宿泊施設の使用料、現地でのコーディネート費用、展覧会やワークショップの制作費などを直接支払っている。アーティストが滞在先でスタジオにこもらずに、滞在先の国内を見て周り、その国のことを吸収できるように配慮し、潤沢な滞在費を支給している。また、カルチャーショックを受けるアーティストもたくさんいるため、事前に滞在先の情報を十分に説明している。

④ 事業評価の実施状況

アーティストは帰国後に滞在に関するレポートと18項目の質問で構成されるアンケートの提出を義務付けられている。アンケートでは、レジデンス、付帯設備、制作、展示、作品販売、アーティストやキュレーターとの出会いやネットワーキングなどの質問項目がある。また、提携機関にもアーティストの滞在に関するレポートの提出を依頼している。

これまでは、アーティストが帰国後に、成果報告を目的とする展覧会を開催していた。しかし、組織の合併後に展示スペースを手放したため、2012年度以降は開催の予定がなく、モンドリアン・フォンズのウェブサイトやアーティスト本人がウェブサイトで報告をするようにしている。

(2) オリエンテーション・トリップ

オリエンテーション・トリップは、オランダ在住のアーティストや美術関係者を対象に海外の主要な展覧会や文化機関を訪問するツアーで、年に1度指名制で実施されている。2011年度までは、アーティストを対象とする「スタディ・トリップ」と美術関係者を対象とする「オリエンテーション・トリップ」があったが、スタディ・トリップが廃止されたため、2012年度からアーティストも参加できるプログラムとなった。基本的にはオランダ在住のアーティストと美術関係者を対象としているが、海外からアーティストや美術関係者を招待する場合もある。

2012年度は、中国とインドネシアを2週間訪問するツ

アーが行われ、その成果として、2014年にオランダで中国をテーマとする展覧会が計画されている。また、インドネシアでは、オランダのアーティストの展覧会の計画があるという。

(3) ビジター・プログラム

ビジター・プログラムは、海外のキュレーターを中心に美術関係者をオランダに招へいするプログラムで、指名制で実施されている。主にビエンナーレやトリエンナーレ等の国際展のキュレーターとして活躍している人を招待し、オランダのアーティストが将来的に海外で活躍する機会をつくっている。アート情報サイトのe-flux.comなどで短期間に何度も名前があがるキュレーターから候補者を選ぶ。また、モンドリアン・フォonzの独自のリサーチ以外に、大使館やカルチャー・アソシエイトなどから招待の要請がある場合もある。通常5日間のプログラムが計画され、朝から晩まで担当者が車で美術館やギャラリー、アーティストのスタジオなどを案内する。なお、過去に東京都現代美術館のキュレーターの長谷川裕子氏が招待された。

(4) その他

モンドリアン・フォonzでは、①才能のあるアーティスト、②実習段階のアーティスト、③アーティストとキュレーターのプロジェクトへの投資、④複数年プログラムとコレクションの4つの助成の枠組みで支援をしている。

3. 運営体制と事業収支

(1) 運営組織

2012年に合併したモンドリアン・フォonzは、現在、35名のスタッフが働いているが、新しい組織の編成を行っている途中である。35名のスタッフの中で、常勤は3名で、それ以外は非常勤である。

- マネージメント部門：ディレクター、副ディレクター、役員秘書の3名
- プロジェクト・サポート(短期)と長期投資部門：プロジェクト・サポート・コーディネーター、長期投資コーディネーター、文化遺産マネジャー、プロジェクト・シニアオフィサー(2名)、プロジェクトオフィサー(7名)の12名

- コミュニケーションとイノベーション部門：コーディネーター、イノベーション・プロジェクト・シニアオフィサー、国際ビジター・プログラム・オフィサー、広報(2名)の5名
- ファイナンス部門：マネジャー、事務や受付スタッフの12名
- システム・マネージメント部門：3名
- 設備サービス部門：3名

(2) 事業収支

2012年度、教育文化科学省から2,400万ユーロ(約31億2,000万円)の補助金が支給された。これは前年比で約3分の2に削減されたことを意味する。この他に外務省から40万ユーロの補助金の支給を受けている。合併後の詳細な収支は発表されていないが、国内外のスタジオ助成金に割かれる予算は、最大で10パーセント程度だという。

4. 事業評価の実施状況

BKVKフォonzは1989年から2005年までのパートナー・レジデンス・プログラムの評価を行い、「The World is Getting Smaller」というレポートを発表している。そのレポートによると、「一人のアーティストに支払われた助成金からネットワークが広がった。滞在先の機関がその後他のオランダ人のアーティストを招いたなど、新しいネットワークから波及効果が生まれ、予算以上の成果を得ることができた」と助成の意義が示された。

モンドリアン・フォonzはアーティストや芸術団体を支援することでどのような成果が得られたかを国民に可視化する説明責任があるが、組織の合併後の新しい事業評価の方法については検討中であるという。

モンドリアン・フォonzは、海外に滞在する経験はアーティストのキャリアにとって貴重な機会であると考えており、「アーティストの海外での活動をホリデーだと思っている政治家もいますが、それは間違っていると思います。アーティストは滞在先で一生懸命仕事に取り組み、滞在したという事実以上の成果を得ることができます。そして、その姿が、滞在国に感銘を与えることができるということを、政府は良く理解しなくてはならないと思

います」と、ヨンズマ氏は説明する。モンドリアン・フォンズでは、オランダのアーティストが滞在している国を政治家が訪れる機会があるときには、レジデンスの情報を渡して、訪問するように働きかけているという。

5. 現在の課題と今後の方向性

政府の文化政策の転換により組織が合併され、また、予算が削減された。そのため、新しい体制と削減された予算でどのように運営していくかが目下の課題であるという。

また、政府の評価システムも変更され、全ての事柄に対して数値化をしなければいけなくなった。一般的には不可能と思われる事項についても、まずは試行する必要があり、それに時間がとられることで、他に大事なことがおろそかになることを懸念している。

アートの最新の動向として国際的なコラボレーションが注目されている。それをどのように促すべきなのかを課題としている。

参考資料

モンドリアン・フォンズでは、①才能のあるアーティスト、②実習段階のアーティスト、③アーティストとキュレーターのプロジェクトへの投資、④複数年プログラムとコレクションの4つの助成の枠組みで支援をしている。具体的な助成プログラムについては以下のように整理した。

モンドリアン・フォンズの助成プログラム一覧

助成の枠組み		
	助成プログラムの名称	プログラムの特徴
① 才能あるアーティスト (Talentontwikkeling Kunstenaars)		
	若手アーティストへの助成金 (Werkbijdragen Jong Talent)	<ul style="list-style-type: none"> ● 高等教育卒業後1年以上経っている若手アーティストを対象とする助成プログラムで、12ヶ月間で1万8,000ユーロ(約234万円)を支給。基本的には1年の助成で、過去に同プログラムで支援を受けた場合は申請できない ● 新作を制作することが条件で、展覧会の有無は問わない。ただし、ウェブサイトやブログでも良いので、一般に向けて成果を公表しなくてはならない ● 自己の研究や創作のためであれば、助成金の用途は問わない。助成金が必要なときに振込の依頼をすればよい
	若手アーティストとクライアントへの助成金 (Werkbijdragen Jong Talent+Opdrachtgever)	<ul style="list-style-type: none"> ● 若手アーティストとプロジェクトをする文化機関等対象とする助成プログラムで、12ヶ月間で1万8,000ユーロ(約234万円)を支給
	実績のあるアーティストへの助成金 (Werkbijdragen Bewezen Talent)	<ul style="list-style-type: none"> ● 最低でも8年間プロとして活動するアーティストを対象とする助成プログラムで、24ヶ月間で3万6,000ユーロ(約468万円)を支給。過去に同プログラムで支援を受けた場合は、前回の申請から4年経過していなければならない ● 自己の研究や創作のためであれば、助成金の用途は問わない。助成金が必要なときに振込依頼をすればよい

	実績のあるアーティストとクライアントへの助成金 (Werkbijdragen Bewezen Talent+Opdrachtgever)	<ul style="list-style-type: none"> 最低でも8年間プロとして活動するアーティストとプロジェクトをする文化機関等を対象とする助成プログラムで、24ヶ月間で3万6,000ユーロを支給。過去に同プログラムで支援を受けた場合は、前回の申請から4年経過していなければならない
② 実習段階のアーティストへの助成金 (Praktijkverdieping Kunstenaars)		
	自由申請 (Vrije Beurs Praktijkverdieping)	<ul style="list-style-type: none"> アーティストとキュレーターを対象とする助成プログラムで、助成金額は予算計画案を参考に決定される
	ポストアカデミー奨学金 (Beurs Praktijkverdieping Postacademische Instellingen)	<ul style="list-style-type: none"> オランダ国内のポストアカデミーに在籍するアーティストとファシリテーターを対象とする助成プログラム ライクスアカデミー (Rijksakademie van Beeldende Kunsten)、デ・アトリエ (De Atelier)、ヤン・ファン・アイク (Jan van Eyck) では、12ヶ月間で5万0,000ユーロ (約650万円) をアーティストに支給 サンデーモーニング@EKWC (sundaymorning@EKWC) では、3ヶ月間で2万ユーロ (約260万円) をアーティストに支給
	国内外のスタジオ助成金 (Bijdrage Gast- en Buitenlandateliers)	<ul style="list-style-type: none"> モンドリアン・フォonzが提携している海外のレジデンス滞在制作するための助成プログラムで、アーティストやキュレーターを対象に渡航費や滞在費を支給
③ アーティスト、キュレーターへのプロジェクト投資 (projectinvesteringen beeldend kunstenaars en/of bemiddelaars)		
	アーティストへのプロジェクト投資 (Projectinvestering Kunstenaar)	<ul style="list-style-type: none"> アーティストを対象にプロジェクトを支援する助成プログラムで、1ヶ月あたり最高1,600ユーロ (約20万円) を支給。最長12ヶ月まで申請可能
	キュレーターへのプロジェクト投資 (Projectinvestering Bemiddelaar)	<ul style="list-style-type: none"> キュレーターを対象にプロジェクトを支援する助成プログラムで、1ヶ月あたり最高1,600ユーロ (約20万円) を支給。最長12ヶ月まで申請可能 インディペンデント・キュレーターを対象とするため、文化機関に所属するキュレーターは申請できない
	インスティテュート、クライアントへのプロジェクト投資 (Projectinvesteringen instellingen en/of opdrachtgevers) ヴィジュアル・アート・インスティテュートへのプロジェクト投資 (Projectinvestering Beeldende kunstinstituten)	<ul style="list-style-type: none"> 美術を専門とする文化機関等を対象にプロジェクトを支援する助成プログラムで、予算計画案の最高40パーセントを助成金として支給
	美術館や文化遺産の機関へのプロジェクト投資 (Projectinvestering Musea en andere Erfgoedinstellingen)	<ul style="list-style-type: none"> 美術館や文化遺産の機関を対象にプロジェクトを支援する助成プログラムで、予算計画案の最高40パーセントを助成金として支給
	植民地メモリアル事業助成金 (Bijdrage Herinnering Slavernijverleden)	<ul style="list-style-type: none"> 植民地放棄150周年記念事業に関連するプロジェクトを支援する助成プログラムで、2013年度に実施されるプロジェ

	<p>クトのみが対象</p> <ul style="list-style-type: none"> また、普通予算外で計算された2万5,000ユーロ(約325万円)以上の予算計画案を対象とし、その予算案の最高50パーセントを助成金として支給
海外プレゼンテーション助成金 (Bijdrage Presentatie Buitenland)	<ul style="list-style-type: none"> アーティストの海外活動を支援する助成プログラムで、助成金額は予算案を参考に決定される オランダに在住するアーティストまたは海外の文化機関が申請可能 アーティストの旅費、滞在費、作品の輸送費のほか、新作を制作する場合は、その報酬も申請可能。なお、報酬は申請額の最高50パーセントを助成金として支給
アートフェア出展助成金 (Bijdrage Kunstbeurzen)	<ul style="list-style-type: none"> アートフェアへの出展を支援する助成プログラムで、最高3,500ユーロ(約45万円)を支給。出展アーティストの40パーセントはオランダ人か、オランダ在住のアーティストで構成することが条件で、50㎡までのスタンド料の最高40パーセントを支給
海外の文化遺産の機関との共同プロジェクト助成金 (Bijdrage Internationale Samenwerkingsprojecten Erfgoedinstellingen)	<ul style="list-style-type: none"> 海外の文化遺産の機関との共同プロジェクトを支援する助成プログラムで、助成金額は予算計画案を参考に決定される 元植民地でのリサーチ費用を申請することができる
作品制作依頼助成金 (Bijdrage Opdrachtgeverschap)	<ul style="list-style-type: none"> 公的機関や個人等のクライアントを対象にアーティストへの作品制作の依頼を支援する助成プログラムで、助成金額は予算計画案を参考に決定される
作品購入助成金 (Bijdrage Incidentele Aankopen)	<ul style="list-style-type: none"> 美術館や文化遺産の機関のコレクション購入を支援する助成プログラム 5万ユーロ(約650万円)以上の作品を購入する際、その金額の最高40パーセントを助成金として支給。ただし、文化遺産の機関の場合、100万ユーロ(約1億3,000万円)以上の作品は対象外
文化遺産保存活動助成金 (Bijdrage Wet Behoud Cultuurbezit)	<ul style="list-style-type: none"> 文化遺産を保存する個人、組織や団体を対象にその保存に必要な費用を支援する助成プログラムで、予算計画案の最高60パーセントを助成金として支給
コレクション移動助成金 (Bijdrage Collectiemobiliteit)	<ul style="list-style-type: none"> 美術館や文化遺産の機関の間でのコレクションの移動を支援する助成プログラムで、助成金額は予算計画案を参考に決定される 国内の機関内でのコレクションの交換や譲渡の際に必要な運送費を申請することができる
保全管理助成金(Bijdrage Veiligheidszorg)	<ul style="list-style-type: none"> 非政府機関でコレクション管理する団体への助成プログラム

④ 複数年プログラムとコレクション (meerjarige programma's en collecties)		
	複数年プレゼンテーションプログラム助成金 (Bijdrage Meerjarenprogramma's Presentatie-instellingen)	<ul style="list-style-type: none"> 複数年で2万5,000ユーロ(約325万円)以上の予算規模のプロジェクトを支援する助成プログラムで、予算計画案の最大40パーセントを助成金として支給。ただし、1つのプログラムに対して最大2年間を対象期間とする
	美術館や文化遺産の機関への複数年プログラム助成金 (Bijdrage Meerjarenprogramma's Musea en overige Erfgoedinstellingen)	<ul style="list-style-type: none"> 美術館や文化遺産の機関の企画する複数年で2万5,000ユーロ(約325万円)以上の予算規模のプロジェクトを支援する助成プログラムで、予算計画案の最大40パーセントを助成金として支給。ただし、1つのプログラムに対して最大2年間を対象期間とする
	コレクションプログラム (Bijdrage Collectieprogramma's)	<ul style="list-style-type: none"> 1945年以降に組織された美術館を対象にコレクションの購入を支援する助成プログラムで、助成金額は予算計画案を参考に決定される

2. アジアン・カルチュラル・カウンシル | Asian Cultural Council

面会日: 2013年1月23日 (火) 14:00-15:00

面会者: Sandra LIU (Program Officer)

URL: <http://www.asianculturalcouncil.org>

1. 運営機関の概要

(1) 設立趣旨・経緯

1963年、ジョン・D・ロックフェラー三世はACCの前身であるロックフェラー三世基金(JDR 3rd Fund)のアジアン・カルチュラル・プログラム(Asian Cultural Program)を設立、米国とアジア諸国間の文化交流促進を目的に、芸術・人文科学の領域で活躍する才能ある人物へ支援を始める。ロックフェラー三世は、異文化へ触れることの重要性を認識するとともに、急速に進む国際化によって伝統文化・芸術の存続性と真正性が脅かされる危険があると考えていた。そうした考えをもとに、伝統芸術を守る人々への支援から始まり、最終的には現代社会においてあらゆる形態の芸術活動に従事する人々のサポートをするようになっていった。

1980年、ロックフェラー三世の死後、その活動を引き継ぐためにアジアン・カルチュラル・カウンシル(Asian Cultural Council、以下、「ACC」)が創設される。これまで米国及び25ヶ国以上のアジア諸国出身のアーティストや研究者、専門家などを支援し、その数は6,000名以上になる。芸術は人々・国家間の相互理解と恒久平和を築くために重要な働きを持ち、個人間の文化交流はそのための強力な有効手段であると信じて、活動を続けている。

(2) ミッション

ACCは、アジア及び米国の才能あるアーティストや研究者を支援することを通して、文化交流を促進し、変化し続ける現実世界へ適応しながら、国際対話・理解・尊重へ貢献することをミッションとしている。前身のアジアン・カルチュラル・プログラムの創設から50年経った現在もロックフェラー三世の意志を受け継ぎ、当初のミッションに忠実に活動し続けていることが、ACCの特徴の一つである。

2. プログラム内容と実績

(1) 助成プログラム

ACCでは芸術・人文科学の領域で活動し、文化交流に興味を持つ優れた個人・機関へ助成金を給付し、米

国及びアジアでのリサーチや芸術活動を支援している。助成受給者・団体数は毎年およそ計50-100件、若手から著名な人物まで含む。伝統芸能及び現代芸術の両方が助成対象となる。対象分野は幅広く、考古学、建築(設計、理論、建築史を含む)、美術史、アーツアドミニストレーション、芸術批評、振付、作曲、コンセプチュアル・アート、修復、工芸、ダンス、デザイン(非商業的なもののみ)、映画、インスタレーション・アート、文学(日本からのみ)、博物館学、音楽、ニューメディア、絵画、写真、版画、彫刻、演劇、ビデオ・アート、ビデオ保存など様々である。

ACCの助成プログラムには助成申請者・団体のニーズや目的に合わせて柔軟に対応するため、既成のプログラム内容は設けられてなく、金額も設定されていない。

なお、アジアの領域は、西はアフガニスタンから東は日本まで、ロシアより南の地域としている。

① 個人助成(個人フェローシップ)

アジア人が米国・他のアジア諸国へ、もしくは米国人がアジア諸国へ訪れ、現地で非商業的創作・芸術活動やリサーチ、研究、特別トレーニングなどに取り組むのに必要な支援を提供している。助成するプロジェクトの内容は、自国では学ぶこと・取り組むことができないことに限る。アーティスト・イン・レジデンスへの参加も助成対象となっている。個人への助成金額の上限は特に決まっていなく、滞在期間や活動内容によって助成金額は異なってくる。助成期間は一ヶ月から一年まで。

ACCは助成金給付に加え、各助成受給者(以下、「受給者」)のニーズや経歴に合わせてプログラムを組み、現地滞在期間中に様々な形でサポートを行っている。例として、現地で行う活動の提案や、同時期に滞在している受給者、及び過去の受給者と会う機会の設定、受入機関の手配などを行っている。特に、専門分野にかかわらず受給者同士の交流を強く推奨しており、フェローシップ終了後にも共同で活動をするなどのネットワークへ発展していくことを期待している。

ACCは思考・探求・発展のための時間と場所を提供することに重点を置いている。そのため、受給者は必ず

しも滞在期間中に作品を制作・完成させるなど、具体的な成果を残すことは求められていない。むしろACCが目標としているのは、フェローシップを通してその後の活動に大きな影響を与えるような経験を得てもらうことだ。また、フェローシップ終了後に母国へ戻り、フェローシップ期間中に得た知識や経験を共有するなどして、受給者がその分野に影響を与えることも期待している。

② 団体助成

ACCでは、芸術団体や教育機関が行うプロジェクトへも助成金を給付している。ただし、ACCでは個人への助成に重点を置いているため、団体への助成は限定的であり、そのプロジェクト内での個々人の活動のサポートを目的として助成することが多い。通常、団体への助成金額は1万ドル(約100万円)以下となっている。

また政府から非営利団体認定されている団体のみが申請可能である。非営利団体認定されていない場合、フィスカル・スポンサーシップが必要となる。

(2) アーティストの募集・選考方法、応募アーティストの条件

2012年度の申請期間は9月1日から11月16日まで。申請者は申請書、履歴書、過去の作品サンプル、過去の活動と企画案の持つ潜在的影響を評価した推薦書2通を提出する(作品サンプルと推薦書は任意提出)。また、アーティスト・イン・レジデンス参加を目的に助成申請する場合、申請時に参加希望のアーティスト・イン・レジデンスを3ヶ所まで候補として選ぶ必要がある。2012年度の申請件数は約600件であった。

選考は、まずプログラムの担当者がそれぞれ専門領域の申請書類を読み、他の職員・支部と意見交換を重ねながら、面接を行い、候補を絞っていく。

面接の結果を受け、ACCの支部のある東京、香港、台北、マニラで諮問委員会を開催し、候補者リストを作成する。美術の場合、諮問委員はアーティスト、キュレーター、アーツアドミニストレーター、アーティスト・イン・レジデンス事業運営者などで構成され、異なる嗜好を持つ人を集めるようにしているという。諮問委員の人数は定まっておらず、年によって変わる。

各国の諮問委員会での審査の結果を受けて、再び

ACC職員同士で話し合い、ACCの本部のあるニューヨークでの諮問委員会で助成受賞者・団体の最終候補者リストを作成する。諮問委員会での結果はあくまでも参考意見とし、ACCの理事会にて助成受給者を決定する。

選考での評価基準は

- 芸術的及び専門的な卓越性:申請者に高度な芸術的卓越性がみられるかどうか
 - 将来的な創造力:申請者に将来的に成長がみられるかどうか
 - 当該プログラムが申請者本人に与える影響:申請者のキャリア形成にとって、今回の機会がどのような影響を与えるか
 - 申請者本人が母国で持つ、現在及び今後の影響力
 - 分野への影響:今回の機会によって、申請者は母国で大きな影響力を持つことが可能になるか。アジア地域の団体が相応の力をつけることに繋がり、また、アジアの芸術文化の国際的理解を広めることができるか
 - 申請の適時性と緊急性:申請者本人にとって、奨学金は時宜を得たものか
 - 必然性:申請者は、本当にこのような機会を必要としているか
 - 交換相手国への貢献:申請者は海外の専門家に貢献できるものを持っているか
 - 申請者について:人柄・性格など、米国やアジア諸国で一人になっても大丈夫か
 - これまでに、米国またはそれ以外での海外滞在経験の機会があるか
 - 英語力:相応の英語力やコミュニケーション能力があるか
 - 現在もしくは今後において専門的な交流が実践されるか
 - 唯一性:これまでにない新しい試みであるか
 - プログラムサポートの適合性:ACCがプログラムサポートを行なうにあたってどれだけの難易度があるか。サポートは可能か
 - 他の団体からの支援を得ることができるか
- そして、選考において最も重要な過程は面接であると

言う。実際に候補者と直接会い、やり取りすることによって、候補者自身や申請企画案についての理解を深められると同時に、各候補者がどのような期待・希望を抱いているのかをより明確に知ることができるという。また、各受給者に合わせてプログラムを作成するため、この面接で得た情報は選考だけではなく、助成決定後のプログラム作成にも役立ってくる。アーティスト・イン・レジデンス参加を希望するアーティストの場合、そのアーティストの希望と必要としていることを直接確認することで、各アーティストに最も適したアーティスト・イン・レジデンスを選ぶことができる。「各受給者のフェローシップ経験を最高のものにするためには、まず受給者の期待を知ることが重要だ」とプログラム・オフィサーのサンドラ・リウ(Sandra LIU)は話す。

また、アーティストの多くは申請書類を書くのに慣れていないため、書類や文章を読んで簡単に判断するのではなく、実際に作品サンプルを見て、そのアーティストの活動について理解することも心がけている。逆に、どんなに申請書が良く書けて、聞こえがいい内容であったとしても、実際に作品の質が悪くては意味がない。芸術作品・活動の質を選考する上で最も重要な要素としている。

(3) プログラムの実績・過去の滞在者

約50年間、ACCは6,000名以上のアーティストの支援を行ってきた。助成件数はその年の予算額によって異なるが、毎年50-100の個人・団体へ助成金を給付している。

2011年度は米国と14のアジア諸国の113の個人・団体へ助成金を給付した。日本からは5名のアーティストと2つの団体(うち一つは演劇グループのフィスカル・スポンサーシップ団体)が受賞している。

過去の主な助成者には次のような人物が含まれる¹：一柳慧(音楽・1967、68)、高階秀爾(博物館学・1967)、武満徹(音楽・1968)、横尾忠則(美術・1968)、篠原有司男(美術・1969)、朝倉摂(演劇・1970、94)、寺山修司(演劇・1970)、松本俊夫(映画・1974)、瀧口修造(美術

史・1974)、唐十郎(演劇・1982)、田中泯(ダンス・1983、96*、2000*、04、07*)、川俣正(美術・1984、2008*)、隈研吾(建築・1985)、四方田犬彦(一般教養・1986)、中島夏(ダンス・1987)、宮島達男(美術・1989)、長谷川祐子(学芸学・1991、2001、05、06*、12)、内藤礼(1992)、小池博史(演劇・1994)、村上隆(美術・1994、2005*)、山崎広太(ダンス・1997、99*、2009*)、会田誠(美術・1999)、室伏鴻(ダンス・2003)、田中功起(美術・2003)、名和晃平(美術・2004)

3. 運営体制と事業収支

(1) 運営組織

ニューヨークに本部を置き、東京、香港、台北、マニラに支部を持つ。各支部はそれぞれ国内からの助成申請の受付・処理を行い、それ以外の国・地域からの申請は全てニューヨーク本部が窓口となる。

ニューヨーク本部には13名の常勤スタッフが勤めている。各支部の常勤スタッフ数は、東京支部2名、香港支部4名、台北支部3名、マニラ支部1名である。

ニューヨーク本部は主に、事務局長、事業運営部門、資金調達部門、会計部門に大きく分けられる。事業運営部門は4名のプログラム・オフィサーで構成されている。

(2) パートナーシップ

正式なパートナーシップを結んでいる団体はないが、各助成者・企画に応じて他の団体と協力してプログラム運営している。アーティスト・イン・レジデンス参加希望のACC受給者・アーティストを随時受け入れているインターナショナル・スタジオ&キュラトリアル・プログラム(International Studio & Curatorial Program、ISCP、p.185-194参照)やローワーマンハッタン・カルチュラル・カウンシル(Lower Manhattan Cultural Council)など是一種のパートナー団体と呼べるだろう。

(3) 事業収支

ACCは、助成金提供団体であると同時に、米国及びアジア諸国の企業・財団・個人から援助・寄付を受けている団体である。

¹ 個人としてではなく、参加プロジェクトが助成受賞した年には「*」が付いている。

① 収入

2011年度の収入総額は700万9,637ドル(約7億円)。内訳は以下のとおり。

ACC未来基金	\$2,000,000	(29%)
個人	\$1,172,293	(17%)
財団	\$655,335	(9%)
企業	\$96,000	(1%)
その他(寄付基金の利子・配当)	\$3,086,009	(44%)
合計	\$7,009,637	(100%)

収入の29%を占めるACC未来基金(ACC for the Future Fund)とは、将来に向けての財源分散を目的に設立されたもので、主にACCの運営能力を向上させるために使用されている。過去50年間、ACCは主財源としてロックフェラー家からの支援に頼ってきた。しかし、今後もロックフェラー家からの援助を受け続ける一方で、新たに独自の財源を確保することが将来的に不可欠と考え、この未来基金を2010年に設立されることになった。なお、2011年までにACC未来基金は250万ドル(2億5,000万円)を集めている。

② 支出

2011年度の総支出は590万3,308ドル(約5億9,000万円)であった。内訳は以下のとおり。

プログラム費	\$4,468,666	(76%)
能力強化・開発費	\$818,794	(14%)
運営管理費	\$615,848	(10%)
合計	\$5,903,308	(100%)

2011年度の個人への助成金総額は105万7,560ドル(約1億600万円)、団体への助成金総額は63万9,580ドル(約6,400万円)であった。

4. 事業評価の実施状況

助成期間終了時に各助成者・団体は最終報告書をACCに提出することが求められている。それに加え、Eメールなどの日々のやり取りからプログラムに対してのフィードバックを得るようにしている。だが、あくまでも各受給者自身が「成功したフェローシップであった」と思えるか

どうか重要であり、事業の成功度は各助成者・団体の満足度で判断している。そのため、形式化、数値化した事業評価を行うことはできないと考えている。

助成終了後のフォローアップは職員それぞれのアプローチによって行われるため、その方法は様々ようだ。過去の助成者とはEメールなどで必要な時にいつでも連絡を取れるような状態だという。

5. 現在の課題、今後の方向性

他の団体・機関と同様、ACCが常に抱える課題は資金調達である。助成件数はその年の予算額に左右されるため、予算額が大きいほど、より多くの個人・団体の活動を支援することが可能となる。

6. 日本のアーティスト・イン・レジデンスを促進するための方策

リウ氏によると、アジアでのアーティスト・イン・レジデンスと米国でのアーティスト・イン・レジデンスにはそれぞれ異なった傾向があるという。アジアでのアーティスト・イン・レジデンス事業の多くは、プログラム参加期間中に滞在アーティストが作品を制作・発表することを期待している。それゆえ、アジア出身のアーティストらはそのつもりで米国のアーティスト・イン・レジデントに参加する傾向が強いという。

一方、米国でのアーティスト・イン・レジデンス事業では、アーティストが作業するための時間と空間を提供すると共に、他のアーティストなどの「人と会う機会」を与えることを趣旨としているところが多いという。必ずしも作品発表の機会やキャリアアップを目的にキュレーターに会うことだけを意味するのではなく、むしろ同じような領域で活躍する人々と知り合い、刺激し合うような出会いであることが多い。それゆえ、米国のアーティスト・イン・レジデンスには「シンクタンク」のような性格があるという。また、米国のアーティスト・イン・レジデンスは有能なアーティストを招へいすることが重要であり、アーティストが参加費を負担することはないので、一種のフェローシップともいえる。

日本でのアーティスト・イン・レジデンスの場合、海外

のアーティストが日本への滞在を希望する理由はまさに多種多様である。そのため、各アーティストの期待や希望を踏まえつつ、招へいアーティストに何を提供できるのかがポイントとなってくるだろう。

さらにリウ氏が強調したのは、芸術作品の質が最も大切であるということだ。ACCも一種の芸術団体であり、芸術団体にとって最も重要なことは、やはり芸術の質である。「金融機関が金融のことを忘れることがないように、芸術団体である限り、芸術の質のことを忘れてはならない」と言う。

3. ケベック・アーツカウンシル |

Conseil des arts et des lettres du Québec

面会日：2013年1月24日（木）14:00－15:30

面会者：Marie-Pierre DOLBEC (Chargée de Développement et D'affaires Régionales et Internationales)

Céline GOLDBERGER (Technicienne à L'action Territoriale)

URL: <http://www.calq.gouv.qc.ca/>

1. 運営機関の概要

カナダ東部に位置するケベック州は、フランス語のみを公用語と定めている同国唯一の州である。人口は約790万人で、州都のケベック・シティとモントリオールに集中する。州最大の都市はモントリオールで、フランス語圏の中ではパリに次ぐ規模である。

カナダでは「国」、「州」、「市」の3つのレベルの公的機関が文化芸術の支援をしている。ケベック州では、州政府が1961年に現在の文化・コミュニケーション省の前身である文化省を設立した。近年では州政府の約1.1%の予算をアーティスト、芸術団体、文化施設、文化産業への補助金に割り当て、フランス語圏としての独自の文化芸術やエンターテインメントの振興と普及に積極的に取り組む。国際的に活躍するアーティストや芸術団体も数多く、サーカスをベースにしたエンターテインメント集団「シルク・ドゥ・ソレイユ」の世界的な成功は日本でも広く知られている。

(1) 設立趣旨・経緯

ケベック州政府は1992年に「ケベックの文化政策、私たちの文化、私たちの将来」という文化政策に関する文書を発表した。同年、州のアーティスト、芸術団体や文化施設の活動を支援する専門的な助成機関として、ケベック・アーツカウンシル (Conseil des arts et des lettres du Québec、以下、「CALQ」) の設立を計画した。そして、CALQは2年間の準備期間を経て、1994年から州の文化芸術活動の支援を開始する。

1992年に発表された「ケベックの文化政策、私たちの文化、私たちの将来」にある方針を基本とし、州政府は「文化アイデンティティの確立」、「創作者と芸術の支援」、「州民の文化生活へのアクセスと参加」を軸に文化政策を推進している。また、州政府は外交手段の一つとして文化芸術を海外に発信していくことに意欲的で、CALQは海外に進出を願うアーティストや芸術団体を支援する役割を担う。

なお、ケベック州政府は商業的な文化産業を支援する文化産業促進公社 (Société de développement des entreprises culturelles) を1995年に設立し、非営利のア

ーティストや芸術団体を対象とするCALQの役割と、商業的な文化産業を対象とする文化産業促進公社との役割を明確に区別した。

(2) ミッション

CALQは美術、工芸、建築研究、映画、デジタル・アート、音楽、演劇、ダンス、サーカス、文学、領域横断的な芸術を対象分野に、創造的活動、実験的活動、展覧会や公演を含む文化芸術の普及活動を支援すること、また、アーティストや芸術団体、芸術作品の影響力をケベック、カナダ、世界に拡大していくことをミッションとしている。

2. プログラム内容と実績

CALQは「芸術家・文筆家への助成」、「芸術団体や文化施設への助成」、「地域内の芸術の振興と普及への助成」、「メセナとのマッチング助成」の4つの枠組みで助成プログラムを運営する。

「芸術家・文筆家への助成」では、芸術家と文筆家のキャリアや実績に応じた以下の3つの主要プログラムがあり、それぞれの支援内容は異なっている。

- 5年以下のキャリアの若手の芸術家と文筆家への助成プログラム (Up-and-coming artists and writers grants)
- 2年以上のキャリアのある芸術家と実績のある文筆家への助成プログラム (Mid-career and Development grants)
- 20年以上のキャリアのある芸術家と文筆家への助成プログラム (Career grants)

上記の3つの主要プログラムを補足する形で、国際的な活動を支援するスタジオとスタジオ兼住居 (Studio and studio-apartments: 以下、「スタジオ・アトリエ住居プログラム」) とトラベル・グラント (Travel Grant) が位置付けられている。

その他、「芸術団体や文化施設への助成」の枠組みの中にも海外への巡回展や巡回公演を支援するグラントがあるが、以下では、「芸術家・文筆家への助成」を中心に整理した。

(1) スタジオ・アトリエ住居プログラム

スタジオ・アトリエ住居プログラムはケベック州が運営する海外のスタジオや、海外のアーティスト・イン・レジデンス、芸術団体や文化施設にアーティストを派遣するプログラムで、以下の3つを目的としている。

- 最適な創作環境を提供することで、アーティストの意欲を高めること
- 刺激的で新たな文化環境を提供することで、アーティストの長期休暇や研究(sabbatical)を支援すること
- 芸術的な世界観や共有し、ケベック州と海外のアーティストの持続的な関係を構築すること

① ケベック・スタジオへの派遣プログラム

10年以上のキャリアのあるアーティストを対象に6ヶ月の滞在機会と、主に渡航費、旅行経費(ビザ申請料や旅行保険料など)、生活費や制作費として約2万カナダドル(約200万円)の助成金を提供するプログラム。ニューヨーク、ロンドン、ローマ、東京の世界4都市にケベック州政府の所有するスタジオと、パリとベルリンにCALQがアーティスト・イン・レジデンスと契約したスタジオがある。

現在、ベルリンではキュンストラ・ハウス・ベターニエン、パリではシテ・アンテルナショナル・デ・ザールと契約をしている。なお、キュンストラ・ハウス・ベターニエンの派遣期間は1年である。

図表 ケベック州の所有するスタジオ一覧

所在地	開始年	滞在者累計数
フランス／パリ	1965年	73名
米国／ニューヨーク	1981年	59名
イタリア／ローマ	2000年	24名
ドイツ／ベルリン	2004年	9名
英国／ロンドン	2008年	7名
日本／東京	2008年	7名

CALQ資料より抜粋

② 海外のアーティスト・イン・レジデンスへの派遣プログラム

2年以上のキャリアのあるアーティストを対象に約2～4ヶ月の滞在機会と、主に渡航費、旅行経費(ビザ申請料や旅行保険料など)、生活費、制作費として約3,000～5,000カナダドル(約30万～50万円)の助成金を

提供するプログラム。なお、インターナショナル・スタジオ&キュラトリアル・プログラム(International Studio & Curatorial Program, ISCP, p.185-194参照)のレジデンスでは、5年以上のキャリアのあるキュレーターを対象とした3ヶ月の滞在機会と、約1万1,500カナダドル(約115万円)の助成金を提供している。ISCPには宿泊施設がないため、上記の助成金で宿泊施設の費用を負担する必要がある。

近年、CALQはアーティストの国際的なキャリアの育成の一環としてこのプログラムを重視しており、カナダの代表的なレジデンスや海外の代表的なレジデンスと提携し、アーティストを派遣している。海外のレジデンスとの契約期間は2年もしくは3年単位で、定期的に契約先の評価をしている。マリー＝ピエール・ドルベク(Marie-Pierre DOLBEC)は、「私たちは滞在したアーティストからのフィードバックをもとに、アーティストにとって意義のあるレジデンスかどうかを定期的に見直しするようにしています。そして、新しいパートナーを常に探しており、そのリサーチをしています」と説明する。

図表 CALQの提携するアーティスト・イン・レジデンス一覧

受入機関名称 (所在地)	開始年	対象分野
バンフセンター (カナダ／カルガリー)	2005年	美術、演劇、文学
ブリティッシュ・スクール(イタリア／ローマ)	2008年	建築
タンツ・ウェルクスタット・ベルリン (ドイツ／ベルリン)	2008年	ダンス
インターナショナル・スタジオ&キュラトリアル・プログラム (米国／ニューヨーク)	2011年	美術、メディアアート
スペース118 (インド／ムンバイ)	2012年	美術、メディアアート

CALQ資料より抜粋

③ 海外の文化機関への派遣プログラム

海外の文化機関とパートナーシップを形成して双方向のアーティスト交換プログラムを推進しているCALQは、プログラムの一環として海外の文化機関のスタジオや文化機関が提携する芸術団体や文化施設にアーティストを派遣している。

2年以上のキャリアのあるアーティストを対象に約2－6ヶ月の滞在機会と、主に渡航費、旅行経費（ビザ申請料や旅行保険料など）、生活費、制作費として約5,000－1万5,000カナダドル（約50万－150万円）の助成金を提供するプログラムである。

このプログラムでは、以下のような経費の相互負担の考え方がCARQと海外の文化機関との間に共有されている。すなわち、CALQがアーティストを派遣する場合は、CALQの財源でアーティストの渡航費、生活費や制作費を負担し、海外の文化機関がアパートやスタ

ジオを提供する。一方、海外からアーティストを受け入れる場合は、CALQがアパートやスタジオを提供し、海外の文化機関の財源でアーティストの渡航費、生活費や制作費を負担するという、互いの資源を有効活用した効率的な仕組みとなっている。また、CALQが助成する団体が受入機関としてスタジオを提供してアーティストの滞在中の活動のサポートを行う場合もある。その際に助成団体が必要とする活動経費は、CALQからの運営助成金に加味されているという。

図表 CALQとアーティスト交換プログラムを行うパートナーの文化機関の一覧

国名	文化機関名称／受入機関名称 (受入機関が別にある場合)	開始年	対象分野	滞在者 累計数
スイス	クリストフ・メリアン財団	1986年	美術、メディアアート、建築、工芸	49名
フィンランド	フィンランド財団	1998年	美術、メディアアート、建築、工芸	14名
メキシコ	国立文化芸術基金 (FONCA)／国立芸術センター(CENART)、メキシコ電子音楽センター(CMMAS)	1999年	美術、メディアアート、領域横断的な芸術、文学、音楽、演劇	3名
アルゼンチン	文化省	2002年	美術、メディアアート、建築、工芸、文学	17名
ベルギー	フランス語共同体委員会文化局／パッツ・ポルタ文学国際センター	2004年	文学	8名
スコットランド	グラスゴー現代アートセンター	2005年	美術、メディアアート、領域横断的な芸術、音楽	7名
カナダ・ニューブランズウィック州	ニューブランズウィック州アーツカウンシル	2007年	全分野	17名
カナダ・オンタリオ州	オンタリオ州アーツカウンシル	2007年	全分野	20名
ウェールズ	ウェールズ・アート・インターナショナル／アベリストウィス・アーツ・センター	2008年	美術、メディアアート	4名
カナダ・ヌナビク準州	ヌナビク地方政府	2009年	全分野	6名
コロンビア	文化省／コロンビア国立大学、レッド・デ・レジデンシラス	2010年	美術、メディアアート、音楽、工芸、演劇	3名
フランス	文化・コミュニケーション省／レコレ・国際受入・交流センター	2011年	美術、メディアアート、領域横断的な芸術	2名
ポルトガル	ポルトガルアイデア芸術院(CPAI)	2011年	文学	1名
カナダ・マニトバ州	マニトバ州アーツカウンシル	2011年	全分野	1名
ニューヨーク	ニューヨーク州アーツカウンシル	2012年	美術、メディアアート、領域横断的な芸術、建築、音楽、ダンス、演劇	0名

CALQ資料より抜粋

④ その他のプログラム

上記の海外のアーティスト・イン・レジデンス以外に滞在を希望する場合、アーティストがアーティスト・イン・レジデンスに直接コンタクトを取って滞在許可を取得し、CALQがその滞在に助成をすることもある。この場合、レジデンスに最大3ヶ月間滞在することができ、アーティストは渡航費と毎月3,000カナダドル(約30万円)の助成金を受けることができる。

(2) アーティストの募集・選考方法、応募アーティストの条件

CALQの2013年度のスタジオ・アトリエ住居プログラムの申請提出日は2013年4月1日で、申請者は申請書、プロジェクトの企画書とスケジュール、履歴書、過去の作品のポートフォリオを5部提出する必要がある。申請時に滞在を希望するスタジオもしくはアーティスト・イン・レジデンスを一つだけ選び、その理由を書かなければならない。

スタジオ・アトリエ住居プログラムの応募資格はケベック州在住のアーティストで、ケベック州から2年以上離れているアーティストは対象にならない。また、申請者はその他の助成プログラムと併願可能だが、グループでの申請は認められていない。

ケベック州のスタジオへの派遣プログラムの選考では、各芸術分野に精通した3-5名のアーティストで構成される審査委員会が書類審査をして最終決定する。通常、申請提出日から3ヶ月以内にその結果が申請者に通知される。一方、海外のアーティスト・イン・レジデンスや文化機関への派遣プログラムでは、各芸術分野に精通した3-5名のアーティストで構成される審査委員会が一次審査をし、候補者リストをつくる。そして、パートナーのレジデンスや文化機関にその候補者リストを送付し、パートナーのレジデンスや文化機関が最終決定をする。そのため、申請提出日から最終結果が通知されるまでに最大8ヶ月間必要とされる。

選考基準は、以下の3点である。

- 芸術作品の質
- プロジェクトの意義や妥当性
- プロジェクトの実現可能性

(3) プログラムの実績・過去の滞在者

CALQは1994年の創立から2011年度までに、ケベック州の所有するスタジオにアーティストを派遣するプログラムでは179名、海外のアーティスト・イン・レジデンスへの派遣プログラムでは34名、海外の芸術団体や文化施設にアーティストを派遣するプログラムでは153名を派遣した実績がある。

(4) その他のプログラム

① トラベル・グラント

トラベル・グラントは海外の国や地域及びカナダ国内の州(ケベック州以外)の文化機関、芸術団体や文化施設から招待を受けたケベック州在住のアーティストと芸術団体を支援するプログラムで、国際会議やシンポジウムへの参加、短期のレジデンスへの参加、展覧会での発表及びオープニングへの参加、ダンスやサーカスの公演の出演及びオーディションへの参加などを対象とする。補助対象となる芸術分野の指定はないが、応募条件として「5年以下のキャリアの若手の芸術家と文筆家」(トラベル・グラントでは2年以上で5年以下のキャリアを条件とする)もしくは「2年以上のキャリアのある芸術家と文筆家」の助成の枠組みに属するアーティストである必要がある。

支援内容は、渡航費、旅行経費(ビザ申請料や旅行保険料など)、一日あたり200カナダドル(約2万円)を上限とする宿泊費及び食費が補助対象経費として認められる(カナダ国内への渡航の場合、宿泊費と食費の一日あたりの上限金額は125カナダドル(約1万2,500円))。また、以下のように渡航先の国や地域でこれらの経費の合計の上限金額が異なっている。

- ケベック州以外のカナダ州: 上限1,000カナダドル(約10万円)
- 米国、欧州、メキシコ: 上限2,000カナダドル(約20万円)
- 中南米、アフリカ、アジア、オセアニア: 上限2,500カナダドル(約25万円)

申請はいつでも可能だが、1年間に補助を受けられる回数は2回までと決められている。申請結果は申請日から8週間以内に通知される。

② ヨーロピアン・ペピニエール・プログラム

ヨーロピアン・ペピニエール・プログラムは18歳以上35歳以下の若手アーティストを対象に欧州及びカナダ(ケベック州)の間のモビリティを向上することを目的としたプログラムで、3年毎に公募される(PRIM、p.205-209参照)。欧州及びカナダ(ケベック州)に在住するアーティストが応募することができ、欧州及びカナダ(ケベック州)の文化施設やレジデンスに滞在することができる。

CALQはプログラムの窓口として主にアーティスト、文化施設やレジデンスとのコーディネートを行い、1999年から2012年までに25名のケベック州のアーティストを欧州に派遣し、欧州から21名のアーティストを受け入れた実績がある。

③ ユネスコ・アッシェバーク奨学金

ユネスコ・アッシェバーク奨学金はスウェーデンのフィランソロピスト、Mr and Mrs ASCHEBERGの寄付によりスタートしたユネスコのプログラム。対象芸術分野は美術、音楽と文学で、国籍を問わず、25歳から35歳までの若いアーティストのモビリティ(移動)の活性化を目的とする。世界各地にあるユネスコ・アッシェバーク奨学金提携レジデンスとともに運営されており、CALQは、プログラムのケベック州の窓口として主にアーティストの公募の受付、受入アーティストと文化施設やレジデンスとのコーディネートを行う。

3. 運営体制と事業収支

(1) 運営組織

CALQは州都のケベック・シティに本部を置き、モンリオールに支部を持つ。また、ケベック州の各17の地方行政区に地域の芸術振興への助成の窓口として協力団体と提携する。

組織は事務局長(Director General)をトップに、音楽・ダンス部門、演劇・領域横断芸術・サーカス部門、美術・デジタルアーツ・工芸・文学部門、コミュニケーション部門、戦略部門、事業運営部門の6つの部門で構成され、約70名のスタッフが働く。なお、スタジオ・アトリエ住居プログラムは事務局長下のプログラムとして位置付けられ、2名のスタッフが担当する。

(2) パートナースhip

CALQは各助成プログラムに応じて多様なパートナーシップを形成している。スタジオ・アトリエ住居プログラムではケベック州のアーティストのスタジオスペースを確保するために、海外のアーティスト・イン・レジデンスや文化機関とパートナーシップを形成している。また、これ以外には、ヨーロピアン・ペピニエールやユネスコなど、国際機関の運営するモビリティプログラムと提携し、ケベック州のアーティストの派遣や海外のアーティストの受け入れを行う。なお、海外からアーティストを受け入れる場合、CALQは仲介者としてケベック州の助成先の芸術団体や文化施設と協力して対応している。

また、CALQはレズ・アルティスに加盟しており、レジデンスに関しての情報交換や新しいパートナー探しの場として活用している。

(3) 事業収支

① 収入

CALQの収入は、主にケベック州政府からの補助金である。2011年度の総収入は、約9,278万カナダドル(約93億円)で、内訳は以下のとおりである。

財源	金額(カナダドル)
ケベック州政府 (上記内訳:事業費)	88,799,495 (82,390,319)
(上記内訳:運営費)	(6,409,176)
利息	38,260,481
前年度までの給費や助成金の払い戻し	3,522,915
合計	92,783,396

また、2011年度の総支出は、約9,303万カナダドル(約93億円)で、内訳は以下のとおりである。なお、スタジオ助成の総額は約51万カナダドル(約5億円)であった。

財源	金額(カナダドル)
事業費運営費 (内訳:芸術家と文筆家への助成)	85,958,264 (10,327,446)
(内訳:芸術団体や文化施設への助成)	(67,438,731)
(内訳:マッチンググラント)	(7,620,185)
(内訳:委員会と審査委員会)	(571,902)
運営費	7,074,169
合計	93,032,433

4. 事業評価の実施状況

CALQのスタジオ・アトリエ住居プログラムでは、アーティストに滞在に関するレポートの提出を義務付けている。そのレポートから、それぞれの滞在先でどのような成果を得ることができたのか、滞在先に不満や障害はあるのかなどの情報を収集しており、提携先のレジデンスや文化機関との契約の見直しに活用しているという。

5. 現在の課題、今後の方向性

スタジオ・アトリエ住居プログラムに関しては、いかに効率的に実施するかということを課題としており、特に、海外のアーティスト・イン・レジデンスや文化機関とパートナーシップの評価や新規開拓に力を入れたいと考え

ている。

世界6都市にあるケベック・スタジオは、ケベック州政府の外交的な意向が反映されて設置されているため、CALQの意向は必ずしも反映されてはいないという。一方で、CALQ自らが提携する海外のアーティスト・イン・レジデンスへの派遣プログラムや海外の文化機関への派遣プログラムには、直接的に意向を反映することが可能であるため、ケベック州のアーティストからの要望を取り入れるようにしている。

なお、東京にあるケベック・スタジオは、ケベック州のアーティストにとっても人気があり、今後、日本のアーティスト・イン・レジデンスや文化機関とのパートナーシップの形成も視野にいたいという希望がある。

参考資料

ケベック・アーツカウンシルでは、美術、工芸、建築研究、映画、デジタル・アート、音楽、演劇、ダンス、サーカス、文学、領域横断的アートを対象分野に①芸術家・文筆家への助成、②芸術団体や文化施設への助成、③地域内の芸術の振興と普及への助成、④メセナとのマッチング助成の4つの助成の枠組みで支援をしている。具体的な助成プログラムについては以下にまとめた。

ケベック・アーツカウンシルの助成プログラム一覧

助成の枠組み		
	助成プログラムの名称	プログラムの特徴
(1) 芸術家・文筆家への助成		
	①5年以下のキャリア若手の芸術家と文筆家への助成プログラム	<ul style="list-style-type: none">才能ある若手の芸術家や文筆家の育成を目的に、プロフェッショナルなキャリアを築くための創作や発表、研究活動を支援するプログラム助成金の種類と上限:創作/発表/研究(1万5,000カナダドル、約150万円)、研鑽(9,000カナダドル、約90万円)、トラベル・grant
	②ディベロップメント・grant:2年以上のキャリアのある芸術家への助成プログラム	<ul style="list-style-type: none">プロフェッショナルなキャリアを成熟するための創作や研究活動を支援するプログラム助成金の種類と上限:創作/研究(2万5,000カナダドル、約250万円)、コミッションワーク(1万5,000カナダドル、約150万円、ただしプロジェクトの50%を超えないこと)、プロモーション(2万カナダドル、約200万円)、研鑽(9,000カナダドル、約90万円)、トラベル・grant、スタジオ・アトリエ住居プログラム
	③中間キャリア・ディベロップメント・grant:	<ul style="list-style-type: none">プロフェッショナルなキャリアを成熟するための創作や研究活動を支援するプログラム

実績のある文筆家への助成プログラム	<ul style="list-style-type: none"> ● 中間キャリアでは2冊以上の作品あるいは5つ以上のテキストを出版した実績を持つ文筆家、または、1つ以上のソロ作品の公演実績を持つ語り手や朗読家等を対象とし、ディベロップメント・グラントでは6冊以上の作品を発表した文筆家、6つ以上のソロ作品の公演実績を持つ語り手や朗読家等を対象とする ● 助成金の種類と上限: 創作/研究(中間キャリア: 2万カナダドル、約200万円、ディベロップメント: 2万5,000カナダドル、約250万円)、口承文芸や朗読等の公演/デジタル技術を応用した文学作品の制作(中間キャリア: 2万カナダドル、約200万円、ディベロップメント: 2万5,000カナダドル、約250万円)、研鑽(9,000カナダドル、約90万円)、トラベル・グラント、スタジオ・アトリエ住居プログラム
④20年以上のキャリアのある芸術家と文筆家への助成プログラム	<ul style="list-style-type: none"> ● これまでに新しい表現を創造した実績のある芸術家や文筆家を対象に、その実績を集大成する創作活動を支援するプログラム ● 「美術」、「工芸」、「映画」、「文学」とそれ以外の分野を対象とする「キャリア・アーティスト」枠の5つの枠組みがある ● 助成金の額: 映画監督やシナリオ作家を対象とした映画部門が10万カナダドル(約1,000万円、一括支給)で、その他は全て6万カナダドル(約600万円)が1年に3万カナダドルずつ2年に渡って支給される
⑤トラベル・グラント	<ul style="list-style-type: none"> ● 海外の国や地域及びカナダ国内の州(ケベック州以外)の文化機関、芸術団体や文化施設から招待を受けた芸術家や文筆家を支援するプログラム。国際会議やシンポジウムへの参加、短期のレジデンスへの参加、展覧会での発表及びオープニングへの参加、ダンスやサーカスの公演の出演及びオーディションへの参加などを対象とする ● 上記の①に該当する芸術家または文筆家、上記の②に該当する芸術家、上記③に該当する文筆家を対象とする ● 渡航費、旅行経費(ビザ申請料や旅行保険料など)、一日あたり200カナダドル(約20,000円)を上限とする宿泊費及び食費が補助対象経費として認められる(カナダ国内への渡航の場合、宿泊費と食費の一日あたりの上限金額は125カナダドル、約12,500円)。支給額の上限は目的地までの距離により、750, 1,000, 2,000, 2,500カナダドルの4段階に定められている ● 上記の②に該当する芸術家は税関費用や作品輸送費等を2,000カナダドル(約20万円)まで、また、上記の③に該当する文筆家は作品の翻訳料を申請することが可能
⑥スタジオ・アトリエ住居プログラム	<ul style="list-style-type: none"> ● 本文中に詳述
(2) 芸術団体や文化施設を支援するプログラム	
①運営支援プログラム	<ul style="list-style-type: none"> ● 助成対象となる組織の活動には、「作品創造、制作、発信」、「アーティストの活動の支援」、「国内外での展覧会や公演等の開催」、「専門分野の拡充と発展」、「専門誌の発行と広報」、「芸術家協会や文筆家協

		<p>会などの専門家協会」等がある</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 助成金の支給には、2年間または4年間の二種類があり、限度額は組織の年間予算の75%を超えないことが定められている ● 助成の条件は、2年給付の場合は設立後2年以上、4年給付の場合は設立後5年以上の活動実績があるケベック州に本拠を置く非営利法人の組織であること。また、組織の運営体制や活動実績に関する審査基準で65% (2年給付) 71%以上 (4年給付) の点数を満たす必要がある
	②プロジェクト支援プログラム	<ul style="list-style-type: none"> ● デジタルネットワークやプラットフォームを構築するプロジェクトや、海外からアーティストや作品、公演を招へいするプロジェクトなどが対象で、美術系の分野では「ケベック州内及び海外での作品の輸送」など、舞台芸術系の分野では「ケベック州内での公演」、「ケベック州外での公演」なども対象である。さらに、「舞台芸術と領域横断的な芸術の共同制作」や「美術、工芸、建築研究、映画、デジタル・アート、文学の共同制作」支援など芸術分野を超えた共同プロジェクトや、戯曲の翻訳などの支援もある ● 助成金とその上限：渡航費や輸送費の場合の上限は3万カナダドル（約300万円）で、プロジェクト予算全体の75%を超えないこと。また、外国からアーティストを招へいして公演を行う場合は、チケット収入の25%または5,000カナダドル（約50万円）を超えないことなどが定められている
(3) 地域内の芸術の振興と普及への助成		
	①芸術家・文筆家への助成プログラム	<ul style="list-style-type: none"> ● 地域の文化芸術の振興、アイデンティティの形成、芸術家や文筆家の育成、地域住民のアクセスの向上などを目的とし、ケベック州の17の地区の各地域の個性を反映した独自の支援プログラム。例えば、モントリオールでは、移民の若手の芸術家やアボリジニ・アーティストを対象とする枠組みがある ● 芸術家や文筆家の場合、限度額が1万－1万5,000カナダドル（約100万－150万円）、芸術団体は1万5,000－2万カナダドル（約150万－200万円）である。ただし、プロジェクト予算全体の75%を超えないことなどの条件もある
	②芸術団体や文化施設への助成プログラム	<ul style="list-style-type: none"> ● 上記のプログラムと同様の目的の支援プログラム ● 助成額は、同一会計年度で限度額が2万カナダドル（約200万円）である地域が多い。ただし他の助成金も含め、その額が申請プロジェクト全体の80%を超えないことなど、詳細な条件がある。使途に関しても詳しく規定されており、移動費、謝礼、機材備品などの購入にも充てることができる
(4) メセナとのマッチング助成		
	①メセナとのマッチング助成プログラム	<ul style="list-style-type: none"> ● 文化運用メセナ (MPC) と名付けられたこのプログラムは、ケベック州の個人、民間企業や民間財団が文化芸術やその広報活動に関連する

	<p>非営利の文化機関への寄付を促すことを目的としている</p> <ul style="list-style-type: none"> ● CALQは文化機関が調達した総収入に見合う助成金を支給し、文化機関はその助成金を基金や積立金として貯える。長期に渡る収入を安定させ、財政的な自立を促進することが目標である ● マッチング助成を受ける条件は、登録後2年が経過していること、文化芸術やその広報活動で過去一年間に実績があること、活動の大部分がケベック州で行われていること、理事会のメンバーの大多数がケベック在住であることなどである ● マッチングの助成金: 年間の収入が25万カナダドル(約2,500万円)以内の規模の小さい文化機関の場合には寄付金の3倍の助成金を受けられる。ただし、その助成金の総額は1年に25万カナダドルを超えてはならない。また、年間の収入が25万－50万カナダドル(約2,500万－5,000万円)の場合は寄付金の2倍、50万－100万カナダドル(約5,000万－1億円)の場合は寄付金の1.5倍、100万カナダドル(約1億円)を超える場合は寄付金と同額の助成金を受けられる
--	---

第5部

日本のアーティスト・イン・レジデンスに関する調査

本調査研究では、海外の主要なアーティスト・イン・レジデンスの現地訪問調査と並行して、国内のアーティスト・イン・レジデンスに対するアンケート調査、及び意見交換会による意見聴取を行った。アンケートと意見交換会の実施要領、回答や意見の概要については、資料編「第2部」の105ページ以降に整理したとおりである。

ここでは、アンケートと意見交換会の条規項目の共通質問に対する回答を集約し、①現状、②成果、③課題の3つに分けて、日本のアーティスト・イン・レジデンスの状況を整理した。

1. 現状、成果、課題に関する整理・分析

(1) 現状

小規模・少人数・短期間の活動が多く、背景や目的は多種多様な国内 AIR

- 約50件の国内AIR団体の活動を見ると、大半の団体は、活動施設は小規模となっており、年間の招へい人数は10人以内、招へい期間は3ヶ月以内となっている。
- 海外の事例で複数見られるような、大型複合施設、数十人規模の招へい人数、1年間前後の招へい期間といった条件のレジデンス事業を行うAIR団体が国内には存在しない。
- 施設規模、招へいの人数、期間については傾向が似通っている国内AIR団体だが、地理的な要因や特性などの社会的背景や、運営団体の設立目的や事業内容は多種多様となっている。

地域社会への貢献やコミュニティとの交流が国内 AIR の特徴

- 海外事例と比較した場合に、国内のAIRで特徴に挙げられるのが、地域社会への貢献やコミュニティとの交流を意識している活動が多いことである。
- 特に、招へいしたアーティストが滞在期間中に行う活動で、地域住民に対するワークショップやオープンスタジオ、教育機関へのアウトリーチなどに取り組む事例が数多く見られる。
- 今回の調査で訪れた海外事例と相対的に見ると、日本では地域社会やコミュニティとの関わりを強く意識するAIRが多いと考えられる。

滞在によるアウトプット(結果)以上にプロセス(過程)を重視する姿勢

- 多くの国内AIR団体が、レジデンス事業において、アーティストが創作した作品の展覧会や公演を行うなどのアウトプットよりも、リサーチ、異文化体験、地域住民との交流といったプロセスを重視する傾向がある。
- 一方、事業評価や成果の説明には各団体が苦心しているとともに、中にはアウトプットを軽視する姿勢が「成果の共有が限定的になってしまう」として課題に感じている団体もある。

(2) 成果

アーティストと地域住民との交流による文化多様性や異文化交流の促進

- 国内のAIR団体が、地域社会への貢献や滞在でのプロセスを重視する姿勢は、アーティストと地域住民の交流によって文化多様性への異文化理解の促進につながっている。
- レジデンス事業が行われる地域にとって、交流の対象が「外国人であること」だけでなく「アーティストであること」によって、多様な価値観や異なる価値観を受け入れる寛容さを醸成している。

AIR を契機とした地域資源の発掘、再評価、シビックプライド(住民の誇り)の醸成

- AIRによって地域における文化多様性や異文化交流が促進されていると同時に、多くの事例で見られ

る傾向が、AIRを契機として地域資源の発掘や再評価が行われていることである。

- また国内事例においては、AIRが行われていることが、地域のシビックプライドの醸成につながっていると見られる例もあり、そうした成果が地域に浸透する意義は、一過性のイベントとは異なっている。

個別の AIR 団体やスタッフ間の自発的な関係の構築、連携、協働

- 国内AIR団体において、レジデンス事業に取り組んできた経験やノウハウを共有するため、複数のAIR団体が相互に情報交換や交流を行い、自発的に関係を構築している。
- 中には、事業の連携や協働を行うことで、招へいた海外アーティストが複数のAIRを巡回するプログラムを実施している事例もある。
- また、国際交流基金のインターネットによるポータルサイト「AIR-J」が情報のインフラとして機能しているが、現在のところ、AIRをテーマとしたネットワークをマネジメントするための中間支援組織は不在である。

AIR ならではのパブリック・ディプロマシー(広報文化外交)の可能性の模索

- 国内AIRのほとんどが、地方公共団体もしくは民間団体が主導する活動であり、その成果には、広報文化外交、いわゆる「パブリック・ディプロマシー」の萌芽が見られる。
- AIRにおけるパブリック・ディプロマシーは、例えば国際フェスティバルや文化産業の輸入出等とは異なり、アーティストや芸術表現を介して、社会や個人に対して異文化への敬意や親近感を深く浸透させている。
- 古来から現代に至るまで、文化はアーティストの移動があつてこそ伝播してきた。高速交通移動や情報通信技術が高度化したグローバル社会だからこそ、益々その営みの価値が高まっていると言えよう。

(3) 課題

安定的で持続可能な財源の不足、脆弱な財政基盤

- ほとんどの国内AIR団体が、安定的で持続可能な財源の不足を訴えている。地方公共団体が直接運営する場合や公立の美術館や劇場が運営する場合も、先行き不透明な事業費に不安を抱えている。
- また、NPOや実質的に個人が運営しているAIRでは、組織としての財政基盤が脆弱でもあり、各種の助成金に財源を依存するか、アーティスト自身が滞在費や制作費を負担する形態で事業を実施している。
- 多くの海外AIR団体のように、安定した事業運営を持続させるためには、キャパシティ・ビルディング(組織的な基礎能力・体力の向上)や、個別の課題に応じながら持続可能性を担保するための支援が必要である。

専門知識や経験を持つ人材の不足、対応不十分な人員体制

- 専門知識や経験を持つ人材の不足も課題である。特に通訳の人材は、語学能力に加えて芸術に関する専門知識や、アーティストと地域住民の対話を仲介する資質を備えた人材を確保することが困難となっている。
- また、海外からのアーティストの創作面や生活面での様々なサポートや、各種活動でのボランティアの調整などを担うコーディネート業務にも、レジデンス事業特有の経験やノウハウの蓄積が求められる。
- 国内AIR団体の中には、特に地方において専門知識や経験のある人材が不足している。また、事業

を担当する人員体制が不十分となっている団体も見受けられる。

AIR に要する施設や設備面の不足、改修や維持にかかる経費負担

- 国内AIR団体の多くが小規模な施設で活動しているが、レジデンス事業に要するスタジオやアトリエ、宿泊施設、展示・公演施設などを総合的に所有・運営する団体は極めて特殊となっている。
- ほとんどの場合は、団体の所有(もしくは運営)施設では賄えない施設を、一時的に賃貸してアーティストに提供しているため、事業にはそうした経費負担が伴う。
- また、地域の遊休施設を活用したレジデンス事業も多いが、その場合には、施設や設備のリノベーションやメンテナンスにかかる経費負担が中長期のサイクルで重くのしかかる場合もある。

国内 AIR と海外 AIR との対等で双方向の「往来」の仕組みが未整備

- 国内AIR団体のほとんどの活動が、海外からのアーティストの滞在を「受け入れる」活動となっており、現状では日本のAIRのスタンダードのように見受けられている。
- しかし海外事例を調査すると、レジデンス事業は海外アーティストの「受け入れ」と国内アーティストの「派遣」の両方により「往来する」仕組みがスタンダードだと言える。
- この「往来」の仕組みの未整備によって、国内AIR団体が海外AIR団体から日本人アーティストの招へいを打診されても、その機会を有効に繋げられていないことが考えられる。

既存の制度(各種助成制度、指定管理者制度など)と AIR との不調和

- 各種の助成制度を活用している国内AIR団体が多い中で、複数年度の継続支援の可能性が開かれている文化庁の助成制度は、貴重な支援の仕組みとして高く評価されている。
- しかし文化庁の継続支援も5年間が最長であり、支援終了後は事業の存続が危ぶまれている団体が多い。また、海外の助成制度と始期と終期のサイクルがずれているために、海外AIRとの連携が困難となっている。
- 助成制度以外にも、指定管理者制度の運用(限られた指定管理期間での事業計画)や、旅館業法・旅館業(滞在に関する許認可や滞在場所の斡旋など)で、レジデンス事業との不調和が懸念されている。

活動のアーカイブ(記録や資料の保存・活用)のための時間、人材、経費の不足

- 複数の国内AIR団体が課題として挙げていることが、レジデンス事業での活動の記録や、活動に伴う資料や作品のアーカイブのための時間、人材、経費の不足である。
- レジデンス事業によっては、展覧会や公演が活動の中に位置づけられるものもあるが、そうしたアウトプットで作られる図録やパンフレットとは別に、レジデンスのプロセスを含めた成果を蓄積する必要がある。
- また、レジデンス事業に参加したアーティストの、事業後の活動の動向や評価の変化なども、国内AIR団体が共有したい情報の一つであり、そうした情報のアーカイブも求められている。

AIR に対する行政や一般市民の認知、理解、関心の低さ、評価手法の未確立

- 国内AIR団体の共通課題には、「アーティスト・イン・レジデンス」に対する行政や一般市民の認知不足、理解不足、関心の低さが挙げられる。
- 行政や一般市民にとって「アーティスト・イン・レジデンス」が言葉として定着していないだけでなく、当事者や関係者以外から活動が見えにくいことが、要因の一つと考えられる。

- また、活動の当事者や関係者以外に、事業成果の説明に必要な評価手法も未確立である。特に、アウトプットよりもプロセスを重視する傾向のある国内AIR団体では、評価が悩みの種となっている。

平成24年度文化庁委託事業
諸外国のアーティスト・イン・レジデンスについての調査研究事業
報告書

平成25年3月29日

委託元 文化庁長官官房国際課
〒100-8959 東京都千代田区霞が関 3-2-2
TEL 03-5253-4111(代)
FAX 03-6734-3811

発行 株式会社ニッセイ基礎研究所
〒102-0073 東京都千代田区九段北 4-1-7
TEL 03-3512-1883
FAX 03-5211-1084



利用の際は必ず下記サイトを確認下さい。
www.bunka.go.jp/jiyuriyo